公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第621集

茅畑遺跡
鴫上Ⅰ遺跡

（主）前橋安中富岡線社会資本総合整備事業（広域・新潟長野）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2017

群馬県高崎土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

茅畑遺跡
鴫上Ⅰ遺跡

（主）前橋安中富岡線社会資本総合整備事業（広域・新潟長野）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇一七

群馬県高崎土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

茅畑遺跡
鴫上Ⅰ遺跡

（主）前橋安中富岡線社会資本総合整備事業（広域・新潟長野）に伴う
埋　蔵　文　化　財　発　掘　調　査　報　告　書

2017

群馬県高崎土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

調査区全景（西から）　丘陵地の向こうに市街地が広がる。奥が茅畑遺跡、手前が鳴上Ⅰ遺跡。

鳴上Ⅰ遺跡Ｂ区全景（東から）　台地の西側に生産域と推定される谷地が広がる。

口絵 2

鳴上Ⅰ遺跡Ａ区３面３号住居全景(東から)　四隅にベッド状遺構が見られる。

鳴上Ⅰ遺跡Ｂ区３面521・522号住居出土遺物　左は文様が施された紡輪。右は直径8.6cm、厚さ3cmの紡輪

序

主要地方道前橋安中富岡線社会資本総合整備事業は、群馬県の中部と西部を滞りなく連結する西毛広域幹線道路整備事業の一端を担う県の重要事業です。交通渋滞緩和はもとより物流の効率化、生活圏の拡大など西毛地域の産業、経済、観光の発展を担う道路として建設が推進され、県民の期待を集めています。

この幹線道路の通過地域は、北に榛名山をいただき、南に平地が開ける美しい丘陵景観に恵まれています。原始・古代からの遺跡が多く分布し、包蔵地として周知されてきました。このような埋蔵文化財の保護と本地域の開発の両立を図り、平成26年度から発掘調査が実施されてきました。

この度報告する茅畑遺跡・鴫上Ⅰ遺跡も、榛名山の火山堆積物を基盤とする起伏に富んだ丘陵の尾根上に立地しています。今回の発掘調査では、弥生時代の集落、古墳時代後期から平安時代の集落、古代以降の建物跡がみつかり、当時の人々の土地利用と生活の様相を明らかにすることができました。

発掘調査から報告書刊行にいたるまで、群馬県県土整備部、群馬県高崎土木事務所、群馬県教育委員会、高崎市教育員会をはじめとする関係機関及び地元関係者の皆様には多大なご尽力を賜りました。本報告書を上梓するにあたり衷心より感謝申し上げますとともに、本報告書が地域の歴史を学ぶ資料として多くの皆様に活用されることを願い、序といたします。

平成29年１月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理　事　長　　中 野 三 智 男

例　　言

１．本書は、(主)前橋安中富岡線社会資本総合整備事業(広域・新潟長野)に伴う茅畑遺跡・鴫上Ⅰ遺跡の発掘調査報告書である。

２．茅畑遺跡・鴫上Ⅰ遺跡の所在地は群馬県高崎市箕郷町白川で、地番は下表のとおりである。

茅畑遺跡・鴫上Ⅰ遺跡　発掘対象地域地番一覧

発掘調査区	大　字	地　番
茅畑遺跡	箕郷町白川	1183－１・２、1184－１・２、1185－１、1220－１・２、1221－１、1222、1223、1224、1225、1226、1227、1228－１・２、1230、1231、1232、1233－１、1316、1321、1322
鴫上Ⅰ遺跡Ａ区	箕郷町白川	558、559－１・２、560－１・２、562
鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区	箕郷町白川	550、551、552、553－１・２・３・４・５・６

３．事業主体　群馬県高崎土木事務所

４．調査主体　公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

５．整理主体　公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

６．発掘調査の体制と期間は次のとおりである。

平成26年度　平成26年度(主)前橋安中富岡線社会資本総合整備事業(広域連携)に伴う埋蔵文化財の発掘調査委託

調査担当　松村和男(主任調査研究員)　関　俊明(主任調査研究員)

小林茂夫(主任調査研究員)　相京建史(専門調査役)

遺跡掘削請負工事　株式会社シン技術コンサル北関東支店

地上測量　アコン測量設計株式会社

航空測量・空中写真撮影　株式会社シン技術コンサル

履行期間　平成26年12月１日～平成27年３月31日

調査期間　平成27年１月１日～平成27年３月31日

調査面積　6,599㎡

平成27年度　平成26年度(主)前橋安中富岡線社会資本総合整備事業(広域連携)に伴う埋蔵文化財の発掘調査委託

調査担当　谷藤保彦(上席専門員・調査統括)　相京建史(専門調査役)

藤井義徳(主任調査研究員)　　小野　隆(主任調査研究員)

遺跡掘削請負工事　株式会社シン技術コンサル北関東支店

地上測量　株式会社シン技術コンサル

履行期間　平成27年３月31日～平成28年３月31日

調査期間　平成27年４月１日～平成27年４月30日

調査面積　4,693㎡

調査担当　大西雅広(上席専門員・調査統括)　麻生敏隆(上席専門員)

遺跡掘削請負工事　技研コンサル株式会社

地上測量　株式会社シン技術コンサル

履行期間　平成27年３月31日～平成28年３月31日

調査期間　平成28年１月１日～平成28年１月31日

調査面積　2,357㎡

７．整理事業の体制と期間は次のとおりである。

平成27年度　平成26年度(主)前橋安中富岡線社会資本総合整備事業(広域連携)に伴う埋蔵文化財の資料整理委託

整理担当　都木直人(主任調査研究員)、津島秀章(専門員)

履行期間　平成27年３月31日～平成28年３月31日

整理期間　平成27年４月１日～平成28年３月31日

平成28年度　平成28年度(主)前橋安中富岡線社会資本総合整備事業(広域・新潟長野)に伴う埋蔵文化財の資料整理委託

整理担当　都木直人(主任調査研究員)

履行期間　平成28年10月１日～平成29年１月31日

整理期間　平成28年10月１日～平成28年11月30日

８．本書作成関係者

編集　都木直人(主任調査研究員)、津島秀章(資料２課長(総括))

本文執筆　第１～８章　都木直人(主任調査研究員)

第７章２　パリノ・サーヴェイ株式会社

デジタル編集　齊田智彦(主任調査研究員)

遺構写真　発掘調査担当者

遺物写真　石坂　茂(専門調査役)、藤巻幸男(専門調査役)、大西雅広(上席専門員・資料統括)

関　邦一(補佐(総括))、津島秀章(資料２課長(総括))、都木直人(主任調査研究員)

遺物観察・観察表執筆

縄文・弥生土器	石坂　茂(専門調査役)
土師器・須恵器・土製品	神谷佳明(専門調査役)
陶磁器	藤巻幸男(専門調査役)、大西雅弘(上席専門員・資料統括)
石器・石製品	津島秀章(資料２課長(総括))
金属製品・木製品	関　邦一(補佐(総括))
保存処理	関　邦一(補佐(総括))

９．発掘調査及び整理事業での分析等委託

放射性炭素年代測定　　パリノ・サーヴェイ株式会社(第７章２)

炭化材樹種同定　　パリノ・サーヴェイ株式会社(第７章２)

10. 石器・石製品の石材同定については飯島静男氏(群馬地質研究会会員)にお願いした。

11. 発掘調査の記録資料と出土遺物は、群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。

12. 発掘調査および報告書の作成にあたっては、次の方々に有益な助言と指導を賜った。記して感謝の意を表する次第である。(五十音順、敬称略)

群馬県教育委員会文化財保護課、高崎市教育委員会文化財保護課

凡　　例

1．本書で使用した遺構平面図の座標は、全て世界測地系(日本測地系2000平面直角座標Ⅸ系)を用いている。挿図中に使用した方位は、座標北を表している。

2．遺構平面図や遺構断面図に示した数値は標高であり、単位はメートルである。

3．遺構平面図、遺物実測図の縮尺は各図にそれぞれ示した。遺物写真の縮率は原則として遺物実測図と同率とした。

4．遺物番号は出土遺構ごとの通し番号とし、器種・分類順に記載した。番号は遺構図、遺物実測図、遺物観察表、遺物写真図版とも一致している。

5．本書の図版に使用したスクリーントーン及びマークは、次のことを示す。

遺構平面図　灰　炭化物　焼土　粘土　硬化面

遺構断面図　撹乱

遺物実測図　赤彩　釉・灰釉　すす　内黒　粘土・砂目粘土

付着痕　重焼痕　土器断面接合痕　◀

石器実測図　摩耗痕の範囲　摩耗痕の範囲(断面図)　潰れ部　●　鉄銹化部

6．遺構平面図中の遺物記号は、次のことを示す。

●　土器・陶磁器　　○　土製品　　▲　石器・石製品　　■　鉄・金属製品

□　木製品・炭化材

7．遺構の主軸方位・走向は、長軸方向で北から東西90°以内を主軸とした。表記は北を基準とし、東に傾いた場合N－○°－Eとした。遺構の面積は、下端を計測した。遺構・遺物の計測値で、全体を計測できないものについては、現存の値を記載し(　)で表し、途中で途切れている溝等の全長を推測した場合は〔　〕で表した。

8．住居の主軸方位については、カマドのある住居については、カマドの設置された方向を主軸として捉えた。カマドのない住居については､長軸方向を主軸とした。住居面積の計測はプラニメーターで３回行いその平均値を採用した。

9．土層断面の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1988年版』に基づいている。

10．遺物観察表の記載方法は以下のとおりである。

・計測値の（　）は現存値を、［　］は推定値を示す。

・計測値は、口：口径、底：底径、台：高台径、高：器高、長：長さ、厚：厚さ、摘：摘み径、孔：孔径、脚：脚底部径(以上単位はcm)、重：重量(単位はｇ)、最：最大径と略記した。

・胎土観察における砂粒の表現は、0.2mm以下を細砂粒、0.2～２mmを粗砂粒、２mm以上を小礫とした。
色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖　1988年版』に基づいている。

11．整理作業によって、新たに遺構名と遺構番号が生じたため、第１表に記した。ただし、掘立柱建物については、整

理作業の便宜上、番号を振り替えずに、認定した掘立柱建物以外は欠番とした。

12. 降下火山灰の名称と年代は以下の通りである。

As-A：浅間山Ａテフラ(天明三(1783)年)、As-B：浅間山Ｂテフラ(天仁元(1108)年)、As-Kk：浅間粕川テフラ(12世紀前半か)、Hr-FP：榛名山二ツ岳軽石(６世紀中葉)、Hr-FA：榛名山二ツ岳火山灰(５世紀末～６世紀初頭)、As-C：浅間山Ｃテフラ(３世紀末～４世紀初頭)

13. 本書で掲載した地図は、下記のものを使用した。

国土地理院　地勢図１：200,000「宇都宮」「長野」(平成23年６月１日発行)

国土地理院　地形図１：25,000「下室田」(平成15年２月１日発行)

高崎市　都市計画基本図91、１：2,500　(平成24年10月測図)

目　　次

口絵
序
例言
凡例
目次
挿図目次
表目次
写真図版目次

第１章　発掘調査と遺跡の概要
　１　調査に至る経過 ･････････････････････ 1
　２　調査の経過 ･････････････････････････ 2
　３　整理業務の経過と方法 ･･････････････････ 5
　４　調査の方法 ･････････････････････････ 5
　５　基本土層 ･･････････････････････････ 7

第２章　遺跡の立地と歴史的環境
　１　遺跡の位置と地形 ･･････････････････ 12
　２　周辺遺跡 ･･････････････････････････ 14

第３章　中・近世以降（１面）の遺構と遺物
　１　概要 ･･････････････････････････････ 21
　２　茅畑遺跡の遺構と遺物 ･･････････････････ 21
　３　鴫上Ⅰ遺跡Ａ区の遺構と遺物 ･････････････ 31
　４　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区の遺構と遺物 ･････････････ 43

第４章　古墳時代～平安時代（２面）の遺構と遺物
　１　概要 ･･････････････････････････････ 56
　２　茅畑遺跡の遺構と遺物 ･･････････････････ 56
　３　鴫上Ⅰ遺跡Ａ区の遺構と遺物 ･････････････ 132
　４　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区の遺構と遺物 ･････････････ 135

第５章　縄文時代～弥生時代（３面）の遺構と遺物
　１　概要 ･･････････････････････････････ 182
　２　茅畑遺跡の遺構と遺物 ･･････････････････ 182
　３　鴫上Ⅰ遺跡Ａ区の遺構と遺物 ･････････････ 183
　４　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区の遺構と遺物 ･････････････ 201

第６章　旧石器時代の調査
　１　概要 ･･････････････････････････････ 247
　２　旧石器時代調査坑について ･･････････････ 248

第７章　自然科学分析
　１　分析の目的 ･････････････････････････ 253
　２　炭化物分析 ･････････････････････････ 254
　（１）放射性炭素年代測定 ･･････････････････ 254
　（２）炭化材樹種同定 ･･････････････････････ 257

第８章　総括
　１　中世以降（１面）について ･･････････････ 262
　２　古墳時代～平安時代（２面）について ･････ 265
　３　縄文時代～弥生時代（３面）の住居について ･ 268
　４　集落の変遷について ･････････････････ 277

土坑計測表 ･･････････････････････････････ 280
ピット計測表 ･････････････････････････････ 281
遺物観察表 ･･････････････････････････････ 300

写真図版
発掘調査報告書抄録

挿図目次

第１図　茅畑・鴫上Ⅰ遺跡と群馬県の地勢(国土地理院発行、20万分の１地勢図「宇都宮」「長野」平成23年６月１日発行)・・・・・・・・・・ 1
第２図　茅畑・鴫上Ⅰ遺跡の位置(国土地理院発行、２万５千分の1地形図「下室田」平成15年２月１日発行)・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
第３図　茅畑・鴫上Ⅰ遺跡の調査区(高崎市都市計画基本図91、１：2,500 平成24年10月測図使用)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
第４図　各区の土層堆積状況(高崎市都市計画基本図91、１：2,500　平成24年10月測図使用)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
第５図　周辺地形分類図(群馬県農業局農業基盤整備課2005『土地分類基本調査』 榛名山　群馬県　付図を改変使用)・・・・・・・・・・・ 13
第６図　周辺遺跡分布図(国土地理院発行、２万５千分の１地形図「下室田」平成15年２月１日発行)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
第７図　茅畑・鴫上Ⅰ遺跡全体図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19・20
第８図　茅畑遺跡１面　全体図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
第９図　茅畑遺跡１面　１・２号溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
第10図　茅畑遺跡１面　３・４号溝、３号溝出土遺物・・・・・・・・・・・ 24
第11図　茅畑遺跡１面　５～８号溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
第12図　茅畑遺跡１面　９・10号溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
第13図　茅畑遺跡１面　２号道路・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
第14図　茅畑遺跡１面　１～３号畑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
第15図　茅畑遺跡１面　遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30
第16図　鴫上Ⅰ遺跡Ａ区１面　全体図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31
第17図　鴫上Ⅰ遺跡Ａ区１面　１号掘立柱建物・・・・・・・・・・・・・・ 32
第18図　鴫上Ⅰ遺跡Ａ区１面　１号溝出土遺物・・・・・・・・・・・・・・ 33
第19図　鴫上Ⅰ遺跡Ａ区１面　１号溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34
第20図　鴫上Ⅰ遺跡Ａ区１面　２号溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35
第21図　鴫上Ⅰ遺跡Ａ区１面　１～７号土坑・・・・・・・・・・・・・・・・ 37
第22図　鴫上Ⅰ遺跡Ａ区１面　ピット全体図(１)・・・・・・・・・・・・・ 39
第23図　鴫上Ⅰ遺跡Ａ区１面　ピット全体図(２)、ピット平・断面(１)・ 40
第24図　鴫上Ⅰ遺跡Ａ区１面　ピット平・断面(２)・・・・・・・・・・・・ 41
第25図　鴫上Ⅰ遺跡Ａ区１面　遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・・・ 43
第26図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区１面　全体図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 43
第27図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区１面　501号掘立柱建物・・・・・・・・・・・・・・ 44
第28図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区１面　501号柱穴列・・・・・・・・・・・・・・・・ 46
第29図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区１面　501・502号柱穴列・・・・・・・・・・・・・ 47
第30図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区１面　501・502号柱穴列ピット平・断面・・・ 48
第31図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区１面　502号柱穴列ピット平・断面・・・・・・・ 49
第32図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区１面　501～505号土坑・・・・・・・・・・・・・・ 51
第33図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区１面　ピット全体図(１)・・・・・・・・・・・・・ 52
第34図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区１面　ピット全体図(２)・・・・・・・・・・・・・ 53
第35図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区１面　ピット平・断面(１)・・・・・・・・・・・・ 54
第36図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区１面　ピット平・断面(２)、ピット出土遺物・ 55
第37図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区１面　遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・・・ 55
第38図　茅畑遺跡２面　全体図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 56
第39図　茅畑遺跡２面　１号住居・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 58
第40図　茅畑遺跡２面　１号住居掘り方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 59
第41図　茅畑遺跡２面　１号住居カマド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 60
第42図　茅畑遺跡２面　１号住居出土遺物(１)・・・・・・・・・・・・・・ 62
第43図　茅畑遺跡２面　１号住居出土遺物(２)・・・・・・・・・・・・・・ 63
第44図　茅畑遺跡２面　１号住居出土遺物(３)・・・・・・・・・・・・・・ 64
第45図　茅畑遺跡２面　４号住居・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 65
第46図　茅畑遺跡２面　４号住居カマド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 66
第47図　茅畑遺跡２面　４号住居出土遺物(１)・・・・・・・・・・・・・・ 67
第48図　茅畑遺跡２面　４号住居出土遺物(２)・・・・・・・・・・・・・・ 68
第49図　茅畑遺跡２面　５号住居・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 70
第50図　茅畑遺跡２面　５号住居カマド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 71
第51図　茅畑遺跡２面　５号住居出土遺物(１)・・・・・・・・・・・・・・ 72
第52図　茅畑遺跡２面　５号住居出土遺物(２)・・・・・・・・・・・・・・ 73
第53図　茅畑遺跡２面　５号住居出土遺物(３)・・・・・・・・・・・・・・ 74
第54図　茅畑遺跡２面　６号住居・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 75
第55図　茅畑遺跡２面　６号住居断面・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 76
第56図　茅畑遺跡２面　６号住居カマド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 77
第57図　茅畑遺跡２面　６号住居出土遺物(１)・・・・・・・・・・・・・・ 78
第58図　茅畑遺跡２面　６号住居出土遺物(２)・・・・・・・・・・・・・・ 79
第59図　茅畑遺跡２面　６号住居出土遺物(３)・・・・・・・・・・・・・・ 80
第60図　茅畑遺跡２面　６号住居出土遺物(４)・・・・・・・・・・・・・・ 81
第61図　茅畑遺跡２面　１号古墳・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 82
第62図　茅畑遺跡２面　１号古墳石室(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・ 84
第63図　茅畑遺跡２面　１号古墳石室(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・ 85
第64図　茅畑遺跡２面　１号古墳出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・ 86
第65図　茅畑遺跡２面　４号掘立柱建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 88
第66図　茅畑遺跡２面　６号掘立柱建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 89
第67図　茅畑遺跡２面　11号掘立柱建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 90
第68図　茅畑遺跡２面　15号掘立柱建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 91
第69図　茅畑遺跡２面　17号掘立柱建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 92
第70図　茅畑遺跡２面　18号掘立柱建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 93
第71図　茅畑遺跡２面　21号掘立柱建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 94
第72図　茅畑遺跡２面　25号掘立柱建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 95
第73図　茅畑遺跡２面　27号掘立柱建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 96
第74図　茅畑遺跡２面　28号掘立柱建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 97
第75図　茅畑遺跡２面　29号掘立柱建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 98
第76図　茅畑遺跡２面　30号掘立柱建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 99
第77図　茅畑遺跡２面　34号掘立柱建物、出土遺物・・・・・・・・・・・ 100
第78図　茅畑遺跡２面　43号掘立柱建物(１)・・・・・・・・・・・・・・・ 101
第79図　茅畑遺跡２面　43号掘立柱建物(２)・・・・・・・・・・・・・・・ 102
第80図　茅畑遺跡２面　44号掘立柱建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 103
第81図　茅畑遺跡２面　47号掘立柱建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 104
第82図　茅畑遺跡２面　48号掘立柱建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 105
第83図　茅畑遺跡２面　49号掘立柱建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 107
第84図　茅畑遺跡２面　１号道路・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 108
第85図　茅畑遺跡２面　１号道路断面、出土遺物・・・・・・・・・・・・ 109
第86図　茅畑遺跡２面　１～14号土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 115
第87図　茅畑遺跡２面　15～21・27～34号土坑・・・・・・・・・・・・・ 116
第88図　茅畑遺跡２面　土坑・ピット出土遺物・・・・・・・・・・・・・・ 117
第89図　茅畑遺跡２面　ピット全体図(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・ 121
第90図　茅畑遺跡２面　ピット全体図(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・ 122
第91図　茅畑遺跡２面　ピット全体図(３)・・・・・・・・・・・・・・・・・ 123
第92図　茅畑遺跡２面　ピット全体図(４)・・・・・・・・・・・・・・・・・ 124
第93図　茅畑遺跡２面　ピット全体図(５)・・・・・・・・・・・・・・・・・ 125
第94図　茅畑遺跡２面　ピット全体図(６)・・・・・・・・・・・・・・・・・ 126
第95図　茅畑遺跡２面　ピット全体図(７)・・・・・・・・・・・・・・・・・ 127
第96図　茅畑遺跡２面　ピット平・断面(１)・・・・・・・・・・・・・・・・ 128
第97図　茅畑遺跡２面　ピット平・断面(２)・・・・・・・・・・・・・・・・ 129
第98図　茅畑遺跡２面　ピット平・断面(３)・・・・・・・・・・・・・・・・ 130
第99図　茅畑遺跡２面　遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 131
第100図　鴫上Ⅰ遺跡Ａ区２面　全体図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 132
第101図　鴫上Ⅰ遺跡Ａ区２面　１号住居・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 133
第102図　鴫上Ⅰ遺跡Ａ区２面　遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・・・ 134
第103図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　全体図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 135
第104図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　501号住居・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 136
第105図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　502号住居・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 137
第106図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　502号住居出土遺物・・・・・・・・・・・ 138
第107図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　503号住居・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 139
第108図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　503号住居カマド・・・・・・・・・・・・・ 140
第109図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　503号住居出土遺物(１)・・・・・・・・ 141
第110図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　503号住居出土遺物(２)・・・・・・・・ 142
第111図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　504号住居・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 143
第112図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　506号住居・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 144
第113図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　506号住居カマド・・・・・・・・・・・・・ 145
第114図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　506号住居出土遺物・・・・・・・・・・・ 146
第115図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　507号住居・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 147
第116図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　507号住居断面・・・・・・・・・・・・・・ 148
第117図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　507号住居カマド、出土遺物(１)・・・ 149
第118図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　507号住居出土遺物(２)・・・・・・・・ 150

第119図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　509号住居 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 150
第120図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　509号住居カマド・・・・・・・・・・・・・・ 151
第121図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　510号住居 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 152
第122図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　510号住居カマド、出土遺物（１）・・・ 153
第123図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　510号住居出土遺物（２） ・・・・・・・・・ 154
第124図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　511号住居 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 155
第125図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　512号住居 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 156
第126図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　512号住居出土遺物（１） ・・・・・・・・・ 157
第127図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　512号住居出土遺物（２） ・・・・・・・・・ 158
第128図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　513号住居 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 159
第129図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　520号住居 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 160
第130図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　520号住居断面、出土遺物 ・・・・・・・・ 161
第131図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　523号住居 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 162
第132図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　525号住居 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 163
第133図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　525号住居出土遺物 ・・・・・・・・・・・・ 164
第134図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　526号住居 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 165
第135図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　526号住居カマド・・・・・・・・・・・・・・ 166
第136図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　526号住居掘り方、出土遺物・・・・・・ 167
第137図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　502号掘立柱建物・・・・・・・・・・・・・・ 168
第138図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　503号掘立柱建物・・・・・・・・・・・・・・ 169
第139図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　503号掘立柱建物出土遺物 ・・・・・・・・ 170
第140図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　501号粘土採掘坑・・・・・・・・・・・・・・ 171
第141図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　501号粘土採掘坑出土遺物 ・・・・・・・・ 172
第142図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　506 ～ 509号土坑、土坑出土遺物・・・ 174
第143図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　ピット全体図（１）・・・・・・・・・・・・・ 176
第144図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　ピット全体図（２）・・・・・・・・・・・・・ 177
第145図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　ピット平・断面（１）・・・・・・・・・・・ 178
第146図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　ピット平・断面（２）・・・・・・・・・・・ 179
第147図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　ピット出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・ 180
第148図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　501号焼土 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 180
第149図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　遺構外出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・ 181
第150図　茅畑遺跡３面　遺構外出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・ 182
第151図　茅畑遺跡３面　遺構外出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・ 183
第152図　鴨上Ⅰ遺跡Ａ区３面　全体図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 183
第153図　鴨上Ⅰ遺跡Ａ区３面　２号住居・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 185
第154図　鴨上Ⅰ遺跡Ａ区３面　２号住居、出土遺物（１）・・・・・・・・ 186
第155図　鴨上Ⅰ遺跡Ａ区３面　２号住居出土遺物（２） ・・・・・・・・・ 187
第156図　鴨上Ⅰ遺跡Ａ区３面　３号住居・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 189
第157図　鴨上Ⅰ遺跡Ａ区３面　３号住居掘り方 ・・・・・・・・・・・・・・ 190
第158図　鴨上Ⅰ遺跡Ａ区３面　３号住居断面（１）・・・・・・・・・・・・・ 191
第159図　鴨上Ⅰ遺跡Ａ区３面　３号住居断面（２）・・・・・・・・・・・・・ 192
第160図　鴨上Ⅰ遺跡Ａ区３面　３号住居炉、遺物分布図・・・・・・・・ 193
第161図　鴨上Ⅰ遺跡Ａ区３面　３号住居出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・ 194
第162図　鴨上Ⅰ遺跡Ａ区３面　４号住居・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 196
第163図　鴨上Ⅰ遺跡Ａ区３面　４号住居掘り方 ・・・・・・・・・・・・・・ 197
第164図　鴨上Ⅰ遺跡Ａ区３面　４号住居断面・・・・・・・・・・・・・・・・ 198
第165図　鴨上Ⅰ遺跡Ａ区３面　４号住居炉 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 199
第166図　鴨上Ⅰ遺跡Ａ区３面　４号住居出土遺物・・・・・・・・・・・・・ 200
第167図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面　全体図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 201
第168図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面　505号住居 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 203
第169図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面　505号住居掘り方、断面（１）・・・・・・ 204
第170図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面　505号住居断面（２）、炉（１）・・・・・・ 205
第171図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面　505号住居断面炉（２）、出土遺物・・・ 206
第172図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面　508号住居 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 208
第173図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面　508号住居掘り方・・・・・・・・・・・・・・ 209
第174図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面　508号住居断面 ・・・・・・・・・・・・・・・ 210
第175図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面　508号住居炉・・・・・・・・・・・・・・・・・ 211
第176図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面　508号住居出土遺物 ・・・・・・・・・・・・ 212
第177図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面　514号住居 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 213
第178図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面　514号住居掘り方・・・・・・・・・・・・・・ 214
第179図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面　514号住居出土遺物 ・・・・・・・・・・・・ 215
第180図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面　515号住居 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 216
第181図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面　515号住居炉、掘り方 ・・・・・・・・・・ 217
第182図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面　515号住居出土遺物 ・・・・・・・・・・・・ 218
第183図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面　516号住居 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 219
第184図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面　516号住居掘り方・・・・・・・・・・・・・・ 220
第185図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面　516号住居出土遺物 ・・・・・・・・・・・・ 221
第186図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面　517号住居 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 223
第187図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面　517号住居炉、掘り方・・・・・・・・・・ 224
第188図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面　517号住居出土遺物 ・・・・・・・・・・・・ 225
第189図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面　518号住居 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 227
第190図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面　518号住居断面（１） ・・・・・・・・・・・・ 228
第191図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面　518号住居掘り方・・・・・・・・・・・・・・ 229
第192図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面　518号住居断面（２） ・・・・・・・・・・・・ 230
第193図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面　518号住居炉・・・・・・・・・・・・・・・・・ 231
第194図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面　518号住居出土遺物（１） ・・・・・・・・・ 232
第195図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面　518号住居出土遺物（２） ・・・・・・・・・ 233
第196図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面　519号住居 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 234
第197図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面　521号住居 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 235
第198図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面　521号住居炉、出土遺物（１）・・・・・・ 236
第199図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面　521号住居出土遺物（２） ・・・・・・・・・ 237
第200図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面　522号住居 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 239
第201図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面　522号住居炉、断面 ・・・・・・・・・・・・ 240
第202図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面　522号住居出土遺物（１） ・・・・・・・・・ 241
第203図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面　522号住居出土遺物（２） ・・・・・・・・・ 242
第204図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面　524号住居、出土遺物（１）・・・・・・・ 243
第205図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面　524号住居出土遺物（２） ・・・・・・・・・ 244
第206図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面　527号住居、出土遺物（１）・・・・・・・ 245
第207図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面　527号住居出土遺物（２） ・・・・・・・・・ 246
第208図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面　遺構外出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・ 246
第209図　茅畑遺跡　旧石器時代調査坑位置図・・・・・・・・・・・・・・・・ 247
第210図　鴨上Ⅰ遺跡　旧石器時代調査坑位置図 ・・・・・・・・・・・・・・ 248
第211図　旧石器時代調査坑断面（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 249
第212図　旧石器時代調査坑断面（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 250
第213図　旧石器時代調査坑断面（３）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 251
第214図　旧石器時代調査坑断面（４）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 252
第215図　暦年較正結果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 256
第216図　茅畑遺跡１面　溝 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 262
第217図　鴨上Ⅰ遺跡Ａ区１面　溝 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 263
第218図　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区１面　南西部の遺構・・・・・・・・・・・・・・・・ 264
第219図　茅畑遺跡２面　西部の遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 266
第220図　鴨上Ⅰ遺跡３面　弥生焼失住居分布図 ・・・・・・・・・・・・・・ 268
第221図　鴨上Ⅰ遺跡３面　ベッド状遺構を備えた弥生住居分布図 ・・ 271
第222図　鴨上Ⅰ遺跡におけるベッド状遺構の類型 ・・・・・・・・・・・・・ 272
第223図　茅畑・鴨上Ⅰ遺跡　古墳～古代住居分布図・・・・・・・・・・・ 278
第224図　鴨上Ⅰ遺跡　弥生住居分布図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 279

表 目 次

第１表　茅畑遺跡遺構番号変更一覧表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
第２表　周辺遺跡一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16
第３表　鴫上Ⅰ遺跡Ａ区１面１号掘立柱建物　計測表 ・・・・・・・・・ 32
第４表　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区１面501号掘立柱建物　計測表 ・・・・・・・・ 44
第５表　茅畑遺跡２面４号掘立柱建物　計測表 ・・・・・・・・・・・・・・ 88
第６表　茅畑遺跡２面６号掘立柱建物　計測表 ・・・・・・・・・・・・・・ 89
第７表　茅畑遺跡２面11号掘立柱建物　計測表 ・・・・・・・・・・・・・・ 90
第８表　茅畑遺跡２面15号掘立柱建物　計測表 ・・・・・・・・・・・・・・ 91
第９表　茅畑遺跡２面17号掘立柱建物　計測表 ・・・・・・・・・・・・・・ 92
第10表　茅畑遺跡２面18号掘立柱建物　計測表 ・・・・・・・・・・・・・・ 92
第11表　茅畑遺跡２面21号掘立柱建物　計測表 ・・・・・・・・・・・・・・ 94
第12表　茅畑遺跡２面25号掘立柱建物　計測表 ・・・・・・・・・・・・・・ 95
第13表　茅畑遺跡２面27号掘立柱建物　計測表 ・・・・・・・・・・・・・・ 97
第14表　茅畑遺跡２面28号掘立柱建物　計測表 ・・・・・・・・・・・・・・ 98
第15表　茅畑遺跡２面29号掘立柱建物　計測表 ・・・・・・・・・・・・・・ 98
第16表　茅畑遺跡２面30号掘立柱建物　計測表 ・・・・・・・・・・・・・・102
第17表　茅畑遺跡２面34号掘立柱建物　計測表 ・・・・・・・・・・・・・・102
第18表　茅畑遺跡２面43号掘立柱建物　計測表 ・・・・・・・・・・・・・・102
第19表　茅畑遺跡２面44号掘立柱建物　計測表 ・・・・・・・・・・・・・・103
第20表　茅畑遺跡２面47号掘立柱建物　計測表 ・・・・・・・・・・・・・・104
第21表　茅畑遺跡２面48号掘立柱建物　計測表 ・・・・・・・・・・・・・・106
第22表　茅畑遺跡２面49号掘立柱建物　計測表 ・・・・・・・・・・・・・・106
第23表　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面502号掘立柱建物　計測表 ・・・・・・・・168
第24表　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面503号掘立柱建物　計測表 ・・・・・・・・170
第25表　放射性炭素年代測定および暦年較正結果 ・・・・・・・・・・・・255
第26表　樹種同定結果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・257
第27表　茅畑遺跡　溝の走行方位と勾配・・・・・・・・・・・・・・・・・263
第28表　鴫上Ⅰ遺跡Ａ区　溝の走行方位と勾配 ・・・・・・・・・・・・・263
第29表　茅畑遺跡　掘立柱建物の棟方向と勾配 ・・・・・・・・・・・・・265
第30表　茅畑遺跡　住居の主軸方位・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・267
第31表　茅畑遺跡　掘立柱建物の棟方位・・・・・・・・・・・・・・・・・267
第32表　鴫上Ⅰ遺跡Ａ・Ｂ区　ベッド状遺構を伴う住居の規模と
ベッド状遺構の占有率及び分類・・・・・・・・・・・・・・・・・・275
第33表　鴫上Ⅰ遺跡Ａ・Ｂ区　ベッド状遺構を伴う住居からの
出土遺物(掲載土器)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・275
第34表　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区　ベッド状遺構を伴わない住居からの
出土遺物(掲載土器)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・275
第35表　茅畑遺跡２面土坑計測表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・280
第36表　鴫上Ⅰ遺跡Ａ区１面土坑計測表・・・・・・・・・・・・・・・・・280
第37表　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区土坑計測表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・280
第38表　茅畑遺跡ピット計測表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・281
第39表　鴫上Ⅰ遺跡Ａ区ピット計測表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・295
第40表　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区ピット計測表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・297

写真図版目次

PL.１　１．茅畑遺跡西部全景(北東から)
２．茅畑遺跡西部全景(南西から)
PL.２　１．茅畑遺跡東部全景(東から)
２．茅畑遺跡東部全景(南西から)
PL.３　１．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区全景(北東から)
２．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区全景(南西から)
PL.４　１．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区より茅畑遺跡を望む(南西から)
２．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区より茅畑遺跡を望む(南西から)
PL.５　１．茅畑遺跡１号溝全景(南から)
２．茅畑遺跡２号溝全景(北から)
３．茅畑遺跡３号溝全景(南西から)
４．茅畑遺跡４号溝全景(南から)
５．茅畑遺跡５号溝全景(南から)
PL.６　１．茅畑遺跡６号溝全景(西から)
２．茅畑遺跡７号溝全景(南から)
３．茅畑遺跡８号溝全景(南から)
４．茅畑遺跡９号溝全景(南西から)
５．茅畑遺跡10号溝全景(南から)
６．茅畑遺跡２号道路北側(東から)
７．茅畑遺跡２号道路南側(東から)
PL.７　１．茅畑遺跡２号道路部分(南から)
２．茅畑遺跡１号畑全景(南から)
３．茅畑遺跡２号畑全景(南から)
４．茅畑遺跡３号畑全景(西から)
５．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区１号掘立柱建物全景(東から)
PL.８　１．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区１号溝全景(南東から)
２．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区２号溝全景(南から)
３．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区１号土坑全景(南から)
４．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区２号土坑全景(南から)
５．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区３号土坑全景(南から)
６．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区４号土坑全景(南西から)
７．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区５号土坑全景(北から)
８．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区６号土坑全景(北から)
PL.９　１．７号土坑土層断面（南から）
２．７号ピット全景（南から）
３．８号ピット全景（南から）
４．10号ピット全景(南から)
５．12号ピット全景(南から)
６．18号ピット全景(南から)
７．19号ピット全景(南から)
８．27号ピット全景(南から)
９．30号ピット全景(南から)
10．32号ピット全景(南から)
11．37号ピット全景(南から)
12．41号ピット全景(南から)
13．44号ピット全景(南から)
14．52号ピット全景(南から)
15．60号ピット全景(南から)
PL.10　１．62号ピット全景(南から)
２．64号ピット全景(南から)
３．70号ピット全景(南から)
４．72号ピット全景(南から)
５．90・91号ピット全景(南から)
６．94号ピット全景(南から)
７．95号ピット全景(南から)
８．98号ピット全景(南から)
９．100号ピット全景(南から)
10．110号ピット全景(南から)
11．111号ピット全景(南から)
12．112号ピット全景(南から)
13．120号ピット断面(西から)
14．123号ピット全景(南から)
15．127号ピット全景(南から)
PL.11　１．128号ピット全景(南から)
２．138号ピット全景(東から)
３．144号ピット全景(西から)
４．156号ピット全景(南から)
５．157号ピット全景(南から)
６．162号ピット全景(南から)
７．169号ピット全景(南から)

８．171号ピット全景(南から)
９．176号ピット全景(南から)
10．177号ピット全景(南から)
11．179号ピット全景(南から)
12．184号ピット全景(南から)
13．186号ピット全景(南から)
14．188号ピット全景(南から)
15．194号ピット全景(南から)
PL.12　１．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区501号掘立柱建物全景(西から)
２．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区501号柱穴列全景(西から)
PL.13　１．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区502号柱穴列全景(南西から)
２．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区501号土坑全景(南から)
３．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区502号土坑全景(南から)
４．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区503号土坑全景(南から)
５．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区504号土坑全景(南から)
６．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区505号土坑全景(南から)
７．谷地地形全景(南東から)
PL.14　１．502号ピット全景(南から)
２．512号ピット全景(南から)
３．514号ピット全景(南から)
４．528号ピット全景(南から)
５．530号ピット全景(南から)
６．536号ピット全景(南から)
７．546号ピット全景(南から)
８．548号ピット全景(南から)
９．551号ピット全景(南から)
10．552号ピット全景(南から)
11．564号ピット全景(南から)
12．565号ピット全景(南から)
13．568号ピット全景(南から)
14．572号ピット全景(南から)
15．575号ピット全景(南から)
PL.15　１．589号ピット全景(南から)
２．590号ピット全景(南から)
３．595号ピット全景(南から)
４．596号ピット全景(南から)
５．597号ピット全景(南から)
６．598号ピット全景(南から)
７．600号ピット全景(南から)
８．603号ピット全景(南から)
９．606号ピット土層断面(南から)
10．613号ピット全景(南から)
11．614号ピット全景(南から)
12．616号ピット全景(南から)
13．617号ピット全景(南から)
14．622号ピット全景(南から)
15．631号ピット全景(南から)
PL.16　１．632号ピット全景(南から)
２．633号ピット全景(南から)
３．634号ピット全景(南から)
４．638号ピット全景(東から)
５．639号ピット全景(東から)
６．646号ピット全景(北から)
７．657・658号ピット全景(北から)
８．660号ピット全景(西から)
９．667号ピット全景(東から)
10．671号ピット全景(南から)
11．681号ピット全景(南から)
12．ピット群(北から)
PL.17　１．茅畑遺跡１号住居全景(西から)
２．茅畑遺跡１号住居掘り方全景(西から)
３．茅畑遺跡１号住居１号カマド全景(西から)
４．茅畑遺跡１号住居１号カマド掘り方全景(西から)
５．茅畑遺跡１号住居１号カマド掘り方遺物出土状態(西から)
６．茅畑遺跡１号住居２号カマド土層断面(南東から)
７．茅畑遺跡１号住居２号カマド掘り方土層断面(南から)
８．茅畑遺跡１号住居貯蔵穴全景(北西から)
PL.18　１．茅畑遺跡１号住居床下土坑１全景(東から)
２．茅畑遺跡１号住居床下土坑２全景(南西から)
３．茅畑遺跡１号住居床下土坑３全景(東から)
４．茅畑遺跡１号住居床下土坑５全景(東から)
５．茅畑遺跡１号住居床下土坑６全景(西から)
６．茅畑遺跡１号住居床下土坑７全景(西から)
７．茅畑遺跡１号住居床下土坑８全景(西から)
８．茅畑遺跡４号住居全景(西から)
PL.19　１．茅畑遺跡４号住居掘り方全景(西から)
２．茅畑遺跡４号住居カマド全景(西から)
３．茅畑遺跡４号住居カマド掘り方全景(西から)
４．茅畑遺跡４号住居貯蔵穴全景(北から)
５．茅畑遺跡４号住居遺物出土状態全景(西から)
６．茅畑遺跡４号住居カマド遺物出土状態(西から)
７．茅畑遺跡５号住居全景(西から)
８．茅畑遺跡５号住居掘り方全景(西から)
PL.20　１．茅畑遺跡５号住居カマド全景(西から)
２．茅畑遺跡５号住居カマド掘り方全景(西から)
３．茅畑遺跡５号住居遺物出土状態全景(西から)
４．茅畑遺跡５号住居遺物出土状態(西から)
５．茅畑遺跡５号住居カマド遺物出土状態(西から)
６．茅畑遺跡５号住居カマド掘り方遺物出土状態(東から)
７．茅畑遺跡６号住居全景(西から)
８．茅畑遺跡６号住居掘り方全景(西から)
PL.21　１．茅畑遺跡６号住居カマド全景(西から)
２．茅畑遺跡６号住居貯蔵穴全景(西から)
３．茅畑遺跡６号住居土坑１全景(北から)
４．茅畑遺跡６号住居壁穴１全景(東から)
５．茅畑遺跡６号住居遺物出土状態(西から)
６．茅畑遺跡６号住居貯蔵穴遺物出土状態(西から)
７．茅畑遺跡６号住居カマド遺物出土状態(西から)
８．茅畑遺跡６号住居カマド遺物出土状態(西から)
PL.22　１．茅畑遺跡１号古墳全景(南から)
２．茅畑遺跡１号古墳周堀西土層断面(南から)
３．茅畑遺跡１号古墳周堀中央土層断面(南から)
４．茅畑遺跡１号古墳周堀東土層断面(南から)
５．茅畑遺跡１号古墳主体部全景(南から)
PL.23　１．茅畑遺跡１号古墳主体部奥壁裏込(東から)
２．茅畑遺跡１号古墳主体部舗石出土状態(南から)
３．茅畑遺跡１号古墳前庭部全景(南から)
４．茅畑遺跡１号古墳前庭部遺物出土状態(南から)
５．茅畑遺跡１号古墳石室全景(南から)
PL.24　１．茅畑遺跡１号古墳石室北側(北から)
２．茅畑遺跡１号古墳石室部(抜き取り痕)（北から)
３．茅畑遺跡１号古墳玄室全景(北西から)
４．茅畑遺跡１号古墳玄室床面(舗石面)（南から)
５．茅畑遺跡１号古墳羨門(南から)
６．茅畑遺跡１号古墳羨門(南から)
７．茅畑遺跡１号古墳羨門(抜き取り痕)（南から)
８．茅畑遺跡１号古墳框石跡(南から)
PL.25　１．茅畑遺跡４号掘立柱建物全景(北から)
２．茅畑遺跡11号掘立柱建物全景(東から)
PL.26　１．茅畑遺跡17号掘立柱建物全景(西から)
２．茅畑遺跡18号掘立柱建物全景(西から)
PL.27　１．茅畑遺跡21号掘立柱建物全景(南西から)
２．茅畑遺跡25号掘立柱建物全景(南から)
PL.28　１．茅畑遺跡27号掘立柱建物全景(南から)
２．茅畑遺跡28号掘立柱建物全景(北西から)
PL.29　１．茅畑遺跡29号掘立柱建物全景(南から)
２．茅畑遺跡43号掘立柱建物全景(東から)
PL.30　１．茅畑遺跡47号掘立柱建物全景(南から)
２．茅畑遺跡48号掘立柱建物全景(東から)
PL.31　１．茅畑遺跡49号掘立柱建物全景(北から)
２．茅畑遺跡１号道路全景(南から)
PL.32　１．茅畑遺跡１号土坑全景(南西から)
２．茅畑遺跡２号土坑全景(西から)
３．茅畑遺跡３号土坑土層断面(西から)
４．茅畑遺跡４号土坑全景(西から)
５．茅畑遺跡５号土坑全景(西から)
６．茅畑遺跡７号土坑全景(西から)
７．茅畑遺跡８号土坑全景(南西から)
８．茅畑遺跡９号土坑土層断面(西から)
PL.33　１．茅畑遺跡11号土坑全景(西から)

２．茅畑遺跡12号土坑全景(西から)
３．茅畑遺跡13号土坑全景(南から)
４．茅畑遺跡14号土坑土層断面(東から)
５．茅畑遺跡15号土坑全景、遺物出土状態(西から)
６．茅畑遺跡18号土坑全景(西から)
７．茅畑遺跡19号土坑全景(南西から)
８．茅畑遺跡20号土坑全景(南東から)
PL.34　１．茅畑遺跡21号土坑全景(西から)
２．茅畑遺跡27号土坑全景(西から)
３．茅畑遺跡28号土坑全景(南から)
４．茅畑遺跡29号土坑全景(西から)
５．茅畑遺跡ピット群全景(南から)
PL.35　１．32号ピット全景(西から)
２．55号ピット全景(南西から)
３．72号ピット全景(西から)
４．119号ピット全景(西から)
５．122号ピット全景(南西から)
６．132号ピット全景(西から)
７．148号ピット全景(南西から)
８．151号ピット全景(西から)
９．156号ピット全景(西から)
10. 159号ピット全景(南東から)
11. 197号ピット全景(南西から)
12. 238号ピット全景(南西から)
13. 240号ピット全景(南西から)
14. 241号ピット全景(南西から)
15. 244号ピット全景(南西から)
PL.36　１．245号ピット全景(南西から)
２．251号ピット全景(南西から)
３．254号ピット全景(南西から)
４．255号ピット全景(南西から)
５．292号ピット全景(西から)
６．303号ピット全景(南西から)
７．316号ピット全景(南西から)
８．356号ピット全景(西から)
９．382号ピット全景(南から)
10. 383号ピット全景(南西から)
11. 387号ピット全景(南西から)
12. 400号ピット全景(西から)
13. 409号ピット全景(西から)
14. 463号ピット全景(南西から)
15. 464号ピット全景(南西から)
PL.37　１．465・466号ピット全景(南東から)
２．548号ピット全景(西から)
３．594号ピット全景(西から)
４．605号ピット全景(南西から)
５．608号ピット全景(南西から)
６．659号ピット全景(西から)
７．673号ピット全景(西から)
８．674号ピット全景(西から)
９．679号ピット全景(北から)
10. 690号ピット全景(西から)
11. 692号ピット全景(西から)
12. 700号ピット全景(西から)
13. 707号ピット全景(南西から)
14. 741号ピット全景(西から)
15. 766号ピット全景(東から)
PL.38　１．790号ピット全景(西から)
２．800号ピット全景(南東から)
３．808号ピット全景(西から)
４．809号ピット全景(西から)
５．815号ピット全景(北西から)
６．858号ピット全景(西から)
７．873号ピット全景(南東から)
８．952号ピット全景(西から)
９．1010号ピット全景(西から)
10. 1023号ピット全景(西から)
11. 1030号ピット全景(西から)
12. 1032号ピット全景(南東から)
13. 1062号ピット全景(南から)
14. 1131号ピット全景(北西から)
15. 1132号ピット全景(北西から)
PL.39　１．1133号ピット全景(北西から)
２．1245号ピット全景(南から)
３．1275号ピット全景(南から)
４．1276号ピット全景(南から)
５．1279号ピット全景(南から)
６．1281号ピット全景(南から)
７．1294号ピット全景(南から)
８．1316号ピット全景(南から)
９．1317号ピット全景(南から)
10. 1318号ピット全景(南から)
11. 1359号ピット全景(南から)
12. 1388号ピット全景(南から)
13. 1432号ピット全景(南から)
14. 1436号ピット全景(南から)
15. 1441号ピット全景(南から)
PL.40　１．1459号ピット全景(南から)
２．1468号ピット全景(南から)
３．1490号ピット全景(南から)
４．1511号ピット全景(南から)
５．1560号ピット全景(南から)
６．1596号ピット土層断面(南から)
７．1708号ピット全景(南から)
８．1737号ピット全景(南から)
９．1739号ピット全景(南から)
10. 1754号ピット全景(南から)
11. 1774号ピット全景(南から)
12. 1777号ピット全景(南から)
13. 1790号ピット全景(南から)
14. 1843号ピット全景(南から)
15. 1862号ピット全景(南西から)
PL.41　１．鴨上Ⅰ遺跡Ａ区１号住居全景(西から)
２．鴨上Ⅰ遺跡Ａ区１号住居掘り方全景(西から)
３．鴨上Ⅰ遺跡Ａ区１号住居カマド全景(西から)
４．鴨上Ⅰ遺跡Ａ区１号住居掘り方床下土坑(南から)
５．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区501号住居全景(北西から)
６．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区501号住居掘り方全景(西から)
７．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区501号住居カマド検出状況(西から)
８．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区501号住居床下土坑全景(南から)
PL.42　１．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区502号住居全景(西から)
２．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区502号住居掘り方全景(西から)
３．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区502号住居カマド掘り方全景(西から)
４．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区503号住居全景(西から)
５．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区503号住居掘り方全景(西から)
６．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区503号住居カマド全景(西から)
７．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区503号住居カマド掘り方全景(西から)
８．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区503号住居貯蔵穴全景(南から)
PL.43　１．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区503号住居床下土坑１・４・５全景(西から)
２．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区503号住居Ｐ１全景(南から)
３．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区503号住居遺物出土状態全景(西から)
４．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区504号住居掘り方全景(西から)
５．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区504号住居遺物出土状態(西から)
６．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区504号住居カマド全景(西から)
７．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区504号住居カマド掘り方全景(西から)
８．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区506号住居全景(西から)
PL.44　１．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区506号住居掘り方全景(西から)
２．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区506号住居カマド土層断面(東から)
３．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区506号住居貯蔵穴全景(西から)
４．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区506号住居床下土坑１全景(南から)
５．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区506号住居床下土坑２土層断面(南から)
６．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区506号住居床下土坑３土層断面(南から)
７．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区506号住居床下土坑４土層全景(南から)
８．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区507号住居全景(東から)
PL.45　１．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区507号住居掘り方全景(東から)
２．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区507号住居カマド全景(東から)
３．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区507号住居貯蔵穴全景(東から)
４．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区507号住居床下土坑１全景(西から)
５．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区507号住居床下土坑２全景(西から)
６．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区507号住居Ｐ１全景(東から)

７．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区507号住居カマド遺物出土状態(東から)
８．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区509号住居全景(西から)
PL.46　１．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区509号住居貯蔵穴全景(南から)
２．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区509号住居カマド全景(西から)
３．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区509号住居カマド掘り方全景(西から)
４．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区510号住居全景(西から)
５．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区510号住居掘り方全景(西から)
６．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区510号住居カマド全景(西から)
７．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区510号住居貯蔵穴全景(西から)
８．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区510号住居カマド掘り方全景(西から)
PL.47　１．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区511号住居全景(西から)
２．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区511号住居掘り方全景(西から)
３．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区512号住居全景(西から)
４．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区512号住居貯蔵穴全景(西から)
５．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区512号住居カマド全景(西から)
６．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区512号住居カマド土層断面(南から)
７．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区512号住居遺物出土状態全景(西から)
８．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区512号住居カマド付近遺物出土状態(西から)
PL.48　１．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区513号住居全景(西から)
２．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区513号住居掘り方全景(西から)
３．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区513号住居カマド掘り方全景(西から)
４．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区513号住居カマド遺物出土状態(西から)
５．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区520号住居全景(東から)
６．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区520号住居Ｐ１土層断面(南から)
７．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区520号住居土坑１土層断面(西から)
８．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区520号住居土坑２土層断面(南から)
PL.49　１．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区520号住居土坑３全景(南から)
２．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区523号住居全景(北東から)
３．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区523号住居土層断面(北東から)
４．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区525号住居全景(北東から)
５．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区525号住居掘り方全景(西から)
PL.50　１．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区525号住居カマド全景(西から)
２．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区525号住居カマド掘り方全景(西から)
３．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区525号住居床下土坑１全景(南から)
４．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区526号住居全景(南東から)
５．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区526号住居掘り方全景(東から)
６．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区526号住居カマド全景(東から)
７．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区526号住居カマド掘り方全景(東から)
８．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区526号住居貯蔵穴全景(南東から)
PL.51　１．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区502号掘立柱建物全景(南から)
２．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区503号掘立柱建物全景(南から)
PL.52　１．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区501号粘土採掘坑全景(南から)
２．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区501号粘土採掘坑遺物出土状態(南から)
３．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区506号土坑全景(南から)
４．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区507号土坑全景(西から)
５．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区508号土坑全景(西から)
PL.53　１．509号土坑全景(北から)
２．685号ピット全景(南から)
３．686号ピット全景(南から)
４．692号ピット全景(南から)
５．697号ピット全景(南から)
６．704号ピット全景(南から)
７．715号ピット全景(南から)
８．725号ピット全景(南から)
９．726号ピット全景(南から)
10. 733号ピット全景(南から)
11. 734号ピット全景(南から)
12. 735号ピット全景(南から)
13. 739号ピット全景(南から)
14. 751号ピット全景(南から)
15. 761号ピット全景(南から)
PL.54　１．765号ピット全景(南から)
２．776号ピット全景(東から)
３．791号ピット全景(北から)
４．799号ピット全景(南から)
５．800号ピット全景(南から)
６．801号ピット全景(南から)
７．803号ピット全景(南から)
８．804号ピット全景(南から)
９．808号ピット全景(南から)
10. 812号ピット全景(南から)
11. 815号ピット全景(南から)
12. 819号ピット全景(南から)
13. 833号ピット全景(南から)
14. 837号ピット全景(南東から)
15. 840号ピット全景(北から)
PL.55　１．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区２号住居全景(東から)
２．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区２号住居掘り方全景(南から)
３．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区２号住居ベッド状遺構(北から)
４．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区２号住居Ｐ１全景(東から)
５．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区２号住居Ｐ３全景(東から)
６．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区２号住居Ｐ12全景(西から)
７．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区２号住居遺物出土状態(東から)
８．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区２号住居拡張部分遺物出土状態(南東から)
PL.56　１．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区３号住居全景(北から)
２．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区３号住居掘り方全景(南東から)
３．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区３号住居北東隅ベッド状遺構(西から)
４．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区３号住居南東隅ベッド状遺構(東から)
５．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区３号住居南西隅ベッド状遺構(北から)
６．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区３号住居北西隅ベッド状遺構(東から)
７．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区３号住居出入口施設（Ｐ６）（南から）
８．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区３号住居壁穴１、Ｐ15（南から）
PL.57　１．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区３号住居Ｐ４全景(南から)
２．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区３号住居Ｐ８全景(南東から)
３．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区３号住居貯蔵穴１全景(西から)
４．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区３号住居貯蔵穴１周堤(東から)
５．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区３号住居貯蔵穴２全景(西から)
６．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区３号住居炉１全景(南から)
７．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区３号住居炉２全景(南から)
８．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区３号住居遺物出土状態(東から)
PL.58　１．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区４号住居全景(南から)
２．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区４号住居掘り方全景(南から)
３．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区４号住居ベッド状遺構(北から)
４．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区４号住居粘土・焼土出土状態(北から)
５．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区４号住居Ｐ４全景(南東から)
６．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区４号住居Ｐ１・５全景(南から)
７．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区４号住居Ｐ６全景(南から)
８．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区４号住居Ｐ13全景(南から)
PL.59　１．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区４号住居Ｐ14全景(北西から)
２．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区４号住居Ｐ15全景(北東から)
３．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区４号住居Ｐ19全景(南から)
４．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区４号住居Ｐ20全景(南から)
５．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区４号住居炉１(東から)
６．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区４号住居炉２(東から)
７．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区４号住居遺物出土状態(南から)
８．鴫上Ⅰ遺跡Ａ区４号住居炭化物出土状態(西から)
PL.60　１．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区505号住居全景(南東から)
２．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区505号住居掘り方全景(北西から)
３．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区505号住居Ｐ３全景(南から)
４．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区505号住居Ｐ10全景(西から)
５．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区505号住居土坑１全景(南から)
６．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区505号住居土坑２全景(南から)
７．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区505号住居土坑３全景(南から)
８．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区505号住居土坑４全景(南東から)
PL.61　１．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区505号住居炉１(西から)
２．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区505号住居炉２(西から)
３．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区505号住居遺物出土状態(西から)
４．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区508号住居全景(南東から)
５．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区508号住居掘り方全景(北東から)
６．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区508号住居東隅ベッド状遺構(北西から)
７．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区508号住居西隅ベッド状遺構(東から)
８．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区508号住居貯蔵穴全景(北西から)
PL.62　１．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区508号住居Ｐ19・30全景(南東から)
２．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区508号住居土坑１全景(南東から)
３．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区508号住居土坑２全景(南東から)
４．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区508号住居土坑３全景(南東から)
５．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区508号住居土坑４全景(西から)
６．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区508号住居炉１全景(北西から)
７．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区508号住居炉２全景(北東から)
８．鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区508号住居遺物出土状態全景(南西から)

PL.63　１．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区514号住居全景(南東から)
２．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区514号住居掘り方全景(南西から)
３．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区514号住居床下土坑１土層断面(南西から)
４．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区514号住居床下土坑２土層断面(南東から)
５．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区514号住居床下土坑３土層断面(北西から)
６．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区514号住居Ｐ１全景(南東から)
７．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区514号住居Ｐ２全景(南東から)
８．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区514号住居Ｐ３全景(南東から)
PL.64　１．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区514号住居Ｐ４全景(南東から)
２．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区514号住居Ｐ５全景(南から)
３．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区514号住居Ｐ11全景(南東から)
４．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区514号住居Ｐ12全景(南東から)
５．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区515号住居全景(南西から)
６．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区515号住居掘り方全景(南東から)
７．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区515号住居Ｐ１全景(南東から)
８．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区515号住居Ｐ２全景(南東から)
PL.65　１．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区515号住居Ｐ３全景(南東から)
２．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区515号住居Ｐ７全景(南東から)
３．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区515号住居Ｐ９土層断面(北西から)
４．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区515号住居炉全景(南西から)
５．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区516号住居全景(南から)
６．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区516号住居掘り方全景(南から)
７．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区516号住居土坑１土層断面(南から)
８．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区516号住居土坑２土層断面・炉全景(南から)
PL.66　１．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区517号住居全景(南東から)
２．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区517号住居掘り方全景(南東から)
３．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区517号住居ベッド状遺構土層断面(南東から)
４．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区517号住居Ｐ１土層断面(南東から)
５．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区517号住居Ｐ２土層断面(南東から)
６．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区517号住居Ｐ３土層断面(南東から)
７．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区517号住居Ｐ４土層断面(南東から)
８．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区517号住居Ｐ11土層断面(南東から)
PL.67　１．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区517号住居土坑土層断面(南東から)
２．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区517号住居炉土層断面(南東から)
３．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区517号住居炭化物出土状態(北東から)
４．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区517号住居炭化物出土状態(北東から)
５．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区517号住居遺物出土状態全景(南西から)
６．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区517号住居遺物出土状態全景(北東から)
７．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区517号住居遺物出土状態(北東から)
８．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区517号住居遺物出土状態(北西から)
PL.68　１．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区518号住居全景(東から)
２．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区518号住居掘り方全景(東から)
３．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区518号住居東壁炭化材出土状態(北から)
４．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区518号住居北壁炭化材出土状態(東から)
５．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区518号住居貯蔵穴全景(西から)
６．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区518号住居土坑１全景(南から)
７．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区518号住居土坑２土層断面(南から)
８．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区518号住居土坑３土層断面(南から)
PL.69　１．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区518号住居土坑４掘り方全景(南から)
２．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区518号住居炉１全景(東から)
３．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区518号住居炉２全景(北から)
４．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区518号住居Ｐ１土層断面(南から)
５．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区518号住居Ｐ２掘り方全景(南から)
６．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区518号住居Ｐ３全景(南から)
７．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区518号住居Ｐ４全景(北から)
８．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区518号住居Ｐ５土層断面(西から)
PL.70　１．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区518号住居Ｐ６土層断面(南から)
２．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区518号住居炉１遺物出土状態(北から)
３．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区519号住居全景(南から)
４．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区519号住居全景(東から)
５．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区521号住居全景(北西から)
６．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区521号住居掘り方全景(北西から)
７．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区521号住居土坑２全景(北から)
８．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区521号住居炉全景(北から)
PL.71　１．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区521号住居炭化材出土状態全景(北西から)
２．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区521号住居遺物出土状態(北西から)
３．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区522号住居全景(南から)
４．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区522号住居掘り方全景(南から)
５．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区522号住居ベッド状遺構土層断面(西から)
６．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区522号住居圧痕状態(西から)
７．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区522号住居土坑４全景(南から)
８．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区522号住居炉全景(南から)
PL.72　１．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区522号住居遺物出土状態全景(南から)
２．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区522号住居紡輪出土状態(西から)
３．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区524号住居全景(南から)
４．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区524号住居遺物出土状態(西から)
５．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区527号住居全景(南から)
６．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区527号住居Ｐ１全景(西から)
７．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区527号住居遺物出土状態(西から)
８．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区527号住居遺物出土状態(西から)
PL.73　１．茅畑遺跡　旧石器時代１号調査坑土層断面(北から)
２．茅畑遺跡　旧石器時代４号調査坑土層断面(南から)
３．茅畑遺跡　旧石器時代５号調査坑土層断面(東から)
４．茅畑遺跡　旧石器時代７号調査坑土層断面(西から)
５．茅畑遺跡　旧石器時代９号調査坑土層断面(西から)
６．茅畑遺跡　旧石器時代15号調査坑土層断面(東から)
７．茅畑遺跡　基本土層７断面(南から)
８．茅畑遺跡　基本土層６断面(東から)
PL.74　１．鴨上Ⅰ遺跡Ａ区　旧石器時代１号調査坑土層断面(南から)
２．鴨上Ⅰ遺跡Ａ区　旧石器時代４号調査坑土層断面(西から)
３．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区　旧石器時代７号調査坑土層断面(西から)
４．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区　旧石器時代11号調査坑土層断面(南から)
５．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区　旧石器時代15号調査坑土層断面(東から)
６．鴨上Ⅰ遺跡Ａ区　基本土層２断面(東から)
７．鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区　基本土層１断面(北西から)
PL.75　茅畑・鴨上Ⅰ遺跡１面、茅畑遺跡２面１号住居出土遺物
PL.76　茅畑遺跡２面１・４号住居出土遺物
PL.77　茅畑遺跡２面５号住居出土遺物
PL.78　茅畑遺跡２面６号住居、１号古墳出土遺物
PL.79　茅畑・鴨上Ⅰ遺跡２面、Ｂ区２面501・503・504・506・507・509号住居出土遺物
PL.80　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区２面510・512号住居出土遺物
PL.81　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区２面513・520・525・526号住居、503号掘立柱建物、501号粘土採掘坑出土遺物
PL.82　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区２面501号粘土採掘坑、土坑、ピット、遺構外、茅畑遺跡３面遺構外出土遺物
PL.83　茅畑遺跡３面遺構外、鴨上Ⅰ遺跡Ａ区３面２・３号住居出土遺物
PL.84　鴨上Ⅰ遺跡Ａ区３面３・４号住居、鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面505・508号住居出土遺物
PL.85　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面508・514・515・516号住居出土遺物
PL.86　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面516・517号住居出土遺物
PL.87　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面518・521号住居出土遺物
PL.88　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面521・522・524号住居出土遺物
PL.89　鴨上Ⅰ遺跡Ｂ区３面524・527号住居、遺構外出土遺物

自然科学分析　写真１　炭化材(１)
自然科学分析　写真２　炭化材(２)
自然科学分析　写真３　炭化材(３)

第１章　発掘調査と遺跡の概要

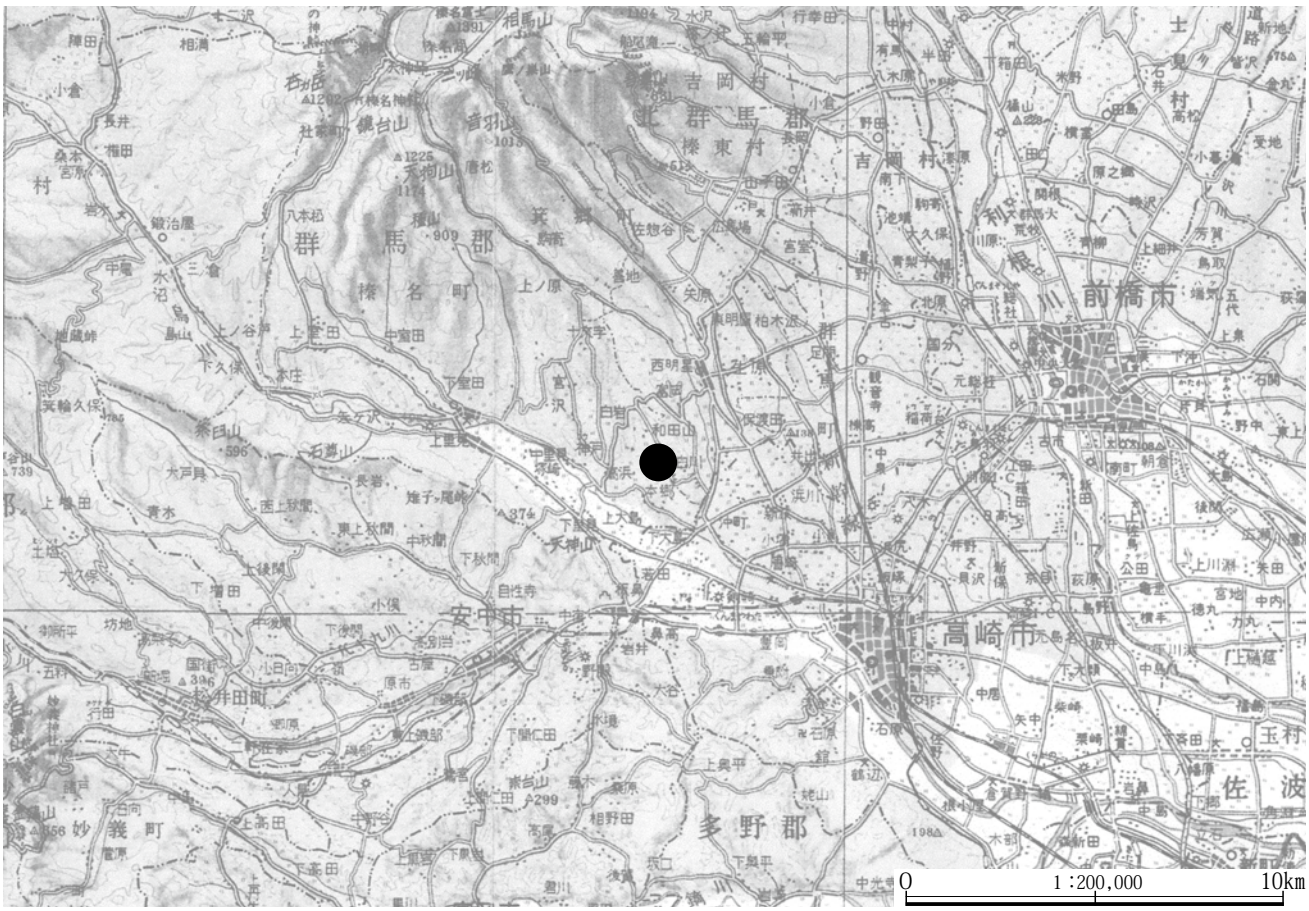
１　調査に至る経過

（１）平成26年度（主）前橋安中富岡線社会資本総合整備事業（広域連携）の概要

茅畑遺跡・鴫上Ⅰ遺跡は高崎市箕郷町に所在する、縄文時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。本遺跡では平成27年１月から平成27年４月まで、及び平成28年１月に前橋安中富岡線社会資本総合整備事業（広域連携）（以下「前橋安中富岡線関連事業」とする）に伴う埋蔵文化財の発掘調査が実施されている。本書はその埋蔵文化財発掘調査報告書である。

前橋安中富岡線関連事業は、群馬県の中毛地区と西毛地区の円滑な交通環境の推進にあたるものである。

本県中毛と西毛を結ぶ地域は、烏川、碓氷川、鏑川等の谷筋に阻まれ、従来から交通網の整備が遅れていた。



第１図　茅畑・鴫上Ⅰ遺跡と群馬県の地勢（国土地理院発行、20万分の１地勢図「宇都宮」「長野」平成23年６月１日発行）

既存の道路は１車線のものが多く道幅も狭いため安全性にも問題があった。また、交通渋滞が激しいポイントがあり前橋、高崎方面とのアクセスも良好ではなかった。さらに、当該地域においては東西方向の主軸になりうる道路が少なく、本事業における県民の期待は大きい。

本県が推進する７つの交通軸において、西毛軸の１つを構成する西毛広域幹線道路は、前橋市、高崎市、安中市、及び富岡市を結ぶ総延長27.8kmの主要幹線道路であり、西毛軸の主軸である。本道路は、周辺の渋滞緩和、物流の効率化、生活圏の拡大など、西毛地域の産業、経済、観光の発展を担うために計画された道路である。本道路建設により、地域と地域が身近になり強い結びつきが生まれること、高速インターチェンジや新幹線駅へのアクセスが向上すること、西毛地域のネットワーク強化により地域の成長力が向上することなどが可能となる。

西毛広域幹線道路のうち高崎西工区は、前橋安中富岡線関連事業に相当する事業であり、総延長のうち4.70kmを占める。本事業により、交差点の混雑の緩和、円滑な車両走行が実現され、交通環境の改善が期待される。

（２）埋蔵文化財の調査に至る経過

前橋安中富岡線社会資本総合整備事業（広域連携）を進めるにあたり、群馬県高崎土木事務所（以下「高崎土木」とする）は、県土整備部建設企画課経由で群馬県教育委員会文化財保護課（以下「保護課」）に照会した。これを受けた保護課は、当該事業用地の一部が周知の埋蔵文化財包蔵地である茅畑遺跡・鴫上Ⅰ遺跡に含まれることから、試掘・確認調査が必要である旨を回答した。高崎土木は、保護課に対し高崎市箕郷町地内の試掘・確認調査を依頼し、保護課は平成26年10月に当該地域の試掘・確認調査を実施した。

この試掘・確認調査はトレンチ掘削による方法で実施され、前橋安中富岡線社会資本総合整備事業（広域連携）域では、建設予定地内に、路線方向に沿うものを基本として13本のトレンチが掘削された。そのうち本遺跡を発掘調査する要因となったトレンチは５本あり、茅畑遺跡に相当する地点に１本、鴫上Ⅰ遺跡に相当する地点に４本掘削された。茅畑遺跡に掘削されたトレンチは、西半分において、土師器片、及びその土器片に伴う住居跡が２軒確認された。鴫上Ⅰ遺跡に掘削されたトレンチは、表土下60cmの深さでAs-Bの純堆積層が認められ、その下に畦と推定される堆積が確認された。また他３本のトレンチにおいては、表土下60～80cmの深さで古代の住居跡が検出された。

平成26年10月17日、保護課はこの試掘・確認調査の結果を高崎土木、高崎市教育委員会（以下「高崎市教委」とする）に通知し、一部の事業地では埋蔵文化財の調査が必要であることなどを伝えた。

本遺跡の発掘調査は平成27年１月から行われることとなった。その手続きの経緯に関して、平成26年度調査については、高崎土木は保護課を通じて同月25日公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団（以下「事業団」とする）に対し見積書等の提出を依頼し、同月28日に事業団がこれに対して回答したのを受けて、同日、発掘調査の委託契約を締結している。これにより、平成27年１月１日より同年３月31日まで事業団による発掘調査が実施されることとなった。平成27年度調査については、高崎土木は保護課を通じ平成27年３月11日見積書等の提出を依頼し、同月19日に事業団がこれに対して回答したのを受けて、同日、発掘調査の委託契約を締結している。これにより、平成27年４月１より同年４月30日、及び平成28年１月１日より同年１月31日まで事業団による調査が実施されることとなった。

２　調査の経過

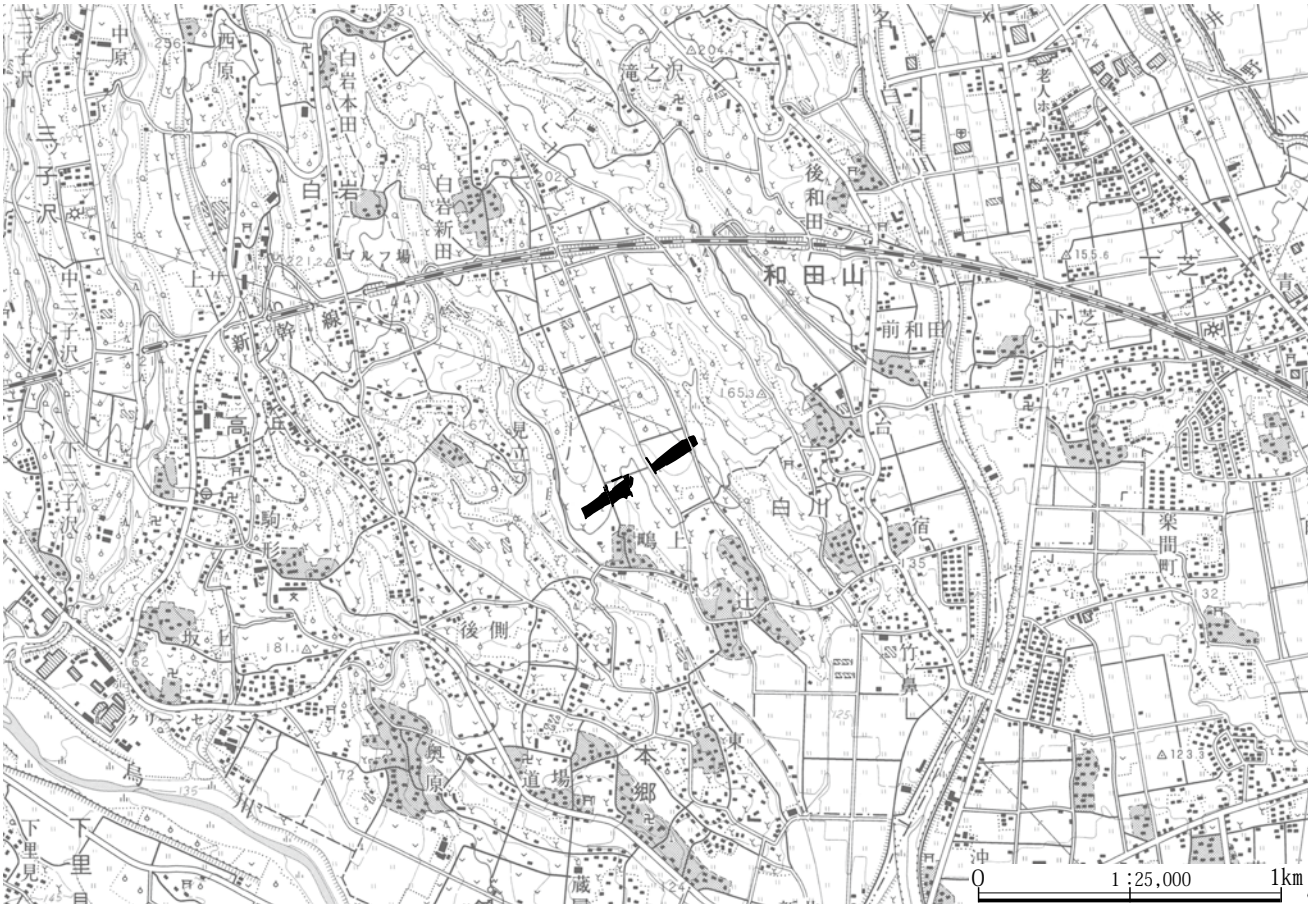
発掘調査は、平成27年１月１日より同年４月30日まで、及び平成28年１月１日より同年１月31日まで、計５か月間行われた。平成26年度の発掘調査については、保護課による文化財発掘調査の結果についての一部変更があり、調査面積が増加したため、高崎土木・保護課・事業団による協議が行われ、平成27年１月５日に計画変更を確認し、平成27年３月６日に調査面積を6,539㎡から6,599㎡へ変更する平成26年度の発掘調査委託が高崎土木から事業団になされている。また、平成27年度の発掘調査については、平成27年４月と平成28年１月の２期２か月かけて発掘調査が実施された。調査面積は、7,050㎡であった。

調査経過等は以下の通りである。平成26・27年度の発掘調査日誌から主な記録を抜粋して掲載した。

【平成26年度】

１月１日　調査担当４名着任
　５日　現場発掘調査準備協議
　６日　調査範囲確認
　８日　プレハブ事務所設置
　　茅畑遺跡　表土掘削開始
　　鴫上Ⅰ遺跡　プレハブ前表土掘削
　13日　茅畑遺跡　表土掘削　遺構確認　調査
　　鴫上Ⅰ遺跡　安全対策　表土掘削　遺構確認
　14日　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区　表土掘削　遺構確認
　　鴫上Ⅰ遺跡Ａ区　低地部調査
　19日　鴫上Ⅰ遺跡Ａ区　低地部調査
　　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区　遺構確認　調査
　21日　文化財保護課　事業団　現場協議
　22日　高崎土木　文化財保護課　事業団　現場担当
　　現地打ち合わせ
　23日　茅畑遺跡　遺構確認、調査
　　鴫上Ⅰ遺跡Ａ区低地部調査　埋め戻し開始
　26日　鴫上Ⅰ遺跡Ａ区低地部　埋め戻し終了
　　鴫上Ⅰ遺跡Ａ区表土掘削開始　安全柵設置
　27日　鴫上Ⅰ遺跡Ａ区表土掘削　遺構確認
　28日　鴫上Ⅰ遺跡Ａ区表土掘削　遺構確認
　　文化財保護課長　事業団課長視察
　29日　茅畑遺跡　表土掘削　遺構確認　調査

２月２日　鴫上Ⅰ遺跡Ａ区　調査開始
　３日　茅畑遺跡　調査　写真　実測
～23日　鴫上Ⅰ遺跡Ａ区　調査　写真
　　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区　調査　写真　実測
　10日　区長来跡　現地説明会協議
　12日　区長来跡　現地説明会協議　高崎土木、保護課に連絡
　24日　高所作業車による全景写真撮影
　　現地説明会　参加者45名
　25日　鴫上Ⅰ遺跡Ａ区　調査　写真　実測



第２図　茅畑・鴫上Ⅰ遺跡の位置(国土地理院発行、２万５千分の１地形図「下室田」平成15年２月１日発行)

鳴上Ⅰ遺跡Ａ区　埋め戻し終了
保護課と協議
27日　重機によるだめ押し調査
鳴上Ⅰ遺跡Ａ区　遺構確認開始
鳴上Ⅰ遺跡Ｂ区　写真　旧石器調査
３月２日　鳴上Ⅰ遺跡Ａ区　重機による遺構確認
鳴上Ⅰ遺跡Ａ区　実測　写真　埋め戻し終了
３日　空中写真撮影
４日　鳴上Ⅰ遺跡Ａ区　トレンチ調査、土層実測、
調査終了後埋め戻し
遺物洗浄発注準備と発注
６日　鳴上Ⅰ遺跡Ａ区　旧石器調査
鳴上Ⅰ遺跡Ｂ区　旧石器調査
12日　鳴上Ⅰ遺跡Ｂ区　測量　重機による遺構確認
調査　埋め戻し終了
13日　鳴上Ⅰ遺跡Ａ区　重機による遺構確認調査、
写真実測終了
16日　茅畑遺跡　重機による遺構確認調査
鳴上Ⅰ遺跡Ａ区　旧石器トレンチ調査
注記終了　埋め戻し終了
17日　茅畑遺跡　1・5・6号住居掘り方調査
掘立柱建物跡全景写真　カマドの測量
内業　デジタル写真リネーム
18日　茅畑遺跡　旧石器確認トレンチ調査開始
19日　鳴上Ⅰ遺跡　Ａ区　埋め戻し開始
20日　茅畑遺跡　旧石器１～６号トレンチ埋め戻し
調査、記録終了部分から埋め戻し開始
鳴上Ⅰ遺跡Ａ区　埋め戻し完了安全柵撤去
23日　茅畑遺跡　測量成果簿納品
24日　茅畑遺跡　鳴上Ⅰ遺跡
周辺整備　作業員による細部の埋め戻し
完了検査
25日　茅畑遺跡　鳴上Ⅰ遺跡　図面整理
27日　茅畑遺跡　鳴上Ⅰ遺跡　炭化材分類
30日　茅畑遺跡　鳴上Ⅰ遺跡　残務処理
31日　茅畑遺跡　鳴上Ⅰ遺跡
発掘届け提出(高崎警察)
茅畑遺跡高圧線下調査の東電と協議
遺物洗浄納品　退任式本部
現地作業終了調査担当４名離任

【平成27年度】
４月１日　茅畑遺跡　鳴上Ⅰ調査担当４名着任
平成27年度調査開始準備　用地境等の確認
２日　砕石敷ならし後作業員駐車場整備
茅畑遺跡　表土掘削開始
３日　茅畑遺跡　表土掘削、遺構確認
鳴上Ⅰ遺跡　表土掘削、遺構確認
安全対策
排土突き固め、安全ロープ設置、土嚢設置
６日　現場打合せ　高崎土木　文化財保護課
事業団　基準点設置
９日　茅畑遺跡　調査実施
鳴上Ⅰ遺跡Ｂ区　遺構確認　調査実施
10日　茅畑遺跡　旧石器調査開始２か所
高崎土木排土処理打合せ
13日　茅畑遺跡　古墳主体部・前庭部調査
鳴上Ⅰ遺跡Ｂ区　遺物取上
17日　茅畑遺跡　古墳調査
鳴上Ⅰ遺跡Ｂ区　住居調査　炭化物取り上げ
18日　高所作業車による全景写真
茅畑遺跡　全景写真　部分写真　実測
鳴上Ⅰ遺跡　全景写真　実測
住居炭化面の調査
20日　茅畑遺跡　旧石器トレンチ調査
21日　鳴上Ⅰ遺跡　炭化材サンプル取り上げ
旧石器トレンチ調査
22日　出土遺物洗浄発注準備
23日　茅畑遺跡　トレンチ埋め戻し
現場撤収へ向けて安全対策作業
鳴上Ⅰ遺跡　住居全景撮影(高所作業車)
24日　茅畑遺跡　撤収
鳴上Ⅰ遺跡　全景撮影
敷き鉄板撤去　茅畑遺跡埋め戻し
鳴上Ⅰ遺跡　埋め戻し開始
27日　引っ越し開始
茅畑遺跡　残務処理
鳴上Ⅰ遺跡　住居掘り方調査
同全景写真撮影、部分撮影
埋め戻し継続　残務処理

28日　茅畑遺跡　鉄板撤去搬出準備
鳴上Ⅰ遺跡　埋め戻し終了
鉄板撤去搬出準備
30日　茅畑遺跡　鳴上Ⅰ遺跡　鉄板搬出
鳴上Ⅰ遺跡　埋め戻し終了
現地作業終了調査担当４名離任

１月４日　鳴上Ⅰ遺跡　調査担当２名着任
平成27年度調査開始準備　用地境等の確認
５日　表土掘削　遺構確認作業開始
６日　住居調査継続　遺構確認作業継続　表土掘削継続
８日　表土掘削終了
12日　土層写真撮影・測図
13日　住居継続調査　写真撮影　測図　遺物取り上げ　地元住民２名見学
14日　住居調査継続　住居全景写真撮影　測図　遺物取り上げ　地元住民１名見学
15日　住居調査継続　遺物取り上げ　炭化材・床面精査　写真撮影　測図　高所作業車による遺跡全体写真撮影　地元区長来跡　地元住民１名見学
18日　降雪のため、作業中止　区長来跡
19日　除雪作業　区長来跡
21日　除雪作業　遺構調査再開　旧石器トレンチ調査　全景写真撮影　測図
22日　住居・旧石器トレンチ等継続　全景写真撮影　測図
25日　住居・旧石器トレンチ等継続　全景写真再撮影　追加測図
26日　住居・旧石器トレンチ等継続　528号住居を501号粘土採掘坑に修正
27日　旧石器トレンチ等継続　１号・２号旧石器トレンチ、写真撮影・測図　地元住民１名見学
28日　器材撤収　埋め戻し終了
29日　プレハブ・トイレ撤去
現地作業終了調査担当２名離任
２月３日　午後４時　本部にて引渡
＊記録は、写真撮影　測量　注記等を含む。

３　整理業務の経過と方法

整理作業は平成27年４月１日より開始し、平成28年11月30日に完了した。
まず、平成27年1月から４月までの発掘調査についての整理作業の概要は、以下の通りである

遺物整理に関しては土器・陶磁器類の接合を平成27年８月から10月に行い、遺物の選定を９月から11月に随時実施し、復元作業を９月から11月に実施した。また金属器は報告書掲載遺物の選定を行った上で、平成27年11月にエックス線撮影をして、その後錆落としを実施した。また石器､石製品を含む出土遺物の実測を７月から９月、実測図のトレースを９月から11月にかけて実施し、この間平成27年７月と８月に写真撮影を実施した。

遺構図に関しては原図整理を平成27年５月から８月、デジタルトレースを６月から平成28年２月に実施した。

また発掘調査報告書に拘る作業では、遺物図の版下作製を平成27年12月から翌年３月、遺構図の版下作製を11月から翌年３月、写真の版下作製を12月から３月に実施し、本文執筆を４月から翌年２月、遺物観察表の作成を７月から翌年２月に実施した。

平成28年１月調査についての整理作業は、平成27年１月～４月調査の整理作業と同様の作業手順で、平成28年２・３月及び同年10・11月に併行して順次作業を進めていった。

なお、整理時に遺構番号及び名称の付け替えを一部で行っており、その結果は第１表に掲げた通りである。

４　調査の方法

（１）調査区の設定

本遺跡は、高崎市北部の箕郷町に所在し、榛名水系の流水より南北に刻まれた谷地形が発達する台地上にある。遺跡の東側500mを榛名白川が南に向かって流れ、遺跡周辺にも小河川が谷あいを流れている。

調査は、幅40m程の工事路線を東から、茅畑遺跡・鳴上Ⅰ遺跡Ａ区・鳴上Ⅰ遺跡Ｂ区と区分けし、着手した順にそれぞれ「Ａ１区」、「Ａ２区」、・・・のように調査区を設定した。また、同時進行による発掘調査が実施されており、遺構番号の混乱を避けるために、茅畑遺跡・鳴上Ⅰ遺跡Ａ区では「１番～」、鳴上Ⅰ遺跡Ｂ区では

第３図　茅畑・鳴上Ⅰ遺跡の調査区（高崎市都市計画基本図91、１：2,500　平成24年10月測図使用）

「501番～」を付した。

グリッドの設定は行わず、世界測地系による平面直角座標系(平成十四年国土交通省告示第九号)Ⅸ系に基づき、東経139度50分、北緯36度0分を原点として、１m四方の区画を１単位として区画を設定している。本報告書内での呼称は、座標数値の下３桁で表記している。

なお、本遺跡はＸ＝41,597m～ 41,871m、Ｙ＝－79,541m～－79,921mの範囲内にある。

（２）調査面の設定

本遺跡では、1180(天仁元)年に降下した浅間Ｂ軽石(As-B)が比較的良好に検出された部分があり、その軽石が混じる暗褐色土によって埋没したものを第１面(中世以降)とした。次に、その軽石の直下のものを平安時代の遺構とし、さらにその下の浅間Ｃ軽石(As-C)混じりの黒褐色土で埋没したものを古墳時代から平安時代までの遺構として、第２面とした。ローム漸移層～ローム上面を第３面(縄文時代～弥生時代)とし、落ち込みの確認をした。ローム層中の石器文化層の確認面を第４面(旧石器時代)とした。

茅畑遺跡は、調査区域外の北に最高地点を持つと思われる丘陵地帯に位置する。特に、西部は傾斜地となっている。第１面では、溝や畑の畝間が検出された。第２面では、As-B軽石は窪地に堆積していたものの直下の遺構は検出されなかった。As-C軽石混じりの黒褐色土で埋没した遺構として、竪穴住居、掘立柱建物、道などを検出した。第３面では、遺構や遺物は確認されていない。ただし、縄文時代中期から後期の遺物は出土しており、明確な遺構は確認できなかったものの、人々の活動があったことは推察される。第４面においては、石器などの遺物は検出できなかった。

鴫上Ⅰ遺跡Ａ区では、谷地形から丘陵地形にあたる部分において近・現代の削平、昭和40年代頃の黒土採取に伴う遺構面の削平が行われており、上位面の残存状態は良好ではなかった。第１面では、土坑とピット群が検出された。第２面では、削平された住居が１軒検出され、集落の存在が推察できる。第３面にでは、弥生後期の住居が確認されている。弥生時代から平安時代までの集落の存在が想定でき、台地上の縁辺部に住み分けをした集落の様相をうかがい知ることができた。第４面では、石器などの遺物は検出できなかった。

鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区は、南東方向への緩やかな台地上にある。第１面は、掘立柱建物、柱穴列、ピット群、土坑が検出されている、第２面は、古墳時代から平安時代までの住居が検出されており、第３面は、弥生時代の集落が確認されている。本調査においても、弥生時代後期から平安時代までの住居が確認され、鴫上Ⅰ遺跡Ａ区に引き続いて集落の様相をうかがい知ることができた。第４面では、石器などの遺物は検出できなかった。

調査区すべてに、ここで示した調査面が存在するわけではなく、また、存在したとしても一部の範囲に限られる場合もある。

（３）発掘調査の方法

当遺跡では、これまで述べてきたように、各区で複数の確認面を調査している。表土及び各確認面までの間層は掘削機(バックホウ)を用いて掘削し、その後、ジョレンを用いて人力による遺構確認を行った。遺構調査は移植ゴテを用いた掘削を中心としているが、As-B軽石及びAs-C軽石下の調査にはハケを用いて、当時の生活面が傷つかないように調査を行っている。各遺構の埋没状況については、土層観察用のベルトを設定している。

記録は、遺構の平面図及び断面図等の図面作成と、ブローニーモノクロフィルムを使用した６×７銀塩カメラ及び35㎜デジタルカメラ等による写真撮影によって行った。

５　基本土層

本遺跡は河川等による浸食を受けた樹枝状の丘陵地上に立地している。弥生時代から中・近世に至るまで、灰黄褐色土及びにぶい黄褐色土主体の堆積が認められる面から、黒褐色土及び暗褐色土主体の堆積が認められる面まで観察される。同一遺跡内において土層の堆積は一様ではないが、榛名山の造山活動及び榛名白川に代表される河川の浸食活動により土壌化した土層で覆われている。したがって、ここでは茅畑遺跡、鴫上Ⅰ遺跡Ａ区、鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区における代表的な土層堆積を平均化し、標準土層として記載する。

本遺跡で最も特徴的な土層としては、浅間山噴火に伴うAs-B軽石があげられる。後世の削平が進んでおり、す

べての調査区に万遍なく堆積しているわけではないが、この地域の地層の特徴的な堆積といえる。

次に鍵層となるAs-C軽石は、遺跡全域で安定的に確認されたものであり、黒褐色土、暗褐色土等、本遺跡の主体を成す土層に撹拌された状況で存在していることが多く、標準土層として位置付けている。

基盤となる土層は、茅畑遺跡東部と鴫上Ⅰ遺跡Ａ区及び鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区では、層位の厚さを主体として、様相が異なる。これも一重に、双方の遺跡の立地する地形の相違によるものが大きいと考えられる。茅畑遺跡では、調査区域外に最高地点を持つ丘陵地から西に向かって大きく傾斜しており、鴫上Ⅰ遺跡では、谷を挟んで、南東方向への緩やかな傾斜地となっているのである。

本遺跡では、基本土層となる標準土層は、茅畑遺跡東部壁、鴫上Ⅰ遺跡Ａ区北部トレンチ、鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区中央南部壁の３か所で確認できた。土層堆積状況は、第４図の通りである。調査区各所で土層堆積状況に違いが見られた。中でも、鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区の地籍の筆境に近い南東隅壁が、最も土壌堆積が安定していた。昭和40年代に黒土の採取を行った経緯(註1)があり、調査区内の大半の部分で２層にあたる黒色土はなくなっている。事実、茅畑遺跡調査区東部壁、鴫上Ⅰ遺跡Ａ区北部トレンチの基本土層では、その部分が欠損している。また、現代の建物として利用されていたためか撹乱が広範囲に及び、さらに、後世の耕作等により削平の結果、安定した土壌堆積が観察できなかったと考える。

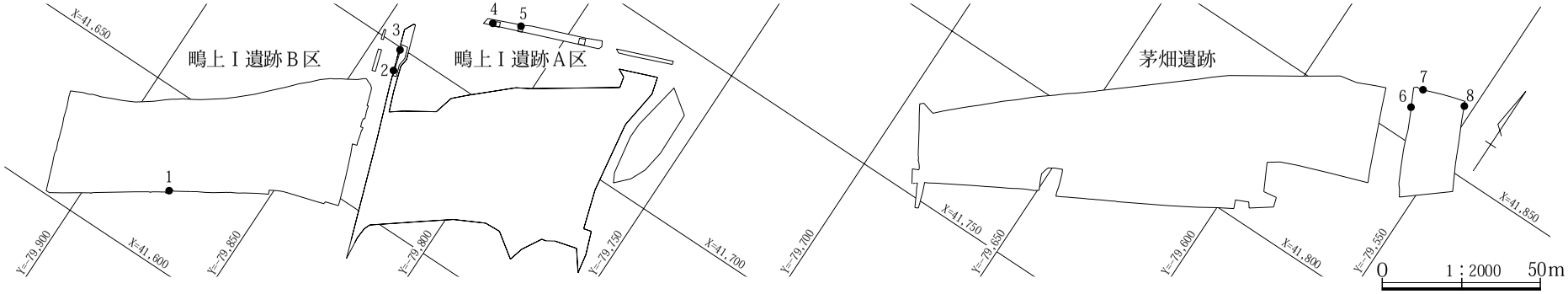
第４図№６～８は、茅畑遺跡調査区東部壁の土層堆積状況である。整地面は確認されなかった。１層は、現代の耕作土である。２層は、黒土の採取が行われた直下の黒色土であり、As-C軽石を含み、締まりのある粘質土である。３層は、黒褐色土と暗褐色土の混土であり、軽石を含み締まりがあり粘性を帯びる。４層は､暗褐色土で、軽石を含む締まりのある軟質土である。５層は、黄褐色土で、白色軽石を含み締まりが強く粘性がある。指標となるテフラにより、各年代の比定は、次の通りである。確認面Ⅰ(１面)は削平が進んでおり、遺構が僅かに確認された。２・３層が確認面Ⅱ層(２面)に相当しており、遺構が確認された。４・５層が確認面Ⅲ(３面)に相当するが、本調査区では遺構が確認できなかった。

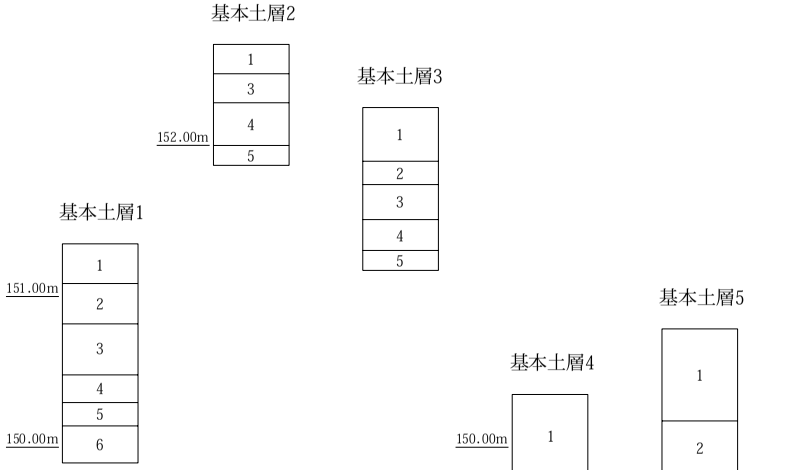
第４図№２～５は、鴫上Ⅰ遺跡Ａ区北部トレンチの土層堆積状況である。整地面は確認されなかった。№４・５の１層は、現代の耕作土である。２層は、黒土の採取が行われた直下の黒褐色土であり、As-C軽石を含む軟質土である。３層は、黒色土であり、As-YPを多量に含む。４層は、暗褐色土で、ロームブロックを多く含み、締まりがある。５層は、暗褐色土で、ロームの漸移層であり、As-YPを含む締まりの強い土である。№２・３の１層は現表土であり、２層は客土である。３層は黒褐色土であり、白色鉱物粒を少量含み、締まりがある。４層は、褐色土であり、ローム粒子と白色鉱物粒を少量含み、締まりがある。５層は、褐色土であり、ローム粒とAs-YPを含み、締まりがある。このように３層以下は、№４・５に準じている。指標となるテフラにより、各年代の比定は、次の通りである。確認面Ⅰ(１面)は削平が進んでおり、遺構が僅かに確認された。２・３層が確認面Ⅱ層(２面)に相当しており、遺構が確認された。４・５層が確認面Ⅲ(３面)に相当しており、遺構が確認された。

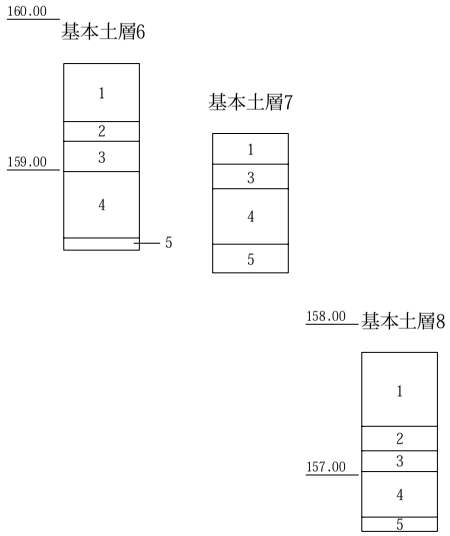
第４図№１は、鴫上Ⅰ遺跡調査区南東隅の土層堆積状況である。整地面は確認されなかった。１層は、黒褐色土で、As-B軽石を含み、砂質味の強い表土である。締まりがあり粘性はない。２層は、採取が行われた黒色土であり、As-C軽石を含み、締まりのある粘質土である。３層は、灰黄褐色土であり、白色軽石、黄色軽石を含み締まりはなく粘性がある。色調は淡い均質土である。４層は、にぶい黄褐色土で、締まりがあり粘性はない。漸移層である。５層は、明黄褐色土で、As-YP軽石をブロックで含み、締まりがあり粘性はない。６層は、黄褐色土で、締まりがなく粘性がある。均質な黄褐色土ロームである。指標となるテフラにより、各年代の比定は、次の通りである。１層が確認面Ⅰ面(１面)、２層が確認面Ⅱ層(２面)、３層が確認面Ⅲ面(３面)に相当すると考える。

註１　箕郷町誌編さん委員会1975『箕郷町誌』によると、昭和40年代の群馬用水事業に伴う区画の整備のために整地がおこなわれ、整地は表土扱いをして大型機械により施工されたとある。また、上記の内容は発掘調査時における地元住人からの聞き取りからもうかがえた。

〔参考文献〕
群馬県史編纂委員会1990『群馬県史』通史編１　原始古代１　群馬県
高崎市史編纂委員会2003『新編　高崎市史』通史編１　原始古代　高崎市
箕郷町誌編さん委員会1975『箕郷町誌』
群馬県農業局農業基盤整備課2005『土地分類基本調査』榛名山　群馬県







基本土層１

1　黒褐色土(10YR3/2)　As-B軽石を含み、砂質味強い表土。締まりややあり、粘性あまりなし。
2　黒色土(10YR2/1)　As-C軽石含む黒色土。締まり粘性ともにややあり。
3　灰黄褐色土(10YR4/2)　白色軽石、黄白軽石若干(１～３％)。色調淡い均質土。締まりあまりなく、粘性ややあり。
4　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　漸移層。締まりややあり、粘性あまりなし。
5　明黄褐色土(10YR7/6)　不均質ブロックでAs-YP軽石をブロックで含む。締まりややあり、粘性あまりなし。
6　黄褐色土(10YR5/6)　均質な黄褐色土ローム。締まりあまりなく、粘性ややあり。

基本土層２・３

1　現地表
2　客土
3　黒褐色土(10YR3/1)　僅かに白色鉱物粒含む。締まりのある土。
4　褐色土(10YR4/4)　ローム粒子と白色鉱物粒を少量含む。締まりのある土。
5　褐色土(10YR4/6)　ローム粒とAs-YP軽石を含む。締まりのある土。

0　1：50　2m

基本土層４・５

1　表土(耕作土)厚く堆積している。
2　黒褐色土(10YR3/1)　径２～５㎜のAs-C軽石を少量含む。軟質土。
3　黒色土(10YR2/1)　径２～５㎜のAs-YP軽石を20％程度含む。
4　暗褐色土(10YR3/4)　ロームブロックを多く含む締まりのある土。
5　暗褐色土(10YR3/4)　ローム漸移層。As-YP軽石が混じる。硬く締まりのある土。

基本土層６・７・８

1　現耕作土
2　黒色土(10YR2/1)　As-C軽石を多く含む。締まりあり。やや粘質。
3　黒褐色土(10YR3/1)　暗褐色(10YR3/3)　混土小中粒の軽石を少量含む。締まりあり。粘性あり。
4　暗褐色土(10YR3/3)　小中粒の軽石を少量含む。締まりあり。粘性あり。
5　黄褐色土(10YR5/6)　小中粒の白色軽石を少量含む。かたく締まる。粘性あり。

第４図　各区の土層堆積状況(高崎市都市計画基本図91、１：2,500　平成24年10月測図使用)

第１表　茅畑遺跡遺構番号変更一覧表

旧遺構番号		新遺構番号　他
２号住居		１号住居
１号掘立柱建物	Ｐ１	392号ピット
１号掘立柱建物	Ｐ２	401号ピット
１号掘立柱建物	Ｐ３	403号ピット
１号掘立柱建物	Ｐ４	467号ピット
１号掘立柱建物	Ｐ５	473号ピット
１号掘立柱建物	Ｐ６	475号ピット
１号掘立柱建物	Ｐ７	383号ピット
１号掘立柱建物	Ｐ８	597号ピット
２号掘立柱建物	Ｐ１	14号ピット
２号掘立柱建物	Ｐ２	444号ピット
２号掘立柱建物	Ｐ３	12号ピット
２号掘立柱建物	Ｐ４	13号ピット
２号掘立柱建物	Ｐ５	446号ピット
２号掘立柱建物	Ｐ６	442号ピット
２号掘立柱建物	Ｐ７	439号ピット
２号掘立柱建物	Ｐ８	438号ピット
２号掘立柱建物	Ｐ９	443号ピット
３号掘立柱建物	Ｐ１	463号ピット
３号掘立柱建物	Ｐ２	471号ピット
３号掘立柱建物	Ｐ３	652号ピット
３号掘立柱建物	Ｐ４	510号ピット
５号掘立柱建物	Ｐ１	517号ピット
５号掘立柱建物	Ｐ２	９号ピット
５号掘立柱建物	Ｐ３	654号ピット
５号掘立柱建物	Ｐ４	653号ピット
５号掘立柱建物	Ｐ５	650号ピット
５号掘立柱建物	Ｐ６	468号ピット
７号掘立柱建物	Ｐ１	703号ピット
７号掘立柱建物	Ｐ２	375号ピット
７号掘立柱建物	Ｐ３	515号ピット
７号掘立柱建物	Ｐ４	301号ピット
８号掘立柱建物	Ｐ１	490号ピット
８号掘立柱建物	Ｐ２	378号ピット
８号掘立柱建物	Ｐ３	408号ピット
８号掘立柱建物	Ｐ４	327号ピット
９号掘立柱建物	Ｐ１	1023号ピット
９号掘立柱建物	Ｐ２	491号ピット
９号掘立柱建物	Ｐ３	368号ピット
９号掘立柱建物	Ｐ４	322号ピット
９号掘立柱建物	Ｐ５	319号ピット
９号掘立柱建物	Ｐ６	488号ピット
９号掘立柱建物	Ｐ７	307号ピット
９号掘立柱建物	Ｐ８	316号ピット
９号掘立柱建物	Ｐ９	324号ピット
９号掘立柱建物	Ｐ10	333号ピット
９号掘立柱建物	Ｐ11	336号ピット
10号掘立柱建物	Ｐ１	331号ピット
10号掘立柱建物	Ｐ２	316号ピット
10号掘立柱建物	Ｐ３	300号ピット
10号掘立柱建物	Ｐ４	485号ピット
10号掘立柱建物	Ｐ５	409号ピット
10号掘立柱建物	Ｐ６	311号ピット
10号掘立柱建物	Ｐ７	328号ピット
12号掘立柱建物	Ｐ１	16号土坑
12号掘立柱建物	Ｐ２	815号ピット
12号掘立柱建物	Ｐ３	813号ピット
12号掘立柱建物	Ｐ４	809号ピット
12号掘立柱建物	Ｐ５	801号ピット

旧遺構番号		新遺構番号　他
12号掘立柱建物	Ｐ６	804号ピット
12号掘立柱建物	Ｐ７	830号ピット
13号掘立柱建物	Ｐ１	835号ピット
13号掘立柱建物	Ｐ２	837号ピット
13号掘立柱建物	Ｐ３	827号ピット
13号掘立柱建物	Ｐ４	819号ピット
13号掘立柱建物	Ｐ５	816号ピット
13号掘立柱建物	Ｐ６	817号ピット
13号掘立柱建物	Ｐ７	807号ピット
13号掘立柱建物	Ｐ８	806号ピット
13号掘立柱建物	Ｐ９	831号ピット
13号掘立柱建物	Ｐ10	832号ピット
14号掘立柱建物	Ｐ１	821号ピット
14号掘立柱建物	Ｐ２	823号ピット
14号掘立柱建物	Ｐ３	828号ピット
14号掘立柱建物	Ｐ４	825号ピット
16号掘立柱建物	Ｐ１	770号ピット
16号掘立柱建物	Ｐ２	767号ピット
16号掘立柱建物	Ｐ３	765号ピット
16号掘立柱建物	Ｐ４	779号ピット
16号掘立柱建物	Ｐ５	787号ピット
16号掘立柱建物	Ｐ６	789号ピット
16号掘立柱建物	Ｐ７	791号ピット
16号掘立柱建物	Ｐ８	790号ピット
16号掘立柱建物	Ｐ９	784号ピット
16号掘立柱建物	Ｐ10	782号ピット
17号掘立柱建物	Ｐ５	760号ピット
17号掘立柱建物	Ｐ６	766号ピット
19号掘立柱建物	Ｐ１	877号ピット
19号掘立柱建物	Ｐ２	875号ピット
19号掘立柱建物	Ｐ３	874号ピット
19号掘立柱建物	Ｐ４	873号ピット
19号掘立柱建物	Ｐ５	886号ピット
19号掘立柱建物	Ｐ６	881号ピット
19号掘立柱建物	Ｐ７	880号ピット
19号掘立柱建物	Ｐ８	879号ピット
19号掘立柱建物	Ｐ９	882号ピット
20号掘立柱建物	Ｐ１	903号ピット
20号掘立柱建物	Ｐ２	906号ピット
20号掘立柱建物	Ｐ３	180号ピット
20号掘立柱建物	Ｐ４	177号ピット
22号掘立柱建物	Ｐ１	168号ピット
22号掘立柱建物	Ｐ２	159号ピット
22号掘立柱建物	Ｐ３	238号ピット
22号掘立柱建物	Ｐ４	134号ピット
22号掘立柱建物	Ｐ５	149号ピット
22号掘立柱建物	Ｐ６	151号ピット
22号掘立柱建物	Ｐ７	154号ピット
22号掘立柱建物	Ｐ８	160号ピット
23号掘立柱建物	Ｐ１	154号ピット
23号掘立柱建物	Ｐ２	141号ピット
23号掘立柱建物	Ｐ３	140号ピット
23号掘立柱建物	Ｐ４	136号ピット
23号掘立柱建物	Ｐ５	149号ピット
23号掘立柱建物	Ｐ６	1067号ピット
23号掘立柱建物	Ｐ７	151号ピット
24号掘立柱建物	Ｐ１	243号ピット
24号掘立柱建物	Ｐ２	246号ピット
24号掘立柱建物	Ｐ３	248号ピット

旧遺構番号		新遺構番号　他
24号掘立柱建物	Ｐ４	250号ピット
24号掘立柱建物	Ｐ５	252号ピット
24号掘立柱建物	Ｐ６	254号ピット
24号掘立柱建物	Ｐ７	98号ピット
24号掘立柱建物	Ｐ８	961号ピット
24号掘立柱建物	Ｐ９	110号ピット
24号掘立柱建物	Ｐ10	119号ピット
24号掘立柱建物	Ｐ11	124号ピット
24号掘立柱建物	Ｐ12	242号ピット
26号掘立柱建物	Ｐ１	377号ピット
26号掘立柱建物	Ｐ２	398号ピット
26号掘立柱建物	Ｐ３	447号ピット
26号掘立柱建物	Ｐ４	1125号ピット
26号掘立柱建物	Ｐ５	382号ピット
31号掘立柱建物	Ｐ１	291号ピット
31号掘立柱建物	Ｐ２	1072号ピット
31号掘立柱建物	Ｐ３	483号ピット
31号掘立柱建物	Ｐ４	413号ピット
31号掘立柱建物	Ｐ５	31号ピット
31号掘立柱建物	Ｐ６	32号ピット
32号掘立柱建物	Ｐ１	411号ピット
32号掘立柱建物	Ｐ２	30号ピット
32号掘立柱建物	Ｐ３	27号ピット
32号掘立柱建物	Ｐ４	1082号ピット
32号掘立柱建物	Ｐ５	1080号ピット
33号掘立柱建物	Ｐ１	22号ピット
33号掘立柱建物	Ｐ２	19号ピット
33号掘立柱建物	Ｐ３	428号ピット
33号掘立柱建物	Ｐ４	431号ピット
33号掘立柱建物	Ｐ５	418号ピット
35号掘立柱建物	Ｐ１	1142号ピット
35号掘立柱建物	Ｐ２	355号ピット
35号掘立柱建物	Ｐ３	356号ピット
35号掘立柱建物	Ｐ４	1140号ピット
35号掘立柱建物	Ｐ５	366号ピット
35号掘立柱建物	Ｐ６	362号ピット
35号掘立柱建物	Ｐ７	364号ピット
36号掘立柱建物	Ｐ１	593号ピット
36号掘立柱建物	Ｐ２	594号ピット
36号掘立柱建物	Ｐ３	600号ピット
36号掘立柱建物	Ｐ４	602号ピット
36号掘立柱建物	Ｐ５	601号ピット
36号掘立柱建物	Ｐ６	599号ピット
36号掘立柱建物	Ｐ７	583号ピット
36号掘立柱建物	Ｐ８	588号ピット
36号掘立柱建物	Ｐ９	1053号ピット
37号掘立柱建物	Ｐ１	213号ピット
37号掘立柱建物	Ｐ２	216号ピット
37号掘立柱建物	Ｐ３	169号ピット
37号掘立柱建物	Ｐ４	170号ピット
37号掘立柱建物	Ｐ５	171号ピット
37号掘立柱建物	Ｐ６	173号ピット
37号掘立柱建物	Ｐ７	916号ピット
37号掘立柱建物	Ｐ８	199号ピット
38号掘立柱建物	Ｐ１	612号ピット
38号掘立柱建物	Ｐ２	610号ピット
38号掘立柱建物	Ｐ３	619号ピット
38号掘立柱建物	Ｐ４	1178号ピット
38号掘立柱建物	Ｐ５	1146号ピット

旧遺構番号		新遺構番号　他
39号掘立柱建物	Ｐ１	1161号ピット
39号掘立柱建物	Ｐ２	658号ピット
39号掘立柱建物	Ｐ３	660号ピット
39号掘立柱建物	Ｐ４	1157号ピット
39号掘立柱建物	Ｐ５	1176号ピット
39号掘立柱建物	Ｐ６	642号ピット
39号掘立柱建物	Ｐ７	1160号ピット
40号掘立柱建物	Ｐ１	691号ピット
40号掘立柱建物	Ｐ２	696号ピット
40号掘立柱建物	Ｐ３	695号ピット
40号掘立柱建物	Ｐ４	694号ピット
40号掘立柱建物	Ｐ５	686号ピット
40号掘立柱建物	Ｐ６	682号ピット
40号掘立柱建物	Ｐ７	689号ピット
41号掘立柱建物	Ｐ１	707号ピット
41号掘立柱建物	Ｐ２	709号ピット
41号掘立柱建物	Ｐ３	1200号ピット
41号掘立柱建物	Ｐ４	856号ピット
41号掘立柱建物	Ｐ５	722号ピット
41号掘立柱建物	Ｐ６	710号ピット
41号掘立柱建物	Ｐ７	700号ピット
41号掘立柱建物	Ｐ８	698号ピット
41号掘立柱建物	Ｐ９	706号ピット
42号掘立柱建物	Ｐ１	678号ピット
42号掘立柱建物	Ｐ２	1196号ピット
42号掘立柱建物	Ｐ３	795号ピット
42号掘立柱建物	Ｐ４	1194号ピット
42号掘立柱建物	Ｐ５	1155号ピット
42号掘立柱建物	Ｐ６	1157号ピット
42号掘立柱建物	Ｐ７	676号ピット
44号掘立柱建物	Ｐ９	584号ピット
44号掘立柱建物	Ｐ10	1049号ピット
45号掘立柱建物	Ｐ１	1214号ピット
45号掘立柱建物	Ｐ２	926号ピット
45号掘立柱建物	Ｐ３	922号ピット
45号掘立柱建物	Ｐ４	1208号ピット
45号掘立柱建物	Ｐ５	920号ピット
45号掘立柱建物	Ｐ６	212号ピット
45号掘立柱建物	Ｐ７	213号ピット
45号掘立柱建物	Ｐ８	900号ピット
45号掘立柱建物	Ｐ９	208号ピット
45号掘立柱建物	Ｐ10	928号ピット
45号掘立柱建物	Ｐ11	896号ピット
46号掘立柱建物	Ｐ１	1215号ピット
46号掘立柱建物	Ｐ２	218号ピット
46号掘立柱建物	Ｐ３	219号ピット
46号掘立柱建物	Ｐ４	937号ピット
46号掘立柱建物	Ｐ５	223号ピット
46号掘立柱建物	Ｐ６	940号ピット
46号掘立柱建物	Ｐ７	941号ピット
46号掘立柱建物	Ｐ８	229号ピット
46号掘立柱建物	Ｐ９	159号ピット
46号掘立柱建物	Ｐ10	157号ピット
46号掘立柱建物	Ｐ11	160号ピット
49号掘立柱建物	Ｐ１	665号ピット
49号掘立柱建物	Ｐ２	1195号ピット
49号掘立柱建物	Ｐ８	1156号ピット
49号掘立柱建物	Ｐ９	1192号ピット
50号掘立柱建物	Ｐ１	226号ピット

旧遺構番号		新遺構番号　他
50号掘立柱建物	Ｐ２	942号ピット
50号掘立柱建物	Ｐ３	945号ピット
50号掘立柱建物	Ｐ４	244号ピット
50号掘立柱建物	Ｐ５	242号ピット
50号掘立柱建物	Ｐ６	127号ピット
50号掘立柱建物	Ｐ７	1166号ピット
50号掘立柱建物	Ｐ８	152号ピット
50号掘立柱建物	Ｐ９	157号ピット
51号掘立柱建物	Ｐ１	287号ピット
51号掘立柱建物	Ｐ２	289号ピット
51号掘立柱建物	Ｐ３	1220号ピット
51号掘立柱建物	Ｐ４	1087号ピット
51号掘立柱建物	Ｐ５	994号ピット
51号掘立柱建物	Ｐ６	298号ピット
51号掘立柱建物	Ｐ７	989号ピット
51号掘立柱建物	Ｐ８	292号ピット
51号掘立柱建物	Ｐ９	453号ピット
51号掘立柱建物	Ｐ10	1221号ピット
52号掘立柱建物	Ｐ１	1223号ピット
52号掘立柱建物	Ｐ２	1224号ピット
52号掘立柱建物	Ｐ３	1225号ピット
52号掘立柱建物	Ｐ４	265号ピット
52号掘立柱建物	Ｐ５	1222号ピット
52号掘立柱建物	Ｐ６	75号ピット
52号掘立柱建物	Ｐ７	73号ピット

第２章　遺跡の立地と歴史的環境

１　遺跡の位置と地形

茅畑遺跡・鴫上Ⅰ遺跡は、群馬県の中央西部にある高崎市の北部を占める箕郷町に所在する。高崎市は、北は北群馬郡榛東村や吾妻郡東吾妻町、北東は前橋市、西は吾妻郡長野原町や長野県、南は安中市・富岡市・甘楽郡甘楽町・藤岡市と接している。茅畑遺跡・鴫上Ⅰ遺跡が所在する高崎市箕郷町は、本県西部中央を占める榛名山南麓に位置し、行政区画は榛名山頂近くから烏川やその支流が作り出した平野まで広がる。調査区は、北西に榛名山の雄大な姿を頂き、北東には赤城山を望むことができる。東は井野川を境に低台地の広がる旧群馬町と接している。西方は、榛名町に接しており、谷を挟んで起伏に富んだ秋間丘陵が広がり背景には妙義山が見られる。南には、平野が広がり県西部の中心都市高崎市の市街地を望むことができ、南西部には岩野谷丘陵の向こうに群馬県南部の山並み及び秩父山地を望む。

当地域の農耕地は、標高約100 ～ 900mにわたり、多くは榛名山の山麓傾斜地に分布する。大部分は畑地利用であり、水田は河川に沿った狭い地域に分布する。畑地利用の多くは、特産であるウメを中心にモモやナシが栽培されている。また、中山間の夏秋野菜や特産のコンニャク、畜産が多いことにより飼料作物が作付されている。水田は、井野川、烏川の支流沿い及び高崎市北部の平坦地に分布する。地域振興プロジェクトによる果樹団地の造成や榛名山麓地域広域農道の建設も進められている。また、近隣では、住宅及び商業施設の開発が進み急速に発展している地域でもある。次々に開通する北陸新幹線及び幹線道路により、当該地域の活性化が進んでいる。

本遺跡周辺の地形は、榛名白川と烏川を境に特徴が異なる。本遺跡がある丘陵地帯は火山地の山麓緩斜地であり、榛名山火山噴出物、特に火山灰や火山性礫を基盤とする起伏に富んだ丘陵が広がる。丘陵は、水流により浸食され、谷地平野が複数形成されている。谷地平野は、長いもので約３㎞にも及び、幅100 ～ 200m程、台地との比高差は30 ～ 40m程である。そもそも榛名山は、溶岩の露出部分では、樹枝状の谷がきざまれ複雑な水系を造っている。山腹では、火砕流堆積物地域であることを反映して放射状に直線的な谷がみられる。北側斜面は吾妻川に、東側斜面は利根川に流入する。西側及び南側斜面は烏川水系であり顕著なものが榛名白川である。東面、南面は傾斜が緩やかなこと、主流までの距離が長いこと、堆積物の厚いことを反映して長く直線状に谷がきざまれる。この地域には、灌漑用に鳴沢湖のような貯水池及び用水路が造られている。

さらに、本遺跡の地形を微細に観察すると、茅畑遺跡は東の丘陵、鴫上Ⅰ遺跡は西の丘陵とそれぞれ個々の丘陵上に位置しており、東西近距離に位置する二つの遺跡の間には、樹枝状の谷の一部が緩やかに入り込んでいるのが見てとれる。経年においてこれらの微地形は、谷を隔てて集落の形成に影響を及ぼしていると考えてよい。榛名白川の東は、二ツ岳軽石流による火砕流台地及び箕郷礫層面による白川軽石流が広がり、その先に水田地帯が続いている。基盤には、県中央部に広がる前橋台地がある。前橋台地は利根川が赤城山と榛名山の山麓の間から関東平野に流れ出すところに広がる緩傾斜の台地である。前橋台地は、前橋市から伊勢崎市にかけての広瀬川低地帯（旧利根川流路）と高崎市西部の烏川にかけて広がっている。前橋泥流が発生した２万４千年前以降、利根川をはじめとするいくつもの河川が流れ、小規模ながら氾濫原が各所に形成されている。前橋台地の中央を流下する利根川であるが、当時は、榛名白川を合わせながら井野川低地帯を流れていたとされる。白川軽石流は、６世紀初頭と中頃、前橋台地の上に榛名山二ツ岳の二度にわたる噴火による土石流によって、さらに形成が進んだものである。北陸新幹線の調査では、土石流の下に古墳時代の地表面が確認されている。土石流を取り除くと、井野川低地帯があることがわかる。

烏川の南西は、氾濫原が広がり室田火砕流群による火砕流台地が続き、河岸段丘を経て岩野谷丘陵へと至る。また、山麓急斜面では、谷底平野が形成されている。

茅畑遺跡・鴫上Ⅰ遺跡は、箕郷町の南西、平野と丘陵

● 茅畑・鴫上Ⅰ遺跡

丘陵地一般斜面（15°～30°）
丘陵地山麓緩斜面（15°＞）
火山地急斜面（30°＜）
火山地一般急斜面（15°＞）
火山地山麓緩斜面（15°＞）
火山地山麓緩斜面・山腹緩斜面（15°＞）
上位段丘群
最下位段丘群（完新世段丘群）
段丘崖
火砕流台地（二ッ岳軽石流１・２）
火砕流台地（室田火砕流群）
谷底平野
河原
氾濫原
扇状地・沖積錐面
箕郷礫層面
相馬が原礫層面
陣場岩屑なだれ面
土石流面
人口改変地

第５図　周辺地形分類図（群馬県農業局農業基盤整備課2005『土地分類基本調査』 榛名山　群馬県　付図を改変使用）

とが接する台地上にある。その境界線が榛名白川と烏川による氾濫原である。扇状地の形成以後も、幾度となく変流を繰り返している。また、榛名白川を流下したHr-FPの火砕流堆積物の一部は、井野川流域に流れ込んでいる。井野川中流部に位置する下芝谷ツ古墳では、洪水に変化した火砕流が墳丘の一部を破壊し、Hr-FAの洪水堆積物で埋没していた周堀を完全に埋積させている。付近には同時期の堆積物が厚く堆積しているが、火砕流が流走中に水を取り込んで泥流や洪水に変化したものであろう。火砕流に伴う洪水の変流が顕著な地域でもあったようである。

〔参考文献〕
群馬県史編纂委員会1990『群馬県史』通史編１　原始 古代１　群馬県
群馬県史編纂委員会1990『群馬県史』通史編８　近代現代２　群馬県
高崎市史編纂委員会2003『新編　高崎市史』通史編１　原始古代　高崎市
箕郷町誌編纂委員会1975『箕郷町誌』
群馬県農業局農業基盤整備課2005『土地分類基本調査』榛名山　群馬県

２　周辺遺跡

本遺跡のある高崎市箕郷町は、従来から、北陸新幹線や幹線道路等の開発に伴う発掘調査が進み、様相が解明されつつある。ここでは、隣接地域の状況も踏まえてその概要を述べたいと思う。

榛名山は、利根川を境に対峙する赤城山と共に群馬県の名峰といわれている。平野から望む雄姿は美しく、流麗な裾野に導かれた山麓では、水流とともに平野と同化して、肥沃な土壌と共に恵まれた後背地を形成してきた。榛名山は、古代から信仰の対象となり万葉集にも詠まれている。榛名山の裾野に上野国分寺や上野国府が置かれたとされているのは、自然に恵まれた土地であるだけでなく、信仰の対象でもあったからだろう。

【旧石器・縄文時代】

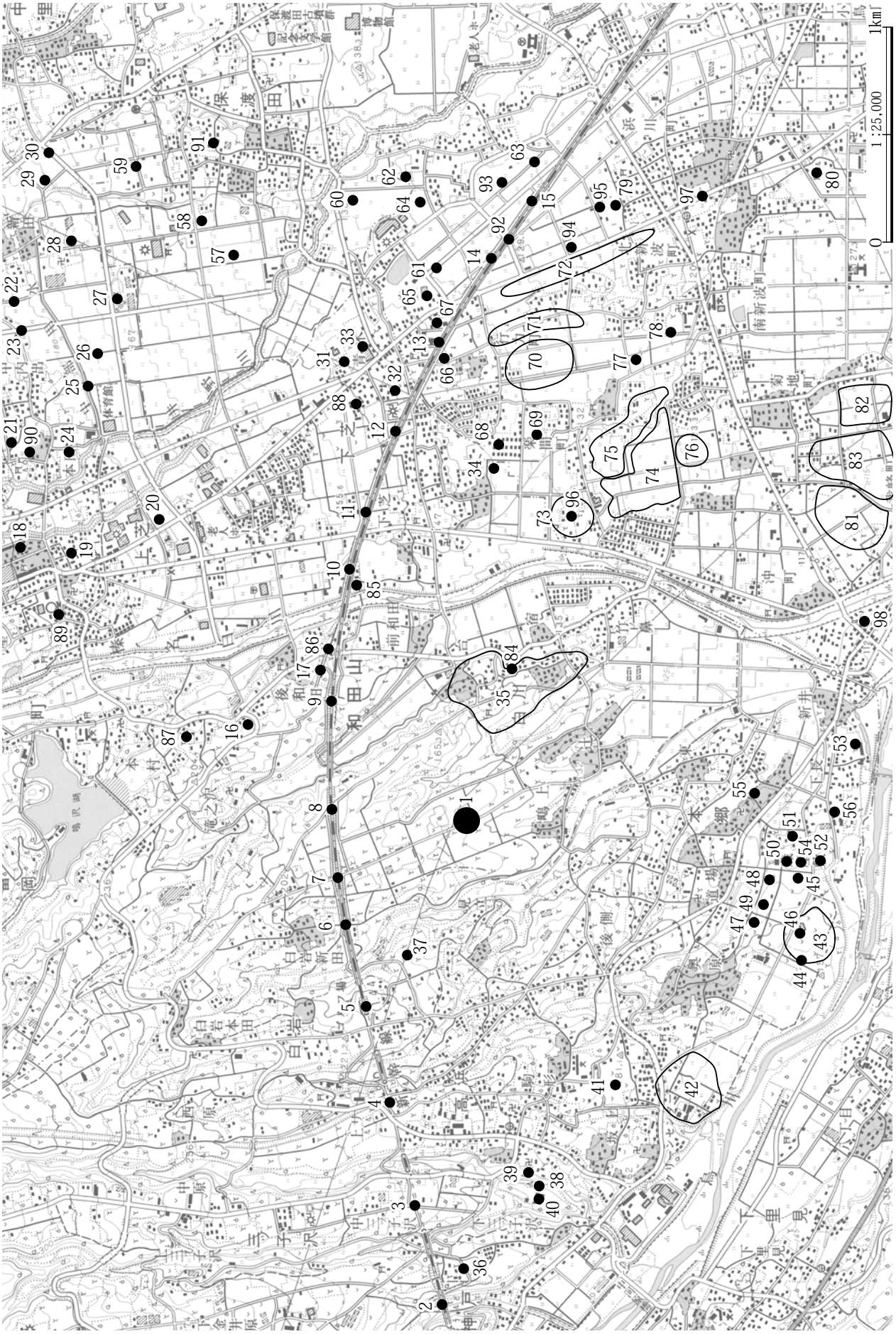
旧石器時代から縄文時代にかけては、丘陵地帯における台地や尾根で人々の活動が盛んであった。北陸新幹線事業で調査された遺跡では、榛名町の三ツ子沢中遺跡（２）、白岩民部遺跡（５）、箕郷町白川傘松遺跡（８）、和田山天神前遺跡（９）がある。これらはAs-BP、As-MP、ATなどのテフラが確認されている。出土した石器は黒色安山岩を用いている。これは、県内の事例に当てはまるものである。特に、和田山天神前遺跡は、石材として主に黒曜石を用いており、県内でも貴重な事例となっている。その他に、箕郷町生原・善龍寺前遺跡(28)、海行遺跡(29・30)、高崎若田原遺跡、大島原遺跡、安中市古城遺跡などが報告されている。

【弥生時代】

弥生時代になると、水田経営に適した水源地の縁辺、中小河川流域の低湿地及びその周辺に活動の場を求め進出していった。特にこの地域では、中期以降になると従来の弥生文化では占地対象地域として選定されなかった平野部縁辺の河岸段丘や自然堤防の微高地、低台地が対象となった。いずれも広大な後背湿地を有するものであり、生産形態や生活条件の変容がみられる。井野川流域には、中期から後期までの伝統的な集落が生まれた。高崎市日高遺跡は、洪水層下とAs-C下の二層にわたって水田が確認され、湧水を起源とする谷地水田であり、かけ流し式の水利である。水田は小規模なもので、地形に応じた不定形なものである。また、本遺跡では、水田耕作地周辺の台地上に集落や方形周溝墓が確認されている。弥生時代の居住域、墓域、生産域がまとまっており、水田農耕を根幹とした弥生時代の社会構造を解明する手がかりとなった。また、弥生時代の特徴的な集落形成である環濠集落の痕跡が、自然堤防状の微高地に占地する浜尻遺跡で確認されている。その他に、高崎市保渡田荒神前遺跡(59)、引間遺跡、八幡二子塚遺跡などが報告されている。

【古墳時代】

古墳時代になると、井野川中流に面した南西側地域に有力な首長勢力がその支配権を確立し、それを背景にして周辺地域に比べて大規模の前方後円墳を造営することになったと思われる。まず、井野川流域では、４世紀から６世紀にかけて集落や水田及び畠が形作られている。上越新幹線建設に伴って調査された三ツ寺Ⅰ遺跡からは、５世紀後半、古墳時代の豪族の居館と考えられる遺構が発見された。周囲を幅40mの堀に囲まれ、四方を石垣で守られていた。正殿が中央に位置し、祭祀場と思われる石敷遺構や井戸が配置されている。この地域における首長勢力の様相がみてとれる。近隣には、100m級の前方後円墳３基をもつ井出二子山・保渡田八幡塚・保渡田薬師塚古墳を中心とした保渡田古墳群があり、居館の墳墓であると推定されている。北陸新幹線事業に伴う発掘調査により、下芝五反田遺跡(12)など、この時代の耕作地や集落の様相も明らかにされており、古墳、居館、



第６図　周辺遺跡分布図(国土地理院発行、２万５千分の１地形図「下室田」平成15年２月１日発行)

第２表　周辺遺跡一覧表

	遺跡名	プレ	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	文献
1	茅畑遺跡・鴫上Ｉ遺跡									本遺跡
2	三ッ子沢中遺跡 (事業団)	○	○		○		○			(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2000『三ッ子沢中遺跡』
3	高浜向原遺跡		○		○		○			(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2000『高浜向原遺跡・神戸宮山・神戸岩下』
4	高浜広神遺跡		○		○	○	○	○	○	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1999『高浜広神遺跡』
5	白岩民部遺跡	○					○			(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2000『白川笹塚遺跡・白岩浦久保遺跡・白岩民部遺跡』
6	白岩浦久保遺跡						○			(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2000『白川笹塚遺跡・白岩浦久保遺跡・白岩民部遺跡』
7	白川笹塚遺跡		○		○	○	○			(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2000『白川笹塚遺跡・白岩浦久保遺跡・白岩民部遺跡』
8	白川傘松遺跡	○	○							(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1995『白川傘松遺跡』
9	和田山天神前遺跡	○	○		○		○	○	○	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1999『和田山天神前遺跡』
10	下芝上田屋遺跡					○	○	○		(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1998『下芝天神遺跡・下芝上田屋遺跡』
11	下芝天神遺跡				○		○			(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2000『下芝天神遺跡・下芝上田屋遺跡』
12	下芝五反田遺跡				○	○	○	○		(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1998・1999『下芝五反田遺跡』
13	行力榛名社遺跡				○	○	○	○	○	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1994『行力榛名社遺跡』
14	浜川長町遺跡				○	○	○			(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1998『浜川遺跡群』
15	浜川高田遺跡				○		○	○	○	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1998『浜川遺跡群』
16	富岡竹ノ内・和田山 寺久保遺跡				○			○	○	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2006『富岡竹ノ内・和田山寺久保遺跡』
17	和田山古墳群				○					高崎市教育委員会2008『和田山古墳群』
18	上芝古墳				○					箕郷町誌編纂委員会1975『箕郷町誌』
19	四ツ谷古墳				○					箕郷町誌編纂委員会1975『箕郷町誌』
20	上芝・西金沢遺跡						○			高崎市教育委員会2009『上芝・西金沢遺跡』
21	生原・天神前遺跡				○		○			高崎市教育委員会2010『生原・天神前遺跡』
22	中新田遺跡		○			○	○			箕郷町教育委員会1988『海行Ａ・Ｂ遺跡』
23	生原諏訪遺跡						○			箕郷町教育委員会1988『海行Ａ・Ｂ遺跡』
24	生原薬師遺跡		○		○	○	○			箕郷町教育委員会1988『海行Ａ・Ｂ遺跡』
25	生原堀ノ内遺跡				○	○	○			箕郷町教育委員会1988『海行Ａ・Ｂ遺跡』
26	生原佐藤遺跡				○	○	○			箕郷町教育委員会1988『海行Ａ・Ｂ遺跡』
27	生原飯森遺跡		○		○	○	○			箕郷町教育委員会1988『海行Ａ・Ｂ遺跡』
28	生原・善龍寺前遺跡		○		○		○			高崎市教育委員会1986『生原・善龍寺前遺跡』
29	海行Ａ		○		○		○			箕郷町教育委員会1988『海行Ａ・Ｂ遺跡』
30	海行Ｂ		○		○	○	○			箕郷町教育委員会1988『海行Ａ・Ｂ遺跡』
31	下芝五反田遺跡				○		○	○		高崎市教育委員会2008『下芝五反田遺跡・下芝萬行遺跡』
32	下芝萬行遺跡				○		○			高崎市教育委員会2008『下芝五反田遺跡・下芝萬行遺跡』
33	下芝谷ツ古墳				○					『日本考古学年報39』1986年度版　田口一郎
34	下芝・原遺跡						○	○		箕郷町教育委員会1983『下芝・原遺跡』
35	台遺跡		○	○	○		○			群馬県教育委員会文化財情報システムＷｅｂ版
36	三ッ子沢中遺跡 (榛名町)				○		○			榛名町誌編纂委員会2010『榛名町誌資料編１原始・古代』
37	子安遺跡		○							榛名町誌編纂委員会2010『榛名町誌資料編１原始・古代』
38	中尾根遺跡		○		○		○	○		榛名町誌編纂委員会2010『榛名町誌資料編１原始・古代』
39	欠ノ上遺跡						○			榛名町誌編纂委員会2010『榛名町誌資料編１原始・古代』
40	伊勢殿山古墳				○					榛名町誌編纂委員会2010『榛名町誌資料編１原始・古代』
41	日輪遺跡		○		○	○				榛名町誌編纂委員会2010『榛名町誌資料編１原始・古代』
42	奥原古墳群				○					(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1983『奥原古墳群』
43	本郷的場古墳群				○					(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1990『本郷的場古墳群』
44	本郷稲荷塚古墳 (的場Ｅ古墳)				○					榛名町誌編纂委員会2010『榛名町誌資料編１原始・古代』
45	しどめ塚古墳				○					榛名町誌編纂委員会2010『榛名町誌資料編１原始・古代』
46	本郷大塚古墳				○					榛名町誌編纂委員会2010『榛名町誌資料編１原始・古代』
47	道場遺跡				○	○	○			榛名町教育委員会1986『道場遺跡』

	遺跡名	プレ	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	文献
48	道場Ⅱ遺跡			○	○					榛名町誌編纂委員会2010『榛名町誌資料編１原始・古代』
49	道場Ⅲ遺跡				○	○	○			榛名町誌編纂委員会2010『榛名町誌資料編１原始・古代』
50	蔵屋敷遺跡			○	○		○			榛名町誌編纂委員会2010『榛名町誌資料編１原始・古代』
51	蔵屋敷Ⅱ遺跡			○	○		○			榛名町誌編纂委員会2010『榛名町誌資料編１原始・古代』
52	供養塚遺跡				○		○			榛名町誌編纂委員会2010『榛名町誌資料編１原始・古代』
53	稲荷森遺跡			○	○		○			榛名町誌編纂委員会2010『榛名町誌資料編１原始・古代』
54	小臼塚古墳				○					榛名町誌編纂委員会2010『榛名町誌資料編１原始・古代』
55	権現稜古墳				○					榛名町誌編纂委員会2010『榛名町誌資料編１原始・古代』
56	寺内遺跡			○	○		○			榛名町誌編纂委員会2010『榛名町誌資料編１原始・古代』
57	保渡田Ⅲ遺跡				○		○			群馬町教育委員会1983『保渡田Ⅲ遺跡調査概報』
58	保渡田Ⅳ遺跡						○			群馬町教育委員会1984『保渡田Ⅳ遺跡調査概報』
59	保渡田荒神前遺跡			○	○	○	○			群馬町教育委員会1988『保渡田荒神前遺跡・皿掛遺跡』
60	保渡田皿掛遺跡						○			群馬町教育委員会1988『保渡田荒神前遺跡・皿掛遺跡』
61	道場遺跡群長町・踏分遺跡						○			高崎市教育委員会1989『道場遺跡群』
62	道場遺跡群谷津・道場遺跡				○		○	○		高崎市教育委員会1989『道場遺跡群』
63	道場遺跡群高田・館遺跡						○	○		高崎市教育委員会1989『道場遺跡群』
64	浜川北(東区)遺跡						○	○		高崎市教育委員会1989『浜川北遺跡』
65	浜川北(西区)遺跡						○		○	高崎市教育委員会1989『浜川北遺跡』
66	一丁田・榛名社西遺跡						○			高崎市教育委員会1988『長野北部遺跡群　一丁田・榛名社西遺跡』
67	行力遺跡群榛名社遺跡						○	○		高崎市教育委員会1990『行力遺跡群　榛名社遺跡』
68	舞台(Ⅱ)・清水(Ⅱ)遺跡						○			高崎市教育委員会1984『舞台(Ⅱ)・清水(Ⅱ)遺跡』
69	中屋敷(Ⅰ)						○			高崎市教育委員会1985『長野北部遺跡群　中屋敷(Ⅰ)・舞台(Ⅲ)遺跡』
70	中屋敷西(Ⅰ)・殿田・清水(Ⅰ)・舞台(Ⅰ)遺跡						○	○		高崎市教育委員会1983『長野北部遺跡群　中屋敷西(Ⅰ)・殿田・清水(Ⅰ)・舞台(Ⅰ)遺跡』
71	江原(Ⅰ)・中屋敷西(Ⅱ)・上屋敷(Ⅰ)・舞台(Ⅲ)遺跡						○			高崎市教育委員会1984『長野北部遺跡群　江原(Ⅰ)・中屋敷西(Ⅱ)・上屋敷(Ⅰ)遺跡』
72	六反田・中屋敷(Ⅱ)遺跡						○			高崎市教育委員会1986『長野北部遺跡群　六反田・中屋敷(Ⅱ)遺跡』
73	水口替戸・石田遺跡						○			高崎市教育委員会1987『長野北部遺跡群　水口替戸・石田遺跡』
74	上野前(Ⅱ)・大明神(Ⅱ)・五反田(Ⅰ)						○			高崎市教育委員会1985『菊池遺跡群(Ⅴ)上野前(Ⅱ)・大明神(Ⅱ)・五反田(Ⅰ)』
75	石神・五反田(Ⅱ)						○			高崎市教育委員会1986『菊池遺跡群(Ⅵ)石神・五反田(Ⅱ)』
76	上野前(Ⅰ)・大明神(Ⅰ)						○	○		高崎市教育委員会1984『菊池遺跡群(Ⅳ)上野前(Ⅰ)・大明神(Ⅰ)』
77	北新波遺跡						○			高崎市教育委員会1982『北新波遺跡』
78	北新波砦							○		高崎市教育委員会1985・1986『北新波の砦址』古城(Ⅱ・Ⅲ)
79	矢島遺跡						○	○		高崎市教育委員会1979『矢島遺跡・御布呂遺跡』
80	上小塙稲荷山古墳				○					高崎市史編纂委員会1999『新編高崎市史資料編１原始古代Ⅰ』
81	当貝戸・棗原遺跡						○			高崎市教育委員会1983『菊池遺跡群(Ⅲ)当貝戸・棗原遺跡』
82	菊池遺跡群(Ⅰ)						○			高崎市教育委員会1981『菊池遺跡群(Ⅰ)』
83	菊池遺跡群(Ⅱ)						○			高崎市教育委員会1982『菊池遺跡群(Ⅱ)』
84	白川の砦							○		群馬県教育委員会1988『群馬県の中世城館跡』
85	青柳屋敷							○		群馬県教育委員会1988『群馬県の中世城館跡』
86	和田山館							○		群馬県教育委員会1988『群馬県の中世城館跡』
87	富岡の砦							○		群馬県教育委員会1988『群馬県の中世城館跡』
88	下芝の砦							○		群馬県教育委員会1988『群馬県の中世城館跡』
89	下田屋敷(上芝の砦)							○		群馬県教育委員会1988『群馬県の中世城館跡』
90	生原の内出　生原の砦？							○		群馬県教育委員会1988『群馬県の中世城館跡』
91	保渡田城							○		群馬県教育委員会1988『群馬県の中世城館跡』
92	与平屋敷							○		群馬県教育委員会1988『群馬県の中世城館跡』
93	高田屋敷							○		群馬県教育委員会1988『群馬県の中世城館跡』
94	長町屋敷							○		群馬県教育委員会1988『群馬県の中世城館跡』
95	矢島の砦(矢島城)							○		群馬県教育委員会1988『群馬県の中世城館跡』
96	井野屋敷							○		群馬県教育委員会1988『群馬県の中世城館跡』
97	北爪の砦(北城)							○		群馬県教育委員会1988『群馬県の中世城館跡』
98	住吉城							○		群馬県教育委員会1988『群馬県の中世城館跡』

集落、生産域を総合的にとらえた研究も進んでいる。その他に、下芝天神遺跡(11)、行力榛名社遺跡(13)、浜川遺跡群(14・15)などが報告されている。

【奈良・平安時代】

古代には、東山道の国府ルートが周辺地域を東西に通過していた。

国府や国分寺と周辺地域との結びつきに寄与し、開発が進み群馬郡にまとまっていったものと思われる。御布呂遺跡、芦田貝戸遺跡、井野川近くの熊野堂遺跡で、住居址に関わる側溝や盛土が確認されている。また、八幡中原遺跡、豊岡後原遺跡、正観堂遺跡など、安定した台地及び微高地に位置する集落がある一方、中尾遺跡、山名遺跡など、律令体制になる時期に出現する新興集落もある。地方社会における郡郷制などの組織改編より一郷50戸と定められた社会制度の変化が影響していると考えられる。平安時代になると、各地で住居跡が確認され集落の数が増えてくる。６世紀の榛名山二ツ岳の噴火で土石流に埋まった浜川地区でも、行力春名社遺跡(13)、館遺跡､舞台遺跡など泥流の上で住居跡が確認されている。こうした集落の広がりは、律令の土地制度が崩れた後、新たに水田や畠の再開発が行われた様相を示している。その他、榛名町道場遺跡(47 ～ 49)、高崎市剣崎・稲荷塚遺跡などが報告されている。

【中世】

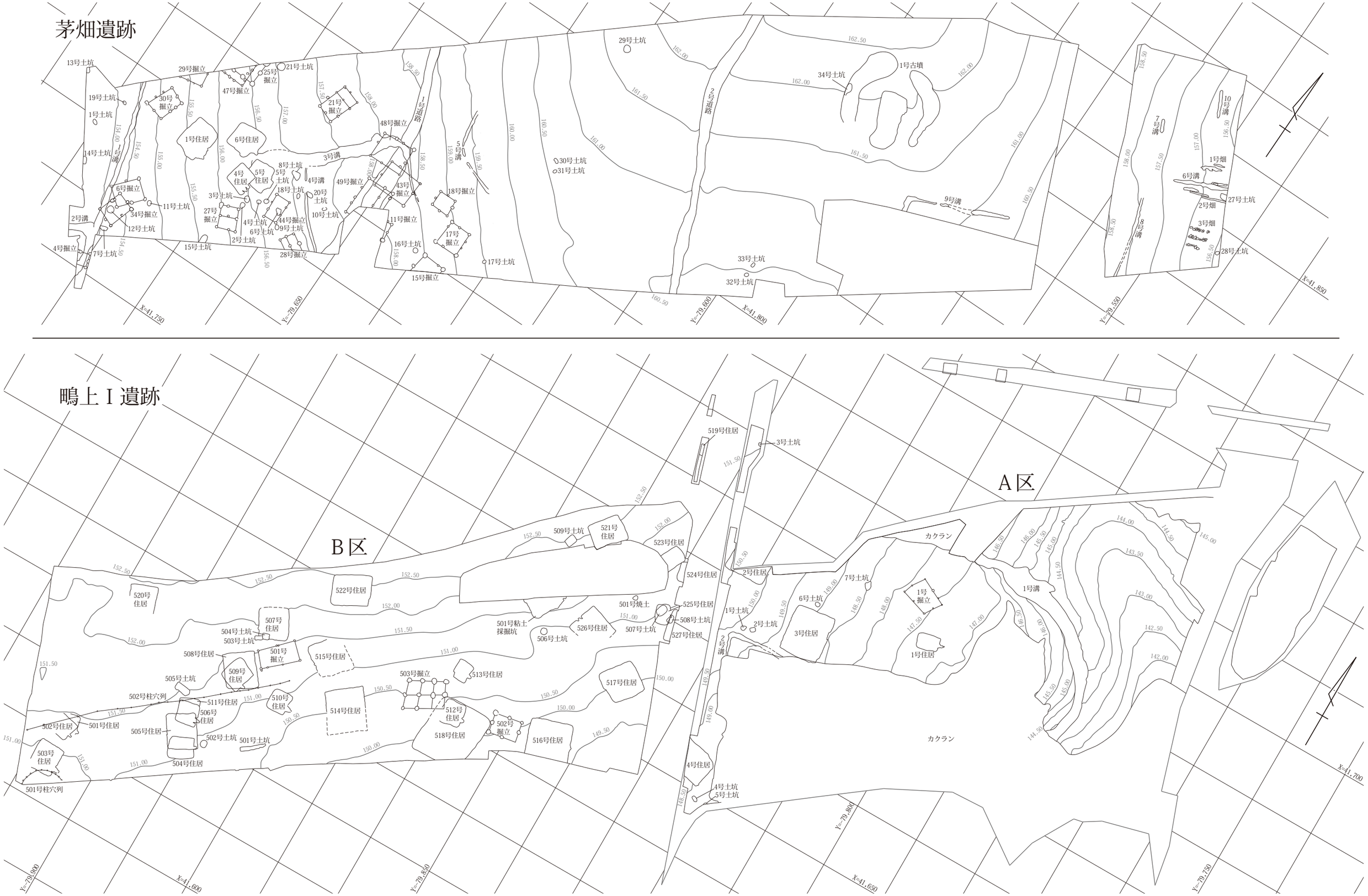
平安時代後期以来、長野氏は群馬郡長野郷を本拠地とする豪族として台頭する。長野業尚は、長年寺を再建して開基となり､箕輪城を築いた長野氏の中興の祖である。次の憲業を経て、業政、業盛へと継承されていく。長野氏はかつて上野一揆旗頭として同輩であった武士たちを組織・編成して西上野の雄として上杉氏の軍事力の一部を構成する。長野氏が基盤とした長野郷は榛名山南東麓に立地する大郷で古代群馬郡の郷名である。長野氏は、武士団の旗頭として彼の地を支配する。婚姻関係を通じて長野氏の権力は強化され､西上野の軍事の拠点となり、武田信玄の西上野侵攻の前に立ちはだかる勢力にまで台頭する。その他、同時期のものとして下芝･原遺跡(34)、浜川北遺跡(64・65)などが報告されている。

【近世】

天正十八年、小田原攻め後、井伊直政は、徳川家康の命により箕輪城に入城し東山道方面の諸大名に備えた。箕輪、松井田、安中、和田(高崎)など西上野を抑える役目を任じられた。家康は、戦国期の支配形態を考慮して上野国だけでなく関東全域の支配体制を整えていった。上野国における江戸時代の幕開けとなる。浜川北遺跡、八幡二子塚遺跡などが報告されている。

〔参考文献〕

群馬県史編纂委員会1990『群馬県史』通史編１　原始古代１　群馬県
群馬県史編纂委員会1990『群馬県史』通史編２　原始古代２　群馬県
群馬県史編纂委員会1990『群馬県史』通史編３　中世　群馬県
群馬県史編纂委員会1990『群馬県史』通史編４　近世１群馬県
高崎市史編纂委員会2003『高崎市史』通史編１　原始古代　高崎市
箕郷町誌編さん委員会1975『箕郷町誌』



第７図　茅畑遺跡・鳴上Ⅰ遺跡全体図

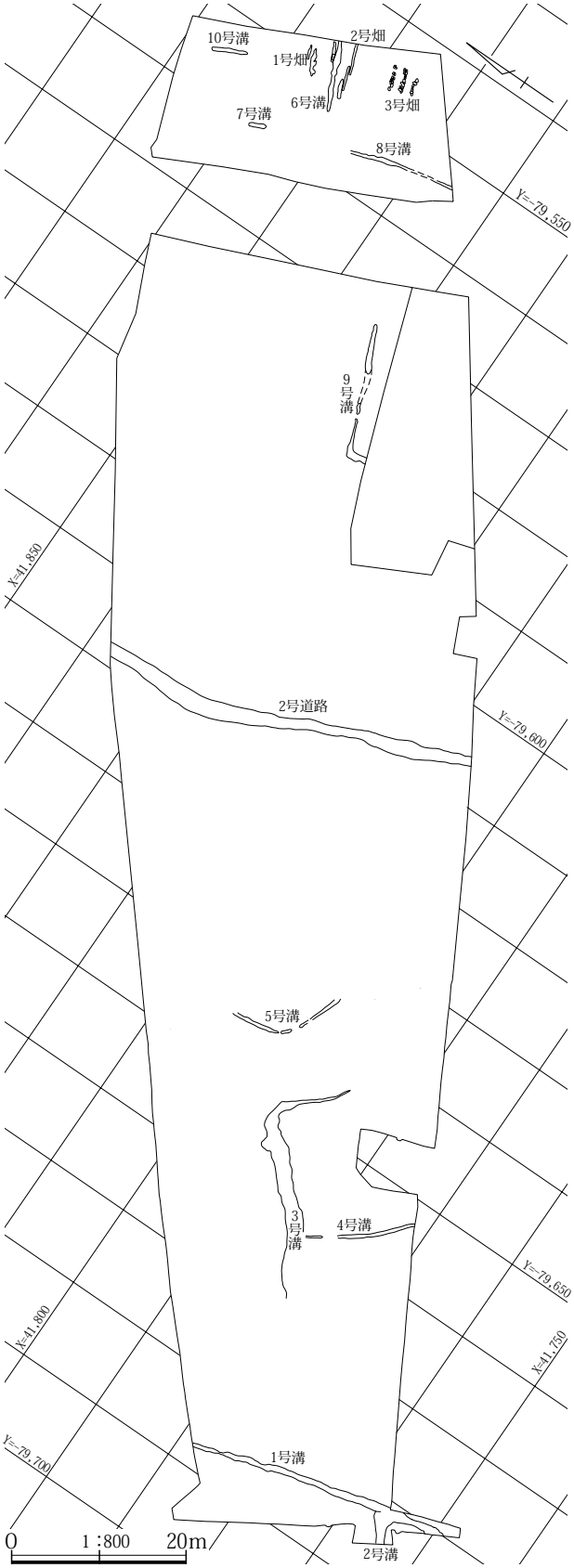
第３章　中・近世以降（１面）の遺構と遺物

１　概要

本章で報告するのは、As-B軽石層及びAs-B軽石混土層の上で、暗褐色土を確認面とした遺構であり、１面として調査を行った。中･近世以降の、掘立柱建物、柱穴列、溝、道路、畑、土坑、ピット等の遺構の検出を中心とした面である。本調査面は、茅畑遺跡西部、茅畑遺跡東部、鴫上Ⅰ遺跡Ａ区､鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区において存在している。遺跡全体は、榛名山の南東山麓傾斜地に位置しており、丘陵部分の大部分は畑地利用であり、水田は河川岸の狭小地に分布するのみである。本遺跡の地形は、樹枝状の谷の一つが緩やかに入り込んでいるのを境に、東の丘陵に茅畑遺跡が、西の丘陵に鴫上Ⅰ遺跡が、それぞれ位置している。これらの特徴的な微地形は、樹枝状の谷を隔てて集落の形成に影響を及ぼしていると考えられる。特に、茅畑遺跡西部は、鴫上Ⅰ遺跡Ａ区と谷を挟んであり、かなりの傾斜地に立地している。それに対して、鴫上Ⅰ遺跡Ａ区は､谷に舌状に張り出す台地上に位置している。また、茅畑遺跡東部は丘陵地の緩やかな南斜面、鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区は南東方向への緩やかな台地上の傾斜地にそれぞれ立地している。さらに、茅畑遺跡東部は、遺跡の最高地点を占めており、西方面の遺跡への見晴らしは良好である。

２　茅畑遺跡の遺構と遺物

茅畑遺跡西部・茅畑遺跡東部の１面に属する遺構は、溝10条、道路１条、畑３条である。溝は、茅畑遺跡西部･茅畑遺跡東部共に、傾斜方向に垂直に位置しているものが多いが、傾斜に垂直に進んだ後ほぼ直角に曲がり傾斜方向に下っているものもある。道路は、茅畑遺跡東部の調査区外北の最高地点から南に向かって伸びている。畑は、茅畑遺跡東部から確認されている。削平が進んでおり、同一区画か別区画か明瞭でない。遺構は主にAs-C軽石が混じる暗褐色土で埋没している。As-B軽石混土層は削平されている。周辺からは中世から近世にかけての天目茶碗やすり鉢などの陶磁器の破片が出土している。



第８図　茅畑遺跡１面　全体図

（１）溝

本調査区の溝は、傾斜に対して、平行あるいは垂直に位置する。削平が進んでおり、全容が明瞭でないものが多いが、主体は区画溝であると思われる。３号溝のように、流路も確認されている。埋没土にAs-C軽石を含むことが多い。As-B軽石混土層は削平されている。中・近世以降の溝であると考えられるが、各々の溝の時期及び時期差等について明瞭にするための資料は得られていない。

１号溝（第９図　PL.５）

位 置：755 ～ 779・-680 ～ -688　**規 模：**(23.64) m × 0.48 ～ 1.04m　**残存深度：**0.26m　**走行方位：**Ｎ－15°－Ｗ　**遺物：**認められない。　**重複：**２号溝と重複している。２号溝によって分岐していることから、２号溝より古いと考える。　**所見：**埋没土は不明である。ほぼ直線であり、北北西方向から南南東方向に走行しており、傾斜方向に垂直に流れる。調査区南西隅で２号溝の折れ曲がる地点で合流している。その先は確認できない。溝の南北両端部の高低差を見ると、北が高く南が低い。北から南へ流れる。溝の断面形は基本的には、逆台形で、底面は平坦である。幅は南部ほど広く、残存深度はやや浅い。南北方向の走行は４・７・８・10号溝及び９号溝の西部と並行する。本調査面では明瞭な形で残存している溝は少ないが、区画を呈していると考えるのが自然である。この溝は、２号溝と合流して分岐している。用排水路であるか明瞭でない。溝の形状及び周囲の溝の様相より、中・近世以降の溝であると推察される。

２号溝（第９図　PL.５）

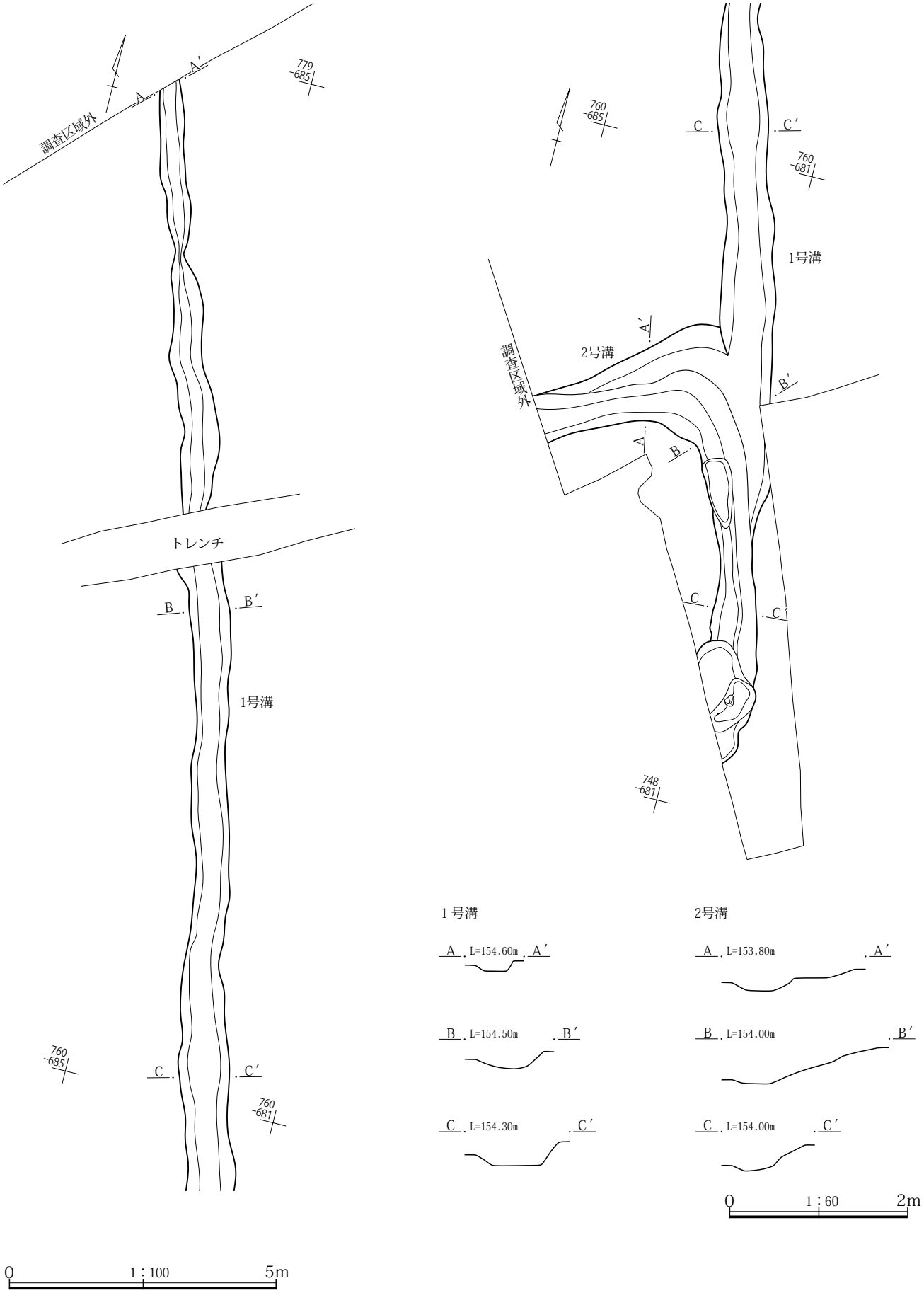
位 置：749 ～ 756・-679 ～ -686　**規 模：**(12.26) m × 0.60 ～ 1.68m　**残存深度：**0.29m　**走行方位：**Ｎ－11°－Ｗ、Ｎ－61°－Ｅ　**遺物：**掲載する遺物が確認されなかった。非掲載遺物は、土師器（甕類１点）が出土しているが、下層からの混入である。　**重複：**１号溝と重複している。１号溝が流れ込み、分岐の機能をもっていることから、１号溝より新しいと考える。　**所見：**埋没土は不明である。１号溝からの流れを、ほぼ直角に曲がっている角で受け止め、南西方向と南東方向へ走行を分けている。南西方向のものは傾斜に平行に、南東方向のものは、１号溝に引き続き、傾斜に垂直に流れるが、その先は確認できない。溝の高低差を見ると、角の部分が高く、分岐した南西方向、南東方向へとそれぞれ低くなっており、その方向へ流れる。溝の断面形は基本的には、逆台形で、底面は平坦である。幅は、角の部分が広く、分岐した後、南西方向、南東方向共に狭くなっていく。残存深度は共に浅いが、南西方向の方が、やや深い。１号溝と同様に並行、直交する溝が存在するため、区画溝であると思われる。この溝は、１号溝と合流して２つの方向に分岐する。用排水路であるか明瞭でない。溝の形状及び周囲の溝の様相より、中・近世以降の溝であると思われる。

３号溝（第10図　PL.５・75）

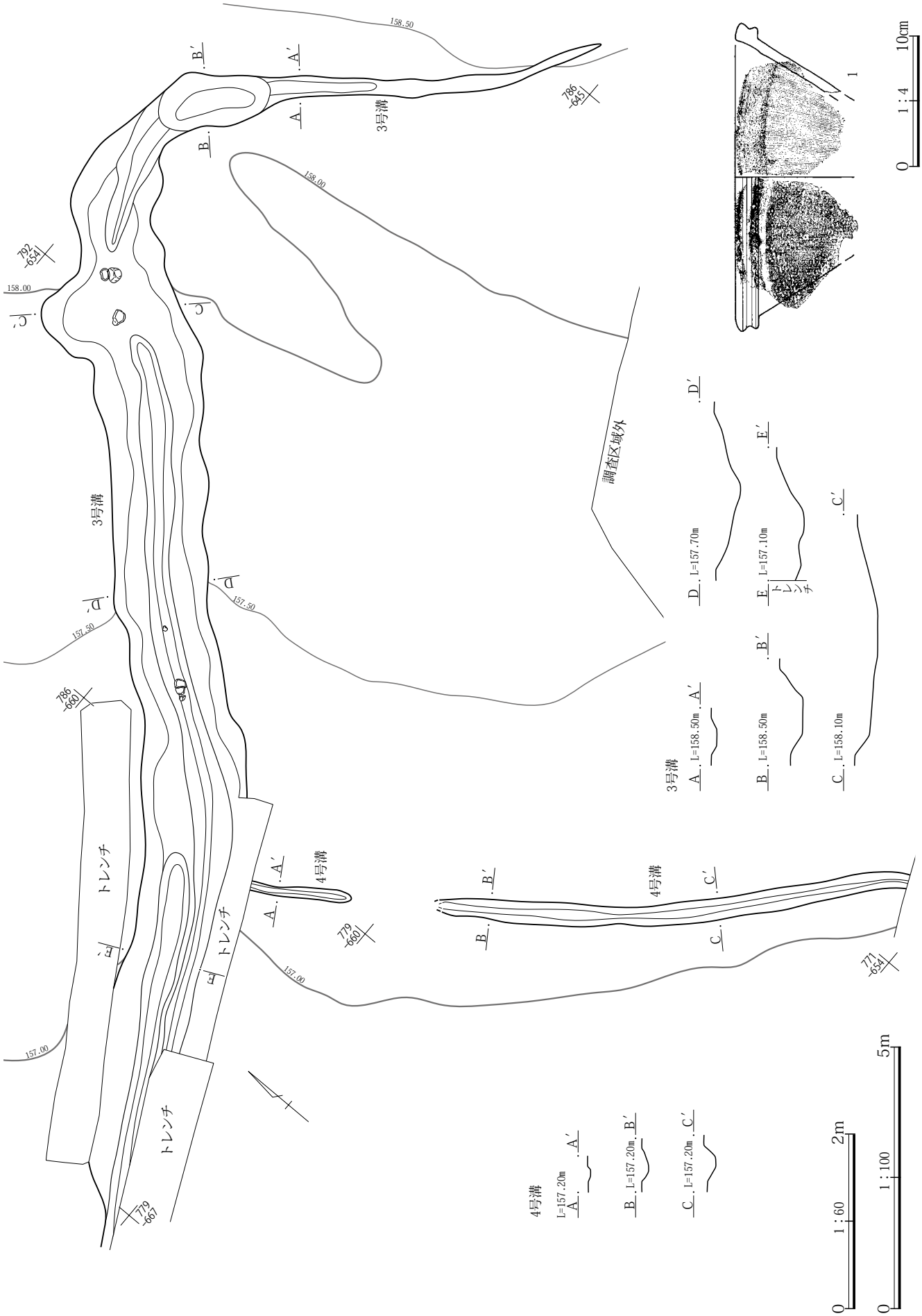
位 置：778 ～ 793・-644 ～ -688　**規 模：**(30.50) m × 0.44 ～ 1.76m　**残存深度：**0.31m　**走行方位：**Ｎ－50°－Ｗ、Ｎ－49°－Ｅ　**遺物：**陶器１点を図示した。すり鉢（１）は近世以降に比定できる。　**重複：**４号溝及び２面の48号掘立柱建物、１号道路と重複している。４号溝が３号溝に流れ込んでいる可能性が高いため、４号溝が新しいと考える。３号溝が、48号掘立柱建物、１号道路を壊しているため、３号溝が新しいと考える。　**所見：**埋没土は不明である。傾斜方向に平行に、南東から北西へ始めは細く流れ出し、調査区中央でほぼ直角に、幅を増しながら、傾斜に平行に南西方向へ流路をかえる。曲り角入口付近に１つ、出口付近に１つ、水流が淀んだと思われる窪みが確認できる。高低差は、流れ出しの部分が高く、曲り角付近から南西方向の幅広の流れに従って、低くなっていく。溝の断面形は基本的には、逆台形で、底面は平坦である。幅は、流れ出しが細く、角の部分まで順次広くなっており、角を曲がると広さを増していく。残存深度はやや浅いが、曲り角前後の窪みが若干深い。並行、直交する溝は存在するが、区画溝か明らかにできなかった。この溝の機能等は、支流からの流れを受けて傾斜方向に流れをまとめる排水路であると思われる。溝の形状、出土遺物及び周囲の溝の様相から、中・近世以降の溝であると考える。

４号溝（第10図　PL.５）

位 置：771 ～ 782・-652 ～ -661　**規 模：**(12.6) m ×



第９図　茅畑遺跡１面　１・２号溝



第10図　茅畑遺跡１面　３・４号溝、３号溝出土遺物

0.16 ～ 0.44m　**残存深度：**0.09m　**走行方位：** N － 41°－W　**遺物：**認められない。　**重複：** ３号溝と重複している。４号溝が３号溝に流れ込んでいる可能性が高いため、４号溝が新しいと考える。　**所見：**埋没土は不明である。調査区外から傾斜方向に垂直に北西方向に流れ出し、調査区中央で３号溝に合流する。南北両端部の高低差を見ると、南が高く北が低い。溝の断面形は逆台形で、底面は平らである。幅はやや狭く、残存深度は、３号溝に近づくに従って浅くなる。直線的な走行であり、走行が並行及び直交する他の溝と同様に区画溝の一つと考えられる。溝の形状及び周囲の溝の様相から、中・近世以降の溝であると考える。

５号溝(第11図　PL.５)

位 置：793 ～ 803・-636 ～ -645　**規 模：**(11.50) m × 0.30 ～ 0.50m　**残存深度：**0.13m　**走行方位：**計測不能　**遺物：**認められない。　**重複：**なし。　**所見：**埋没土は不明である。傾斜方向に環状に張り出している。溝の高低差を見ると、環状の谷方向の頂点が低く、両端が高い。両端のうち北が高く、南が低い。溝の断面形は基本的に逆台形で、底面は平坦である。環状の頂点の部分はすり鉢状である。幅は狭く両端がやや浅く、頂点は浅い。本調査区の他の溝と異なり、環状の形態を呈している走行である。幅等の掘削は比較的安定している。削平が進んでいるものの、断面形は一定であり環状の特徴を呈している。区画溝や用排水路の根拠はなく、使用目的が明瞭でない。溝の形状及び周囲の溝の様相から、中・近世以降の溝であると考える。

６号溝(第11図　PL.６)

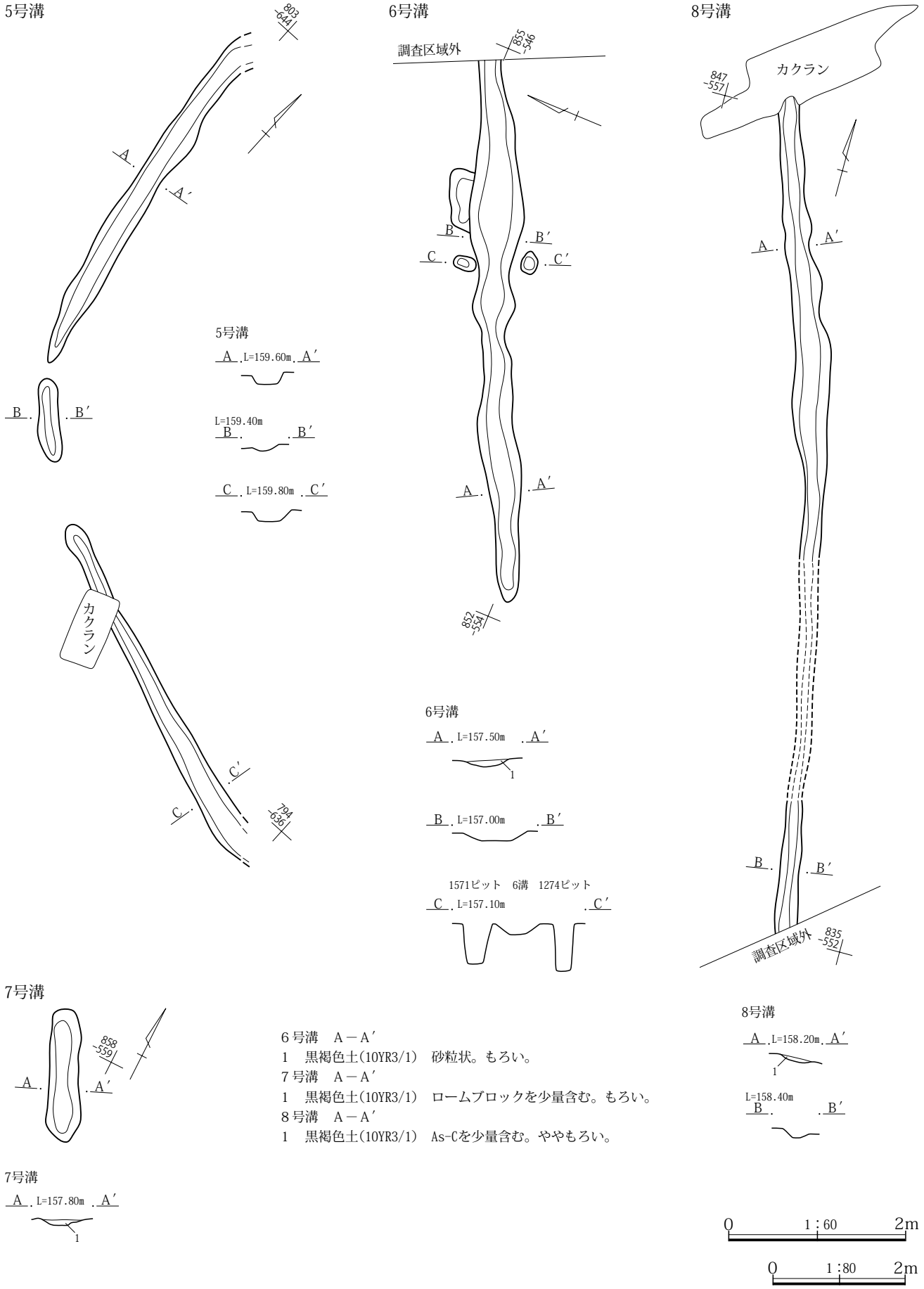
位 置：851 ～ 855・-546 ～ -554　**規 模：**(8.15) m × 0.32 ～ 0.82m　**残存深度：**0.09m　**走行方位：** N － 65°－E　**遺物：**認められない。　**重複：**なし。　**所見：**砂粒状の黒褐色土で埋没していた。締まりは弱い。ほぼ直線であり、南西方向から、北東方向に走る。傾斜方向に平行に流れる。削平が進んでいるため、途中で消滅しており、その先は確認できない。溝の東西両端部の高低差を見ると、西が高く東が低い。溝の断面形は弧を描き、底面は凹凸がある。幅はやや狭く、残存深度は浅い。西を南北に走る７・８・10号溝と直交する関係にある。９号溝が直角に曲がるまでは、走行が一致している。この面の溝は、区画を呈していると思われる。本溝の埋没土は、砂質であり、流水が確認できる。溝の中程両脇に垂直に並ぶ２基のピットを確認する。溝に関わる施設等の可能性がある。溝の形状及び埋没土から、中・近世以降の溝であると考える。

７号溝(第11図　PL.６)

位 置：856 ～ 859・-554 ～ -561　**規 模：**(2.10) m × 0.44 ～ 0.52m　**残存深度：**0.08m　**走行方位：** N － 28°－W　**遺物：**認められない。　**重複：**なし。　**所見：**ロームブロックを含む黒褐色土で埋没していた。締まりは弱い。削平が進んでおり一部の確認で終わる。溝の高低差を見ると、北が高く南が低い。溝の断面形は逆台形を呈し、底面は凹凸がある。幅はやや狭く、残存深度は非常に浅い。８号溝と同一の可能性が残る。本溝は、傾斜に垂直に走行する。９号溝と直交する関係にある。８・10号溝と９号溝が直角に曲がった跡の溝と走行が一致する。本調査面の溝と同様に、区画を呈していると思われる。用排水路であるか明瞭でない。溝の形状及び埋没土から、中・近世以降の溝であると考える。

８号溝(第11図　PL.６)

位 置：834 ～ 848・-552 ～ -557　**規 模：**(12.10) m × 0.26 ～ 0.56m　**残存深度：**0.11m　**走行方位：** N － 15°－W　**遺物：**認められない。　**重複：**なし。　**所見：**As-C軽石を含む黒褐色土で埋没していた。締まりは弱い。ほぼ直線であり、南から北へ走る。傾斜方向にほぼ垂直に流れる。削平が進んでいるため、途中で消滅しており、その先は確認できない。溝の南北両端部の高低差を見ると、南が高く北が低い。溝の断面形は逆台形を呈しており、底面は平坦である。幅は狭く、残存深度は非常に浅い。東を東西に走る６号溝及び西を東西に走る９号溝と直交する位置にある。７・10号溝及び９号溝が直角に曲がる溝と、走行が一致している。７号溝と同一の可能性がある。６・９号溝と同様に、区画を呈していると思われる。用排水路であるか明瞭でない。溝の形状及び埋没土から、中・近世以降の溝であると考える。



６号溝　Ａ－Ａ′
１　黒褐色土(10YR3/1)　砂粒状。もろい。
７号溝　Ａ－Ａ′
１　黒褐色土(10YR3/1)　ロームブロックを少量含む。もろい。
８号溝　Ａ－Ａ′
１　黒褐色土(10YR3/1)　As-Cを少量含む。ややもろい。

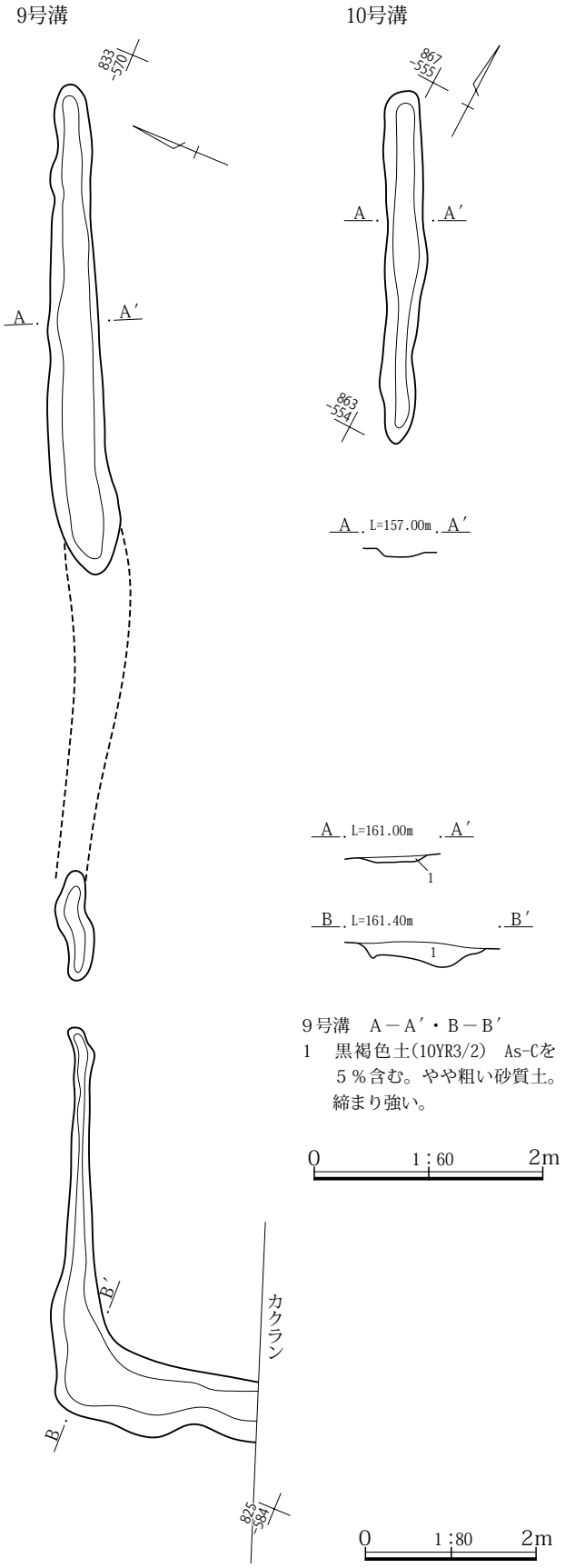
第11図　茅畑遺跡１面　５～８号溝

９号溝(第12図　PL.６)

位置：825 ～ 834・-570 ～ -584　**規模：**(17.37) m × 0.28 ～ 0.64m　**残存深度：**0.14m　**走行方位：**Ｎ－12°－W、Ｎ－67°－Ｅ　**遺物：**認められない。　**重複：**なし。　**所見：**やや粗い砂質土の黒褐色土で埋没していた。As-C軽石を少量含み締まりは強い。ほぼ直線であり、東から西へ走り、西端からほぼ直角に南へ曲がる。北西の角を頂点として東と南、それぞれ傾斜方向に流れる。東西方向は削平が進んでいるため、途中で消滅しており、その先は確認できない。南北方向は調査区域外になり全容が明らかでない。溝の東西両端部の高低差を見ると、西が高く東が低い。溝の南北両端部の高低差を見ると、北が高く南が低い。溝の断面形は、東部の直線部分では逆台形を呈しており、底面は平坦である。北西角では、逆台形を示すものの、底面は、内側が深く抉れている。幅は、直線部分はやや狭く、北西角は広い。残存深度は、直線部分が浅く、北西角はやや深い。東を南北に走る７・８・10号溝と直交する位置にある。東を東西に走る６号溝と走行が一致している。北西部で曲がって南へ走る部分は、７・８・10号溝と走行が一致している。本調査面の溝と同様に区画を呈していると思われる。本溝の埋没土は、砂質であり、流水が確認でき、用排水路の一つの可能性がある。溝の形状及び埋没土から、中・近世以降の溝であると考える。

10号溝(第12図　PL.６)

位置：863 ～ 867・-553 ～ -556　**規模：**(4.24)m×0.32 ～ 0.48m　**残存深度：**0.07m　**走行方位：**Ｎ－26°－W　**遺物：**認められない。　**重複：**なし。　**所見：**埋没土は不明である。ほぼ直線であり、北北西方向から、南南東方向に走る。傾斜方向に垂直に流れる。削平が進んでいるため、一部の確認に終わっておりその他は消滅している。溝の南北両端部の高低差を見ると、北が高く南が低い。溝の断面形は逆台形を呈しており、底面は平坦である。幅はやや狭く、残存深度は非常に浅い。西を南北に走る７・８号溝及び９号溝が直角に曲がったものは、走行が一致している。南を走る６号溝及び西を走行する９号溝と直交する位置にある。本調査面の溝と同様に区画を呈していると思われる。用排水路であるかは明瞭でない。溝の形状及び周囲の溝の様相から、中･近世以降の溝であると考える。



第12図　茅畑遺跡１面　９・10号溝

（２）道路

２号道路は、本調査区北部に想定される丘陵の最高地点の方向から調査区途中まで南に進み、調査区北側で南東方向へ針路を変える。古墳を迂回するように敷設されている。周囲の状況から、中世以降から近代まで、生活道路として使用されたものであろう。

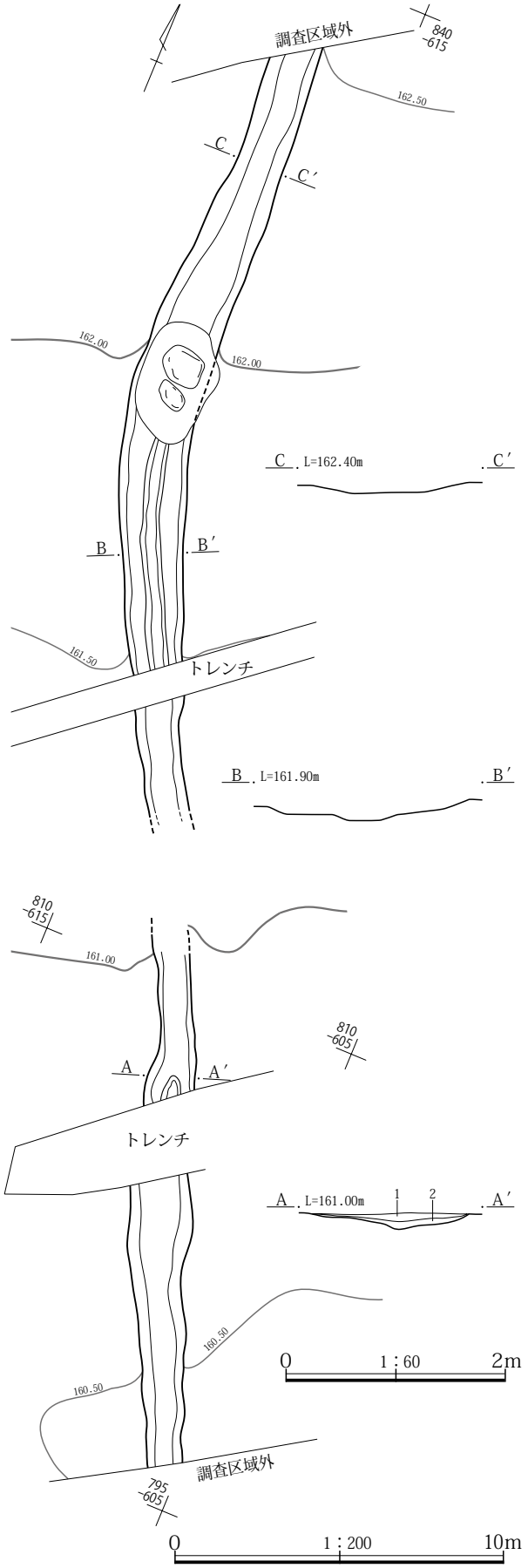
２号道路（第13図　PL.６・７）

位 置：795 ～ 840・-605 ～ -619　**規 模：**(44.20) m × 1.04 ～ 2.08m　**走行方位：**Ｎ－２°－Ｗ、Ｎ－23°－Ｗ

遺物：掲載する遺物は認められない。非掲載遺物として、鉄製品（１点）が出土したが、下層からの混入である。

重複：なし。　**所見：**埋没土上層にAs-Cを含む黒褐色土、下層にはAs-Cを少量含むにぶい黄褐色土が堆積している。埋没土は、締まりが強く、下層には硬化面が確認できた。茅畑遺跡東部の住居や掘立柱建物と同様にAs-Cが混入した黒褐色土及びにぶい黄褐色土で埋没していたものの、後世の撹拌による埋没土である可能性が高く、これらの遺構より時期が新しいと考える。路面は通行により硬化しており、中間点の北側では、中央が窪み両側に幅45 ～ 50㎝の棚状の路面が７ｍ程続いているのが確認できる。調査区の北部にあると推察される丘陵地帯の最高地点の西側を、傾斜に平行にほぼ南北に走る道路である。高低差を見ると、北が高く、南が低い。道路の東側では、７・８・10号溝など走行が一致する溝や６・９号溝など直交の関係に位置する溝がある。道路の西側では、丘陵地帯から傾斜地に垂直に西に流れる３号溝が位置する。北部の丘陵地と南部の平地をほぼ直線で結ぶ利用価値の高い貴重な道路であったことが推察できる。本道路は、同調査区の溝と、走行が一致及び直交する関係にあるが、区画を呈しているかは明瞭でない。用排水路の利便とも関連する道路である可能性が高いと考えられることから、地域の重要な主要道路の一つであったと思われる。道路の形状及び埋没土、硬化面等から、中世以降の道路であると考える。

２号道路　Ａ－Ａ′
1　黒褐色土(10YR3/1)　As-Cを15％含む。かたく締まり強い。
2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　As-Cを１％含む。かたく締まり強い。



第13図　茅畑遺跡１面　２号道路

（3）畑

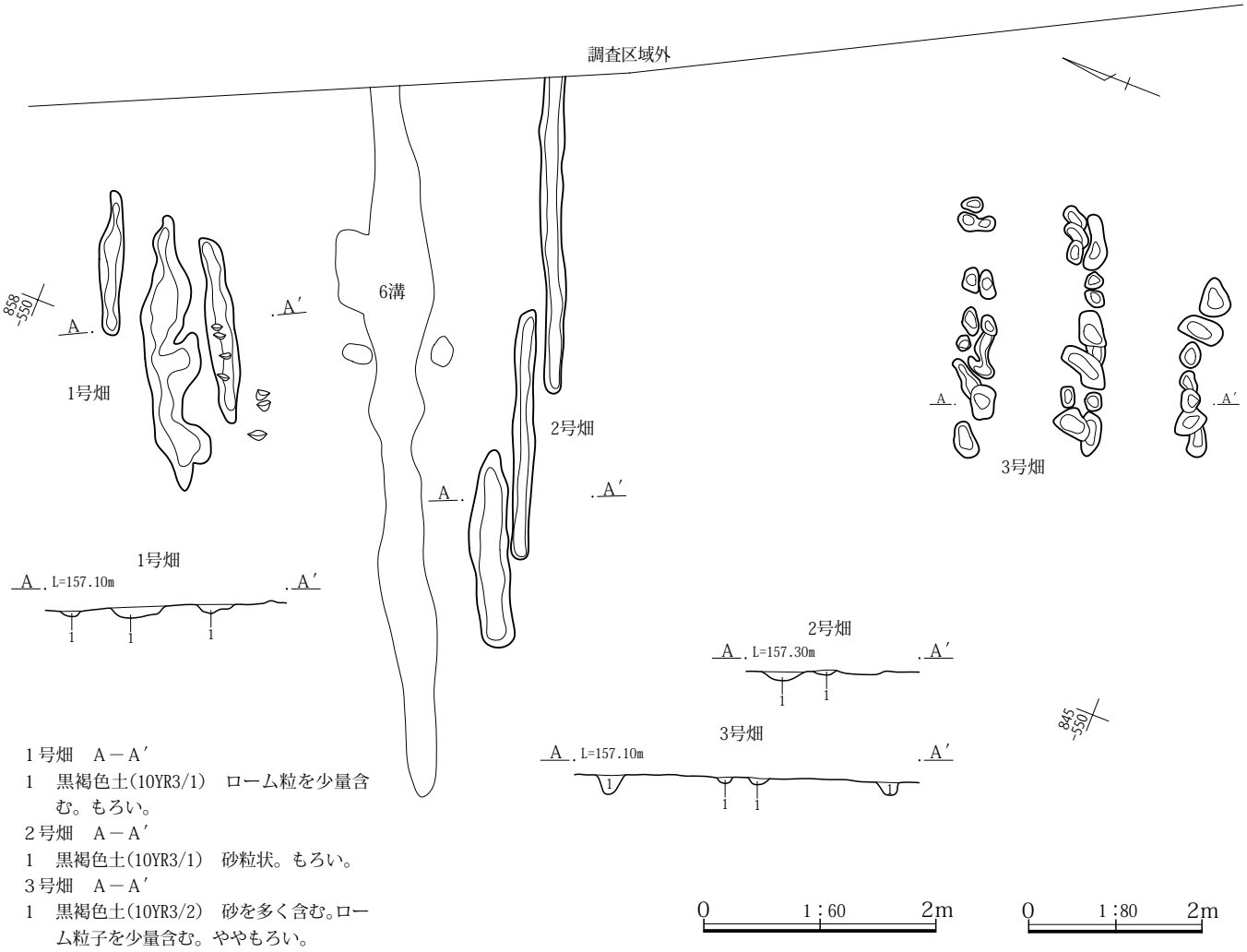
本調査区丘陵の東斜面に位置する。３種類の耕作痕を確認したが、サク間幅などから、異なる種類の作物の畑と推察される。検出範囲が微細なため、区画に関しては明瞭でない。また、近接する複数の溝と関連があると推察できる。

１号畑（第14図　PL.７）

位置：855 ～ 858・-548 ～ -552　**サク数：**３条　**規模：**(3.50)ｍ×(1.52)ｍ　**残存深度：**0.09m　**サク間幅：**0.5 ～ 0.7m　**サク方位：**Ｎ－65°－Ｅ　**遺物：**認められない。　**重複遺構：**なし。　**所見：**埋没土は、堆積層土を撹拌したと考えられる黒褐色土である。ローム粒を含み締まりが弱い。削平が進んでおり、検出範囲は狭い。重複するサクは確認できない。サクの方位は北東を向いており、傾斜に平行に位置している。南にある２・３号畑と方位は一致しているが、サクの幅や間隔、埋没土が異なることから、別区画の畑であると考える。サク間幅が異なるため、互いに目的の違う畑であると思われる。畑の時期は、形状及び埋没土等から中・近世以降に位置付けられる。他の畑との時期差は不明である。

２号畑（第14図　PL.７）

位置：851 ～ 854・-545 ～ -552　**サク数：**３条　**規模：**(6.48)ｍ×(1.16)ｍ　**残存深度：**0.07m　**サク間幅：**0.3 ～ 0.34m　**サク方位：**Ｎ－71°－Ｅ　**遺物：**認められない。　**重複遺構：**なし。　**所見：**埋没土は堆積層を撹拌したと考えられる黒褐色土である。砂粒状で締まりは弱い。６号溝との関連が推察される。削平が進んでおり、出土範囲は狭い。確認したサク及びその間隔が１号畑より狭い。作物によりサクの幅が変えられていた可能性がある。６号溝を挟んで北側に位置する１号畑とは近



１号畑　Ａ－Ａ′
1　黒褐色土(10YR3/1)　ローム粒を少量含む。もろい。
２号畑　Ａ－Ａ′
1　黒褐色土(10YR3/1)　砂粒状。もろい。
３号畑　Ａ－Ａ′
1　黒褐色土(10YR3/2)　砂を多く含む。ローム粒子を少量含む。ややもろい。

第14図　茅畑遺跡１面　１～３号畑

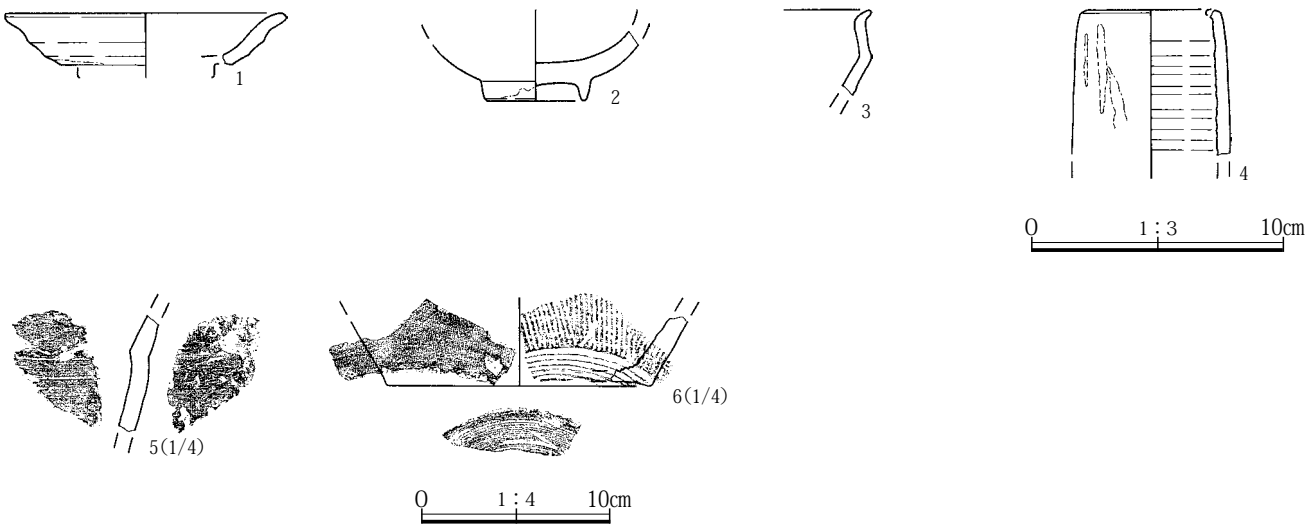
接するが、サクの幅や間隔、埋没土が異なることから別区画とした。サク方位は北東を向いており、傾斜に平行に位置している。周囲に位置する１・３号畑とサク方位は共通である。畑の時期は、形状及び埋没土等から中・近世以降に位置付けられる。他の畑との時期差は不明である。

３号畑（第14図　PL.７）

位置：844 ～ 849・-544 ～ -548　**サク数：**３条　**規模：**(3.16) m ×(3.00) m　**残存深度：**0.16m　**サク間幅：**1.26 ～ 1.42m　**サク方位：**Ｎ－70°－Ｅ　**遺物：**認められない。　**重複遺構：**なし。　**所見：**埋没土は、堆積層を撹拌したと考えられる黒褐色土である。砂を多く含み、ローム粒子を少量含む。流水の可能性がある。削平が進んでおり、出土範囲は狭い。サク間隔が広く開いていること及び、耕具痕の様相が特徴的なことから、１・２号畑とは別区画であり、使用目的も異なると考える。前後左右のサクの続きは確認できなかったが、さらに広がっていたと推察される。サクが重複していることから、複数の時期の畑を同一区画としてとらえている可能性がある。方位は北東を向いており、周囲に位置する１・２号畑と共通している。傾斜に平行に位置している。畑の時期は、形状及び埋没土等から中・近世以降に位置付けられる。他の畑との時期差は不明である。

（４）遺構外出土の遺物（第15図　PL.75）

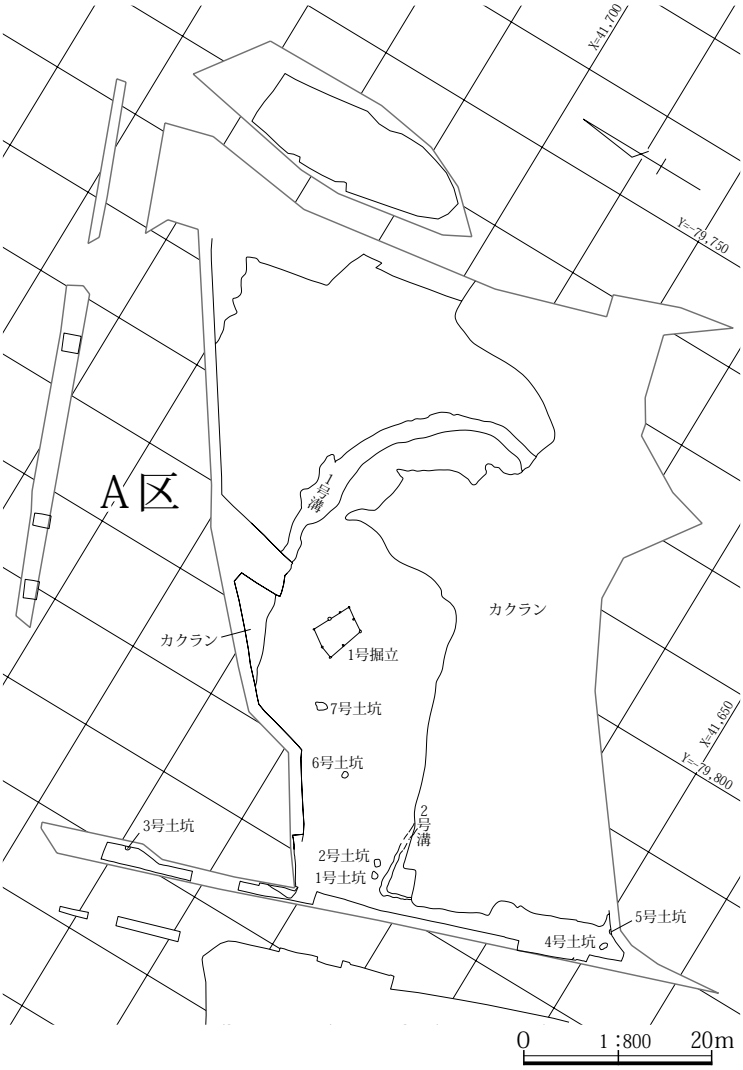
茅畑遺跡東部及び西部の１面の調査中に、遺構に伴わない形で遺物が出土した。ここでは出土した遺物のうち、在地系土器１点（内耳鍋５）、瀬戸・美濃陶器４点（灰釉輪禿皿１、すり鉢６、鉄絵灰落とし４、鉄釉天目碗３）、肥前磁器１点（染付丸碗２）を掲載した。



第15図　茅畑遺跡１面　遺構外出土遺物

３　鴫上Ⅰ遺跡Ａ区の遺構と遺物

鴫上Ⅰ遺跡Ａ区の１面に属する遺構は、掘立柱建物１棟、ピット189基、土坑７基、溝２条である。鴫上Ⅰ遺跡Ａ区は、茅畑遺跡西部との境にある東側の谷に向かって傾斜している。遺構の分布は、東部傾斜地に沿って主に溝と土坑等が確認され、西部の緩斜面で主に掘立柱建物、ピット、土坑、溝等が確認された。西部の緩斜面から東部の傾斜地に移行するところに傾斜地を利用して１号溝が位置している。遺構の埋没土は、As-B軽石、As-C軽石、ロームブロックを含む黒褐色土及び暗褐色土である。



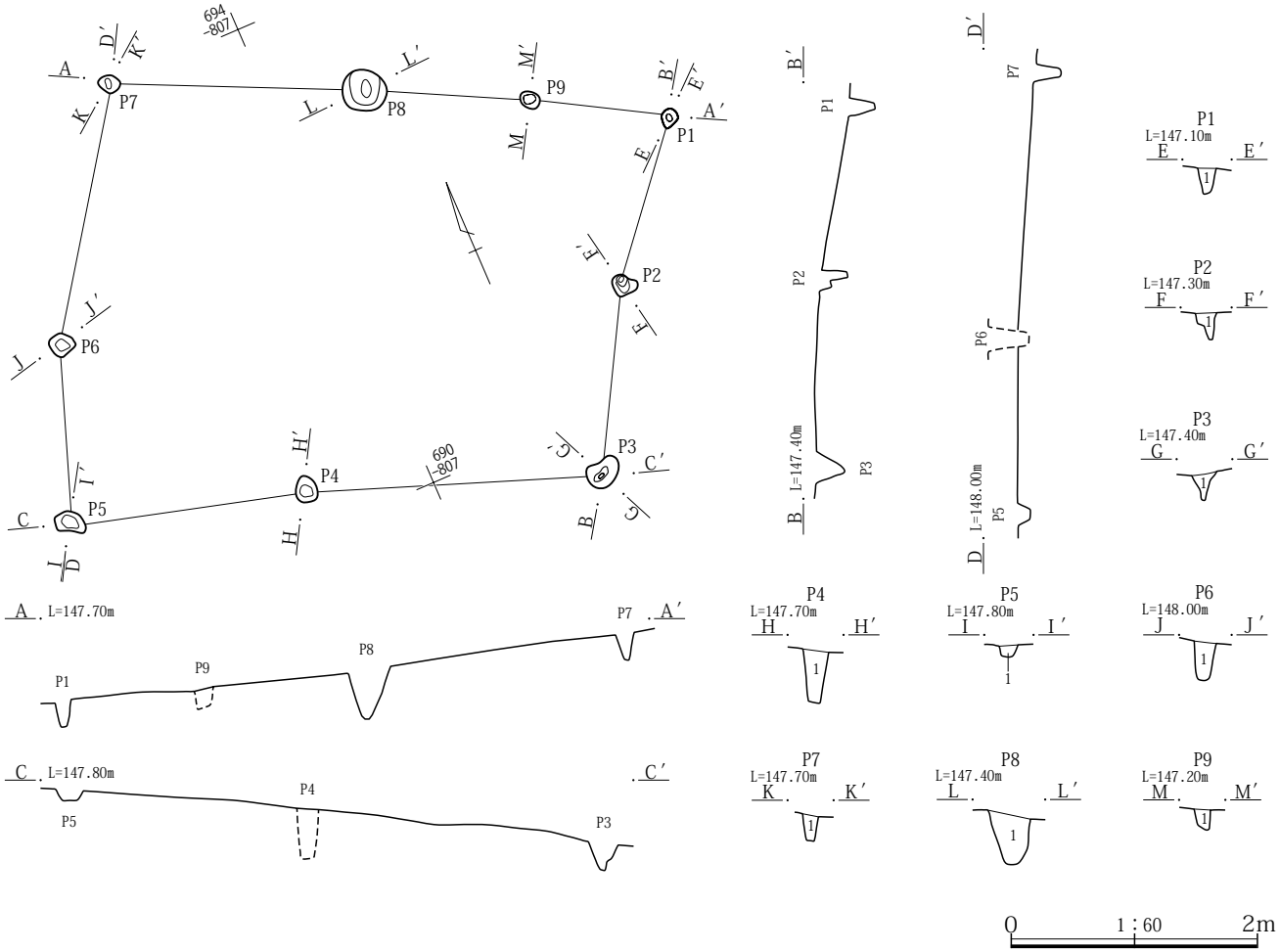
第16図　鴫上Ⅰ遺跡Ａ区１面　全体図

（１）掘立柱建物

本調査区では、舌状台地の中央部北よりに掘立柱建物が１棟確認された。周囲には、その他にも建物の柱穴と思われるピット群が調査された。しかしながら位置関係等から、さらなる掘立柱建物等の復元には至らなかった。周辺に住居等の関連施設は確認されなかった。１・２号溝との関連については、掘立柱建物の棟方向等は一致しておらず、明瞭でない。さらに、本調査区の掘立柱建物は、傾斜地に建設された建物でもある。傾斜地に立地する建物の特徴については明瞭でないため、検討が必要である。

１号掘立柱建物（第17図　PL.７）

位置：689 ～ 694・-804 ～ -809　**規模形態：**梁行２間・桁行３間(2.95 ～ 3.57m ×4.33 ～ 4.57m)、面積14.36㎡の東西方向に棟方向を取る側柱建物である。柱間は桁行が1.15 ～ 2.40m、梁行が1.43 ～ 2.16mである。確認した柱穴の柱筋は、西辺を除いておおむね通っている。**主軸方位：**Ｎ－67°－Ｗ　**柱穴：**Ｐ１～９から成り、南列は東から２番目の柱穴が、中央列は東から２番目の柱穴が確認できなかった。柱穴の平面形は楕円形及び不整形で、長径0.17 ～ 0.37m、短径0.14 ～ 0.34m、深さ0.10 ～ 0.41mであり、深さにはややばらつきがあるものの、同一施設のものであると考える。　**遺物：**認められない。**重複遺構：**なし。　**所見：**柱穴埋没土は、As-C軽石を含む黒褐色土、及び褐色土であり、土層から中・近世以降と考えるが、傾斜地における掘立柱建物であるか検討の余地がある。周辺に所在する溝や隅丸長方形の土坑とは、方向が近似しておらず、関連は明瞭でない。



１号掘立柱建物土層注記

Ｐ１・３　Ｅ－Ｅ′・Ｇ－Ｇ′

１　黒色土(10YR2/1)　白色鉱物粒と赤褐色鉱物粒を少量含む。褐色土ブロックを50％程度混入する。締まりのある土。

Ｐ２　Ｆ－Ｆ′

１　黒褐色土(10YR3/1)　白色鉱物粒を少量含み、ローム粒とロームブロックを５％程度含む締まりのある土。

Ｐ４　Ｈ－Ｈ′

１　黒褐色土(10YR3/1)　径１㎜の白色鉱物粒と赤褐色鉱物粒を５％程度とロームブロックを少量含む締まりのある土。

Ｐ５　Ｉ－Ｉ′

１　褐色土(10YR4/6)　白色鉱物粒と赤褐色鉱物粒を含むロームブロックが30％程度入る締まりのある土。

Ｐ６　Ｊ－Ｊ′

１　黒褐色土(10YR3/1)　径５㎜以下のAs-Cと白色鉱物粒を少量と炭化物をごく少量含む。硬く締まった土。

Ｐ７　Ｋ－Ｋ′

１　黒褐色土(10YR3/1)　白色鉱物粒とローム粒少量とロームブロックを含む締まりのある土。

Ｐ８　Ｌ－Ｌ′

１　黒褐色土(10YR3/2)　径５㎜以下のAs-YPを20％程度とロームブロックを少量含む締まりのある土。

Ｐ９　Ｍ－Ｍ′

１　褐色土(10YR4/6)　白色鉱物粒と赤褐色鉱物粒を含む締まりのある土。

第17図　鴫上Ｉ遺跡Ａ区１面　１号掘立柱建物

第３表　鴫上Ｉ遺跡Ａ区１面１号掘立柱建物　計測表

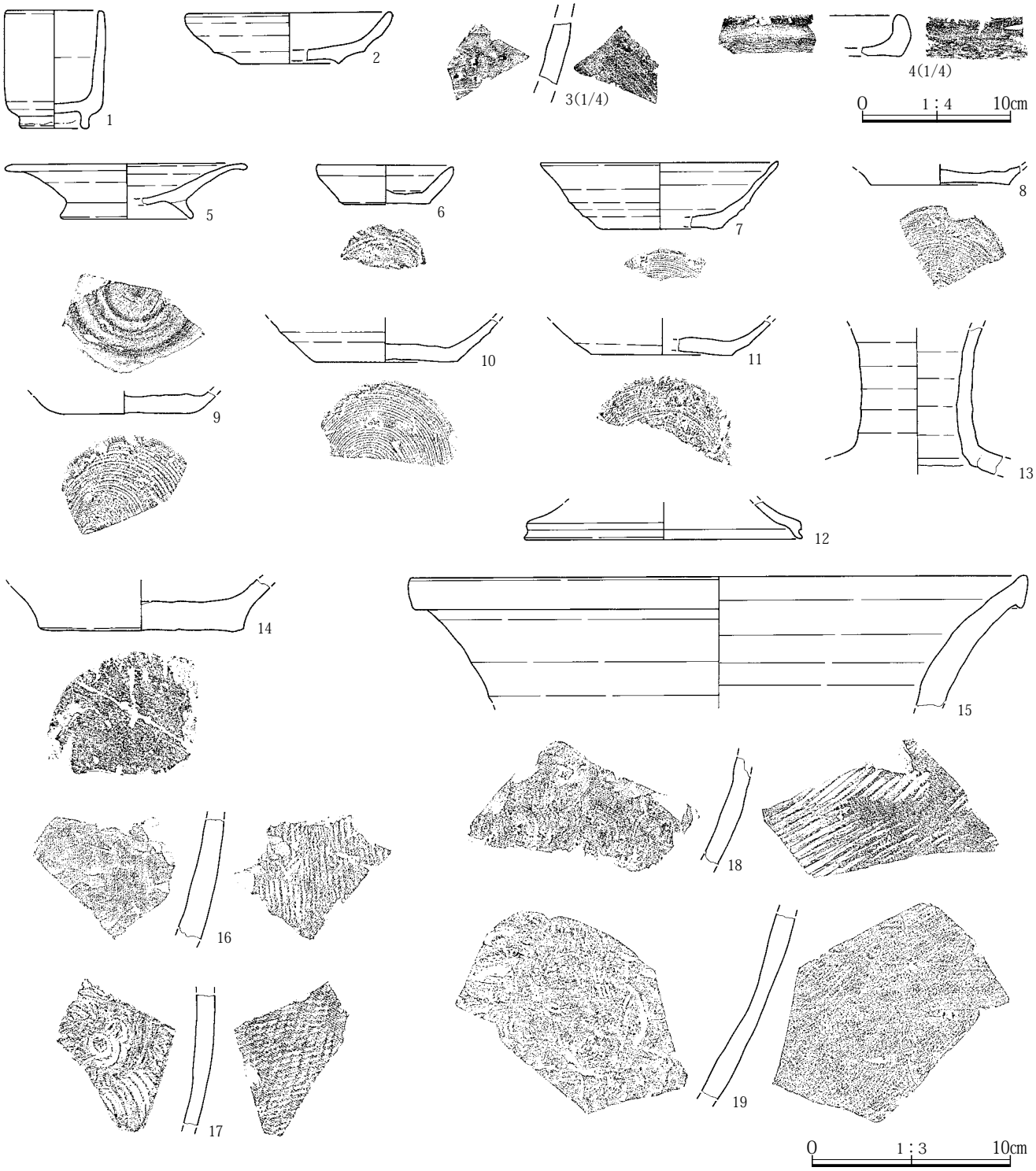
建物全体の規模		２×３間・東西棟			面積	14.36㎡		
主軸方位		Ｎ－67°－Ｗ			位置	Ｘ＝689 ～ 694　Ｙ＝-804 ～ -809		
桁・梁の規模(m)		柱穴№	柱穴規模(m) 長径	短径	深さ	形状	次柱穴との間隔(m)	旧ピット№	備考
東辺	2.95	Ｐ１	0.17	0.14	0.20	楕円形	1.37	196	
		Ｐ２	0.20	0.17	0.22	不整形	1.60	195	
南辺	4.33	Ｐ３	0.30	0.21	0.21	楕円形	2.40	167	
		Ｐ４	0.23	0.18	0.41	楕円形	1.94	168	
西辺	3.57	Ｐ５	0.27	0.16	0.10	楕円形	1.43	185	
		Ｐ６	0.20	0.18	0.33	楕円形	2.16	79	
北辺	4.57	Ｐ７	0.19	0.15	0.20	楕円形	2.10	170	
		Ｐ８	0.37	0.34	0.32	楕円形	1.33	180	
		Ｐ９	0.18	0.15	0.11	楕円形	Ｐ１へ 1.15	197	

（2）溝

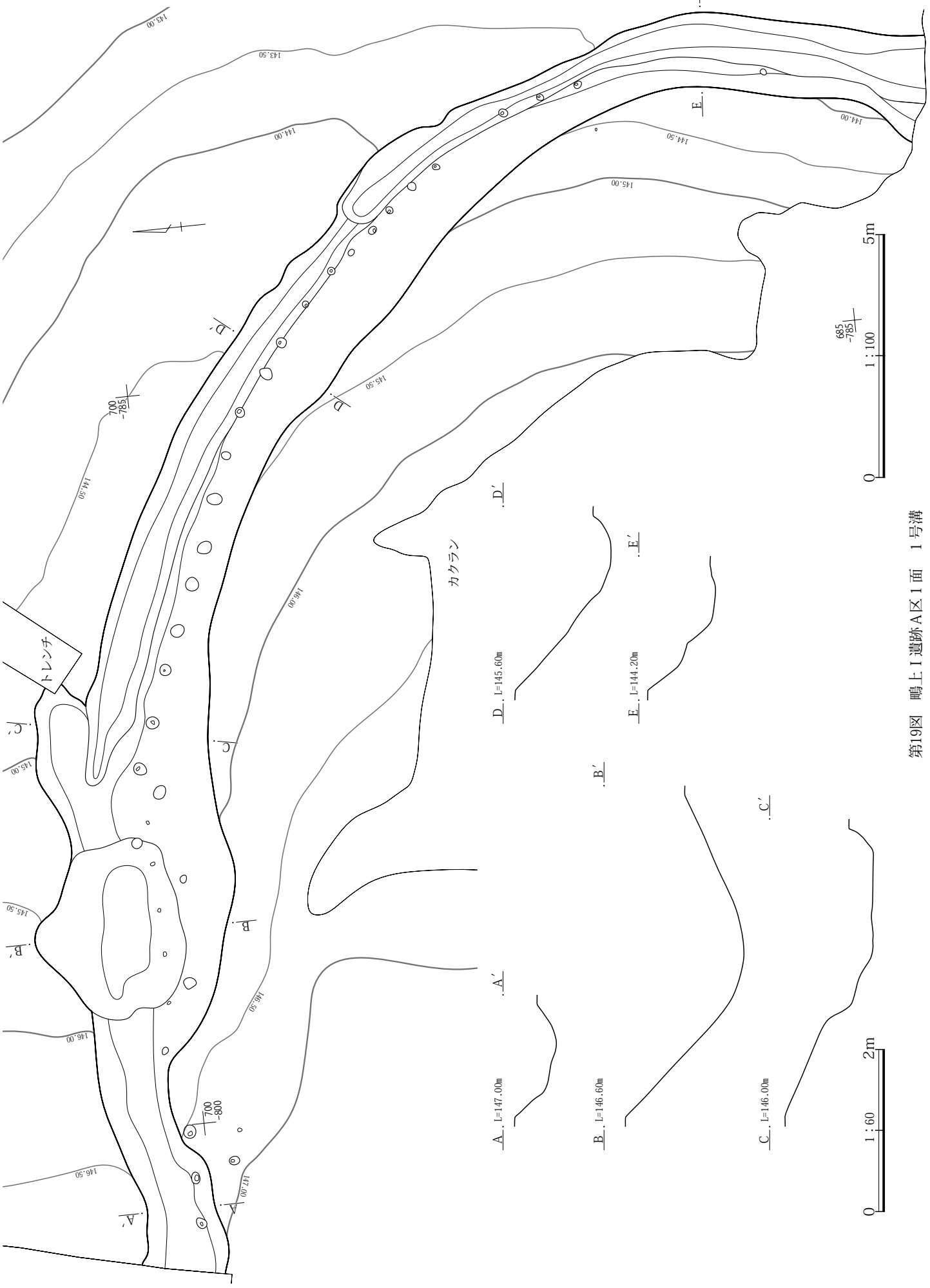
本調査区は、西部は緩斜面だが、中央部から東部にかけて調査区東の谷方向に大きく傾斜している。緩斜面に位置する２号溝は、傾斜に平行若しくは垂直に走行しており、傾斜地における区画溝の役割を担っていたと考える。舌状の地形を利用した１号溝は、西部の緩斜面を流れる水を受けて逃がす排水路の役割をしていたと推察される。

１号溝（第18・19図　PL.８・75）

位 置：683 ～ 703・-778 ～ -804　**規 模：**(35.8) m × 1.24 ～ 2.12m　**残存深度：**0.52m　**走行方位：**計測不能　**遺物：**瀬戸・美濃磁器２点（筒形湯呑み１、丸皿２）、常滑陶器１点（甕３）、在地系土器１点（焙烙４）及び、下



第18図　鳴上Ⅰ遺跡Ａ区１面　１号溝出土遺物



第19図　鳴上Ⅰ遺跡A区１面　１号溝

位からの混入である土師器１点(甕14)、須恵器14点(杯６・７・８・９・10・11、高杯12、甕15・16・17・18・19、長頸壺13、皿５)を図示した。図示した以外に、土師器(杯類９片、甕類82片)、須恵器(杯類12片)が出土している。　**重複：**なし。　**所見：**埋没土は、不明である。調査区のほぼ中央を、谷傾斜である舌状台地に沿って環状に北西から南東に走行している。地境から流れ出している水抜き排水路であったと推察される。陶磁器の出土から、近世初期から現代まで使用されていた可能性がある。台地側には土止めの木杭が観察できるが、新しいものである。遺物の中には、９世紀から11世紀半ばのものがあり、台地からの混入であると考える。溝の両端部の高低差を見ると、北西部が高く南東部が低い。溝の断面形は、山側が深く傾斜しており、谷側は、浅く傾斜も緩やかである。流れ出しの部分は逆台形で、底面は凹凸がある。弧が深くなるのに伴って、幅は広く断面形は半円形を呈しており、ときにより水流の強さが推察される。曲面を過ぎて傾斜平行に走行すると、断面形は逆台形にもどり、底面は平坦になる。残存深度は、全体的に深い。流れ出しは、やや浅く、弧が張り出す部分では深くなり、傾斜と平行になるころには、再び浅くなる。本溝は、環状を呈しているため、ほぼ直線を呈している同調査区の他の溝や茅畑遺跡の溝と同質のものではない。本調査面における他の溝とは、走行が同一ではなく、区画を呈していないと推察される。この溝の機能等は、傾斜地が故に水の流れを制御するための排水路の役割が大きかったと考えられる。

２号溝(第20図　PL.８)

位置：669 ～ 674・-820 ～ -830　**規模：**(11.50) m × 0.38 ～ 0.76m　**残存深度：**0.11m　**走行方位：**Ｎ－20°－W、Ｎ－86°－Ｅ　**遺物：**認められなかった。　**重複：**認められない。　**所見：**As-C軽石を含むにぶい黄褐色土で埋没していた。調査区西部で、一方は、北西部を角にして傾斜を下るように西から東へ流れ、一方は、北西の角から、東西方向の溝とはほぼ直角に南に下る。東西方向、南北方向ともに、その先は、撹乱の影響を受けており確認できていない。溝の東西方向の両端部の高低差を見ると、西が高く東が低い。溝の南北方向の高低差をみると、北が高く、南が低い。断面形はともに逆台形状で、底面は凹凸がある。幅はやや狭く、残存深度は非常に浅い。１号溝とは、同質ではなく、他に対応する溝が確認できなかった。茅畑遺跡の溝と同様に区画溝の可能性が高い。また、本溝が用排水路であるか明瞭な資料は見つからなかった。土層及び形状から、中・近世以降の溝であると考える。

２号溝Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　径５㎜のAs-Cを少量と径20㎜のロームブロックを含む軟質土。

第20図　鴫上Ⅰ遺跡Ａ区１面　２号溝

（３）土坑

鴫上Ｉ遺跡Ａ区の土坑（第21図　PL.８・９）

鴫上Ｉ遺跡Ａ区では７基の土坑を調査した。そのほとんどは調査区西部に集中している。本調査区の土坑には、大きく分けて２種類の形態がある。一つは、平面形が隅丸長方形であり断面形が逆台形を呈し、底面が平坦なものである。もう一つは、平面形が楕円形であり断面形がすり鉢状に上部が広く下部が狭いものである。隅丸長方形の土坑の主軸方位は、他の土坑と関連がない。詳細については第36表に記した。

埋没土は、As-C軽石、及び撹拌された土を含んでいるが、中世以降に属すると考えられる。本調査区の西に位置する鴫上Ｉ遺跡Ｂ区では、同時期と考えられる掘立柱建物や柱穴列が確認されていることから、調査区域外にも建物が分布している可能性が考えられ、本調査区の土坑はそれらに伴う可能性がある。

１号土坑（第21図　PL.８）

位置：674・-827

形状：楕円形、平底で断面形は逆台形を呈する。

規模：0.86m×0.71m　**深度：**0.15m

主軸方位：Ｎ－42°－Ｅ

埋没土層：As-BP軽石、ローム粒・ロームブロックを含む軟性の暗褐色土及び、ロームブロックの二次堆積土で埋没している。

重複：なし。

遺物：認められなかった。

所見：本土坑の使用目的は確認できなかった。時期は明らかにできなかったが、確認面及び形状からおおむね中・近世の可能性を有すると思われる。

２号土坑（第21図　PL.８）

位置：674・-826

形状：隅丸長方形、丸底で断面形は逆台形を呈する。

規模：0.82m×0.66m　**深度：**0.25m

主軸方位：Ｎ－52°－Ｅ

埋没土層：白色鉱物粒、As-YP、ロームブロックを含む締まりのある暗褐色土、及びAs-YP、ロームブロックを含む締まりのある褐色土で埋没している。

重複：なし。

遺物：認められなかった。

所見：本土坑の使用目的は確認できなかった。時期は明らかにできなかったが、確認面及び形状からおおむね中世の可能性を有すると思われる。

３号土坑（第21図　PL.８）

位置：699・-839

形状：不明、平底で断面形は逆台形を呈する。

規模：(0.38)m×0.50m　**深度：**0.15m

主軸方位：不明。

埋没土層：ロームブロック、白色鉱物粒、赤褐色鉱物粒を含んだ締まりのある暗褐色土で埋没している。

重複：なし。

遺物：認められなかった。

所見：本土坑の使用目的は確認できなかった。時期は明らかにできなかったが、確認面及び形状からおおむね中世の可能性を有すると思われる。

４号土坑（第21図　PL.８）

位置：648・-821

形状：楕円形、平底で断面形は平底面からすり鉢状を呈する。

規模：0.96m×0.54m　**深度：**0.45m

主軸方位：Ｎ－61°－Ｗ

埋没土層：白色鉱物粒、ローム粒及びロームブロックを含む軟性の暗褐色土で埋没している。

重複：認められない。

遺物：認められなかった。

所見：本土坑の使用目的は確認できなかった。時期は明らかにできなかったが、確認面及び形状からおおむね中世の可能性を有すると思われる。

５号土坑（第21図　PL.８）

位置：649・-819

形状：不明、平底で断面形は逆台形を呈する。

規模：(0.20)m×不明　**深度：**0.23m

主軸方位：不明。

埋没土層：ローム粒及びロームブロックを含む締まりのある黒褐色土で埋没している。

重複：認められない。

遺物：認められなかった。

所見：本土坑の使用目的は確認できなかった。時期は明らかにできなかったが、確認面及び形状からおおむね中・近世の可能性を有すると思われる。

６号土坑（第21図　PL.８）

位置：682・-819

形状：楕円形、平底で断面形は中央にすり鉢状を呈する。

規模：0.74m×0.61m　**深度：**0.19m

主軸方位：Ｎ－87°－Ｗ

埋没土層：白色鉱物粒、As-C軽石、As-BPを含む締まりのある黒褐色土、及び白色鉱物粒、As-BPを含むにぶい黄褐色土で埋没している。

重複：なし。

遺物：認められなかった。

所見：本土坑の使用目的は確認できなかった。時期は明らかにできなかったが、確認面及び形状からおおむね中・近世の可能性を有すると思われる。

７号土坑（第21図　PL.９）

位置：688・-814

形状：不整形で丸底を呈する。

規模：1.13m×0.84m　**深度：**0.25m

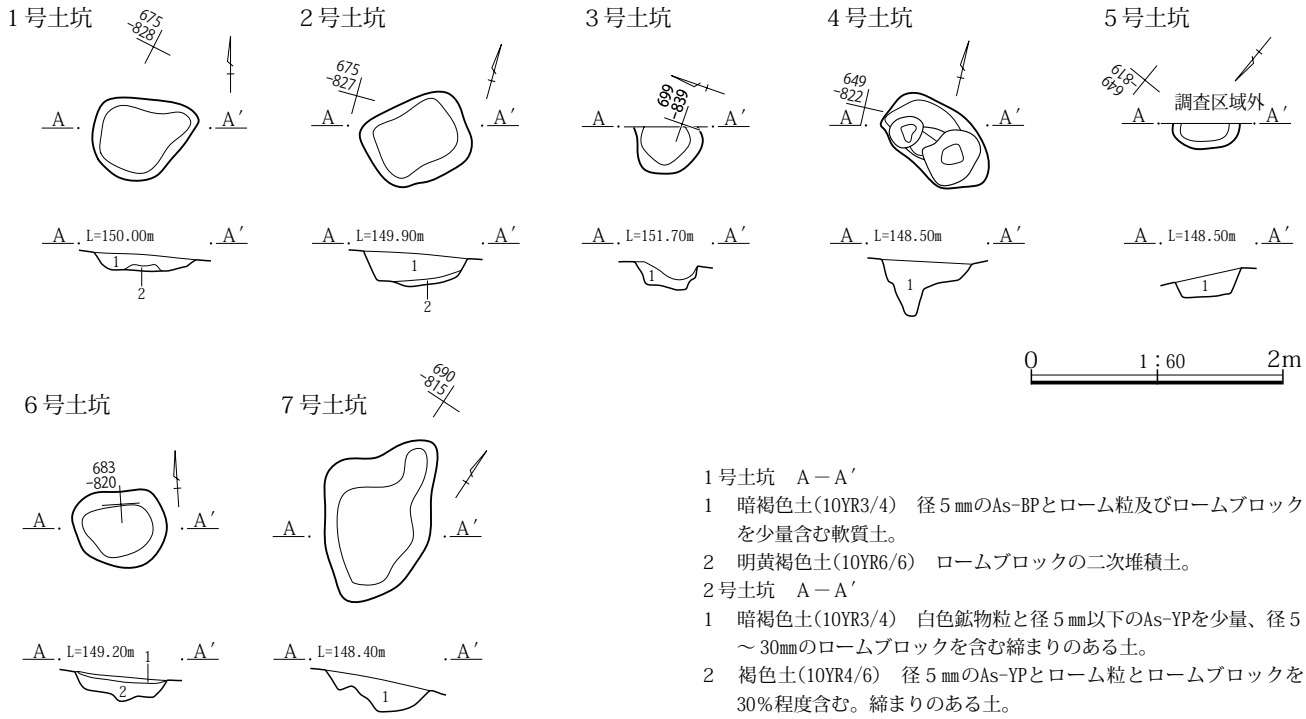
主軸方位：Ｎ－32°－Ｗ

埋没土層：As-BP、ロームブロックを含む締まりのある黒褐色土で埋没している。

重複：なし。

遺物：認められなかった。

所見：本土坑の使用目的は確認できなかった。時期は明らかにできなかったが、確認面及び形状からおおむね中世の可能性を有すると思われる。



６号土坑　Ａ－Ａ′
1　黒褐色土(10YR3/2)　白色鉱物粒、径２～３㎜のAs-C、径５㎜のAs-BPを少量含む締まりのある土。
2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　白色鉱物粒５％と径５㎜以下のAs-BP少量を含む。締まりのある土。

７号土坑　Ａ－Ａ′
1　黒褐色土(10YR3/1)　径５㎜のAs-BPを20％、径50㎜のロームブロックを20％含む。締まりのある土。

１号土坑　Ａ－Ａ′
1　暗褐色土(10YR3/4)　径５㎜のAs-BPとローム粒及びロームブロックを少量含む軟質土。
2　明黄褐色土(10YR6/6)　ロームブロックの二次堆積土。

２号土坑　Ａ－Ａ′
1　暗褐色土(10YR3/4)　白色鉱物粒と径５㎜以下のAs-YPを少量、径５～30㎜のロームブロックを含む締まりのある土。
2　褐色土(10YR4/6)　径５㎜のAs-YPとローム粒とロームブロックを30％程度含む。締まりのある土。

３号土坑　Ａ－Ａ′
1　暗褐色土(10YR3/4)　径５～30㎜のロームブロックと白色鉱物粒、赤褐色鉱物粒を含んだ硬く締まりのある土。

４号土坑　Ａ－Ａ′
1　暗褐色土(10YR3/4)　白色鉱物粒とローム粒、径50㎜のロームブロックを含む軟質土。

５号土坑　Ａ－Ａ′
1　黒褐色土(10YR2/3)　ローム粒とロームブロックを含む締まりのある土。新しい溝に切られている。

第21図　鴫上Ⅰ遺跡Ａ区１面　１～７号土坑

（４）ピット

鴫上Ⅰ遺跡Ａ区のピット群（第22～24図　PL.９～11）

概要：鴫上Ⅰ遺跡Ａ区では189基のピットを調査した。１号溝を境にして、その上段にあたる調査区西部の緩斜面に集中して位置している。

ピット群が位置する台地上の緩斜面は西側から舌状に東の傾斜地に張り出すものである。ピット群の集中は一様ではなく、等高線に沿って集中の濃淡が見て取れる。調査区西境界線際のピット群は、緩斜面からやや傾斜する境に位置している。上段中央部のピット群は、傾斜がやや緩やかになった台地状に展開している。その東には舌状の中央にピット群が集中している。これらのピット群は、建物の柱穴である可能性も否定できないところであるが、柱穴の規模形状、柱間、建物全体の形状など、明確な資料は見つからず、復元には至らなかった。

また、この台地上の舌状部には、古墳など他の遺構の可能性を考慮して、旧石器調査を兼ねたトレンチ調査を実施したが、盛土等遺構の痕跡を確認することはできなかった。特徴的な舌状丘陵地の形態は、前章でも触れた本調査区一帯の傾向でもある榛名山南東丘陵地における樹枝状の自然浸食に付随するものであると考えられる。詳細については第39表に記載した。

位置：東部の傾斜地から上段に上がったところに集中して分布している。

重複：90・91号ピットが重複する。新旧関係は明瞭でない。

規模形態：多くは、小型で楕円形を呈する。これらのピット群は建物の柱穴である可能性もあるが、掘立柱建物等の復元には至らなかった。

埋没土：埋没土は一様ではないが、主に暗褐色土と黒褐色土である。稀に褐灰色土及びにぶい黄褐色土で埋没しているものもある。ロームブロック、白色鉱物粒を含むことが多い。As-B軽石及びAs-C軽石を含むこともある。稀にAs-BP及びAs-YPを含むこともある。軟質土及び締まりのある土も多数確認される。

その他：形状及び出土遺物等から、柱穴の可能性が高いという観点で、特筆すべきピット45基については図示し、その原因を分類した結果を以下の通り解説する。

・柱痕が推測される形状で、柱穴であった可能性が高いものとして、27・30・37号ピットがあげられる。

・形状が整っており深さもあることから、柱穴であった可能性が高いものとして、７・８・19・32・41・44・60・72・98・120・127・128・138・156・162・169・177・179・186・194号ピットがあげられる。

・同じ規模のピットが平行して並んでおり、住居に関連する造作の可能性があるものとして、94・95号ピットがあげられる。

・柱の元を固めた様相が伺え、柱穴であった可能性があるものとして、90・91号ピットがあげられる。

・上部が削平を受けており、底部が形良く残存していると思われ、柱穴の可能性があるものとして、10・12・18・52・62・64・70・100・110・111・112・123・144・157・171・176・184・188号ピットがあげられる。

遺物：非掲載遺物として、土師器（杯類１片、甕類２片）、弥生土器１片（3.5ｇ）が出土している。下層からの混入である可能性が高い。

所見：埋没土はAs-B軽石を含むことが多く、確認面や形状等から中世以降に属すると考えられる。

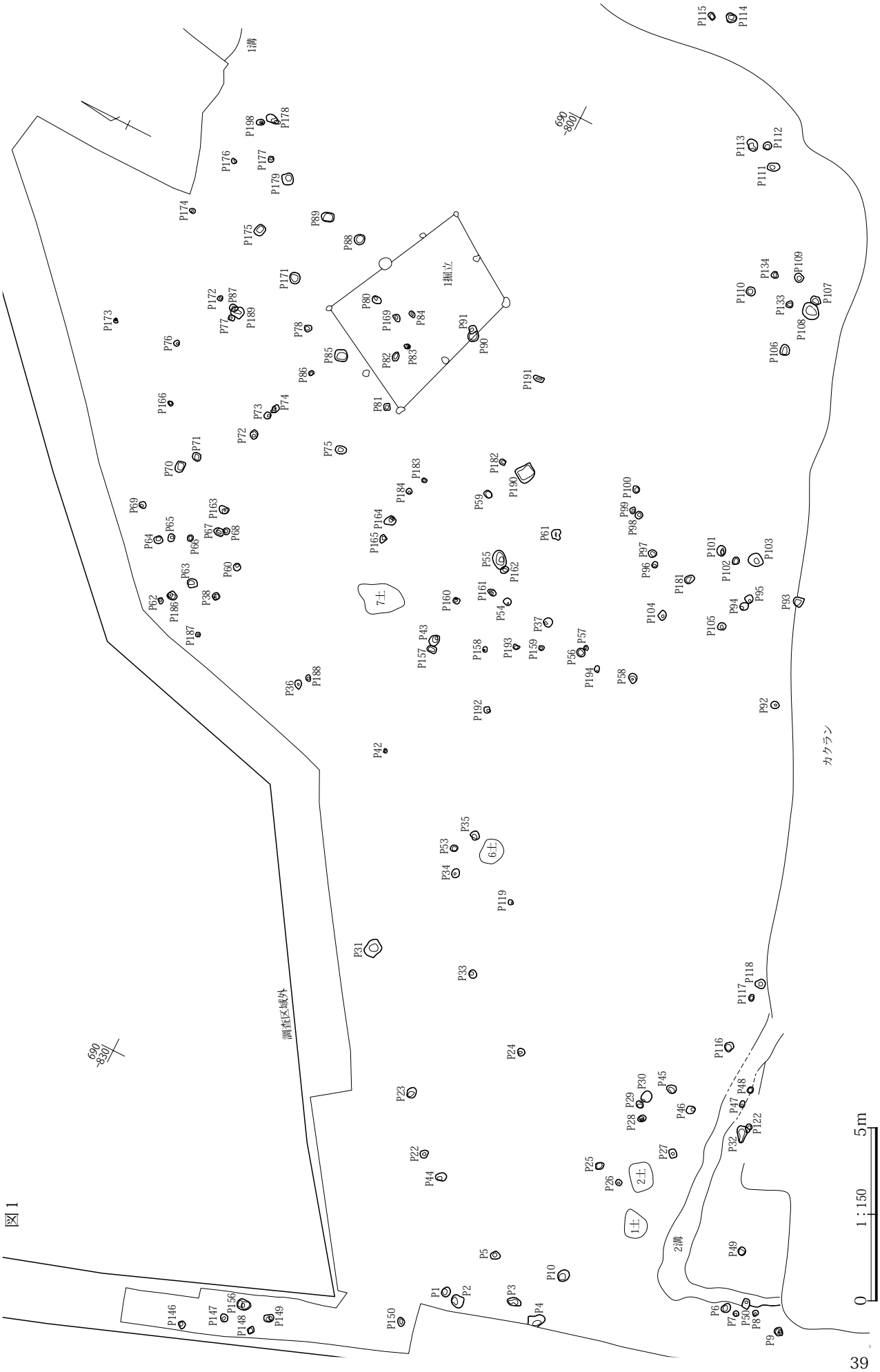
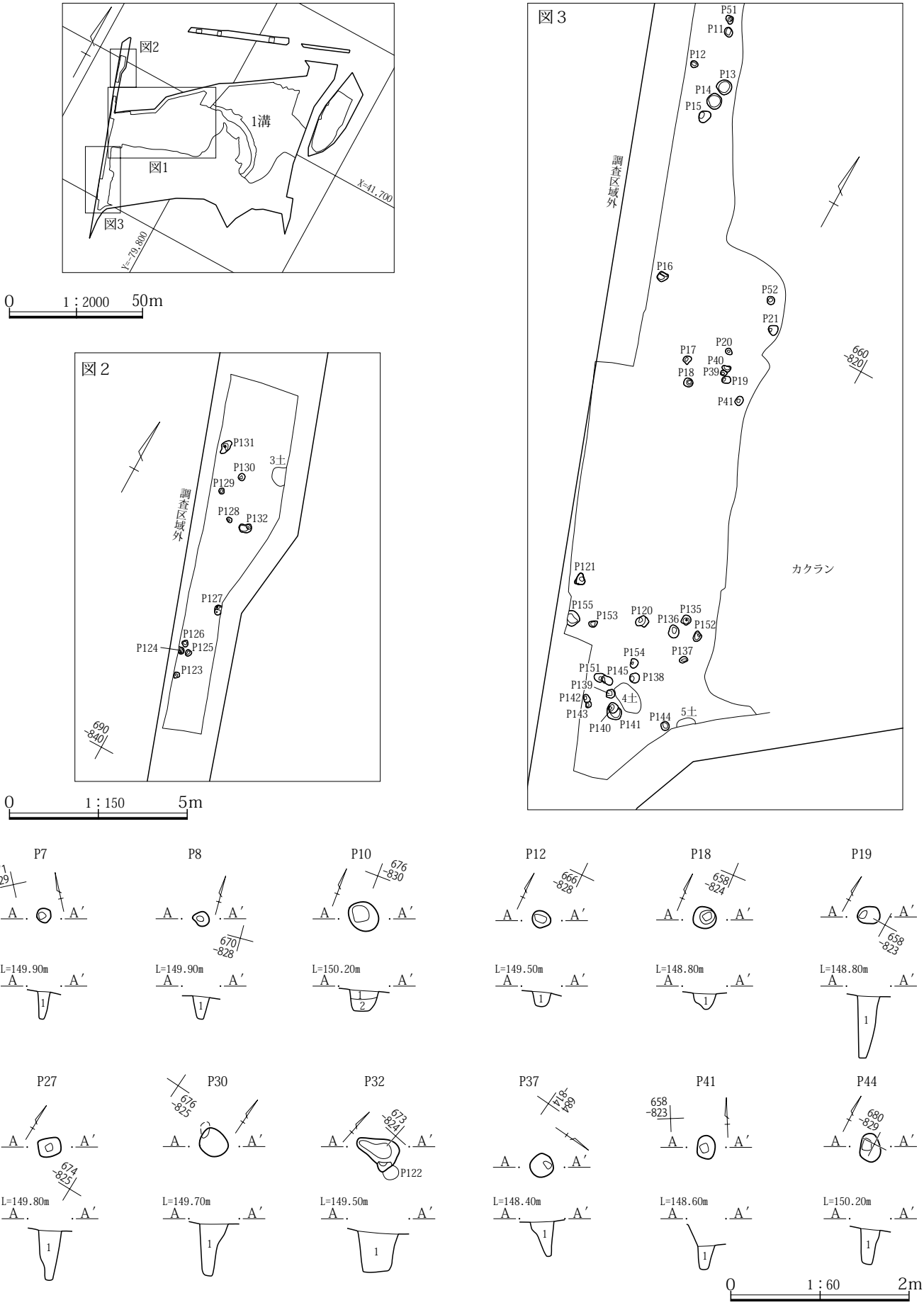
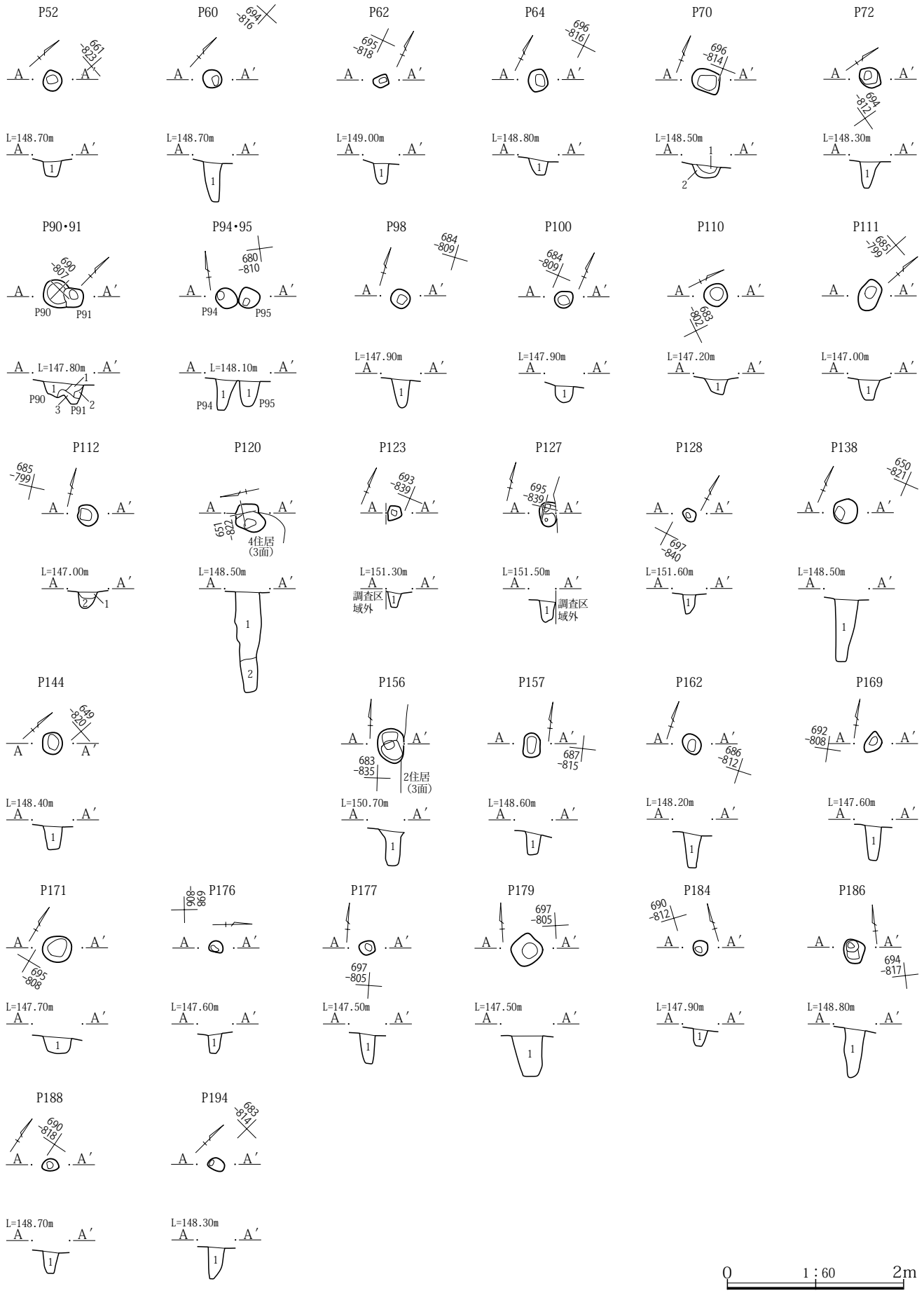


図1

第22図　鴫上Ⅰ遺跡Ａ区１面　ピット全体図（１）



第23図　鴫上Ｉ遺跡Ａ区１面　ピット全体図（２）、ピット平・断面（１）



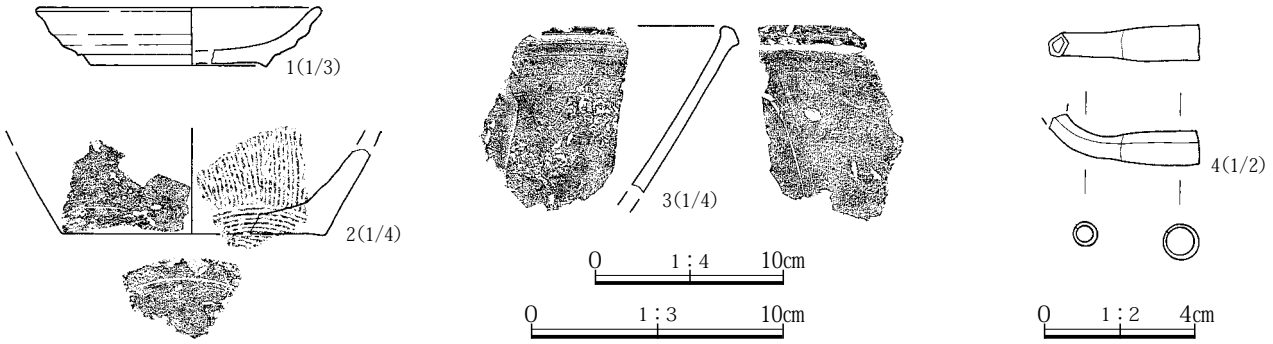
第24図　鳴上Ⅰ遺跡Ａ区１面　ピット平・断面（２）

鴫上Ⅰ遺跡１面Ａ区ピット土層注記

Ｐ７　Ａ－Ａ′
1　黒色土(10YR2/1)　僅かにロームブロックを含む。締まりのある土。
Ｐ８・12　Ａ－Ａ′
1　暗褐色土(10YR3/4)　径５㎜のロームブロックを２％程度と白色鉱物粒を僅かに含む軟質土。
Ｐ10　Ａ－Ａ′
1　黒褐色土(10YR2/3)　径１㎜以下の白色鉱物粒とAs-BP及び径20㎜のロームブロックを少量含む軟質土。
2　褐色土(10YR4/6)　ローム粒と径２～３㎜のAs-BPを30％程度含む。締まりのある土。
Ｐ18　Ａ－Ａ′
1　暗褐色土(10YR3/4)　径５㎜のロームブロックを２％程度と白色鉱物粒を僅かに含む。締まりのある土。
Ｐ19　Ａ－Ａ′
1　黒褐色土(10YR3/1)　径１～２㎜のAs-Bが多く混入し、径５㎜のAs-BPが少量入る。締まりのある土。
Ｐ27　Ａ－Ａ′
1　暗褐色土(10YR3/4)　径５㎜のロームブロックを２％程度と白色鉱物粒を僅かに含む軟質土。根による撹乱がある。
Ｐ30　Ａ－Ａ′
1　黒褐色土(10YR3/2)　径１㎜のAs-Bを多く含む。径５㎜のロームブロックと白色鉱物粒を少量含む。
Ｐ32　Ａ－Ａ′
1　黒褐色土(10YR3/1)　少量のロームブロックとAs-BPを含む。
Ｐ37　Ａ－Ａ′
1　暗褐色土(10YR3/4)　径５㎜のロームブロックを２％程度と白色鉱物粒及び炭化物を僅かに含む軟質土。
Ｐ41　Ａ－Ａ′
1　黒褐色土(10YR3/1)　径１～２㎜のAs-Bが多く混入し、径５㎜のAs-BPが少量入る。締まりのある土。上位は撹乱溝により欠損している。
Ｐ44　Ａ－Ａ′
1　黒褐色土(10YR3/1)　径５㎜以下のAs-Cを含む。締まりのある土。
Ｐ52　Ａ－Ａ′
1　黒褐色土(10YR2/2)　僅かに白色鉱物粒とロームブロックを10％程度含む。締まりのある土。
Ｐ60　Ａ－Ａ′
1　黒褐色土(10YR2/2)　径５㎜程度のAs-BPが少量と白色鉱物粒が少量入る。締まりのある土。
Ｐ62　Ａ－Ａ′
1　黒色土(10YR2/1)　径５㎜以下のAs-Cを少量含む軟質土。
Ｐ64・100　Ａ－Ａ′
1　黒褐色土(10YR3/2)　ローム粒とロームブロック及び黒色土ブロックの混土層で軟質土。
Ｐ70・72　Ａ－Ａ′
1　暗褐色土(10YR3/4)　径５㎜のロームブロックを２％程度と白色鉱物粒とAs-BPを僅かに含む軟質土。
2　暗褐色土(10YR3/4)　As-Cとロームブロックが少量入る締まりのある土。
Ｐ90　Ａ－Ａ′
1　黒褐色土(10YR3/1)　径２㎜以下のAs-Cと白色鉱物粒を赤褐色鉱物粒少量含む。軟質土。
Ｐ91　Ａ－Ａ′
1　黒褐色土(10YR3/1)　径２㎜以下のAs-Cと白色鉱物粒を少量含む。締まりのある土。
2　黒褐色土(10YR3/2)　ローム粒を15％含む締まった土。
3　灰黄褐色土(10YR4/2)　ローム粒を30％含む軟質土。
Ｐ94　Ａ－Ａ′
1　黒褐色土(10YR2/3)　径２～３㎜のAs-Cと赤褐色鉱物粒を３％程度含む。締まりのある土。
Ｐ95　Ａ－Ａ′
1　黒褐色土(10YR2/2)　径３～５㎜のAs-Cを２％程度含む。締まりのある土。
Ｐ98　Ａ－Ａ′
1　暗褐色土(10YR3/3)　僅かに径２㎜のAs-Cを含む他に褐色土ブロックを20％程度混入した軟質土。
Ｐ110～112　Ａ－Ａ′
1　暗褐色土(10YR3/4)　径２㎜以下のAs-Bを含む砂質土。締まりのある土。
2　暗褐色土(10YR3/4)　白色鉱物粒を僅かに含む。締まりのある土。
Ｐ120　Ａ－Ａ′
1　黒褐色土(10YR3/2)　As-Bを多く含む砂質土。（３面４号住居南東壁掘り込み面で確認できた。）
2　暗褐色土(10YR3/4)　やや締まりのある土。
Ｐ123　Ａ－Ａ′
1　黒色土(10YR2/1)　ローム粒子を少量含む。白色鉱物粒を含む。（軟質土）
Ｐ127　Ａ－Ａ′
1　褐色土(10YR4/4)　径５㎜のロームブロックと黒色土ブロックを含む。締まりのある土。
Ｐ128　Ａ－Ａ′
1　黒色土(10YR2/1)　ローム粒子を少量含む。白色鉱物粒を含む。（軟質土）
Ｐ138　Ａ－Ａ′
1　黒褐色土(10YR2/3)　径１㎜のAs-Bとロームブロックを少量含む。締まりのある砂質土。
Ｐ144　Ａ－Ａ′
1　黒褐色土(10YR2/3)　僅かに白色鉱物粒と赤褐色土鉱物粒を含む軟質土。
Ｐ156　Ａ－Ａ′
1　暗褐色土(10YR3/3)　白色鉱物粒、赤褐色鉱物粒を少量と径５～30㎜のロームブロックを５％程度含む。締まりのある土。
Ｐ157　Ａ－Ａ′
1　黒褐色土(10YR2/3)　径５㎜以下のAs-YPと径10㎜前後のロームブロックを含む。締まりのある土。
Ｐ162　Ａ－Ａ′
1　暗褐色土(10YR3/3)　径２㎜のAs-BPと白色軽石を５％程度含む。締まりのある土。
Ｐ169　Ａ－Ａ′
1　黒褐色土(10YR3/1)　白色鉱物粒とローム粒少量とロームブロックを含む。締まりのある土。
Ｐ171　Ａ－Ａ′
1　黒褐色土(10YR3/1)　径１㎜の白色鉱物粒と赤褐色鉱物粒を５％程度とロームブロックを少量含む。締まりのある土。
Ｐ176　Ａ－Ａ′
1　暗褐色土(10YR3/4)　径５㎜以下のAs-BPを15％程度含む。締まりのある土。
Ｐ177　Ａ－Ａ′
1　黒褐色土(10YR3/2)　径５㎜以下のAs-YPを20％程度とロームブロックを少量含む。締まりのある土。
Ｐ179　Ａ－Ａ′
1　黒色土(10YR2/1)　径５㎜以下のAs-YPを10％程度と白色鉱物粒を少量含む。締まりのある土。
Ｐ184　Ａ－Ａ′
1　黒褐色土(10YR2/2)　白色鉱物粒、ローム粒とロームブロックを含む。締まりのある土。
Ｐ186　Ａ－Ａ′
1　黒褐色土(10YR3/1)　径２～３㎜のAs-YPを５％程度とロームブロックを少量含む。締まりのある土。
Ｐ188　Ａ－Ａ′
1　黒褐色土(10YR2/3)　径５㎜以下のAs-YPと径10㎜前後のロームブロックを含む。締まりのある土。
Ｐ194　Ａ－Ａ′
1　暗褐色土(10YR3/4)　径５㎜のロームブロックとローム粒を10％程度含む軟質土。

（５）遺構外出土の遺物（第25図　PL.75）

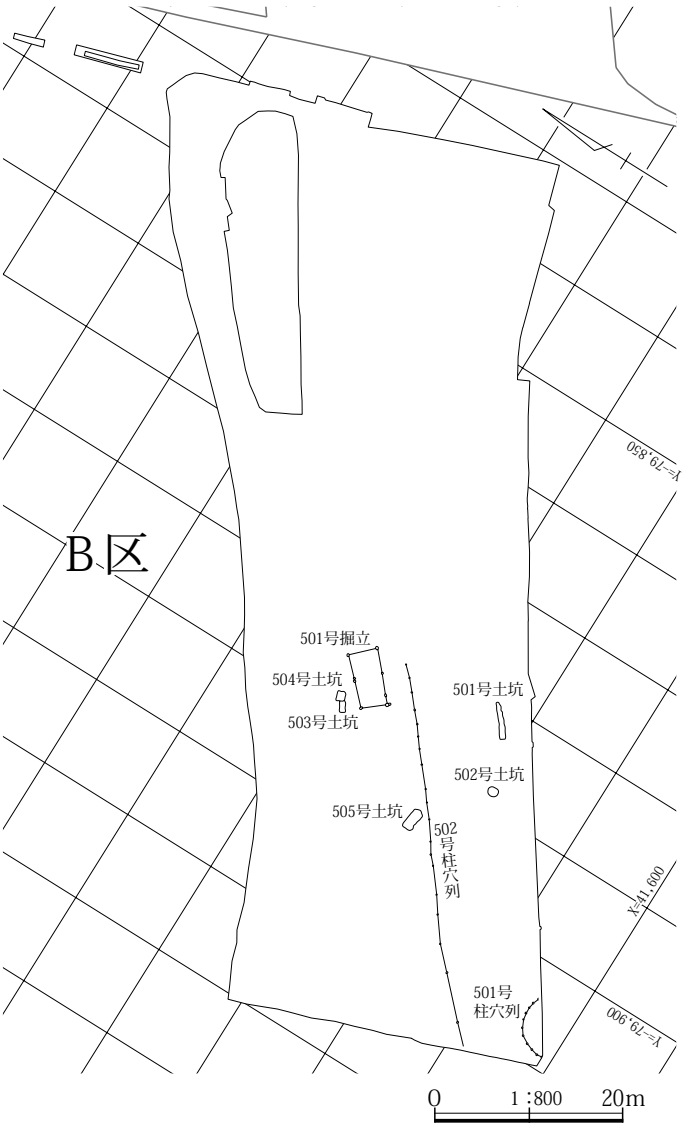
鴫上Ⅰ遺跡Ａ区１面の調査中に、遺構に伴わない形で遺物が出土した。ここでは出土した遺物のうち、瀬戸・美濃陶器２点（灰釉皿１、すり鉢２）、在地系土器１点（焙烙鍋３）、銅製品１点（キセル４）を掲載した。



第25図　鴫上Ⅰ遺跡Ａ区１面　遺構外出土遺物

4　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区の遺構と遺物

鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区に属する遺構は、掘立柱建物１棟、柱穴列２条、土坑５基、ピット172基である。鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区は、鴫上Ⅰ遺跡Ａ区からの地続きであり、南東方向緩やかに傾斜している。１面に相当する遺構は、主に調査区西部から確認されており、調査区東部に関しては該当する遺構が確認できなかった。遺構の分布は、環状の柱穴列が調査区南西隅、直線の柱穴列が調査区西部中央に土坑、ピット群が調査区中央部に集中している。遺構の埋没土は、主にAs-B軽石及びAs-C軽石が混入する暗褐色土、黒色土、及び褐灰色土である。



第26図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区１面　全体図

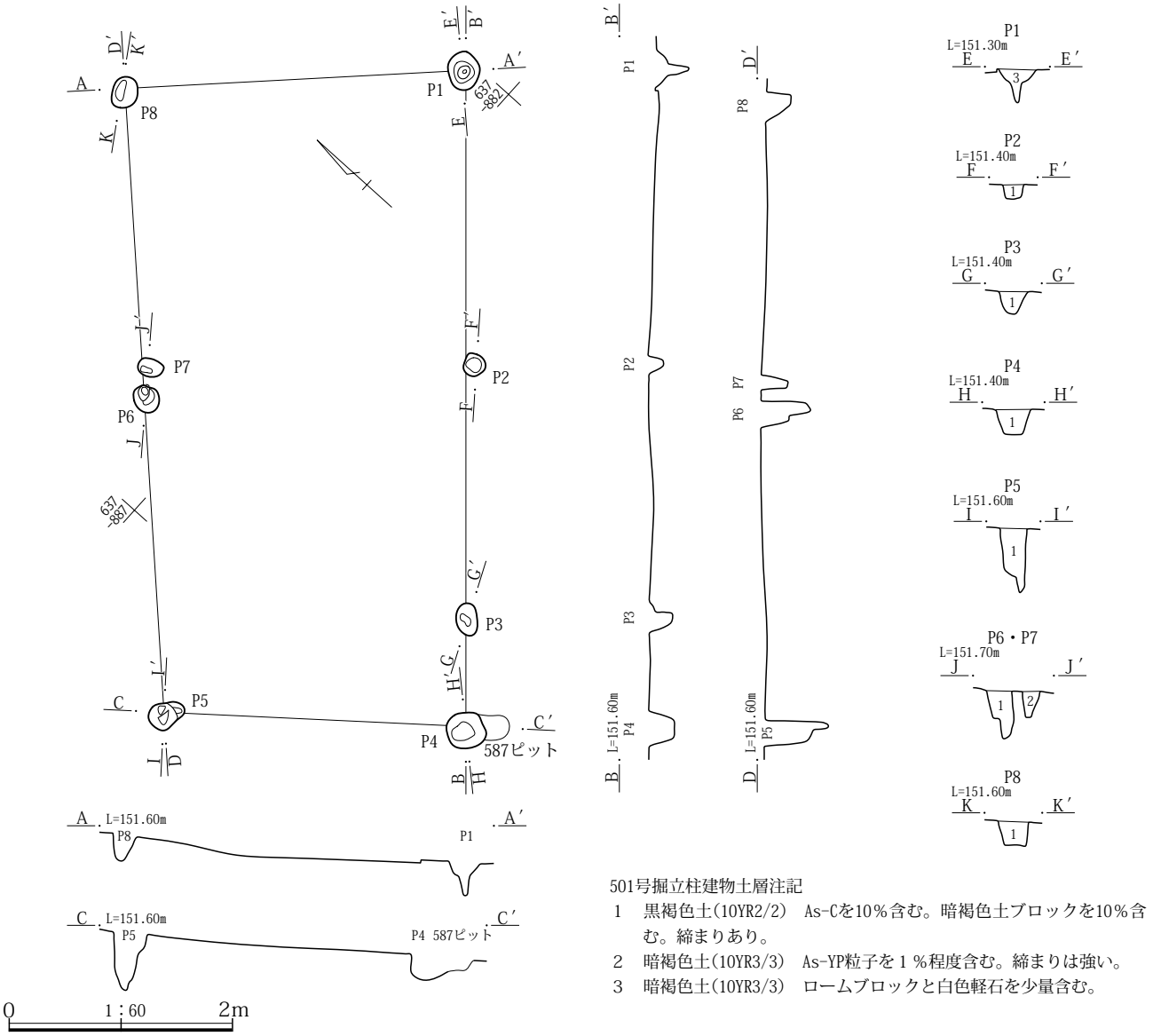
（１）掘立柱建物

調査区中央のピット群の中にある。確認できたのは１棟のみである。その他のピット群の中には、柱穴の可能性があるものも否定できないが、位置関係等その他の資料に乏しく、掘立柱建物の復元には至らなかった。

501号掘立柱建物（第27図　PL.12）

位置：633 ～ 639・-881 ～ -888　**規模形態：**梁行２間・桁行３間（2.71 ～ 3.08m×5.55 ～ 5.88m）、面積16.43㎡である。南には、南辺に平行して502号柱穴列が調査区全体を東西方向に横断している。本掘立柱建物との関連施設であると考えられる。建物は、東西方向に棟方向を取る側柱建物である。柱間は桁行が2.27 ～ 2.84m、梁行が2.71 ～ 3.08mである。確認した柱穴の柱筋は、

おおむね通っている。　**主軸方位：**Ｎ－47°－Ｗ　**柱穴：**Ｐ１～８から成る。東列、西列の中央の柱穴が確認できなかった。柱穴の平面形は楕円形である。長径0.20～0.35m、短径0.19～0.32m、深さ0.14～0.58mであり、規模や深さにはややばらつきがあるものの、位置関係等から、同一施設のものであると考える。　**重複遺構：**なし。　**遺物：**なし。　**所見：**埋没土はAs-C軽石を含む暗褐色土及び黒褐色土であり、中世以降の掘立柱建物である。周辺に位置する隅丸長方形の501・503・504号土坑と主軸方位が近似しており、関連施設として想定される。



501号掘立柱建物土層注記
1　黒褐色土(10YR2/2)　As-Cを10％含む。暗褐色土ブロックを10％含む。締まりあり。
2　暗褐色土(10YR3/3)　As-YP粒子を１％程度含む。締まりは強い。
3　暗褐色土(10YR3/3)　ロームブロックと白色軽石を少量含む。

第27図　鴫上Ｉ遺跡Ｂ区１面　501号掘立柱建物

第４表　鴫上Ｉ遺跡Ｂ区１面501号掘立柱建物　計測表

建物全体の規模		２×３間・東西棟				面積	16.43㎡		
主軸方位		Ｎ－47°－Ｅ				位置	Ｘ＝633～639　Ｙ＝-881～-888		
桁・梁の規模（m）		柱穴No.	柱穴規模（m）			形状	次柱穴との間隔（m）	旧ピットNo.	備考
			長径	短径	深さ				
東辺	5.88	Ｐ１	0.35	0.29	0.31	楕円形	2.62	684	
		Ｐ２	0.20	0.19	0.14	楕円形	2.27	581	
		Ｐ３	0.29	0.19	0.20	楕円形	1.00	578	
南辺	2.71	Ｐ４	0.33	0.32	0.23	楕円形	2.71	588	587ピットと重複
		Ｐ５	0.34	0.21	0.58	楕円形	2.84	522	
西辺	5.55	Ｐ６	0.25	0.22	0.43	楕円形	0.19	508	
		Ｐ７	0.23	0.16	0.23	楕円形	2.52	509	
北辺	3.08	Ｐ８	0.28	0.23	0.24	楕円形	Ｐ１へ3.08	504	

（２）柱穴列

明瞭な柱穴列は２条確認できた。環状を呈するものと長い直線を呈するものである。直線を呈する502号柱穴列は、501号掘立柱建物の棟方向と走行が一致しており、関連施設の可能性が指摘できる。また、傾斜に平行に走行している。環状を呈する501号柱穴列は、南部の調査区域外に続いている可能性がある。

なお、501・502号柱穴列については、削平が進んだ段階での検出であったため、各柱穴の上端が明瞭でない。

501号柱穴列（第29・30図　PL.12）

概要：調査区南東隅に環状に確認された。11基の連続するピットを柱穴列とした。柱間は､等間隔でおおむね0.7m前後である。形状は円形の一部を呈しており、南部の調査区域外に残りの遺構があると推察できる。柱穴の埋没土は、全体的に締まりが弱く、突棒のような工具痕が認められる。南部の形状が明らかでないが、円状を描くと仮定した場合、直径は6.4mと推察される。

位置：601 ～ 604・-903 ～ -908

規模形状：本柱穴列は、11本の柱からなり、全長7.33m、柱穴列の長さ5.9mを測り、柱間は芯々距離で0.56 ～ 0.98m、平均0.73mを測る。弧状柱筋上に全柱穴が配置されている。確認されたのは一部であり、南部の調査区域外に関連施設があり、合わせて機能すると思われる。

方向：計測不能

柱穴：遺構を構成しているピットは11基を確認した。位置、規模及び深さより、同一施設のものと思われる。埋没土も近似している。各柱穴の規模及び埋没土は次の通りである。

（長径×短径×深さ㎝）

Ｐ１	(11)×16×28	Ｐ２	18×16×22
Ｐ３	18×17×26	Ｐ４	18×16×36
Ｐ５	18×15×37	Ｐ６	16×15×37
Ｐ７	14×13×14	Ｐ８	16×16×41
Ｐ９	16×14×19	Ｐ10	18×16×22
Ｐ11	－×－×17		

Ｐ１・５・８・９・10は均質の褐灰色土で埋没しており､Ｐ６･７は同質でAs-YPや茶褐色土軽石を含む。Ｐ２・３・４は白色軽石を含む黒色土で埋没している。Ｐ11は褐灰色土で埋没しており土層乱れ空隙がある。ほぼ同質の土層であり、同時期の埋没の可能性が高い。

柱穴の規格が一定しており、全ての柱穴の形状が類似している。同一の道具で工作した可能性が高く、柱穴掘削時の技術レベルも一定していると考えられる。

その他：本柱穴列はおよそ現代尺の１尺を単位として設置されている。環状を呈しており、建物の一部という可能性を否定できない｡土地を区切る役割の可能性は低い。南部の延長部分の把握は難しくなっているが、柱穴列が繋がる可能性は極めて高い。周囲に複数のピットが確認されているが、主筋上にないため関連がなく別遺構であると考えられる。

重複遺構：503号住居（２面）に後出している。各柱穴の掘り込みは住居の使用面に達している。

遺物：なし。

所見：北側6.8mの距離にある502号柱穴列と隣接しているものの、関連は明瞭でない。また、501号掘立柱建物との関連についても明瞭でない。確認された形状は環状を呈しており、南に続くと思われる残りの形状は明瞭でない。形状から、何らかの物や他の施設を囲い込む役割が推察されるが、本施設の使用目的について明瞭にするためには、資料に欠けている。中世以降の柱穴列であると考える。

502号柱穴列（第28 ～ 31図　PL.13）

概要：調査区西部を1.5m程の間隔で、ほぼ直線に東西に横断する。20基の連続するピットを柱穴列とした。調査区中央部のピット群を南北に分ける。

位置：608 ～ 634・-881 ～ -911

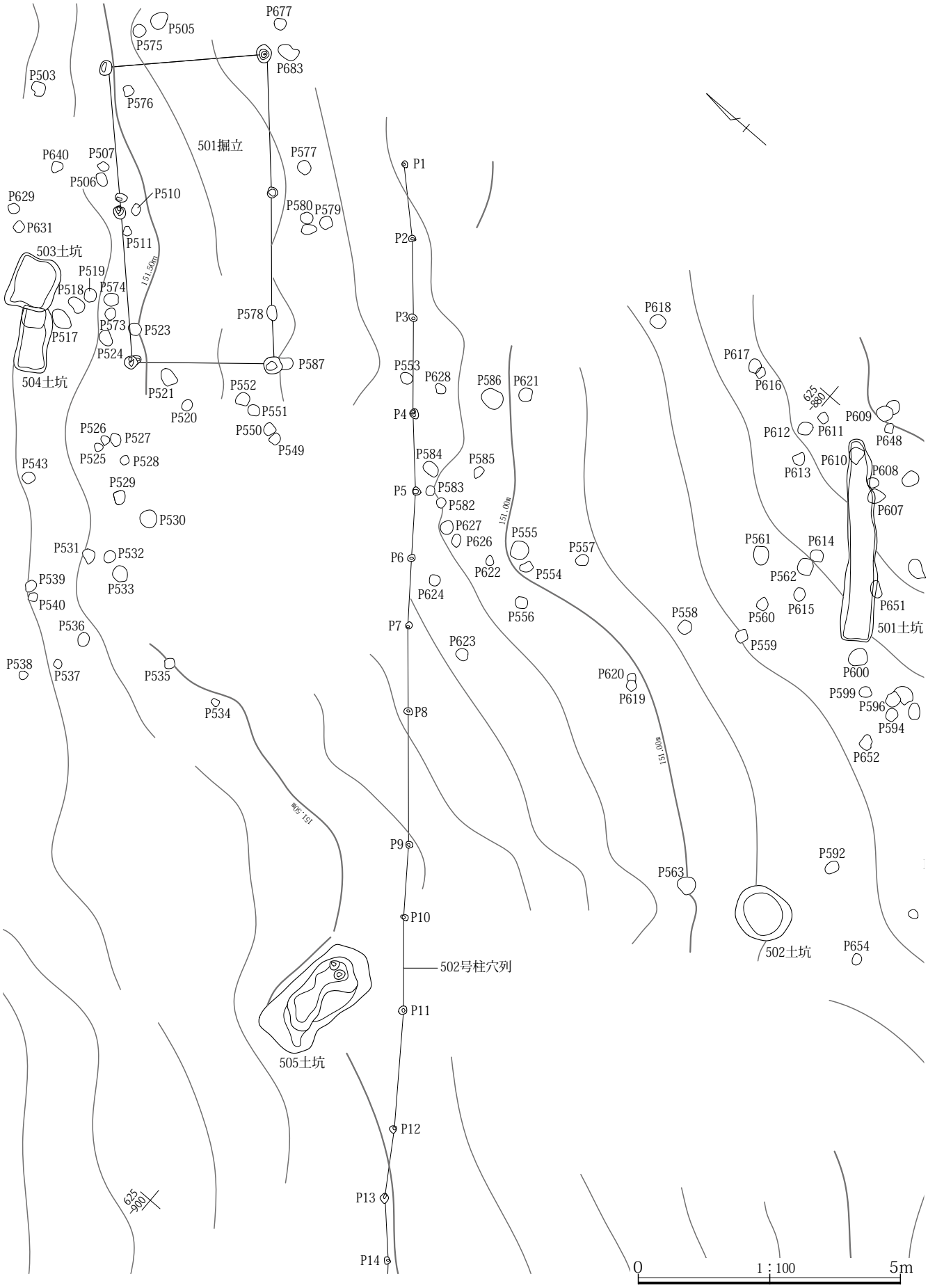
規模形状：本柱穴列は、20本の柱からなり、全長39.56m、柱穴列の長さ39.25mを測り、柱間は芯々距離で1.22 ～ 5.14m、平均2.08mを測る。柱筋上に全柱穴が配置されている。確認されたのは一部であり、東西に関連の施設が続いていると推察される。

方向：Ｎ－50°－Ｅ

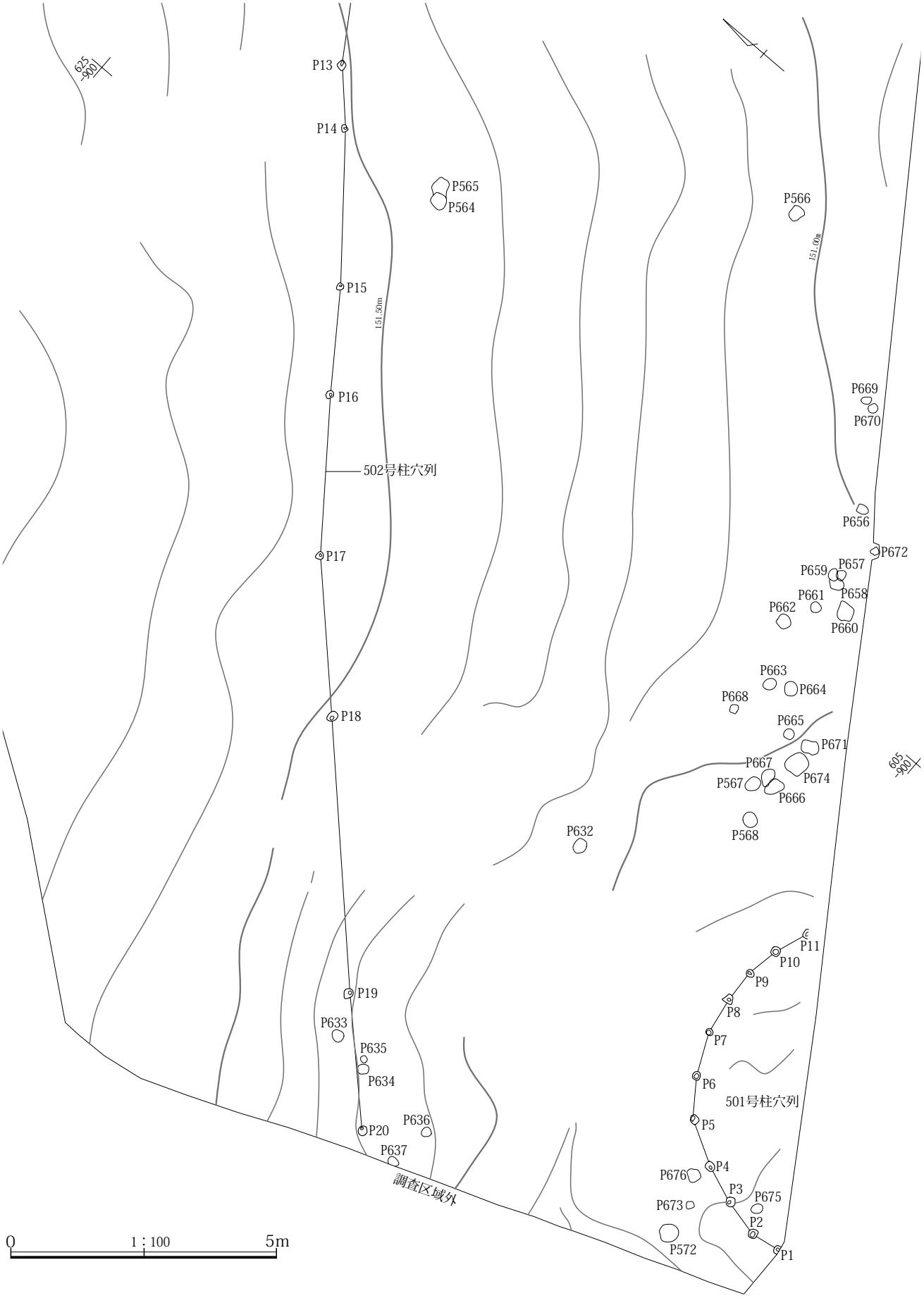
柱穴：遺構を構成しているピットは20基を確認した。位置、規模及び深さより、同一施設のものと思われる。埋没土も近似している。各柱穴の規模及び埋没土は次の通りである。

（長径×短径×深さ㎝）

Ｐ１	13×11×13	Ｐ２	13×11×14



第28図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区１面　501号柱穴列



第29図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区１面　501・502号柱穴列

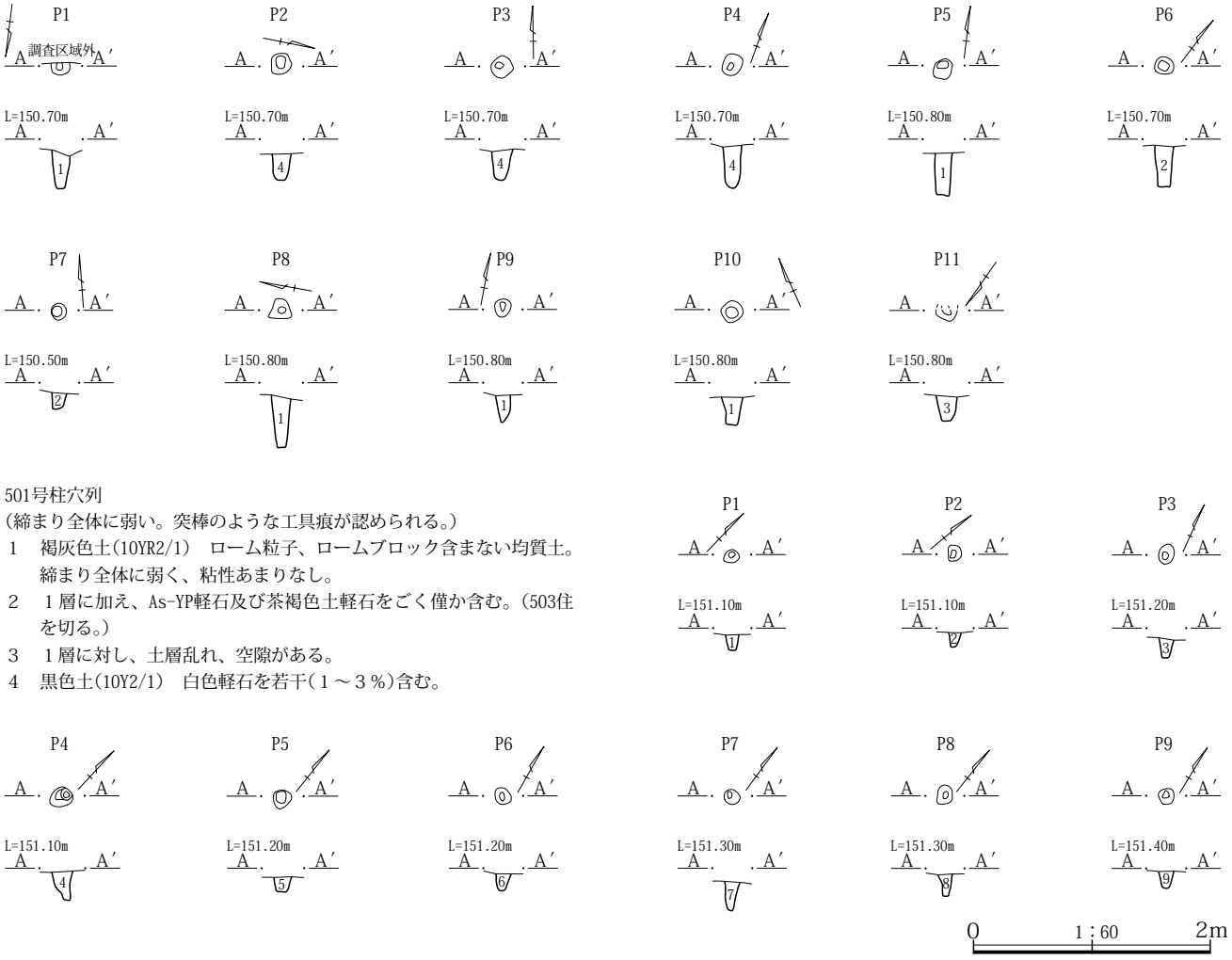
Ｐ３	17×13×17	Ｐ４	20×16×24
Ｐ５	16×15×10	Ｐ６	15×13×14
Ｐ７	14×12×25	Ｐ８	16×13×19
Ｐ９	13×12×14	Ｐ10	13×11×９
Ｐ11	16×16×10	Ｐ12	14×13×30
Ｐ13	16×15×21	Ｐ14	13×11×18
Ｐ15	14×13×23	Ｐ16	16×14×13
Ｐ17	16×15×20	Ｐ18	22×16×34
Ｐ19	21×17×27	Ｐ20	18×16×33

Ｐ１～５・７～10・12は黒褐色で埋没しており、柱穴によっては黄白軽石、As-YP、ロームを含む。締まりや粘性があるものが多い。Ｐ６は、褐灰色土で埋没しており締まりがある。Ｐ11・13～20までの土層は不明である。おおよそ同質の土層であり、同時期の埋没の可能性が高いと考える。柱穴の規格が一定しており、全ての柱穴の形状が類似している。同一の道具で工作した可能性が高く、柱穴掘削時の技術も安定していると考えられる。　**その他：**本柱穴列はおよそ現代尺の１尺を単位として設置されている。全長が長く建物の一部という可能性は低い。土地を区切る施設の可能性が否定できない。東西の延長部分の把握は難しくなっているが、東西に柱穴列が繋がる可能性は高い。調査区中央のピット群は、主筋上にないため関連がなく、別遺構であると考えられる。

重複遺構：501・506・511号住居（２面）に後出している。柱穴の掘り込みは各住居の使用面に達している。

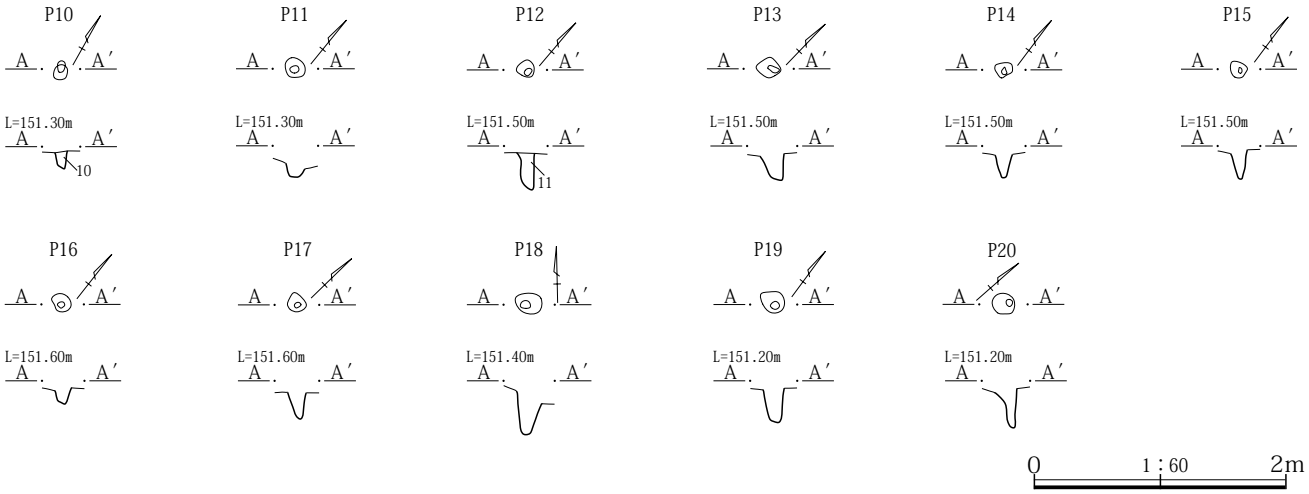
遺物：なし。

所見：北側2.8mに位置する501号掘立柱建物と隣接している。軸方向は501号掘立柱建物の棟方向と近似している。周囲に位置する501・503・504号土坑と共に、501号掘立柱建物の関連施設の可能性が否定できない。中世以降の柱穴列であると考える。



501号柱穴列
（締まり全体に弱い。突棒のような工具痕が認められる。）
1　褐灰色土(10YR2/1)　ローム粒子、ロームブロック含まない均質土。締まり全体に弱く、粘性あまりなし。
2　１層に加え、As-YP軽石及び茶褐色土軽石をごく僅か含む。（503住を切る。）
3　１層に対し、土層乱れ、空隙がある。
4　黒色土(10Y2/1)　白色軽石を若干（１～３％）含む。

第30図　鳴上Ｉ遺跡Ｂ区１面　501・502号柱穴列ピット平・断面



502号柱穴列
1　黒褐色土(10YR3/2)　黄白色軽石を若干(１～３％)含む。締まりややあり、粘性あまりない。
2　黒褐色土(10YR3/2)　締まり粘性ともにあまりなし。
3　黒褐色土(10YR3/2)　締まりややあり、粘性あまりない。
4　黒褐色土(10YR3/2)　不均質。締まりなく、粘性ややあり。
5　黒褐色土(10YR3/2)　地山ローム僅かに含む。締まりややあり、粘性あまりない。
6　褐灰色土(10YR2/1)　黒色味のある平安住居覆土に類似する。締まりの弱い均質土。粘性ややあり。
7　黒褐色土(10YR3/2)　黄白色軽石を不均質に少量(５～10％)含む。締まりややあり、粘性あまりない。
8　黒褐色土(10YR3/2)　地山ローム僅かに含む。黄白軽石を不均質に多量(15～25％)に含む。締まりあまりなく、粘性ややあり。
9　黒褐色土(10YR3/2)　締まり欠き、粘性ややあり。
10　黒褐色土(10YR3/2)　締まりあまりなく、粘性ややあり。
11　黒褐色土(10YR3/2)　As-YP軽石を少量(５～10％)含む。締まり欠き、粘性ややあり。

第31図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区１面　502号柱穴列ピット平・断面

(3)土坑

鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区の土坑(第32図　PL.13)

鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区では５基の土坑を調査した。そのほとんどは調査区西部に位置している。大きく２種類の形態に分類できる。一つは、平面形が隅丸長方形であり断面形が逆台形を呈し、底面が平坦なものである。501・503・504・505号土坑が該当する。501号土坑は、削平が進んでおり、東側の形状が明瞭でない。505号土坑は、断面形が深く不定形である。もう一つは、平面形が楕円形を呈しており断面形がすり鉢状に上部が広く下部が狭いものである。502号土坑が該当する。501・503・504号土坑の方位は、近接する掘立柱建物の棟方向及び柱穴列に一致する。詳細については第37表に記した。埋没土はAs-C軽石、及び撹拌された土を含むが、いずれも中世以降に属すると考えられる。501・503・504号土坑は、本調査区に位置する掘立柱建物及び柱穴列を含んだ生活圏に関連する施設であると考えられる。その他の土坑に関しては、明瞭でない。

501号土坑(第32図　PL.13)

位置：622・-882

形状：隅丸長方形、断面形逆台形、平底

規模：3.82m×0.62m　**残存深度：**0.20m

主軸方位：Ｎ－50°－Ｅ

埋没土層:暗褐色土で埋没している。ロームを斑に含み、締まりがある。

重複：なし。

遺物：認められない。

所見：北に位置する501号掘立柱建物及び502号柱穴列と主軸方位が近似しており、同時期に展開された施設の可能性があるが、本土坑の具体的な使用目的は確認できなかった。時期を比定する明確な資料は見つからなかったが、周囲の遺構の状況、確認面、及び形状からおおむね中世の可能性を有すると思われる。

502号土坑(第32図　PL.13)

位置：619・-888

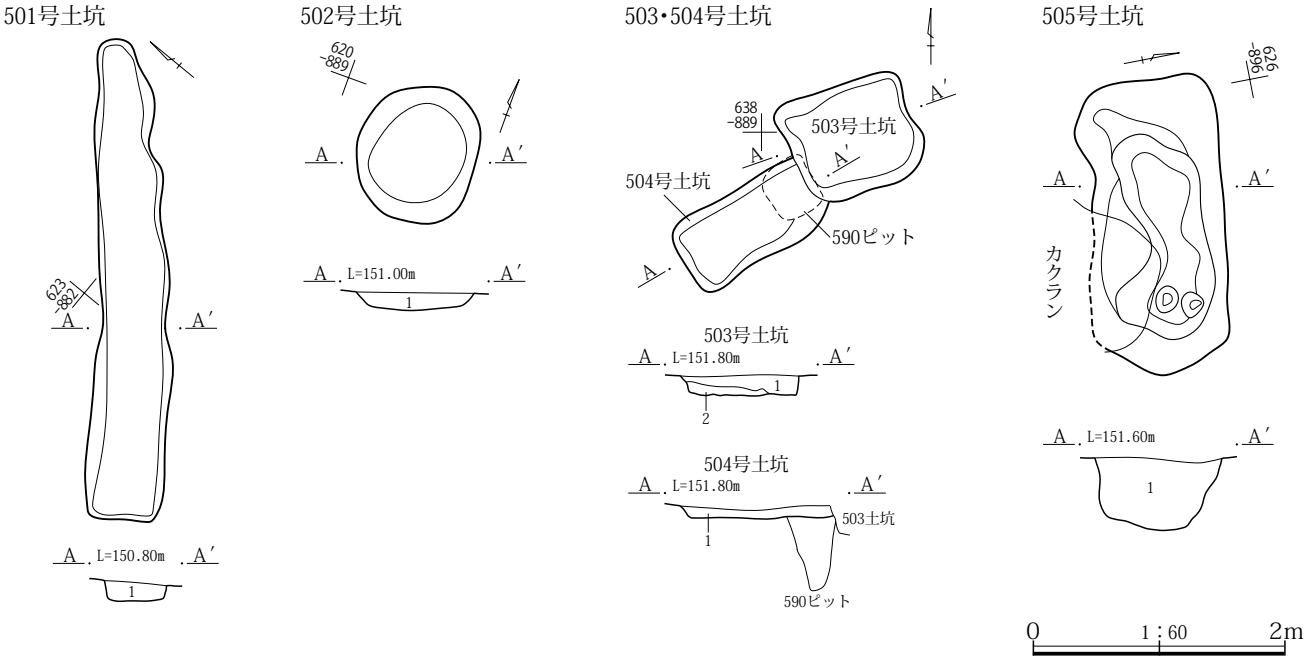
形状：楕円形、丸底で断面はレンズ状を呈する。
規模：1.10m×0.95m　**残存深度：**0.17m
主軸方位：Ｎ－０°
埋没土層：黒色土で埋没している。ロームを少量含み、締まりや粘性はない。
重複：なし。
遺物：認められなかった。
所見：本土坑の具体的な使用目的は確認できなかった。時期を比定する明確な資料は見つからなかったが、周囲の遺構の状況、確認面、及び形状から、501号掘立柱建物及び502号柱穴列と同時期に展開された施設の可能性は低く、おおむね近世以降の可能性を有すると思われる。

503号土坑（第32図　PL.13）
位置：637・-888
形状：隅丸長方形、断面形逆台形、平底
規模：0.98m×0.86m　**残存深度：**0.21m
主軸方位：Ｎ－70°－Ｅ
埋没土層：暗褐色土で埋没している。下層はロームブロックを不均等に含む。
重複：504号土坑、590号ピットと重複している。503号土坑が504号土坑を壊しており、503号土坑が新しい。また、断面より590号ピットは504号土坑より古い。
遺物：認められなかった。
所見：南に位置する501号掘立柱建物及び502号柱穴列と主軸方位が近似しており、同時期に展開された施設の可能性が高いが、本土坑の具体的な使用目的は確認できなかった。時期を比定する明確な資料は見つからなかったが、周囲の遺構の状況、確認面、及び形状からおおむね中世の可能性を有すると思われる。504号土坑の後、作り直したものであると推察される。

504号土坑（第32図　PL.13）
位置：637・-889
形状：隅丸長方形、断面形逆台形、平底
規模：(1.15)m×0.58m　**残存深度：**0.15m
主軸方位：Ｎ－59°－Ｅ
埋没土層：暗褐色土で埋没している。白色軽石を少量含む。
重複：503号土坑、590号ピットと重複している。断面より、503号土坑より古く、590号ピットより新しい。
遺物：認められなかった。
所見：南に位置する501号掘立柱建物及び502号柱穴列と主軸方位が近似しており、同時期に展開された施設の可能性が高いが、本土坑の具体的な使用目的は確認できなかった。時期を比定する明確な資料は見つからなかったが、周囲の遺構の状況、確認面及び形状からおおむね中世の可能性を有すると思われる。

505号土坑（第32図　PL.13）
位置：625・-895
形状：隅丸長方形、丸底で断面は不定形
規模：2.36m×1.05m　**残存深度：**0.60m
主軸方位：Ｎ－82°－Ｗ
埋没土層：黒褐色土で埋没している。白色軽石を少量含み、締まりがある。
重複：なし。
遺物：認められなかった。
所見：本土坑の具体的な使用目的は確認できなかった。時期を比定する明確な資料は見つからなかったが、周囲の遺構の状況、確認面、埋没土、及び形状から、501号掘立柱建物及び502号柱穴列と同時期に展開された施設より古いと考えられ、おおむね中世以降の可能性を有すると思われる。

501号土坑　Ａ－Ａ′
1　暗褐色土(10Y3/3)　黄褐色土を斑状に多量(15～25%)含む。締まりややあり、粘性あまりなし。
502号土坑　Ａ－Ａ′
1　黒色土(10Y2/1)　黄褐色土を少量（５～10%）含む。締まり、粘性ともにあまりなし。近・現代か？
503号土坑　Ａ－Ａ′
1　暗褐色土(10Y3/2)　締まり、粘性ともにあまりなし。
2　暗褐色土(10Y3/2)　ロームブロックを不均質に若干（１～３%）含む。(地山YP軽石層)締まり、粘性ともにあまりなし。
504号土坑　Ａ－Ａ′
1　暗褐色土(10Y3/2)　白色軽石を若干（１～３%）含む。締まり、粘性ともにあまりなし。
505号土坑　Ａ－Ａ′
1　黒褐色土(10YR3/1)　僅かに白色軽石含む。締まりあり、粘性あまりなし。



第32図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区１面　501 ～ 505号土坑

（4）ピット

鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区のピット群（第33 ～ 36図　PL.14 ～ 16）

概要：鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区では、172基のピットを調査した。501号掘立柱建物を中心にして、南東方向へ下る調査区中央部の緩斜面に集中して位置している。

ピット群が位置する緩やかな斜面は、丘陵地の中央付近に位置する。ピット群の集中は斜面全体からみると一様ではなく、掘立柱建物及び土坑等他の遺構の周辺に集中している様相が見て取れる。具体的には、501号掘立柱建物の周辺からその西部にかけて、501号土坑周辺、501号柱穴列の東側である。これらのピット群は、501号掘立柱建物のように建物の柱穴である可能性も否定できないところであるが、柱穴の規模形状、柱間、建物全体の形状など、そのための明確な資料は見つからず、復元には至らなかった。

また、この緩やかな傾斜地は、弥生時代以降、生活の痕跡を重ねてきた経緯が確認できる条件の良い地区であり、中・近世以降も土地利用がされてきていると考えられるが、積極的な生活を示した遺構は確認されなかった。本調査区の特徴である、緩やかな傾斜地の形態は、遺跡一帯の傾向でもある榛名山南東丘陵地における樹枝状の自然浸食を受けない丘陵の中央部分に位置しているため、生活を展開する痕跡が残るものであると考えられる。詳細については第40表に記載した。

位置：調査区中央部の、南東に傾斜している斜面に集中して分布している。

重複：541・542号ピットが重複する。新旧関係は明瞭でない。564号ピットが565号ピットに後出している。596号ピットが595号ピットに後出している。617号ピットが616号ピットに後出している。619号ピットが620号ピットに後出している。658号ピットが657号ピットに後出している。680号ピットが681号ピットに後出している。

規模形態：多くは、楕円形を呈する。これらのピット群は、501号掘立柱建物の周囲に位置している。建物の柱穴である可能性もあるが、掘立柱建物等の復元には至らなかった。

埋没土：埋没土は一様ではないが、主に暗褐色土、黒褐色土、褐灰色土である。稀に黒色土で埋没しているものもある。ロームブロック、白色軽石、As-C軽石を含むことが多い。軟質土及び締まりのある土も多数確認される。

その他：形状及び出土遺物等から、柱穴の可能性が高いという観点で特筆すべきピット47基については図示し、その原因を分類した結果を以下の通り解説する。

・柱痕が推測される形状で、柱穴であった可能性が高いものとして、646号ピットがあげられる。

・形状が整っており深さもあることから、柱穴であった

可能性が高いものとして、502・546・548・568・575・590・613・614・622・631・634・638・639・660・671号ピットがあげられる。

・柱穴を新規に掘り直した様相が伺え、柱穴だった可能性が高いものとして、536、616・617、657・658・659、680・681号ピットがあげられる。

・同じ規模のピットが平行して並んでおり、住居に関連する造作の可能性があるものとして、551・552、564・565、595・596、634・635、666・667号ピットがあげられる。

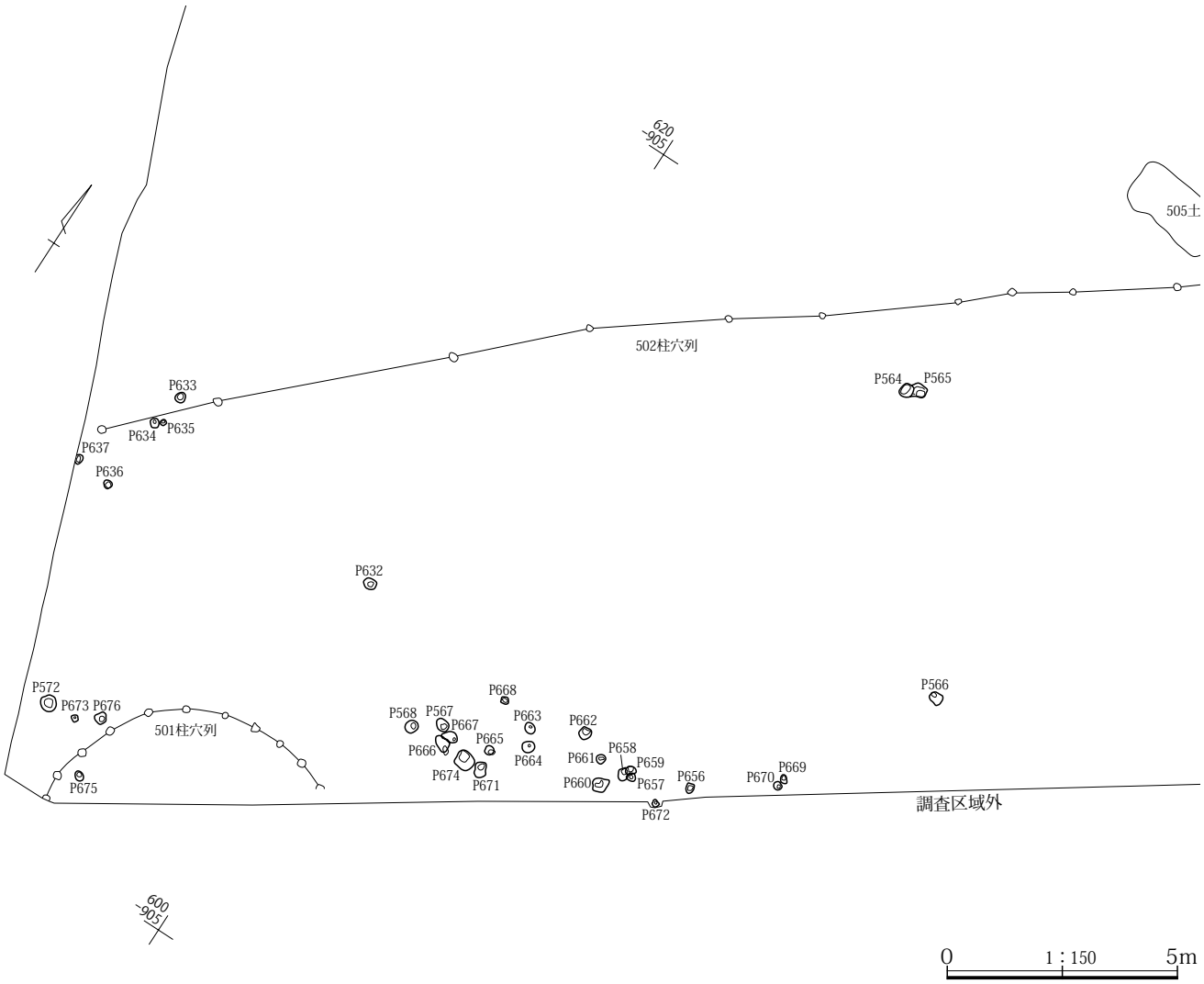
・柱の元を固めた様相が伺え、柱穴であった可能性があるものとして、598号ピットがあげられる。

・柱穴に礫を伴っており柱穴の可能性があるものとして、606号ピットがあげられる。

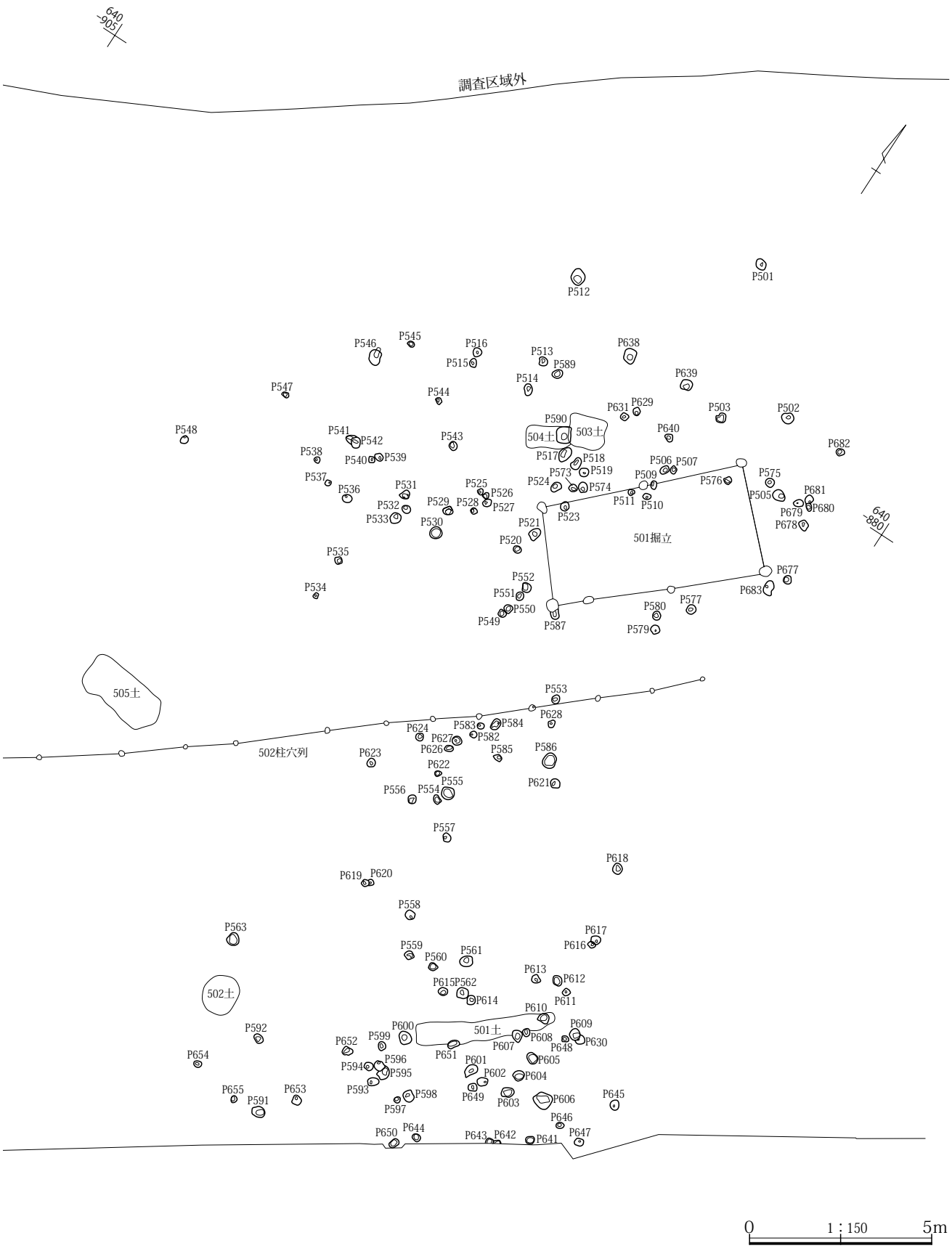
・上部が削平を受けており、底部が形良く残存していると思われ、柱穴の可能性があるものとして、512・514・528・530・572・589・597・600・603・632・633・674号ピットが挙げられる。

遺物：565号ピット須恵器１点（杯１）、567号ピット須恵器１点（杯２）、が出土している。９世紀代及び９世紀後半と比定され下層からの混入であると考える。図示した以外に、524号ピットで土師器（甕類１片）、590号ピットで土師器（甕類４片）、591号ピットで土師器（甕類１片）、564号ピットで土師器（甕類１片）、須恵器（甕類１片）が出土している。いずれも下位からの混入であると考える。

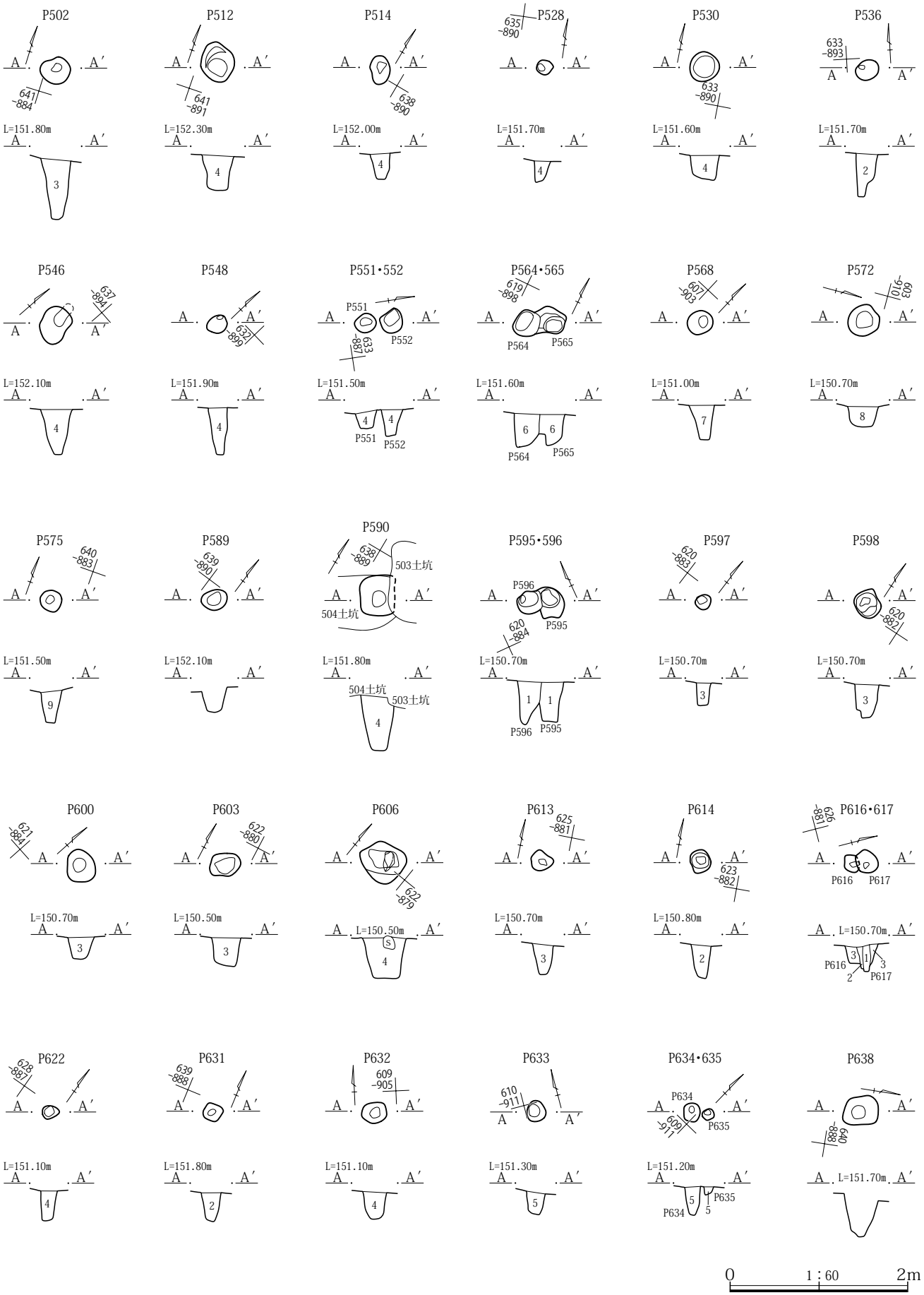
所見：確認面や遺物等から中世以降に属すると考えられる。



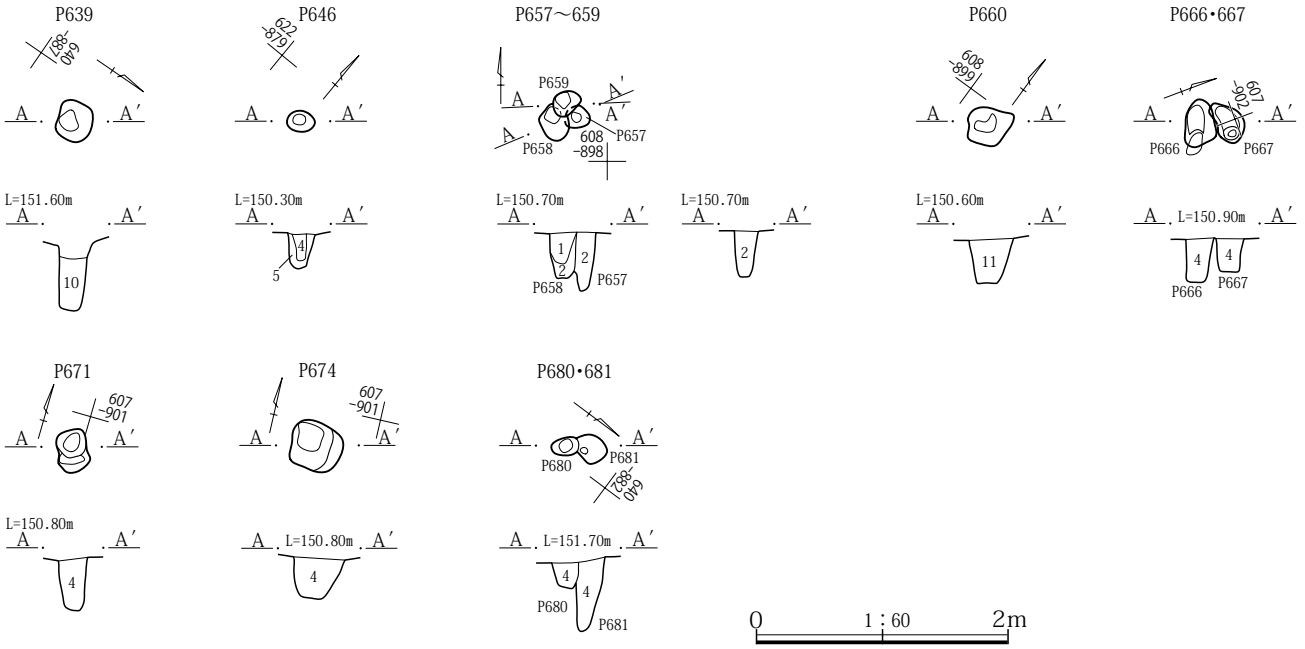
第33図　鴫上Ｉ遺跡Ｂ区１面　ピット全体図（１）



第34図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区１面　ピット全体図（２）

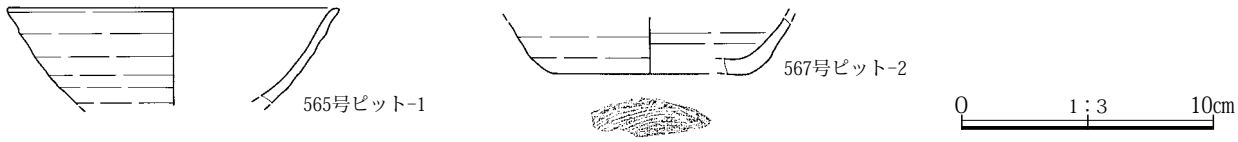


第35図　鳴上Ｉ遺跡Ｂ区１面　ピット平・断面（１）



１面Ｂ区ピット土層注記

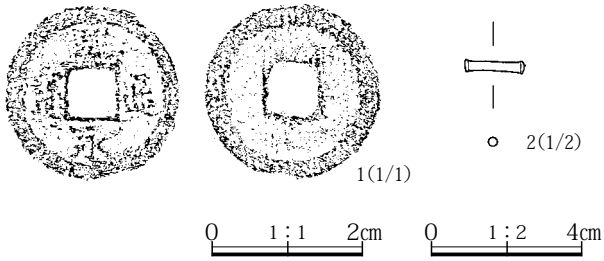
1　黒褐色土(10YR2/2)　As-Cを10％強含む。地山(暗褐色土)ブロックを含む。締まりは弱い。
2　黒褐色土(10YR2/2)　１層より僅かに明るい。若干の地山(暗褐色土)ブロックを含む。締まりは１層よりやや強い。
3　暗褐色土(10YR3/3)　As-YP粒子を１％程度含む。締まりは強い。
4　褐灰色土(10YR4/1)　締まりの弱い均質土。粘性ややあり。黒色味のある平安住居覆土に類似する。
5　暗褐色土(10YR3/3)　ロームブロック、白色軽石を少量含む。
6　黒褐色土(10YR2/2)　１層より僅かに明るい。若干の地山(暗褐色土)ブロックを含む。ロームブロック含む。締まりは１層よりやや強い。土器片出土。
7　褐灰色土(10YR4/1)　ローム粒を少量含む。締まりの弱い均質土。粘性ややあり。黒色味のある平安住居覆土に類似する。
8　褐灰色土(10YR4/1)　軽石・ロームブロックを中量含む。締まりの弱い均質土。粘性ややあり。黒色味のある平安住居覆土に類似する。
9　褐灰色土(10YR4/1)　ロームブロックを含む。締まりの弱い均質土。粘性ややあり。黒色味のある平安住居覆土に類似する。撹乱下から検出。
10　黄褐色土　地山ローム溶け込み多量(15～25％)に含む。締まり弱い。
11　暗褐色土(10YR3/3)　ロームブロック、白色軽石を少量含む。締まりは弱い。



第36図　鳴上Ⅰ遺跡Ｂ区１面　ピット平・断面(２)、ピット出土遺物

(５)遺構外出土の遺物(第37図　PL.75)

鳴上Ⅰ遺跡Ｂ区１面の調査中に、遺構に伴わない形で遺物が出土した。ここでは出土した遺物のうち、古銭(１)、銅製品(２)を掲載した。



第37図　鳴上Ⅰ遺跡Ｂ区１面　遺構外出土遺物

第４章　古墳時代～平安時代（２面）の遺構と遺物

１　概要

本章で報告するのは、As-B軽石層及びAs-B軽石混土層の下で、As-C軽石を含む黒褐色土、暗褐色土を確認面とした遺構であり、２面として調査を行った。住居、掘立柱建物、古墳、道路、土坑、ピット群等を中心とした面である。

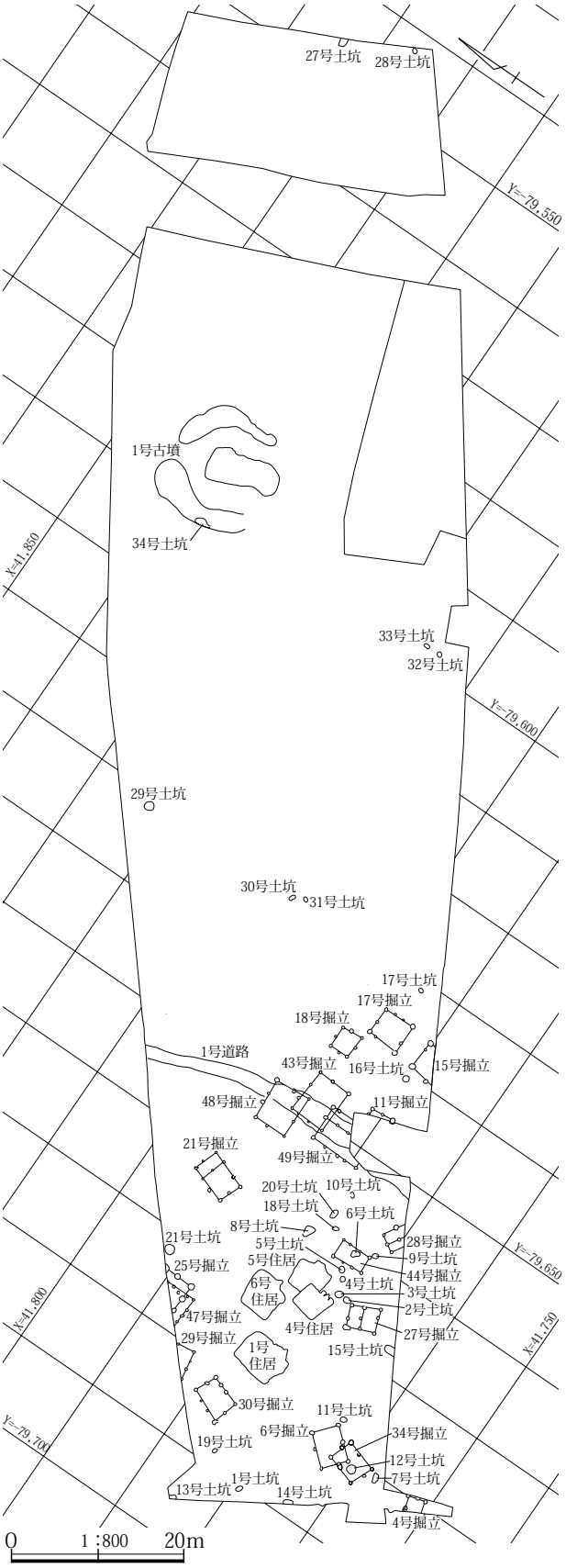
特に、掘立柱建物や住居が複数調査され、古墳時代後期～平安時代の集落の様相が明らかになった。この面の遺構は茅畑遺跡西部、茅畑遺跡東部、鴫上Ⅰ遺跡Ａ区、鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区において存在し、傾斜地に位置する茅畑遺跡西部では、多数の掘立柱建物及び住居、道路、土坑、ピット群を調査した。また、茅畑東部では、古墳１基、土坑、ピット群が確認された。一方、谷を境に同じく傾斜地に立地する鴫上Ⅰ遺跡Ａ区、緩やかな斜面に立地する鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区においても複数の住居、土坑、ピット群を調査した。本調査面においては、住居を中心に遺構の多くは平安時代に属するが、茅畑遺跡東部、及び鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区では古墳時代の遺構も確認されている。

２　茅畑遺跡の遺構と遺物

茅畑遺跡の２面に属する遺構は、住居４軒、掘立柱建物18棟、古墳１基、道路１条、土坑29基、ピット1726基である。

遺構の分布としては、茅畑遺跡西部に住居が集中しており、それらを囲むように掘立柱建物及びピット群が重複しながら万遍なく確認された。調査区西部の中央寄りを南北に道路が走行している。茅畑遺跡東部の丘陵地帯の南面には、古墳が１基確認されている。古墳の周囲には、ピット群が集中していたが、掘立柱建物を復元するには至らなかった。

調査区遺構確認当初は、As-B軽石が５～10㎝程堆積していた。As-B軽石は、土質の影響で浅く窪んだ部分に良好に堆積していた。それ以外の部分では後世の削平等により、残存状態が良好ではなかった。遺構の確認面及び埋没土は、As-C軽石混じりの黒褐色土である。



第38図　茅畑遺跡２面　全体図

住居は、カマドが東辺に位置しており、主軸も一定であった。１・５号住居は残存状態がよく、カマド袖の構築材に二ツ岳石を加工した切石を使用していた。また、床に近い壁が横穴状に抉れており、粘土の採掘及び収納のための施設であると思われる。周囲には、掘立柱建物が多数確認できた。その他のピット群についても、建物を形成する可能性があるが、掘立柱建物等を復元するに至らなかった。掘立柱建物の中には、棟方向が住居の主軸と重なるものが確認できた。同じ場所で重複するものも多く、建て替えの結果であると思われる。また、古代の道路も１条確認された。周囲の遺構との関連が否定できないところである。古墳については、削平が進んでおり、主体部の石室、及び周堀の痕跡等が僅かに残存する程度であった。古墳周りのピット群については、互いの関連が明瞭でないため、建物を想定できる位置になかった。

（１）住居

本調査区における住居群は、傾斜地に立地しているため、住居を造る際に、平地に整えてから掘り込んでいる。住居に対して、高い位置を占める部分を壁の上端まで削ってできた法面が確認できる。また、これらの法面や住居内の壁に斜めにピットが掘ってある様相が確認でき、垂木等屋根の構築材を支持していたピットであることが推察される。

１号住居（第39～44図　PL.17・18・75・76）

調査区中央西よりの住居群内にある。南西方向に下る傾斜地に立地している。残存状態は良好である。

位置：772～778・-673～-678にある。

規模形状：主軸長4.29m、幅5.57mである。南北に長い長方形である。各辺は直線的だが、外側に膨らむように緩やかな曲線を描く。住居周辺を、住居に向かって削り込んでいる。削り込みの幅は、北辺が、54～84cm程、東辺が、64～92cm程、南辺が、46～69cm程、西辺が、48～78cm程である。傾斜の高いほうが若干広めに削り込んでいる。傾斜地に住居を施設する際に、敷地を平らに保つために造成された可能性があると指摘する。　**埋没土・壁：**黒褐色土及び黒色土が壁際から交互に流れ込んでいる。レンズ状の堆積が確認される。自然堆積と思われる。埋没土は、ロームブロック・ローム粒、As-C軽石、焼土ブロック・焼土粒を含む。壁高は30～84cmである。

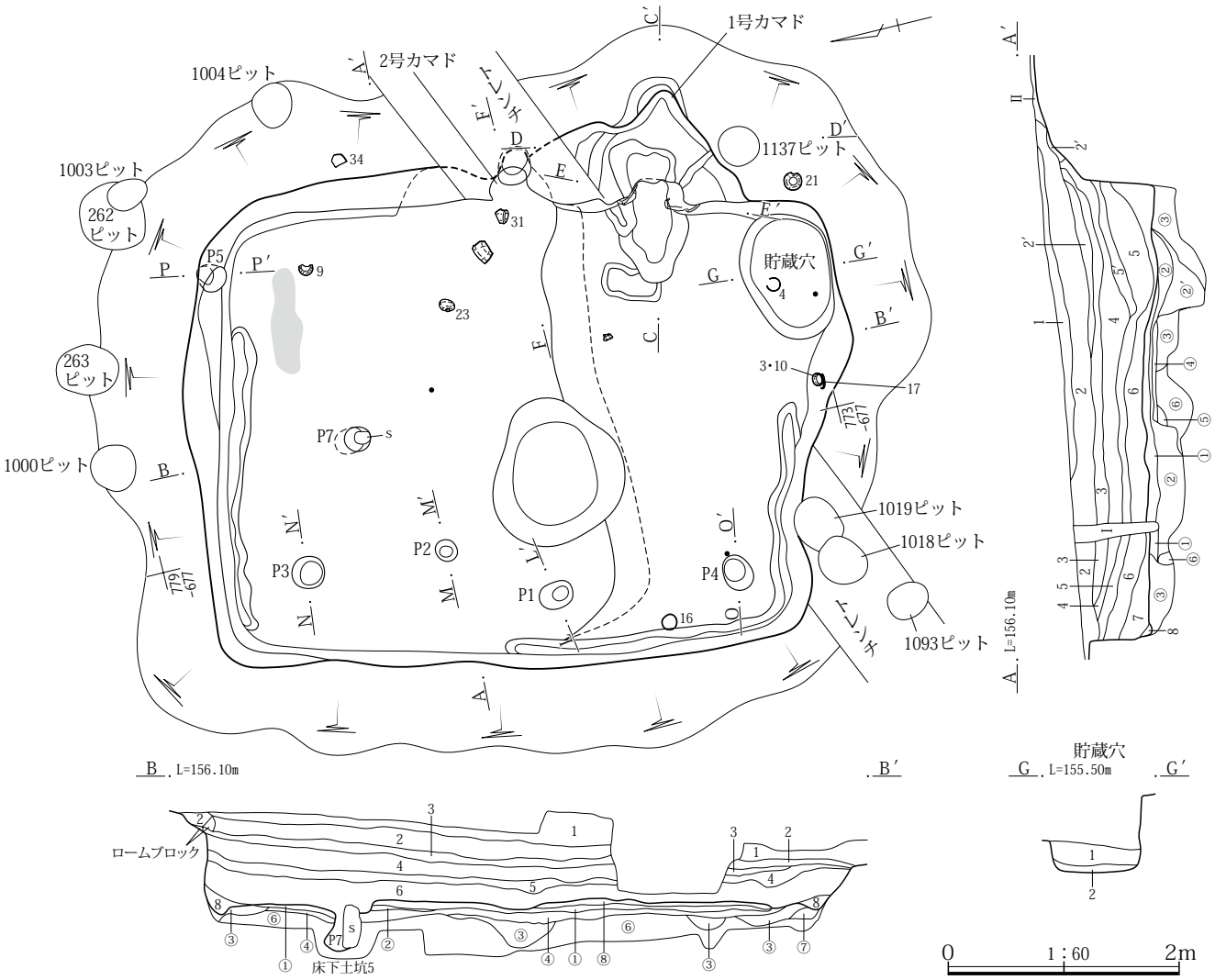
方位：Ｎ－104°－Ｅ　**面積：**17.41㎡　**床面：**住居中央から北にかけて、やや低い床面がある。当初は、２号カマドのもとにこの床面で生活していたと考えられる。その後、南に住居を拡張しており、２号カマドを廃棄して１号カマドを新設しており、カマドを作りかえたと考えられる。埋没土が同一なことから拡張後も新旧住居の空間を合わせて使用していたと考えられる。傾斜はほぼない。全体的に起伏があり高低差は４cm程である。　**掘り方：**ほぼ全面に確認できた。埋没土は、にぶい黄褐色土、灰黄褐色土、黒褐色土、明黄褐色土である。ロームブロック、As-YP、As-C、上層では焼土ブロックを含む。いずれも締まりが強い。　**壁溝：**北壁、西壁から南壁にかけて認められる。北壁のものは、ロームを多く含む暗褐色土で埋没しており、締まりが弱い。幅10～18cm、深さ12cm程である。西壁から南壁のものは、幅10～14cm程である。埋没土及び深さは不明である。　**ピット（柱穴）：**全部で７基が確認された。Ｐ３・２・１・４・７が規則的な主柱穴配置による柱穴の一部であると思われる。古い住居のときに、Ｐ３及びＰ１で梁を支持し、拡張した後は、Ｐ２及びＰ４で支持したと思われる。Ｐ５は、壁柱穴の可能性がある。また、住居東側にあるべき柱穴が確認されていないが、傾斜地に位置する関係から、上屋構造に何等かの工夫がなされていたのではないかと推察する。各柱穴の規模及び埋没土は次の通りである。

（長径×短径×深さcm）

Ｐ１	30×24×25	Ｐ２	19×19×14
Ｐ３	28×28×28	Ｐ４	32×25×54
Ｐ５	25×14×21	Ｐ６	52×32×38
Ｐ７	22×22×42		

埋没土は、黒褐色土、にぶい黄褐色土、灰黄褐色土が主体である。ロームブロック、As-C、As-YP、焼土粒子、炭化物粒子を含む。締まりはおよそ弱い傾向にある。Ｐ７には、柱穴底に円礫が設置されている。長さ37cm、幅16cm、厚さ12cmである。

貯蔵穴：南東隅直下で窪みが確認された。配置と規模より貯蔵穴と思われる。埋没土は、炭化物、ロームブロックを少量含む締まりの強い黒褐色土、ロームブロック、焼土ブロック・粒子を少量含む締まりの弱いにぶい黄褐色土の順である。長軸112cm、短軸78cm、深さ26cmである。



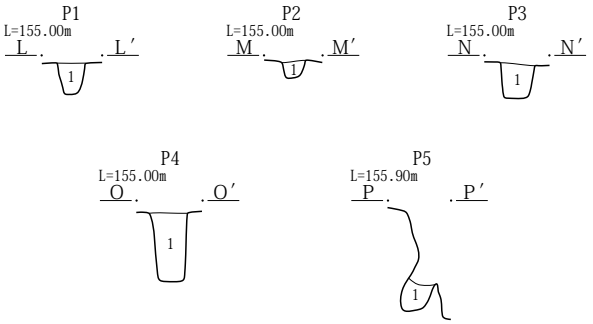
１号住居　Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′

1　黒褐色土(10YR3/2)　As-Cを20％程度含む。２・３層よりも明るい。
2　黒色土(10YR2/1)　As-Cを20％程度、焼土ブロック及び焼土粒子を１％程度含む。
2′黒色土(10YR2/1)　２層に類似するが、やや明るい。
3　黒褐色土(10YR2/2)　As-Cを20％程度、焼土粒子を僅かに含む。
4　黒褐色土(10YR2/2)　As-Cを20％程度含む。３層よりも僅かに暗い。
5　黒褐色土(10YR2/2)　As-Cを20％程度、ロームブロック及びローム粒子を10％程度含む。
5′黒褐色土(10YR2/2)　５層に類似するが、ロームブロックを含まない。
6　黒色土(10YR2/1)　As-Cを20％程度、ロームブロック及びローム粒子を５％程度含む。
7　黒褐色土(10YR3/2)　As-Cを10％程度、焼土粒子を１％未満含む。
8　暗褐色土(10YR3/3)　ロームを50％程度含む。締まりは弱い。
①　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ローム70％と黒褐色土30％の混合土。締まりは強い。
②　灰黄褐色土(10YR4/2)　焼土粒子及び焼土ブロックを10％程度含む。締まりはやや強い。
②′灰黄褐色土(10YR4/2)　②層に類似するが、灰を多く含む。
③　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ローム65％と黒褐色土30％の混合土。As-YPを５％程度含む。締まりは弱い。
④　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ローム70％と黒褐色土30％の混合土。As-YPを５％程度含む。締まりは強い。
⑤　黒褐色土(10YR2/2)　As-Cを３％程度含む。
⑥　灰黄褐色土(10YR4/2)　ローム10％程度、黒褐色土を20％程度含む。締まりは強い。
⑦　明黄褐色土(10YR6/6)　As-YPを30％程度含む。締まりはやや強い。
⑧　黒褐色土(10YR2/2)　As-Cを20％程度含む。ロームブロックを僅かに含む。締まりは強い。
Ⅰ　黒褐色土(10YR2/2)　As-Cを10％程度、焼土粒子を１％未満含む。住居埋没土よりもやや黒味が強い。締まりは弱い。
Ⅱ　暗褐色土(10YR3/3)　As-Cを10％程度含む。

１号住居　貯蔵穴　Ｇ－Ｇ′

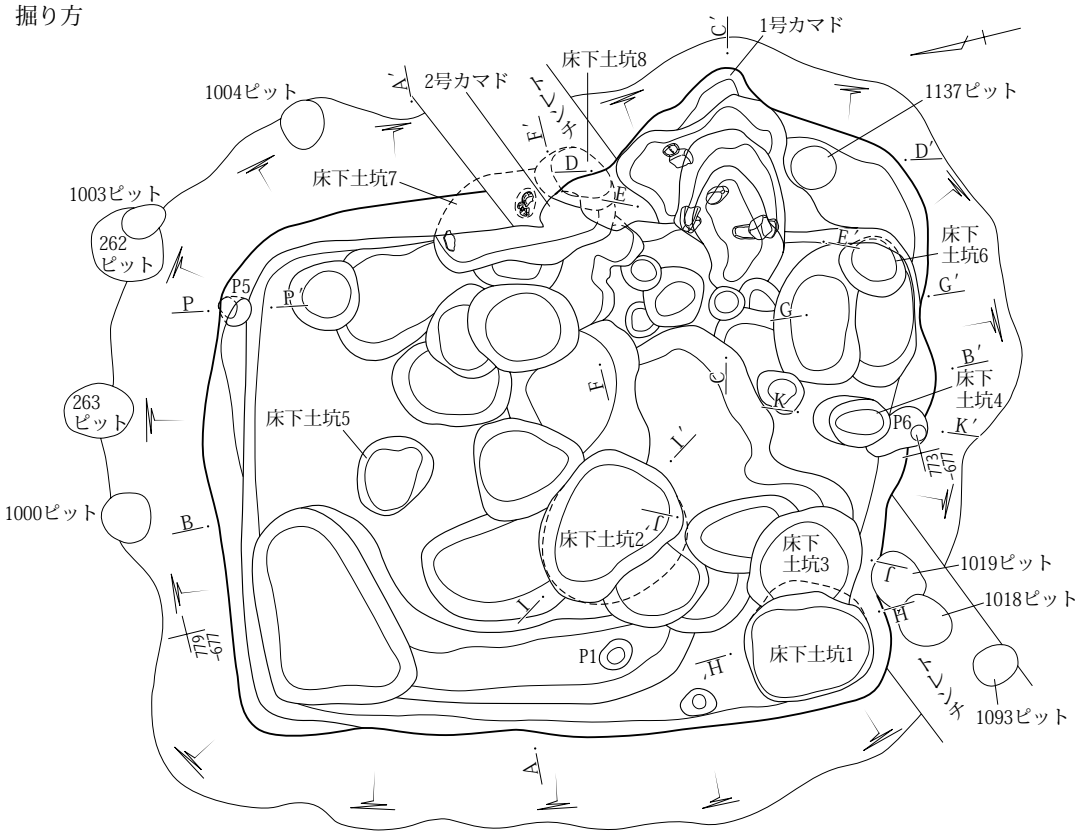
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ロームブロックを５％程度、焼土ブロック及び同粒子３％程度含む。締まりは弱い。
2　黒褐色土(10YR2/2)　炭化物を10％程度、ロームブロックを８％程度含む。焼土粒子を僅かに含む。締まりは強い。

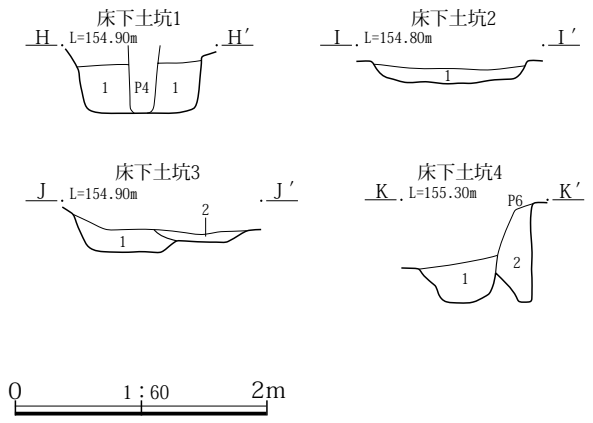
第39図　茅畑遺跡２面　１号住居



1号住居　Ｐ１　Ｌ－Ｌ′
1　黒褐色土(10YR2/2)　As-Cを10％程度、焼土粒子を１％未満含む。住居埋没土よりもやや黒味が強い。締まりは弱い。
1号住居　Ｐ２　Ｍ－Ｍ′
1　黒褐色土(10YR2/2)　As-Cを10％程度、焼土粒子を１％未満含む。住居埋没土よりもやや黒味が強い。締まりは弱い。
1号住居　Ｐ３　Ｎ－Ｎ′
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ロームブロックを10％程度、黒褐色土20％程度、焼土粒子１％程度含む。締まりは強い。
1号住居　Ｐ４　Ｏ－Ｏ′
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　As-Cを２％程度、炭化物粒子を１％程度、焼土粒子を１％程度含む。締まりは弱い。
1号住居　Ｐ５　Ｐ－Ｐ′
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　径10mmの炭化物片、As-Cを２％程度、ローム粒子を１％程度含む。締まりは弱い。

掘り方

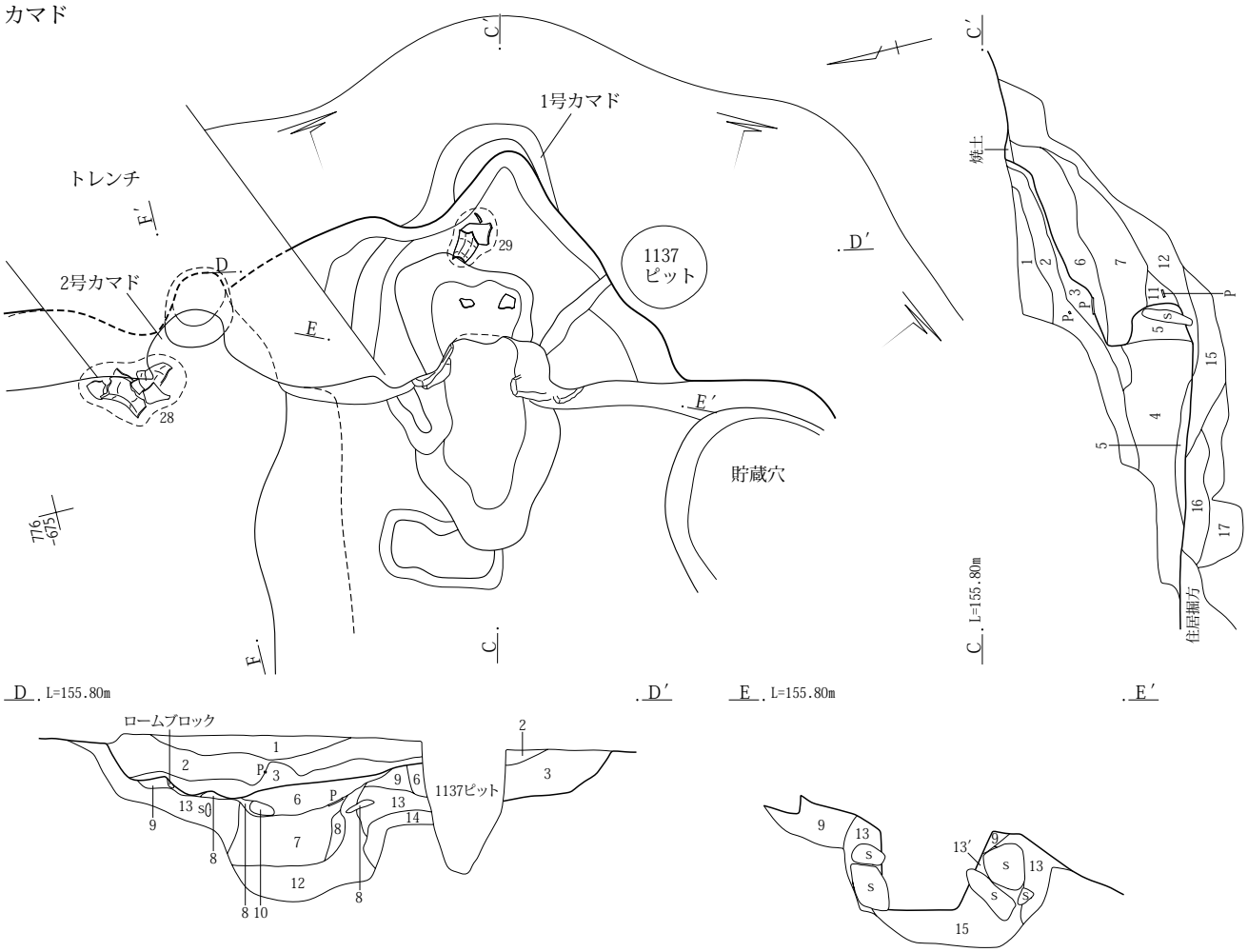




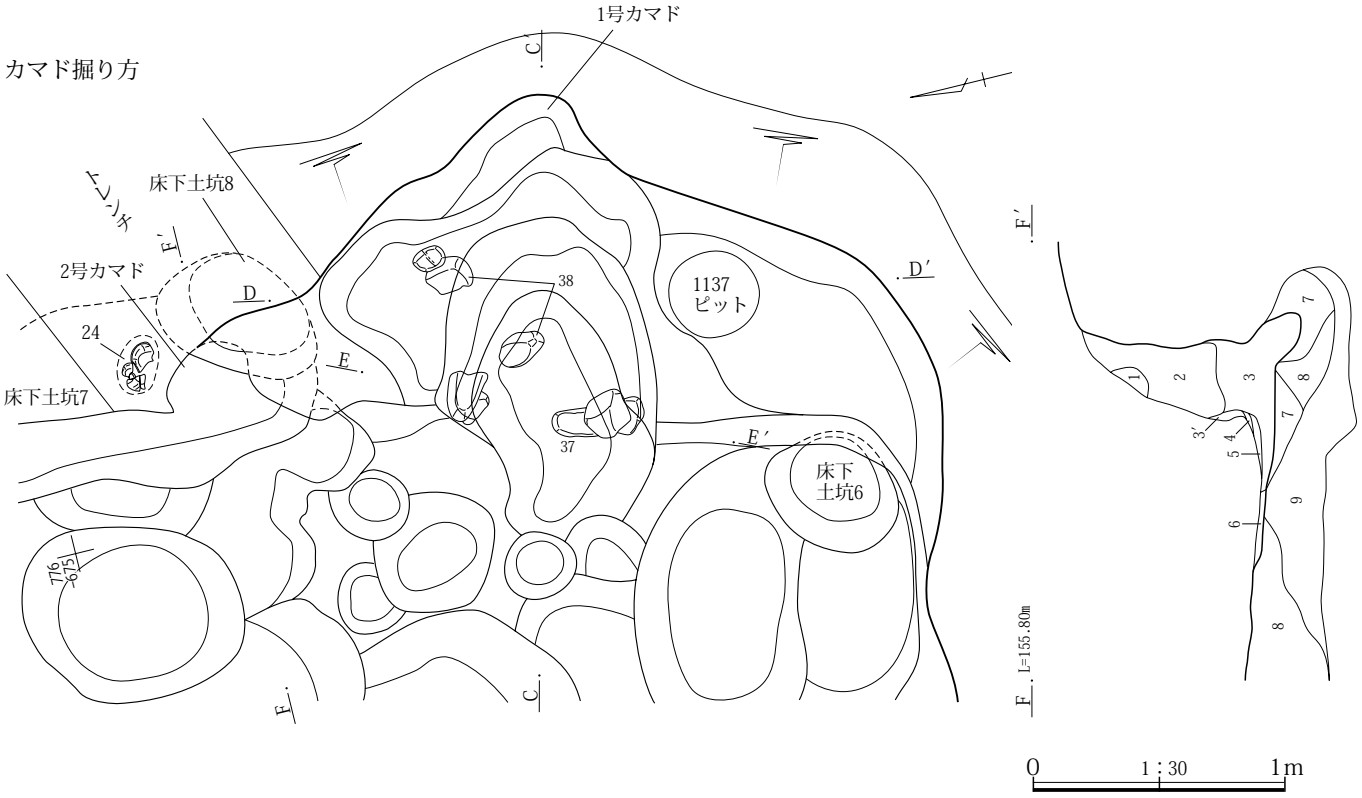
1号住居　床下土坑１　Ｈ－Ｈ′
1　暗褐色土(10YR3/3)　ロームブロック及びローム粒子を20％程度、As-Cを１％未満、焼土粒子を僅かに含む。
1号住居　床下土坑２　Ｉ－Ｉ′
1　黒色土(10YR2/1)　焼土粒子及び焼土ブロックを５％程度、炭化物片を１％程度含む。粘性あり。締まりは弱い。
1号住居　床下土坑３　Ｊ－Ｊ′
1　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　ロームブロック及びローム粒子を30％程度含む。締まりは弱い。
2　灰黄褐色土(10YR4/2)　焼土粒子及び同ブロックを10％程度、炭化物片を５％程度含む。締まりは１層よりもやや強い。
1号住居　床下土坑４・Ｐ６　Ｋ－Ｋ′
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ロームブロック及び粒子を20％程度、黒褐色土ブロック及び粒子を10％程度含む。締まりは弱い。(床下土坑４)
2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ロームブロックを５％、As-Cを僅かに含む。As-YP粒子を１％程度含む。締まりは弱い。(Ｐ６)

第40図　茅畑遺跡２面　１号住居掘り方

カマド



カマド掘り方



第41図　茅畑遺跡２面　１号住居カマド

１号住居　１号カマド　Ｃ－Ｃ′・Ｄ－Ｄ′・Ｅ－Ｅ′
1　黒褐色土(10YR2/2)　As-Cを25％程度含む。
2　黒褐色土(10YR3/2)　As-Cを20％程度、小ロームブロック及び粒子を５％程度含む。
3　暗褐色土(10YR3/3)　As-Cを５％程度、ロームブロック及び粒子を30％程度含む。締まりは強い。
4　黒褐色土(10YR3/1)　As-Cを５％程度、焼土粒子及び炭化物粒子を１％程度含む。
5　黒褐色土(10YR3/1)　焼土粒子３％、炭化物粒１％、灰を多く含み、全体にやや灰色がかる。
6　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　As-Cを３％程度、ロームブロック及び粒子を30％程度含む。粘性あり。締まりは強い。
7　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　As-Cを僅かに含む。ロームブロック及び粒子を５％程度、焼土粒子及び焼土ブロックを３％程度含む。粘性あり。
8　にぶい橙色土(7.5YR7/4)　締まりは極めて強い。粘性あり。
9　灰黄褐色土(10YR4/2)　粘性あり。締まりは強い。
10　黒褐色土ブロック(10YR3/1)　締まりは弱い。
11　赤褐色土(10R4/3)　焼土。炭化物を１％程度含む。締まりは弱い。
12　灰褐色土(7.5YR4/2)　焼土ブロックを10％程度、As-Cを１％程度、As-YP粒を１％程度含む。締まりはやや強い。
13　灰黄褐色土(10YR4/2)　As-Cを５％程度、As-YP粒を５％程度含む。締まりは極めて強い。粘性あり。
13′灰黄褐色土(2.5YR7/4)　13層が焼けて焼土化したもの。粘性あり。
14　にぶい黄橙色土(10YR6/4)　焼土粒子を１％未満含む。締まりは極めて強い。
15　褐色土(10YR4/4)　炭化物片を１％程度、焼土ブロック及び粒子を５％程度含む。締まりは弱い。
16　黒褐色土(10YR3/1)　炭化物片を３％程度、焼土ブロック及び粒子を１％程度、灰を多く含む。
17　灰黄褐色土(10YR4/2)　炭化物片を１％未満、焼土ブロック及び粒子を１％程度含む。16層よりも締まりはやや強い。

１号住居　２号カマド　Ｆ－Ｆ′
1　黄橙色土(10YR8/8)　ロームブロック
2　暗褐色土(10YR3/3)　As-Cを10％、ローム粒子を３％程度含む。締まりは弱い。
3　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　ほぼロームの再堆積土。暗褐色土を10％程度含む。締まりは極めて弱い。
3′にぶい黄褐色土(10YR5/4)　３層に類似するが、３層よりもやや締まりは強い。
4　黒褐色土(10YR2/2)　２層に類似するが、２層よりもやや黒味が強い。
5　赤橙色土(10R6/6)　焼土
6　黒褐色土(10YR2/3)　灰を全体に多量に、焼土ブロック及び焼土粒子を１％程度含む。
7　黒褐色土(10YR3/2)　焼土ブロック及び焼土粒子を５％程度含む。締まりは弱い。
8　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　焼土粒子を僅かに含む。締まりは強い。
9　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　一部に焼土ブロック及び焼土粒子を含む。炭化物片を部分的に含む。締まりは強い。

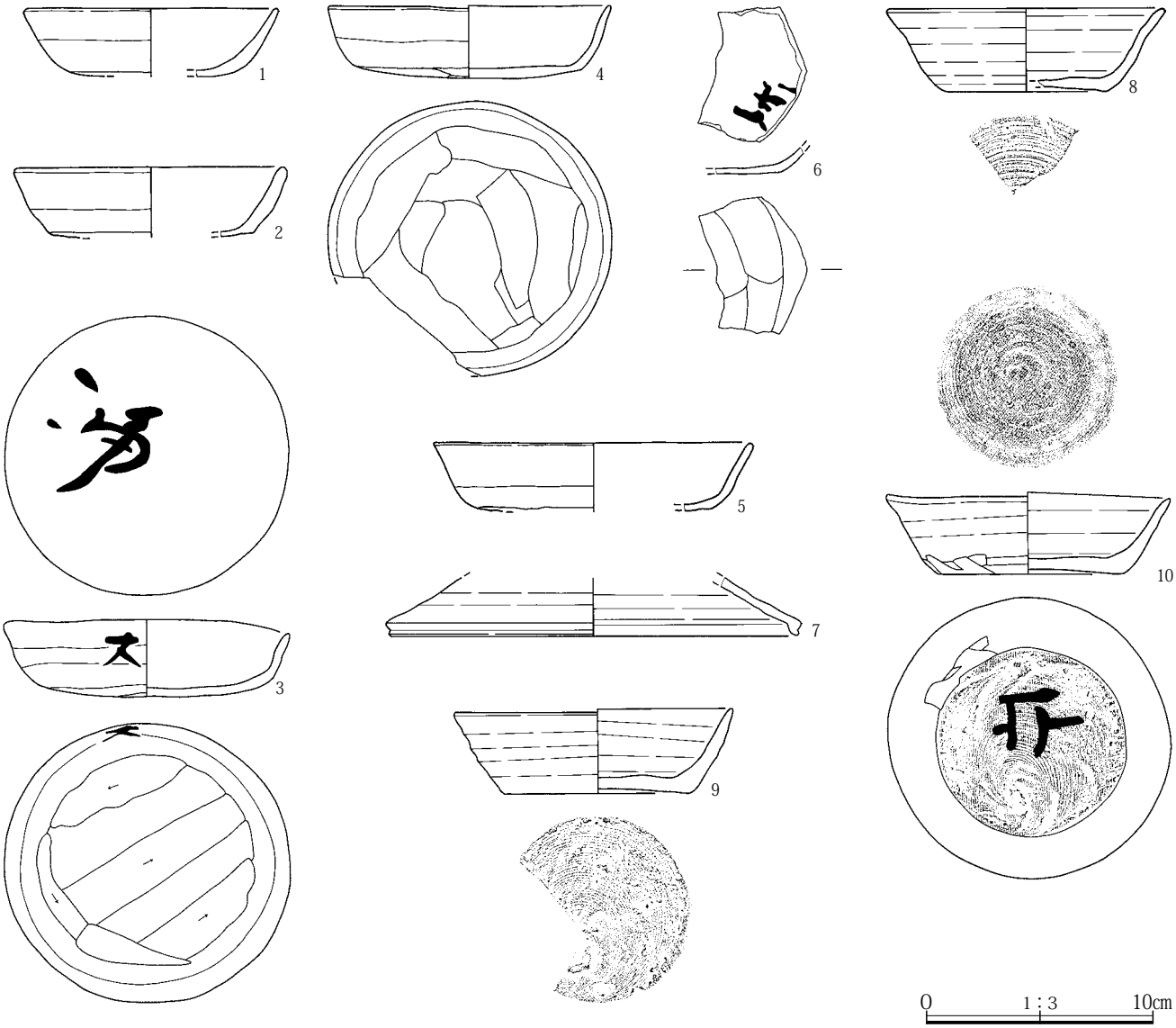
床下土坑：住居中央から南にかけて床下土坑が８基確認された。床下土坑１の埋没土は、ロームブロック・ローム粒を中量、As-C、焼土粒子を少量含む暗褐色土である。長軸101㎝、短軸84㎝、深さ46㎝である。床下土坑２の埋没土は、焼土ブロック・焼土粒子、炭化物片を少量含む黒色土である。粘性があり締まりが弱い。長軸124㎝、92㎝、深さ18㎝である。床下土坑３の埋没土は、ロームブロック・ローム粒子を中量含む締まりの弱いにぶい黄褐色土、焼土ブロック・焼土粒子、炭化物片を少量含む締まりのある灰黄褐色土の順である。長軸102㎝、短軸83㎝、深さ18㎝である。床下土坑４の埋没土は、ロームブロック・ローム粒子を中量、黒褐色土ブロック・黒褐色土粒子を少量含む締まりの強いにぶい黄褐色土、ロームブロック、As-YPを少量含む締まりの弱いにぶい黄褐色土の順である。長軸62㎝、短軸40㎝、深さ32㎝である。床下土坑５の埋没土は、確認されなかった。長軸68㎝、短軸56㎝、深さ27㎝である。床下土坑６の埋没土は、確認されなかった。長軸56㎝、短軸44㎝、深さは25㎝である。床下土坑７の埋没土は、確認されなかった。長軸146㎝、短軸78㎝、深さ23㎝である。床下土坑８の埋没土は、確認されなかった。長軸66㎝、短軸45㎝、深さ２㎝である。

カマド：１号カマドは東辺南寄りに、２号カマドは東辺のほぼ中央に位置する。遺物及び遺構の残存状態から、１号カマドが新しい。１号カマドは、全長128㎝、幅104㎝、焚口幅26㎝、燃焼部幅54㎝である。煙道は、壁外側に47㎝張り出している。燃焼部は、住居内から住居外にかけて位置している。火床掘り方から支脚が確認できた。長さ21㎝、幅不明、厚さ５㎝である。両袖共に礫を複数積み上げ袖の構築材としており、灰黄褐色土の粘質土で間を埋めている。掘り方は、炭化物片、焼土ブロック・粒を含む褐色土、黒褐色土、灰褐色土で埋没しており、表面は締まりが強い。深さは、15㎝程度である。２号カマドは、残存状態が良好でない。全長不明、幅不明、焚口幅不明、燃焼部幅29㎝である。煙道は、確認されなかった。燃焼部は、住居内から住居外にかけて位置している。支脚は確認できなかった。左両袖の構築に使用されたと思われる土器片が確認された。掘り方は、炭化物片、焼土ブロック・粒を含む黒褐色土、にぶい黄褐色土で埋没しており、下層の締まりは強い。深さは、28㎝程度である。

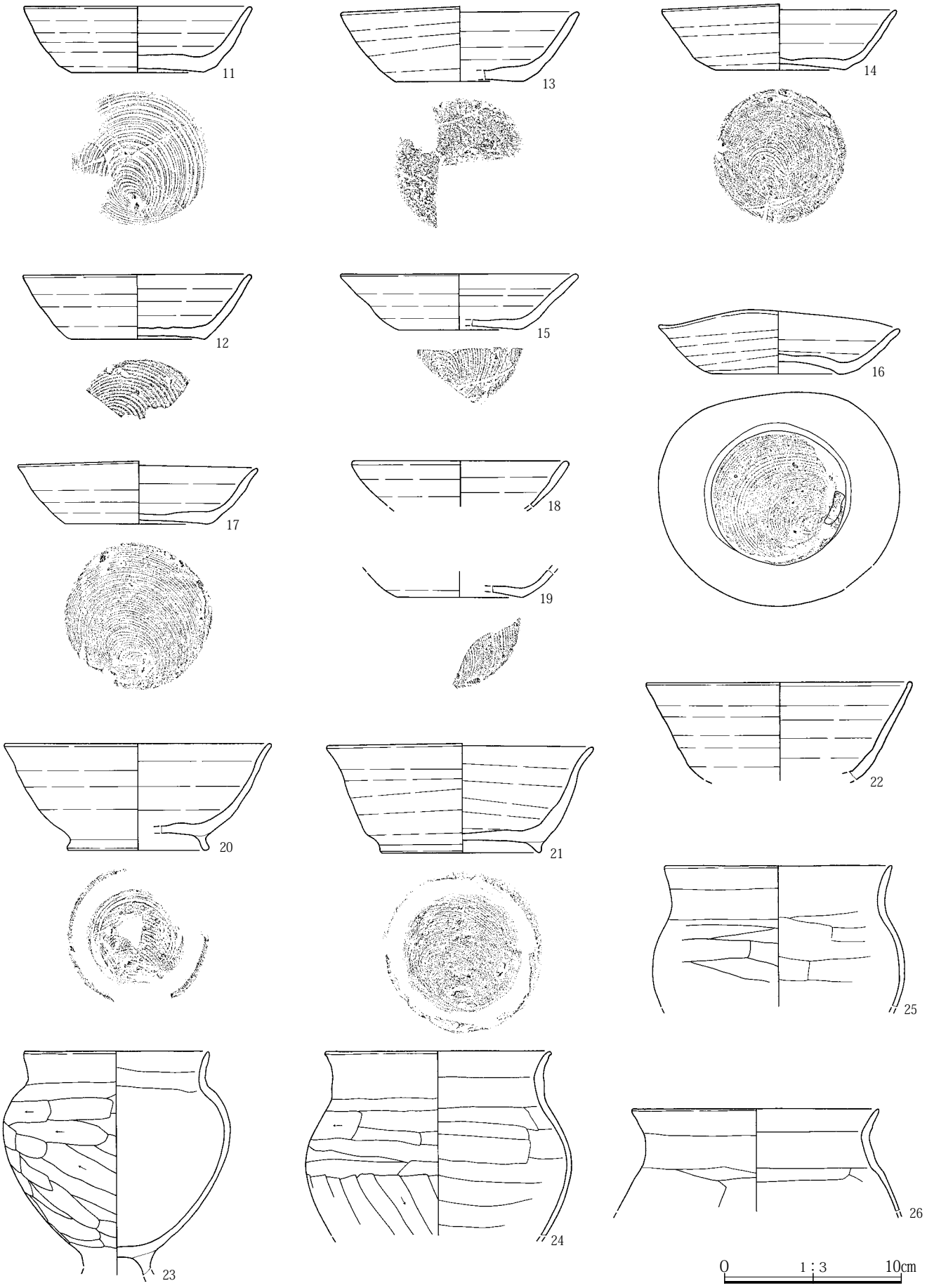
重複遺構：1019号ピットが後出している。　**遺物：**土師器17点(杯６点、甕10点、台付甕１点)須恵器19点(杯12点、蓋１点、甕３点、椀３点)、礫石器２点(カマド構築材)を図示した。

住居南及び東を中心に散在するように遺物が出土した。また、１号カマド２号カマド内部を含めて周辺において遺物が確認された。

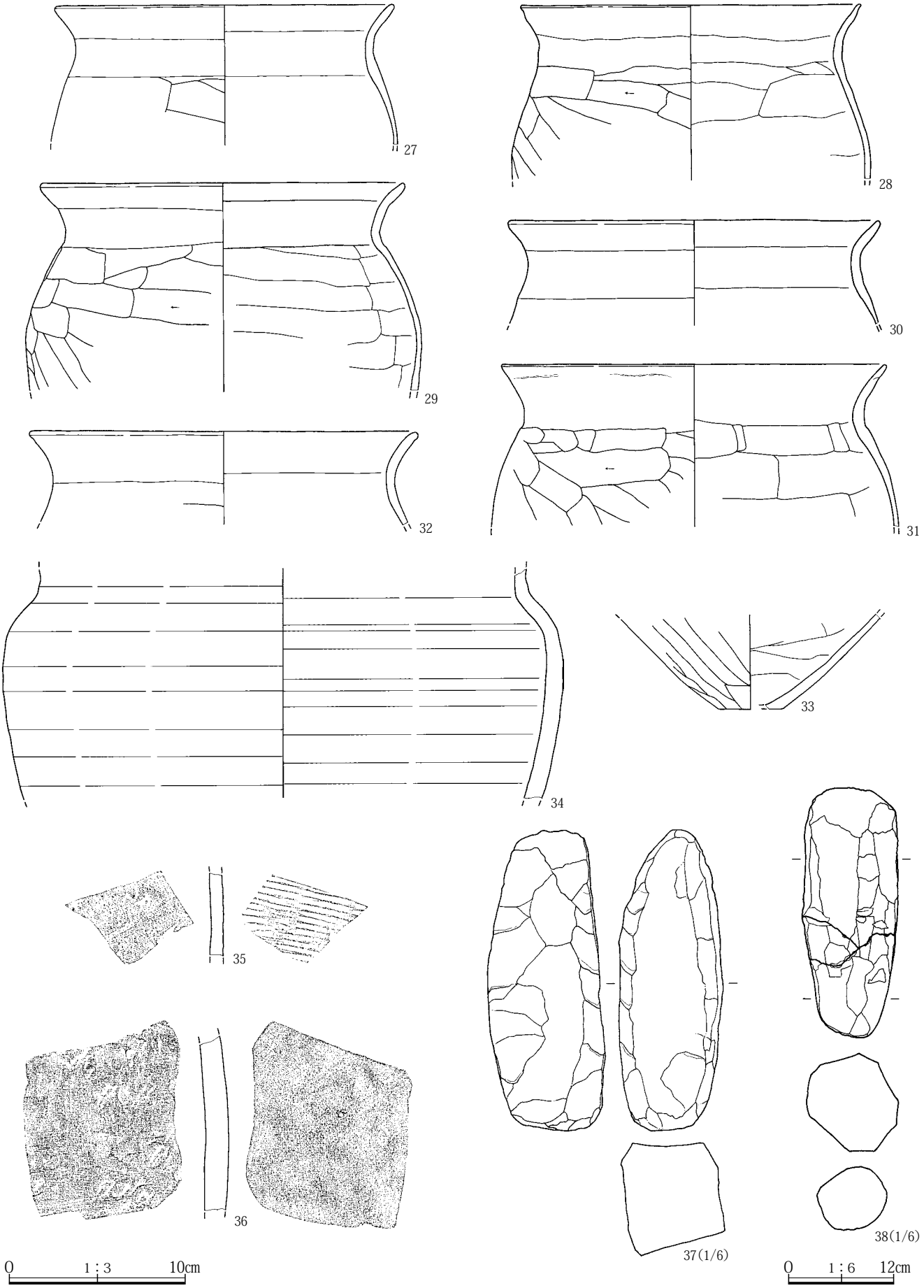
土師器、甕(24)は床下土坑７から、甕(30)は床下土坑２から、甕(26･29)は１号カマド掘り方及び床直上から、甕(27・33)は２号カマド掘り方から、甕(28)は２号カマド床直上、須恵器、杯(９)は床直上から、カマド構築材(37・38)はカマド袖からの出土であった。これらは本住居に伴うものであると考えられる。土師器､台付甕(23)、須恵器、杯(16)は、共に床上８㎝からの出土である。椀(22)は掘り方からの出土である。これらは本住居に伴うと考えるのが自然である。土師器、杯(１・２・５・６)は埋没土から、(３・４)は床上16・21㎝からの出土である。甕(25・32)は埋没土から、甕(31)は２号カマド床上28㎝からの出土である。須恵器、杯(８・11・12・13・14・15・18・19)は埋没土から、杯(10・17)は床上16・21㎝からの出土である。蓋(７)は埋没土からの出土である。甕(34)は住居外確認面から、甕(35・36)は埋没土からの出土である。椀(20)は埋没土から、椀(21)は住居外確認面からの出土である。これらが本住居に確実に伴う出土であるか明瞭でない。図示した以外に、土師器(杯類112、甕類607片)、須恵器(杯類56片、甕類６片)が出土している。　**所見(帰属時期)**：確認面、住居の形状、甕類、杯類を主体とした出土遺物等より９世紀前半の住居であると考える。埋没土内の遺物は床直上出土遺物と時期差の少ないものであった。



第42図　茅畑遺跡２面　１号住居出土遺物(１)



第43図　茅畑遺跡２面　１号住居出土遺物（２）

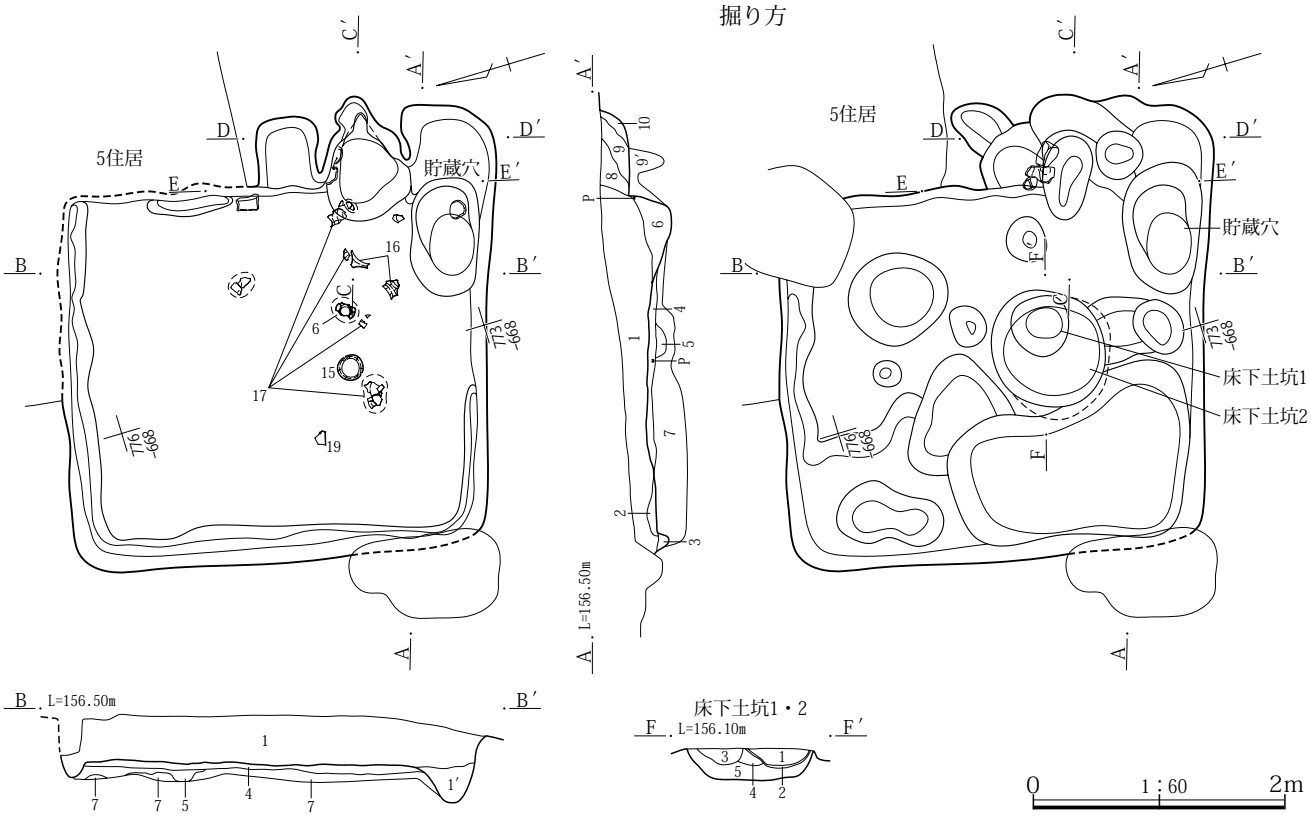


第44図　茅畑遺跡２面　１号住居出土遺物（３）

４号住居(第45～48図　PL.18・19・76)

調査区中央西よりの住居群内にある。南西方向に下る傾斜地に立地している。残存状態は良好である。５号住居と重複しているものの、使用面は影響を受けていない。**位置：**772～776・-665～-669にある。

規模形状：各辺若干歪んだ直線を呈している。正方形を呈している。主軸長3.02m、幅3.37mである。　**埋没土・壁：**黒褐色土１層で埋没している。As-C軽石を中量、ロームブロック、焼土粒子、炭化物粒子を少量含む。一気に埋め戻しており、人為的な埋没であると思われる。壁高は0.02～0.38mである。　**方位：**N－102°－E　**面積：**8.11㎡　**床面：**南に僅かに傾斜している。高低差は２㎝程である。中央が南北方向に４～５㎝程盛り上がっている。また、カマド袖の左右に、床面より20㎝程高いところに平らな方形の棚状施設が確認された。左は、長軸54㎝、短軸48㎝程であり、右は、長軸68㎝、短軸56㎝程である。　**掘り方：**ほぼ全面に広がり、埋没土は、黒褐色土を少量含む黄褐色土である。その上にロームと黒褐



４号住居　A－A′・B－B′

1　黒褐色土(10YR3/2)　As-Cを30%、ロームブロックを５%、焼土粒子と炭化物粒子を共に１%程度含む。締まりは弱い。

1′黒褐色土(10YR3/2)　１層に類似するが、As-Cを僅かに含む。１層よりも締まりは弱い。

2　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　ロームブロックの溶混を30%程度含む。

3　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　２層よりもややロームブロックが少ない。

4　黒褐色土(10YR2/2)　ロームと黒褐色土の互層。非常に硬質(貼床)

5　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　ロームと黒褐色土の混合土。締まりは強い。

6　にぶい橙色土(7.5YR7/3)　焼土粒子を僅かに含む。粘性あり。

7　黄褐色土(10YR5/6)　ほぼローム。黒褐色土を５%程度含む。

8　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　As-Cを20%、６層と同じ粘土ブロックを５%程度含む。

9　黒褐色土(10YR2/2)　As-Cを30%程度、焼土粒子・焼土ブロックを１%未満含む。

9′黒褐色土(10YR2/2)　９層に準ずる。

10　暗褐色土(10YR3/3)　As-Cを僅かに含む。単一的。

４号住居　床下土坑１・２　F－F′

1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　As-Cを１%程度、ローム小ブロック及び粒子を５%程度含む。締まりはやや強い。(床下土坑１)

2　にぶい橙色土(7.5YR7/4)　土坑底面に粘土を貼っている。(床下土坑１)

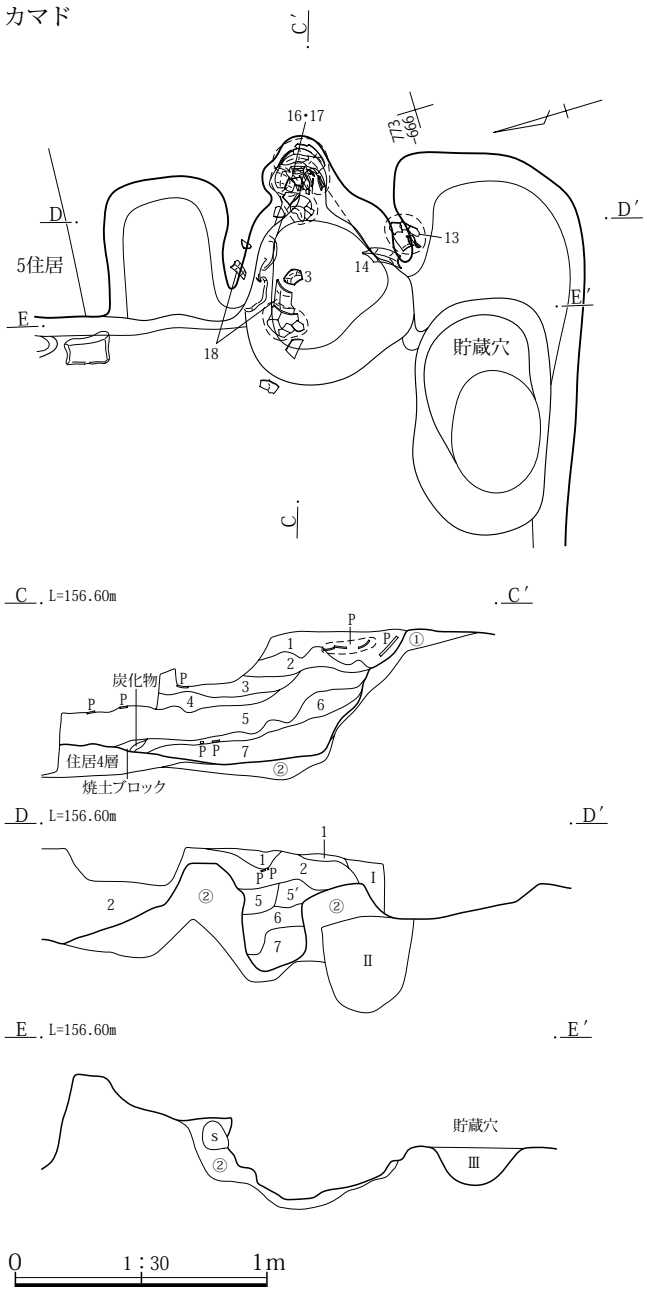
3　黒褐色土(10YR3/1)　ロームブロックを20%、炭化物片を５%程度含む。締まりは強い。(床下土坑２)

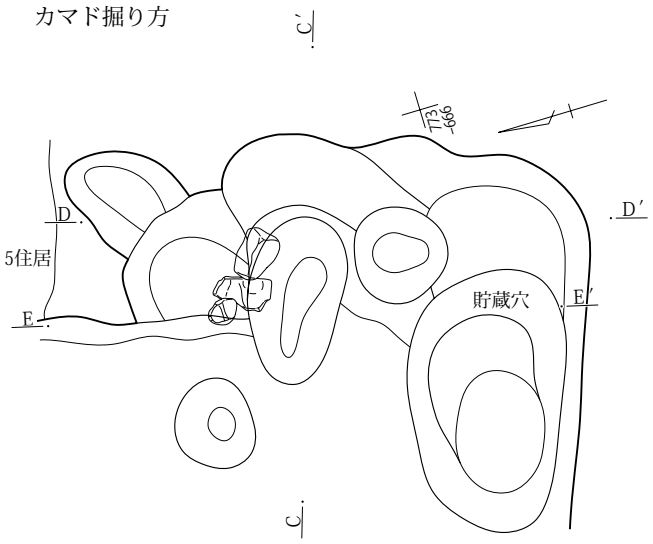
4　灰黄褐色土(10YR4/2)　ロームブロックを20%、炭化物片を３%程度含む。締まりは強い。(床下土坑２)

5　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　ロームブロックを10%、炭化物を僅かに含む。締まりは強い。(床下土坑２)

第45図　茅畑遺跡２面　４号住居

色の互層により硬質の貼床を施している。深さは10～26cm程である。東に対して西が厚くなっている。　**壁溝：**北壁、西壁、南壁の西側、東壁の一部に認められる。埋没土は、ロームブロックを中量含むにぶい黄褐色土である。北壁のものは、幅14～19cm、深さ12cm程、西壁のものは、幅８～21cm、深さ８cm程、南壁のものは、幅８～10cm、深さ不明である。東壁のものは、幅13cm程、深さ不明である。　**ピット(柱穴)：**確認されない。　**貯蔵穴：**住居南東隅に窪みを確認した。位置と規模より貯蔵穴と思われる。埋没土は、黒褐色土である。住居の埋没土に準じる。長径94cm、短径52cm、深さ22cm程である。東よりに礫を確認する。長さ15cm、幅14cm、厚さ不明である。　**床下土坑：**床下土坑１と床下土坑２が重複している。床下土坑２が埋没した後、床下土坑１が設けられている。床下土坑１は、As-C軽石、ロームブロック・ローム粒を少量含んだにぶい黄褐色土で埋没している。締まりは強い。底面ににぶい橙色粘土の粘質土を貼っている。長径48cm、短径46cm、深さ17cm程である。床下土坑２は、まずロームブロックを少量含むにぶい黄褐色土で全体が埋没した後、灰黄褐色土、黒褐色土が載っている。２・





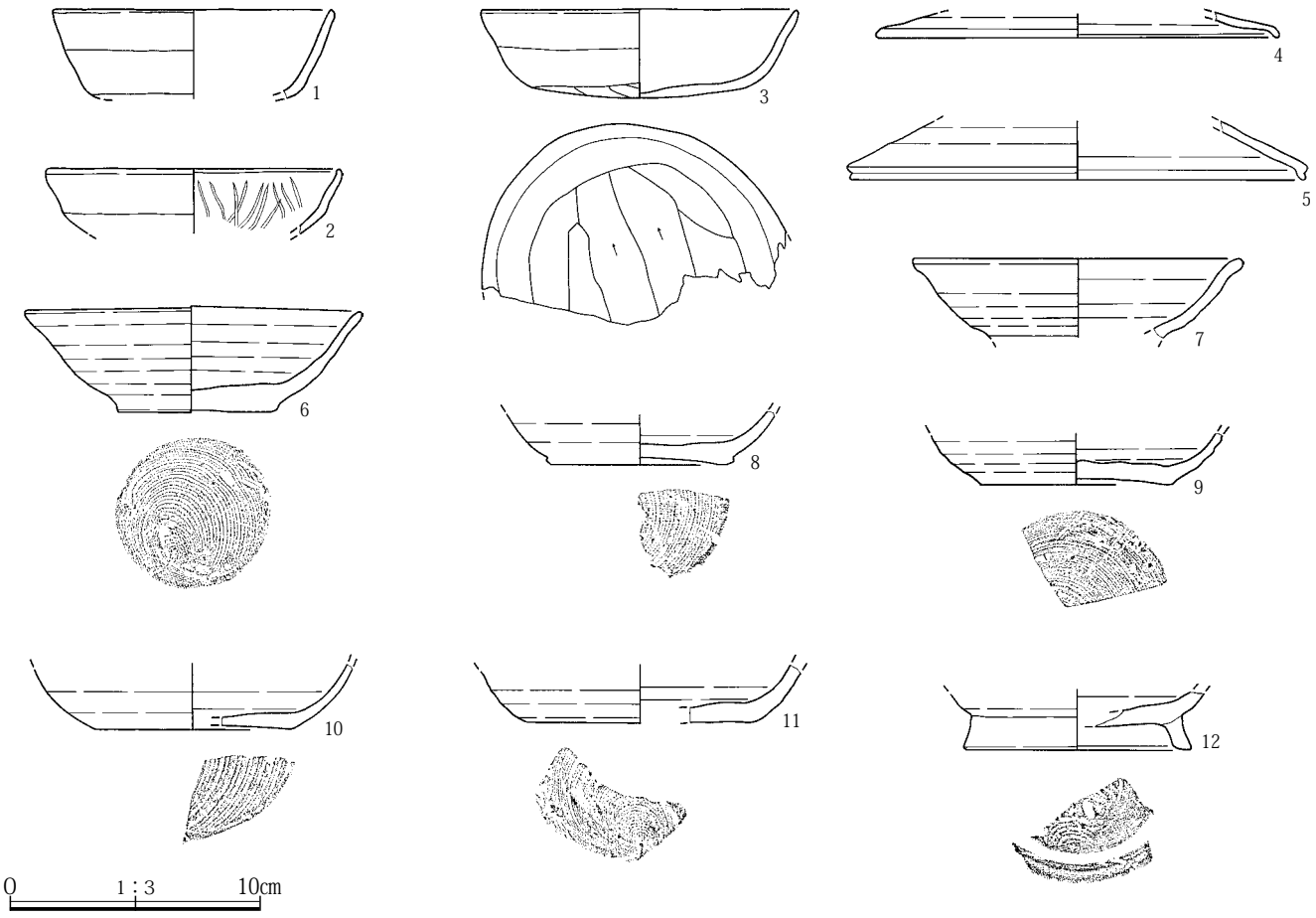
４号住居　カマド　Ｃ－Ｃ′・Ｄ－Ｄ′・Ｅ－Ｅ′

1　黒褐色土(10YR3/2)　As-Cを25％程度、焼土粒子を１％未満含む。
2　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　As-Cを20％程度含む。締まりは強い。粘性あり。
3　黒褐色土(10YR2/2)　As-Cを10％程度、焼土粒子を僅かに含む。締まりは２層よりも弱い。
4　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　As-Cを５％程度、ロームブロック及び粒子を３％程度含む。
5　暗褐色土(10YR3/3)　As-Cを５％程度、焼土粒子を１％程度含む。
5′にぶい黄褐色土(10YR4/3)　５層に準ずる。
6　赤色土(10R5/8)　焼土。黄褐色粘性土ブロックを部分的に含む。
7　褐色土(7.5YR4/3)　焼土粒子10％、炭化物粒子１％、灰を10％、黄褐色粘性土ブロックを部分的に含む。締まりは弱い。
①　にぶい橙色土(5YR7/4)　As-Cを５％程度含む。全体にやや赤味を帯びる。締まりは強い。粘性あり。
②　黒褐色土(10YR2/2)　焼土粒子を３％程度、炭化物粒子を５％程度、As-Cを１％程度含む。締まりは弱い。
Ⅰ　暗褐色土(10YR3/3)　As-Bを多量に含む。締まりは弱い。
Ⅱ　暗褐色土(10YR3/3)　As-Cを10％程度含む。
Ⅲ　黒褐色土(10YR3/2)　As-Cを10％程度、ロームブロックを５％程度、焼土粒子及び炭化物粒子を１％程度含む。締まりは弱い。(貯蔵穴)

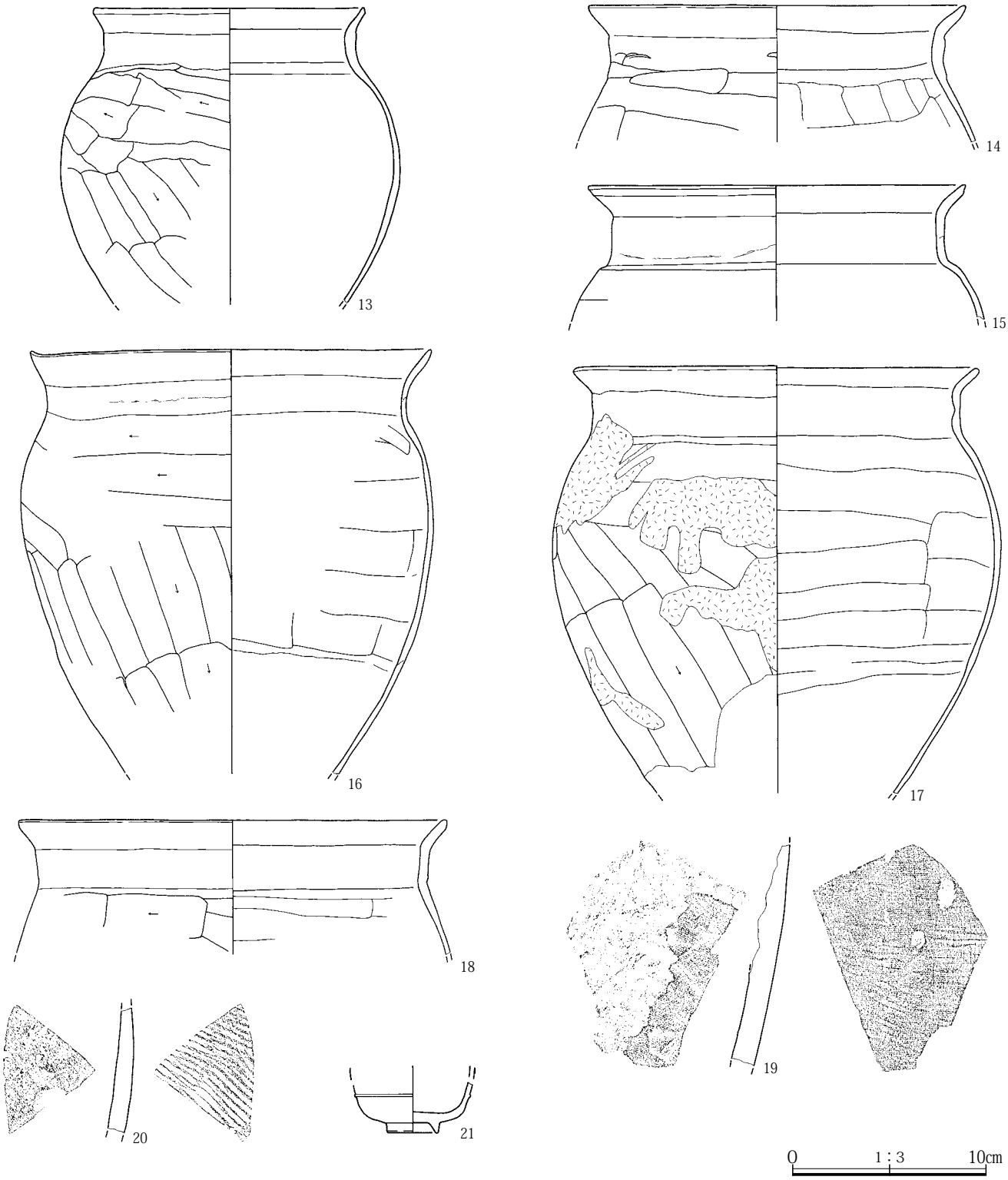
第46図　茅畑遺跡２面　４号住居カマド

３層は炭化物片を少量含む。いずれも締まりは強い。長径96cm、短径90cm、深さ24cm程である。　**カマド：**東辺の南東隅寄りに位置する。全長67cm、幅92cm、焚口幅52cm、燃焼部幅47cmである。煙道は、壁外側に15cm張り出している。燃焼部は、住居内から住居外にかけて位置している。支脚は確認できなかった。左袖には、礫と土器片が、右袖には、土器片が確認された。これらを構築材として、掘り方と同じ黒褐色土を用いて袖を作っている。掘り方の埋没土は、焼土粒子、炭化物粒子、As-C軽石を少量含む黒褐色土である。締まりは弱い。深さは、８cm程度である。　**重複遺構：**５号住居に後出している。　**遺物：**土師器点９(杯３点、甕６点)、須恵器11点(杯６点、甕２点、椀１点、蓋２点)、瀬戸美濃磁器１点(小盃)を図示した。住居中央南よりからカマド内部にかけて遺物が出土した。

土師器、甕(13)はカマド右袖から、甕(14)はカマド右袖床直上から、甕(15)は床上６cmから、甕(16)はカマド煙道から床上10～21cmにかけて、甕(17)はカマド煙道床直上から床上６cmにかけて、甕(18)はカマド左袖床直上からの出土である。須恵器、杯(６)は床直上、椀(12)はカマド埋没土からの出土である。これらは、本住居に伴うものであると考えられる。土師器、杯(２)は壁溝から、杯(３)はカマド床上11cmから、須恵器、杯(８)は壁溝から、甕(19)は床上12cmからの出土である。これらは、住居に伴うものであると考えるのが自然である。土師器、杯(１)、須恵器、杯(７・９・10・11)、甕(20)、蓋(４・５)は埋没土からの出土である。これらが本住居に確実に伴う出土であるか明瞭でない。小盃(21)は上層からの流入である。川原石状の礫が出土した。図示した以外に、土師器(杯類14片、甕類528片)、須恵器(杯類45片、甕類17片)が出土している。　**所見(帰属時期)：**確認面、住居の形状、甕類、杯類、椀を主体とした出土遺物等より９世紀後半の住居であると考える。埋没土内の遺物は床直上出土遺物と時期差の少ないものであった。



第47図　茅畑遺跡２面　４号住居出土遺物(１)



第48図　茅畑遺跡２面　４号住居出土遺物（２）

５号住居(第49～53図　PL.19・20・77)

調査区中央西よりの住居群内にある。南西方向に下る傾斜地に立地している。残存状態は良好である。４号住居と重複しており、南西隅の壁と使用面を壊されている。**位置：**774～778・-663～-667にある。

規模形状：主軸長3.54m、幅4.05mである。東辺に対して西辺が若干短いと思われる。各辺直線的で、南北にやや長い長方形を呈している。　**埋没土・壁：**ロームブロック・ローム粒子を含む黒褐色土及び褐色土が壁際から流れ込み、その後As-C軽石を少量含む黒褐色土がレンズ状に重なっている。自然堆積であると思われる。壁高は0.32～0.66mである。　**方位：**Ｎ－91°－Ｅ　**面積：**〔9.42〕㎡　**床面:**西に傾斜している。高低差は６cm程で、西が低い。中央付近に若干起伏がある。　**掘り方：**確認されない。　**壁溝:**ほとんどの壁で認められた。埋没土は、ロームブロック・ローム粒を少量含む暗褐色土である。締まりは弱い。北壁のものは、幅19～24cm、深さ８cm程、東壁のものは、幅７～21cm程、深さ不明、南壁のものは、幅14～18cm、深さ12cm程、西壁のものは、幅22～31cm、深さ10cm程である。　**ピット(柱穴)：**全部で３基が確認された。Ｐ１・２は規則的な主柱穴配置による柱穴の一部であると思われる。Ｐ３は、壁柱穴の可能性がある。各柱穴の規模及び埋没土は次の通りである。

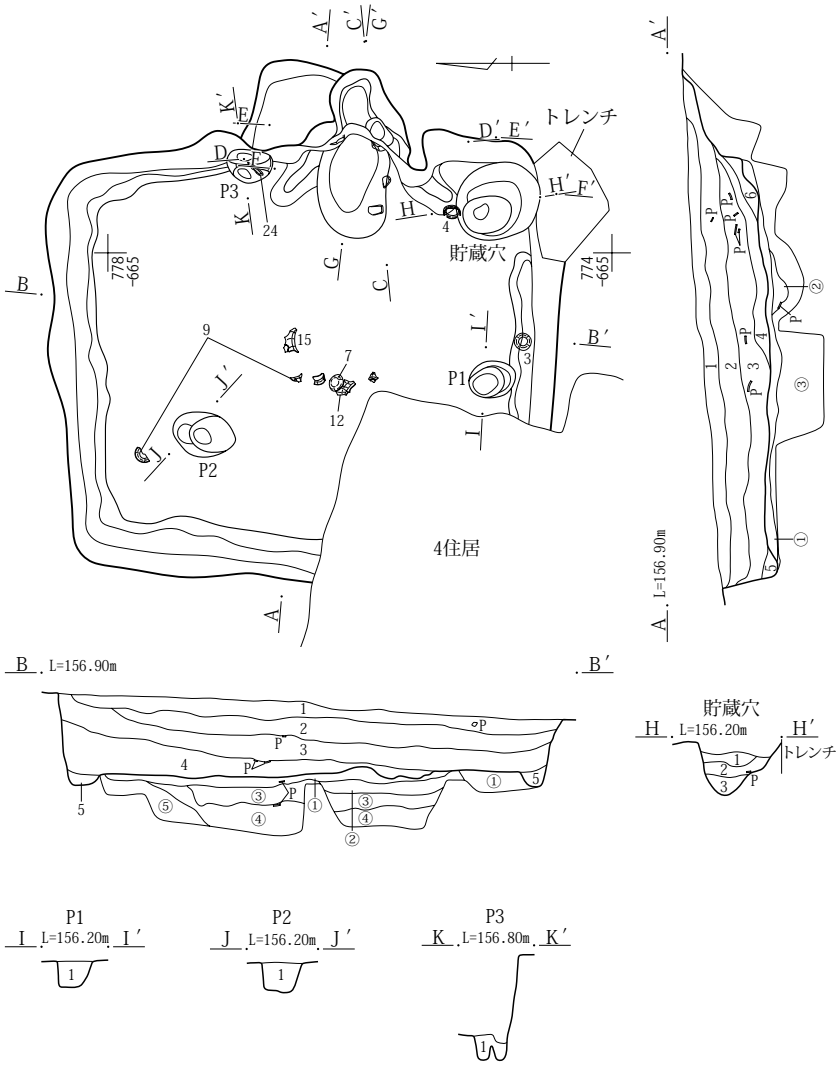
(長径×短径×深さcm)

Ｐ１　38×30×21　　Ｐ２　50×35×24

Ｐ３　36×26×19

埋没土は、黒褐色土及び褐色土が主体である。As-C軽石、ロームブロック・ローム粒、焼土ブロック・焼土粒、炭化物粒を含む。およそ締まり弱い。柱穴の規模及び埋没土には、大きな相違はなく、同時期の埋没であると考える。　**貯蔵穴：**住居の南東隅に掘り込みを確認した。位置と規模より貯蔵穴と思われる。埋没土は、炭化物を多量、ロームを少量含む黒色土、ロームブロック・ローム粒子を中量、焼土を少量含むにぶい黄褐色土、As-C軽石、ロームブロック・ローム粒子を少量含む灰黄褐色土の順である。上層は締まりが強い。二段になって内径が３層で埋没している。内径長径39cm、内径短径28cm、内径深さ14cmである。外径長径69cm、外形短径58cm、合計深さ43cmである。内蓋があった可能性がある。　**床下土坑：**確認されない。　**カマド：**東辺中央やや南寄りに位置している。全長111cm、幅147cm、焚口幅112cm、燃焼部幅65cmである。煙道は、壁外側に55cm張り出している。燃焼部は、住居内から壁際にかけて位置している。火床及び煙道の先端部には土器片が確認された。支脚は確認できなかった。袖の構築材として、左右共に礫が確認できた。左の礫は、長さ22cm、幅13cm、厚さ18cm、右の礫は、長さ25cm、幅14cm、厚さ24cmである。右の礫は内側にやや傾いている。もとは一つの石材であったが、二つに分けて使用していると推定される。上部を粘質土ロームで固めており、焼土化している。掘り方の埋没土は、灰黄褐色土、にぶい黄褐色土、にぶい赤褐色土に炭化物を多量に含む灰層が載っている。深さは25cm程度である。**重複遺構：**４号住居に前出している。　**遺物：**土師器12点(杯１点、甕11点)、須恵器10点(杯９点、蓋１点)、鉄製品(１点)、礫石器１点(カマド構築材)を図示した。住居中央及びカマドを中心に遺物が出土した。北西隅及び南壁直下にも散見できる。

甕(14)はカマド床直上及び掘り方から、甕(15)は床直上及びカマド掘り方等から、甕(16)はカマド床直上から床上11cm及び埋没土等から、甕(17)はカマド床直上から床上10cmにかけて、甕(19)はカマド床直上から床上11cmにかけて、甕(20)はカマド床直上及び掘り方から、カマド構築材(23)はカマドからの出土であった。須恵器、杯(４・７)は床直上から、杯(６)はカマド床直上からの出土であった。これらは、本住居に伴うものであると考える。土師器、杯(１)は掘り方から、甕(12)は床上９cm及び埋没土から、甕(13)は埋没土から、甕(18)は埋没土から、甕(21)は貯蔵穴及び埋没土から、甕(22)は掘り方及び埋没土から、須恵器、杯(３)は壁溝から、杯(５)は掘り方からの出土であった。これらは、本住居に伴うものであると考えるのが自然である。須恵器、杯(９)は床上21～22cmから、杯(８・10・11)、蓋(２)は埋没土からの出土であった。これらは、本住居に確実に伴うものか明瞭でない。鉄製品(24)はＰ３からの出土であった。川原石状の礫が出土した。図示した以外に、土師器(杯類２片、甕類446片)、須恵器(杯類４片)が出土している。**所見(帰属時期)：**確認面、住居の形状、甕類、杯類を主体とした出土遺物等より９世紀前半の住居であると考える。埋没土内の遺物は床直上出土遺物と時期的に差の少ないものであった。



５号住居　Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′

1　黒褐色土(10YR2/2)　As-Cを25％程度含む。

2　黒褐色土(10YR3/2)　As-Cを20％程度含む。１層よりも僅かに黄色味を帯びる。

3　黒褐色土(10YR2/2)　As-Cを20％程度含む。炭化物粒子及び焼土粒子を僅かに含む。

4　褐色土(10YR4/4)　ほぼローム。黒褐色土を10％程度含む。締まりは強い。

5　暗褐色土(10YR3/3)　ロームブロック及び同粒子を３％程度含む。締まりは弱い。

6　黒褐色土(10YR3/2)　ロームブロック及び同粒子を１％程度含む。締まりは弱い。

①　黒褐色土(10YR3/1)　As-Cを10％程度、焼土粒子及び炭化物片を１％程度含む。締まりは強い。

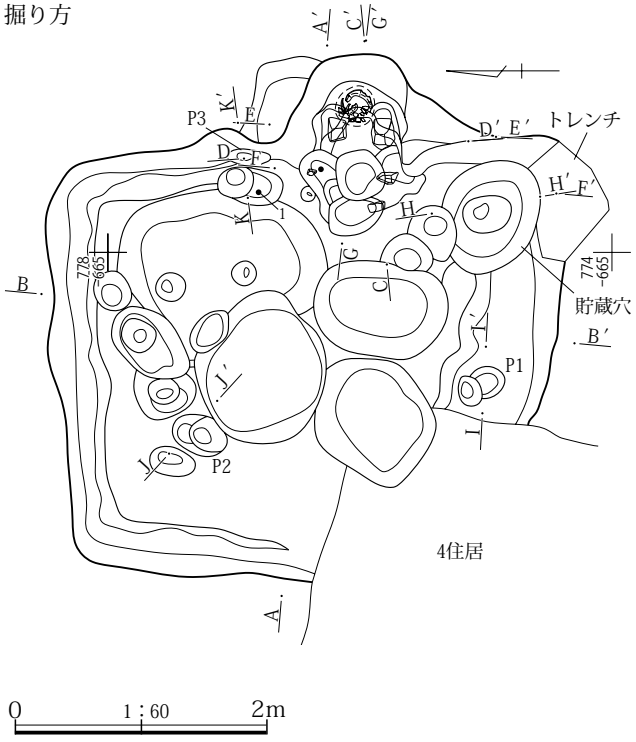
②　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ロームに10％程度の黒褐色土を含む。締まりは極めて強い。

③　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　ほぼローム。焼土粒子３％、炭化物粒子を１％程度含む。締まりは強い。粘性あり。

④　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ほぼローム。焼土粒子や炭化物粒子を僅かに含む。締まりは強い。

⑤　黒褐色土(10YR2/2)　ロームブロック及び同粒子を50％程度含む。黒褐色土とロームの互層。締まりは極めて強い。

掘り方



５号住居　貯蔵穴　Ｈ－Ｈ′

1　灰黄褐色土(10YR4/2)　As-Cを３％程度、ロームブロック及び同粒子を５％程度含む。締まりは強い。

2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ロームブロック及び同粒子を15％程度、全体に焼土を薄く含む。締まりはやや弱い。

3　黒色土(10YR2/1)　炭化物を多量､ロームを３％程度含む。締まりは弱い。

５号住居　Ｐ１　Ｉ－Ｉ′

1　黒褐色土(10YR3/2)　As-Cを５％程度、ロームブロック及び同粒子を15％程度含む。締まりは弱い。

５号住居　Ｐ２　Ｊ－Ｊ′

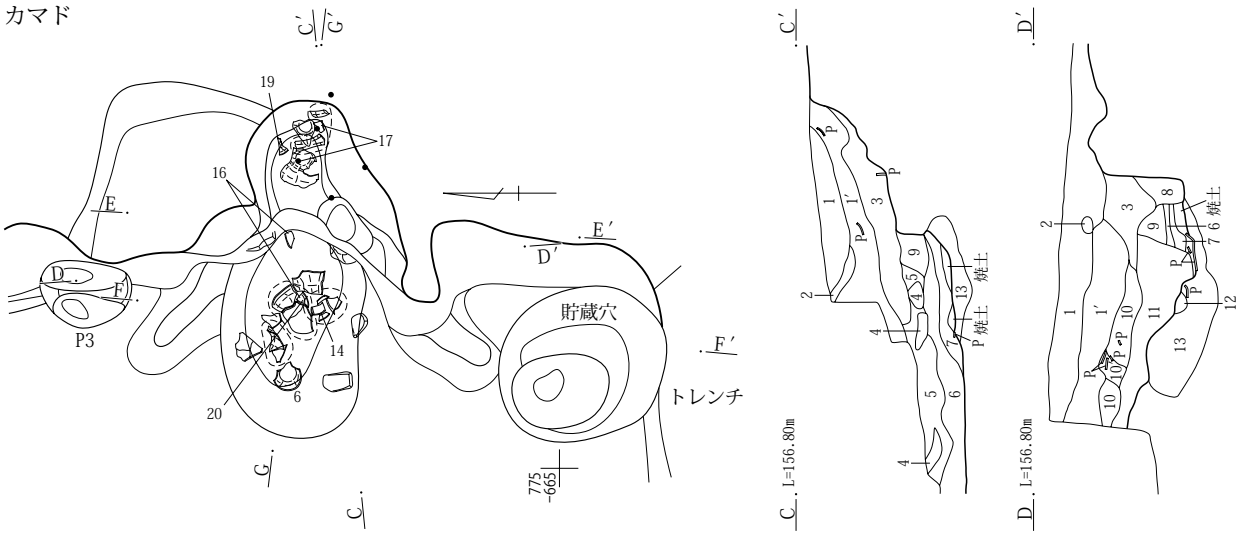
1　黒褐色土(10YR2/2)　ロームブロック及び同粒子を30％程度含む。締まりは弱い。As-Cを僅かに含む。

５号住居　Ｐ３　Ｋ－Ｋ′

1　褐色土(7.5YR4/3)　ローム小ブロック及び同粒子を30％程度、焼土粒子及び同ブロックを１％程度、炭化物粒を５％程度含む。締まりはやや弱い。

第49図　茅畑遺跡２面　５号住居

カマド



５号住居　カマド　Ｃ－Ｃ′・Ｄ－Ｄ′

1　黒褐色土(10YR3/2)　As-Cを25％程度含む。

1′　黒褐色土(10YR3/2)　As-Cを少量含む。１層に準ずる。

2　橙色土(7.5YR7/6)　焼土粒子を５％程度含む。締まりは弱い。

3　橙色土(7.5YR7/6)　焼土粒子及び同ブロックを20％程度含む。焼けていない部分は黄色味が強い。粘性あり。

4　にぶい橙色土(10YR6/4)　ロームブロックを含む。粘性あり。

5　灰黄褐色土(10YR4/2)　ロームブロック及びローム粒子を30％程度、焼土粒子を１％未満含む。

6　黒褐色土(10YR3/1)　焼土粒子を１％程度、灰を全体に含む。締まりは弱い。

7　灰黄褐色土(10YR4/2)　５層よりもやや多くのロームを含み、締まりは強い。

8　赤色土(10R4/6)　焼土。As-Cを僅かに含む。やや粘性あり。締まりは強い。

9　明赤褐色土(2.5YR5/6)　黄褐色粘性土ブロックを30％程度、黒褐色土10％程度含む。

10　黒褐色土(10YR3/2)　黄褐色粘性土ブロックを20％程度含む。

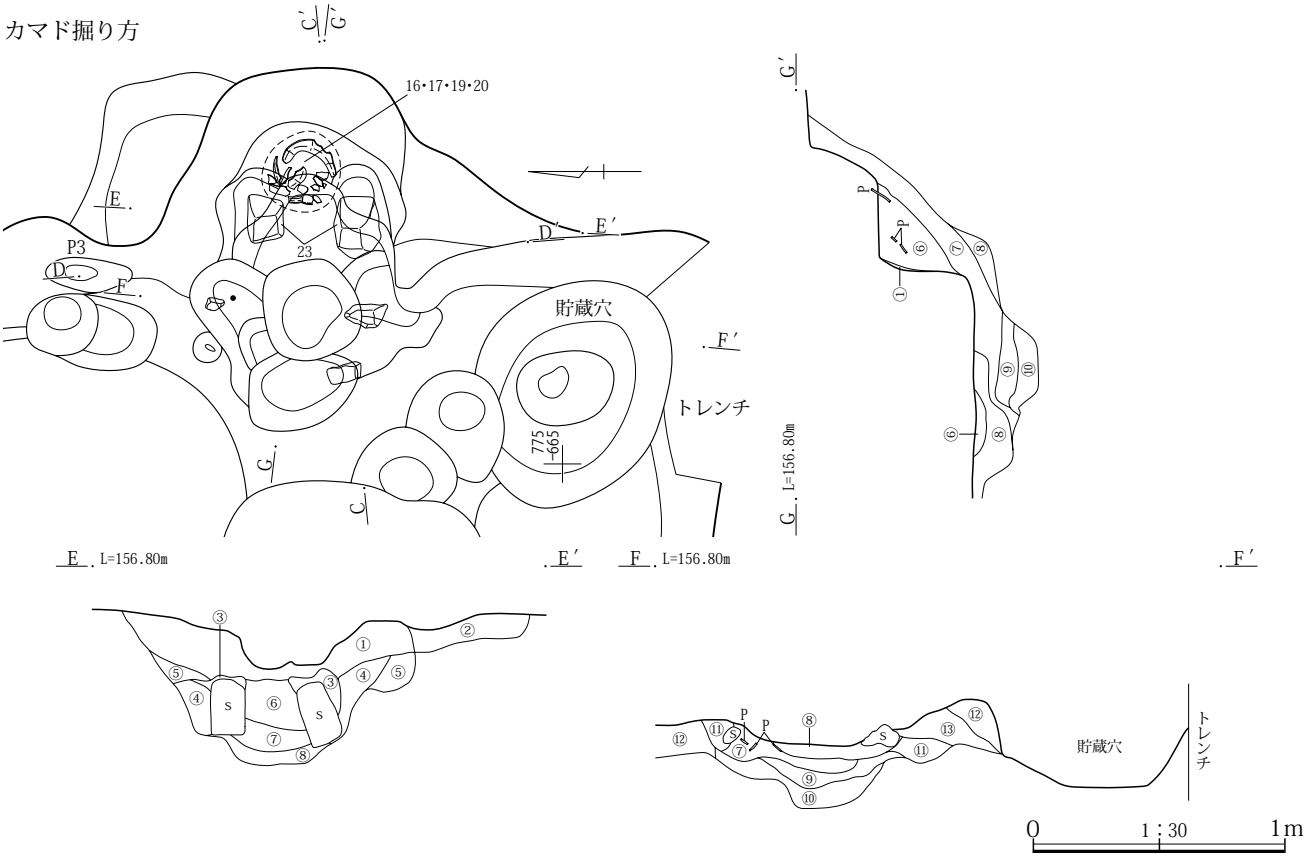
10′　黒褐色土(10YR3/2)　黄褐色粘性土ブロックを含まず、10層よりも締まりは弱い。

11　黒褐色土(10YR2/2)　As-Cを５％程度、ローム小ブロックを１％程度、焼土粒子を１％未満含む。

12　灰黄褐色土(10YR5/2)　単一的(掘り方)。粘性あり。

13　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　焼土粒子及び焼土ブロックを10％程度含む。(掘り方)

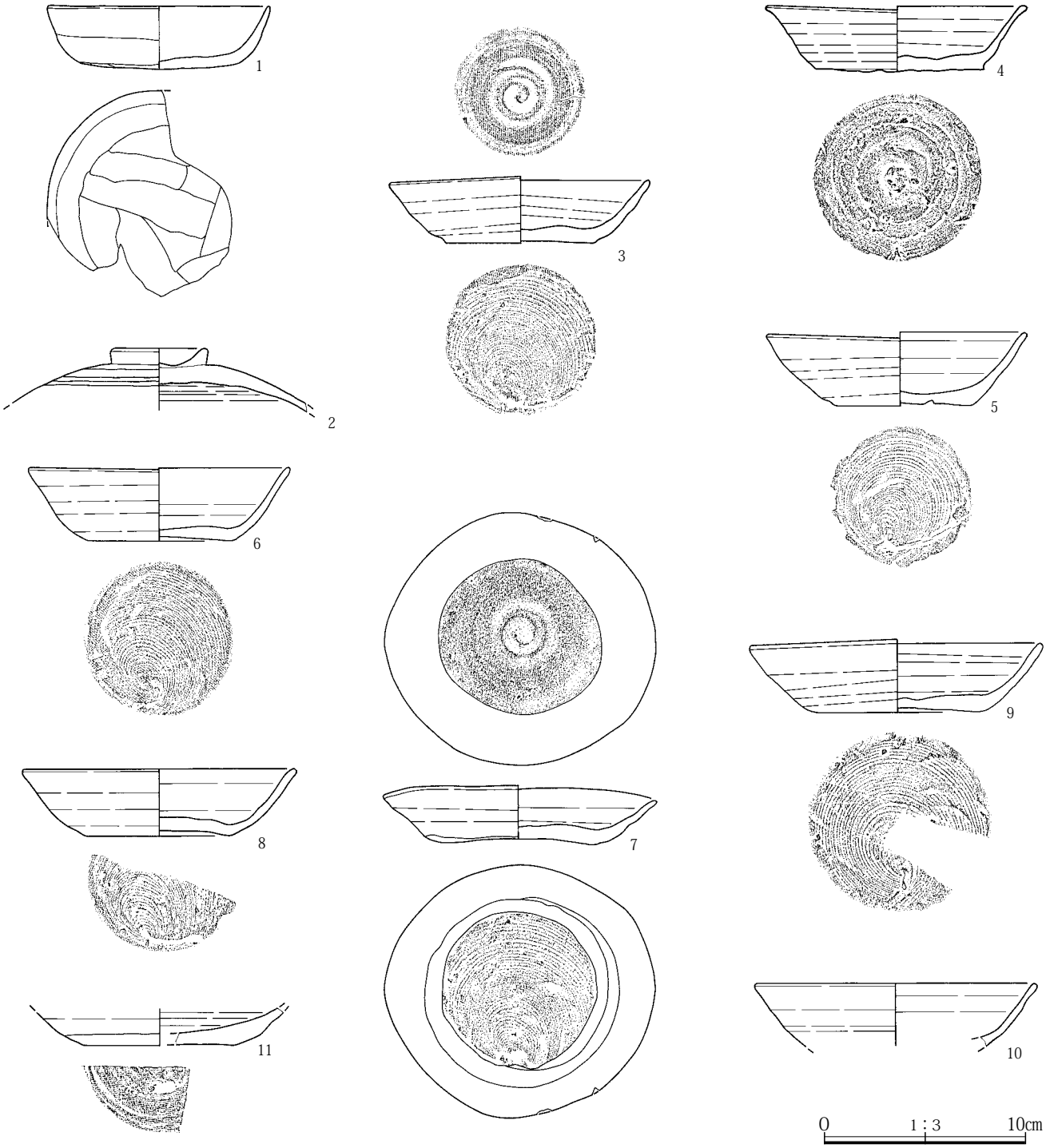
カマド掘り方



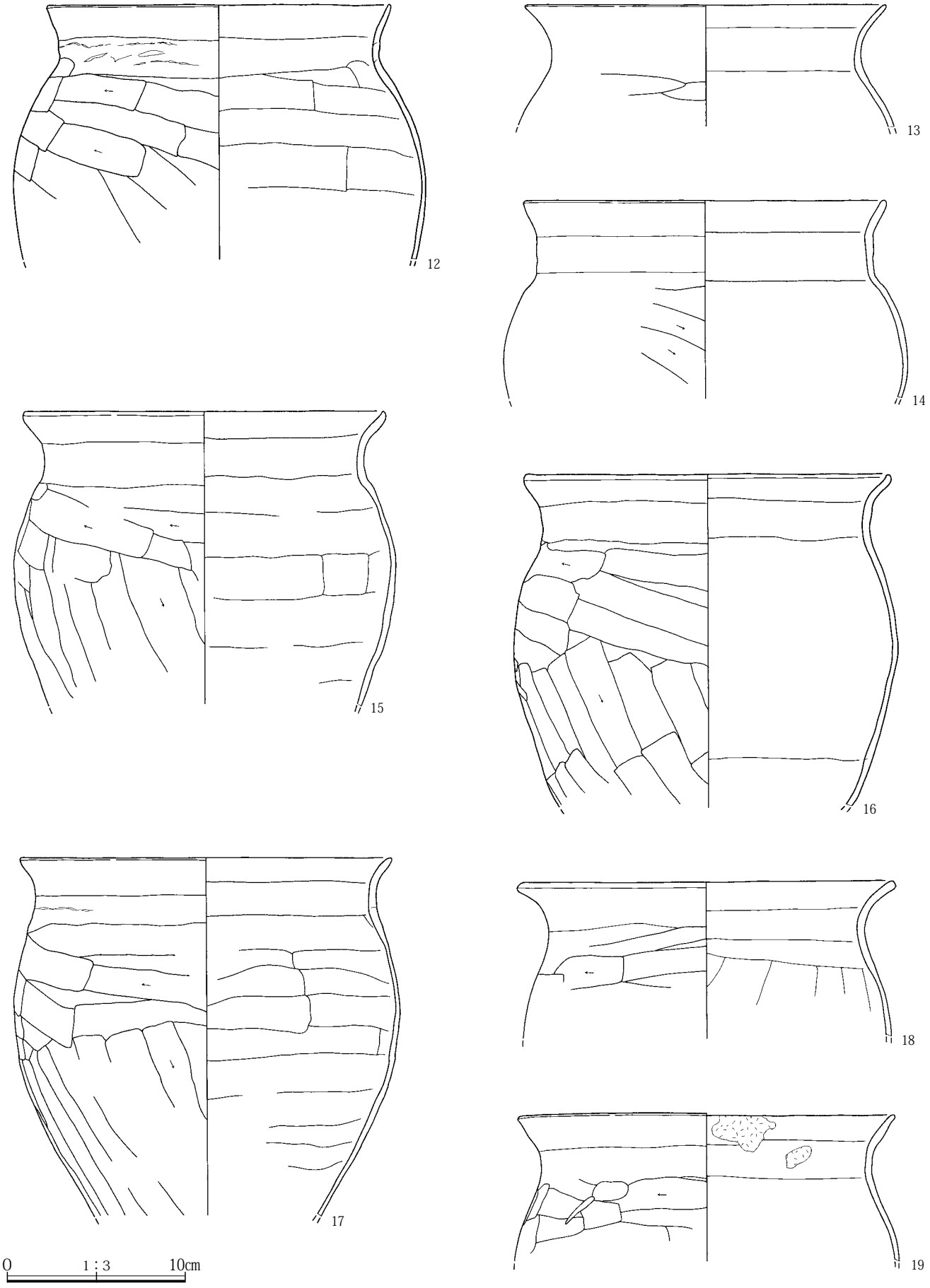
第50図　茅畑遺跡２面　５号住居カマド

５号住居　カマド掘り方　Ｅ－Ｅ′・Ｆ－Ｆ′・Ｇ－Ｇ′

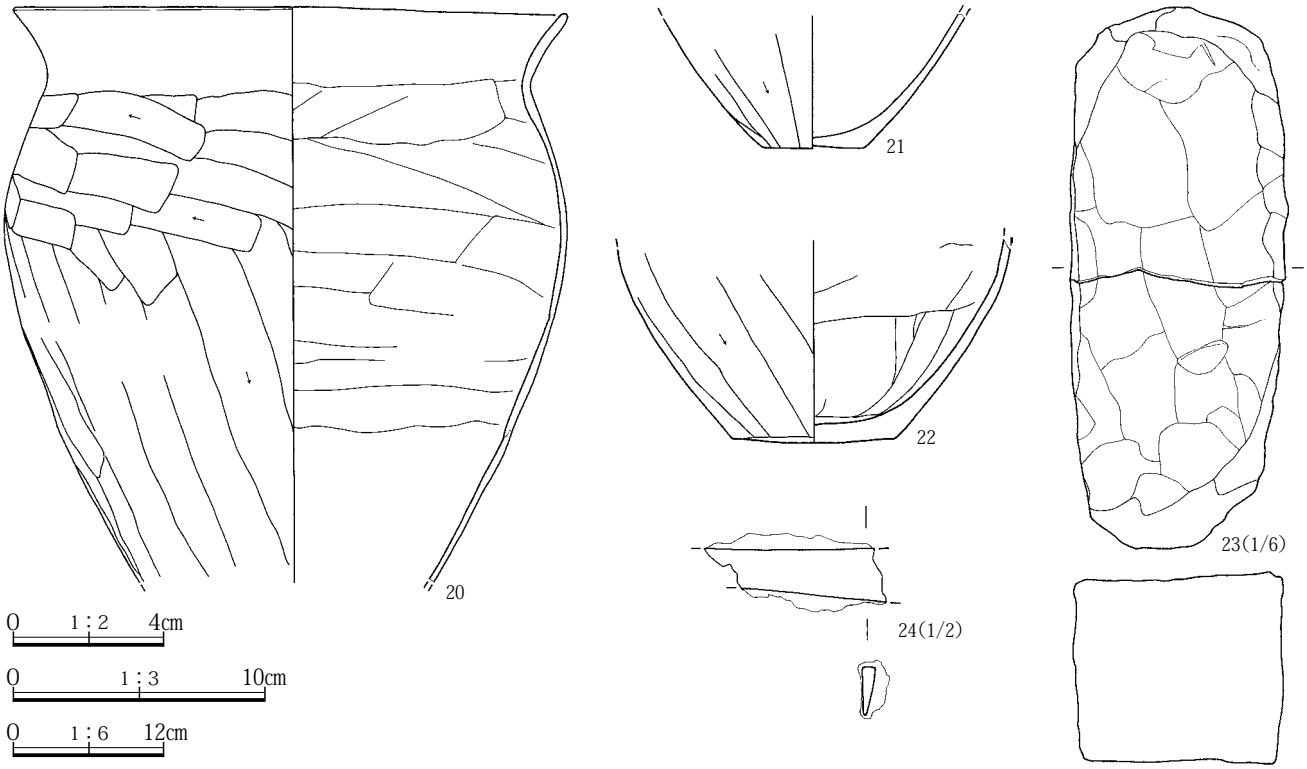
① にぶい橙色土(10YR6/4)　ロームブロック及び同粒子を10％程度、焼土粒子を１％未満含む。締まりは強い。粘性あり。
② 灰黄褐色土(10YR4/2)　As-Cを３％程度含む。締まりは弱い。
③ 赤色土(10R5/6)　焼土。部分的に黄褐色粘性土の部分あり。
④ 灰褐色土(7.5YR4/2)　焼土ブロック及び焼土粒子を５％程度含む。全体に僅かに赤味を帯びる。
⑤ にぶい黄褐色土(10YR5/4)　ローム粒子及び同ブロックを１％未満含む。やや粘性あり。
⑥ にぶい赤褐色土(2.5YR4/4)　焼土ブロックを３％程度含む。締まりは極めて弱い。
⑦ にぶい赤褐色土(2.5YR4/4)　ロームブロックを５％程度含む。締まりは⑥層よりもやや強い。
⑧ 黒色土(10YR2/1)　炭化物を多く含む灰層
⑨ にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ロームブロックを20％程度含む。
⑩ 灰黄褐色土(10YR4/2)　ロームブロックを10％程度含む。⑨層よりもやや黒味が強い。
⑪ 黒褐色土(7.5YR3/2)　全体に薄く焼土を含む。やや粘性あり。
⑫ 黒褐色土(10YR3/2)　ローム粒子及びロームブロックを５％程度含む。締まりは強い。
⑬ にぶい黄褐色土(10YR5/4)　ロームブロック及び同粒子を30％程度、灰褐色土ブロックを５％程度含む。粘性あり。締まりは強い。



第51図　茅畑遺跡２面　５号住居出土遺物(１)



第52図　茅畑遺跡２面　５号住居出土遺物（２）



第53図　茅畑遺跡２面　５号住居出土遺物（３）

６号住居（第54～60図　PL.20・21・78）

調査区中央西よりの住居群内にある。南西方向に下る傾斜地に立地している。残存状態は良好である。

位置：777～781・-667～-672にある。

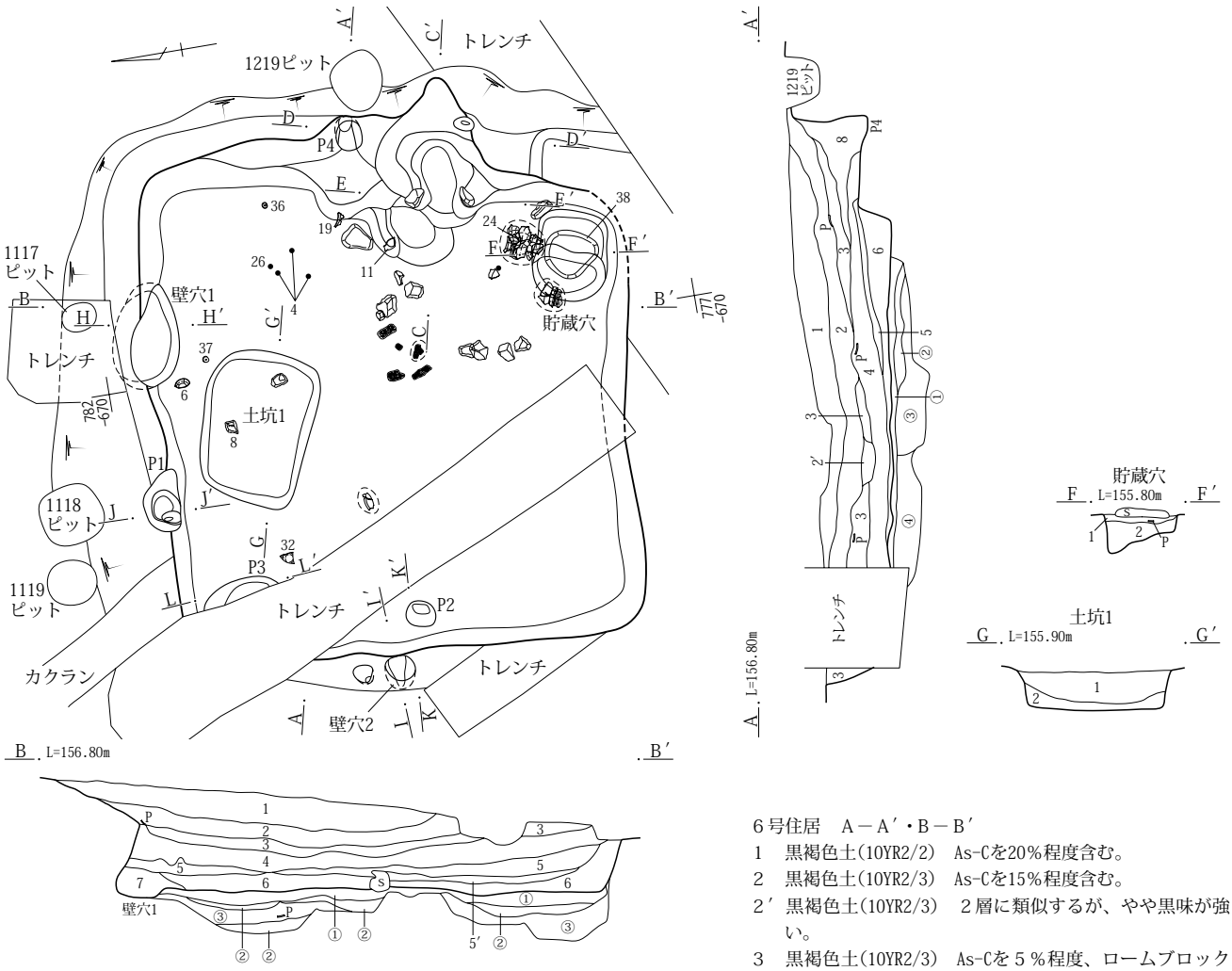
規模形状：主軸長4.40m、幅4.01mである。各辺歪んでいる。正方形を呈しているが北東方向に張り出している。住居周辺を、住居に向かって削り込んでいる。削り込みの幅は、北辺が、46～96cm程、東辺が、38～42cm程、西辺が、22～32cm程である。傾斜の高いほうが広めに削り込んでいる。傾斜地に住居を施設する際に、敷地を平らに保つために造成された可能性があると指摘する。

埋没土・壁：As-C軽石、ローム粒、焼土粒子、炭化物粒子を少量含む黒褐色土、黒褐色土を中量、ロームブロック粒子を少量含む締まりの強いにぶい黄褐色土が壁際から埋没し、その後、As-C軽石、ロームブロックを少量含む黒褐色土がレンズ状に堆積している。自然堆積であると思われる。３層は砂をラミナ状に含んでおり、流水の可能性がある。壁高は19～43cmである。　**方位：**N－98°－E　**面積：**〔13.75〕㎡　**床面：**傾斜はなくほぼ平坦である。カマドの左右に棚状の高まりが確認される。左の高まりは、幅80cm、奥行き50cm、高さ28cm程である。右の高まりは、幅80cm、奥行き50cm、高さ37cm程である。右の棚状の高まりは壁の外に位置する。カマド前及び住居南に礫を散見する。また、礫の出土に挟まれるように炭が確認される。床面の締まりは強い。　**掘り方：**ほぼ全面に認められる。形状は、土坑状の掘り込みを含み変化が激しい。特に北、南、西に深い箇所がある。深さは、５～40cm程である。埋没土は、ロームブロックを含む黒褐色土及びロームを固めたものである。床層は、締まりの強い暗褐色土である。ロームブロック、焼土ブロックを含む。　**壁溝：**認められない。　**ピット（柱穴）：**全部でピット５基、壁穴２基を確認した。Ｐ３は、規則的な主柱穴配置による柱穴の一部であると思われる。Ｐ１・２・４、壁穴１・２は、壁柱穴の可能性がある。Ｐ５は、掘り方で確認された。各柱穴の規模及び埋没土は次の通りである。

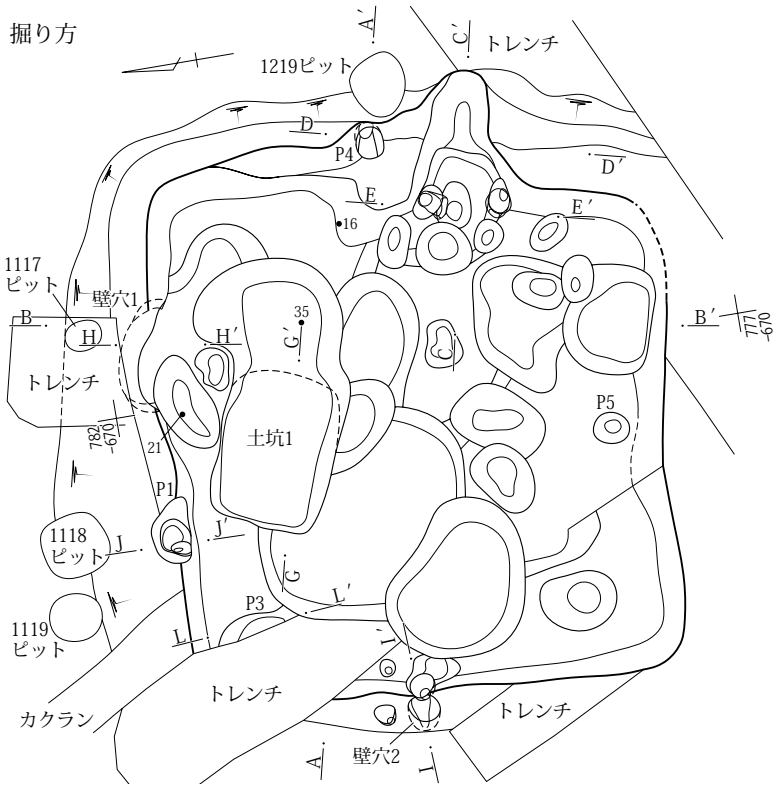
（長径×短径×深さcm）

Ｐ１	52×30×26	Ｐ２	25×22×22
Ｐ３	66×計測不能×19	Ｐ４	25×32×24
Ｐ５	28×26×不明		

埋没土は、灰黄褐色土、黒褐色土、及びにぶい黄褐色土が主体である。As-C軽石、ロームブロック・焼土粒子を含む。締まりが一定でない。各ピット、異なる土層である。



掘り方



6号住居　A－A′・B－B′

1　黒褐色土(10YR2/2)　As-Cを20％程度含む。

2　黒褐色土(10YR2/3)　As-Cを15％程度含む。

2′黒褐色土(10YR2/3)　２層に類似するが、やや黒味が強い。

3　黒褐色土(10YR2/3)　As-Cを５％程度、ロームブロックを３％程度含む。砂をラミナ状に含む。

4　黒褐色土(10YR2/2)　As-Cを10％程度、ロームブロックを２％程度含む。砂は含まない。

5　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　黒褐色土を10％程度、ロームブロック及び同粒子を３％程度含む。締まりは強い。

5′にぶい黄褐色土(10YR5/4)　５層に類似するが、ロームブロック及び同粒子を10％程度含む。締まりは強い。

6　黒褐色土(10YR2/2)　As-Cを３％程度、ローム粒子を１％程度、焼土粒子及び炭化物粒子１％未満含む。締まりは弱い。

7　灰黄褐色土(10YR4/2)　As-Cを３％程度、ローム粒子を１％程度含む。焼土粒子及び炭化物粒子を僅かに含む。

8　暗褐色土(10YR3/3)　As-Cを３％程度、ローム粒子を10％程度含む。焼土粒子及び炭化物粒子を１％程度含む。

①　暗褐色土(10YR3/3)　ロームブロック及び同粒子を30％程度、焼土ブロック及び同粒子を10％程度含む。締まりは強い。

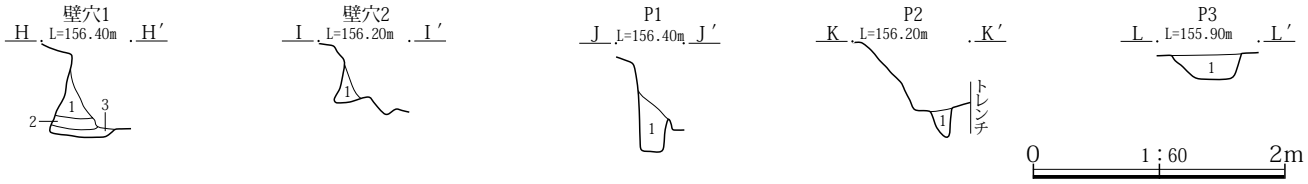
②　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　ロームブロック及び同粒子を固めたもの。締まりは極めて強い。

③　黒褐色土(10YR2/2)　ロームブロック及び同粒子を５％程度含む。締まりは弱い。

④　黒褐色土(10YR2/2)　４層に類似するが、ややロームの量が少ない。

0　1：60　2m

第54図　茅畑遺跡２面　６号住居



６号住居　貯蔵穴　Ｆ－Ｆ′
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　ローム粒子を10％程度、焼土粒子を３％程度含む。締まりは強い。
2　灰黄褐色土(10YR4/2)　ローム粒子を30％程度、焼土粒子を５％程度、炭化物を３％程度含む。締まりは弱い。
６号住居　土坑１　Ｇ－Ｇ′
1　黒褐色土(10YR2/2)　ロームブロック及び同粒子を５％程度含む。締まりは弱い。
2　黒色土(10YR2/1)　炭化物層。焼土ブロック及び同粒子を３％程度含む。締まりは弱い。
６号住居　壁穴１　Ｈ－Ｈ′
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　As-Cを３％程度、ローム粒子を１％程度含む。焼土粒子及び炭化物粒子を僅かに含む。
2　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　ロームブロック及び同粒子を固めたもの。締まりは極めて強い。
3　黒褐色土(10YR2/2)　炭化物を多量、焼土粒子を１％未満含む。
６号住居　壁穴２　Ｉ－Ｉ′
1　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　サラサラしている。締まりは弱い。
６号住居　Ｐ１　Ｊ－Ｊ′
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　ロームブロック及び同粒子を10％程度含む。締まりは強い。
６号住居　Ｐ２　Ｋ－Ｋ′
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ロームブロック及び同粒子を30％程度含む。締まりは弱い。
６号住居　Ｐ３　Ｌ－Ｌ′
1　黒褐色土(10YR2/2)　As-Cを10％程度、ロームブロックを２％程度含む。

第55図　茅畑遺跡２面　６号住居断面

壁穴１　90×56×33　　壁穴２　29×27×20

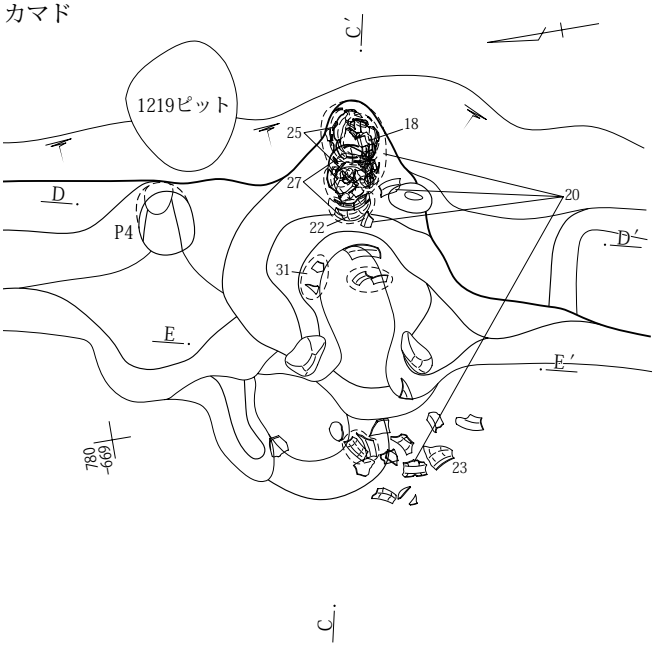
埋没土は、灰黄褐色土、にぶい黄褐色土が主体である。As-C軽石、ローム粒子を少量含む。締まりは弱い。それぞれ異なる土層である。

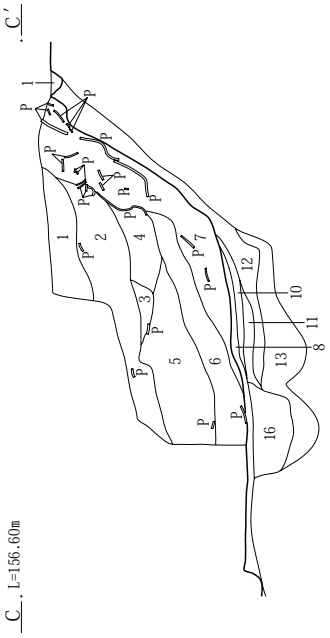
貯蔵穴：南東隅壁直下に掘り込みを確認する。位置と規模より貯蔵穴と思われる。埋没土は、灰黄褐色土で、ローム粒子、焼土、炭化物を含む。表面は硬化している。長径77cm、短径52cm、深さ北が32cm、南が16cm程の高低差がある。硬化面に蓋をするように礫が確認される、長径45cm、短径40cm、厚さ７cm程である。

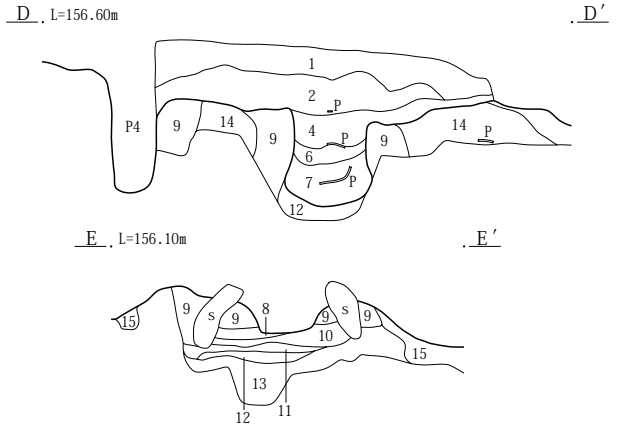
土坑：住居北の床面に長方形の掘り込みを確認する。位置と規模より、住居内土坑であると思われる。埋没土は、底の部分は炭化物層の黒色土である。焼土ブロック・焼土粒子を含み締まりが弱い。その上に、黒褐色土が埋没している。ロームブロックを少量含み締まりが弱い。壁面が焼けて硬化している。長軸128cm、短軸92cm、深さ33cmである。　**カマド：**東辺中央やや南寄りに位置する。全長117cm、幅102cm、焚口幅18cm、燃焼部幅28cmである。煙道は、壁外側に35cm張り出している。土器片が確認された。燃焼部は、住居内から壁際にかけて位置しており、火床上は、赤色に焼けている。袖先端部には、礫が確認された。カマドの構築材であると思われる。左袖の礫は、長さ28cm、幅18cm、厚さ12cmである。右袖の礫は、長さ25cm、幅19cm、厚さ９cmである。袖材は、にぶい黄橙色粘性土で、締まりが強い。As-C、焼土粒子、As-YP、ロームブロックを少量含む。掘り方は、火床下に深さ18cm前後認められ、埋没土は、黒褐色土、締まりの強いにぶい赤褐色土、赤色土の焼土、灰及び焼土を多量に含む橙色土である。　**重複遺構：**なし。　**遺物：**土師器17点(杯２点、甕15点)、須恵器18点(杯10点、椀１点、蓋２点、皿１点、甕４点)、石製品３点(紡輪２点、台石１点)を図示した。住居中央から東及びカマドにかけて集中して遺物が出土した。住居北の土坑周辺にも散見されている。

蓋(４)は床直上から、甕(18)は煙道床直上及び掘り方から、甕(24)は床直上及び貯蔵穴埋没土から、甕(25)は煙道床直上から、甕(26)は床直上及びカマドから、甕(27)は煙道床直上から、甕(31)はカマド床直上及び掘り方から、紡輪(37)は床直上からの出土であった。これらは、本住居に伴うものであると考えられる。甕(20)は煙道及びカマド床上24cmから、甕(21)掘り方及び埋没土から、甕(22)はカマド煙道からの出土であった。須恵器、杯(11)はカマド左袖及び埋没土から、杯(13)はカマドから、椀(16)は掘り方から、甕(33)は壁溝から、甕(34)はカマドから、甕(35)は掘り方から、台石(38)は貯蔵穴からの出土であった。これらは、本住居に伴うものであると考えるのが自然である。土師器、杯(１・２)、甕(17)は埋没土から、甕(19)は床上50cmから、甕(28)は埋没土から、甕(29)はカマド埋没土から、甕(30)は５・６号住居埋没土から、甕(23)はカマド床上27cm及び埋没土からの出土であった。須恵器、杯(６)は床上18cmから、須恵

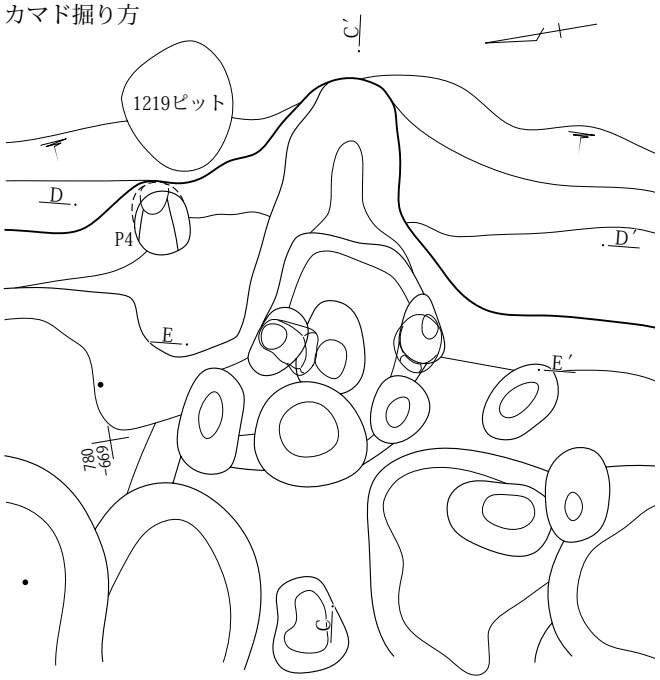
カマド







カマド掘り方



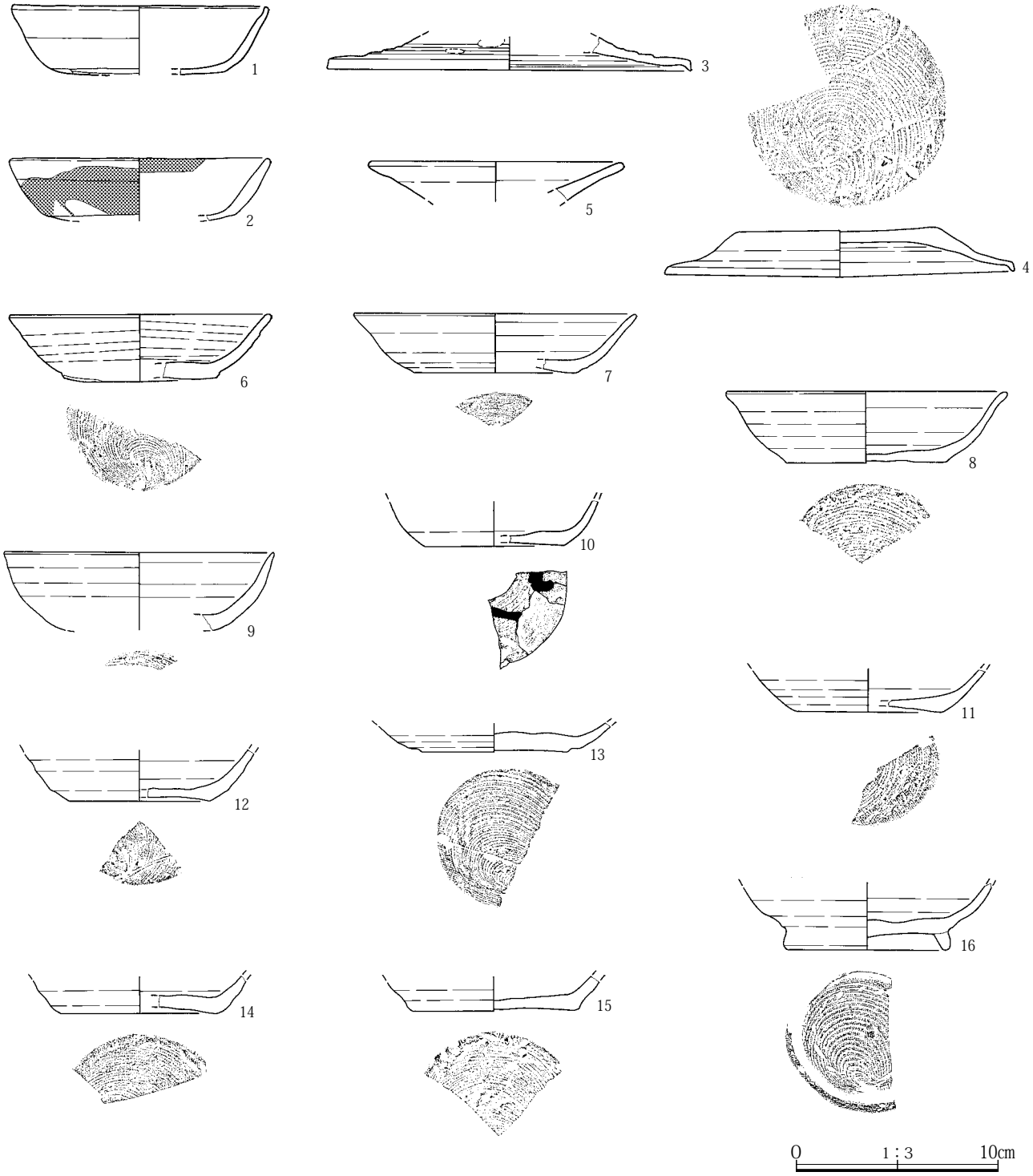
６号住居　カマド　Ｃ－Ｃ′・Ｄ－Ｄ′・Ｅ－Ｅ′

1　黒褐色土(10YR2/2)　As-Cを25％程度含む。
2　黒褐色土(10YR3/2)　１層よりも僅かに黄色味を帯びる。ローム粒子を10％程度、焼土粒子を僅かに含む。
3　黒褐色土(10YR2/2)　２層に類似するが、２層よりも黒味が強い。
4　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　As-Cを５％程度、焼土粒子を１％未満含む。
5　褐色土(10YR4/4)　黄褐色粘性土を含み、全体に黄色味を帯びる。焼土粒子及び同ブロックを２％程度含む。
6　黒褐色土(10YR3/1)　黄褐色粘性土と焼土粒子を僅かに含む。
7　橙色土(5YR7/6)　焼土粒子及び焼土ブロックを10％程度、黄褐色粘性土を30％程度含む。
8　橙色土(2.5YR7/6)　焼土粒子及び焼土ブロックを50％程度、灰を多量に含む。
9　にぶい黄橙色土(10YR6/3)　As-Cを１％程度、焼土粒子を１％程度、As-Cを１％程度、As-YPを２％程度、ロームブロックを10％程度含む。締まりは強い。粘性あり。
10　赤色土(10R5/6)　焼土
11　黒褐色土(10YR3/2)　ロームブロック及び同粒子を５％程度含む。締まりは極めて強い。
12　にぶい赤褐色土(2.5YR5/4)　焼土。締まりは強い。
13　黒褐色土(10YR2/3)　粘性あり。締まりは強い。
14　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　９層に類似するが、焼土粒子を含まない。粘性あり。
15　黒褐色土(10YR2/2)　３層よりもやや黒味が強く、締まりは弱い。
16　黒褐色土(10YR2/2)　炭化物片を10％程度、焼土粒子を５％程度含む。締まりは極めて弱い。

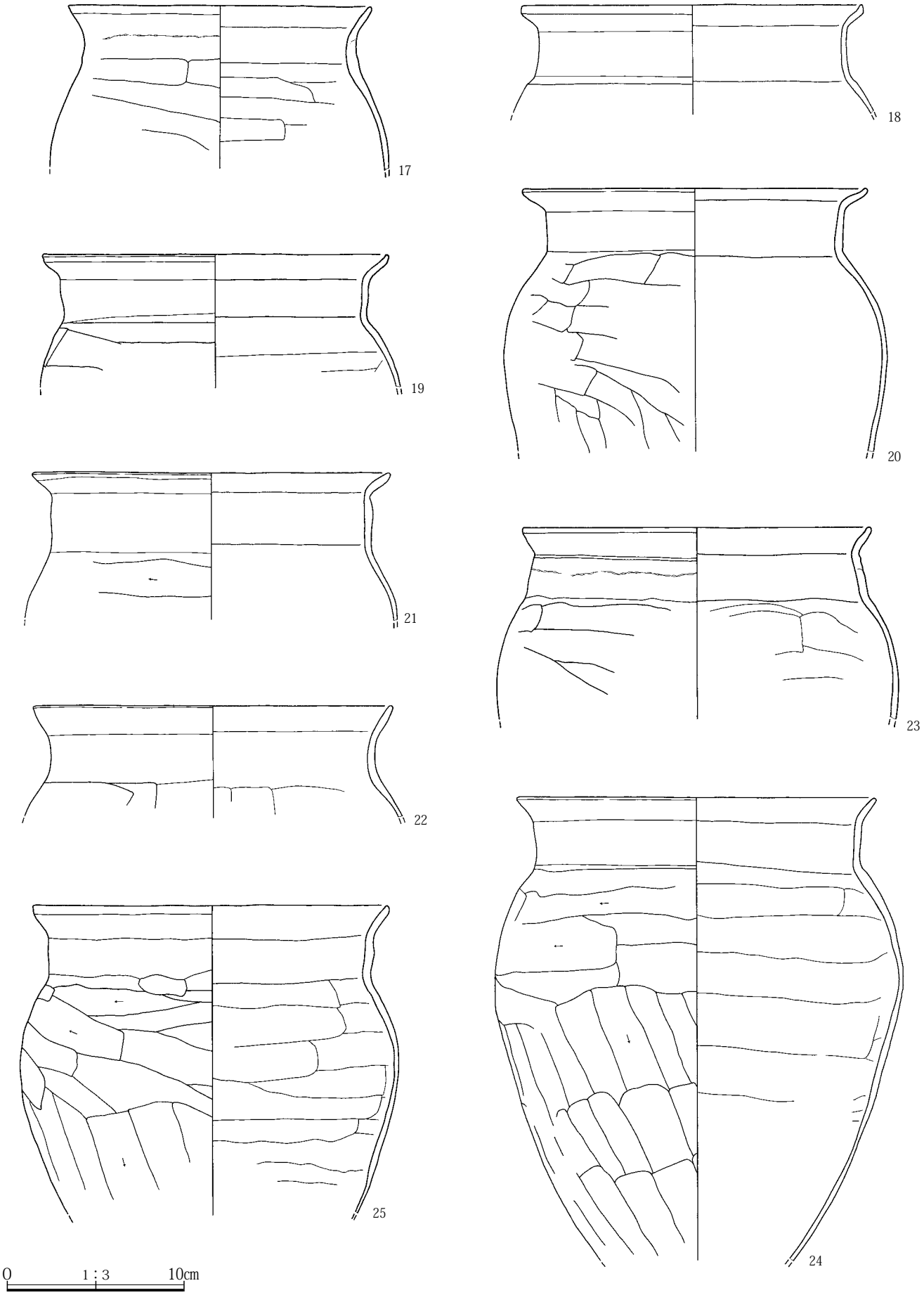
0　1：30　1m

第56図　茅畑遺跡２面　６号住居カマド

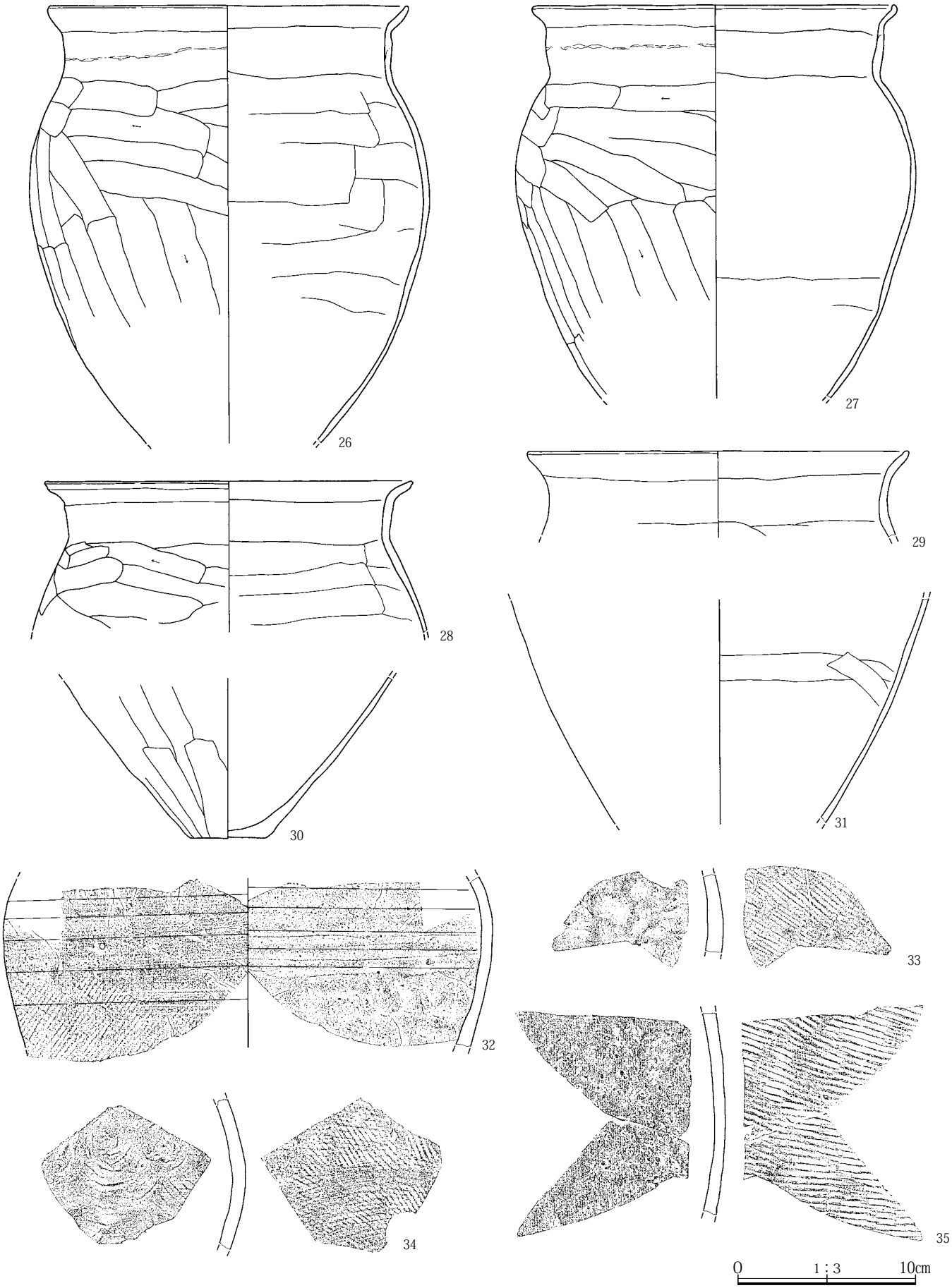
器杯（７・９・10・12・14・15）は埋没土から、杯（８）は土坑１床上31cmから、蓋（３）、皿（５）は埋没土から、甕(32)は床上35cm及び埋没土から、紡輪(36)は床上35cmからの出土であった。これらは、本住居に確実に伴うものであるか明瞭でない。図示した以外に、土師器（杯類４片、甕類938片）、須恵器（杯類45片、甕類11片）が出土している。　**所見（帰属時期）**：確認面、住居の形状、甕類、杯類を主体とした出土遺物等より９世紀後半の住居であると考える。埋没土内の遺物は床直上出土遺物と時期的に差の少ないものであった。



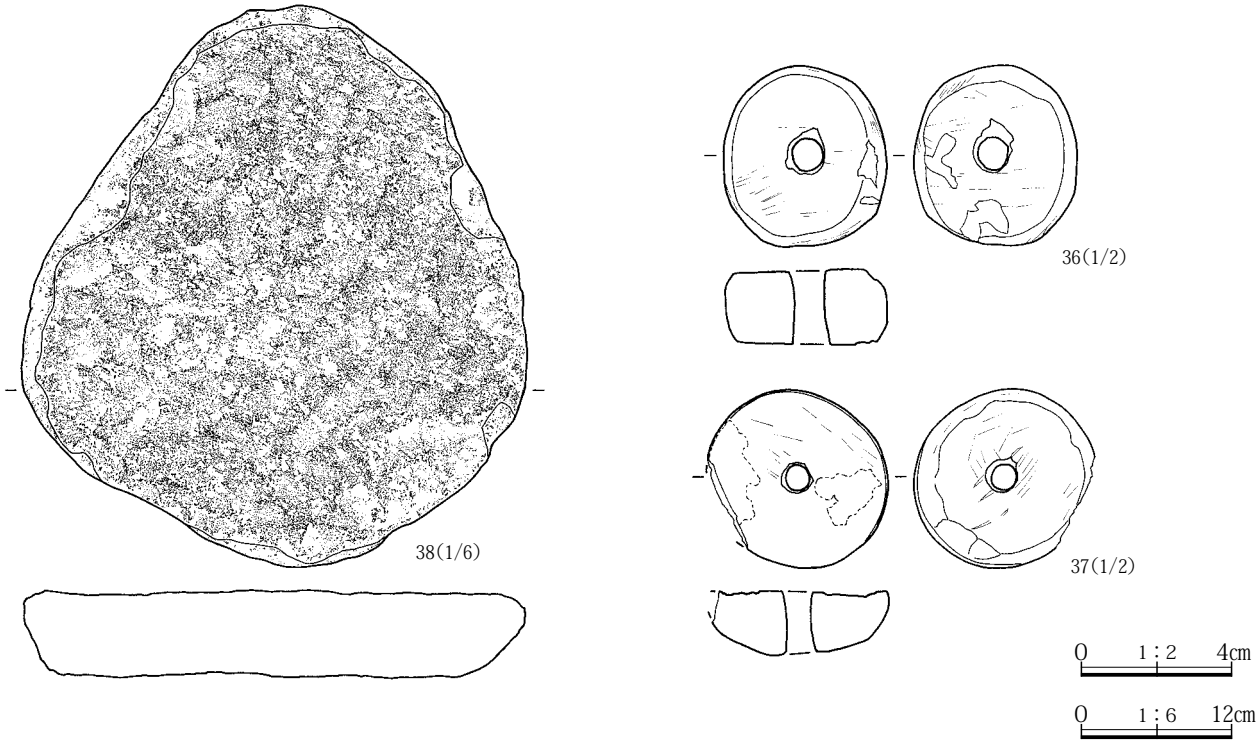
第57図　茅畑遺跡２面　６号住居出土遺物（１）



第58図　茅畑遺跡２面　６号住居出土遺物（２）



第59図　茅畑遺跡２面　６号住居出土遺物（３）



第60図　茅畑遺跡２面　６号住居出土遺物（４）

（2）古墳

茅畑遺跡東部に、古墳が１基検出された。調査区域外の北には、丘陵の最高地点があると推察され、古墳は、その最高地点の南斜面に位置する。古墳周辺は、遺跡全体を見渡せる位置にあると思われる。古墳のある丘陵地帯から西方へしばらく進むと西に傾斜して緩やかな谷へ下る。前述した古代の集落はこの傾斜地上に位置するのである。また、谷を挟んで、鴫上Ⅰ遺跡Ａ区の傾斜地から鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区の丘陵地帯では、弥生時代から古代までの集落が展開されている。つまり、古墳は、相当する時期の集落を見渡せる位置にあったと考えられる。

また、本遺跡の北東約１㎞、谷違いの丘陵状に位置する和田山天神前遺跡では、26基からなる古墳群が調査されている。和田山古墳群は、分布の特徴として、中央尾根に分布していることがあげられている。(註１)

中央尾根に位置するという点では、本遺跡の丘陵の最高地点の南面に位置している１号古墳には、立地の条件の共通性があると考えられる。茅畑遺跡においても調査区以外に古墳がある可能性が考えられる。

註１（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団1999「和田山天神前遺跡」では、次の点が指摘されている。最高所の中央尾根を境界として、榛名白川に面した東側に集中する。その中でも、現況の河川に接する２本の尾根と中央尾根に集中している。中央尾根の最高所には、方格規矩鏡を副葬した桜塚古墳、６世紀初頭の太子塚古墳がある。

１号古墳（第61～64図　PL.22～24・78）

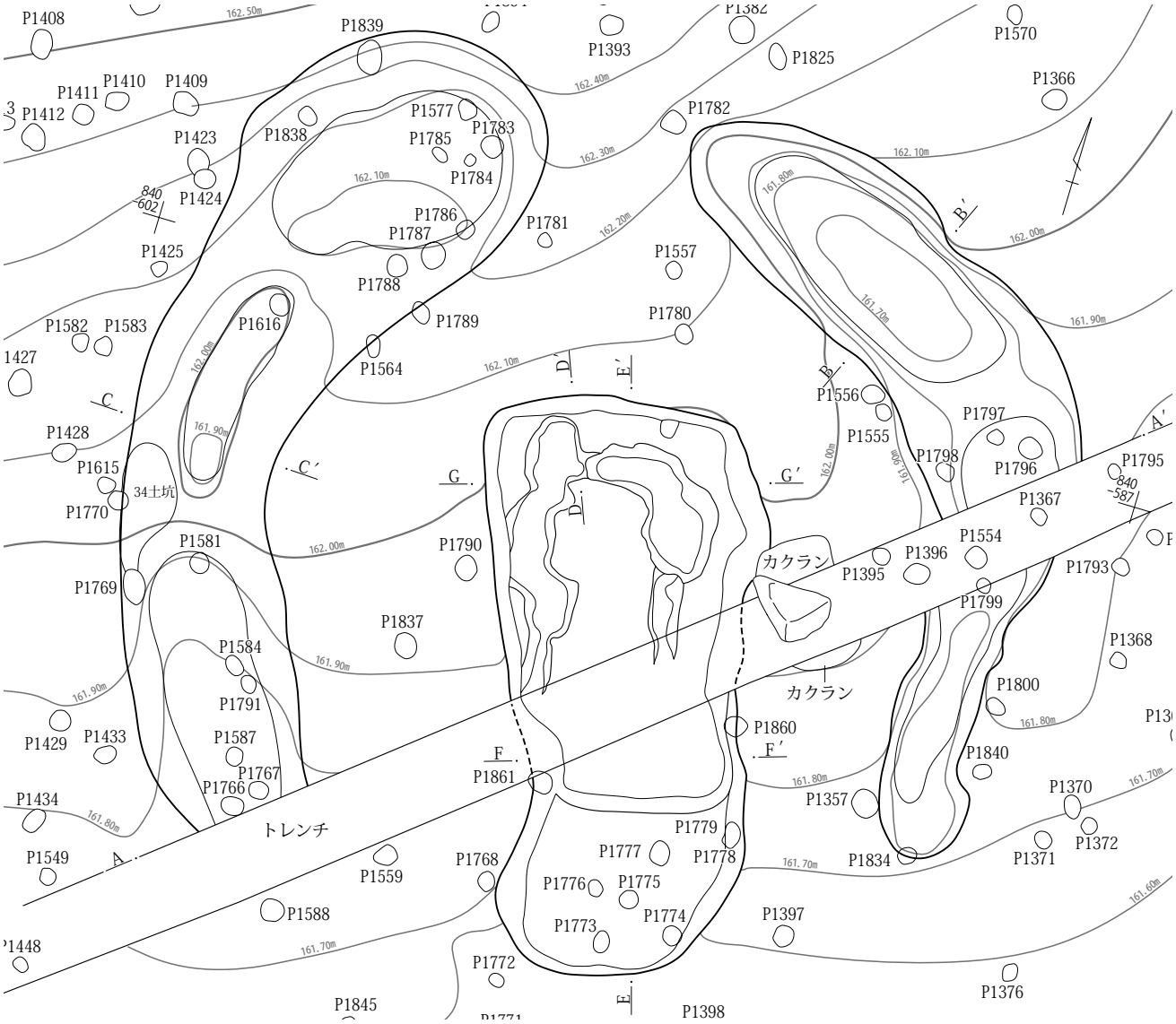
１　概要

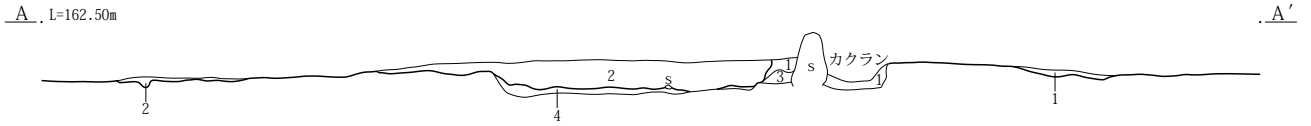
位置：830～844・-587～-602にある。

茅畑遺跡東部のピット群内にある。調査区北側に最高地点があると思われる丘陵の緩やかな南斜面に位置している。後世の削平を多く受けており、残存状態は極めて不良であり、墳丘はほとんど削られている。周堀は北西から西及び北東から東にかけて確認され、北の一部と南には確認できなかった。墳丘東、主体部の東側に長さ1.2m程の礫があり、石室から移動された可能性がある。

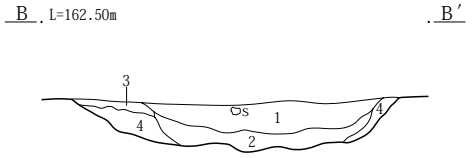
１号古墳の南西には、古代の集落が広がっており、古墳の位置する丘陵から見下ろすことができる。集落からは、本古墳を中心とした聖域である古い時代の墓域を仰ぎ見る生活を送っていたと考えられる。

掘り方





0　1：100　5m



0　1：50　2m

1号古墳　A－A′

1　黒褐色土(10YR2/2)　黄褐色ローム粒径１～５㎜を３％、As-Cを３％含む。締まりやや強い。

2　黒褐色土(10YR3/2)　As-Cを５％、小礫径３～10㎝を５％含む。締まり弱い。

3　灰黄褐色土(10YR4/2)　ローム粒径１～５㎜を２％含む。粘性あり。

4　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ロームブロック、As-Cを含む。

1号古墳　B－B′・C－C′

1　黒褐色土(10YR3/1)　As-Cを10％、小礫径５㎝を２％含む。締まり強い。

2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　明黄褐色ローム粒を10％含む。かたいロームブロック径３～５㎝を５％含む。締まりやや弱く粘性あり。

3　暗褐色土(10YR3/3)　As-Cを５％、ローム粒を１％含む。

4　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　ロームブロック径１～３㎝を20％含む。

第61図　茅畑遺跡２面　１号古墳

２　墳丘と周堀

墳丘：削平が進んでおり、墳丘はほとんど残存していない。中近世以降の開墾により、石室部分は根石近くまで石が引きぬかれていた。墳丘の正確な規模は明瞭でないが、周堀の内側の最大値は9.88mであり、周堀が弧を描いていることから円墳であったと推察できる。基壇及び基壇の段差も確認されていないため、墳丘の規模は明瞭でない。墳丘の直径は9.88mより大幅に小さい値と推察される。墳丘の高さは不明である。石室の石材が直接確認できる状態である。

遺物出土：なし。

基壇：確認されない。

周堀：墳丘の北西から西にかけて及び北東から東にかけて確認され、北の一部と南には確認できなかった。周堀の形状は、残存範囲では、ほぼ円形を呈する平面形になっている。周堀外側の輪郭及び周堀内側共に丸みがあり、円墳の周堀として違和感がない。底面は平坦だが、側面の立ち上がりは一定でない。規模は、墳丘の北西から西にかけては、上幅1.76～3.8m、下幅0.76～1.44m、深さ0.12mである。埋没土は、ロームブロックを含むにぶい黄褐色土であり、その上にAs-C軽石を含む黒褐色土及び暗褐色土が載っている。墳丘の北東から東にかけては、上幅1.12～2.60m、下幅0.56～1.64m、深さ0.10mである。埋没土は、ロームブロックを含むにぶい黄褐色土であり、その上にAs-C軽石を含む黒褐色土が載っている。

葺石：墳丘は大きく削平されており、確認されない。

３　前庭

概要：主体部南に前庭の存在を確認する。平面逆台形を呈していたと推察されるが、右側が削平されており、中央及び左側のみ残存している。全体的に削平が進んでおり、墓道の痕跡は、確認できない。羨道前付近には、礫の出土が見られた。礫は大きさが一様でない。敷き詰められたような状態ではないが、羨道との境を明確にする意味があると思われる。前庭の平面規模は、台形の上底に相当する部分が2.65m、下底に相当する部分が(2.35)m、高さに相当する奥行きが2.3mである。前庭の両側は削平が進んでいるため、僅かな段差があるのみであった。

遺物出土状況：完形まで復元できた遺物はないが、須恵器杯類甕類を中心とした土器が前庭左側からまとまって出土した。そのうち須恵器５点(杯３点､甕１点､壺１点)を図示した。

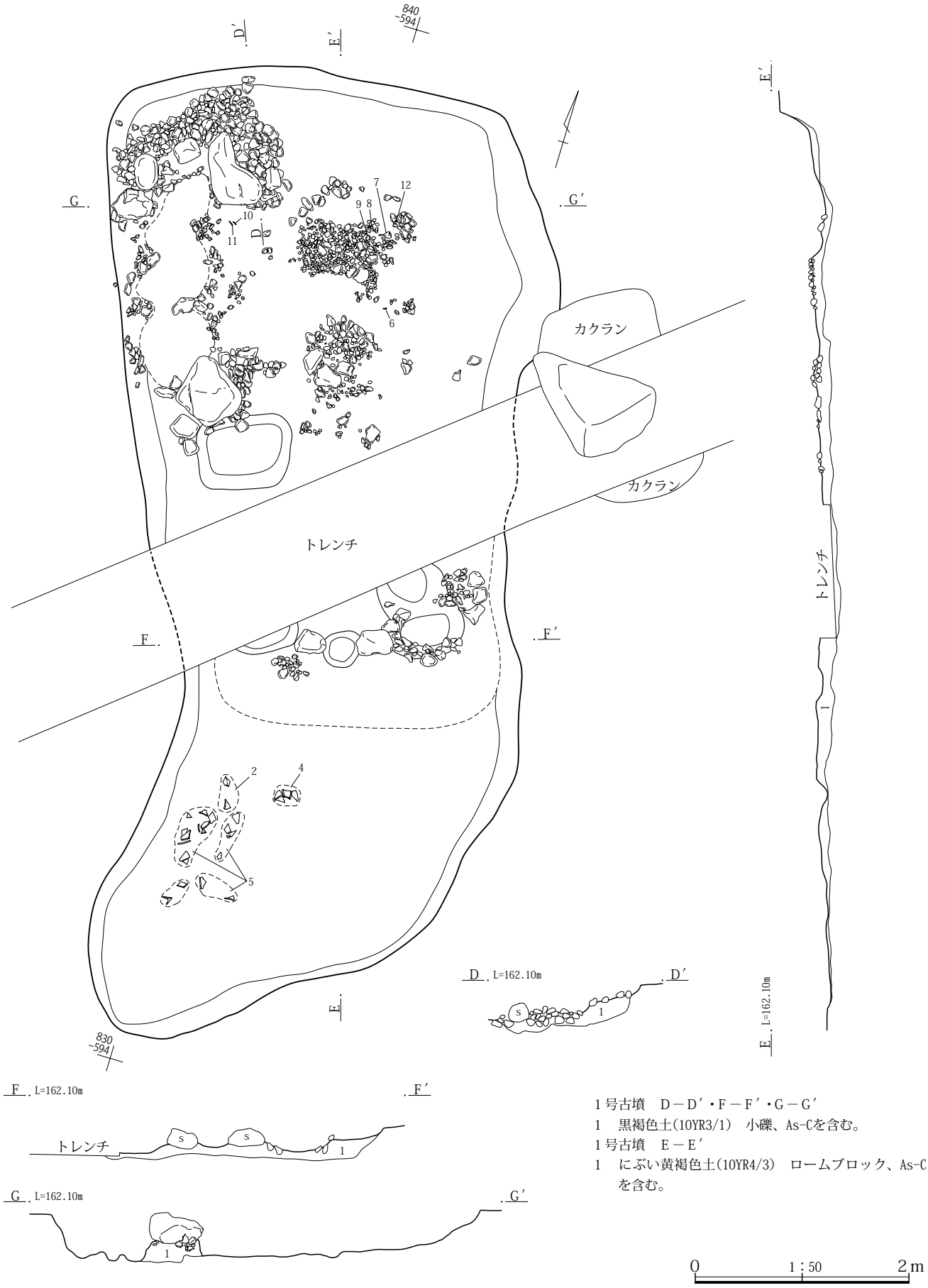
須恵器、杯(２)は前庭西、杯(１・３)は攪乱の中から、甕(４)は前庭西から、甕(５)は前庭西及び攪乱の中から出土した破片が接合した。いずれも前庭の底面から離れた位置からの出土であった。これらは、本遺構と時期差があり、後に現位置に置かれた可能性があると考えられる。

４　石室

概要：主体部は、Ｓ－17°－Ｅの方向に開口する。自然石乱石積みの両袖型横穴石室である。現存する礫及び、石抜き取りの跡から、玄室の平面形はやや胴張気味で、玄門寄りで湾曲が急になると思われる。石室内は、As-C軽石及び小礫を含んだ黒褐色土で埋没していた。締まりは弱い。天井石は残存していない。石室を構築している石材の一つと推察される礫が、掘り方のすぐ東に移動されたのが確認できる。掘り方は､ローム層中暗色帯中に底面を設けており､縦6.16m､横3.36mの隅丸方形である。

玄室の床面は、床の玉石及び、崩落した小石混じりの土で埋没していた。玄門から羨道にかけての床面は、削平が進んでおり舗石は確認できない。石室は全長4.05m、玄室の長さ2.15m、幅は不明である。壁面は奥壁の礫が１石残存しており、側壁は、左壁の抜き取りの跡３か所が確認され、最も玄門に近い礫が１石残存していた。右壁は全ての石材が残存していなかったが、第62図のように、掘り方と重ね合わせると、抜き取り痕の位置が分かる。玄門の左には抜き取り痕が１つ確認でき、羨道との境が分かる。羨道の長さは1.45m、幅は0.75mと思われる。羨門には､床面に礫が３つ並んでいたと考えられる。両側２つの礫は残存するが、中央の礫は抜き取り痕が確認できる。床面は、玄室から羨道にかけて、ほぼ水平である。玄室の床面の上に舗石を置き、手のひら大、及び卵大の川原石や軽石が使用されている。石室の北西には、裏込めが確認できた。裏込めに使用された礫は、ほとんど川原石であり、大ぶりな石及び玉砂利である。

羨道閉塞状況：羨道の床面は確認されなかったが、石抜け跡からかなり大きな礫が使用されていたと考えられ



1号古墳　D－D′・F－F′・G－G′
1　黒褐色土(10YR3/1)　小礫、As-Cを含む。
1号古墳　E－E′
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ロームブロック、As-Cを含む。

0　1：50　2m

第62図　茅畑遺跡２面　１号古墳石室（１）

る。羨道側壁は残存していない。

石室内遺物出土状況：鉄製品（９点）を図示した。主に主体部より出土した。

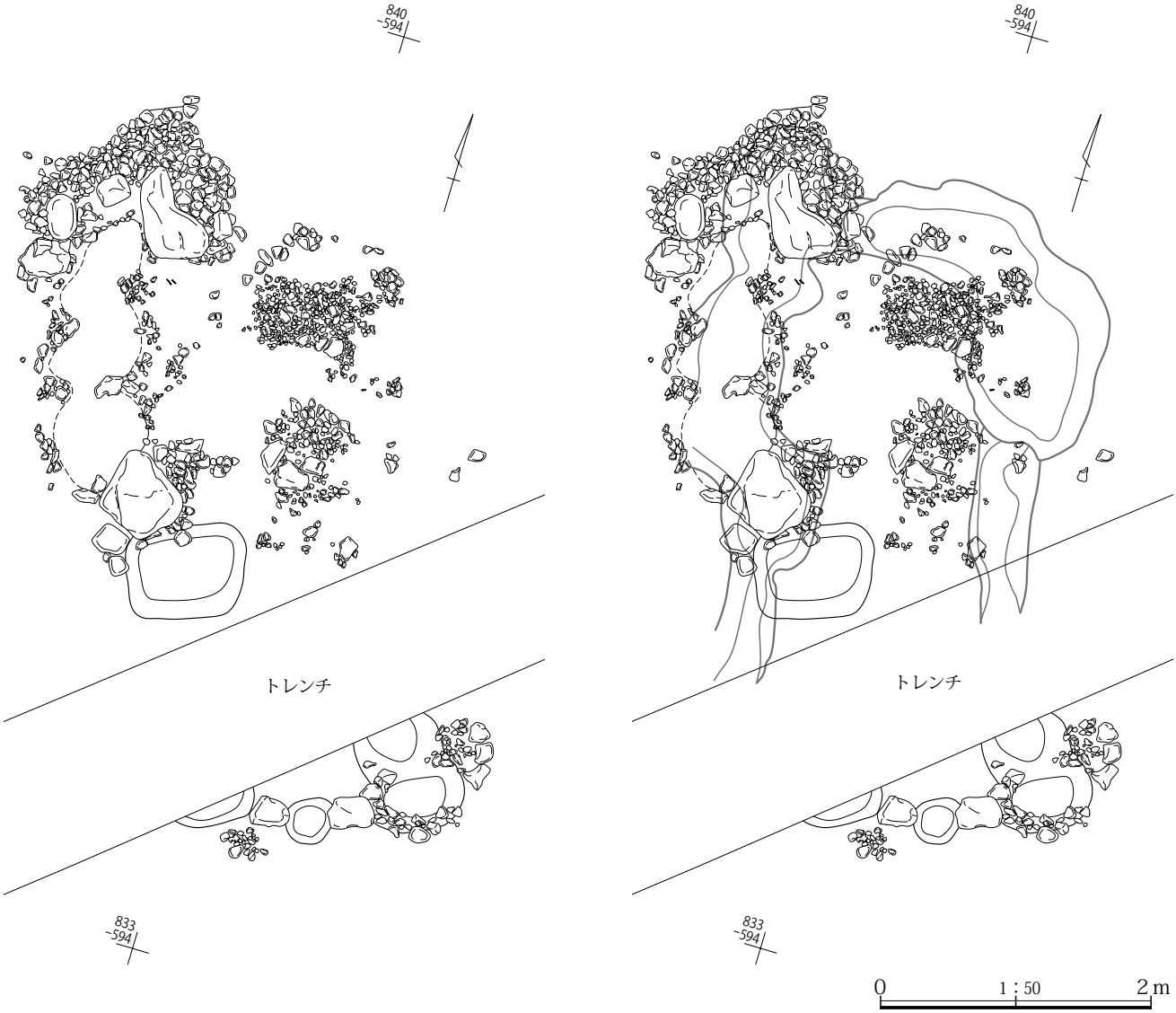
鉄製品（６・７・８・９・12）は、玄室右側壁抜き取り痕付近から、鉄製品（10・11）は玄室北西隅からの出土であった。石室内に安置された木棺に使用していた鉄釘であると考える。鉄製品（13）、銅製品キセル（14）は、主体部攪乱からの出土であった。

石室床面の状況：玄室床は羨道床と同レベルにある。玄門左には抜き取り跡が確認される。主軸の対称位置に同サイズの礫があったと推察される。玄室には、削平されて舗石がない部分が多いが、玄室北と南の一部は、径20㎝前後の亜円礫の周りを径10㎝程の亜円礫が囲むように敷き詰められていた。

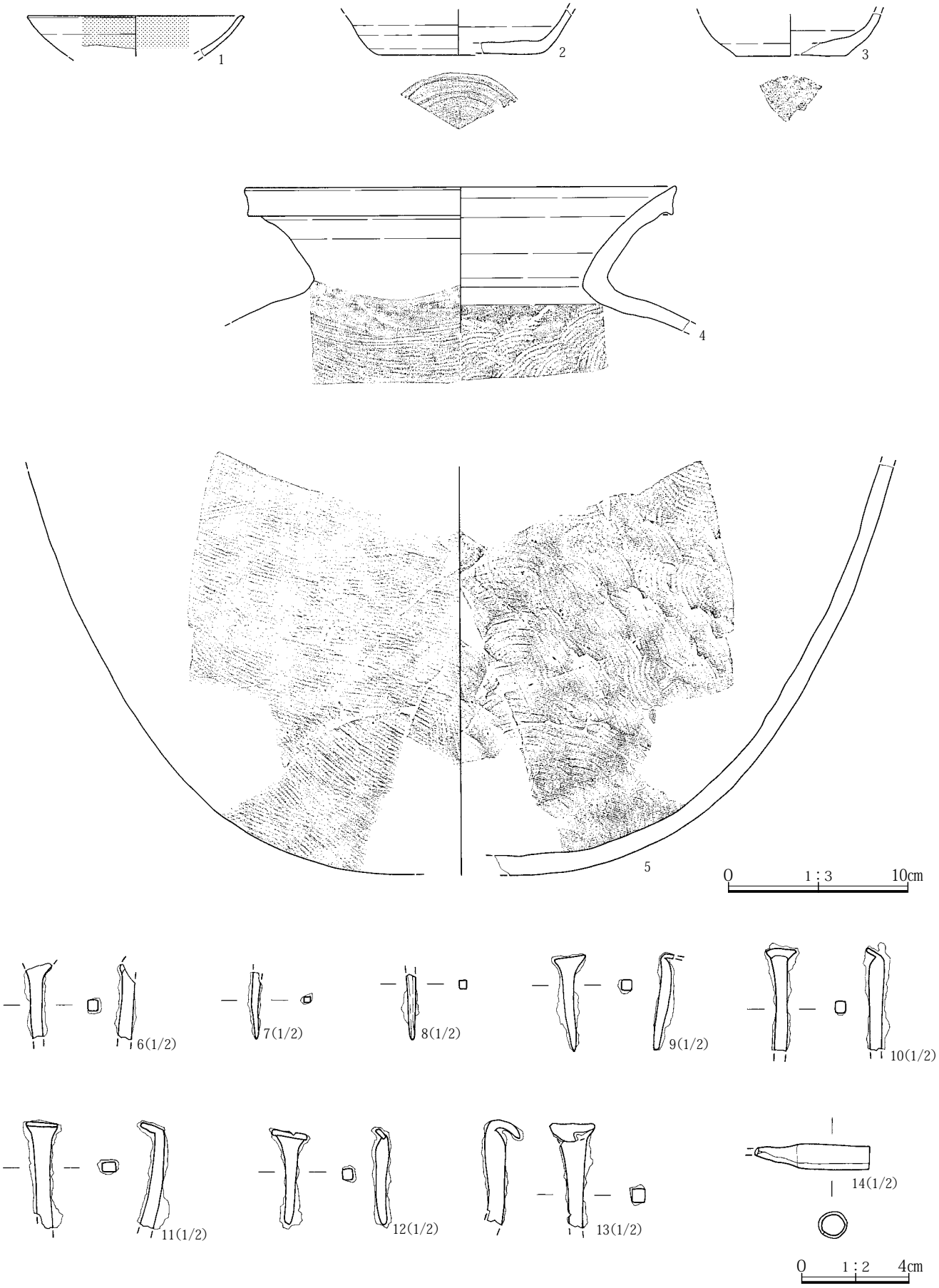
平面及び立面の状況

石室主軸は、Ｎ－14°－Ｗで磁北に近い値である。主体部と軸がずれている。地山は南東方向へ傾斜している。自然地形から方向（北方）を意識した軸方向と考えられる。平面規模については、床面玄室長は、主軸位置で両玄門北隅を繋いだ部分まで1.95m、梱石北隅まで2.15m〔推定〕を測る。玄室幅は、奥壁付近で2.4m〔推定〕、中央付近で2.6m〔推定〕、玄門付近で1.8m〔推定〕である。玄室床面積は7.01㎡〔推定〕である。

羨道は、玄門付近の幅1.1m〔推定〕、羨門寄りの幅0.8mである。羨門南隅の礫から梱石北隅までの長さ2.15mである。面積は2.74㎡〔推定〕を測る。



第63図　茅畑遺跡２面　１号古墳石室（２）



第64図　茅畑遺跡２面　１号古墳出土遺物

５　出土遺物

遺物は、種類によって出土位置が偏り、前庭から土器、玄室内からは金属製品が出土している。墳丘は削平されており、遺物の出土はみられなかった。前庭出土の土器は、ほとんどが前庭内に散乱した破片を接合したもので完形品は見られない。土師器甕は確認されたが、底面からやや遊離した状態の出土である。須恵器は、底面から高い位置にあったものの、前庭脇に据えられるようにして出土しており、前庭の埋没が進んだ後に、この位置に置かれたようにも見られ､原位置にあった可能性がある。また、玄室内を中心に、金属製品が出土した。鉄釘が多い。図示した以外に、土師器甕類13片、須恵器甕類15片が出土している。

６　まとめ

調査・整理作業で得られた１号古墳に関する情報を要約すると以下の通りである。

遺構

墳丘：確認できない。

基壇：上段基壇：確認できない。

下段基壇：9.88m以下(周堀の内側の最大値)

葺石：確認できない。

前庭：平面逆台形　左側が削平される。

主体部：自然石乱石積の両袖型横穴石室である。玄室には弱い胴張が見られる。羨道は玄室より短い。

平面規模：全長4.05m　　**奥壁付近幅：**不明。

立面規模：不明。

床面：玄室側に舗石面(一部)

掘り方:主軸長が5.95m、幅が2.65mから3.40mであり、南北に長い長方形を呈している。深さ30㎝前後である。

その他：全体的に削平が進んでおり、全容を解明するには資料が限られている。

遺物

土器：主に前庭から出土した。須恵器杯類、甕類主体。

金属製品：主に玄室から出土した。木棺に使用された鉄釘と考えられる。

その他：埴輪の出土なし。

所見

①　石室構築順序は、奥壁左腰石が残存しているが、左壁との関係は明瞭でない。

②　石室石材の積み方は、左壁は、抜き取り痕が認められ礫が残存しているものの、明瞭でない。奥壁及び、右壁は痕跡が残っていない。

③　羨道の右壁南から第１・２石に大きな石が使用されたと推察される抜き取り痕が確認できる。玄室部の腰石と同規模であったと考えられる。

④　前庭から土師器・須恵器の出土が確認された。

⑤　埴輪を伴っていない。

⑥　本古墳は、規模と形状、石室の様相、及び出土遺物等から、７世紀前半、古墳時代終末期の古墳と比定される。

（３）掘立柱建物

茅畑遺跡西部では、集落を取り囲むように掘立柱建物が18棟確認された。周囲には、その他にも建物の柱穴と思われるピット群が調査されたものの、ピットの位置関係等の矛盾から、さらなる掘立柱建物等の復元には至らなかった。本調査区における掘立柱建物の中には、棟方向が同調査区の住居の主軸と重なるものもあり、集落内における住居との関連も考えられる。また、１号道路と重複する掘立柱建物が複数あり、建て替えも含めて、両者の関係については考察の必要がある。さらに、本調査区の掘立柱建物は、住居同様、傾斜地に建設された建物である。発掘調査によると、建物を建てるために土地を平らに保つための造成は行っておらず、傾斜地に立地する条件や必然性は明瞭でない。

茅畑遺跡掘立柱建物共通土層

1　黒褐色土(10YR2/2)　As-Cを10％強含む。締まりは弱い。地山(暗褐色土)ブロックを含む。

1′黒褐色土(10YR2/2)　１層より僅かに明るい。若干の地山(暗褐色土)ブロックを含む。締まりは１層よりやや強い。

1″１′層に近いが、１′層よりAs-Cが少なく、ロームブロックがやや多い。

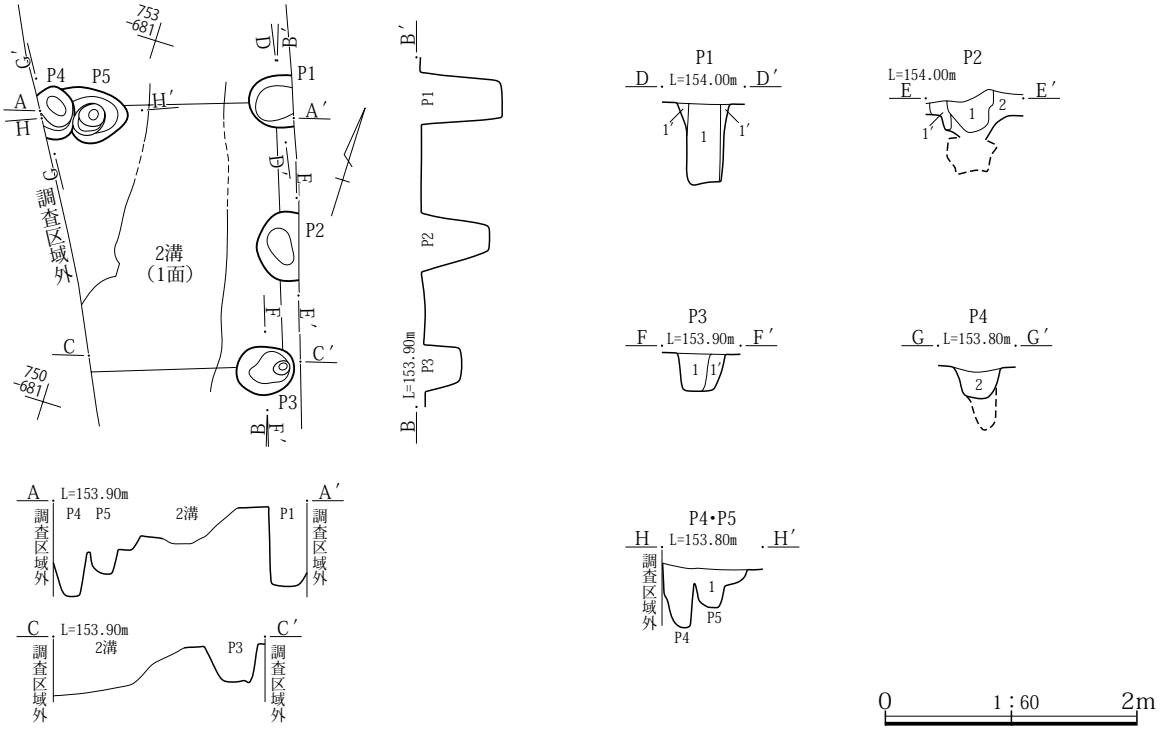
①　浅黄橙色土(7.5YR8/4)　As-Cを10％、焼土粒子１％、炭化物粒をごく僅かに含む。粘性あり。

2　暗褐色土(10YR3/3)　As-YP粒子を１％程度含む。締まりは強い。

2′２層に比べてロームブロック粒子を多く含み、やや明るい。

４号掘立柱建物(第65図　PL.25)

位置：750 ～ 753・-679 ～ -681　**規模形態：**梁行２間・桁行(２)間　不明(2.10m×1.75m)、面積(3.51)㎡である。西側が調査区域外にあるため全容が明瞭でない。東西棟であるならば、梁行２間であるが、桁行は１間しか確認できなかった。柱間の短い変則な建物である。東西方向に棟方向を取る側柱建物の可能性がある。柱間は桁行が1.45 ～ 0.31m、梁行が0.96 ～ 1.14m。確認した柱穴の柱筋はおおむね通っている。　**主軸方位：**Ｎ－73°－Ｅ　**柱穴：**Ｐ１～５から成り、北列は東から２番目だけ確認でき、南列は柱穴が確認できなかった。柱穴の平面形は楕円形、不整形等である。長径(0.36) ～ 0.56m、短径(0.27) ～ 0.44m、深さ0.31 ～ 0.65mであり、深さにはややばらつきがあるものの、形状等から同一の施設であると考えられる。埋没土は、黒褐色土、暗褐色土である。As-C、ロームブロックを少量含み、稀にAs-YPを含む。　**重複遺構：**２号溝(１面)に前出する。**遺物：**認められない。　**所見：**確認面、埋没土等から、中世以前の掘立柱建物であると考える。周辺に所在する遺構と方位及び埋没土等が近似しており、関連が想定される。ただし、２号溝とは時期差があると考える。



第65図　茅畑遺跡２面　４号掘立柱建物

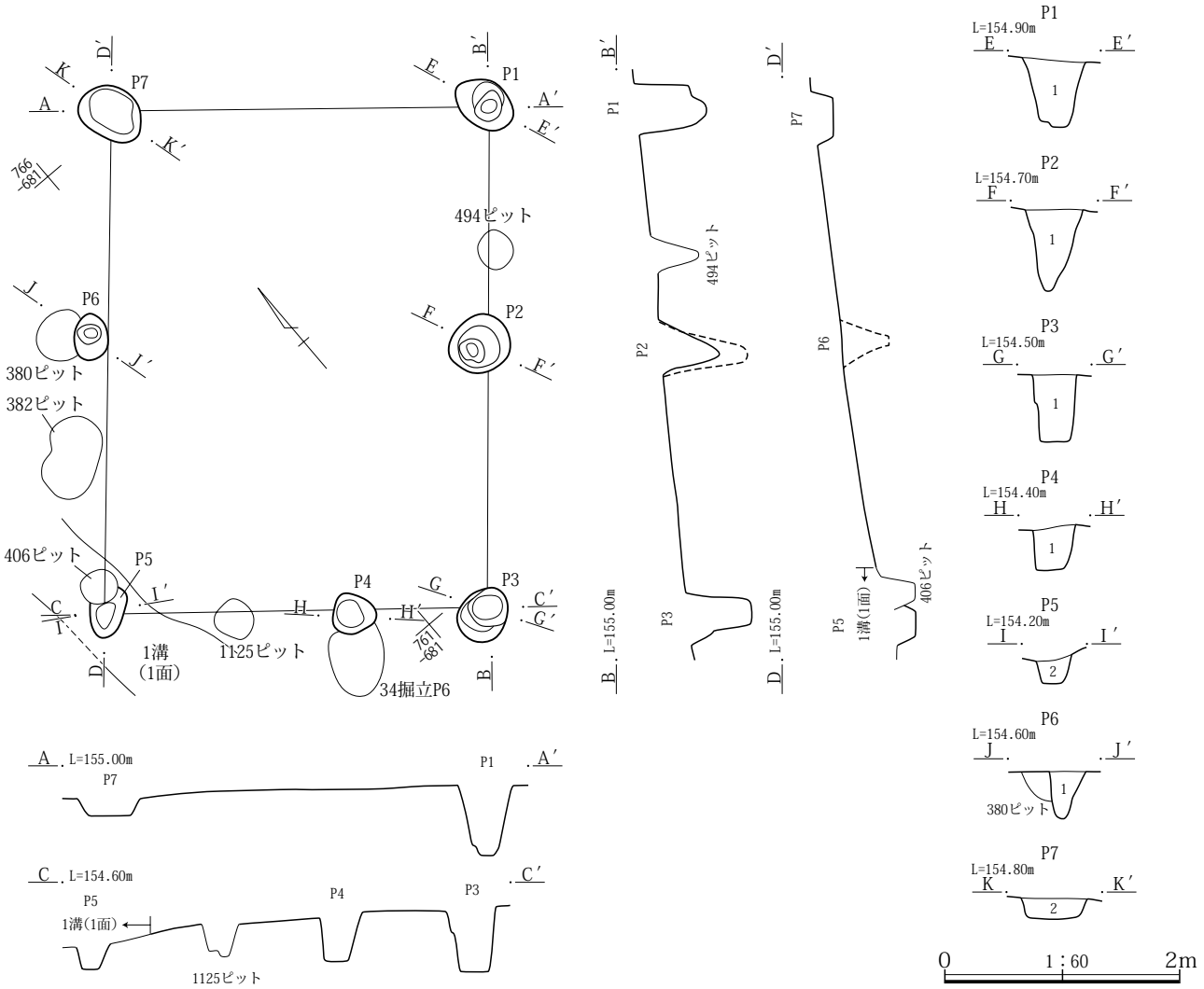
第５表　茅畑遺跡２面４号掘立柱建物　計測表

建物全体の規模			２×(２)間・東西棟			面積	(3.51)㎡		
主軸方位			Ｎ－73°－Ｅ			位置	Ｘ＝750 ～ 753　Ｙ＝-679 ～ -681		
桁・梁の規模(m)		柱穴№	柱穴規模(m)			形状	次柱穴との間隔(m)	旧ピット№	備考
			長径	短径	深さ				
東辺	2.10	Ｐ１	(0.36)	0.42	0.65	楕円形？	1.14	9	
		Ｐ２	0.56	(0.34)	0.54	楕円形？	0.96	3	
南辺	(1.53)	Ｐ３	0.46	0.39	0.36	楕円形	―	506	
北辺	(1.75)	Ｐ４	0.43	(0.27)	0.49	不整形	0.31	7	
		Ｐ５	(0.43)	0.44	0.31	不整形	Ｐ１へ 1.45	8	

６号掘立柱建物(第66図)

位置：760 ～ 766・-677 ～ -683　**規模形態：**梁行１間以上か・桁行２間(3.22 ～ 3.26×4.27 ～ 4.29m)、面積13.78㎡である。北東南西方向に棟方向を取る側柱建物である。柱間は梁行が1.18 ～ 2.08m、桁行が1.91 ～ 2.39m。確認した柱穴の柱筋はおおむね通っている。

主軸方位：Ｎ－41°－Ｅ　**柱穴：**Ｐ１～７から成るが、北東列は中間の柱が確認できない。西辺の線上に382号ピットが存在するが、Ｐ６との距離が近いため、関連はないものと考えた。柱穴の平面形は楕円形で、長径(0.30)～0.55m、短径0.29～0.47m、深さ0.19～0.72mであり、ばらつきがある。埋没土は、黒褐色土、暗褐色土である。As-C、ロームブロックを含み、稀にAs-YPを含む。埋没土及び形状等より同一の施設であると考える。　**重複遺構：**34号掘立柱建物、１号溝(１面)と重複している。　**遺物：**認められない。　**所見：**確認面、埋没土等から、中世以前の掘立柱建物であると考える。周辺に所在する遺構と棟方向は一致していない。34号掘立柱建物とは重複しており、埋没土等は近似している。時期差が少ないと考えられ、建て替えの可能性があることを指摘する。



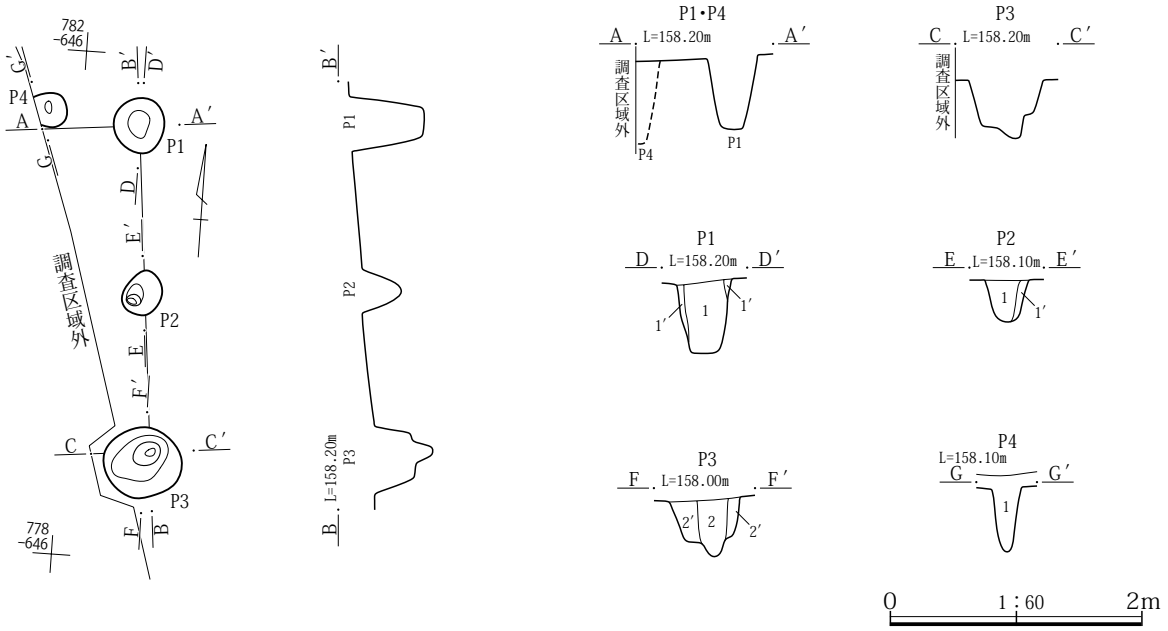
第66図　茅畑遺跡２面　６号掘立柱建物

第６表　茅畑遺跡２面６号掘立柱建物　計測表

建物全体の規模		２×２間・南北棟				面積	13.78㎡		
主軸方位		Ｎ－41°－Ｅ				位置	Ｘ＝760～766　Ｙ＝-677～-683		
桁・梁の規模(m)		柱穴№	柱穴規模(m)			形状	次柱穴との間隔(m)	旧ピット№	備考
			長径	短径	深さ				
東辺	4.27	Ｐ１	0.53	0.39	0.61	楕円形	2.08	374	
		Ｐ２	0.53	0.47	0.72	楕円形	2.20	390	
南辺	3.26	Ｐ３	0.49	0.40	0.57	楕円形	1.18	402	
		Ｐ４	0.36	0.34	0.40	楕円形	2.08	1100	34掘立P6と重複
西辺	4.29	Ｐ５	(0.30)	0.30	0.19	楕円形	2.39	1009	406ピットと重複
		Ｐ６	0.39	0.29	0.39	楕円形	1.91	381	380ピットと重複
北辺	3.22	Ｐ７	0.55	0.43	0.20	楕円形	Ｐ１へ 3.22	318	

11号掘立柱建物(第67図　PL.25)

位置：778～781・-645～-646　**規模形態：**梁行２間・桁行(２)間　不明(2.61m×0.73m)、面積(1.52)㎡である。西側が調査区域外にあるため全容が明らかでない。東西方向に棟方向を取る側柱建物であると思われる。柱間は桁行が0.73m、梁行が1.21～1.41mである。確認した柱穴の柱筋はおおむね通っている。近接する住居群の主軸と棟方向が合っている。　**主軸方位：**Ｎ－86°－Ｅ　**柱穴：**Ｐ１～４から成り、北列は東から２番目の柱穴が確認できた。南列は、柱穴が確認できなかった。柱穴の平面形は楕円形で、長径(0.24)～0.61m、短径0.28～0.56m、深さ0.40～0.67mであり、深さにはややばらつきがあるものの、近い規模である。埋没土は、黒褐色土、暗褐色土である。As-C、ロームブロックを少量含み、稀にAs-YPを含む。同一の施設であると考える。**重複遺構：**なし。　**遺物：**認められない。　**所見：**確認面、埋没土等から、中世以前の掘立柱建物であると考える。周辺に所在する遺構と棟方向及び埋没土等が近似しており、関連が想定される。特に、17・18・43・48・49号掘立柱建物及び１号道路とは、主軸方向が合うか直交しており、時期差が少ないと考えられる。



第67図　茅畑遺跡２面　11号掘立柱建物

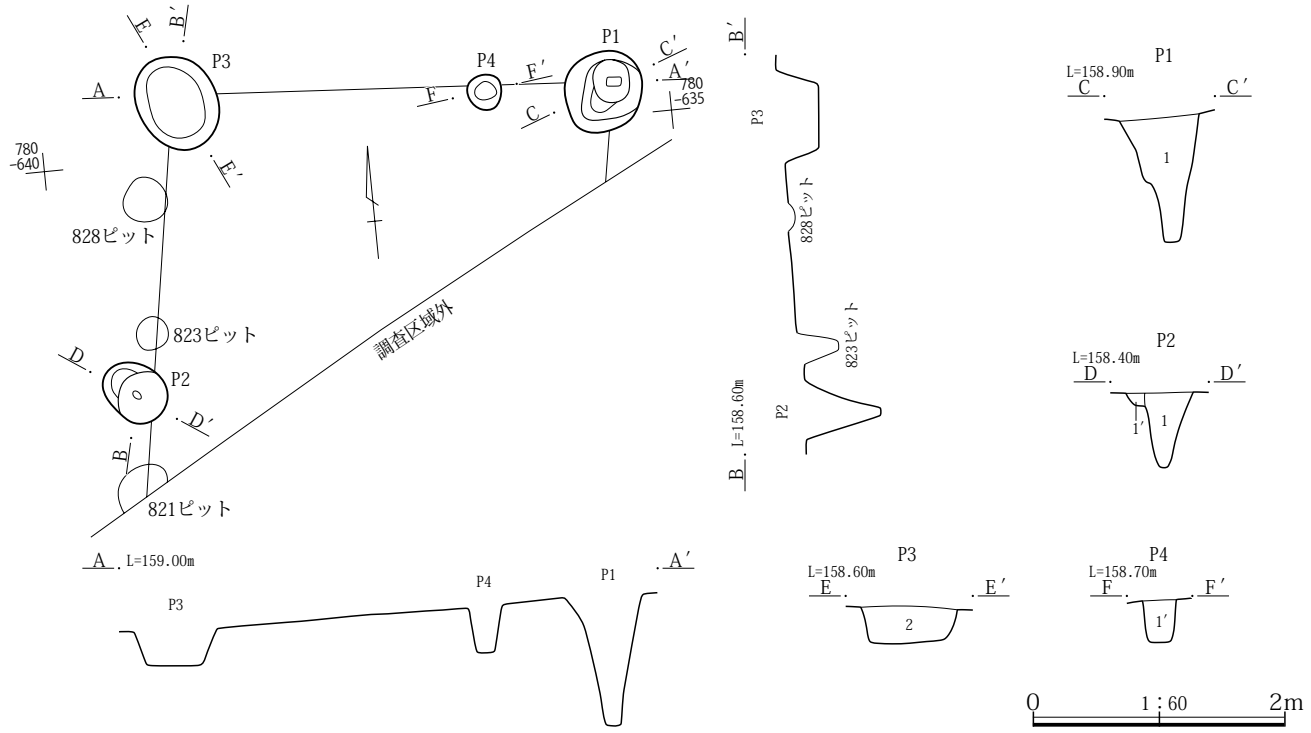
第７表　茅畑遺跡２面11号掘立柱建物　計測表

建物全体の規模			２×(２)間・東西棟			面積	(1.52)㎡		
主軸方位			Ｎ－86°－Ｅ			位置	Ｘ＝778～781　Ｙ＝-645～-646		
桁・梁の規模(m)		柱穴No.	柱穴規模(m)			形状	次柱穴との間隔(m)	旧ピットNo.	備考
			長径	短径	深さ				
東辺	2.61	Ｐ１	0.44	0.41	0.59	楕円形	1.41	797	
		Ｐ２	0.36	0.29	0.40	楕円形	1.21	798	
南辺	—	Ｐ３	0.61	0.56	0.46	楕円形	—	799	
北辺	—	Ｐ４	(0.24)	0.28	0.67	楕円形？	Ｐ１へ 0.73	796	

15号掘立柱建物(第68図)

位置：777～780・-635～-639　**規模形態：**梁行２間・桁行２間以上か(3.48m×3.13m以上)、面積(6.63)㎡である。南側が調査区域外にあるため全容が明瞭でない。南北方向に棟方向を取る側柱建物の可能性がある。柱間は梁行が1.02～2.47m、桁行が2.33m。確認した柱穴の柱筋はおおむね通っている。近接する住居群の主軸と棟方向が直交している。　**主軸方位：**Ｎ－６°－Ｅ　**柱穴：**Ｐ１～５から成るが、南側が調査できていないため、規模は不明である。西辺の線上に821・823・828号ピットが存在するが、Ｐ２・３との距離が近いため、関連はないものと考える。柱穴の平面形は楕円形で、長径0.29～0.78m、短径0.27～0.63m、深さ0.30～1.07mであり、ばらつきはあるが、形状は近似している。

埋没土は、黒褐色土、暗褐色土である。As-C、ロームブロックを少量含み、稀にAs-YPを含む。同一の施設であると考える。　**重複遺構:**なし。　**遺物:**認められない。**所見：**確認面、埋没土等から、中世以前の掘立柱建物であると考える。周辺に所在する遺構と棟方向及び埋没土等が近似しており、関連が想定される。特に、11・17・18・43・48・49号掘立柱建物及び１号道路とは主軸方向が合うか直交しており、時期差が少ないと考えられる。



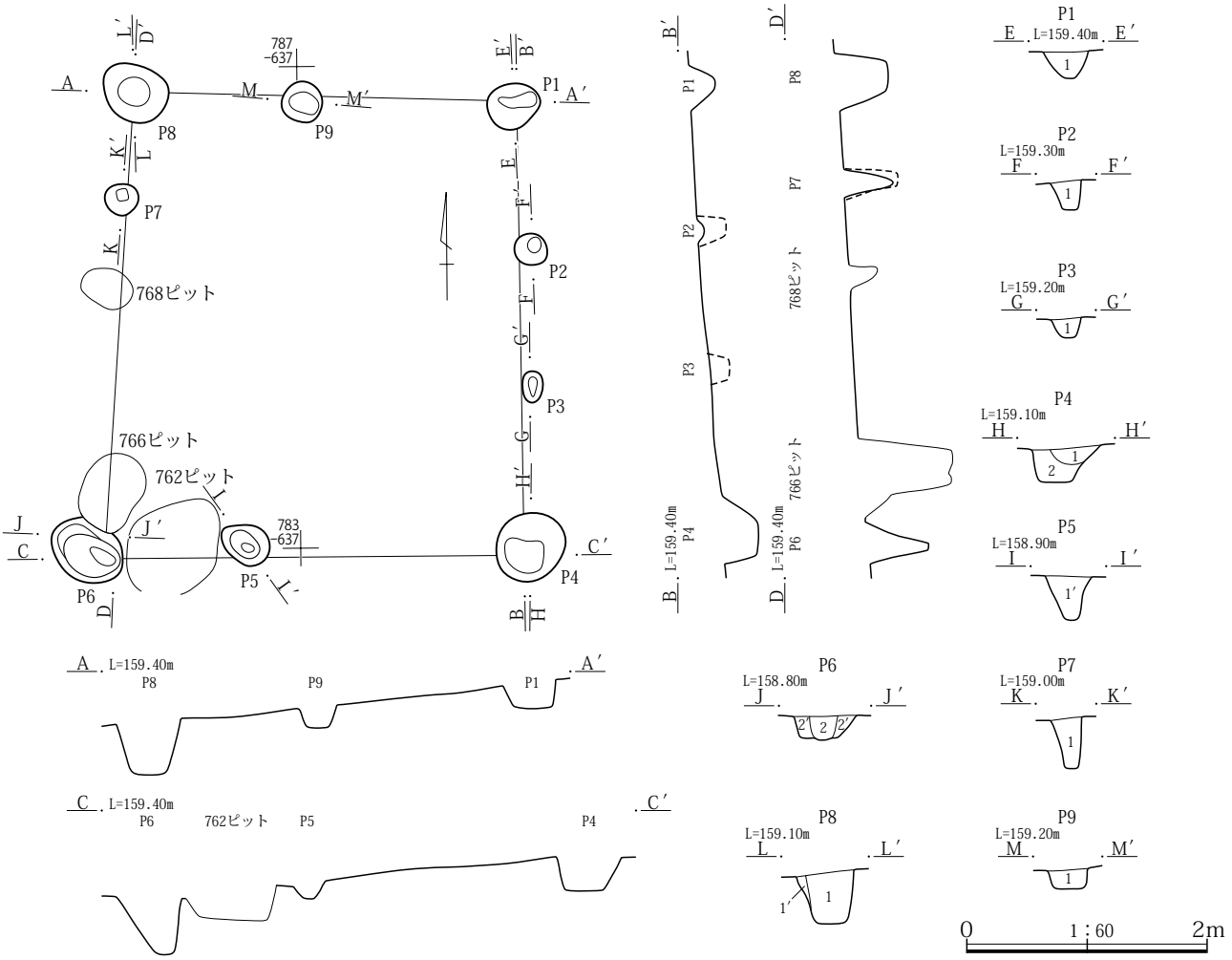
第68図　茅畑遺跡２面　15号掘立柱建物

第８表　茅畑遺跡２面15号掘立柱建物　計測表

建物全体の規模		２×(２)間・南北棟			面積	(6.63)㎡		
主軸方位		N－6°－E			位置	X＝777～780　Y＝-635～-639		
桁・梁の規模(m)		柱穴No.	柱穴規模(m)			形状	次柱穴との間隔(m)	旧ピットNo.	備考
			長径	短径	深さ				
東辺	—	Ｐ１	0.67	0.62	1.07	楕円形	—	845	
西辺	(3.13)	Ｐ２	0.54	0.43	0.61	楕円形	2.33	822	
北辺	3.48	Ｐ３	0.78	0.63	0.30	楕円形	2.47	838	
		Ｐ４	0.29	0.27	0.38	楕円形	Ｐ１へ 1.02	844	

17号掘立柱建物(第69図　PL.26)

位置：782～786・-634～-638　**規模形態：**梁行２間・桁行３間(3.19～3.50m×3.78～3.88m)、面積12.68㎡の南北方向に棟方向を取る側柱建物である。柱間は桁行が0.85～1.42m、梁行が1.78～2.30mである。確認した柱穴の柱筋はおおむね通っている。近接する住居群の主軸と棟方向が直交している。　**主軸方位：**N－1°－E　**柱穴：**Ｐ１～９から成り、西列は北から３番目の柱穴が、中央列は北から２・３番目の柱穴が確認できなかった。柱穴の平面形は主に楕円形で、長径0.26～0.65m、短径0.17～0.55m、深さ0.19～0.52mであり、深さにはややばらつきがあるものの、四隅の主柱穴の形状は近い規模である。埋没土は、黒褐色土、暗褐色土である。As-C、ロームブロックを少量含み、稀にAs-YPを含む。同一の施設であると考える。　**重複遺構：**なし。　**遺物：**認められない。　**所見：**確認面、埋没土等から、中世以前の掘立柱建物であると考える。周辺に所在する遺構と棟方向及び埋没土等が近似しており、関連が想定される。特に、11・18・43・48・49号掘立柱建物及び１号道路とは、主軸方向が合うか直交しており、時期差が少ないと考えられる。



第69図　茅畑遺跡２面　17号掘立柱建物

第９表　茅畑遺跡２面17号掘立柱建物　計測表

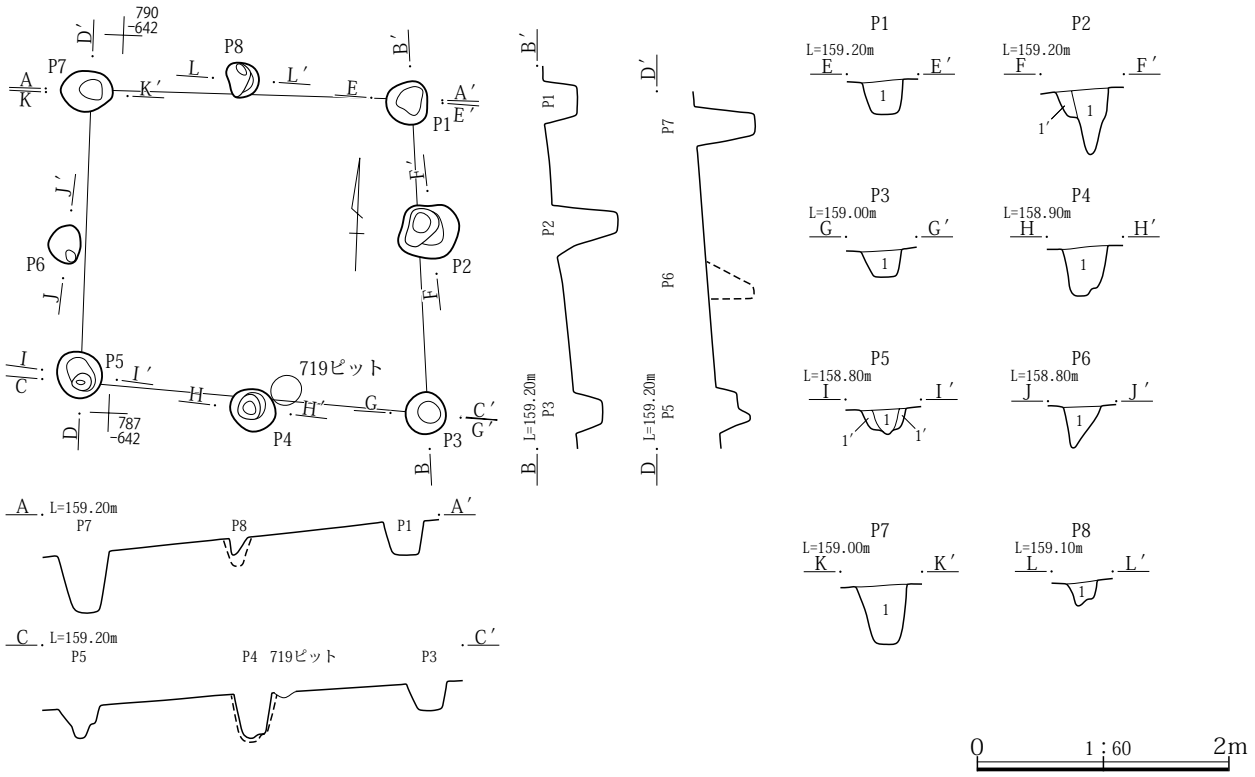
建物全体の規模		２×３間・南北棟			面積	12.68㎡		
主軸方位		N－1°－E			位置	X＝782～786　Y＝-634～-639		
桁・梁の規模(m)		柱穴No.	柱穴規模(m)			形状	次柱穴との間隔(m)	旧ピットNo.	備考
			長径	短径	深さ				
東辺	3.78	P 1	0.44	0.38	0.24	楕円形	1.20	747	
		P 2	0.29	0.27	0.24	楕円形	1.17	748	
		P 3	0.26	0.17	0.19	楕円形	1.42	750	
南辺	3.50	P 4	0.61	0.55	0.31	楕円形	2.30	751	
		P 5	0.43	0.33	0.37	楕円形	1.20	761	
西辺	3.88	P 6	0.65	(0.46)	0.52	楕円形	3.13	765	766ピットと重複
		P 7	0.28	0.27	0.45	円形	0.86	725	
北辺	3.19	P 8	0.57	0.46	0.47	楕円形	1.42	724	
		P 9	0.34	0.33	0.19	楕円形	P 1へ1.78	730	

第10表　茅畑遺跡２面18号掘立柱建物　計測表

建物全体の規模		２×２間・南北棟			面積	6.32㎡		
主軸方位		N－3°－W			位置	X＝786～789　Y＝-639～-642		
桁・梁の規模(m)		柱穴No.	柱穴規模(m)			形状	次柱穴との間隔(m)	旧ピットNo.	備考
			長径	短径	深さ				
東辺	2.50	P 1	0.34	0.33	0.28	楕円形	0.99	712	
		P 2	0.45	0.42	0.53	楕円形	1.50	721	
南辺	2.78	P 3	0.33	0.33	0.23	円形	1.43	720	
		P 4	0.36	0.33	0.39	楕円形	1.36	718	
西辺	2.33	P 5	0.39	0.35	0.27	楕円形	1.00	716	
		P 6	0.31	0.26	0.38	楕円形	1.34	715	
北辺	2.54	P 7	0.42	0.33	0.49	楕円形	1.21	714	
		P 8	0.28	0.25	0.24	楕円形	P 1へ1.36	713	

18号掘立柱建物(第70図　PL.26)

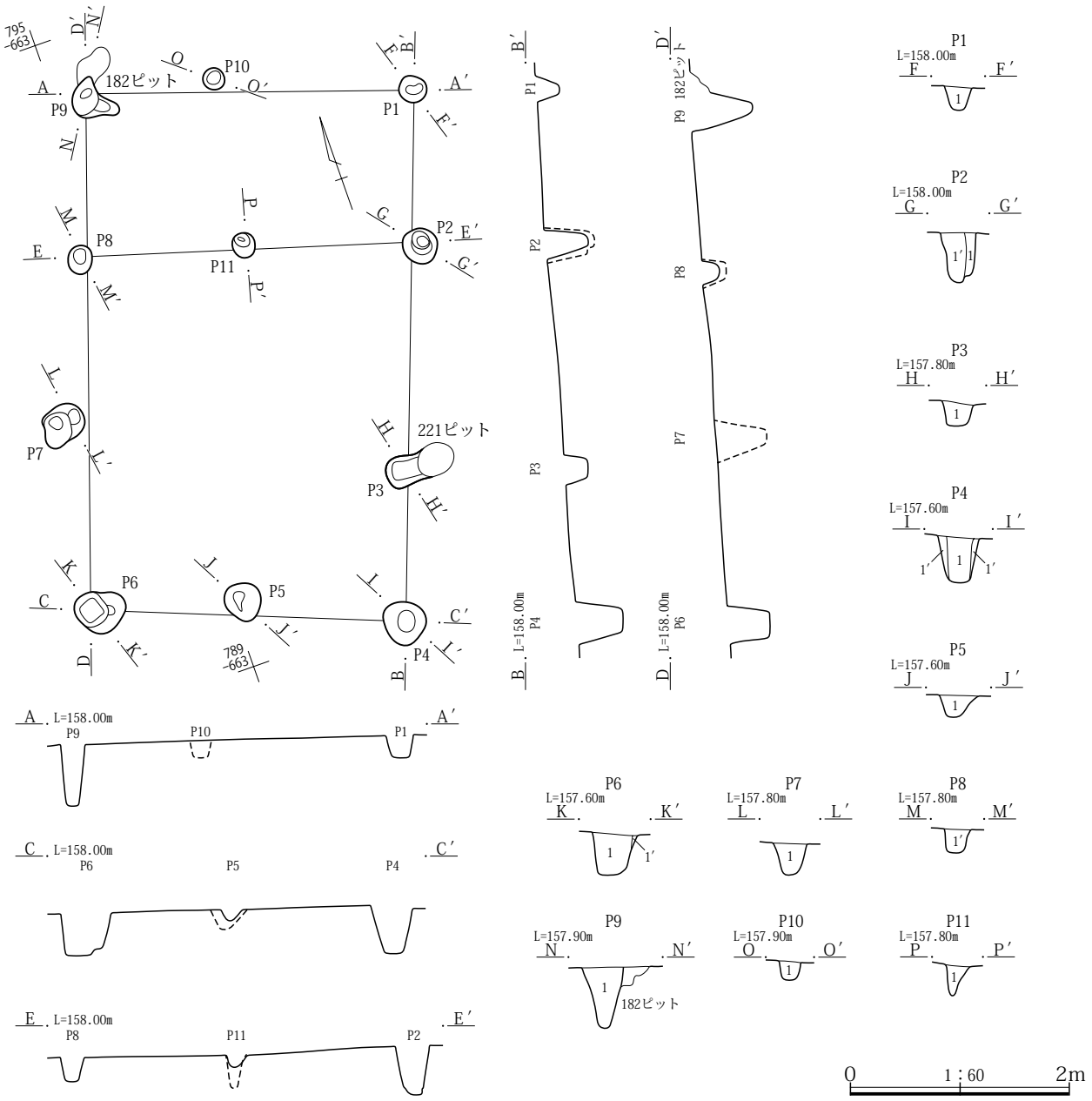
位置：786 ～ 789・-639 ～ -642　**規模形態：**梁行２間・桁行２間(2.33 ～ 2.50m×2.54 ～ 2.78m)、面積6.32㎡である。南北方向に棟方向を取る側柱建物である。柱間は梁行が1.20 ～ 1.43m、桁行が0.99 ～ 1.50mである。確認した柱穴の柱筋はおおむね通っている。近接する住居群の主軸と棟方向が直交している。　**主軸方位：**Ｎ－３°－Ｅ　**柱穴：**Ｐ１～８から成る。柱穴の平面形は主に楕円形で、長径0.28～0.45m、短径0.25～0.42m、深さ0.23 ～ 0.53mであり、ややばらつきはあるが、四隅の主柱穴は近い形状である。埋没土は、主に黒褐色土である。As-C、ロームブロックを少量含み、同一の施設であると考える。　**重複遺構：**なし。　**遺物：**認められない。　**所見：**確認面、埋没土等から、中世以前の掘立柱建物であると考える。周辺に所在する遺構と棟方向及び埋没土等が近似しており、関連が想定される。特に、11・17・43・48・49号掘立柱建物及び１号道路とは、主軸方向が合うか直交しており、時期差が少ないと考えられる。



第70図　茅畑遺跡２面　18号掘立柱建物

21号掘立柱建物(第71図　PL.27)

位置：788 ～ 794・-659 ～ -664　**規模形態：**梁行２間・桁行３間(2.88 ～ 3.01m×4.72 ～ 4.87m)、面積13.93㎡である。南北方向に棟方向を取る側柱建物である。北側の１間は、庇の可能性も考えられるが明瞭でない。柱間は桁行が1.38 ～ 2.09m、梁行が1.18 ～ 1.54mである。確認した柱穴の柱筋はおおむね通っている。近接する住居群の主軸と棟方向が直交している。　**主軸方位：**Ｎ－20°－Ｅ　**柱穴：**Ｐ１～11から成る。中央列は北から３番目の柱穴が確認できなかった。柱穴の平面形は楕円形、不整形等で、長径0.21 ～ 0.45m、短径0.20 ～ 0.43m、深さ0.17 ～ 0.56mである。深さにややばらつきがあるものの傾斜地であることから、同一の施設であると考えた。埋没土は、主に黒褐色土である。As-C、ロームブロックを少量含む。　**重複遺構：**なし。　**遺物：**認められない。　**所見：**確認面、埋没土等から、中世以前の掘立柱建物であると考える。周辺に所在する遺構と方位及び埋没土等が近似しており、関連が想定される。特に、１・４・５・６号住居、１号道路、25・47号掘立柱建物とは、主軸方向が合うか直交しており、時期差が少ないと考えられる。



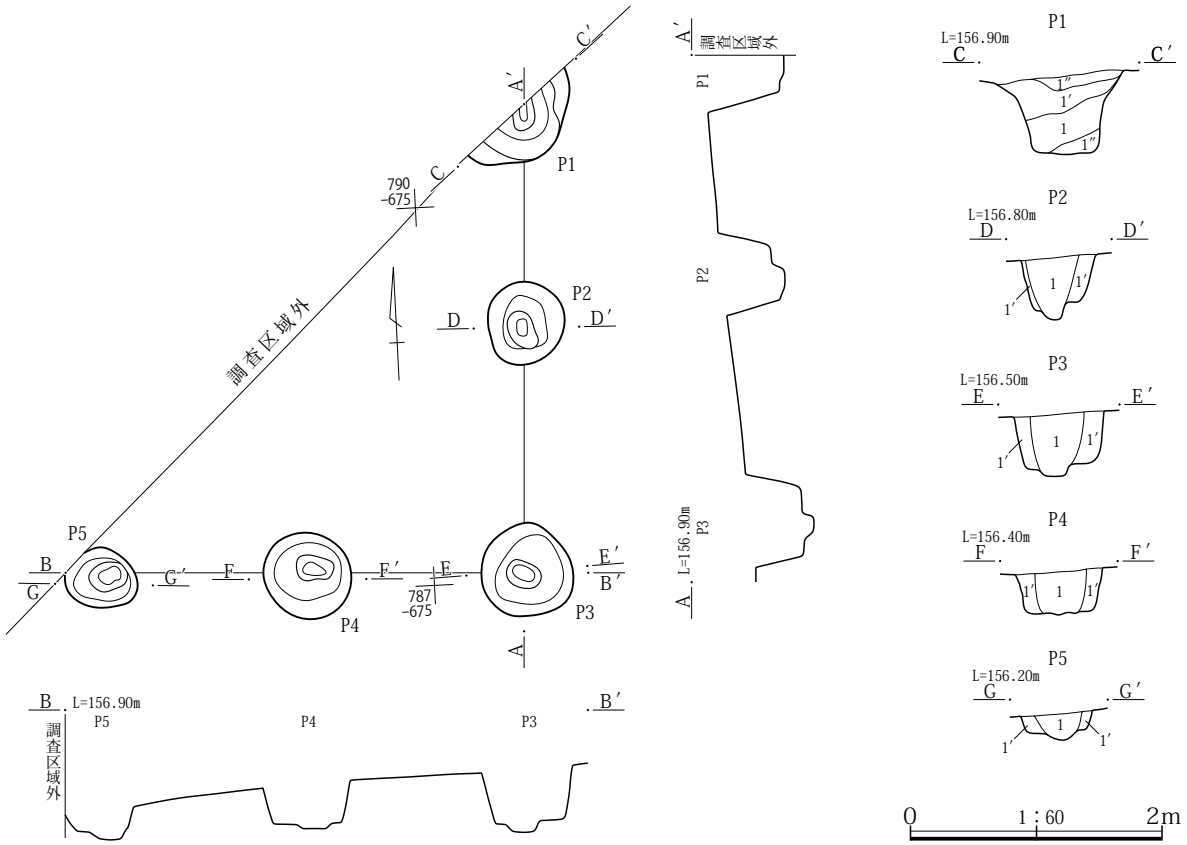
第71図　茅畑遺跡２面　21号掘立柱建物

第11表　茅畑遺跡２面21号掘立柱建物　計測表

建物全体の規模			２×３間・南北棟			面積	13.93㎡		
主軸方位			N－20°－E			位置	X＝788～794　Y＝-659～-664		
桁・梁の規模（m）		柱穴№	柱穴規模（m）			形状	次柱穴との間隔（m）	旧ピット№	備考
			長径	短径	深さ				
東辺	4.87	Ｐ１	0.26	0.24	0.22	楕円形	1.38	215	
		Ｐ２	0.34	0.32	0.46	楕円形	2.09	217	
		Ｐ３	(0.30)	0.29	0.22	楕円形？	1.39	222	221ピットと重複
南辺	2.88	Ｐ４	0.40	0.39	0.44	楕円形	1.54	223	
		Ｐ５	0.35	0.34	0.18	楕円形	1.35	225	
西辺	4.72	Ｐ６	0.43	0.43	0.40	不整形	1.74	226	
		Ｐ７	0.40	0.33	0.49	不整形	1.54	168	
		Ｐ８	0.26	0.22	0.22	楕円形	1.49	170	
北辺	3.01	Ｐ９	0.45	0.38	0.56	不整形	1.18	181	182ピットと重複
		Ｐ10	0.21	0.20	0.17	円形	Ｐ１へ 1.84	184	
		Ｐ11	0.23	0.21	0.31	楕円形	Ｐ２へ 1.67、Ｐ８へ 1.48	938	

25号掘立柱建物(第72図　PL.27)

位置：786～791・-673～-677　**規模形態：**梁行２間以上か・桁行２間以上か(3.70m以上×3.30m以上)、面積(6.69)㎡である。北西部分が調査区域外のため、規模を含め全容が明らかでない。棟方向は東西方向であると考えられ、側柱建物であると思われる。柱間は梁行が1.74～1.98m、桁行が1.63～1.67m。確認した柱穴の柱筋はおおむね通っている。近接する住居群の主軸と棟方向が合っている。　**主軸方位：**N－86°－E　**柱穴：**Ｐ１～５から成る。柱穴の平面形は楕円形で、長径(0.40)～0.76m、短径0.48～0.72m、深さ0.25～0.67mであり、平面のばらつきは少ないが、深さのばらつきはある。傾斜地であることを考慮すれば、近い規模と思われる。Ｐ２・３・４・５など柱痕が観察できる立派なものである。埋没土は、主に黒褐色土である。As-C、ロームブロックを少量含み、同一の施設であると考える。　**重複：**47号掘立柱建物と重複している。新旧関係は明瞭でない。　**遺物：**９世紀代の甕胴部破片１点が出土している。　**所見：**確認面、埋没土、出土遺物等から、中世以前の掘立柱建物であると考える。周辺に所在する遺構と棟方向及び埋没土等が近似しており、関連が想定される。特に、１・４・５・６住居、29・47号掘立柱建物とは、主軸方向が合っており、時期差が少ないと考えられる。



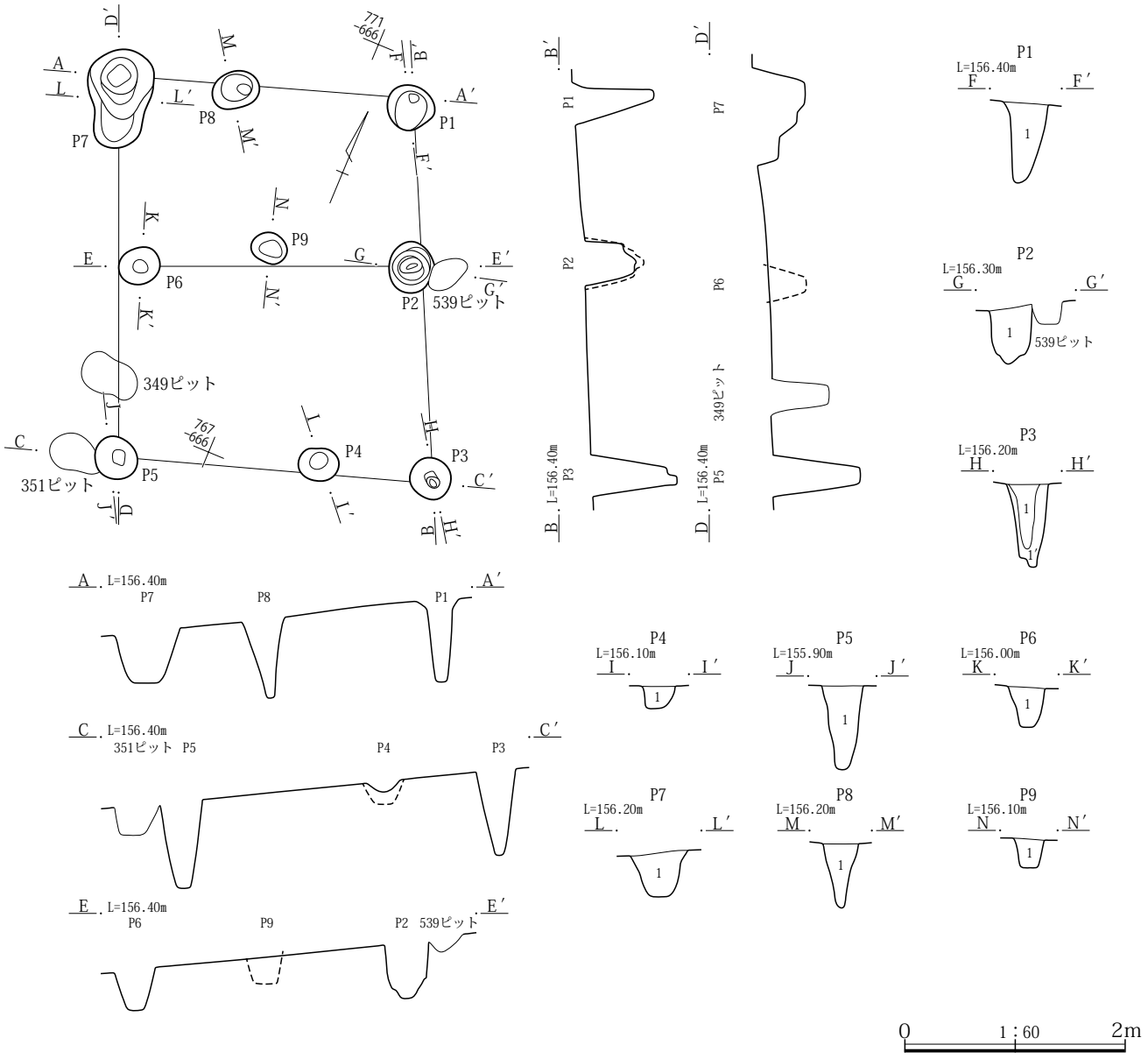
第72図　茅畑遺跡２面　25号掘立柱建物

第12表　茅畑遺跡２面25号掘立柱建物　計測表

建物全体の規模		×間・東西棟			面積	(6.69)㎡		
主軸方位		N－86°－W			位置	X＝786～791　Y＝-673～-677		
桁・梁の規模(m)		柱穴№	柱穴規模(m)			形状	次柱穴との間隔(m)	旧ピット№	備考
			長径	短径	深さ				
東辺	(3.70)	Ｐ１	(0.40)	—	0.67	不明	1.74	104	
		Ｐ２	0.66	0.61	0.53	楕円形	1.96	103	
南辺	(3.30)	Ｐ３	0.76	0.72	0.54	楕円形	1.67	102	
		Ｐ４	0.70	0.68	0.37	楕円形	1.63	101	土師須恵小破片
		Ｐ５	(0.54)	0.48	0.25	楕円形	—	100	

27号掘立柱建物（第73図　PL.28）

位置：766 ～ 770・-663 ～ -668　**規模形態：**梁行２間・桁行２間（2.69 ～ 2.88m ×3.48 ～ 3.50m）、面積9.55㎡である。調査区住居群の南に近接しており、全体が把握できる。棟方向は南東－北西方向であると考えられ、総柱建物であると思われる。柱間は梁行が1.07 ～ 1.81m、桁行が1.52 ～ 1.98mである。確認した柱穴の柱筋はおおむね通っている。近接する住居群の主軸と棟方向は合っていない。　**主軸方位：**Ｎ－22°－Ｗ　**柱穴：**Ｐ１～９から成る。柱穴の平面形は楕円形で、長径0.33 ～ 0.90m、短径0.27 ～ 0.60m、深さ0.22 ～ 0.80mであり、平面の規模、深さ共にばらつきがある。傾斜地であることを考慮すれば、同一施設のものであると思われる。Ｐ３など柱痕が観察できる柱穴も確認できる。埋没土は、主に黒褐色土である。As-C、ロームブロックを少量含む。　**重複遺構：**なし。　**遺物：**認められない。　**所見：**確認面、埋没土等から、中世以前の掘立柱建物であると考える。周辺に所在する遺構と埋没土は近似しているが、棟方向は合っていない。関連は明瞭でない。特に、28･44号掘立柱建物、１・４・５・６号住居、２・３・４・５・９・15号土坑とは、近接するものの、主軸方向がずれており、時期差は明瞭でない。



第73図　茅畑遺跡２面　27号掘立柱建物

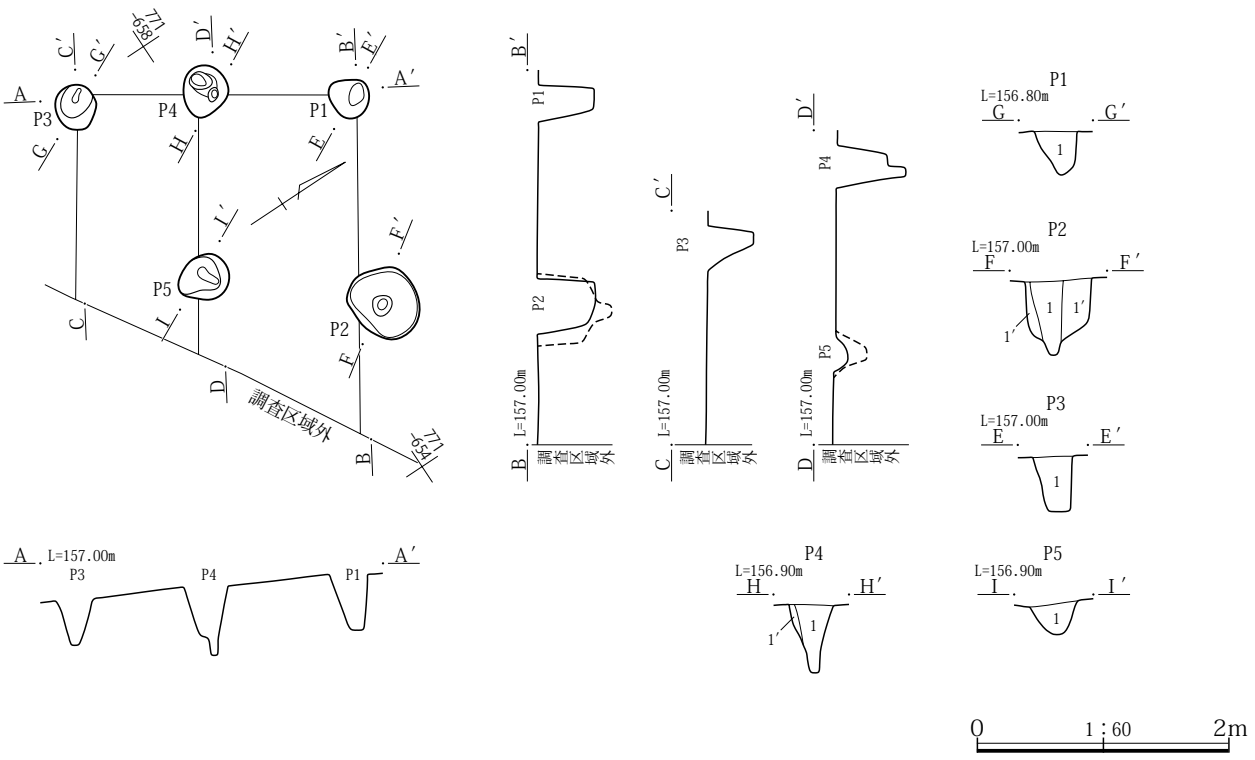
第13表　茅畑遺跡２面27号掘立柱建物　計測表

建物全体の規模			２×２間・南北棟			面積	9.55㎡		
主軸方位			N－22°－W			位置	X＝766～770　Y＝-663～-668		
桁・梁の規模(m)		柱穴№	柱穴規模(m)			形状	次柱穴との間隔(m)	旧ピット№	備考
			長径	短径	深さ				
東辺	3.50	P１	0.44	0.41	0.76	楕円形	1.52	543	
		P２	0.47	(0.40)	1.13	楕円形	1.97	538	539ピットと重複
南辺	2.88	P３	0.39	0.37	0.78	楕円形	1.07	537	
		P４	0.37	0.30	0.22	楕円形	1.81	531	
西辺	3.48	P５	0.40	0.38	0.80	楕円形	1.74	350	351ピットと重複
		P６	0.38	0.33	0.39	楕円形	1.74、P９へ 1.20	348	
北辺	2.69	P７	0.90	0.60	0.50	楕円形	1.15	347	
		P８	0.44	0.33	0.72	楕円形	P１へ 1.53	1043	
		P９	0.33	0.27	0.27	楕円形	P２へ 1.98	540	

28号掘立柱建物(第74図　PL.28)

位置：769～772・-654～-658　**規模形態：**梁行２間・桁行２間以上か(2.23m×2.70m以上)、面積(4.79)㎡である。調査区住居群の南東近くに位置する。南東部が調査区域外のため、規模を含め全容が明らかでない。東西方向に棟方向を取る総柱建物であると思われる。近接する住居群の主軸と棟方向は合っていない。柱間は桁行が1.68m、梁行が1.10～1.14mである。確認した柱穴の柱筋はおおむね通っている。　**主軸方位：**N－34°－W　**柱穴：**P１～５から成る。柱穴の平面形は楕円形で、長径0.33～0.61m、短径0.32～0.52m、深さ0.26～0.61mであり、深さにはややばらつきがあるものの、形状が近似している。埋没土は、主に黒褐色土である。As-C、ロームブロックを少量含み、同一の施設であると考えられる。　**重複遺構：**なし。　**遺物：**非掲載遺物として、P４から土師器小破片が出土している。

所見：確認面、埋没土等から、中世以前の掘立柱建物であると考える。周辺に所在する遺構と埋没土は近似しているが、棟方向は合っていない。関連は明瞭でない。特に、27・44号掘立柱建物、１・４・５・６号住居、２・３・４・５・９・15号土坑とは、近接するが、主軸方向がずれており、時期差は明瞭でない。



第74図　茅畑遺跡２面　28号掘立柱建物

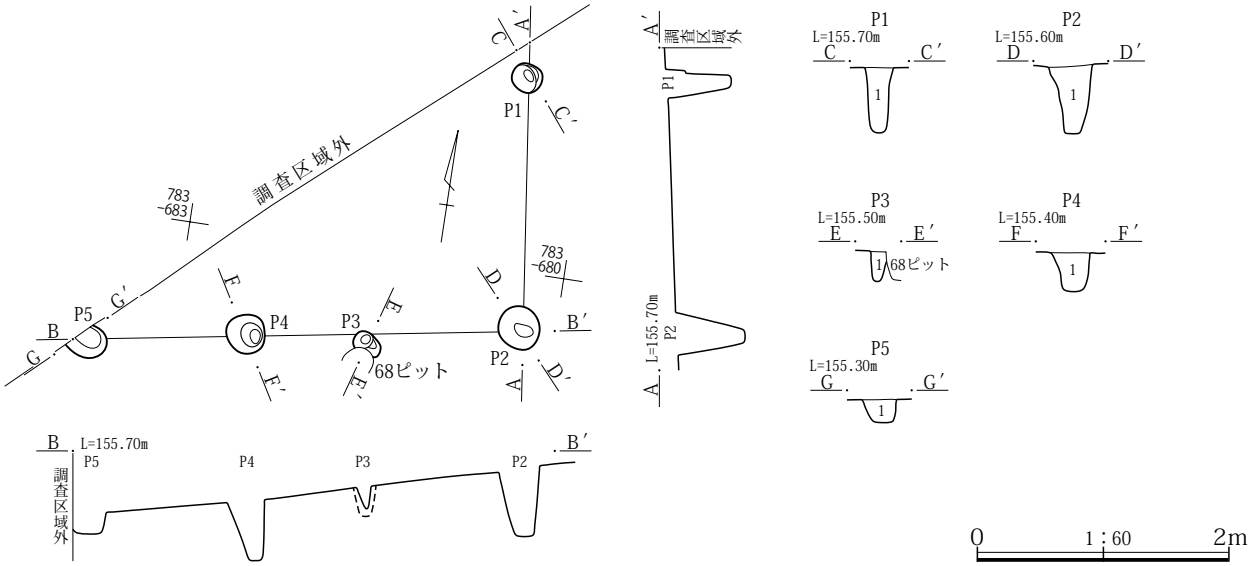
第14表　茅畑遺跡２面28号掘立柱建物　計測表

建物全体の規模		２×(２)間・東西棟				面積	(4.79)㎡		
主軸方位		N－34°－W				位置	X＝769～772　Y＝-654～-658		
桁・梁の規模(m)		柱穴No.	柱穴規模(m)			形状	次柱穴との間隔(m)	旧ピットNo.	備考
			長径	短径	深さ				
東辺	(2.70)	Ｐ１	0.33	0.32	0.44	楕円形	1.68	571	
		Ｐ２	0.61	0.52	0.61	楕円形	—	573	
西辺	(1.62)	Ｐ３	0.36	0.33	0.36	楕円形	1.10	567	
北辺	2.23	Ｐ４	0.41	0.37	0.55	楕円形	Ｐ１へ 1.14	568	土師小破片
		Ｐ５	0.43	0.36	0.26	楕円形	Ｐ４へ 1.45	569	

29号掘立柱建物(第75図　PL.29)

位置：781～784・-680～-683　**規模形態：**梁行２間以上か・桁行２間以上か(2.03m×3.44m)、面積(4.19)㎡である。北西部分が調査区域外のため、規模を含め全容が明らかでない。東西方向に棟方向を取る側柱建物であると思われる。近接する住居群の主軸と棟方向が合っている。柱間は桁行が1.31～2.03m、梁行が2.03m。確認した柱穴の柱筋はおおむね通っている。　**主軸方位：**N－81°－E　**柱穴：**Ｐ１～５から成る。南列においてはＰ４が主柱配置における柱穴であると考えられる。Ｐ３は、Ｐ４に付随する扉の施設に関連するものであると推察される。柱穴の平面形は楕円形で、長径(0.24)～0.36m、短径(0.13)～0.33m、深さ0.18～0.57mであり、深さにはややばらつきがあるものの、形状が近似している。埋没土は、黒褐色土、暗褐色土である。As-C、ロームブロックを少量含み、同一の施設であると考える。　**重複遺構：**なし。　**遺物：**認められない。

所見：確認面、埋没土等から、中世以前の掘立柱建物であると考える。周辺に所在する遺構と棟方向及び埋没土等が近似しており、関連が想定される。特に、1・4・5・6号住居、25・47号掘立柱建物とは、主軸方向が合っており、時期差が少ないと考えられる。



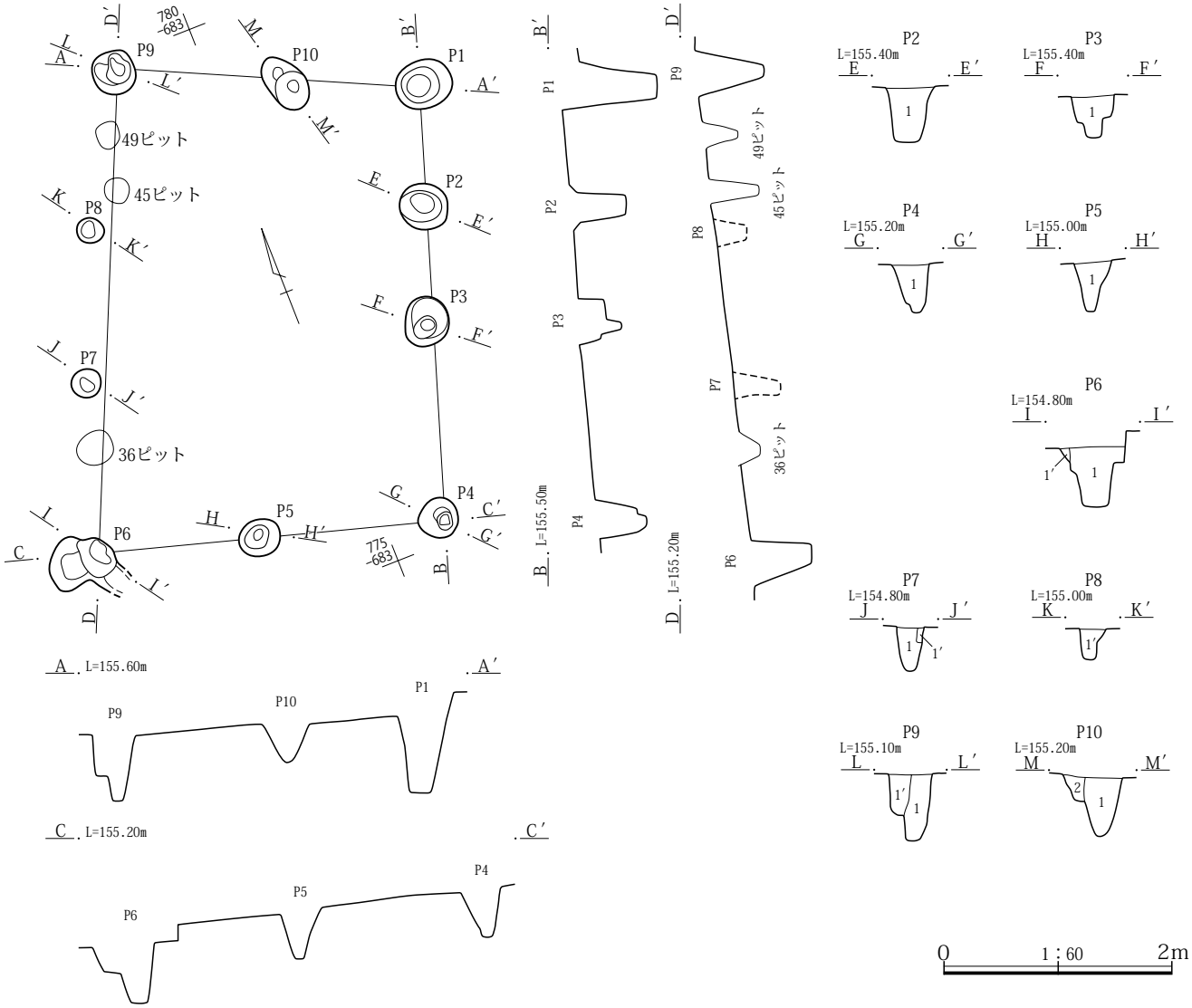
第75図　茅畑遺跡２面　29号掘立柱建物

第15表　茅畑遺跡２面29号掘立柱建物　計測表

建物全体の規模		(２)×(２)間・東西棟				面積	(4.19)㎡		
主軸方位		N－81°－E				位置	X＝781～784　Y＝-680～-683		
桁・梁の規模(m)		柱穴No.	柱穴規模(m)			形状	次柱穴との間隔(m)	旧ピットNo.	備考
			長径	短径	深さ				
東辺	(2.03)	Ｐ１	0.25	0.24	0.52	楕円形	2.03	81	
		Ｐ２	0.36	0.33	0.57	楕円形	1.25	74	
南辺	(3.44)	Ｐ３	0.24	(0.13)	0.24	楕円形	0.88	67	68ピットと重複
		Ｐ４	0.31	0.30	0.48	楕円形	1.31	59	
		Ｐ５	(0.24)	0.28	0.18	楕円形	—	58	

30号掘立柱建物(第76図)

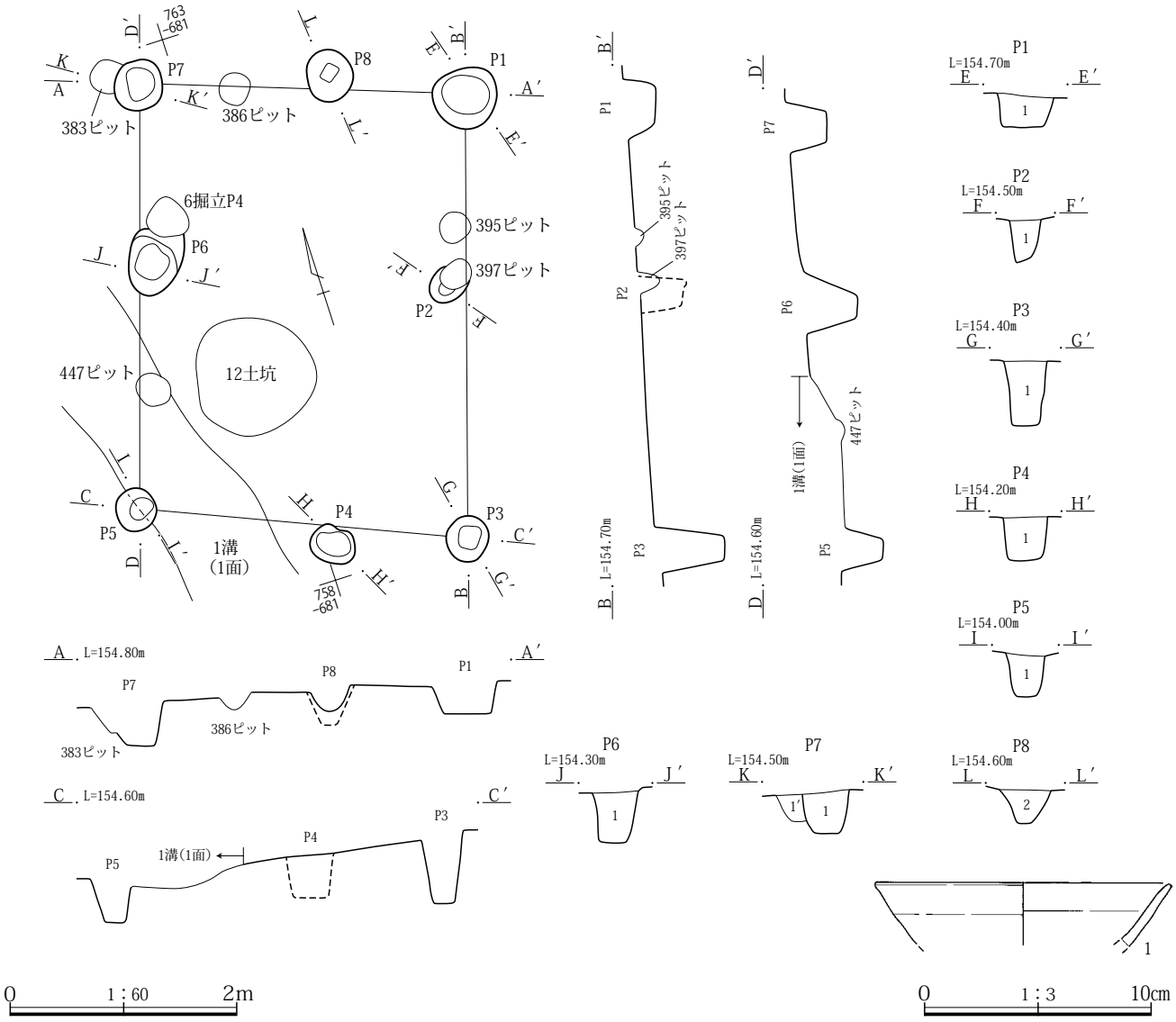
位置：775～780・-681～-685　**規模形態：**梁行２間・桁行３間(3.80～4.24m×2.66～3.05m)、面積10.68㎡である。北東-南西方向に棟方向を取る側柱建物である。柱間は梁行が1.10～1.65m、桁行が1.02～1.72m。確認した柱穴の柱筋はおおむね通っている。近接する住居群の主軸と棟方向がほぼ直交している。　**主軸方位：**N－22°－E　**柱穴：**P１～10から成る。西列と東列及び、北列と南列、それぞれ対応する柱穴が確認された。柱穴の平面形は楕円形、円形及び不整形である。長径0.24～0.52m、短径0.23～0.57m、深さ0.27～0.89mであり、ややばらつきがあるものの、形状が近似している。埋没土は、黒褐色土、暗褐色土である。As-C、ロームブロックを少量含み、稀にAs-YPを含む。同一の施設であると考える。　**重複遺構：**なし。　**遺物：**認められない。　**所見：**確認面、埋没土等から、中世以前の掘立柱建物であると考える。周辺に所在する遺構と棟方向及び埋没土等が近似しており、関連が想定される。特に、１・４・５・６号住居、25・29・47号掘立柱建物とは、主軸方向が合うか直交しており、時期差が少ないと考えられる。



第76図　茅畑遺跡２面　30号掘立柱建物

34号掘立柱建物(第77図)

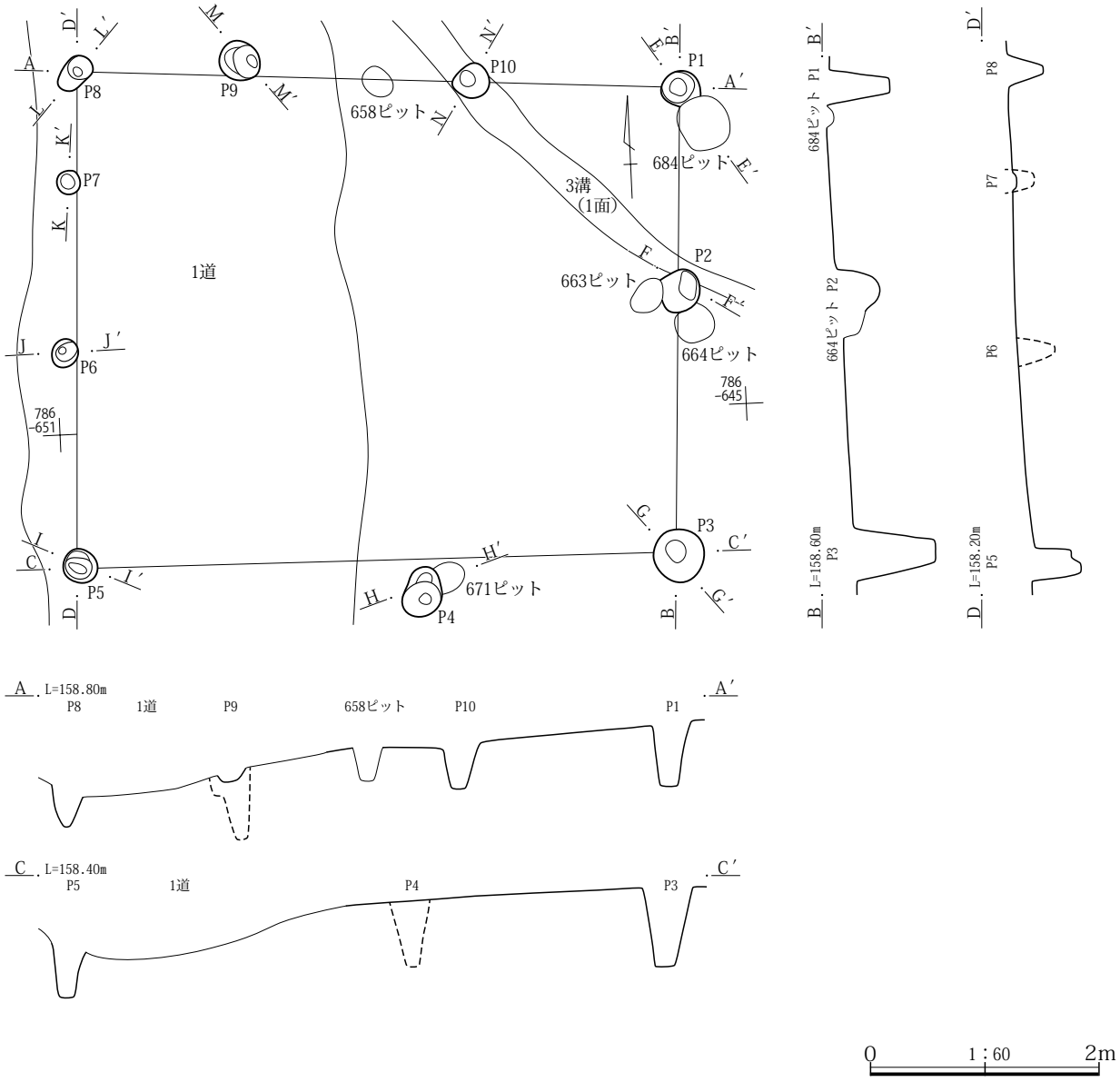
位置：757 ～ 762・-678 ～ -682　**規模形態：**梁行２間・桁行２間(2.87 ～ 2.91m ×3.74 ～ 3.92m)、面積10.96㎡の南北方向に棟方向を取る総柱建物である。柱間は梁行が1.19 ～ 1.74m、桁行が1.58 ～ 2.23m。確認した柱穴の柱筋はおおむね通っている。　**主軸方位：**Ｎ－18°－Ｅ　**柱穴：**Ｐ１～８から成る。西列と東列及び、北列と南列、それぞれ対応する柱穴が確認された。各辺の線上にピットが存在するが、各柱穴と距離が近いため、関連はないものと考えた。柱穴の平面形は楕円形、円形及び不整形である。長径(0.23) ～ 0.57m、短径0.29 ～ 0.55m、深さ0.30 ～ 0.56mであり、ばらつきがあるが、形状等から同一の施設であると考える。埋没土は、黒褐色土、暗褐色土である。As-C、ロームブロックを少量含み、稀にAs-YPを含む。　**重複遺構：**６号掘立柱建物、12号土坑、１号溝(１面)が重複している。　**遺物：**Ｐ６から須恵器杯(１)を図示した。非掲載遺物として、Ｐ３から土師器甕、Ｐ４から須恵器杯、Ｐ６から土師器甕が出土している。　**所見：**確認面、埋没土等から、中世以前の掘立柱建物であると考える。周辺に所在する遺構と棟方向及び埋没土等が近似しており、関連が想定される。特に、１・４・５・６号住居、25・29・30・47号掘立柱建物とは、主軸方向が合うか直交しており、時期差が少ないと考えられる。６号掘立柱建物とは重複するが、僅かな時期差で、建て替えの可能性があると指摘する。



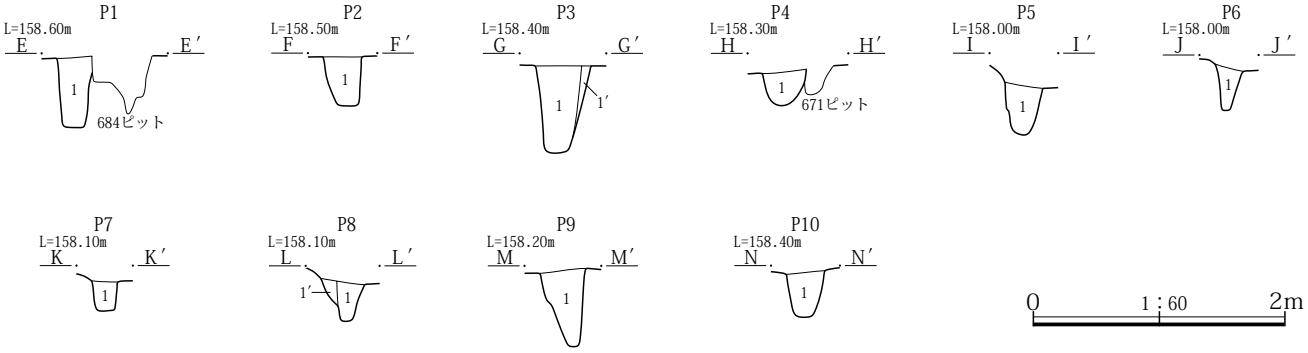
第77図　茅畑遺跡２面　34号掘立柱建物、出土遺物

43号掘立柱建物(第78・79図　PL.29)

位置：784 ～ 789・-645 ～ -651　**規模形態：**梁行２間・桁行３間(4.05 ～ 4.33m ×5.23 ～ 5.27m)、面積21.97㎡である。調査区住居群から東へやや離れている。東西方向に棟方向を取る側柱建物である。柱間は桁行が1.54 ～ 2.23m、梁行が1.72 ～ 2.33mである。確認した柱穴の柱筋はおおむね通っている。住居群の主軸と棟方向がおおむね合っている。48号掘立柱建物とは形状が類似している。　**主軸方位：**Ｎ－87°－Ｗ　**柱穴：**Ｐ１～10から成る。南列の東から２番目の柱穴が、確認できなかった。Ｐ７は、入口の施設若しくは補強のための柱のものであると思われる。柱穴の平面形は主に楕円形であり、円形も確認される。長径0.21 ～ 0.47m、短径0.21 ～ 0.45m、深さ0.29 ～ 0.72mであり、規模や深さにはややばらつきがあるものの、配置から同一施設のものであると考える。埋没土は、主に黒褐色土である。As-C、ロームブロックを少量含む。　**重複遺構：**48・49号掘立柱建物、１号道路、３号溝(１面)と重複している。１号道路が最も古い。　**遺物：**認められない。　**所見：**確認面、埋没土等から、中世以前の掘立柱建物であると考える。周辺に所在する遺構と棟方向及び埋没土等が近似しており、関連が想定される。特に、11・17・18・48・49号掘立柱建物及び１号道路とは、主軸方向が合うか直交しており、時期差が少ないと考えられる。



第78図　茅畑遺跡２面　43号掘立柱建物(１)



第79図　茅畑遺跡２面　43号掘立柱建物（２）

第16表　茅畑遺跡２面30号掘立柱建物　計測表

建物全体の規模		２×３間・南北棟				面積	10.68㎡		
主軸方位		Ｎ－22°－Ｅ				位置	Ｘ＝775～780　Ｙ＝-681～-685		
桁・梁の規模（m）		柱穴№	柱穴規模（m）			形状	次柱穴との間隔（m）	旧ピット№	備考
			長径	短径	深さ				
東辺	3.80	Ｐ１	0.50	0.42	0.89	楕円形	1.02	1863	
		Ｐ２	0.43	0.41	0.48	楕円形	1.07	274	
		Ｐ３	0.43	0.38	0.38	楕円形	1.72	275	
南辺	3.05	Ｐ４	0.35	0.33	0.45	楕円形	1.65	280	
		Ｐ５	0.36	0.32	0.46	楕円形	1.40	283	
西辺	4.24	Ｐ６	(0.62)	0.57	0.53	不整形	1.47	35	
		Ｐ７	0.27	0.25	0.42	楕円形	1.35	37	
		Ｐ８	0.24	0.23	0.27	円形	1.45	39	
北辺	2.66	Ｐ９	0.38	0.37	0.61	円形	1.56	51	
		Ｐ10	0.52	0.33	0.56	楕円形	Ｐ１へ 1.10	57	

第17表　茅畑遺跡２面34号掘立柱建物　計測表

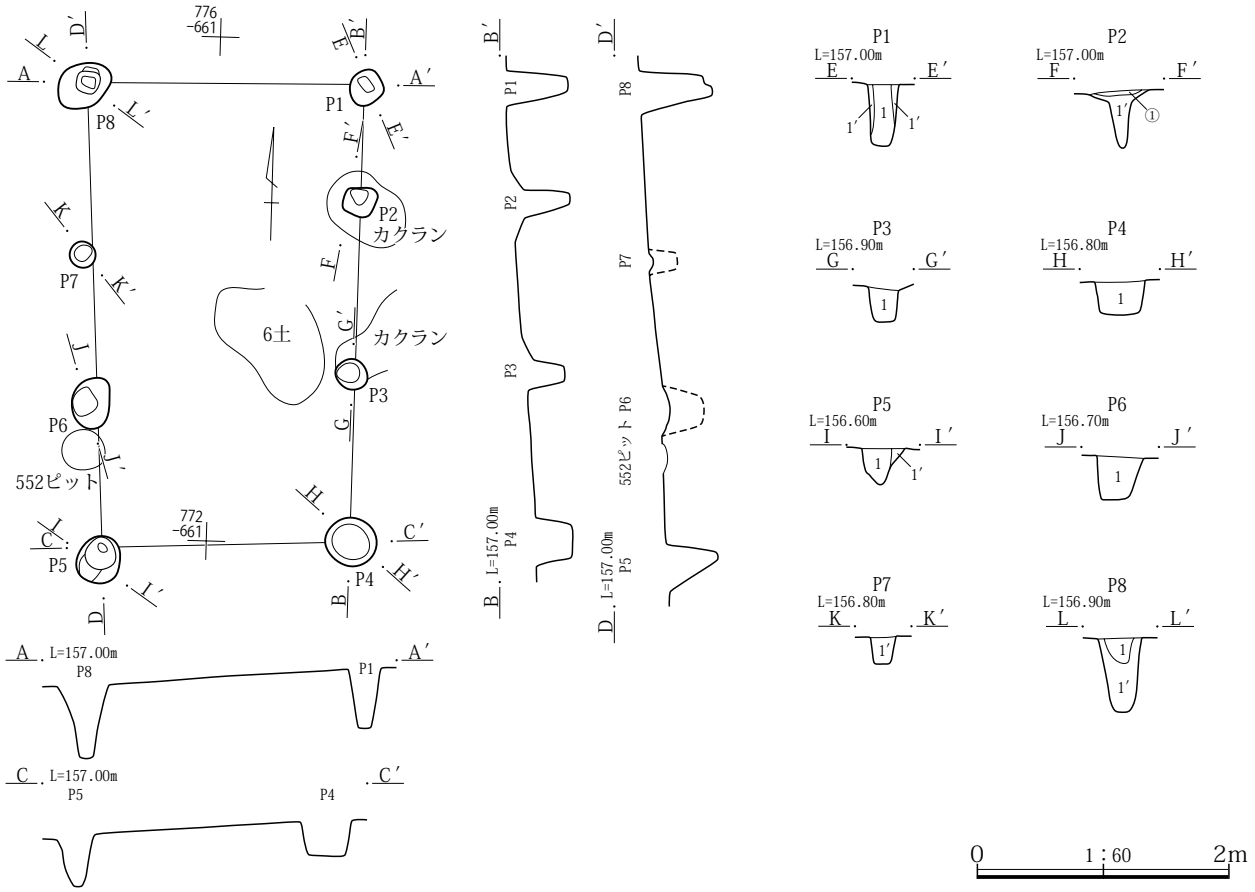
建物全体の規模		２×２間・南北棟				面積	10.96㎡		
主軸方位		Ｎ－18°－Ｅ				位置	Ｘ＝757～762　Ｙ＝-678～-682		
桁・梁の規模（m）		柱穴№	柱穴規模（m）			形状	次柱穴との間隔（m）	旧ピット№	備考
			長径	短径	深さ				
東辺	3.92	Ｐ１	0.57	0.55	0.30	楕円形	1.70	391	
		Ｐ２	(0.23)	0.29	0.36	楕円形	2.23	1126	397ピットと重複
南辺	2.91	Ｐ３	0.42	0.37	0.56	楕円形	1.19	499	土師器甕
		Ｐ４	0.41	0.30	0.39	楕円形	1.74	403	須恵器杯
西辺	3.74	Ｐ５	0.37	0.36	0.39	円形	2.17	467	
		Ｐ６	(0.54)	0.46	0.47	楕円形	1.58	500	須恵器杯、土師器甕 ６掘立Ｐ４と重複
北辺	2.87	Ｐ７	0.44	0.40	0.37	不整形	1.68	384	383ピットと重複
		Ｐ８	0.46	0.40	0.35	楕円形	Ｐ１へ 1.22	1127	

第18表　茅畑遺跡２面43号掘立柱建物　計測表

建物全体の規模		２×３間・東西棟				面積	21.97㎡		
主軸方位		Ｎ－87°－Ｗ				位置	Ｘ＝784～789　Ｙ＝-645～-651		
桁・梁の規模（m）		柱穴№	柱穴規模（m）			形状	次柱穴との間隔（m）	旧ピット№	備考
			長径	短径	深さ				
東辺	4.05	Ｐ１	(0.27)	0.33	0.58	楕円形	1.72	683	684ピットと重複
		Ｐ２	0.40	0.37	0.40	楕円形	2.33	857	663・664ピットと重複
南辺	5.23	Ｐ３	0.47	0.45	0.72	楕円形	2.23	680	
		Ｐ４	0.45	0.33	0.57	楕円形	3.05	670	671ピットと重複
西辺	4.33	Ｐ５	0.30	0.30	0.48	円形	1.90	1156	
		Ｐ６	0.26	0.23	0.36	楕円形	1.48	1176	
		Ｐ７	0.21	0.21	0.29	円形	0.96	1203	
北辺	5.27	Ｐ８	0.36	0.22	0.38	楕円形	1.54	1160	
		Ｐ９	0.37	0.35	0.64	楕円形	1.88	1199	
		Ｐ10	0.31	0.29	0.42	楕円形	Ｐ１へ1.86	1201	

44号掘立柱建物(第80図)

位置：771 ～ 775・-659 ～ -662　**規模形態：**梁行１間・桁行３間(1.98～2.21m以上×3.64～3.70m)、面積7.55㎡である。南北方向に棟方向を取る側柱建物である。柱間は梁行が1.98 ～ 2.21m、桁行が0.89 ～ 1.42mである。確認した柱穴の柱筋はおおむね通っている。近接する住居群の主軸と棟方向が直交している。　**主軸方位：**Ｎ－２°－Ｗ　**柱穴：**Ｐ１～８から成る。柱穴の平面形は楕円形及び円形で、長径0.21～0.47m、短径0.21～0.38m、深さ0.22 ～ 0.59mである。ばらつきは多いが、近似した形状を呈している。埋没土は、主に黒褐色土である。As-C、ロームブロックを少量含み、同一施設のものであると思われる。　**重複遺構：**６号土坑と重複しており、関連は想定されるが、所属する施設であるかは明瞭でない。　**遺物：**認められない。　**所見：**確認面、埋没土等から、中世以前の掘立柱建物であると考える。周辺に所在する遺構と埋没土は近似している。特に、１・４・５・６号住居とは、棟方向がおおむね合っており、関連が想定される。27・28号掘立柱建物、２・３・４・５・９・15号土坑とは、近接するものの、主軸方向がずれており、時期差は明瞭でない。



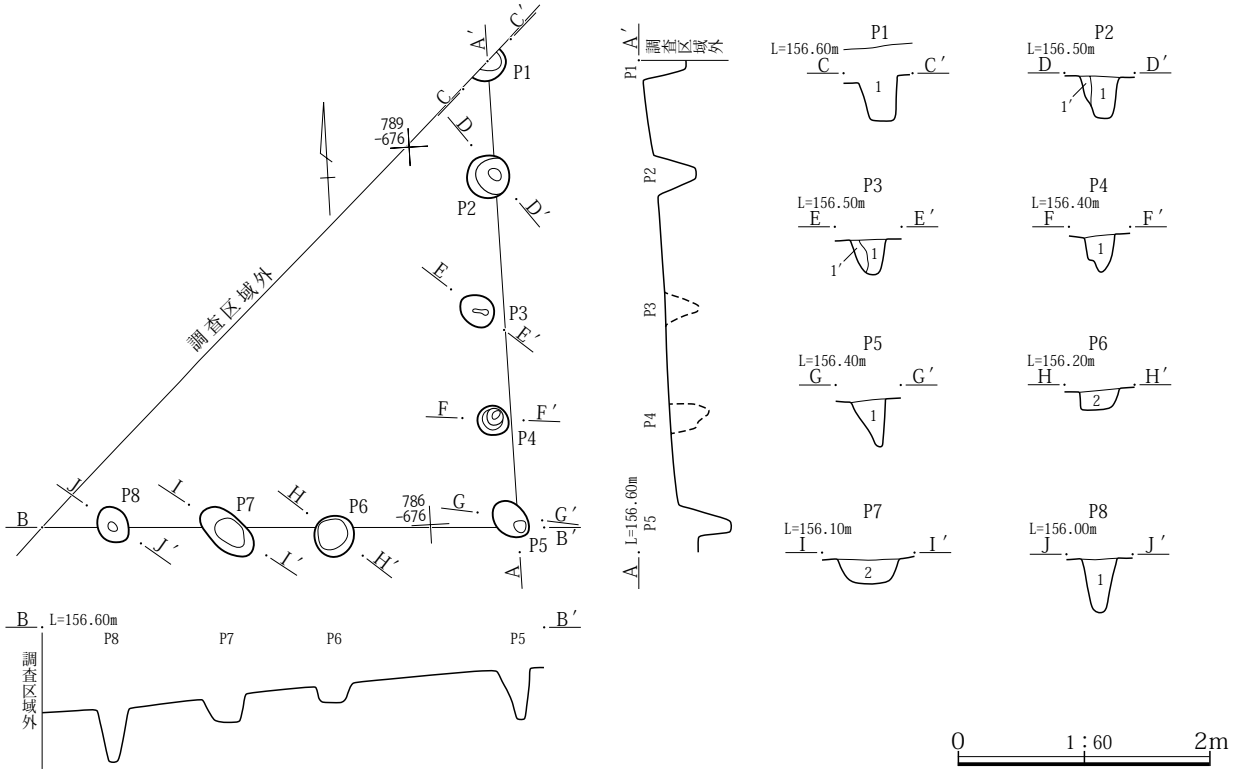
第80図　茅畑遺跡２面　44号掘立柱建物

第19表　茅畑遺跡２面44号掘立柱建物　計測表

建物全体の規模		1×3間・南北棟			面積	7.55㎡		
主軸方位		N－2°－W			位置	X＝771 ～ 775　Y＝-659 ～ -662		
桁・梁の規模(m)		柱穴№	柱穴規模(m)			形状	次柱穴との間隔(m)	旧ピット№	備考
			長径	短径	深さ				
東辺	3.64	Ｐ１	0.27	0.26	0.49	楕円形	0.89	585	
		Ｐ２	0.25	0.24	0.37	楕円形	1.42	581	
		Ｐ３	0.26	0.24	0.33	楕円形	1.33	1206	
南辺	1.98	Ｐ４	0.40	0.38	0.30	楕円形	1.98	1114	
		Ｐ５	0.39	0.35	0.41	楕円形	1.15	1047	
西辺	3.70	Ｐ６	0.40	0.31	0.35	楕円形	1.19	1207	
		Ｐ７	0.21	0.21	0.22	円形	1.36	559	
北辺	2.21	Ｐ８	0.47	0.36	0.59	楕円形	Ｐ１へ 2.21	560	

47号掘立柱建物(第81図　PL.30)

位置：785 ～ 789・-675 ～ -678　**規模形態：**梁行２間以上か・桁行３間以上か(3.70m ×3.23m)、面積(6.97) ㎡である。北西部分が調査区域外のため、規模を含め全容が明らかでない。棟方向は東西方向の可能性があるが、明瞭でない。側柱建物であると思われる。柱間は桁行が0.82 ～ 1.49m、梁行が0.83 ～ 1.10mである。確認した柱穴の柱筋はおおむね通っている。近接する住居群の主軸と棟方向が合っている。　**主軸方位：**N －87°－W　**柱穴：**Ｐ１～８から成る。Ｐ２・４・７は主柱配置の間に位置するもので、Ｐ２・４は建物の補強、Ｐ７は、Ｐ６あるいは Ｐ８と関連して、入口施設を形成しているものである可能性がある。柱穴の平面形は、楕円形及び円形であり、長径(0.14) ～ 0.51m、短径0.23 ～ 0.34m、深さ0.17 ～ 0.44mである。規模にばらつきは多いが、近似した形状を呈している。埋没土は、黒褐色土、暗褐色土である。As-C、ロームブロックを少量含み、稀にAs-YPを含む。同一の施設であると考える。　**重複遺構：**25号掘立柱建物と重複している。新旧関係は明瞭でないが、建て替えの可能性を指摘できる。　**遺物：**認められない。　**所見：**確認面、埋没土等から、中世以前の掘立柱建物であると考える。周辺に所在する遺構と棟方向及び埋没土等が近似しており、関連が想定される。特に、１・４・５・６号住居、25・29号掘立柱建物とは、主軸方向が合っており、時期差が少ないと考えられる。



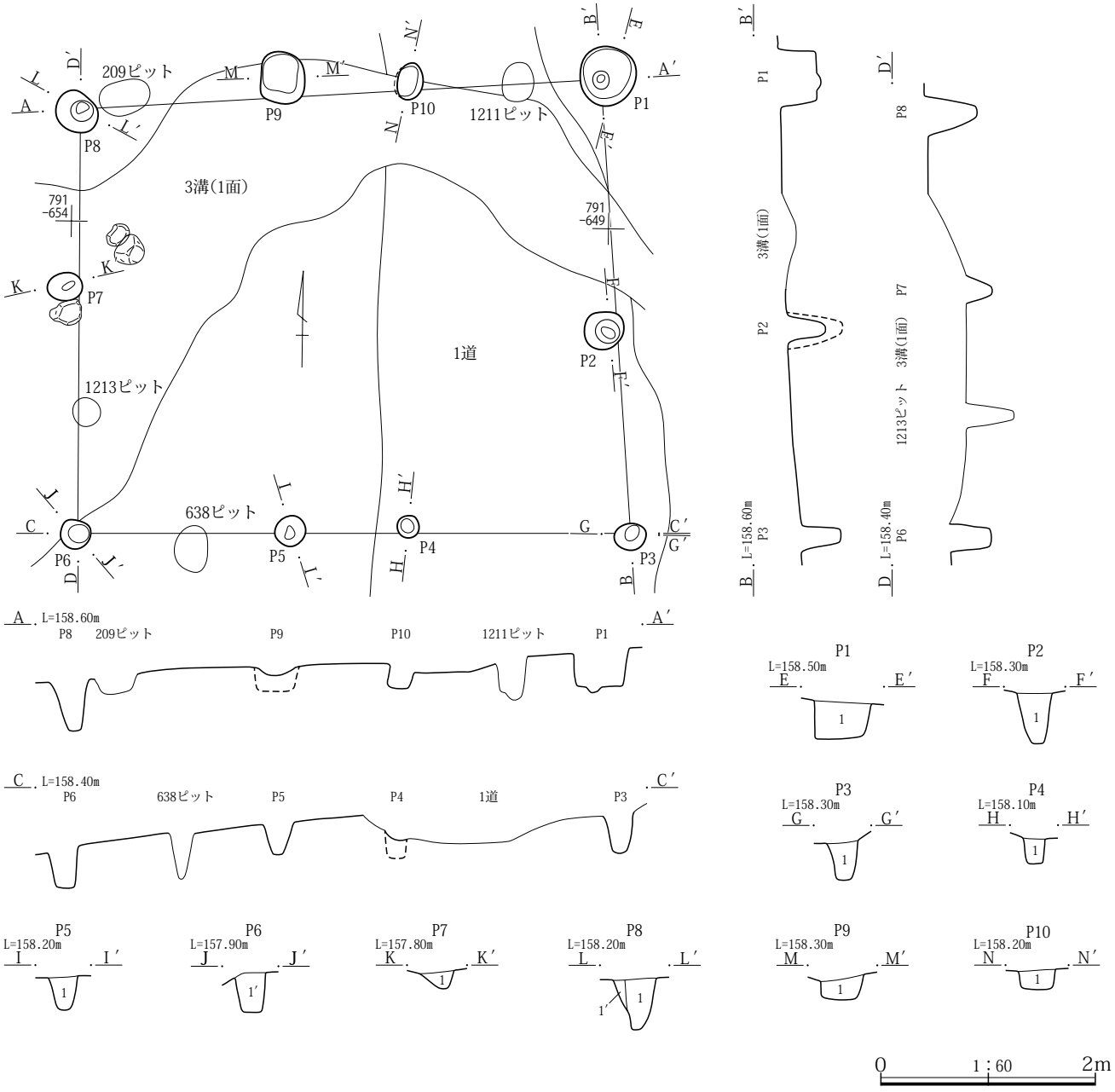
第81図　茅畑遺跡２面　47号掘立柱建物

第20表　茅畑遺跡２面47号掘立柱建物　計測表

建物全体の規模		(2)×(3)間・東西棟			面積	(6.97)㎡		
主軸方位		N－87°－W			位置	X＝785 ～ 789　Y＝-675 ～ -678		
桁・梁の規模(m)		柱穴№	柱穴規模(m)			形状	次柱穴との間隔(m)	旧ピット№	備考
			長径	短径	深さ				
東辺	(3.70)	Ｐ１	(0.14)	0.32	0.36	不明	0.88	1168	
		Ｐ２	0.34	0.34	0.37	円形	1.10	108	
		Ｐ３	0.29	0.24	0.27	楕円形	0.83	107	
		Ｐ４	0.25	0.23	0.30	楕円形	0.92	1205	
南辺	(3.23)	Ｐ５	0.34	0.24	0.41	楕円形	1.49	1069	
		Ｐ６	0.33	0.32	0.17	円形	0.82	144	
		Ｐ７	0.51	0.28	0.22	楕円形	0.93	93	
		Ｐ８	0.31	0.25	0.44	楕円形	—	86	

48号掘立柱建物(第82図　PL.30)

位置：787 ～ 792・-648 ～ -654　**規模形態：**梁行２間・桁行３間(3.97 ～ 4.24m ×4.87 ～ 5.17m)、面積20.44㎡である。東西方向に棟方向を取る側柱建物である。柱間は梁行が1.66 ～ 2.38m、桁行が1.10 ～ 2.09mである。確認した柱穴の柱筋はおおむね通っている。近接する住居群の主軸と棟方向が平行である。43号掘立柱建物とは形状が類似している。　**主軸方位：**Ｎ－89°－Ｅ　**柱穴：**Ｐ１～10から成る。柱穴の平面形は楕円形及び円形で、長径0.22 ～ 0.56m、短径0.21 ～ 0.53m、深さ0.24 ～ 0.51mである。ばらつきはあるが、近似した形状を呈している。埋没土は、主に黒褐色土である。As-C、ロームブロックを少量含み、同一施設のものであると思われる。　**重複遺構：**43号掘立柱建物、１号道路、３号溝(１面)と重複している。３号溝が48号掘立柱建物を切っており、３号溝が新しい。切り合いから１号道路が最も古い。　**遺物：**認められない。　**所見：**確認面、埋没土等から、中世以前の掘立柱建物であると考える。周辺に所在する遺構と棟方向及び埋没土等が近似しており、関連が想定される。特に、11・17・18・43・49号掘立柱建物及び１号道路とは、主軸方向が合うか直交しており、時期差が少ないと考えられる。



第82図　茅畑遺跡２面　48号掘立柱建物

第21表　茅畑遺跡２面48号掘立柱建物　計測表

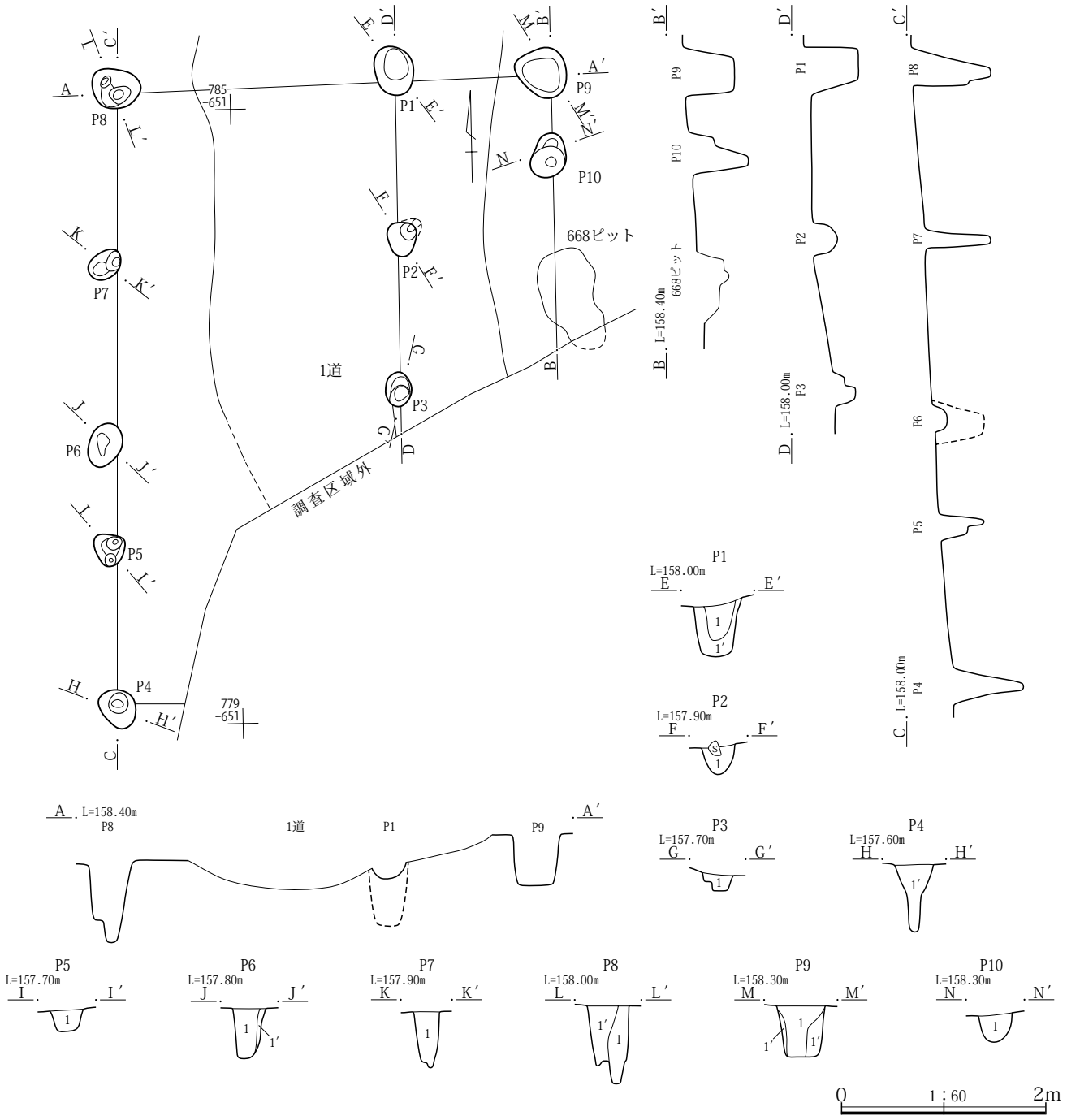
建物全体の規模		２×３間・東西棟				面積	20.44㎡		
主軸方位		N－89°－E				位置	X＝787～792　Y＝-648～-654		
桁・梁の規模(m)		柱穴№	柱穴規模(m)			形状	次柱穴との間隔(m)	旧ピット№	備考
			長径	短径	深さ				
東辺	4.24	Ｐ１	0.56	0.53	0.41	楕円形	2.38	1216	
		Ｐ２	0.39	0.36	0.51	楕円形	1.88	1161	
南辺	5.17	Ｐ３	0.31	0.26	0.37	楕円形	2.09	1210	
		Ｐ４	0.22	0.21	0.29	円形	1.10	1203	
		Ｐ５	0.29	0.29	0.31	円形	1.97	642	
西辺	3.97	Ｐ６	0.28	0.27	0.39	楕円形	2.32	1059	
		Ｐ７	0.33	0.26	0.24	楕円形	1.66	1217	
北辺	4.87	Ｐ８	0.42	0.35	0.49	楕円形	1.90	929	
		Ｐ９	0.48	0.41	0.26	楕円形	1.18	1218	
		Ｐ10	0.35	0.24	0.27	楕円形	Ｐ１へ 1.80	1212	

第22表　茅畑遺跡２面49号掘立柱建物　計測表

建物全体の規模		(２)×３間・南北棟				面積	(17.27)㎡		
主軸方位		N－１°－E				位置	X＝778～785　Y＝-647～-652		
桁・梁の規模(m)		柱穴№	柱穴規模(m)			形状	次柱穴との間隔(m)	旧ピット№	備考
			長径	短径	深さ				
東辺	(3.6)	Ｐ１	0.46	0.38	0.60	楕円形	1.60、Ｐ９へ 1.45	1157	
		Ｐ２	0.34	0.27	0.60	楕円形	1.61	1155	
		Ｐ３	0.34	0.26	0.23	楕円形	—	1194	
南辺	(0.67)	Ｐ４	0.40	0.33	0.68	楕円形	1.58	1147	
西辺	5.96	Ｐ５	0.31	0.28	0.43	不整形	0.97	1149	
		Ｐ６	0.44	0.32	0.51	楕円形	1.77	625	
		Ｐ７	0.35	0.25	0.64	楕円形	1.64	1190	
北辺	2.74	Ｐ８	0.48	0.38	0.80	楕円形	Ｐ１へ 2.74	636	
庇	1.45	Ｐ９	0.50	0.46	0.50	楕円形	0.85	676	
庇	推定 1.52	Ｐ10	0.45	0.33	0.57	楕円形	(1.84)	670	土師小破片

49掘立柱建物(第83図　PL.31)

位置：778～785・-647～-652　**規模形態：**梁行２間・桁行３間(2.74m×5.96m)で、東に庇がつく建物である。面積(17.27)㎡である。南東部分が調査区域外のため、全容が明らかでないが、北辺と西辺が確認できているため、規模は把握でき、南北方向に棟方向を取る側柱建物であると思われる。柱間は桁行が1.58～1.77m、梁行が2.74mである。確認した柱穴の柱筋はおおむね通っている。　**主軸方位：**N－１°－E　**柱穴：**Ｐ１～10から成る。Ｐ５は、主柱のＰ６と関連して入り口施設を形成する柱穴であると推察される。Ｐ１とＰ８の間には、庇の関連から柱穴があったと思われるが確認されなかった。　柱穴の平面形は主に楕円形であるが不整形のものも確認された。長径0.31～0.48m、短径0.25～0.38m、深さ0.23～0.80mであり、深さにはややばらつきがあるものの、近似した形状である。庇の部分の柱穴は、長径0.45～0.50m、短径0.33～0.46m、深さ0.50～0.57mであり、母屋と大差はない。埋没土は、主に黒褐色土である。As-C、ロームブロックを少量含み、同一施設のものであると思われる。　**重複遺構：**43号掘立柱建物、１号道路と重複する。切り合いから１号道路が古い。**遺物：**認められない。　**所見：**確認面、埋没土等から、中世以前の掘立柱建物であると考える。周辺に所在する遺構と棟方向及び埋没土等が近似しており、関連が想定される。特に、11・17・18・43・48号掘立柱建物及び１号道路とは、主軸方向が合うか直交しており、時期差が少ないと考えられる。



第83図　茅畑遺跡２面　49号掘立柱建物

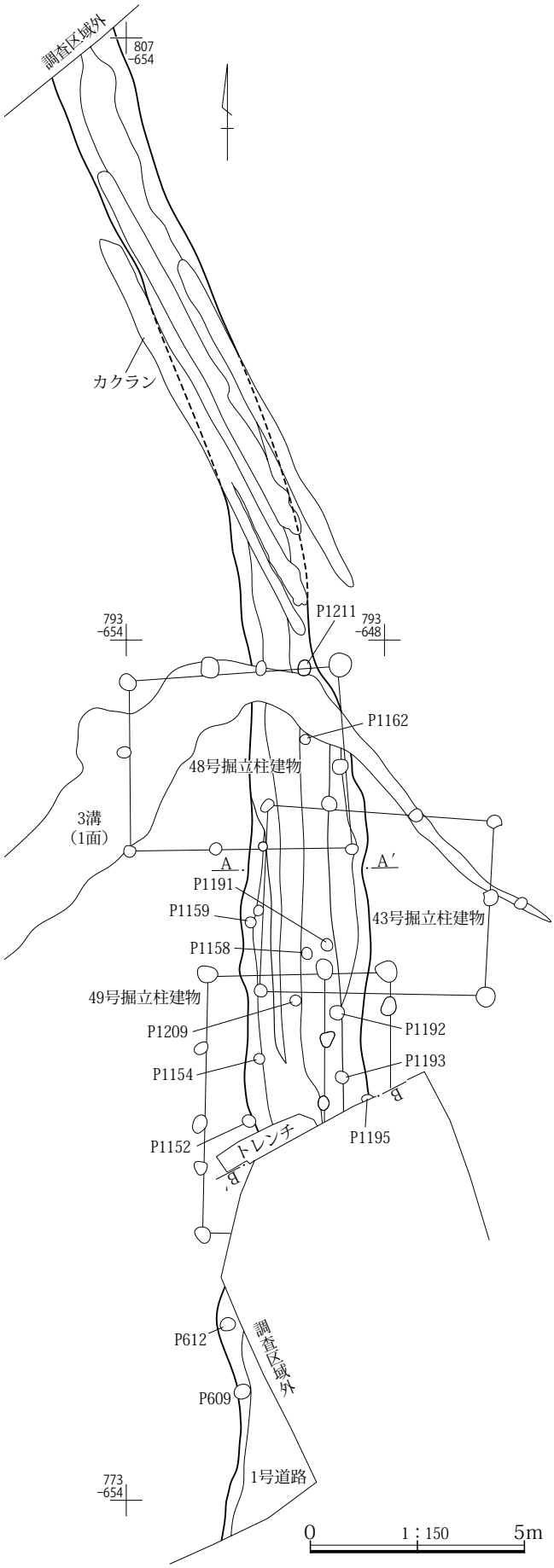
(４)道路

本調査区において、１号道路は、古墳を中心とする東部の丘陵地と、集落を中心とする西部の傾斜地を分ける位置にある。確認面、遺物、埋没土等より、古代から中世以降まで使用されていたと推察される。位置及び規模から、以前より集落にとっての主要道路であったと考えられる。

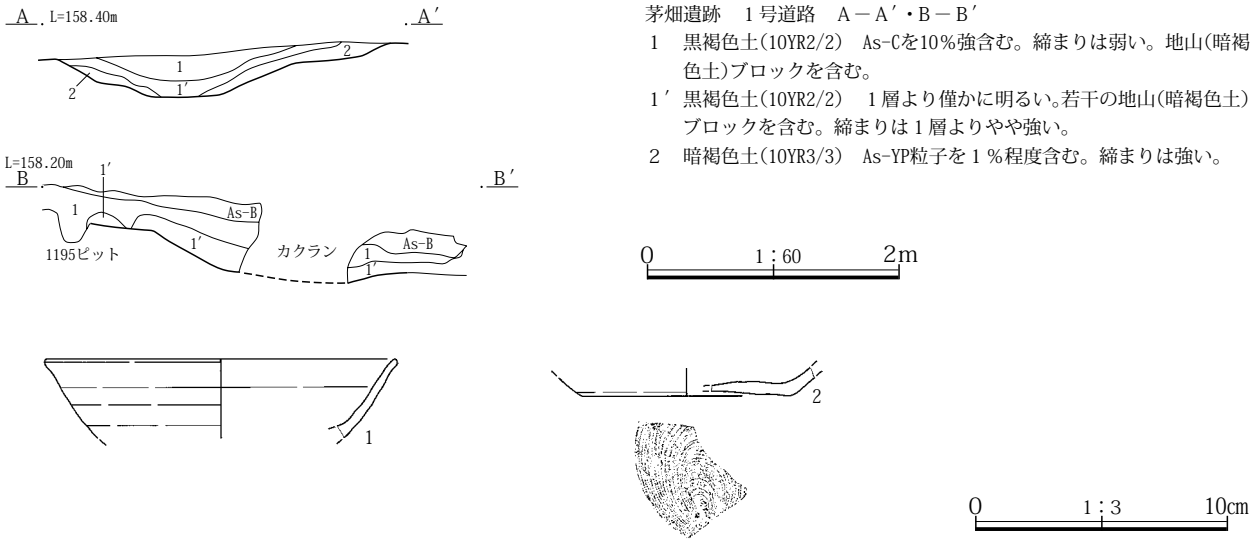
１号道路(第84・85図　PL.31)

位 置：781 ～ 808・-648 ～ -656　**規 模：**(33.15) m × 1.36 ～ 2.72m　**走行方位：**Ｎ－22°－Ｗ、Ｎ－４°－Ｗ

遺物：須恵器２点(杯２点)を図示した。杯(１・２)はいずれも埋没土からの出土である。図示した以外に、須恵器(杯類６片)、中世陶磁器類(在地系土器)破片１点、近代陶磁器類破片３点が出土している。出土遺物の様相から、本道路は古代から近代に至るまで長く使用されていた可能性があると考える。　**重複：**43・48・49号掘立柱建物と重複している。掘立柱建物の柱穴が道路面を壊していることから、掘立柱建物より古い道路であると考える。また、３号溝(１面)と重複している。３号溝に道路面を壊されていることから、３号溝より古い道路と考える。　**所見：**埋没土上層にAs-Bが５～10cm程堆積しており、硬化面が確認できた。同調査区の住居や掘立柱建物と同様にAs-Cが混入した黒褐色土及び暗褐色土で埋没していた。重複する掘立柱建物の柱穴の埋没土以前の土層が硬化面の直上に載っており、同建物より時期が前の古代の道路と考える。傾斜に垂直に、ほぼ南北に走る道路である。高低差を見ると、北が高く南が低い。道路面は硬化しており、中央に幅20 ～ 40cm程の溝状の凹が確認できる。道路の南側では、掘立柱建物が確認できる。特に、43・48・49号掘立柱建物は、本道路をまたぐように設置されている。これら掘立柱建物が、道路使用中に設置されたと考えると、道路と関連した施設であることが想定されるが、明瞭な資料は見つかっていない。一時的に道路が閉設していた可能性も考えられる。道幅が広い部分があり、硬化面も確認でき通行が頻繁であったと推察されることから、主要通路として使い続けられたと考えられる。



第84図　茅畑遺跡２面　１号道路



茅畑遺跡　１号道路　Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′
1　黒褐色土(10YR2/2)　As-Cを10％強含む。締まりは弱い。地山(暗褐色土)ブロックを含む。
1′　黒褐色土(10YR2/2)　１層より僅かに明るい。若干の地山(暗褐色土)ブロックを含む。締まりは１層よりやや強い。
2　暗褐色土(10YR3/3)　As-YP粒子を１％程度含む。締まりは強い。

第85図　茅畑遺跡２面　１号道路断面、出土遺物

(５)土坑

茅畑遺跡の土坑(第86～88図　PL.32～34)

概要：茅畑遺跡では29基の土坑を調査した。出土した位置は大きく２つに分けられる。調査区西部の集落周辺には、万遍なく検出されている。特に住居及び掘立柱建物周辺には数多く位置している。一方、調査区東部においては、古墳を中心としたピット群の周辺に位置している。形態は、大きく２種類に分類できる。一つは、平面形が楕円形であり断面形が逆台形を呈し、底面が平坦なものである。もう一つは、平面形が円形または楕円形であり断面形がすり鉢状に上部が広く下部が狭いものである。集落周辺の楕円形の土坑の主軸方位は、近接する住居の主軸及び掘立柱建物の棟方向に一致している場合が多い。

詳細については第35表に記した。

所見：埋没土はAs-C軽石を含むことから、いずれも住居及び掘立柱建物と同時期のものであると思われる。２・３・４・５・６・８・９・10・15・18・20号土坑については、４・５号住居及び27・28・44・49号掘立柱建物の周辺にあり、これらの生活圏に関連した施設であると推察される。また、21号土坑は、25・47号掘立柱建物に近接しており、関連した施設の可能性がある。さらに、16・17号土坑は、11・15・17・18号掘立柱建物に近接しており、やはり関連した施設の可能性がある。その他の土坑について関連施設であるか明瞭でない。

１号土坑(第86図　PL.32)

位置：769・-690

形状：楕円形、平底で断面形は逆台形を呈する。

規模：0.86m×0.52m　**深度：**0.19m

主軸方位：Ｎ－57°－Ｗ

埋没土層：黒褐色土で埋没している。As-C軽石を含む。締まりは弱い。

重複：なし。

遺物：認められない。

所見：本土坑の使用目的は確認できなかった。時期は明らかにできなかったが、確認面、埋没土及び形状から、おおむね中世以前の可能性を有すると思われる。

２号土坑(第86図　PL.32)

位置：771・-665

形状：楕円形、丸底、断面形はレンズ状を呈する。

規模：0.92m×0.67m　**深度：**0.23m

主軸方位：Ｎ－５°－Ｗ

埋没土層：黒褐色土で埋没している。下層は暗褐色ブロックを含み締まりが強い。上層はAs-C軽石を含み締まりは弱い。

重複：なし。

遺物：認められなかった。

所見：本土坑の使用目的は確認できなかった。時期は明らかにできなかったが、確認面、埋没土及び形状から、

おおむね中世以前の可能性を有すると思われる。近接する住居及び掘立柱建物との関連が想定されるが、明瞭ではない。３・４・５号土坑等、周囲に形状の類似した土坑が並ぶ。

３号土坑(第86図　PL.32)
位置：772・-665
形状：楕円形、平底で断面形は逆台形を呈する。
規模：1.03×0.77m　**深度：**0.24m
主軸方位：Ｎ－30°－Ｗ
埋没土層：黒褐色土で埋没している。As-C軽石を含む。締まりは弱い。
重複：なし。
遺物：認められなかった。
所見：本土坑の使用目的は確認できなかった。時期は明らかにできなかったが、確認面、埋没土及び形状から、おおむね中世以前の可能性を有すると思われる。近接する住居及び掘立柱建物との関連が想定されるが、明瞭ではない。２・４・５号土坑等、周囲に形状の類似した土坑が並ぶ。

４号土坑(第86図　PL.32)
位置：773・-663
形状：楕円形、平底で断面形は逆台形を呈する。
規模：0.64m×0.57m　**深度：**0.18m
主軸方位：Ｎ－52°－Ｅ
埋没土層：黒褐色土で埋没している。As-C軽石を含む。締まりは弱い。
重複：なし。
遺物：非掲載遺物として、須恵器(杯類１片)が出土している。
所見：本土坑の使用目的は確認できなかった。時期は明らかにできなかったが、確認面、出土遺物、埋没土及び形状から、おおむね古代の可能性を有すると思われる。近接する住居及び掘立柱建物との関連が想定されるが、明瞭ではない。２・３・５号土坑等、周囲に形状の類似した土坑が並ぶ。

５号土坑(第86図　PL.32)
位置：773・-662
形状：楕円形、平底で断面形は逆台形を呈する。
規模：0.77m×0.64m　**深度：**0.16m
主軸方位：Ｎ－48°－Ｅ
埋没土層：黒褐色土で埋没している。As-C軽石を含む。締まりは弱い。
重複：なし。
遺物：認められなかった。
所見：本土坑の使用目的は確認できなかった。時期は明らかにできなかったが、確認、埋没土面及び形状からおおむね中世以前の可能性を有すると思われる。近接する住居及び掘立柱建物との関連が想定されるが、明瞭ではない。２・３・４号土坑等、周囲に形状の類似した土坑が並ぶ。

６号土坑(第86図)
位置：773・-660
形状：楕円形、平底、一部丸底で断面形は不定形
規模：0.71m×0.40m　**深度：**0.33m
主軸方位：Ｎ－14°－Ｗ
埋没土層：暗褐色土で埋没している。As-YPを含み締まりが強い。その上に暗褐色土がのっている。
重複：44号掘立柱建物と重複しており、関連が想定されるが、所属施設であるかは明瞭でない。565号ピットに壊されており、565号ピットが新しい。
遺物：非掲載遺物として、土師器(甕類１片)が出土している。
所見：本土坑の使用目的は確認できなかった。時期は明らかにできなかったが、確認面、埋没土、出土遺物及び形状から、おおむね古代の可能性を有すると思われる。44号掘立柱建物と重複しており、近接する住居及び掘立柱建物も含めてそれぞれ関連が想定されるが、明瞭ではない。

７号土坑(第86図　PL.32)
位置：757・-680
形状：楕円形、平底で断面形は逆台形で深い。
規模：1.08m×0.61m　**深度：**0.50m
主軸方位：Ｎ－75°－Ｅ
埋没土層：黒褐色土で埋没している。As-C軽石を含む。締まりは弱い。

重複：702号ピットに壊されており、同ピットより古い。
遺物：認められなかった。
所見：本土坑の使用目的は確認できなかった。時期は明らかにできなかったが、確認面、埋没土及び形状から、おおむね中世以前の可能性を有すると思われる。４号掘立柱建物と主軸方位が重なるが、関連は明瞭でない。

８号土坑(第86図　PL.32)
位置：779・-661
形状：楕円形、丸底で断面は不定形である。
規模：1.15m×1.00m　**深度：**0.54m
主軸方位：N－60°－W
埋没土層：土坑の立ち上がり際は暗褐色土で埋没しており、As-YPを含み締まりが強い。中央部は、黒褐色土で埋没しており、As-Cを含み締まりは弱い。
重複：587号ピットに壊されており、同ピットより古い。
遺物：認められなかった。
所見：本土坑の使用目的は確認できなかった。時期は明らかにできなかったが、確認面、埋没土及び形状から、おおむね中世以前の可能性を有すると思われる。住居群及び44号掘立柱建物の近くにあるが､関連は明瞭でない。

９号土坑(第86図　PL.32)
位置：771・-659
形状：楕円形、平底で断面は逆台形を呈している。
規模：0.76m×0.58m　**深度：**0.23m
主軸方位：N－30°－W
埋没土層：黒褐色土で埋没している。As-C軽石を含む。締まりは弱い。
重複：なし。
遺物：認められなかった。
所見：本土坑の使用目的は確認できなかった。時期は明らかにできなかったが、確認面、埋没土及び形状から、おおむね中世以前の可能性を有すると思われる。住居群及び28・44号掘立柱建物の間にあるが、関連は明瞭でない。

10号土坑(第86・88図　PL.79)
位置：777・-655
形状：楕円形、平底で断面は逆台形であると思われる。
規模：0.68m×(0.37)m　**深度：**0.16m
主軸方位：N－40°－E
埋没土層：暗褐色土で埋没している。As-YPを含み、締まりが強い。
重複：604号ピットに壊されており、同ピットより古い。
遺物：須恵器１点(椀)を図示した。椀(１)は埋没土からの出土であった。遺構の時期に矛盾しない。
所見：本土坑の使用目的は確認できなかった。確認面、埋没土、形状出土遺物から、おおむね９世紀代の可能性を有すると思われる。28・44・49号掘立柱建物の間に位置するが、関連は明瞭でない。

11号土坑(第86図　PL.33)
位置：763・-676
形状：楕円形、丸底で断面は半円形である。
規模：0.80m×0.61m　**深度：**0.36m
主軸方位：N－30°－W
埋没土層：暗褐色土で埋没している。As-YPを含み締まりが強い。その上に、黒褐色土が載っている。下層に対して柱痕状の突起が出ている。
重複：493号ピットに前出している。
遺物：認められなかった。
所見：本土坑の使用目的は確認できなかった。時期は明らかにできなかったが、確認面、埋没土及び形状からおおむね中世以前の可能性を有すると思われる。６・34号掘立柱建物と近接しているが、関連は明瞭でない。

12号土坑(第86図　PL.33)
位置：759・-681
形状：楕円形、平底で断面は逆台形を呈している。
規模：1.07m×1.05m　**深度：**0.45m
主軸方位：N－74°－W
埋没土層：黒褐色土で埋没している。As-C軽石を含む。締まりは弱い。
重複：516・1101号ピットと重複している。
遺物：認められなかった。
所見：本土坑の使用目的は確認できなかった。時期は明らかにできなかったが、確認面、埋没土及び形状からおおむね中世以前の可能性を有すると思われる。34号掘立柱建物の内部にあるが、関連は明瞭でない。

13号土坑(第86図　PL.33)
位置：775・-695
形状：楕円形　平底で断面は逆台形を呈している。
規模：(0.80)m×(0.46)m　**深度：**0.20m
主軸方位：N－33°－W
埋没土層：黒褐色土で埋没している。As-C軽石を含む。上面はAs-C軽石で埋没している。
重複：なし。
遺物：認められなかった。
所見：本土坑の使用目的は確認できなかった。時期は明らかにできなかったが、確認面、埋没土及び形状からおおむね中世以前の可能性を有すると思われる。その他の遺構は近接していないため、関連は明瞭でない。

14号土坑(第86図　PL.33)
位置：763・-688
形状：楕円形　平底で断面は逆台形を呈する。
規模：1.12m×(0.50)m　**深度：**0.49m
主軸方位：N－30°－W
埋没土層：黒褐色土で埋没している。暗褐色土ブロックを含み、締まりが強い。
重複：なし。
遺物：認められなかった。
所見：本土坑の使用目的は確認できなかった。時期は明らかにできなかったが、確認面、埋没土及び形状からおおむね中世以前の可能性を有すると思われる。その他の遺構は近接していないため、関連は明瞭でない。

15号土坑(第87・88図　PL.33)
位置：764・-667
形状：楕円形、平底で断面は逆台形を呈する。
規模：(1.27)m×0.90m　**深度：**0.36m
主軸方位：N－0°
埋没土層：黒褐色土で埋没している。As-C軽石を含む。締まりは弱い。
重複：なし。
遺物：須恵器１点(杯)を図示した。杯(２)は埋没土からの出土であった。遺構の時期に矛盾しない。
所見：本土坑の使用目的は確認できなかった。確認面、埋没土、形状及び出土遺物から、おおむね９世紀代の可能性を有すると思われる。27号掘立柱建物の近くにあるが、関連は明瞭でない。

16号土坑(第87図)
位置：780・-640
形状：楕円形、丸底で断面は逆台形を呈する。
規模：0.78m×0.74m　**残存深度：**0.23m
主軸方位：N－69°－W
埋没土層：黒褐色土で埋没している。As-C軽石を含む。締まりは弱い。
重複：なし。
遺物：認められなかった。
所見：本土坑の使用目的は確認できなかった。時期は明らかにできなかったが、確認面、埋没土及び形状からおおむね中世以前の可能性を有すると思われる。15号掘立柱建物の近くにあるが、関連は明瞭でない。

17号土坑(第87図)
位置：784・-631
形状：楕円形、平底で断面は逆台形を呈している。
規模：0.58m×0.47m　**深度：**0.13m
主軸方位：N－10°－E
埋没土層：黒褐色土で埋没している。As-C軽石を含む。締まりは弱い。
重複：なし。
遺物：認められなかった。
所見：本土坑の使用目的は確認できなかった。時期は明らかにできなかったが、確認面、埋没土及び形状からおおむね中世以前の可能性を有すると思われる。15・17号掘立柱建物の周辺にあるが、関連は明瞭でない。

18号土坑(第87図　PL.33)
位置：777・-659
形状：楕円形、断面形はレンズ状を呈している。
規模：0.80m×0.47m　**深度：**0.22m
主軸方位：N－25°－W
埋没土層：暗褐色土で埋没している。As-YPを含み、締まりが強い。
重複：なし。
遺物：認められなかった。

所見：本土坑の使用目的は確認できなかった。時期は明らかにできなかったが、確認面、埋没土及び形状からおおむね中世以前の可能性を有すると思われる。住居群、44号掘立柱建物、８・10・20号土坑の近くにあるが、関連は明瞭でない。

19号土坑(第87図　PL.33)

位置：774・-688

形状：楕円形、丸底で断面は逆台形を呈している。

規模：0.62m×0.42m　**深度：**0.16m

主軸方位：Ｎ－66°－Ｗ

埋没土層：暗褐色土で埋没している。As-YPを含み、締まりが強い。

重複：なし。

遺物：認められなかった。

所見：本土坑の使用目的は確認できなかった。時期は明らかにできなかったが、確認面、埋没土及び形状からおおむね中世以前の可能性を有すると思われる。その他の遺構は近接していないため、関連は明瞭でない。

20号土坑(第87図　PL.33)

位置：778・-654

形状：楕円形、丸底で断面は逆台形を呈している。

規模：1.08m×0.66m　**深度：**0.28m

主軸方位：Ｎ－86°－Ｗ

埋没土層：黒褐色土で埋没している。暗褐色土ブロックを含み、締まりが強い。

重複：４号溝(１面)より古い。

遺物：認められなかった。

所見：本土坑の使用目的は確認できなかった。時期は明らかにできなかったが、確認面、埋没土及び形状からおおむね中世以前の可能性を有すると思われる。住居群、44・49号掘立柱建物等の間に位置しており、８・10・18号土坑の近くにあるが、関連は明瞭でない。

21号土坑(第87・88図　PL.34)

位置：791・-672

形状：楕円形、平底で断面は逆台形を呈している。

規模：1.17m×1.11m　**深度：**0.37m

主軸方位：Ｎ－65°－Ｅ

埋没土層：暗褐色土で埋没している。As-YPを含み、締まりが強い。

重複：148・1197・1198号ピットに前出している。

遺物：須恵器１点(杯)を図示した。杯(３)は埋没土からの出土であった。遺構の時期に矛盾しない。図示した以外に、土師器(甕類14片)、須恵器(杯類５片)が出土している。

所見：本土坑の使用目的は確認できなかった。確認面、埋没土、形状及び出土遺物からから、おおむね９世紀代の可能性を有すると思われる。25・47号掘立柱建物の近くにあるが、関連は明瞭でない。

27号土坑(第87図　PL.34)

位置：853・-546

形状：平面形は不明。丸底で断面形は不定形である。

規模：(0.97)m×0.89m　**深度：**0.25m

主軸方位：Ｎ－62°－Ｅ

埋没土層：黒褐色土で埋没している。As-C軽石を含む。締まりは弱い。

重複：２号畑(１面)。ただし、切り合いはない。

遺物：非掲載遺物として、土師器(甕類１片)が出土している。

所見：本土坑の使用目的は確認できなかった。時期は明らかにできなかったが、確認面、埋没土、形状及び出土遺物からおおむね古代の可能性を有すると思われる。畑や溝(１面)とは時期差があり、関連は明瞭でないと考える。

28号土坑(第87図　PL.34)

位置：846・-542

形状：楕円形、丸底で断面形は不定形

規模：846m×542m　**深度：**0.18m

主軸方位：Ｎ－43°－Ｅ

埋没土層：黒褐色土で埋没している。As-C軽石を含む。締まりは弱い。

重複：なし。

遺物：認められなかった。

所見：本土坑の使用目的は確認できなかった。時期は明らかにできなかったが、確認面、埋没土及び形状からおおむね中世以前の可能性を有すると思われる。畑や溝(１

面)とは時期差があり、関連は明瞭でないと考える。

29号土坑(第87・88図　PL.34・79)

位置：820・-631

形状：楕円形、基本平底で断面形は逆台形である。中央がやや陥没している。

規模：1.15m×1.02m　**深度：**0.39m

主軸方位：Ｎ－47°－Ｗ

埋没土層：下層は、にぶい黄褐色土で埋没している。As-YPを含む。上層は、暗褐色土で埋没している。As-YPを含む。締まりある。

重複：なし。

遺物：礫石器(凹石１点)を図示した。凹石(４)は埋没土からの出土であった。非掲載遺物として、土師器(甕類１片)が出土している。

所見：本土坑の使用目的は確認できなかった。時期は明らかにできなかったが、確認面、埋没、形状及び出土遺物からおおむね古代の可能性を有すると思われる。その他の遺構は近接していないため、関連は明瞭でない。

30号土坑(第87図)

位置：802・-630

形状：楕円形、丸底で断面はレンズ状を呈している。

規模：0.84m×0.43m　**深度：**0.33m

主軸方位：Ｎ－63°－Ｗ

埋没土層：下層は、黄褐色土で埋没している。As-YPを含む。上層は、黒褐色土で埋没している。As-Cを含む。

重複：なし。

遺物：認められなかった。

所見：本土坑の使用目的は確認できなかった。時期は明らかにできなかったが、確認面、埋没土及び形状からおおむね中世以前の可能性を有すると思われる。31号土坑が近接するが、関連は明瞭でない。

31号土坑(第87図)

位置：801・-630

形状：楕円形、丸底で断面形はすり鉢状を呈している。

規模：0.64m×0.44m　**深度：**0.38m

主軸方位：Ｎ－34°－Ｅ

埋没土層：下層は、褐色土で埋没している。As-YPを含み、粘性がある。上層は、暗褐色土で埋没している。As-Cを含み、締まりは強い。

重複：なし。

遺物：認められなかった。

所見：本土坑の使用目的は確認できなかった。時期は明らかにできなかったが、確認面、埋没土及び形状からおおむね中世以前の可能性を有すると思われる。30号土坑が近接するが、関連は明瞭でない。

32号土坑(第87図)

位置：804・-598

形状：楕円形、平底で逆台形を呈する。深底である。

規模：0.66m×0.52m　**深度：**0.71m

主軸方位：Ｎ－56°－Ｅ

埋没土層：下層は、黒褐色土で埋没している。As-Cを含み、締まりが強い。上層も、黒褐色土で埋没している。As-Cを含み、ややもろい。

重複：なし。

遺物：非掲載遺物として、須恵器(杯類１片)が出土している。

所見：本土坑の使用目的は確認できなかった。時期は明らかにできなかったが、確認面、埋没土、形状及び出土遺物からおおむね中世以前の可能性を有すると思われる。調査区中央のピット群の中に位置しており、33号土坑が近接するが、関連は明瞭でない。

33号土坑(第87図)

位置：806・-598

形状：楕円形、丸底で断面はすり鉢状を呈している。

規模：0.73m×0.43m　**深度：**0.81m

主軸方位：Ｎ－５°－Ｅ

埋没土層：下層は、黒褐色土で埋没している。As-Cを含み、締まりが強い。上層も、黒褐色土で埋没している。As-Cを含み、ややもろい。

重複：なし。

遺物：認められなかった。

所見：本土坑の使用目的は確認できなかった。時期は明らかにできなかったが、確認面、埋没土及び形状からおおむね中世以前の可能性を有すると思われる。調査区中央のピット群の中に位置しており、32号土坑が近接する

が、関連は明瞭でない。

34号土坑(第87図)

位置：836・-601

形状：不整形、丸底で断面はレンズ状を呈している。

規模：1.88m×0.83m　**深度：**0.37m

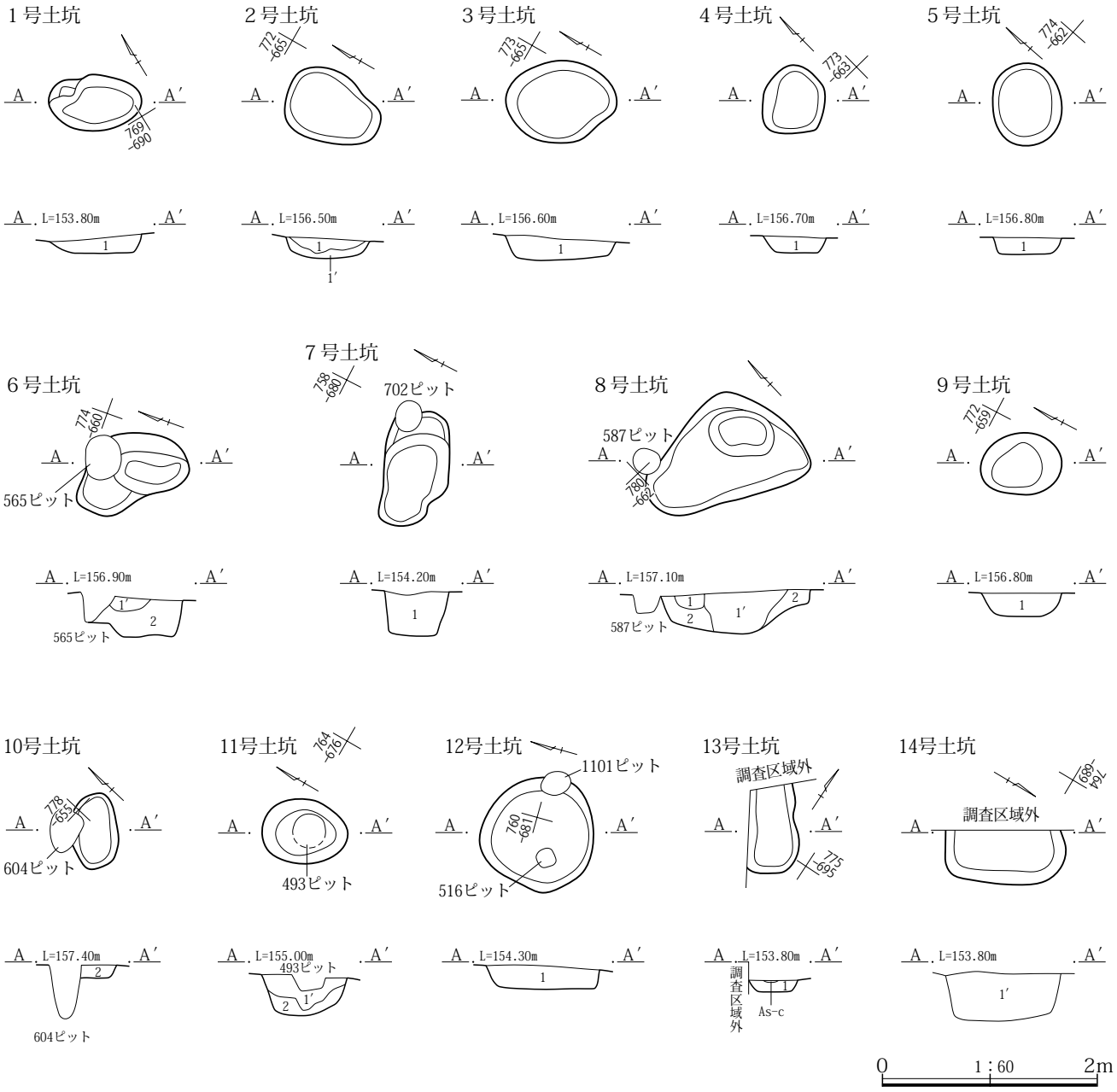
主軸方位：N－8°－W

埋没土層：黒褐色土で埋没している。全体にAs-Cを含む。上層はもろく、下層は締まりがある。中層はAs-C軽石を多量に含む。

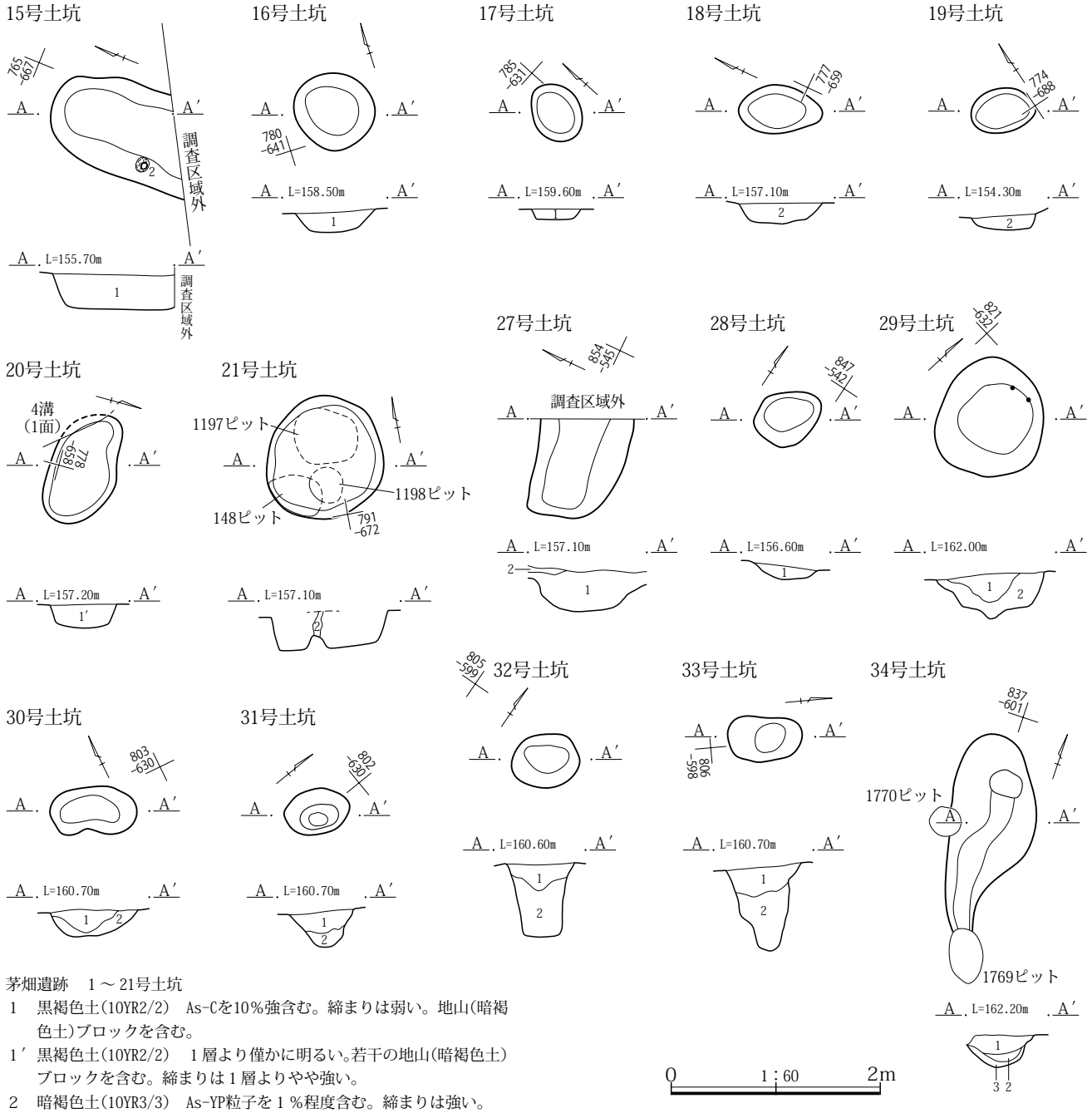
重複：1号古墳に後出しており、1769・1770号ピットに前出している。

遺物：非掲載遺物として、土師器(甕類1片)が出土している。

所見：本土坑の使用目的は確認できなかった。時期は明らかにできなかったが、確認面、埋没土、形状、及び出土遺物からおおむね古代以前の可能性を有すると思われる。1号古墳の西側の周堀中に位置している。1号古墳に関連するものであるか明瞭でない。



第86図　茅畑遺跡２面　1～14号土坑



茅畑遺跡　１～21号土坑

１　黒褐色土(10YR2/2)　As-Cを10％強含む。締まりは弱い。地山(暗褐色土)ブロックを含む。

１′黒褐色土(10YR2/2)　１層より僅かに明るい。若干の地山(暗褐色土)ブロックを含む。締まりは１層よりやや強い。

２　暗褐色土(10YR3/3)　As-YP粒子を１％程度含む。締まりは強い。

茅畑遺跡　27～34号土坑

27号土坑　Ａ－Ａ′

１　暗褐色土(10YR3/3)　所々に褐色ブロック、As-Cを少量含む。やや締まりあり。

２　黒褐色土(10YR2/2)　As-Cを少量含む。締まりあり。

28号土坑　Ａ－Ａ′

１　黒褐色土(10YR3/1)　As-Cを少量含む。褐色ブロックを含む。締まりあり。やや粘質。

29号土坑　Ａ－Ａ′

１　暗褐色土(10YR3/3)　As-YP粒子を１％程度含む。締まりあり。

２　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　As-YPを３％、ロームブロックを５％含む。

30号土坑　Ａ－Ａ′

１　黒褐色土(10YR2/2～2/3)　As-Cを10～20％含む。地山(暗褐色土)ブロックを含む。

２　黄褐色土(2.5Y5/2)　１層とローム土、As-YPとの混土。

31号土坑　Ａ－Ａ′

１　暗褐色土(10YR3/4)　As-YPを10％含む。締まりやや強い。

２　褐色土(10YR4/4)　As-YPを５％含む。粘性あり。

32号土坑　Ａ－Ａ′

１　黒褐色土(10YR2/2)　As-Cを10～20％含む。ややもろい。

２　黒褐色土(10YR2/2～2/3)　As-Cを３～７％含む。地山(暗褐色土)ブロックとロームブロックを含む。※締まりあり。

33号土坑　Ａ－Ａ′

１　黒褐色土(10YR2/2)　As-Cを30％含む。ややもろい。

２　黒褐色土(10YR2/2～2/3)　As-Cを10～20％含む。地山(暗褐色土)ブロックを含む。※締まりあり。

34号土坑　Ａ－Ａ′

１　黒褐色土(10YR2/2)　As-Cを10～20％含む。ややもろい。

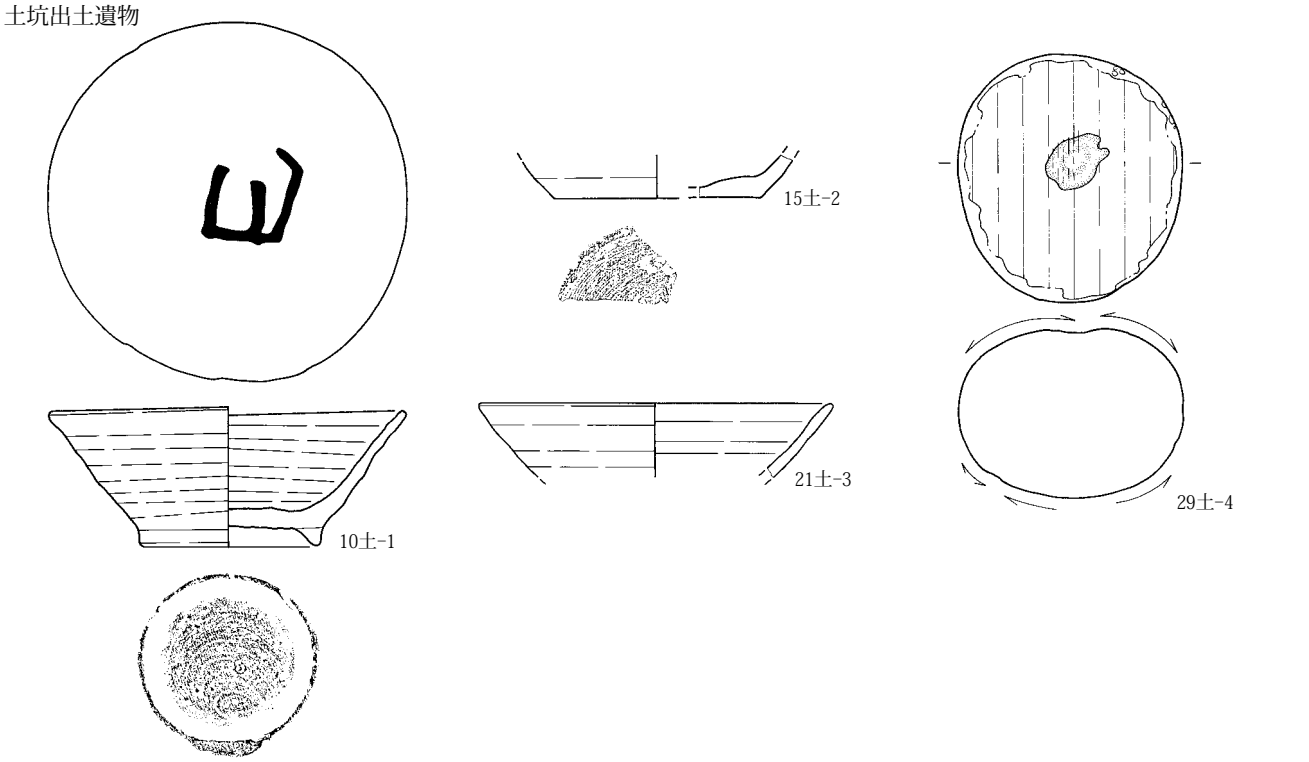
２　黒褐色土(10YR2/2)　As-Cを多量(70％)含む。

３　黒褐色土(10YR2/2)　As-Cを３～７％含む。締まりあり。

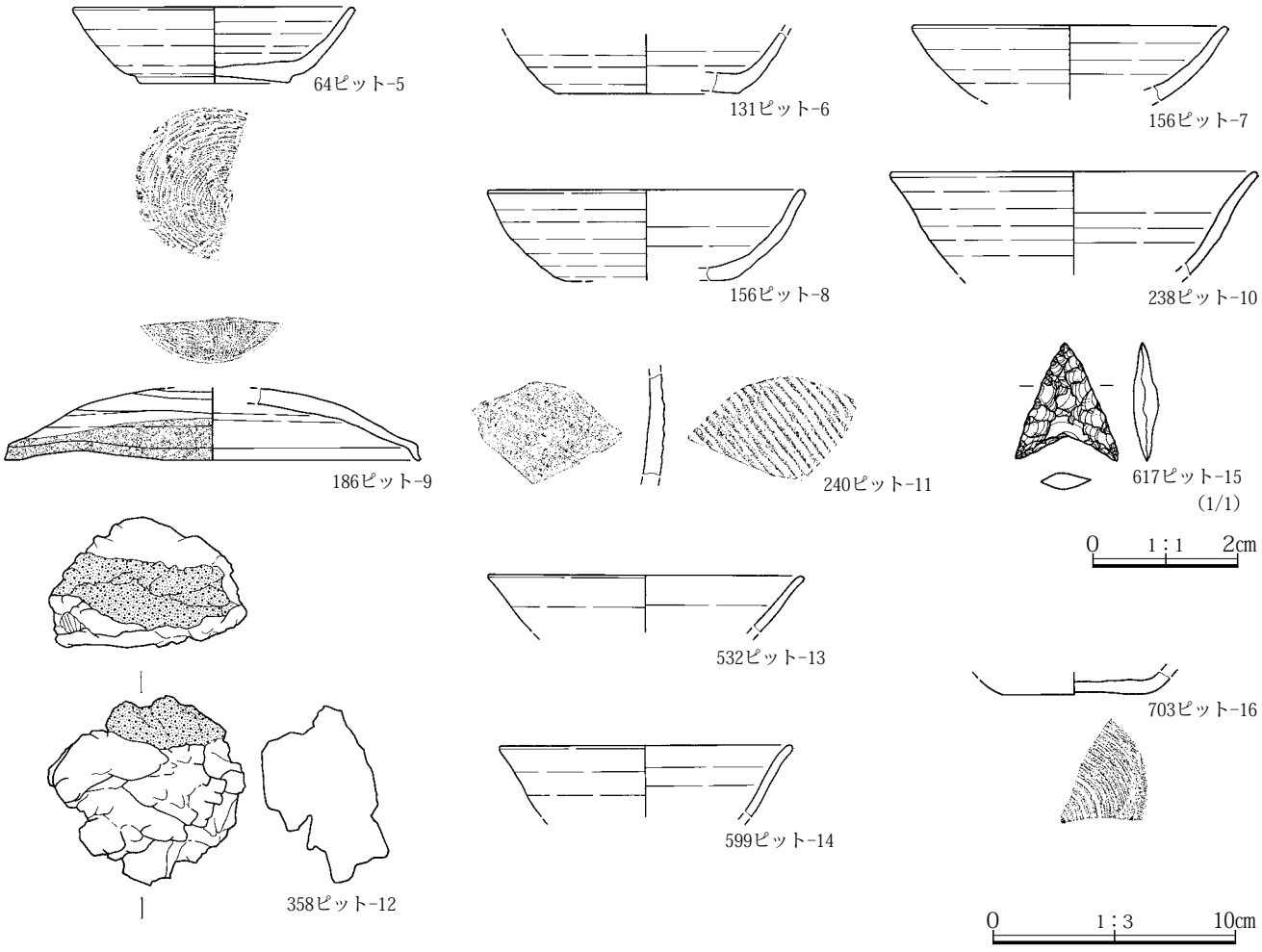
※茅畑地区西部に分布する集落のピット群の１層に比して締まりがある。

第87図　茅畑遺跡２面　15～21・27～34号土坑

土坑出土遺物



ピット出土遺物



第88図　茅畑遺跡２面　土坑・ピット出土遺物

(6)ピット

茅畑遺跡のピット群(第88～98図　PL.34～40・79)

概要：茅畑遺跡では、1726基のピットを調査した。そのうち1086基は、調査区西部の傾斜地にある。一方640基は、調査区東部の丘陵地帯にある。本調査区は、西部が、集落を形成する生活域、東部は、古墳があるかつての墓域と、その性格を異にする。それぞれの地域におけるピットの役割について考える。

※ここでは、傾斜地にある５号溝(１面)以西を西部とする。

茅畑遺跡西部のピット群

概要：本調査区においては、住居が４軒、掘立柱建物が18棟確認されており、集落が形成されていたと考えられる。調査した1086基のピットは、集落周辺を中心に本調査区全体に分布している。

茅畑遺跡西部は、全体的に傾斜地を呈している。細かく見ていくと東部は傾斜が急で、中央部はやや緩やかな台地になり、西部にかけて傾斜が急になる。住居群は、中央の台地部分に位置している。掘立柱建物は、住居群を囲むように位置しており、傾斜の緩急をとわず位置している。ピット群は、掘立柱建物の内外に万遍なく存在する。建て替えも含めて、掘立柱建物の柱穴であったと推察されるピットも多数見られた。ただし、柱穴の規模形状、柱間、建物全体の形状から、掘立柱建物の復元に至らなかったピットも数多い。

また、本調査区においては、古代になって集落が発生しているものであり、尾根違いの鴫上Ⅰ遺跡のように、弥生時代からの集落は形成されていなかった。やや急な傾斜地である本調査区においては、集落の意図的な形成に至るまで、時を経る必要があったと思われる。傾斜地におけるピット群を含む集落の形成は、自然地形を生かしたというより、それを克服し、積極的に生活を展開していた結果であると思われる。

詳細については第38表に記載した。

位置：ピットのほとんどは掘立柱建物の内部と周辺、及び住居の周辺に集中して分布している。

重複：38号ピットが967号ピットに後出している。69号ピットは70号ピットに後出している。97号ピットは98号ピットに後出している。120号ピットは121号ピットに後出している。126号ピットは125号ピットに後出している。129号ピットは128号ピットに後出している。133号ピットは134号ピットに後出している。171号ピットは172号ピットに後出している。181号ピットは182号ピットに後出している。245号ピットは244号ピットに後出している。271号ピットと272号ピットは重複しており新旧関係は明瞭でない。282号ピットは281号ピットに後出している。287号ピットは286号ピットに後出している。327号ピットは326号ピットに後出している。436号ピットは435号ピットに後出している。463号ピットは464号ピットに後出している。466号ピットは465号ピットに後出している。471号ピットは472号ピットに後出している。491号ピットは492号ピットに後出している。538号ピットは539号ピットに後出している。670号ピットは671号ピットに後出している。683号ピットは684号ピットに後出している。698号ピットは697号ピットに後出している。753号ピットは754号ピットに後出している。763号ピットは762号ピットに後出している。852号ピットは853号ピットに後出している。884号ピットは883号ピットに後出している。907号ピットは906号ピットに後出している。918号ピットは919号ピットに後出している。933号ピットは934号ピットに後出している。1016号ピットと1017号ピットは重複しており新旧関係は明瞭でない。1018号ピットと1019号ピットは重複しており新旧関係は明瞭でない。1094号ピットと1095号ピットは重複しており新旧関係は明瞭でない。1132号ピットは1131・1133号ピットに後出している。1131・1133号ピットの新旧関係は明瞭でない。

規模形状：多くが小型で楕円形を呈する。これらのピット群は、建物の柱穴である可能性が高いものであるが、復元には至らないことが多かった。

埋没土：埋没土は一様ではないが、主に暗褐色土、黒褐色土である。全体的に土層は類似している。稀に浅黄橙色土で埋没しているものもある。暗褐色土ブロック、ロームブロック、As-C軽石を含むことが多い。As-YPを含む場合もある。稀に焼土粒子、炭化物粒子を含む。軟質土及び締まりのある土も多数確認される。

その他：柱穴の可能性が高いという観点から特筆すべきピット66基について図示し、その原因を分類した結果を以下の通り解説する。

・柱痕が推測される形状で、柱穴であった可能性が高いものとして、148・292・303・400・409・548・578・

608・659・809・858・1010・1023号ピットがあげられる。
・形状が整っており深さもあることか、柱穴であった可能性が高いものとして、19・132・151・159・238・594・700・707・741・766・790・800・952・1062号ピット等があげられる。
・柱穴を新規に掘り直した様相が伺え、柱穴だった可能性が高いものとして、55・383・463・464・465・466号ピットがあげられる。
・同じ規模のピットが平行して並んでおり、住居に関連する造作の可能性があるものとして、240と241、244と245、254と255、673と674、679と43号掘立柱建物Ｐ３、924と925号ピットがあげられる。
・柱の元を固めた様相が伺え、柱穴であった可能性があるものとして、156・382・1131・1132・1133号ピットがあげられる。
・上部が削平を受けており、底部が形良く残存していると思われ、柱穴の可能性があるものとして、32・72・119・122・197・251・316・356・387・605・690・692・808・815・873・1030・1032号ピットが挙げられる。
遺物：64号ピットから須恵器１点(杯５)、131号ピットから須恵器１点(杯６)、156号ピットから須恵器２点(杯７・８)、238号ピットから須恵器１点(杯10)、240号ピットから須恵器１点(甕11)、532号ピットから灰釉陶器１点(椀13)、599号ピットから須恵器１点(杯14)、617号ピットから剥片石器１点(石鏃15)、703号ピットから須恵器１点(杯16)、186号ピットから須恵器１点(蓋９)、358号ピットから金属１点(鉄滓12)を図示した。遺構の時期におおよそ矛盾しない。ただし、石鏃は混入である。

図示した以外に、下記の通り、遺物が出土した。
Ｐ50：土師器(甕類１片)、Ｐ129：土師器(甕類１片)、Ｐ231：土師器(甕類１片)、Ｐ248：土師器(甕類１片)、Ｐ306：土師器(甕類１片)、Ｐ309：土師器(甕類１片)、Ｐ313：土師器(杯類１片)、Ｐ325：土師器(杯類１片)、Ｐ329：土師器(杯類１片)、Ｐ335：須恵器(杯類１片)、Ｐ344：土師器(甕類１片)、Ｐ367：土師器(甕類１片)、Ｐ389：土師器(甕類１片)、Ｐ413：須恵器(杯類１片)、Ｐ468：土師器(甕類１片)、Ｐ523：土師器(甕類２片)、Ｐ555：土師器(甕類１片)、Ｐ565：土師器(甕類１片)、Ｐ566：土師器(甕類４片)、Ｐ644：土師器(杯類１片)、Ｐ665：土師器(甕類２片)、Ｐ11：土師器(甕類１片)、Ｐ124：土師器(甕類１片)、Ｐ128：土師器(甕類４片)、須恵器(杯類１片)
Ｐ130：土師器(甕類３片)、Ｐ132：土師器(甕類５片)、Ｐ151：土師器(甕類１片)、須恵器(杯類１片)、
Ｐ156：土師器(杯類１片、甕類３片)、
Ｐ159：土師器(甕類１片)、Ｐ180：土師器(甕類２片)、Ｐ121：土師器(甕類１片)、Ｐ131：土師器(甕類１片)、Ｐ133：土師器(甕類１片)、土師器(杯類１片)、
Ｐ158：土師器(甕類１片)、Ｐ229：土師器(甕類２片)、Ｐ244：須恵器(杯類１片)、Ｐ245：土師器(甕類１片)、Ｐ250：土師器(甕類１片)、Ｐ254：土師器(甕類２片)、Ｐ255：土師器(杯類１、甕類２片)、須恵器(杯類１片)、Ｐ259：土師器(甕類１片)、Ｐ262：土師器(甕類２片)、Ｐ290：土師器(甕類１片)、Ｐ530：土師器(甕類１片)、Ｐ769：土師器(甕類１片)、Ｐ910：土師器(甕類５片)、Ｐ963：須恵器(杯類１片)、Ｐ984：須恵器(杯類１片)、Ｐ989：土師器(杯類１片)、Ｐ1092：須恵器(甕類１片)
所見：埋没土はAs-C軽石を含む。出土遺物は９世紀代のものである。掘立柱建物と同様におおむね古代以降に属すると考えられる。

茅畑遺跡東部のピット群

概要：この地域は、古墳が１基、道路が１条確認されている。また、640基のピットを調査した。

茅畑遺跡東部は、調査区北の区域外に最高地点を持つ丘陵地帯の南面にあたる。南面の中央には、古墳が位置している。ピット群は調査区全般にわたり確認されるが、特に、古墳以西に集中している様相が見られる。詳細を見ていくと、丘陵の南東面においては、ピットが散見するように確認され、丘陵の南面には、古墳とピット群が集中している。丘陵の南西面には、ピットが散見され、西側にある傾斜地である茅畑遺跡西部の集落まで、ピット検出の薄い状態が続く。ただし、重複関係よりピット群は古墳より新しいと考えられるが、時期差は明瞭でない。ピット群の中には、掘立柱建物の柱穴として可能性を否定できないものもあるが、柱穴の規模形状、柱間、建物全体の形状等、掘立柱建物を復元するための資料が見つからなかったのが実状である。

さらに、本調査区東部においては、茅畑遺跡西部、鴫上Ｉ遺跡のように、弥生時代から古代にかけての集落は

確認されていない。古墳の設置を契機に墓域として定着していたと思われる。ピット群は、古墳以後における営みの形跡だと推察される。

詳細については第38表に記載した。

位置：ピットのほとんどは、結果として１号古墳と１号道路の間に集中して分布している。この地域はかつて墓域であった可能性が高いが、後世の開拓によって削られており､その後は､道路の利用に関わって人の活動があったと思われる。

重複：1668号ピットと1669号ピットが重複しており、新旧関係は明瞭でない。1778号ピットと1779号ピットが重複しており、新旧関係は明瞭でない。1857号ピットは1856号ピットに後出している。

規模形状：多くが小型で楕円形を呈する。これらのピット群は、建物の柱穴である可能性も否定できないが、復元には至らなかった。

埋没土：埋没土は一様ではないが、主に暗褐色土、黒褐色土である。稀ににぶい黄褐色土で埋没している。全体的に土層は類似している。暗褐色土ブロック、ロームブロック､As-Cを含むことが多い｡As-YPを含む場合もある。稀に灰黄褐色土ブロックを含む。軟質土及び締まりのある土も多数確認される。

その他：柱穴の可能性が高いという観点から特筆すべきピット34基について図示し、その原因を分類した結果を以下の通り解説する。

・柱痕が推測される形状で、柱穴であった可能性が高いものとして、1318号ピットがあげられる。

・形状が整っており深さもあることから、柱穴であった可能性が高いものとして、1245・1275・1276・1279・1281・1317・1388・1459・1468・1511・1560・1605・1642・1644・1674・1708・1737・1739・1754・1790号ピットがあげられる。

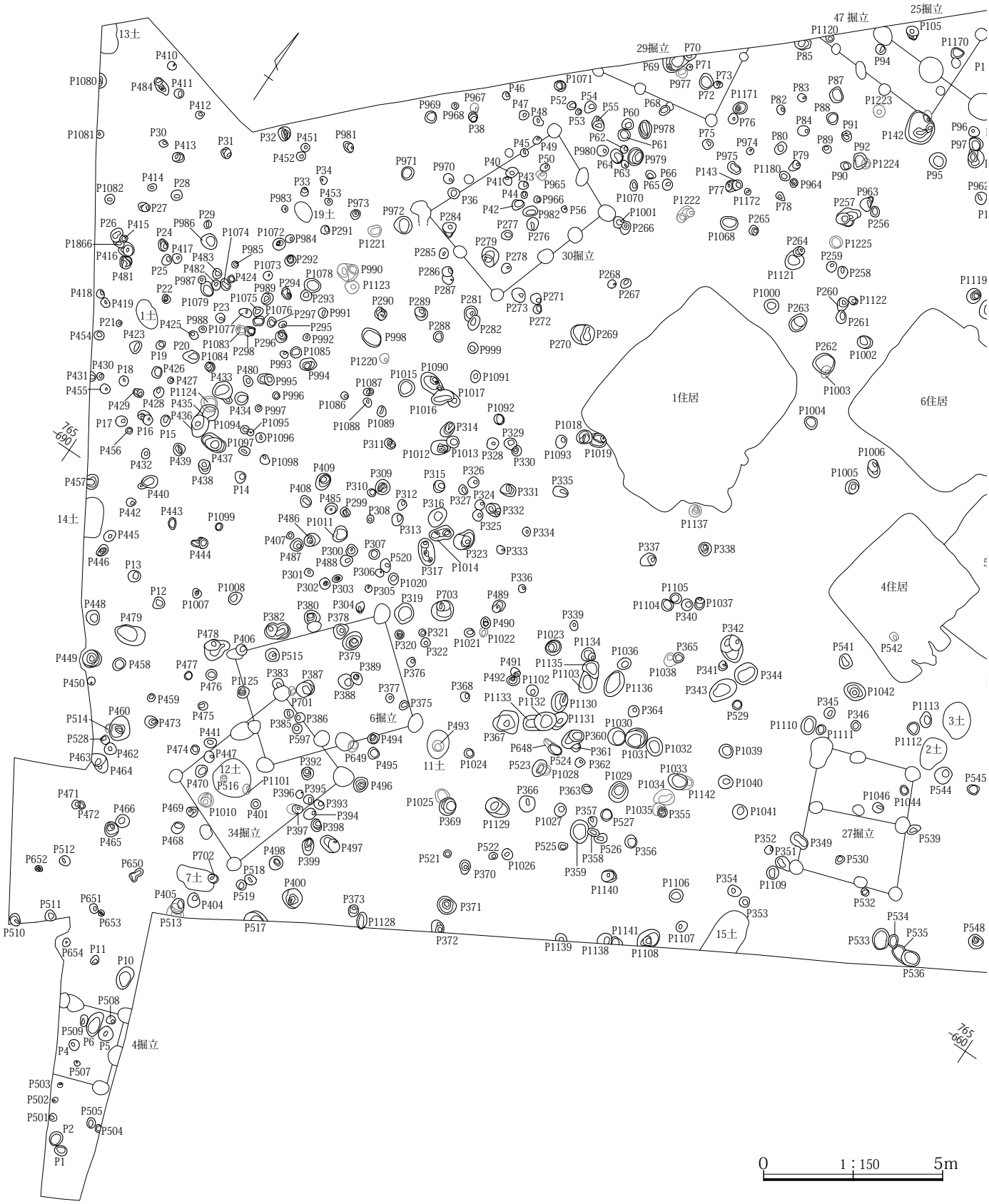
・柱穴を新規に掘り直した様相が伺え、柱穴だった可能性が高いものとして、1432･1436号ピットがあげられる。

・柱穴の底に礫を伴っており柱穴の可能性があるものとして、1774・1777号ピットがあげられる。

・上部が削平を受けており、底部が形良く残存していると思われ、柱穴の可能性があるものとして、1294・1316・1359・1441・1490・1596・1610・1843・1862号ピットがあげられる。

遺物：茅畑遺跡東部において非掲載遺物として、1399号ピットから土師器(甕類１片)、1417号ピットから土師器(甕類１片)、1423号ピットから土師器(甕類１片)、1862号ピットから土師器(甕類８片)が出土している。

所見：埋没土はAs-C軽石を含むことから、古代以降に属すると考えられる。古墳と関連付ける資料は得られなかった。



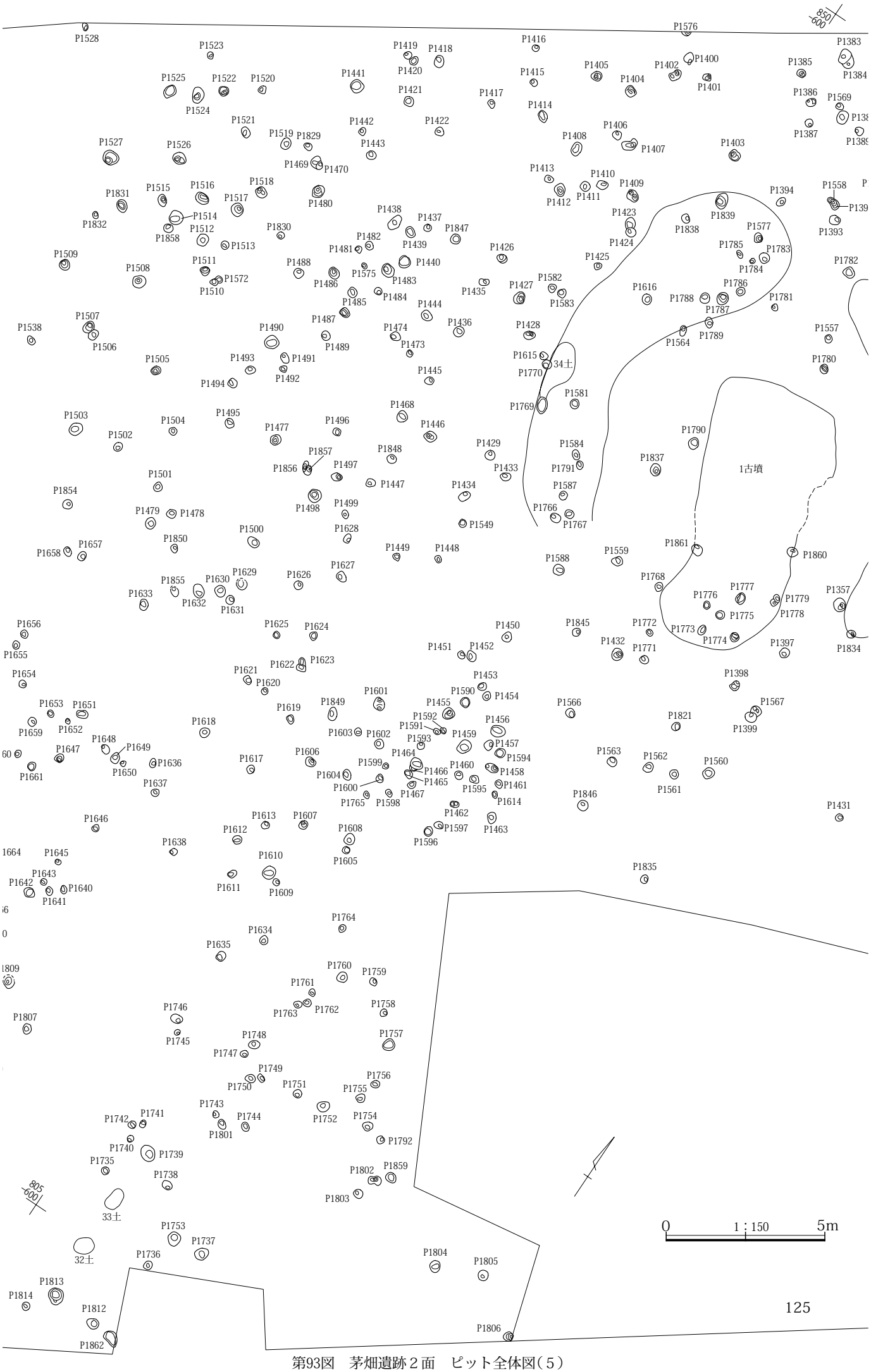
第89図　茅畑遺跡２面　ピット全体図（１）

第90図　茅畑遺跡２面　ピット全体図（２）

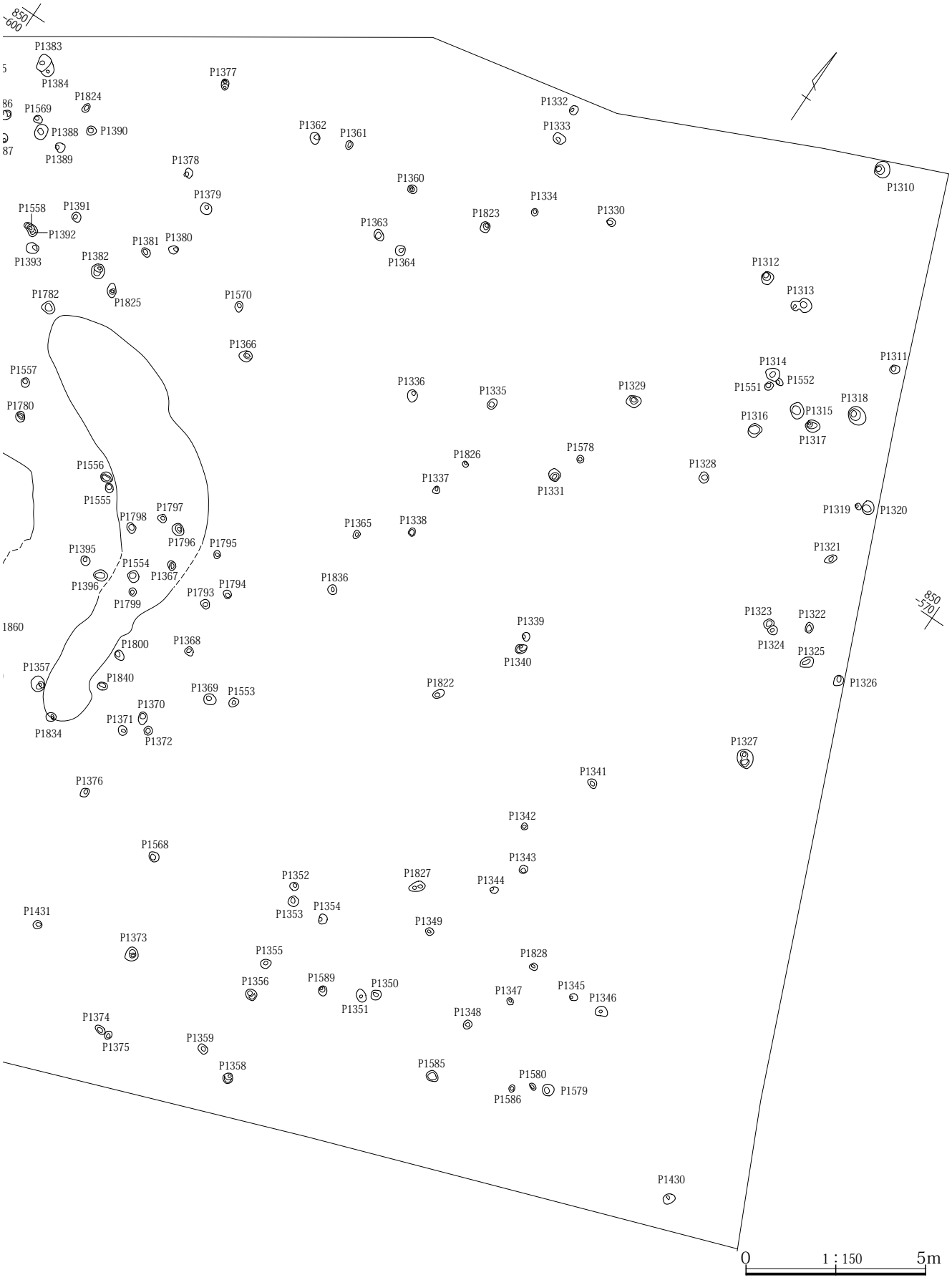
第91図　茅畑遺跡２面　ピット全体図（３）

123

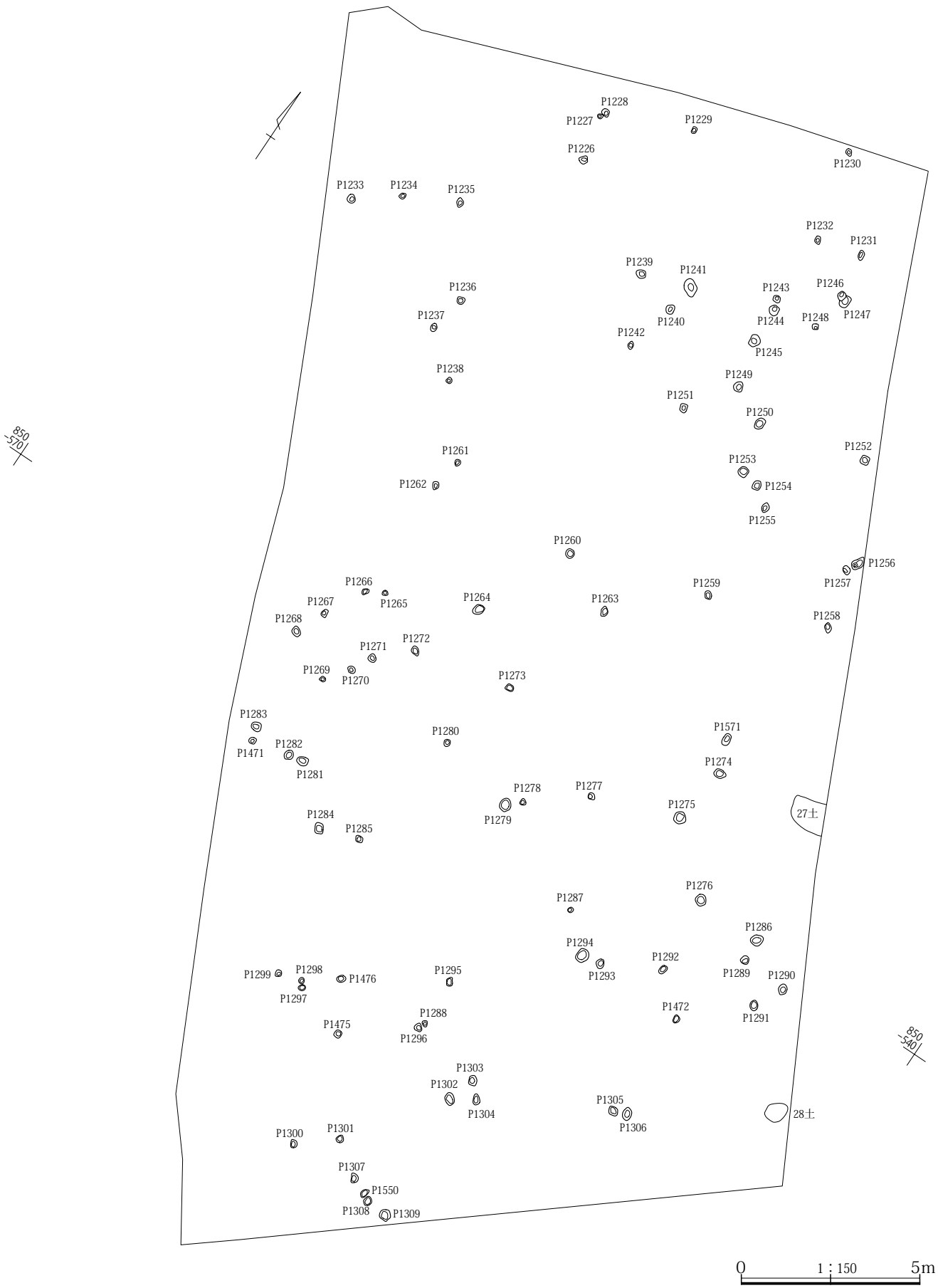
第92図　茅畑遺跡２面　ピット全体図（４）



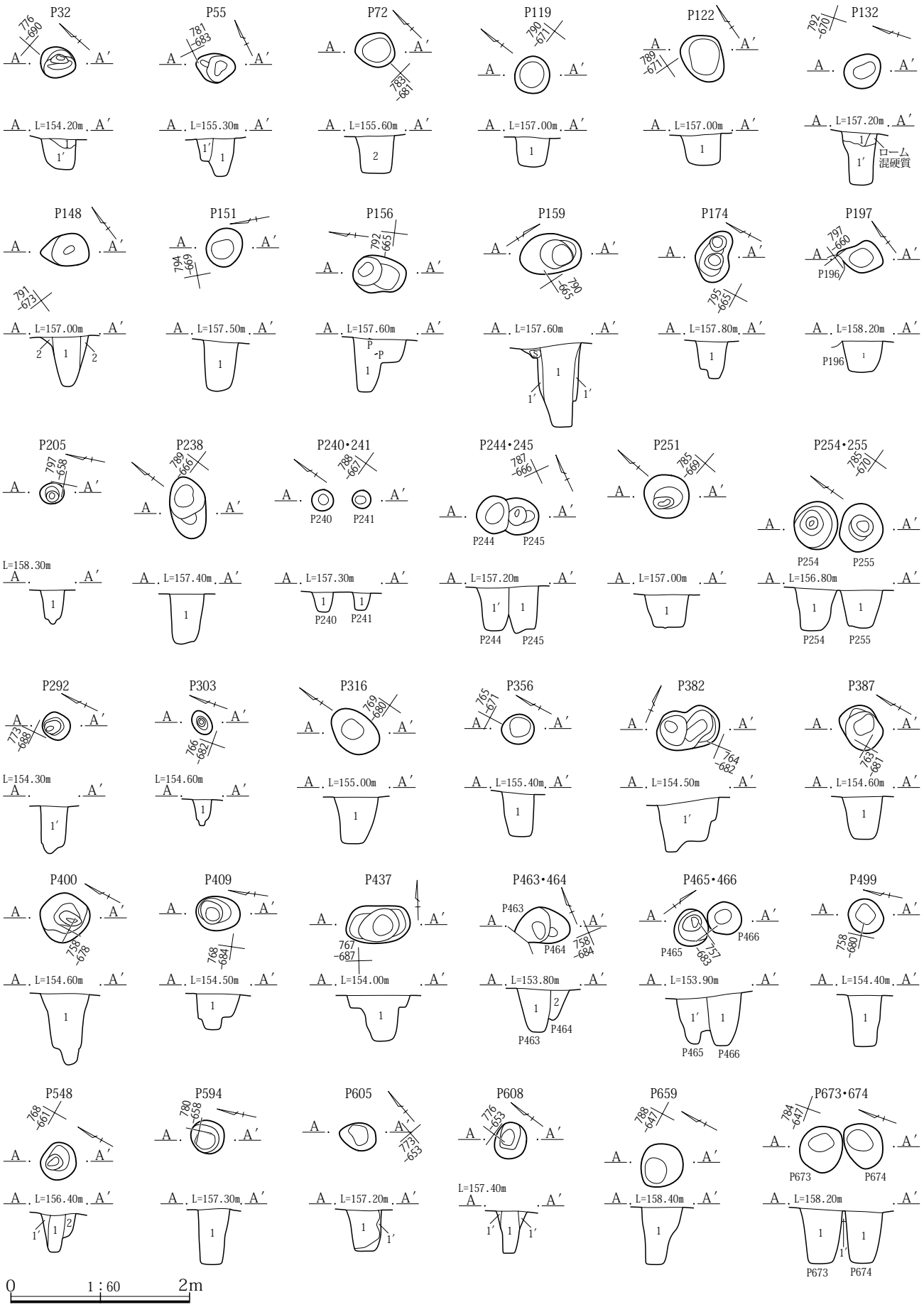
第93図　茅畑遺跡２面　ピット全体図（５）



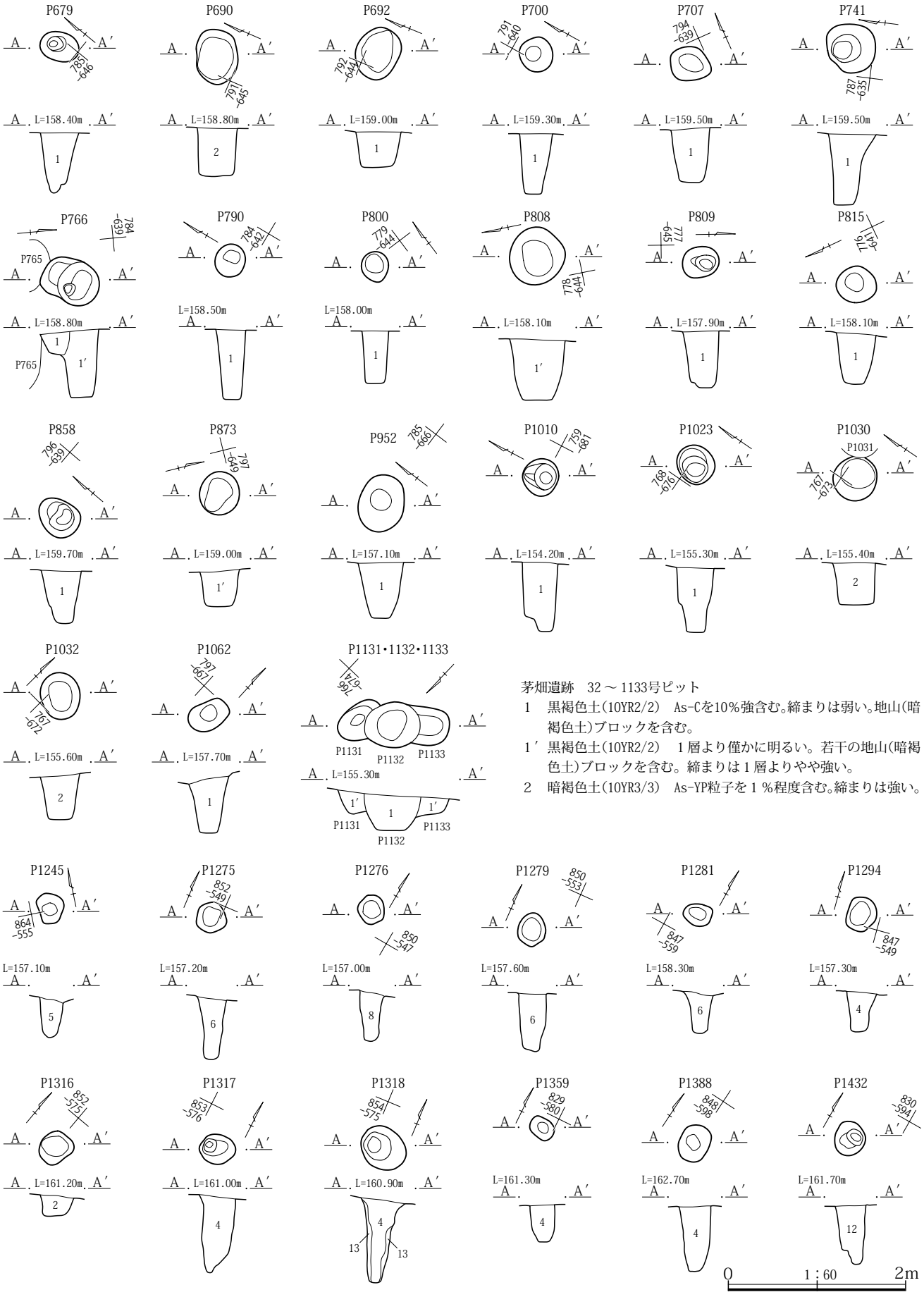
第94図　茅畑遺跡２面　ピット全体図（６）



第95図　茅畑遺跡２面　ピット全体図（７）



第96図　茅畑遺跡２面　ピット平・断面（１）



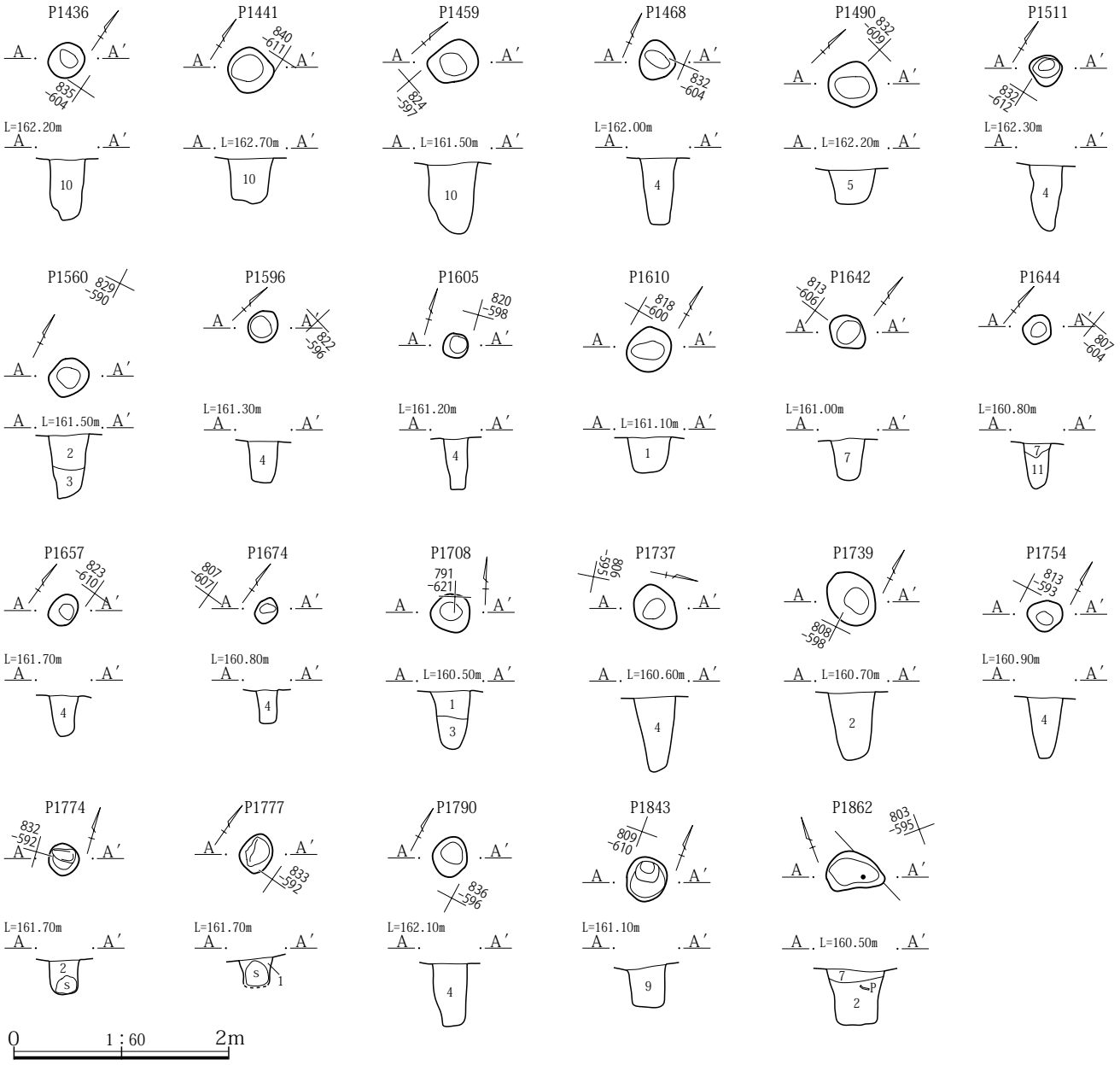
茅畑遺跡　32～1133号ピット

1　黒褐色土(10YR2/2)　As-Cを10％強含む。締まりは弱い。地山(暗褐色土)ブロックを含む。

1′黒褐色土(10YR2/2)　1層より僅かに明るい。若干の地山(暗褐色土)ブロックを含む。締まりは1層よりやや強い。

2　暗褐色土(10YR3/3)　As-YP粒子を1％程度含む。締まりは強い。

第97図　茅畑遺跡２面　ピット平・断面（２）



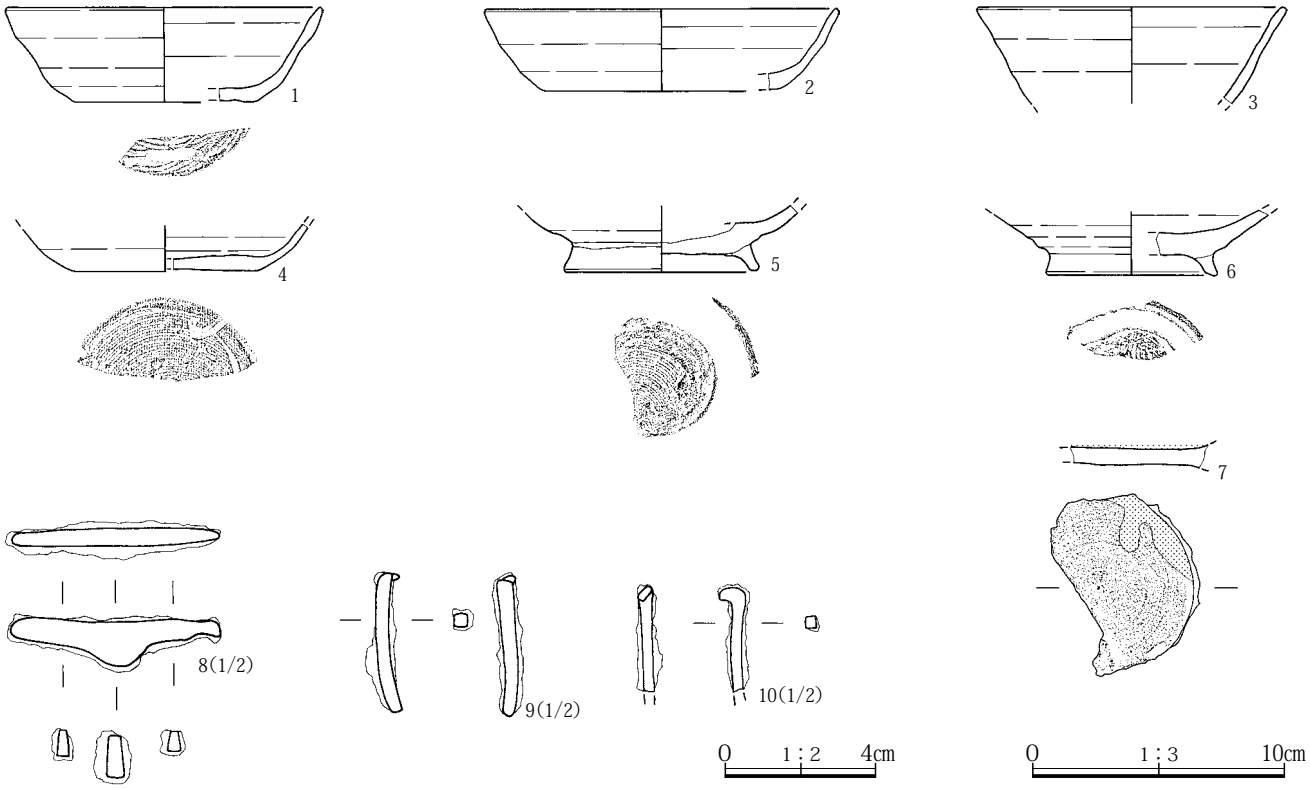
茅畑遺跡　1245 ～ 1862号ピット

1　暗褐色土(10YR3/3)　As-YP粒子を１％程度含む。締まりあり。
2　黒褐色土(10YR2/2 ～ 2/3)　As-Cを３～７％含む。地山(暗褐色土)ブロックとロームブロックを含む。※締まりあり。
3　暗褐色土(10YR3/4)　ロームブロック及びローム粒子を多く含む。締まりあり。
4　黒褐色土(10YR2/2 ～ 2/3)　As-Cを10 ～ 20％含む。地山(暗褐色土)ブロックを含む。※締まりあり。
5　黒褐色土(10YR2/2 ～ 2/3)　地山(暗褐色土)ブロックを含む。※締まりあり。
6　黒褐色土(10YR2/2)　As-Cを微量含む。ややもろい。
7　黒褐色土(10YR2/2)　As-Cを10 ～ 20％含む。ややもろい。
8　黒褐色土(10YR2/2)　As-Cを５％含む。ややもろい。
9　黒褐色土(10YR2/2)　As-Cを10 ～ 20％含む。締まり強い。
10　黒褐色土(10YR2/2 ～ 2/3)　As-Cを少量含む。地山(暗褐色土)ブロックを含む。※締まりあり。
11　黒褐色土(10YR2/2 ～ 2/3)　As-Cを微量含む。地山(暗褐色土)ブロックを含む。※締まりあり。
12　黒褐色土(10YR2/3)　As-Cを少量含む。地山(暗褐色土)ブロックを少量含む。
13　暗褐色土(10YR3/4)　ロームブロックを多く含む。
※茅畑地区西部に分布する集落のピット群の１層に比して締まりがある。

第98図　茅畑遺跡２面　ピット平・断面(３)

（7）遺構外出土の遺物（第99図　PL.79）

茅畑遺跡２面の調査中に、遺構に伴わない形で遺物が出土した。ここでは出土した遺物のうち、須恵器４点（杯１・２・３・４）、椀２点（５・６）、灰釉陶器１点（杯７）、鉄製品３点（８・９・10）を掲載した。出土遺物は９世紀代である。本調査面の時期におおむね矛盾しない。図示した以外に、土師器（杯類35片、甕類144片）、須恵器（杯類65片、甕類213片）、羽釜１片が出土している。また、５・６号住居埋没土から弥生後期２片24gが出土している。下層からの混入であると思われる。



第99図　茅畑遺跡２面　遺構外出土遺物

３　鴫上Ⅰ遺跡Ａ区の遺構と遺物

鴫上Ⅰ遺跡Ａ区の２面に属する遺構は、住居１軒であった。遺構は、調査区中央の谷へ張り出す舌状台地上にで確認された。周辺の削平が進んでおり、他に関連する遺構は確認できなかった。遺構の埋没土は、As-C軽石を含む黒褐色土であった。

（１）住居

本調査区で検出された住居は１軒である。１面におけるピット群が位置する台地上の緩斜面、西側から東の傾斜地に舌状に張り出した台地のほぼ中央に位置する。

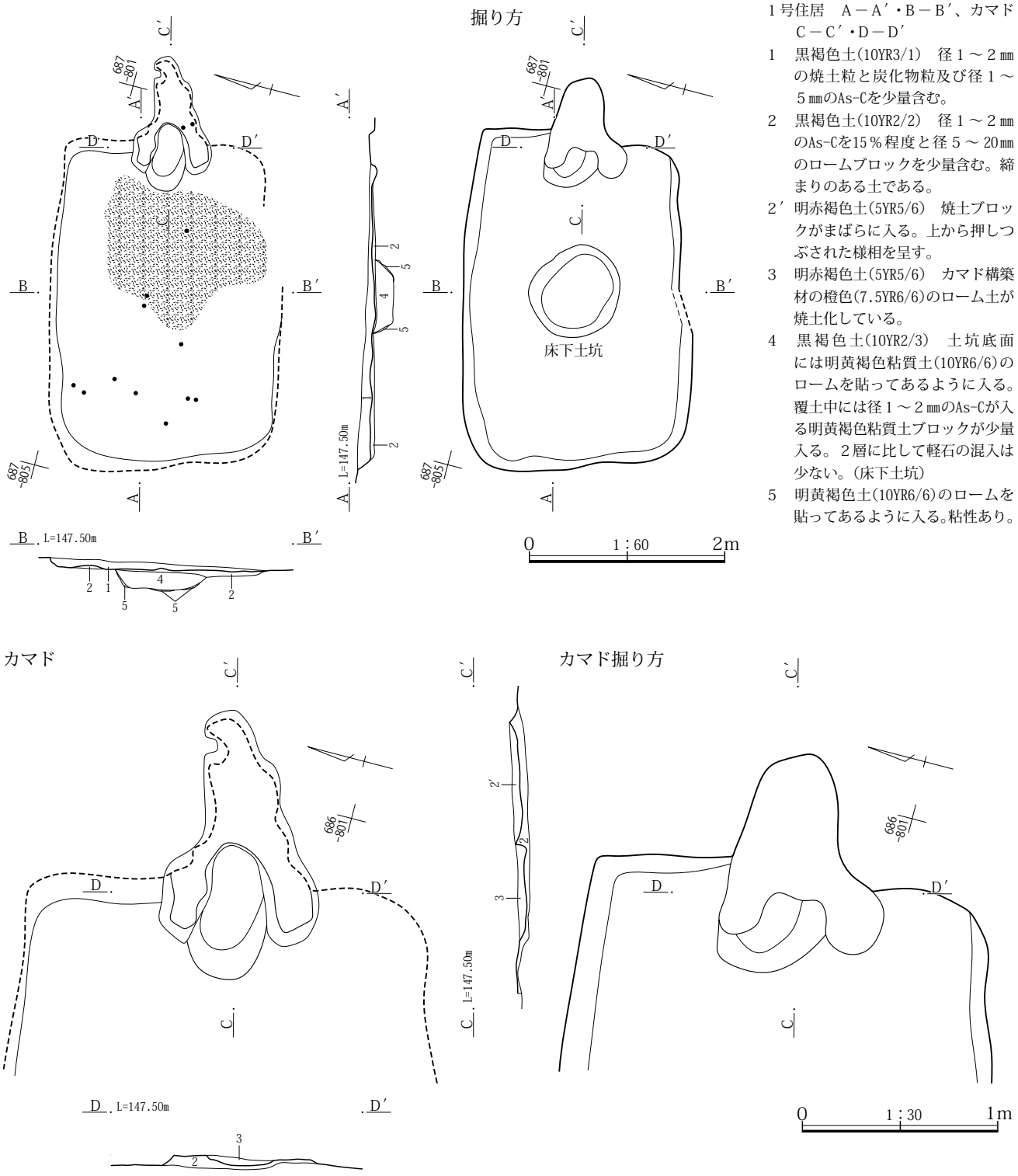
この時期に、台地上の土地において、１軒だけで生活を営んでいたとは考えにくく、当時は集落が構成されており、経年による削平の結果であると推察できる。調査された１軒も削平が進んだものであった。弥生時代から集落が続いており、人々の営みが継続してきた土地であったと思われる。

第100図　鴫上Ⅰ遺跡Ａ区２面　全体図

１号住居（第101図　PL.41）

調査区中央の傾斜地にある。残存状態は良好でない。**位置：**684～687・-800～-804にある。**規模形状：**主軸長3.38m、幅2.35m　東西に長い長方形を呈している。各辺は外側にやや膨らんでいる。西辺に対して東辺がやや短い。　**埋没土・壁：**黒褐灰色土で埋没している。焼土粒、炭化物粒、As-C軽石を少量含む。一層で一気に埋没しており、人為的な埋め戻しであると思われる。壁高は0.01～0.11mである。　**方位：**Ｎ－75°－Ｅ　**面積：**〔6.54〕㎡　**床面：**南に傾斜している。多少の起伏を伴う。カマド焚口部から中央にかけて硬化面が確認できた。　**掘り方：**ほぼ全面に確認できた。住居北部に対して南部が深い。深さは、２～５㎝程である。**壁溝：**認められない。　**ピット（柱穴）：**認められない。**貯蔵穴：**認められない。　**床下土坑：**住居中央硬化面直下に床下土坑を認める。土坑底面に粘質土のロームを貼ってある。埋没土は、黒褐色土で、ロームブロック及びAs-C軽石が混入する。住居埋没土に対してAs-C軽石の混入は極めて少ない。長軸96㎝、短軸90㎝、深さ20㎝である。　**カマド：**東辺ほぼ中央に位置する。全長119㎝、幅79㎝、焚口幅37㎝、燃焼部幅34㎝である。煙道は壁外側に87㎝張り出している。燃焼部は、住居内から住居外にかけて位置している。火床上には支脚は確認されない。カマド構築材のロームが焼土化した土で埋没していた。両袖確認できたが、削平が進んでいた。締まりの強い黒褐色土で構成されていた、As-C軽石及びロームブロックを少量含む。右袖は焼土ブロックがまばらに混入していた。掘り方は、認められ、深さ２㎝程である。黒褐色土

で埋没しており、As-C軽石、ロームブロックを少量含んでいた。　**重複遺構：**なし。　**遺物：**住居西部から中央部にかけて及びカマドから散在するように遺物が出土したものの、図示できる遺物はなかった。非掲載遺物は、土師器(杯類１、甕類42片)、須恵器(杯類５片)の出土が確認されている。　**所見(帰属時期)：**甕類、杯類を主体とした９世紀代の住居であると推察されるが、明確に時期を比定する資料が得られなかった。



１号住居　Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′、カマドＣ－Ｃ′・Ｄ－Ｄ′

1　黒褐色土(10YR3/1)　径１～２㎜の焼土粒と炭化物粒及び径１～５㎜のAs-Cを少量含む。

2　黒褐色土(10YR2/2)　径１～２㎜のAs-Cを15％程度と径５～20㎜のロームブロックを少量含む。締まりのある土である。

2′明赤褐色土(5YR5/6)　焼土ブロックがまばらに入る。上から押しつぶされた様相を呈す。

3　明赤褐色土(5YR5/6)　カマド構築材の橙色(7.5YR6/6)のローム土が焼土化している。

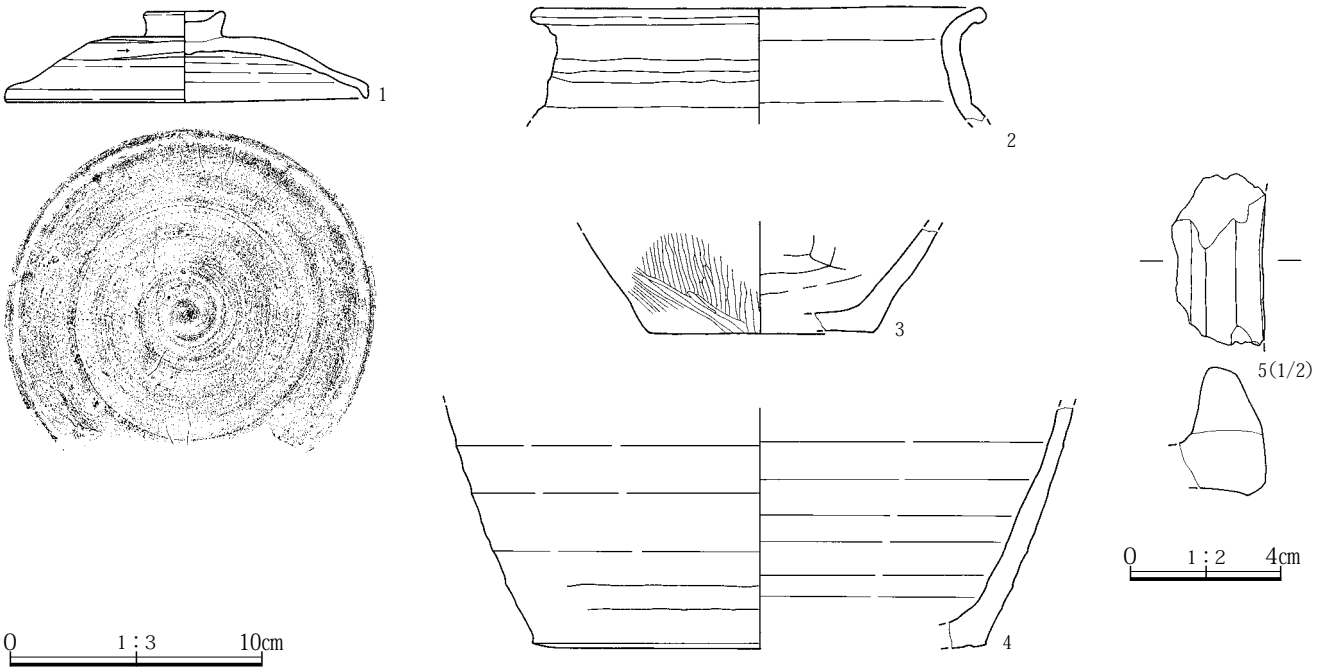
4　黒褐色土(10YR2/3)　土坑底面には明黄褐色粘質土(10YR6/6)のロームを貼ってあるように入る。覆土中には径１～２㎜のAs-Cが入る明黄褐色粘質土ブロックが少量入る。２層に比して軽石の混入は少ない。(床下土坑)

5　明黄褐色土(10YR6/6)のロームを貼ってあるように入る。粘性あり。

第101図　鴫上Ⅰ遺跡Ａ区２面　１号住居

（２）遺構外出土の遺物（第102図　PL.79）

鳴上Ｉ遺跡Ａ区２面の調査中に、遺構に伴わない形で遺物が出土した。ここでは出土した遺物のうち、土師器３点（甕２・３、土製品５）、須恵器２点（甕４、杯蓋１）を掲載した。図示した以外に、土師器（杯類７片、甕類146片）、須恵器（杯類39片、甕類12片）が出土している。



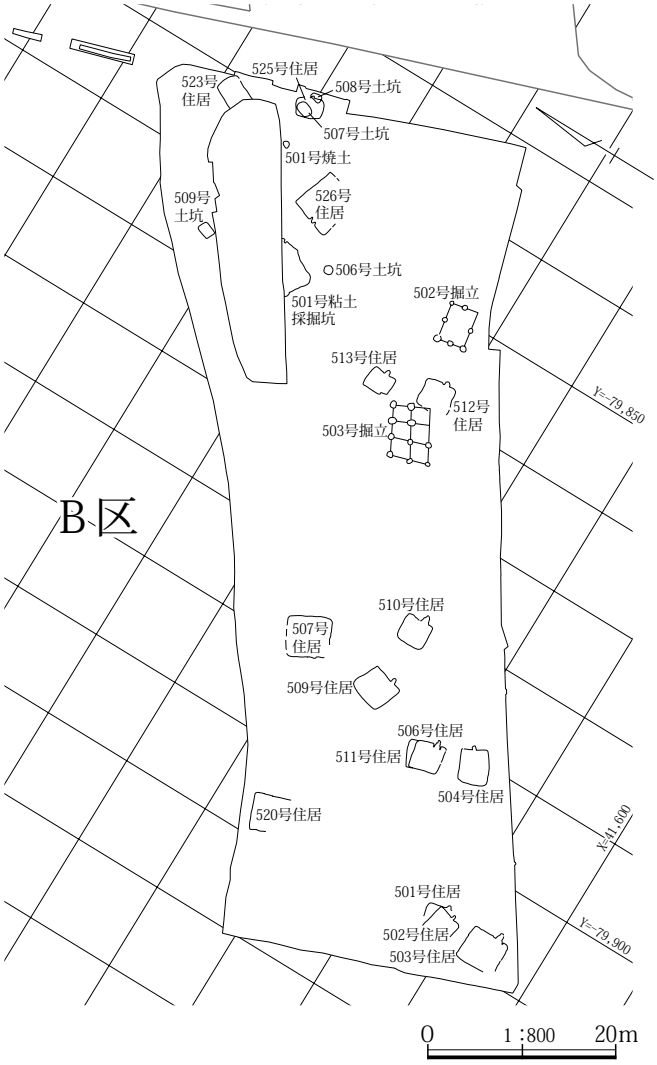
第102図　鳴上Ｉ遺跡Ａ区２面　遺構外出土遺物

4　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区の遺構と遺物

鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面に属する遺構は、住居15軒、掘立柱建物２棟、土坑４基、粘土採掘坑１基、焼土１基、ピット135基であった。遺構の分布は調査区全面に点在する。住居は、調査区の中央を境に西部と東部に集中していた。掘立柱建物は、中央の住居周辺に位置している。土坑及びピット群は、調査区の東に集中していた。住居を中心とした遺構は、いずれも南東に傾斜する緩斜面に位置している。遺構の確認面及び埋没土は、ロームブロック、ローム粒、白色軽石(As-C軽石)を含む黒褐色土及び暗褐色土である。古墳時代の住居が、中央部にある平安時代の住居群の北方に位置している。

(１)住居

本調査区における住居群は、全面に散見できる。細かく見ると、調査区中央より西の集落と東の集落に分けられる。東の集落周辺には掘立柱建物が確認できる。いずれも南東に下る緩やかな傾斜地に立地しており、当時の状況としては、条件の良い場所であったと推察できる。本調査区では、弥生時代から集落が続いており、経年における人々の営みが継続してきた土地であったと思われる。古墳時代に比定される住居は４軒で、奈良・平安時代に比定される住居は11軒であった。



第103図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　全体図

501号住居(第104図　PL.41・79)

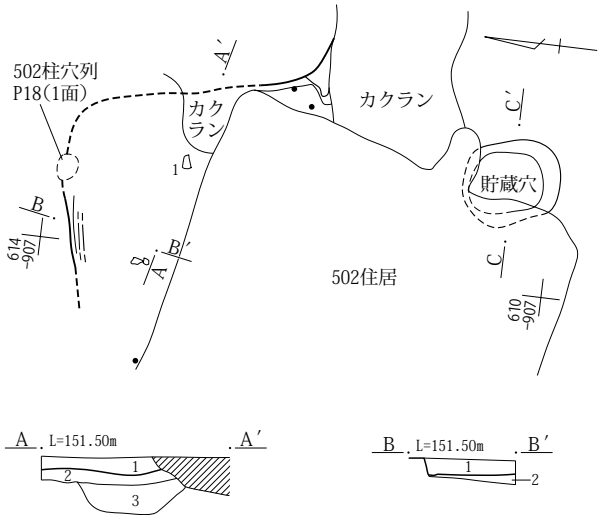
調査区南西隅の住居群内にある。502号住居と重複しており、中央から南部にかけて使用面が大きく壊されている。削平が進んでおり、残存状態は良好でない。全容が明瞭でない。

位置：611～613・-905～-907にある。

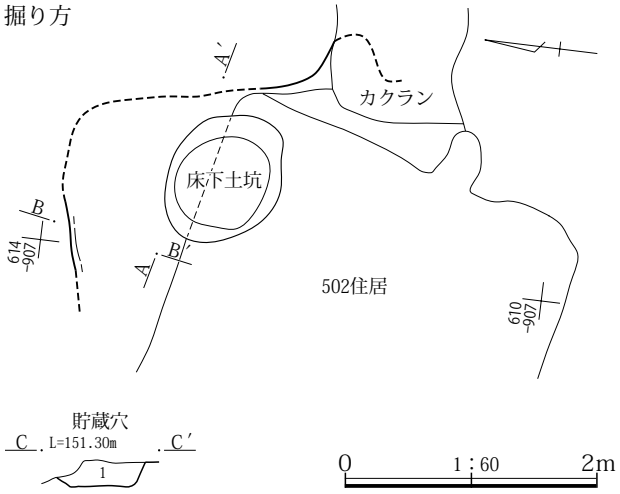
規模形状：主軸長(1.25)m、幅(2.16)mである。北辺、東辺は直線的である。方形を呈していると思われる。

埋没土・壁：暗褐色土で埋没している。ロームブロック・粒を少量含む。締まりがあり、粘性はない。一層で一気に埋没しており人為的な埋め戻しであると思われる。壁高は0.07～0.13mである。　**方位：**N－78°－E　**面積：**(1.81)㎡　**床面：**調査できた範囲では南北方向は傾斜がなく平坦である。　**掘り方：**北東部の調査できた範囲では確認できた。褐色土が埋没しており、締まり粘性がなく、不均質である。深さは、３～８㎝程である。　**壁溝：**北辺に確認できた。埋没土は、住居本体の埋没土に準ずる。幅８㎝、深さ３㎝程である。　**ピット(柱穴)：**認められない。　**貯蔵穴：**南東隅壁直下と推定される位置で窪みが確認された。配置と規模より貯蔵穴と思われる。埋没土は、極暗褐色土である。ロームブロックと焼土ブロックを不均等に含み締まりがある。粘性はない。長軸80㎝、短軸62㎝、深さ20㎝である。　**床下土坑：**北東部東壁直下に窪みを確認した。位置と規模より床下土坑と思われる。暗褐色土で埋没している。ロームブロックを多量に含む。締まりはなく粘性はある。長軸113㎝、短軸89㎝、深さ22㎝である。　**カマド：**東辺中央やや南寄りに位置すると思われる。全長、幅、焚口幅、燃焼部幅は不明である。煙道は確認されない。削平が進んでおり、左袖の一部が確認された。袖材は粘質土である。　**重複**

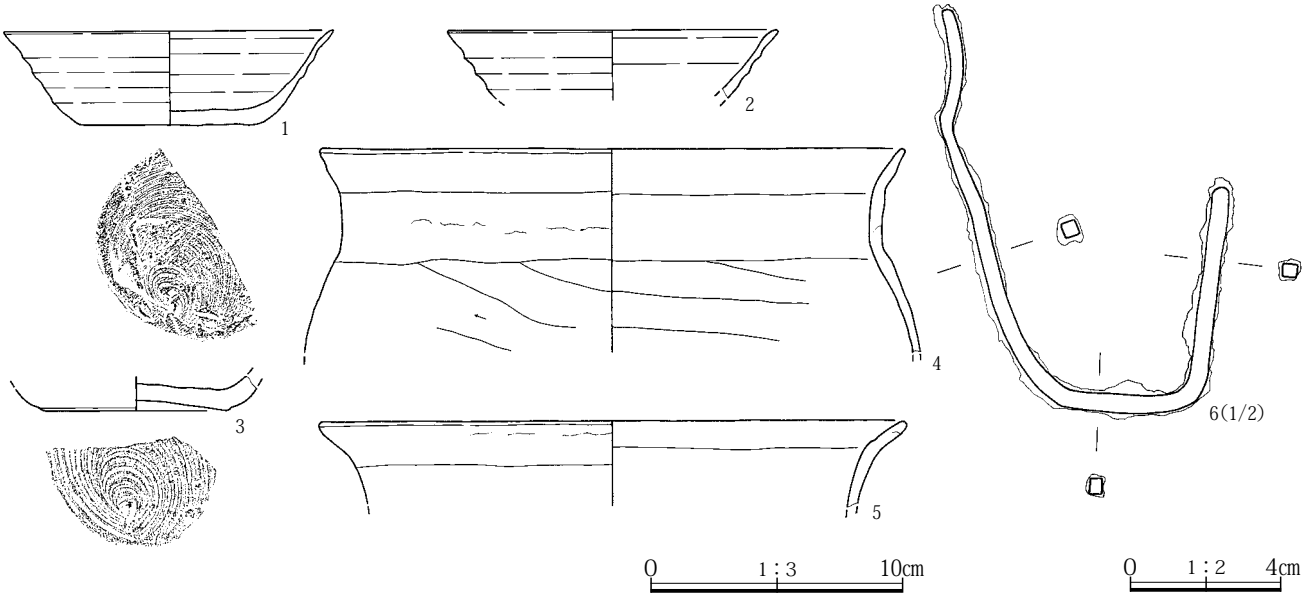
遺構:502号住居、502号柱穴列(１面)より古い。　**遺物:**土師器２点(甕２点)、須恵器３点(杯３点)、鉄製品１点を図示した。住居北東部からカマドにかけて散在するように遺物が出土した。須恵器、杯(２)は掘り方埋没土、杯(３)はカマド掘り方からの出土である。これらは本住居に伴うと考えられる。土師器、甕(４・５)は埋没土からの出土である。須恵器、杯(１)は床上９㎝からの出土である。これらが本住居に伴う出土であるか明瞭でない。鉄製品(６)は、貯蔵穴埋没土からの出土であった。図示した以外に、土師器(甕類18片)、須恵器(杯類２片)が出土している。　**所見(帰属時期)：**土師器甕類、須恵器杯類を主体とした９世紀第２四半期の住居であると考えられる。埋没土内の遺物は掲載した遺物と時期的に差の少ないものである。



501号住居　Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′
1　暗褐色土(10YR3/1)　ロームブロック若干(１～３％)含む。締まりややあり、粘性なし。
2　褐色土(10YR4/4)　ローム粒子溶け込み多量(15～25％)、ロームブロック大量(30～50％)に含む。締まりややあり、粘性あまりなし。(貼床相当)
3　暗褐色土(10YR3/3)　ロームブロック多量(30～50％)に含む。締まりあまりなく、粘性ややあり。(床下土坑)



501号住居　貯蔵穴　Ｃ－Ｃ′
1　極暗褐色土　ロームブロックと焼土ブロックを少量(５～10％)不均質に含み、上位位置に金属片、土器片含む。上位面は攪乱の可能性あり。締まりややあり、粘性あまりなし。



第104図　鳴上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　501号住居

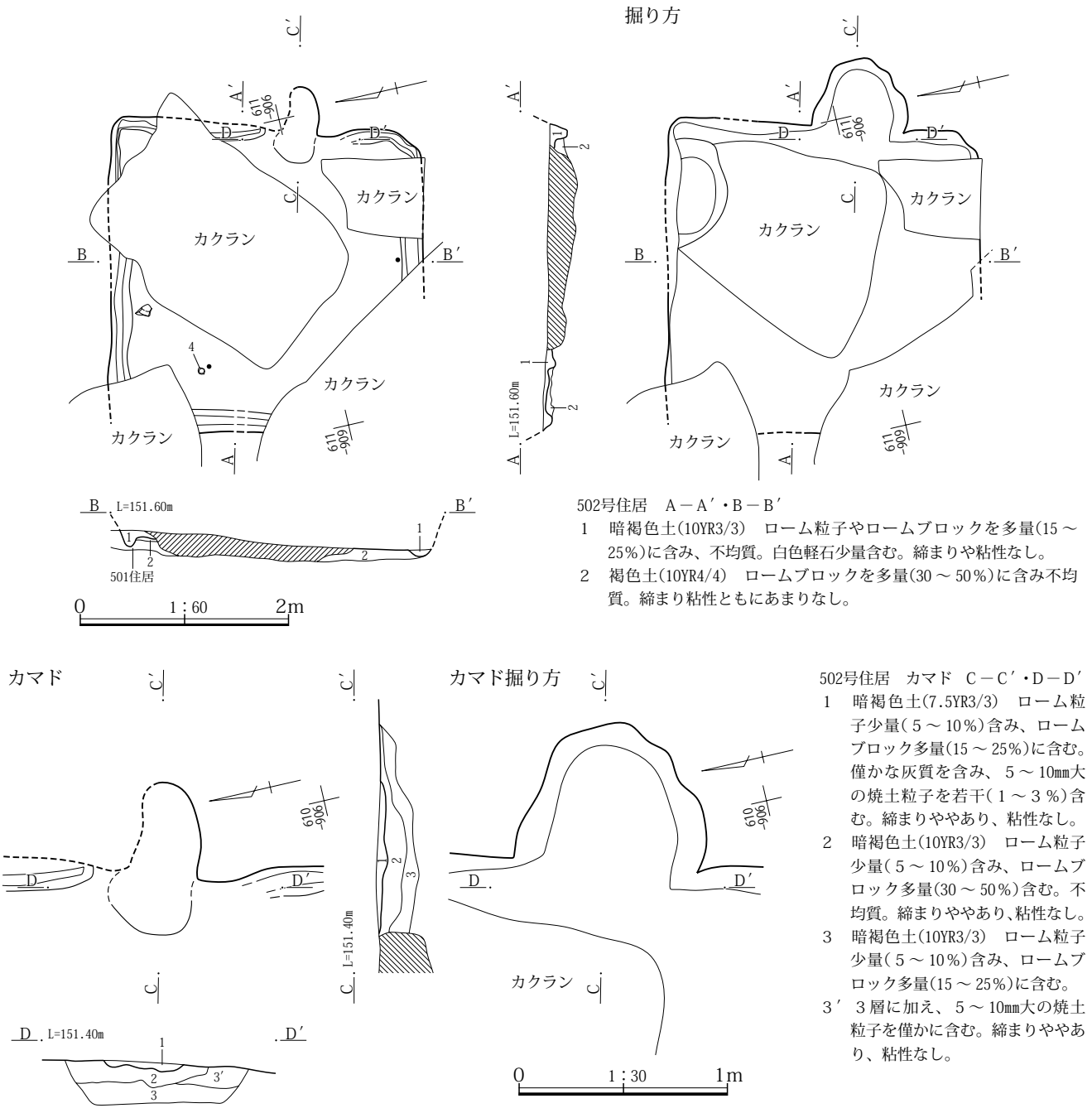
502号住居(第105・106図　PL.42)

調査区南西隅の住居群内にある。501号住居と重複している。全体的に削平が進んでおり、残存状態は良好でないため全容が明らかでない。

位置：609 ～ 613･-905 ～ -908にある。

規模形状：主軸長2.95m、幅3.00mである。各辺直線的である。壁は削平され、残存が少ない。整った正方形を呈していると思われる。　**埋没土・壁：**暗褐色土で埋没している。ロームブロック・粒子を多量に不均質に含む。白色軽石少量含む。締まりや粘性はない。確認できた範囲では、同じ土で一気に埋没しており、人為的な埋め戻しであると思われる。壁高は0.01 ～ 0.13mである。　**方位：**Ｎ－106°－Ｗ　**面積：**〔6.88〕㎡　**床面：**南東方向に傾斜している。高低差は10㎝程ある。起伏が確認できる。

掘り方：調査できた範囲では確認できた。埋没土は、褐色土であり、ロームブロックを多量に含み不均質である。締まりや粘性はない。深さは、３～７㎝程である。　**壁**



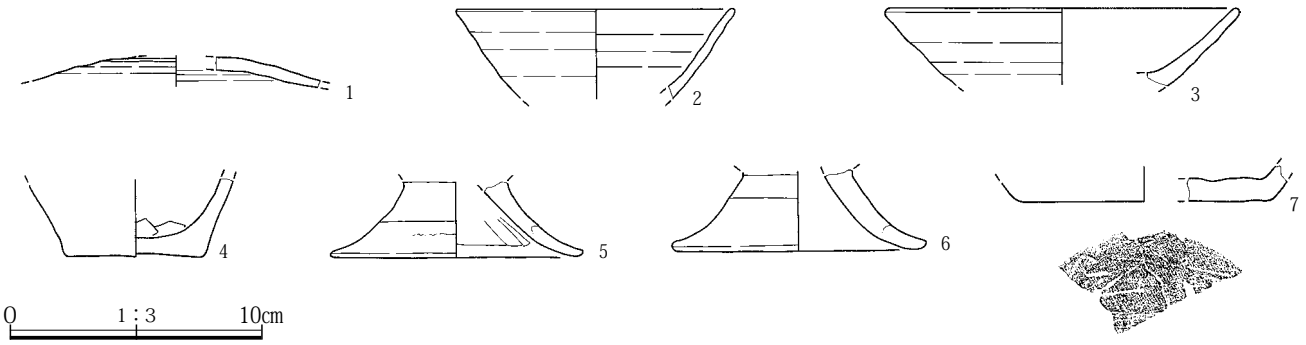
502号住居　Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′
1　暗褐色土(10YR3/3)　ローム粒子やロームブロックを多量(15 ～ 25%)に含み、不均質。白色軽石少量含む。締まりや粘性なし。
2　褐色土(10YR4/4)　ロームブロックを多量(30 ～ 50%)に含み不均質。締まり粘性ともにあまりなし。

502号住居　カマド　Ｃ－Ｃ′・Ｄ－Ｄ′
1　暗褐色土(7.5YR3/3)　ローム粒子少量(５～10%)含み、ロームブロック多量(15 ～ 25%)に含む。僅かな灰質を含み、５～10㎜大の焼土粒子を若干(１～３%)含む。締まりややあり、粘性なし。
2　暗褐色土(10YR3/3)　ローム粒子少量(５～10%)含み、ロームブロック多量(30 ～ 50%)含む。不均質。締まりややあり、粘性なし。
3　暗褐色土(10YR3/3)　ローム粒子少量(５～10%)含み、ロームブロック多量(15 ～ 25%)に含む。
3′　３層に加え、５～10㎜大の焼土粒子を僅かに含む。締まりややあり、粘性なし。

第105図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　502号住居

溝：各辺認められた。埋没土は住居本体の埋没土に準じている。北辺の壁溝は、幅４～16㎝、深さ10㎝程である。東辺の壁溝は、幅８～11㎝、深さ12㎝程である。南辺の壁溝は、幅26㎝、深さ７㎝程である。西辺の壁溝は、幅11～14㎝、深さ７㎝程である。　**ピット（柱穴）：**確認されない。　**貯蔵穴：**確認されない。　**カマド：**東辺中央やや南寄りに位置する。削平されており残存状態は良好でない。残存全長73㎝、残存幅38㎝、焚口幅は不明、燃焼部幅は不明である。煙道は確認されない。燃焼部は、住居内から壁外にかけてある。袖は確認できなかった。掘り方は、火床下に深さ16㎝前後の掘り込みが確認でき、埋没土は、暗褐色土である。ロームブロックを多量に含み不均質である。締まりがあり粘性はない。　**重複遺構：**501号住居より新しく、502号柱穴列（１面）より古い。

遺物：土師器３点（小型甕１点、台付甕２点）、須恵器４点（杯２点、杯蓋１点、甕１点）を図示した。住居北西部及び南部から散在するように遺物が出土した。土師器、小型甕（４）は床直上、土師器、台付甕（５・６）、須恵器、杯（３）はカマド埋没土から出土した。これらは、本住居に伴うものと思われる。須恵器、杯（２）、杯蓋（１）、甕（７）は埋没土から出土した。これらは、本住居に伴うものであるか明瞭でない。図示した以外に、土師器（甕類34片）、須恵器（杯類10片）が出土している。また、下層からの混入である弥生土器１片（31ｇ）が出土している。　**所見（帰属時期）：**土師器甕類、須恵器杯類、甕類を主体とした９世紀後半の住居であると考える。埋没土内の遺物は床直上出土遺物と時期的に差の少ないものであった。



第106図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　502号住居出土遺物

503住居（第107～110図　PL.42・43・79）

調査区南西隅の住居群内にある。南西隅を攪乱に壊されているが、残存状態は良好である。

位置：603～608・-904～-909にある。

規模形状：主軸長3.97ｍ、幅4.46ｍである。各辺直線的である。東辺に対して西辺が若干長いと推定される。整った長方形を呈している。　**埋没土・壁：**黒褐色土一層で一気に埋没している。白色軽石を少量含み、締まりはなく粘性はある。人為的な埋め戻しであると思われる。壁高は0.10～0.31ｍである。　**方位：**Ｎ－92°－Ｅ　**面積：**〔14.42〕㎡　**床面：**南東方向に傾斜している。高低差は10㎝程と大きい。緩やかな起伏が確認される。カマド焚口部には焼土及び灰の分布が見られる。南西隅は攪乱により削平されている。　**掘り方：**ほぼ全面に確認できた。埋没土は、灰黄褐色土であり、ロームブロックを多量に含み下部は不均質である。締まりや粘性はない。深さは、16～23㎝程であり南東部が深い。　**壁溝：**全ての壁際に認められる。方面ごとの壁溝の規模及び埋没土の傾向は次の通りである。

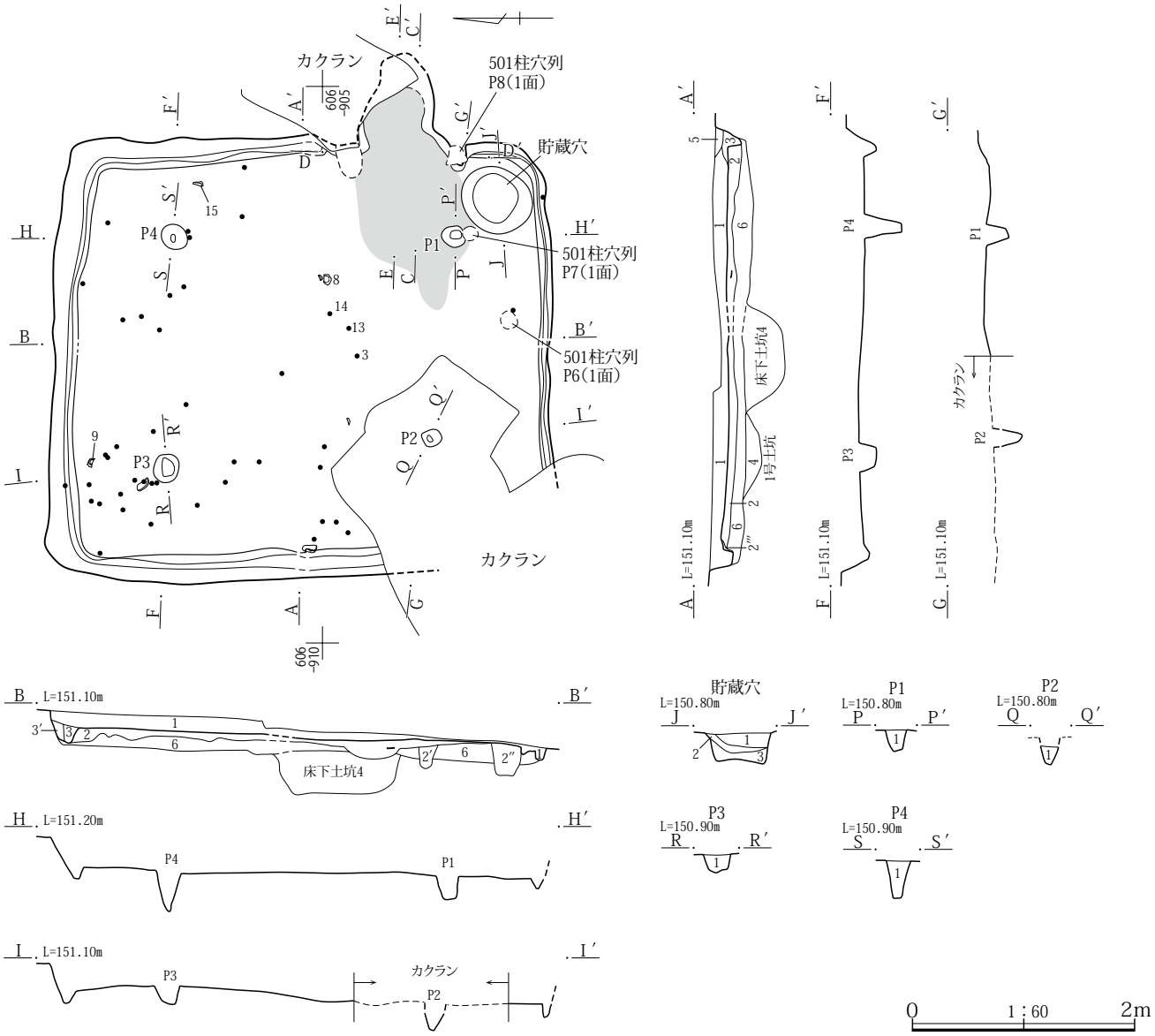
（幅×深さ㎝）

北辺の壁溝：６～12×14　東辺の壁溝：６～10×13

南辺の壁溝：８～12×９　西辺壁溝：８～18×10

黒褐色土主体で埋没している。ローム粒子、白色軽石を含み、不均質である。締まりはなく粘性はある。住居埋没土に準じており、同時期の埋没の可能性が高い。

ピット（柱穴）：全部で４基が確認された。Ｐ１・２・３・４は、規則的な主柱穴配置による柱穴であると思われる。各柱穴の規模及び埋没土は次の通りである。



503号住居　Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′

1　黒褐色土(10YR3/2)　ローム粒子やロームブロックを含まず、白色軽石を僅かに含む。締まりあまりなく、粘性ややあり。
2　灰黄褐色土(10YR4/2)　ローム粒子やロームブロックを多量(15～25%)に含む。締まり粘性ともにあまりなし。
2′　２層よりも、締まり若干弱く、白色軽石を多量(15～25%)に含む。
2″　２層よりも、締まり若干弱く、白色軽石を若干(１～３%)含む。
2‴　黄褐色土(10YR5/8)　ロームブロック。
3　黒褐色土(10YR3/2)　１層に加え、ローム粒子少量(５～10%)含む。
3′　１層に比して、ローム粒子多量(15～25%)に含み不均質。
4　黒褐色土(10YR3/2)　ローム粒子多量(15～25%)に含む。ロームブロック少量(５～10%)含み、不均質。締まりなく、粘性あまりない。
5　黒褐色土(10YR3/2)　締まりややあり、粘性なく、不均質。
6　灰黄褐色土(10YR4/2)　ローム粒子やロームブロックを多量(15～25%)に含み不均質。締まり粘性ともにあまりなし。

503号住居　貯蔵穴　Ｊ－Ｊ′

1　暗褐色土(10YR3/3)　炭化粒若干(１～３%)含む。締まりあまりなく粘性ややあり。
2　褐色土(10YR4/4)　ローム粒子少量(５～10%)含む。締まりあまりなく粘性ややあり。
3　褐色土(10YR4/4)　ローム粒子多量(15～25%)含む。締まりあまりなく粘性ややあり。

503号住居　Ｐ１　Ｐ－Ｐ′

1　暗褐色土(10YR3/3)　白色軽石を若干(１～３%)含む。締まりあまりなく、粘性ややあり。

503号住居　Ｐ２　Ｑ－Ｑ′

1　褐色土(10YR6/4)　地山ロームブロックを不均質に少量(５～10%)含む。締まり、粘性ともにややあり。

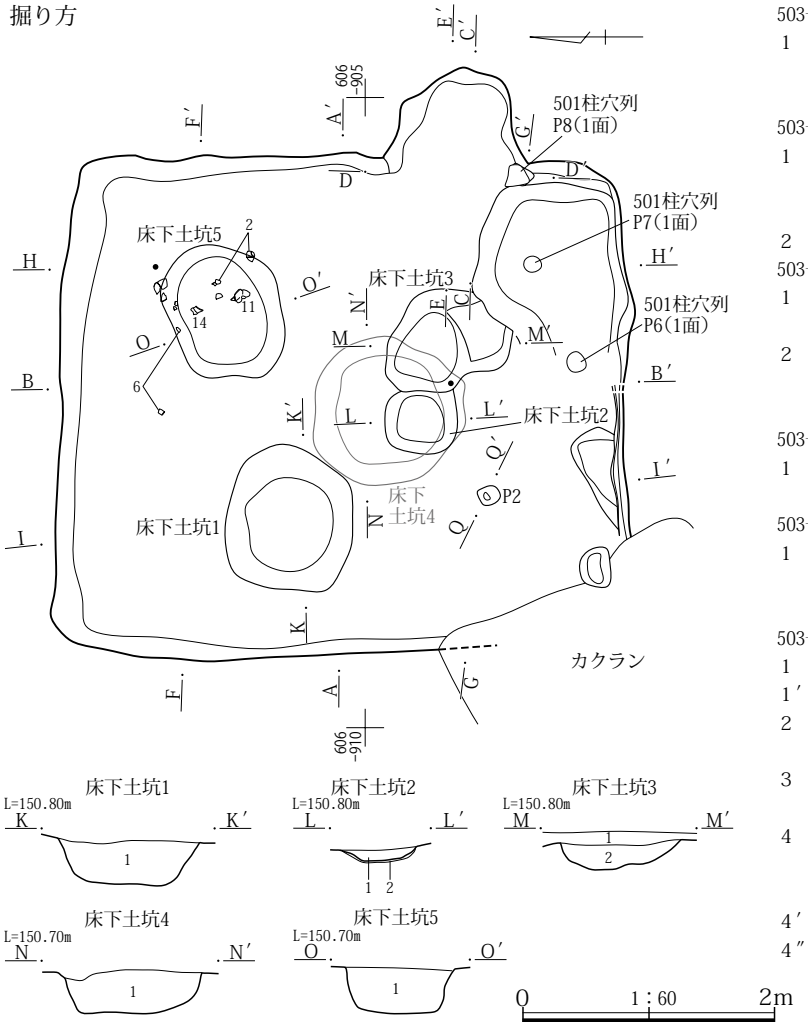
503号住居　Ｐ３　Ｒ－Ｒ′

1　暗褐色土(10YR3/3)　白色軽石及び炭化粒を若干(１～３%)含む。締まり粘性、ともにややあり。

503号住居　Ｐ４　Ｓ－Ｓ′

1　暗褐色土(10YR3/3)　ロームの溶け込み少しあり、炭化粒、焼土粒を若干(１～３%)含む。締まりあまりなく粘性ややあり。

第107図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　503号住居



503号住居　床下土坑１　Ｋ－Ｋ′

１　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ローム粒子多量(15～25%)に含み、焼土灰を若干(１～３%)含む。締まり、粘性ともにややあり。

503号住居　床下土坑２　Ｌ－Ｌ′

１　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ローム粒子多量(15～25%)に含み、焼土灰を若干(１～３%)含む。締まり、粘性あまりない。

２　黄橙色土(10YR7/6)　締まりややあり、粘性あまりない

503号住居　床下土坑３　Ｍ－Ｍ′

１　暗褐色土(7.5YR3/3)　焼土粒を若干(１～３%)含む。締まりあまりなく、粘性ややあり。

２　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ローム粒子多量(15～25%)に含み、焼土粒と灰を不均質に互層に若干(１～３%)含む。締まり、粘性あまりない。

503号住居　床下土坑４　Ｎ－Ｎ′

１　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ローム粒子多量(15～25%)含む。焼土粒含まない。締まり、粘性あまりない。

503号住居　床下土坑５　Ｏ－Ｏ′

１　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ローム粒子多量(15～25%)含む。土器片(平安)含む。締まり、粘性あまりない。

503号住居　カマド　Ｃ－Ｃ′・Ｄ－Ｄ′・Ｅ－Ｅ′

１　褐色土(7.5YR4/4)　締まりあまりなく、粘性ややあり。

１′　１層に比して、不均質。ロームブロック含む。

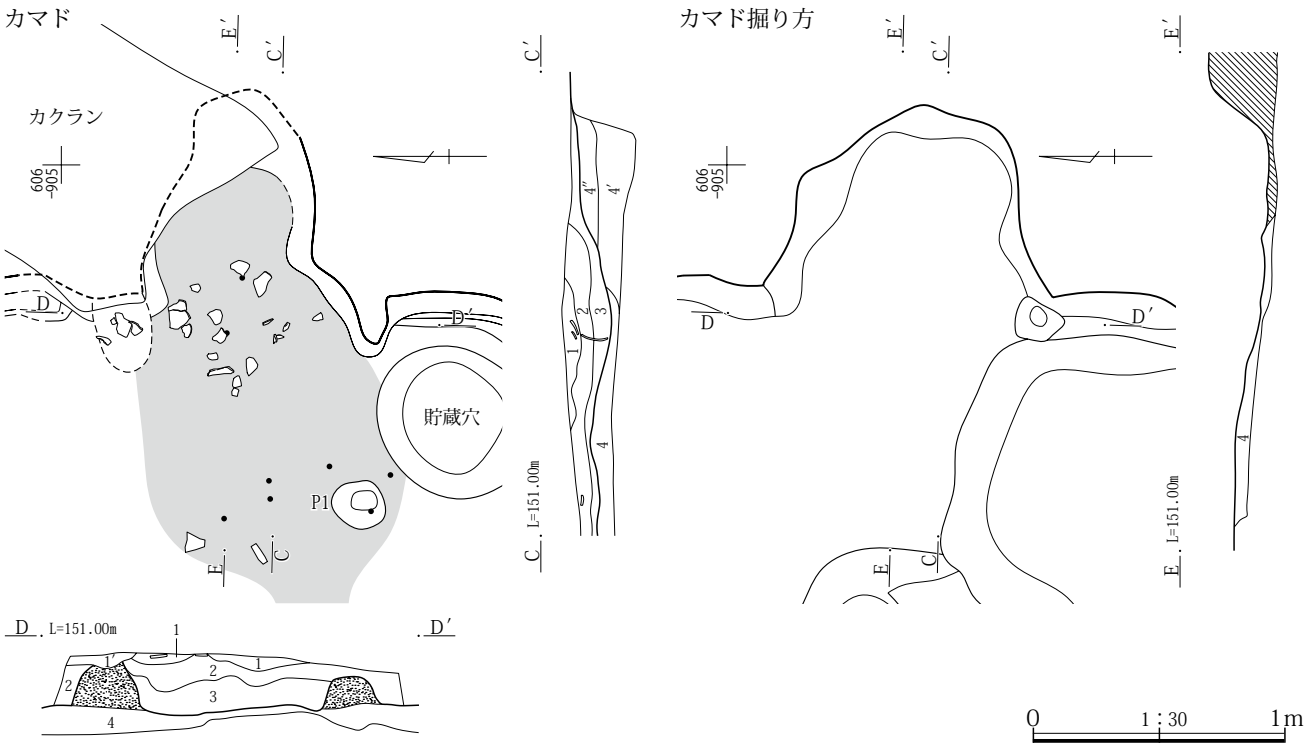
２　暗褐色土(7.5YR3/3)　焼土粒を若干(１～３%)含む。締まりあまりなく、粘性ややあり。

３　褐色土(10YR4/3)　ローム粒子の溶け込み多く、炭化粒、焼土灰を若干(１～３%)含む。締まり、粘性ややあり。

４　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ローム粒子多量(15～25%)に含み、焼土灰を若干(１～３%)含む。締まり、粘性ともにややあり。

４′　４層に比して、締まりやや弱い。

４″　４層に比して、締まり弱く、不均質。



第108図　鳴上Ｉ遺跡Ｂ区２面　503号住居カマド

（長径×短径×深さ㎝）

Ｐ１：22×19×18　　Ｐ２：19×16×22

Ｐ３：25×24×16　　Ｐ４：25×22×34

主な埋没土は、暗褐色土、褐色土である。ロームブロック、白色軽石、炭化粒、焼土粒を含む。締まりは一定でなく、粘性がある。同時期の埋没であると思われる。

貯蔵穴：南東隅壁直下に位置する。規模と位置より貯蔵穴であると思われる。埋没土は、ローム粒子を含む褐色土及び炭化粒を少量含む暗褐色土である。いずれも、締まりは弱く粘性がある。長径66㎝、短径57㎝、深さ24㎝を測る。　**床下土坑：**住居中央部付近に窪みを複数確認する。位置と規模より床下土坑であると思われる。各床下土坑の規模及び埋没土は次の通りである。

（長径×短径×深さ㎝）

床下土坑１：114×101×34　床下土坑２：58×51×10

床下土坑３：107×78×22　　床下土坑４：118×118×32

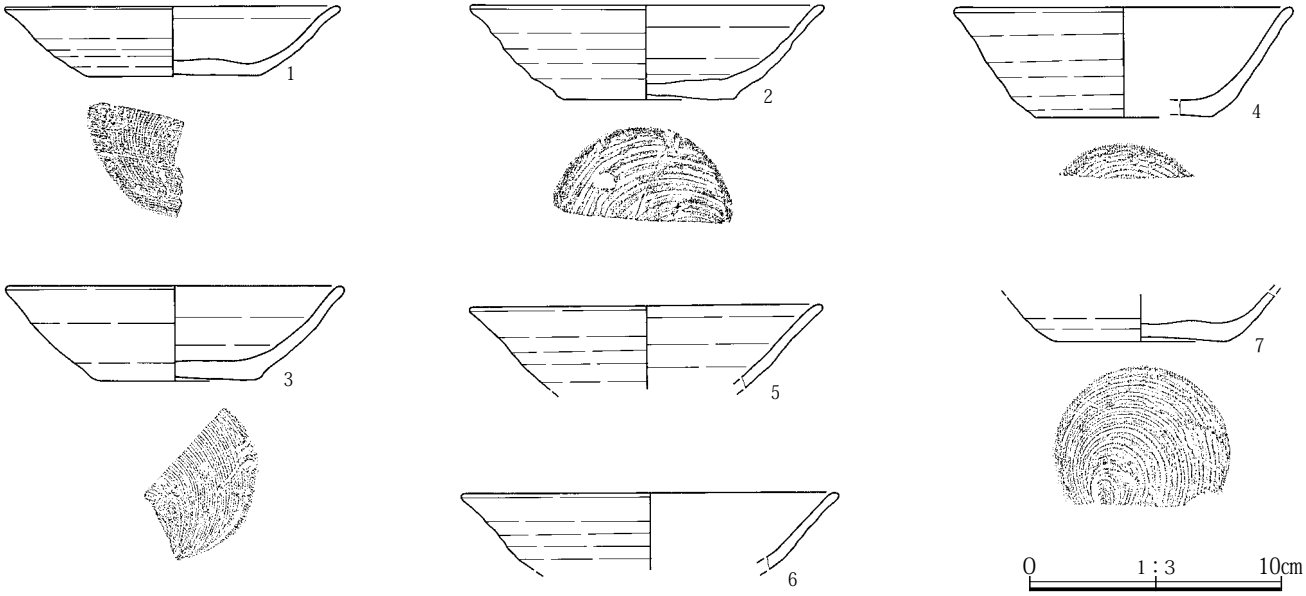
床下土坑５：116×99×37

埋没土は、にぶい黄褐色土主体であり、上層が暗褐色土で覆われているものもある。ローム粒子、焼土、灰を含み、締まり及び粘性は一定でない。黄橙土の貼土を施しているものもある。住居内の同一施設であり、時期差も少ないと考えられる。

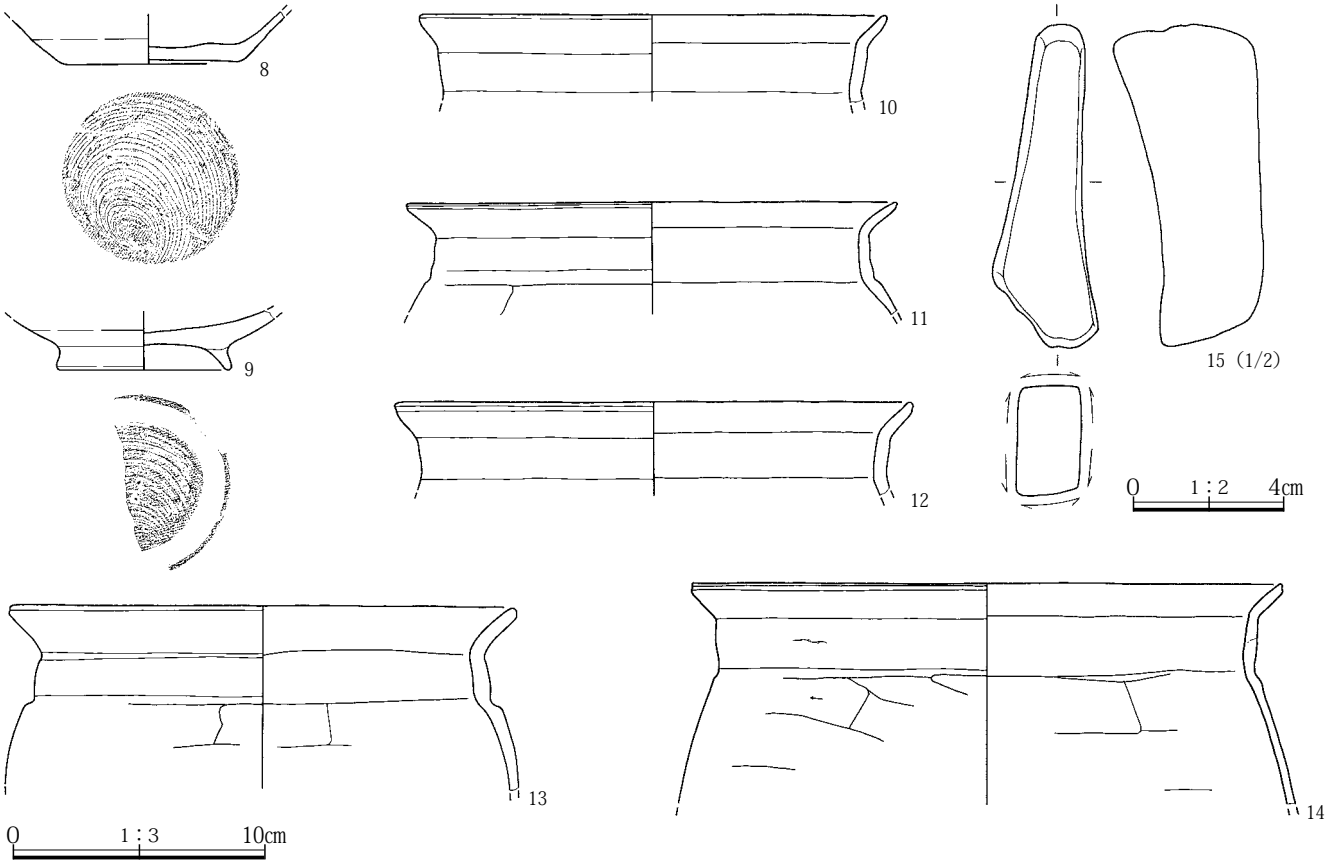
カマド：東壁中央南寄りに位置する。全長109㎝、幅121㎝、焚口幅79㎝、燃焼部幅58㎝。煙道は確認できなかった。燃焼部は、住居内から住居外にかけて位置しており、火床上には焼土及び灰の分布が見られ、土器片が散見できる。右袖は残存しており、袖材は、粘質土である。掘り方は、火床下に深さ３～７㎝程認められ、埋没土は、にぶい黄褐色土である。ロームを多量に、焼土灰を少量含み、締まり粘性がある。　**重複遺構：**501号柱穴列（１面）より古い。　**遺物：**土師器５点（甕５点）、須恵器９点（杯８点、椀１点）、石製品１点（砥石）を図示した。住居中央部から北部にかけて豊富に遺物が出土した。また、カマド焚口部から燃焼部にかけて遺物が確認された。

土師器、甕（10・12）はカマド埋没土から、甕（11）は床下土坑５から、甕（13・14）は床直上から、須恵器、杯（２）は床下土坑５から、杯（１・４・５）は掘り方から、杯（３・８）は床直上から、杯（６）は掘り方及び床下土坑２から、砥石（15）は床上５㎝から出土した。これらは、本住居に伴うものであると考える。杯（７）は埋没土から、須恵器、椀（９）は床上16㎝から出土した。これらは、本住居に伴うものか明瞭でない。図示した以外に、土師器（甕類312片）、須恵器（杯類76片、甕類７片）が出土している。

所見（帰属時期）：土師器甕類、須恵器杯類、椀類を主体とした９世紀第３四半期から９世紀後半にかけての住居であると考える。埋没土内の遺物は床直上出土遺物と時期的に差の少ないものである。



第109図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　503号住居出土遺物（１）



第110図　鳴上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　503号住居出土遺物（２）

504号住居（第111図　PL.43・79）

調査区西部の住居群内にある。505号住居（３面）と重複している。削平により残存状態が良好でない。

位置：615～619・-888～-892にある。

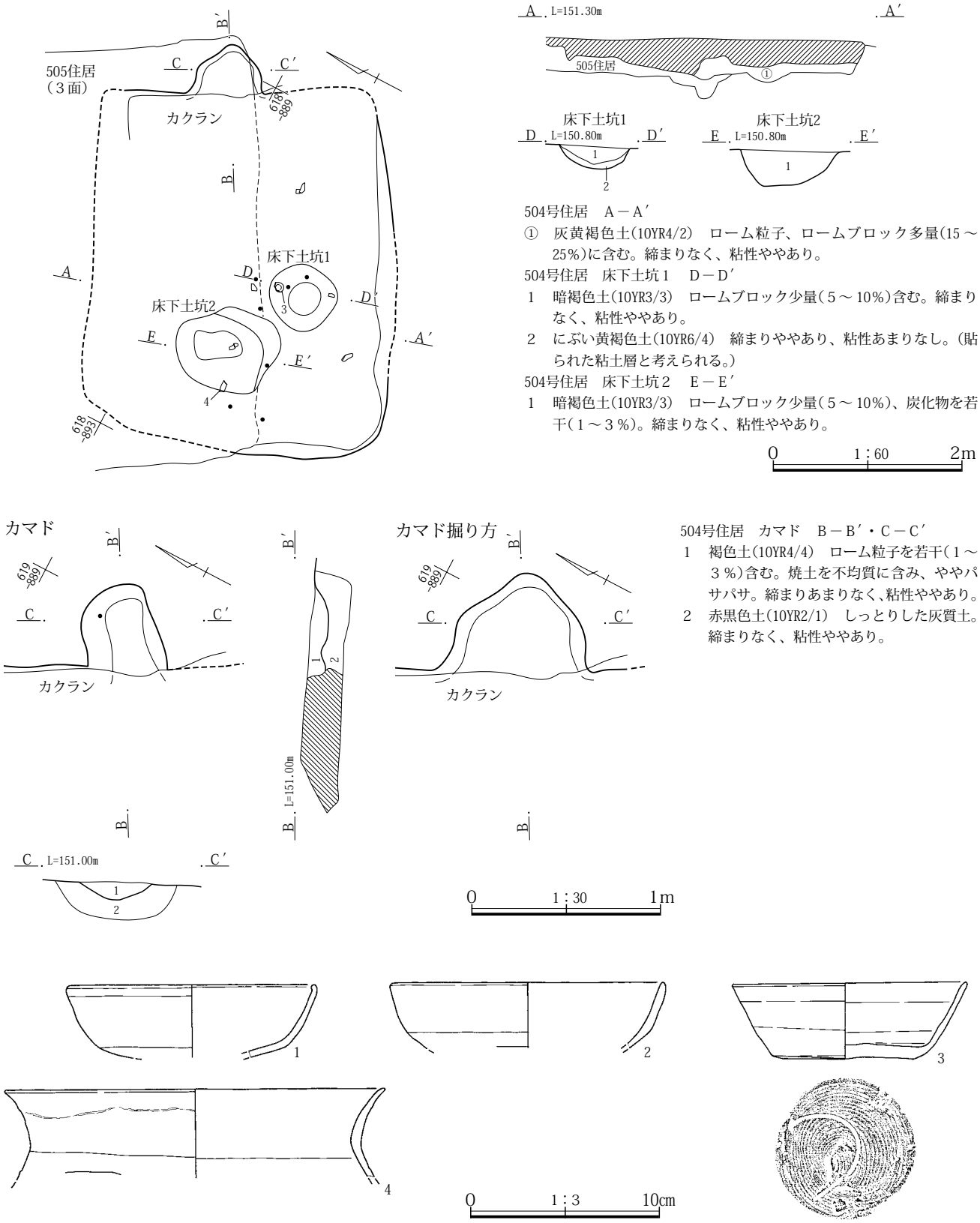
規模形状：主軸長(3.91)ｍ、幅(3.19)ｍである。北辺・東辺共に直線的である。西辺・南辺は外側に膨らんでいる。東西に長い長方形を呈しているが、整美さに欠ける。

埋没土・壁：削平により床面が壊されており、確認されない。壁高は0.26～0.35ｍである。　**方位：**Ｎ－61°－Ｅ　**面積：**〔6.37㎡〕　**床面：**削平により床面が壊されており、確認されない。　**掘り方：**住居の南部に掘り方が認められ、北部は削平されていた。埋没土は、灰黄褐色土である。ロームブロック・粒子を多量に含む。締まりはなく粘性はある。　**壁溝：**認められない。　**ピット（柱穴）：**認められない。　**貯蔵穴：**認められない。　**床下土坑：**住居中央付近に窪みを認める。位置と規模から床下土坑であると思われる。床下土坑１は、にぶい黄褐色土で底が貼られており、ロームブロックを少量含む暗褐色土で埋没している。締まりはなく粘性はある。長径72㎝、短径71㎝、深さ23㎝程である。床下土坑２は、ロームブロック及び炭化物を少量含む暗褐色土で埋没している。締まりはなく粘性はある。長径111㎝、短径92㎝、深さ36㎝程である。　**カマド：**東辺の中央付近に位置すると思われる。全長、幅、焚口幅、燃焼部幅は不明。煙道は確認できない。燃焼部は、住居内から住居外にかけて位置していると思われる。袖は確認できなかった。掘り方は、火床下に深さ22㎝前後認められ、埋没土は、赤黒色土である。締まりはなく粘性はある。しっとりした灰質土である。　**重複遺構：**505号住居（３面）より新しい。

遺物：土師器３点（杯２点、甕１点）、須恵器（杯１点）を図示した。

住居中央部から南西部にかけて点在するように遺物が出土した。須恵器、杯（３）は床直上からの出土である。これは本住居に伴うものと考えられる。土師器、杯（１・２）は埋没土から、甕（４）は床上15㎝からの出土である。これらは、本住居に伴うものであるか明瞭でない。図示した以外に、土師器（杯類26片、甕類100片）、須恵器（杯類29片、甕類２片）、及び下層からの混入である弥生土

器(弥生後期３片26.8ｇ)が出土している。　**所見(帰属時期)**：杯類、甕類、を主体とした８世紀第４四半期の住居であると考える。埋没土内の遺物は床直上出土遺物と時期的に差の少ないものであった。



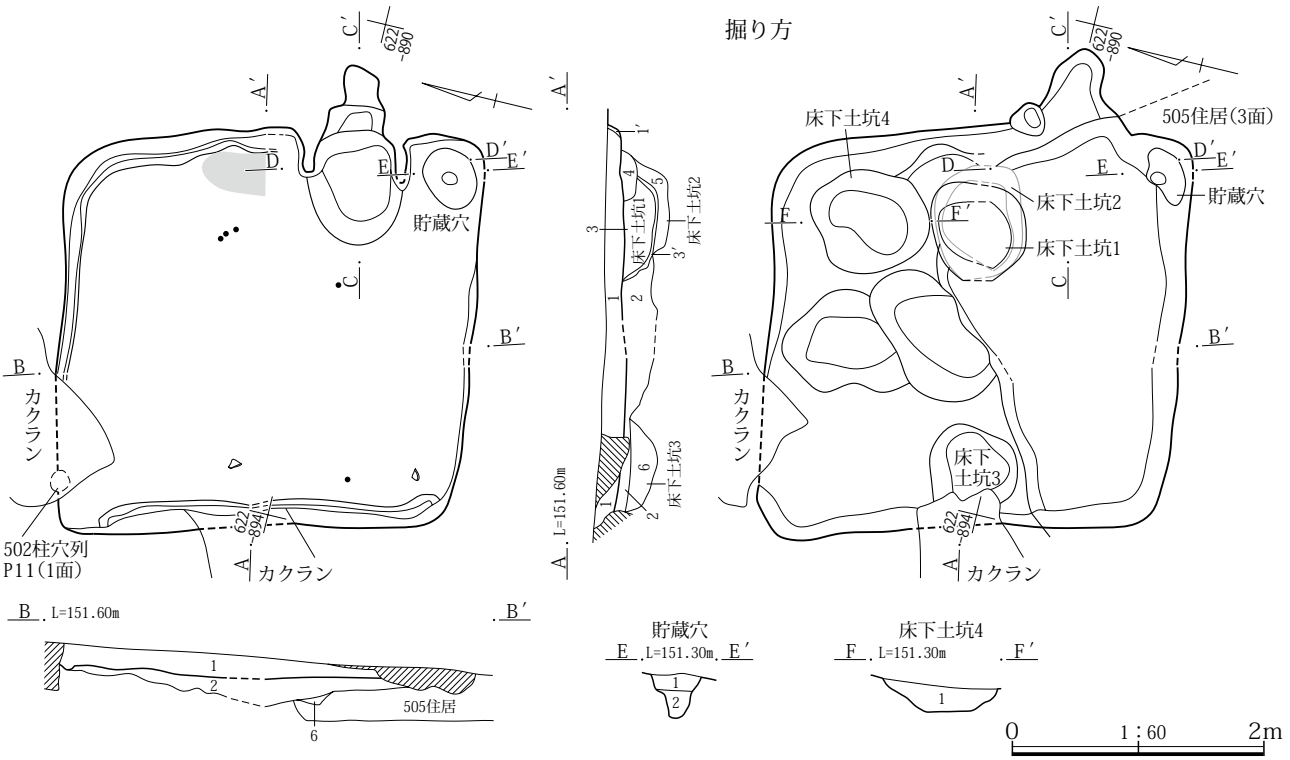
第111図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　504号住居

506号住居(第112～114図　PL.43・44・79)

調査区西部の住居群内にある。505(３面)・511号住居と重複している。残存状態は良好である。

位置：620～624・-890～-894にある。

規模形状：主軸長3.16m、幅3.27mである。各辺直線的である。南北に長く、北東及び南西方向に潰れた平行四辺形を呈している。　**埋没土・壁：**ロームブロック、焼土ブロックを少量含む黒褐色土で埋没している。締まり及び粘性はない。一層で一気に埋没していることから、人為的な埋め戻しであると思われる。壁高は0.03～0.21mである。　**方位：**Ｎ－77°－Ｅ　**面積：**〔8.58〕㎡　**床面：**南に傾斜している。高低差は10cm前後と大きい。緩やかな起伏が認められる。カマドの北部東壁直下に焼土の分布を認める。　**掘り方：**ほぼ全面に確認できた。中央部分は、やや層が厚く、北西部は薄い。埋没土は、黄褐色土である。ロームブロックを多量に含み、黒褐色土との不均質土である。締まりや粘性はない。深さは６～27cm前後である。　**壁溝：**北壁東部から東壁北部にかけて、及び西壁に認められる。埋没土は、住居１層と同じである。北壁東部から東壁北部の壁溝は、幅６～10cm、深さ４cm程である。西壁の壁溝は、幅６～12cm、深さ５cmである。　**ピット(柱穴)：**認められない。　**貯蔵穴：**南東隅直下に窪みが確認された。位置と規模より貯蔵穴と思われる。埋没土は、暗褐色土である。ローム粒子を少量含む。上層は、焼土粒を少量含み、締まりがある。長径50cm、短径39cm、深さ33cmで



506号住居　Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′

1　黒褐色土(10YR3/1)　ロームブロック若干(１～３％)含む。

1′　１層に比べ、焼土ブロックを若干(１～３％)含む。締まり粘性ともにあまりなし。

2　黄褐色土(10YR5/6)　ロームブロック多量(30～50％)に含む。乱れた黒褐色土とロームブロックの不均質土。締まり粘性ともにあまりなし。

3　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ローム粒子の溶け込み、ロームブロック多量(15～25％)に含む。色調２層より暗い。締まり粘性ともにあまりなし。(床下土坑１)

3′　明黄褐色土(10YR6/6)　締まりややあり、粘性あまりない。(床下土坑１貼土)

4　にぶい赤褐色土(2.5YR4/4)　ロームブロック、焼土ブロック不均質に若干(１～３％)含む。締まり粘性ともにあまりなし。

5　暗褐色土(10YR3/3)　均質でややしっとりしている。色調暗い。締まりあまりなく、粘性ややあり。(床下土坑２)

6　暗褐色土(10YR3/3)　ロームブロック若干(１～３％)含む。締まりややあり、粘性あまりなし。(床下土坑３)

506号住　貯蔵穴　Ｅ－Ｅ′

1　暗褐色土(10YR3/3)　ローム粒子溶け込み、焼土粒、若干(１～３％)含む。締まりややあり、粘性あまりなし。

2　暗褐色土(10YR3/3)　ローム粒子溶け込み若干(１～３％)あり。締まり、粘性ともにあまりなし。

506号住　床下土坑４　Ｆ－Ｆ′

1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ローム溶け込み、ロームブロック多量(15～25％)に含む。ロームブロック５cm大を含む。締まり、粘性ともにあまりなし。

第112図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　506号住居

ある。　**床下土坑：**住居中央部東西、北東部に窪みを確認する。位置と規模より床下土坑と思われる。各床下土坑の規模及び埋没土の傾向は次の通りである。

（長径×短径×深さ㎝）

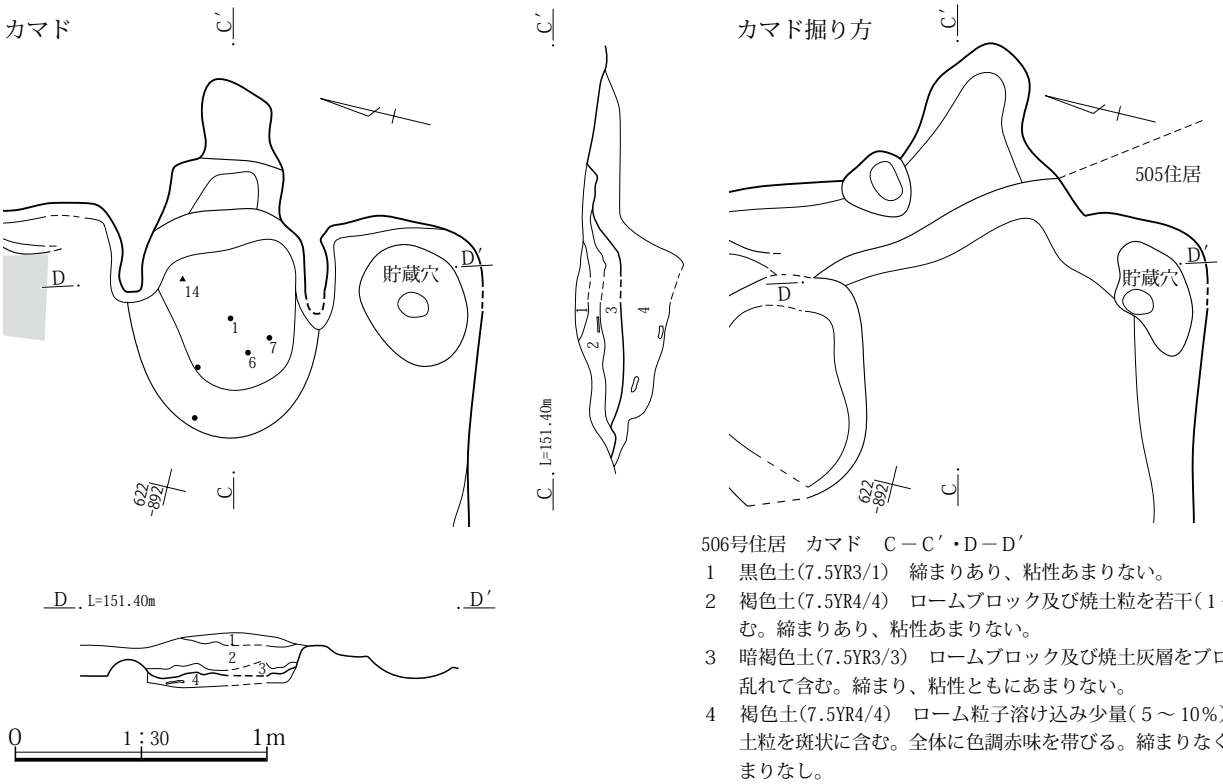
床下土坑１：84×76×26　　床下土坑２：92×70×37

床下土坑３：74×68×22　　床下土坑４：96×82×20

床下土坑１は、明黄褐色土で貼土しており、床下土坑２の後に設置している。床下土坑１・４がにぶい黄褐色土で、床下土坑２・３が暗褐色土で埋没しており、類似した土層である。床下土坑１・４、床下土坑２・３が、それぞれ同時期の埋没の可能性があると考える。

カマド：東辺中央南寄りに位置する。全長95㎝、幅89㎝、焚口幅61㎝、燃焼部幅52㎝。煙道は壁外側に52㎝張り出している。燃焼部は、住居内に位置している。両袖確認された。袖材は、不明である。掘り方は、火床下に深さ38㎝前後認められ、埋没土は、褐色土である。ローム粒子、焼土粒を含む。締まり粘性はない。　**重複遺構：**505（３面）・511号住居より新しい。502号柱穴列（１面）より古い。

遺物：土師器５点（杯２点、甕３点）、須恵器５点（杯３点、椀２点）、石製品（紡輪１点、石製模造品１点）、弥生土器２点を図示した。住居西部及び東部、カマド燃焼部周辺から遺物が確認された。土師器、杯（１）、椀（７）はカマド床直上から、杯（２）は掘り方からの出土である。これらは、本住居に伴うものと考えられる。土師器、甕（８）はカマド埋没土から、甕（９・10）は埋没土からの出土である。須恵器、杯（３・４・５）はカマド埋没土から、椀（６）はカマド床上９㎝からの出土である。これらは、本住居に伴うと考えるのが自然である。石製模造品(13)は埋没土から、紡輪(14)はカマドから出土している。また、弥生土器、甕(11)、壺(12)が埋没土から出土した。樽式土器で、胴部上半に櫛描波状文及び連続刻目文を施してあり、横位篦磨きである。後期末葉のものと考えられる。ただし、これらは下層からの混入である。図示した以外に、土師器（杯類17片、甕類141片）、須恵器（杯類11片、甕類１片）、及び下層からの混入である弥生土器（弥生後期２片15ｇ）が出土している。　**所見（帰属時期）：**杯類、甕類、椀類を主体とした８世紀第４四半期の住居であると考える。埋没土内の遺物は床直上出土遺物と時期的に差の少ないものであった。



506号住居　カマド　Ｃ－Ｃ′・Ｄ－Ｄ′

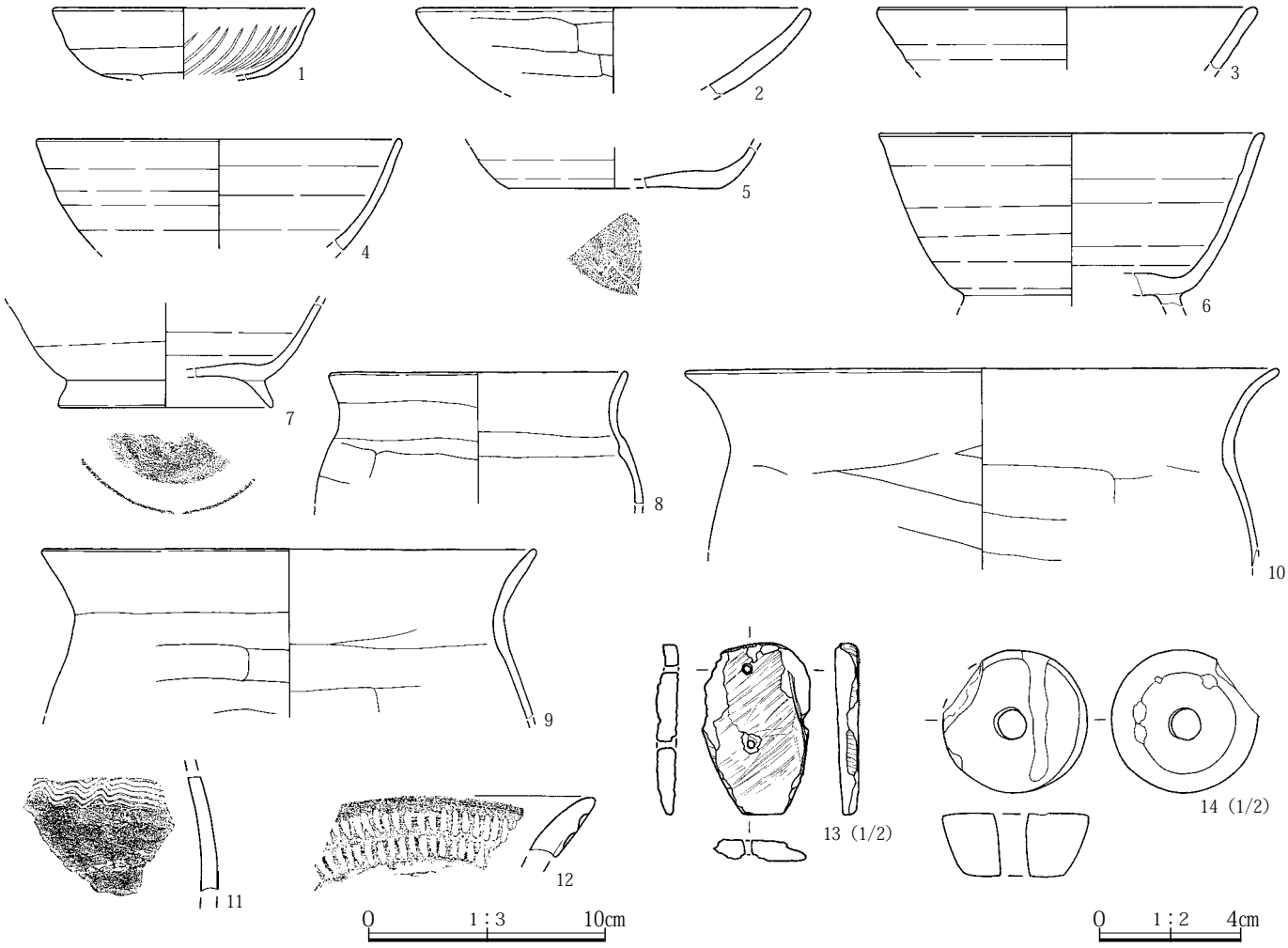
1　黒色土(7.5YR3/1)　締まりあり、粘性あまりない。

2　褐色土(7.5YR4/4)　ロームブロック及び焼土粒を若干（１～３％）含む。締まりあり、粘性あまりない。

3　暗褐色土(7.5YR3/3)　ロームブロック及び焼土灰層をブロック状に乱れて含む。締まり、粘性ともにあまりない。

4　褐色土(7.5YR4/4)　ローム粒子溶け込み少量（５～10％）含み、焼土粒を斑状に含む。全体に色調赤味を帯びる。締まりなく、粘性あまりなし。

第113図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　506号住居カマド



第114図　鳴上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　506号住居出土遺物

507号住居（第115～118図　PL.44・45・79）

調査区西部の住居群内にある。削平が進んでおり、残存状態は良好でない。

位置：637～643・-885～-891にある。

規模形状：主軸長4.41m、幅4.73mである。各辺直線的である。全体としては正方形を呈している。　**埋没土・壁：**黒褐色土で埋没している。ローム粒子多量に含む。締まり粘性がある。一層で一気に埋没しており、人為的な埋め戻しであると思われる。壁高は0.03～0.32mである。

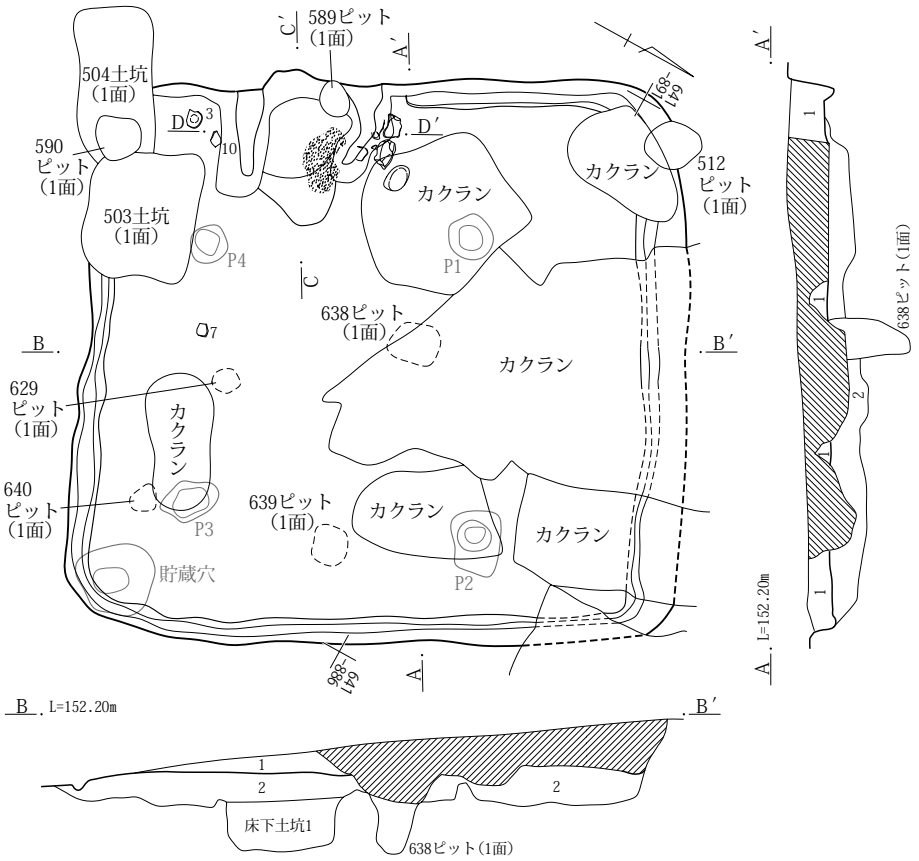
方位：Ｎ－60°－Ｅ　**面積：**17.09㎡　**床面：**傾斜はほぼない。全体的に平坦である。住居中央部から北部にかけて攪乱により使用面を壊されている。　**掘り方：**ほぼ全面に確認できた。埋没土は、黒褐色土である。灰質の均質土である。締まりがある。深さは13～31㎝前後である。中央部がやや浅い。　**壁溝：**各辺認められた。埋没土は、黒褐色土である。住居本体の埋没土に準じている。北辺の壁溝は、幅16㎝、深さ３㎝程である。東辺の壁溝は、幅９～16㎝、深さ３㎝程である。南辺の壁溝は、幅８～19㎝、深さ５㎝程である。西辺の壁溝は、幅10～14㎝、深さ８㎝程である。

ピット（柱穴）：全部で７基が確認された。Ｐ１・２・３・４は、規則的な主柱穴配置による柱穴であると思われる。各柱穴の規模及び埋没土は次の通りである。なお、本住居においてピットは、掘り方調査の段階で確認された。

（長径×短径×深さ㎝）

Ｐ１：35×34×31	Ｐ２：49×39×39
Ｐ３：48×32×24	Ｐ４：30×29×18
Ｐ５：28×24×18	Ｐ６：34×26×24
Ｐ７：22×18×16	

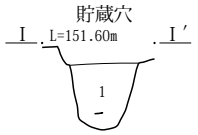
埋没土は、にぶい黄褐色土、暗褐色土、黄褐色土、黒褐色土等である。ローム、ロームブロック、焼土粒等を含み、締まりや粘性は一定していない。どの柱穴にも、



507号住居　Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′

1　黒褐色土(10YR3/1)　ローム粒子溶け込み多量(15～25％)に含む。締まり粘性ともにややあり。(現代の攪乱多い)

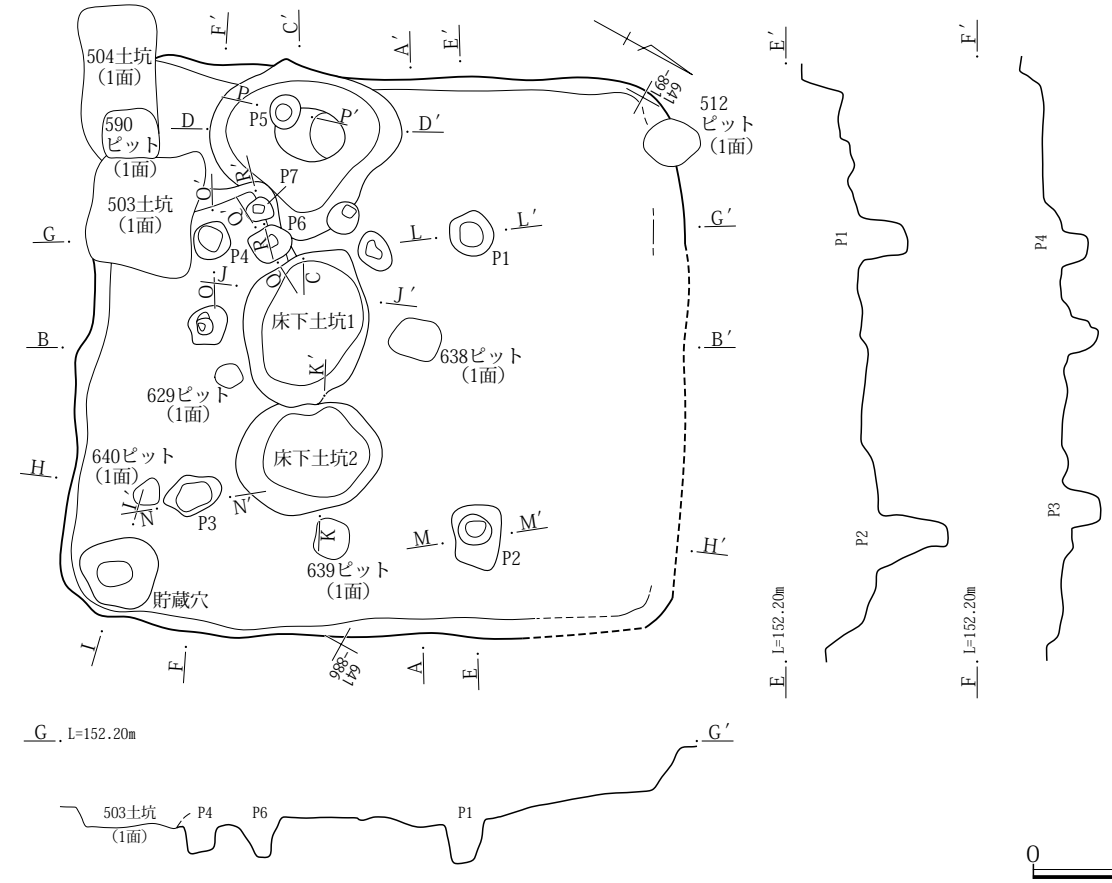
2　黒褐色土(10YR3/1)　灰質味ある均質土。締まりややあり、粘性なし。



507号住居　貯蔵穴　Ｉ－Ｉ′

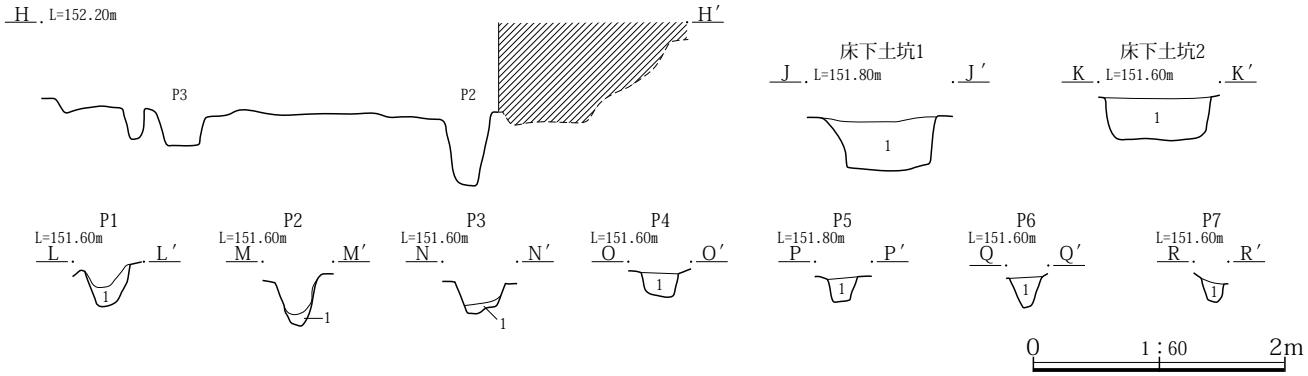
1　黒褐色土(10YR2/2)　締まりあまりなく、粘性ややある均質土。土器片含む。

掘り方



0　1：60　2m

第115図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　507号住居



507号住居　床下土坑１　Ｊ－Ｊ′
1　黒褐色土(10YR3/2)　ロームブロック多量(15～25%)に含み、不均質。ロームブロック３～７㎝大。締まり、粘性ややあり。
507号住居　床下土坑２　Ｋ－Ｋ′
1　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　ロームブロック及びAs-YP軽石を多量(30～50%)に含む。締まりあまりなく、粘性ややあり。

507号住居内　Ｐ１　Ｌ－Ｌ′
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ローム溶け込み多量(30～50%)含み、均質。締まりあまりなく、粘性ややあり。
507号住居内　Ｐ２　Ｍ－Ｍ′
1　暗褐色土(10YR3/3)　ローム溶け込み多量(15～25%)含み、ロームブロック若干(１～３%)含む。締まり欠き、粘性ややあり。

507号住居内　Ｐ３　Ｎ－Ｎ′
1　黄褐色土(10YR5/6)　粘性欠く不均質なロームブロック含む。締まりあり。
507号住居内　Ｐ４　Ｏ－Ｏ′
1　暗褐色土(10YR3/3)　ロームブロック不均質に少量(５～10%)含む。締まりなく、粘性ややあり。
507号住居内　Ｐ５　Ｐ－Ｐ′
1　黒褐色土(10YR3/2)　ロームブロック多量(30～50%)に含み、焼土粒を若干(１～３%)含む。締まりなく、粘性ややあり。
507号住居内　Ｐ６　Ｑ－Ｑ′
1　黄褐色土(10YR5/6)　ロームブロックを主体に乱れる。締まりあまりなく、粘性なし。
507号住居内　Ｐ７　Ｒ－Ｒ′
1　黒褐色土(10YR3/2)　締まり欠く均質土。粘性ややあり。

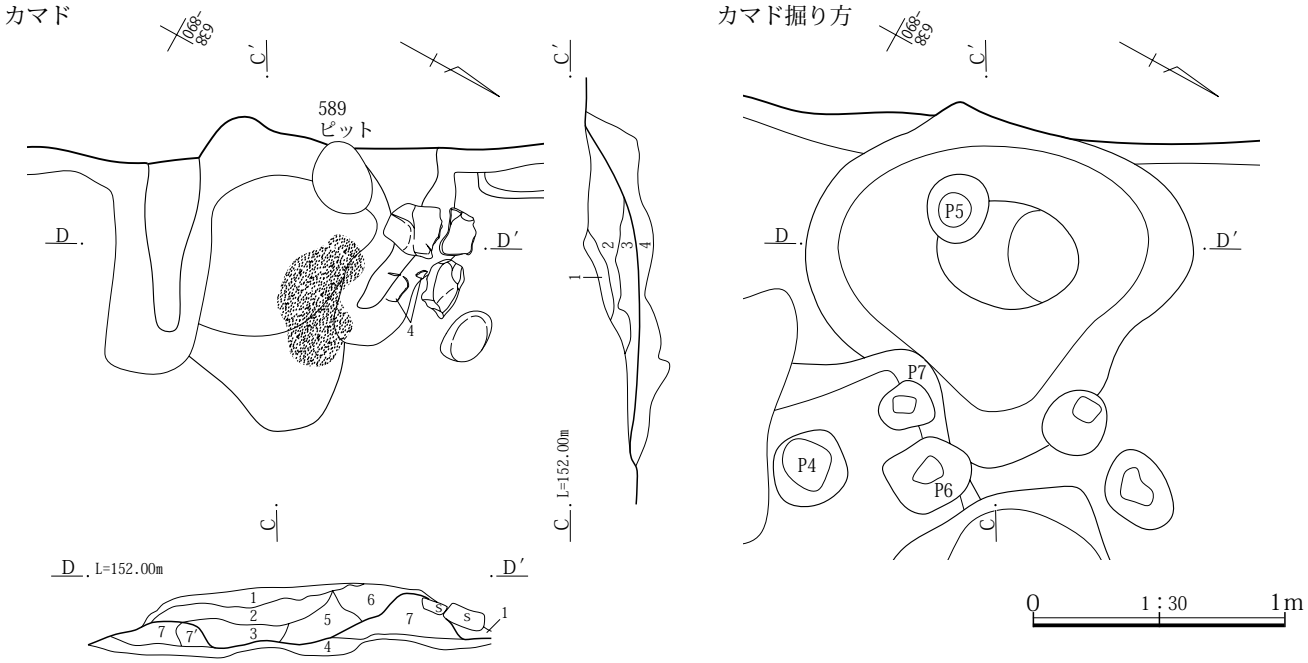
第116図　鴫上Ｉ遺跡Ｂ区２面　507号住居断面

ロームブロック等の混入が見られ、時期差のない意図的な埋め戻しであると思われる。

貯蔵穴：南東隅壁直下で確認された。配置と規模より貯蔵穴と思われる。埋没土は、黒褐色土である。粘性のある均質土である。土器片を含んでいる。長軸62㎝、短軸58㎝、深さ52㎝である。なお、本住居において貯蔵穴は、掘り方調査の段階で確認された。

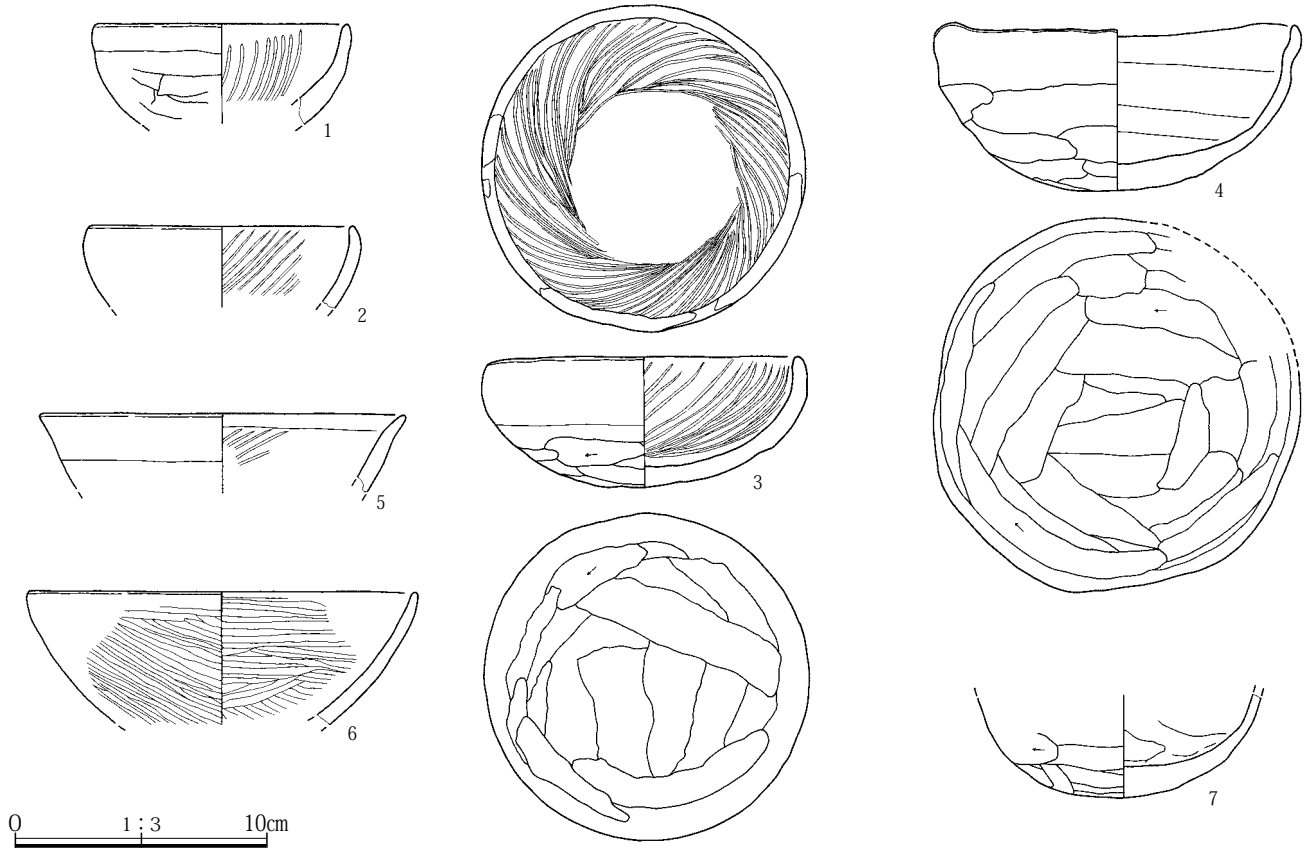
床下土坑：住居中央部付近に窪みを複数確認する。位置と規模より床下土坑であると思われる。床下土坑１は、黒褐色土で埋没している。ロームブロックを多量に含み、不均質である。締まり粘性ともにある。長径122㎝、短径98㎝、深さ38㎝である。床下土坑２は、にぶい黄褐色土で埋没している。ロームブロック、及びAs-YPを多量に含む。締まりはなく粘性はある。長径118㎝、短径84㎝、深さ33㎝である。　**カマド：**西辺中央やや南寄りに位置する。現存全長97㎝、幅136㎝、焚口幅54㎝、燃焼部幅61㎝である。煙道は確認できなかった。燃焼部は、住居内に位置しており、火床上には粘土の分布が確認された。袖材は黄褐色土であり、右袖には構築材として礫が確認できた。掘り方は、火床下に５㎝前後認められた。埋没土は、黒褐色土である。灰質の均質土で、締まりがある。　**重複遺構：**503・504号土坑(１面)、512・589・590・629・638・639・640号ピットに前出している。

遺物：土師器11点(杯５点、甕５点、壺１点)、黒色土器１点(椀)、弥生土器１点を図示した。住居中央部から東部及び南部、カマド周辺に点在するように遺物が確認された。杯(３・４)はカマド袖から、壺(７)は床直上から、甕(９)は掘り方から、甕(10)はカマド袖から、甕(11・12)、黒色土器、椀(６)はカマド埋没土から出土である。これらは、本住居に伴うものと考えられる。土師器、杯(１・２・５)、甕(８)は埋没土からの出土である。これらが本住居に伴う出土であるか明瞭でない。また、弥生土器１点(甕13)が貯蔵穴から出土している。弥生後期のものである。ただし、この遺物は下層からの混入である。図示した以外に、土師器(杯類12、甕類137片)、及び下層からの混入である弥生土器(弥生後期９片148ｇ)が出土している。　**所見(帰属時期)：**甕類、杯類、椀類を主体とした５世紀後半の住居であると考える。下層からの混入以外の埋没土内の遺物は床直上出土遺物と時期的に差の少ないものであった。

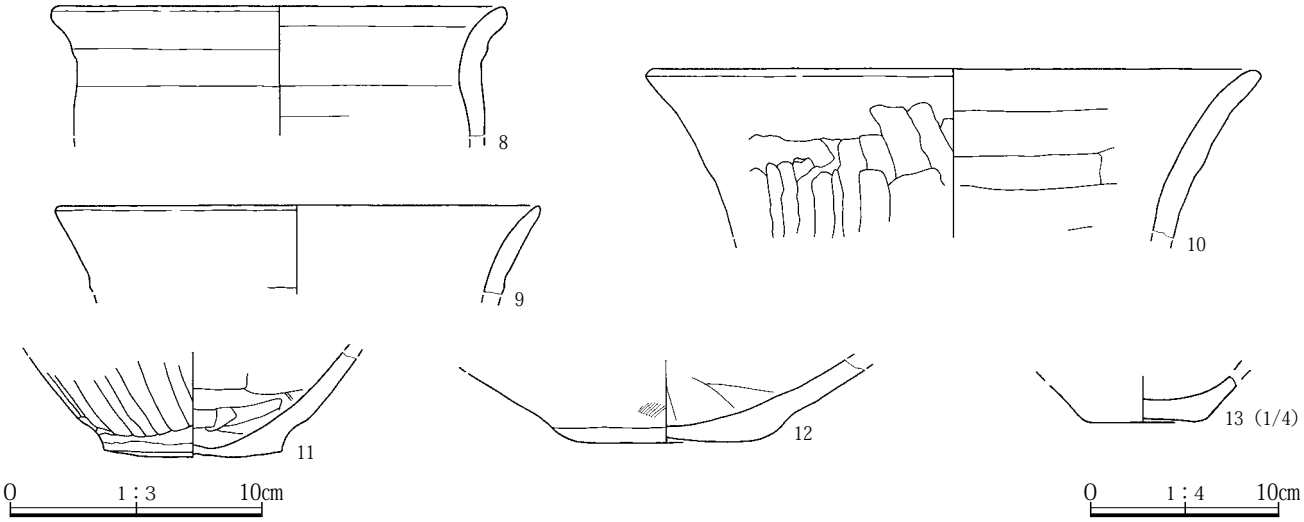


507号住居　カマド　Ｃ－Ｃ′・Ｄ－Ｄ′

1　褐灰色土(10YR4/1)　締まりややあり、粘性なし。
2　にぶい赤褐色土(2.5YR4/4)　焼土ブロックを若干(１～３％)含む。締まりややあり、粘性なし。
3　暗赤褐色土(2.5YR3/2)　焼土ブロックを多量(15～25％)含む。締まり粘性ともにややあり。
4　黒褐色土(10YR3/1)　灰質味ある均質土。締まりややあり、粘性なし。
5　褐灰色土(10YR4/1)　不均質で、地山As-YP軽石含む。締まりややあり、粘性なし。
6　にぶい黄褐色土(10YR3/3)　粘土ブロックと暗褐色土の乱れたブロックの互層。締まりややあり、粘性なし。
7　黄褐色土(10YR5/6)　地山軽石を含む粘土層。締まりあまりなく、粘性なし。
7′褐色土(10YR4/4)　くすんだ色調の乱れた粘土層。締まりあまりなく、粘性なし。



第117図　鳴上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　507号住居カマド、出土遺物(１)



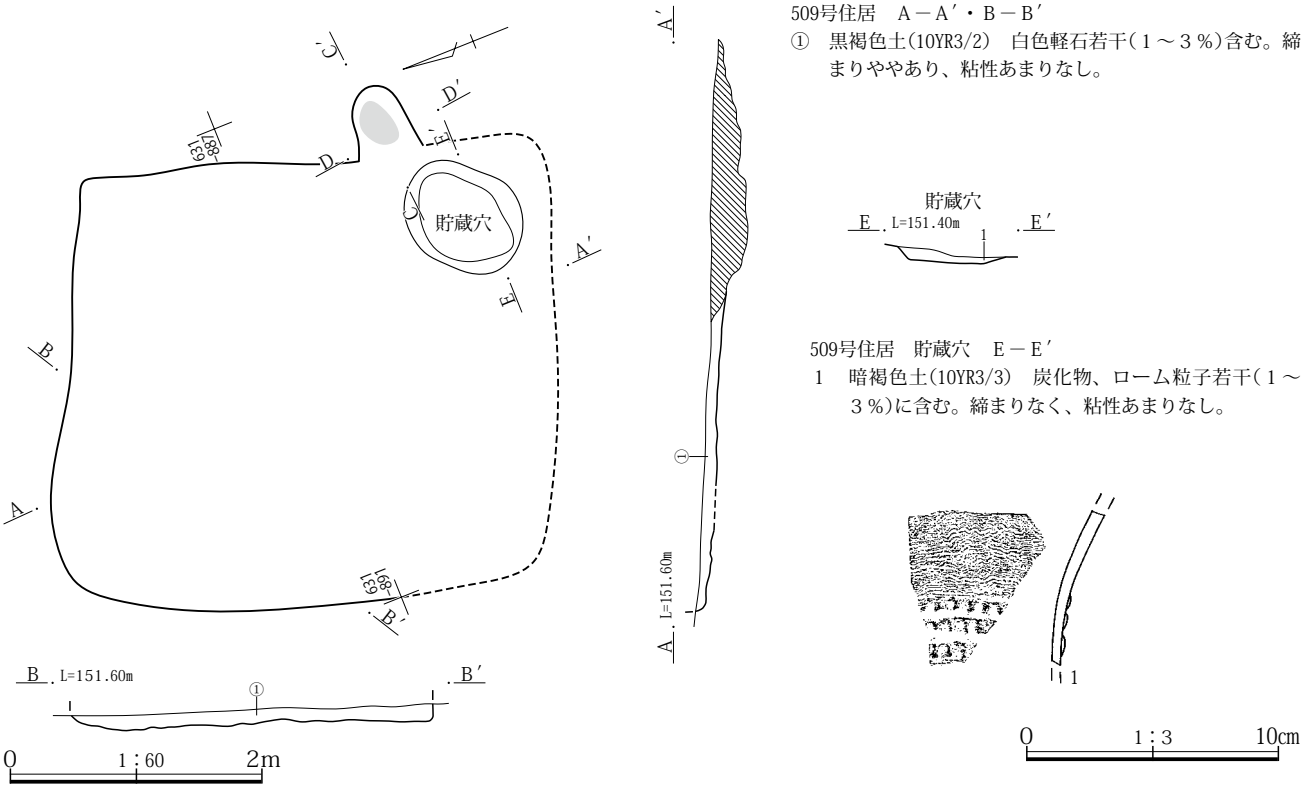
第118図　鳴上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　507号住居出土遺物（２）

509住居（第119・120図　PL.45・46・79）

調査区西部の住居群内にある。508号住居（３面）と重複している。削平されており残存状態は良好でない。

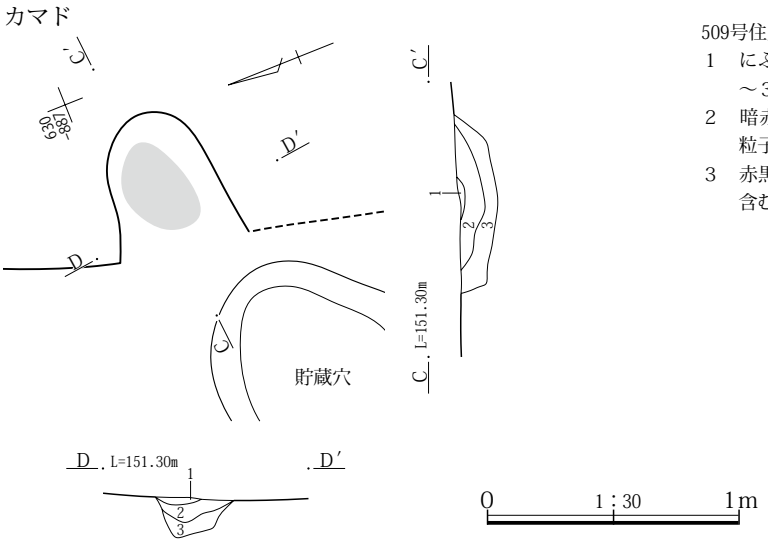
位置：628～633・-887～-891にある。

規模形状：主軸長3.57m、幅〔3.87〕mである。東辺・南辺は直線的である。西辺は外側にやや膨らんでいる。北辺は、やや歪んでいる。全体としては、やや南北に長い長方形を呈している。　**埋没土・壁：**黒褐色土で埋没している。白色軽石含む。締まりはあり粘性はない。１層で一気に埋没しており、人為的な埋め戻しであると思われる。　**方位：**Ｎ－116°－Ｅ　**面積：**〔13.36〕㎡　**床面：**南東方向に傾斜している。高低差は10cm程と大きい。床面は僅かな起伏を伴う。　**掘り方：**認められない。　**壁溝：**認められない。　**ピット（柱穴）：**認められない。　**貯蔵**



第119図　鳴上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　509号住居

穴：南東隅、カマドに近接するところに窪みを確認する。位置と規模より貯蔵穴と思われる。暗褐色土で埋没している。炭化物、ローム粒子少量含む。締まりや粘性はない。長径100㎝、短径78㎝、深さ10㎝である。　**カマド：**東辺中央南寄りに位置する。全長、幅、焚口幅、燃焼部幅は不明である。煙道は確認できなかった。燃焼部は、住居内から壁外にかけてあり、火床上には焼土が確認される。袖は確認できなかった。火床下に深さ15㎝前後の掘り込みが確認できた。埋没土は、赤黒色土、暗赤褐色土、にぶい赤褐色土である。ローム粒子、焼土粒、炭化物を含む。　**重複遺構：**508号住居（３面）より新しい。　**遺物：**住居及び貯蔵穴から遺物が出土したものの、本住居に伴う図示する遺物が認められなかった。住居北部を中心に遺物が出土している。また、弥生土器、甕（１）が埋没土から出土した。頸部に櫛描波状文を複数施した十王台式である。ただし、この遺物は下層からの混入である。図示した以外に、土師器（甕類21片）が出土している。　**所見（帰属時期）：**出土遺物及び形状から、甕類を主体とした９世紀代の住居であると考える。



509号住居　カマド　Ｃ－Ｃ′・Ｄ－Ｄ′
1　にぶい赤褐色土（2.5YR4/4）　ローム粒子、焼土粒、炭化物を若干（１～３％）含む。締まり粘性ともにあまりなし。
2　暗赤褐色土（2.5YR3/3）　ローム粒子を少量（５～10％）含む。焼土粒子を若干（１～３％）含む。締まりあまりなく、粘性ややあり。
3　赤黒色土（10YR2/1）　しっとりした灰質土。炭化物を若干（１～３％）含む。締まりなく、粘性ややあり。

第120図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　509号住居カマド

510号住居（第121～123図　PL.46・80）

調査区西部の住居群内にある。残存状態は良好である。**位置：**628～632・-879～-883にある。**規模形状：**主軸長3.06m、幅3.20mである。各辺直線的である。北東隅、北西隅、南西隅が丸みを帯びている。正方形を呈しているが、丸みを帯びた形状である。　**埋没土・壁：**暗褐色土で埋没している。一層で一気に埋没しており、人為的な埋め戻しであると思われる。壁高は0.01～0.39mである。　**方位：**Ｎ－85°－Ｅ　**面積：**7.28㎡　**床面：**東に傾斜している。高低差は６㎝である。緩やかな起伏を伴う。カマド焚口部から左にかけて粘土の分布が観察できる。　**掘り方：**ほぼ全面に確認できた。埋没土は、褐色土である。多量のロームブロックが不均質に混入している。締まりや粘性はない。深さは、６～20㎝程である。中央から南西部にかけて厚く埋没している。　**壁溝：**全ての壁際に認められる。方面ごとの壁溝の規模及び埋没土の傾向は次の通りである。

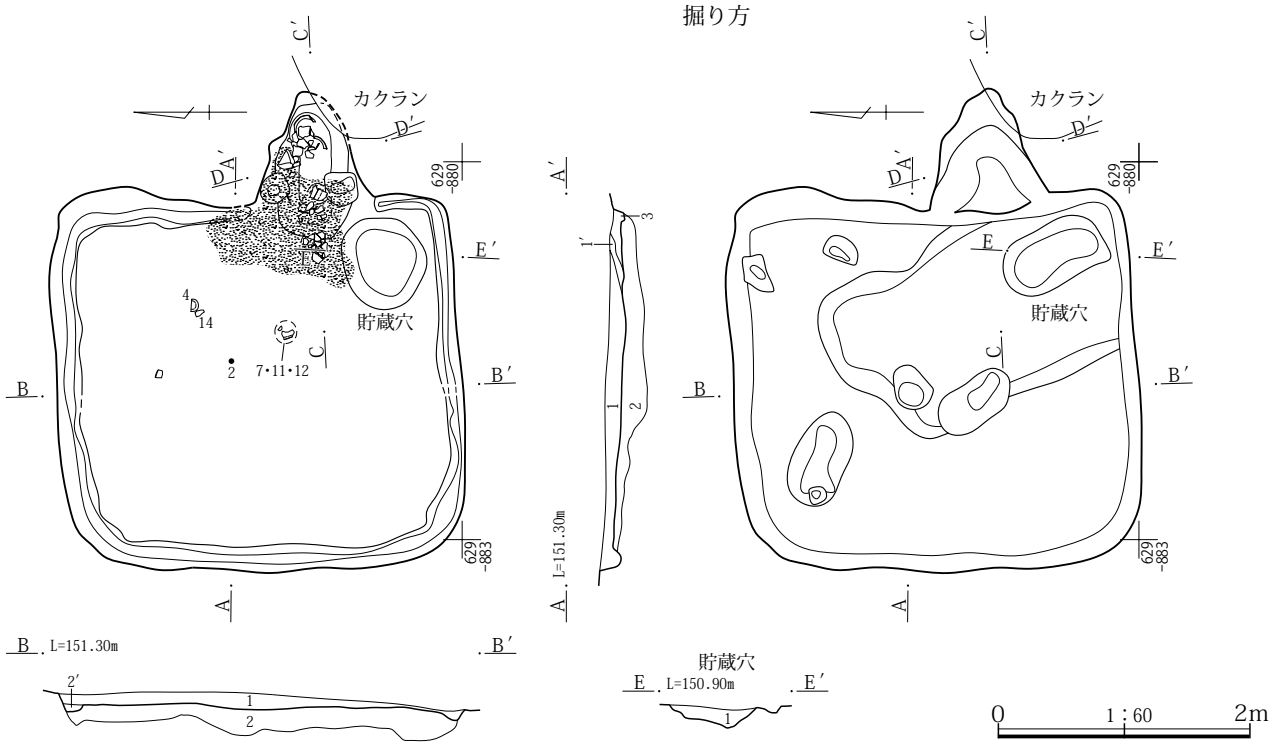
（幅×深さ㎝）

北辺の壁溝：６～13×６　東辺の壁溝：10～14×４
南辺の壁溝：９～18×９　西辺の壁溝：７～16×７

北辺の壁溝は褐色土で、東辺の壁溝はカマドの粘土崩壊層のにぶい黄褐色土で埋没しており、住居廃絶時以前の埋没の可能性がある。南辺・西辺の壁溝は暗褐色土で埋没しており住居埋没土に準じる。住居の廃絶時に埋没した可能性がある。

ピット（柱穴）：認められない。　**貯蔵穴：**南東隅壁直下、カマドに近接する位置に窪みを確認する。位置と規模より貯蔵穴と考えられる。埋没土は、黒褐色土である。ロー

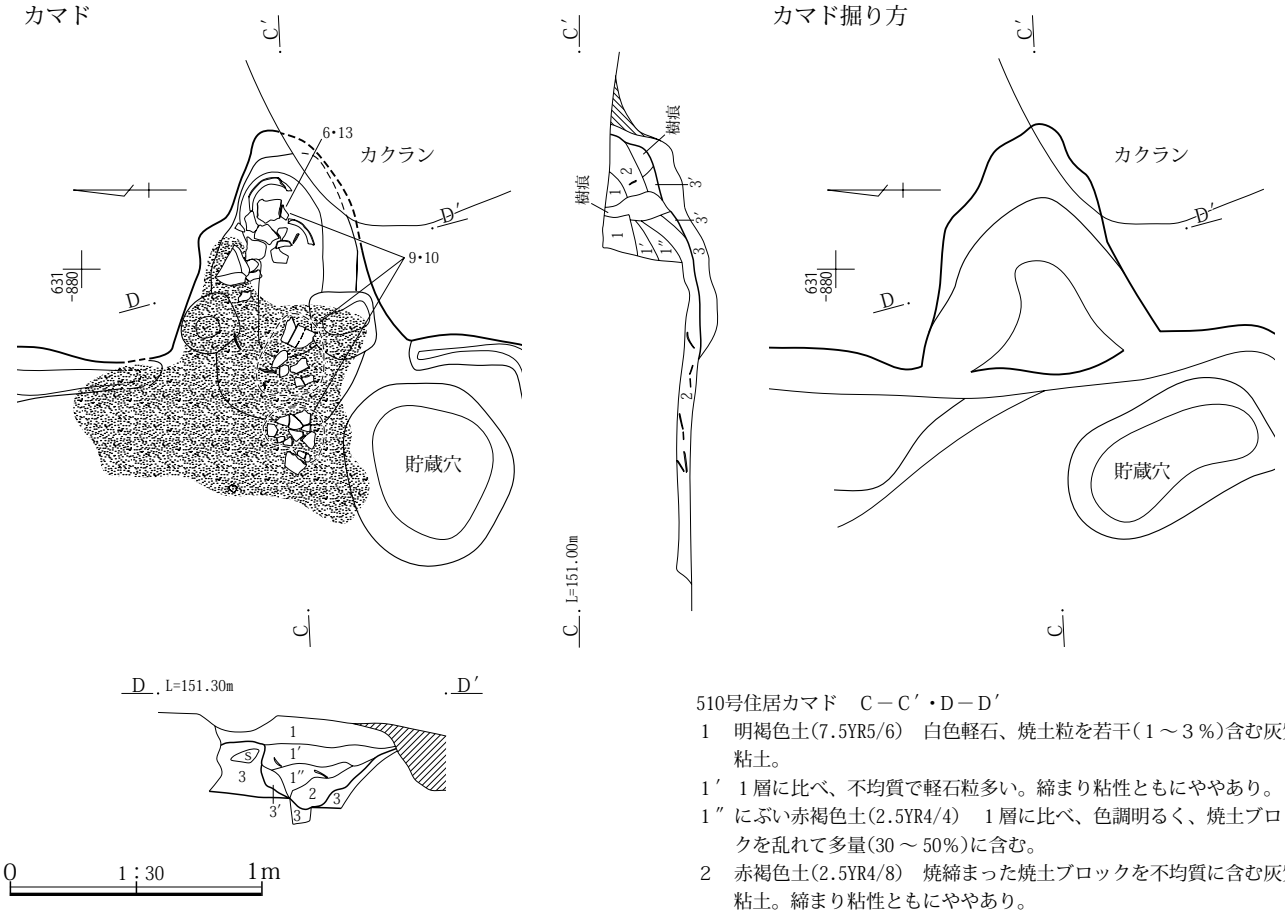
ムブロックを不規則に含む。締まりがある。長径72㎝、短径68㎝、深さ16㎝である。　**カマド：**東辺中央南寄りに位置する。推定全長89㎝、推定幅77㎝、推定焚口幅27㎝、推定燃焼部幅26㎝、煙道は確認できなかった。燃焼部は、住居内から壁外にかけてある。火床上からカマド焚口部にかけて土器片が確認された。袖は削平されていたが、両袖先端部分付近には袖石が設定されていたと思われる窪みが確認された。袖材は、粘質土で、崩壊したものがカマド焚口部に分布していた。掘り方は、火床下に７㎝前後の掘り込みが確認でき、埋没土は、黒褐色土である。締まりが弱く粘性がある。　**重複遺構：**なし。　**遺物：**土師器10点（甕10点、）、須恵器４点（杯４点）を図示した。住居中央部から北東部にかけて及び、カマド内部から周辺にかけて遺物が確認された。杯（２・４）は床直上からの出土である。土師器、甕（７・11・12）は床直上及びカマド埋没土から、甕（８）は、カマド埋没土から、甕（６・９・10・13）はカマド床直上からの出土であり、これらは、本住居に伴うものであると考えられる。また、甕（５）は埋没土から、須恵器、杯（１・３）はカマド埋没土からの出土であるが、本住居に伴うものであると考えるのが自然である。ただし、甕(14)については、古墳時代前期３世紀から４世紀にかけての遺物であり、下層からの混入であると思われる。図示した以外に、土師器（杯類６片、甕類180片）が出土している。　**所見（帰属時期）：**杯類、甕類を主体として９世紀第３四半期の住居であると考える。埋没土内の遺物は床直上出土遺物と時期差の少ないものであった。



510号住居　Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′
1　暗褐色土(10YR3/4)　ローム粒子を含まない。締まりあまりなく、粘性ややあり。
1′１層に比してローム粒子多量(30～50％)に含み、色調やや暗い。
2　褐色土(10YR4/4)　ロームブロック多量(15～25％)に含み、不均質。締まりあまりなく、粘性なし。
2′２層に比して締まり弱く、ローム粒子多量(15～25％)に含む。
3　にぶい黄褐色土(10YR6/4)　カマド粘土崩落層と考えられる。締まりややあり、粘性あまりなし。

510号住居１号貯蔵穴
1　黒褐色土(10YR2/2)　ロームブロック不規則。白色軽石若干（１～３％）含む。締まりややあり、粘性あまりなし。

第121図　鴫上Ｉ遺跡Ｂ区２面　510号住居



510号住居カマド　Ｃ－Ｃ′・Ｄ－Ｄ′

1　明褐色土(7.5YR5/6)　白色軽石、焼土粒を若干(１～３％)含む灰質粘土。

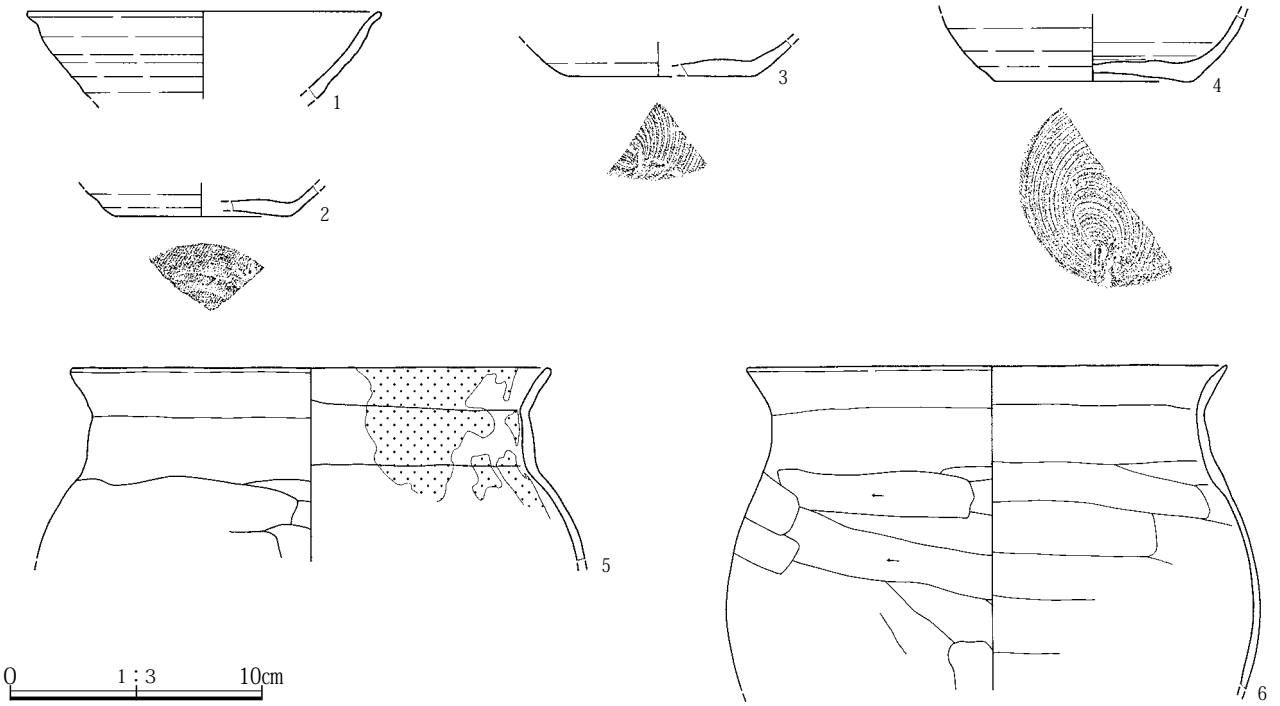
1′　１層に比べ、不均質で軽石粒多い。締まり粘性ともにややあり。

1″　にぶい赤褐色土(2.5YR4/4)　１層に比べ、色調明るく、焼土ブロックを乱れて多量(30～50％)に含む。

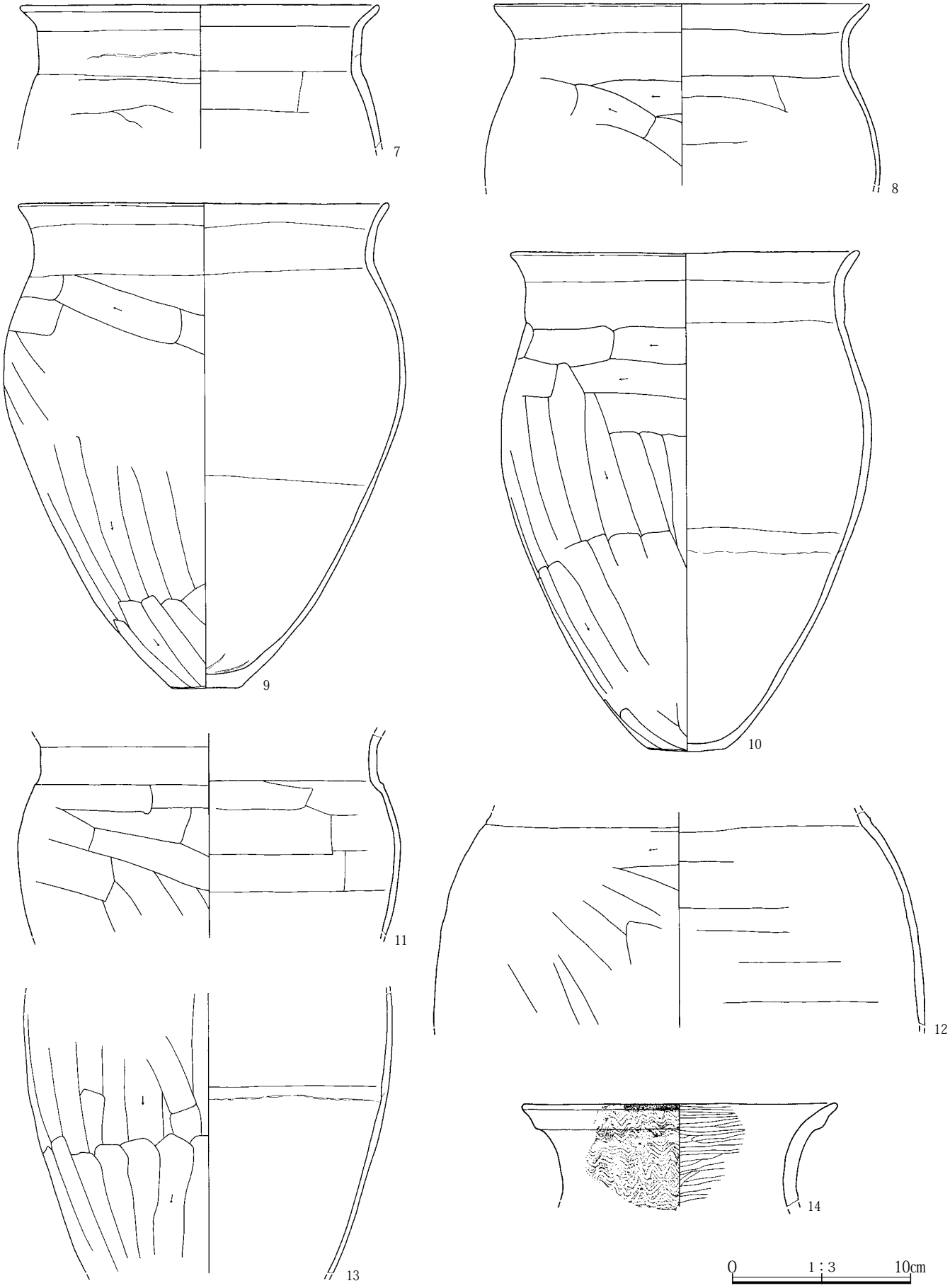
2　赤褐色土(2.5YR4/8)　焼締まった焼土ブロックを不均質に含む灰質粘土。締まり粘性ともにややあり。

3　黒褐色土(10YR3/1)　締まり欠き、粘性ややあるしっとりした灰質層。

3′　３層よりも乱れる。



第122図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　510号住居カマド、出土遺物(１)



第123図　鳴上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　510号住居出土遺物（２）

511号住居(第124図　PL.47)

調査区西部の住居群内にある。506号住居と重複しており、505号住居(３面)とは重複している可能性がある。506号住居に、中央部から南部にかけて床面を大きく壊され、全容が明らかでない。

位置：623 ～ 625・-891 ～ -895にある。

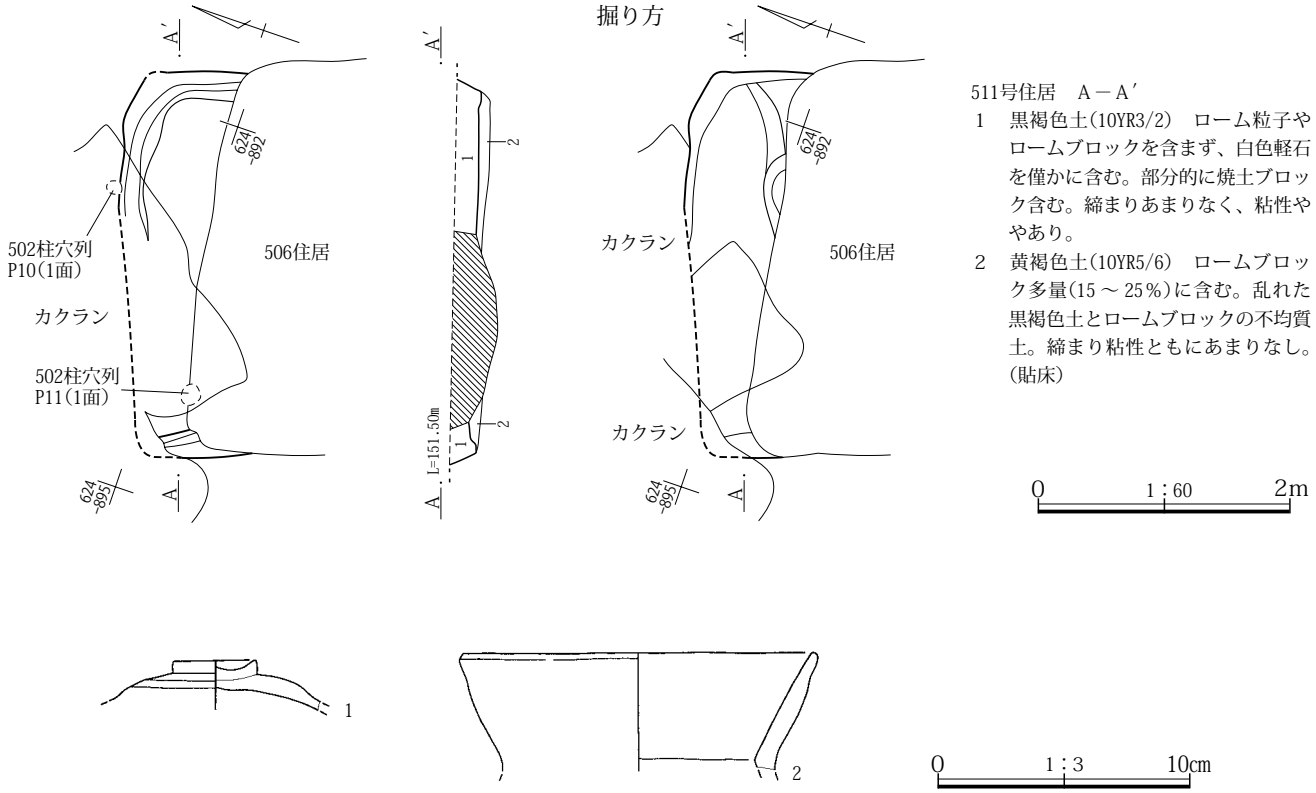
規模形状：主軸長3.07m、幅(0.76)mである。北辺は、外側に膨らんでいる。西辺、東辺は直線的であると思われる。方形を呈していると推察される。

埋没土・壁：黒褐色土で埋没している。白色軽石、焼土ブロックを含む。一層で一気に埋没しており、人為的な埋め戻しであると思われる。壁高は0.04 ～ 0.18mである。　**方位：**Ｎ－71°－Ｅ　**面積：**(1.90)㎡　**床面：**東に傾斜している。高低差は７㎝である。ほぼ平坦である。　**掘り方：**調査した範囲は、ほぼ全面に確認できた。深さは、５～８㎝程である。埋没土は、黄褐色土である。ロームブロックを多量に含む。黒褐色土とロームブロックの不均質土である。締まりはない。　**壁溝：**北辺、東辺、西辺に確認できた。幅10 ～ 20㎝、深さ５㎝程である。埋没土は、黒褐色土である。住居埋没土に準ずる。

ピット(柱穴)：認められない。　**貯蔵穴：**認められない。

カマド：認められない。　**重複遺構：**506号住居、502号柱穴列(１面)より古く、505号住居(３面)より新しい。

遺物：土師器１点(甕)、須恵器１点(甕)を図示した。住居北部を中心に遺物が出土した。土師器、甕(２)は掘り方からの出土であり、本住居に伴うものと考えられる。須恵器、蓋(１)は埋没土からの出土であり、本住居に伴うものであるか明瞭でない。図示した以外に、土師器(杯類３片、甕類26片)が出土している。　**所見(帰属時期)：**杯類、甕類を主体とした９世紀後半の住居であると考える。埋没土内の遺物は掲載した遺物と時期差の少ないものであった。



第124図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　511号住居

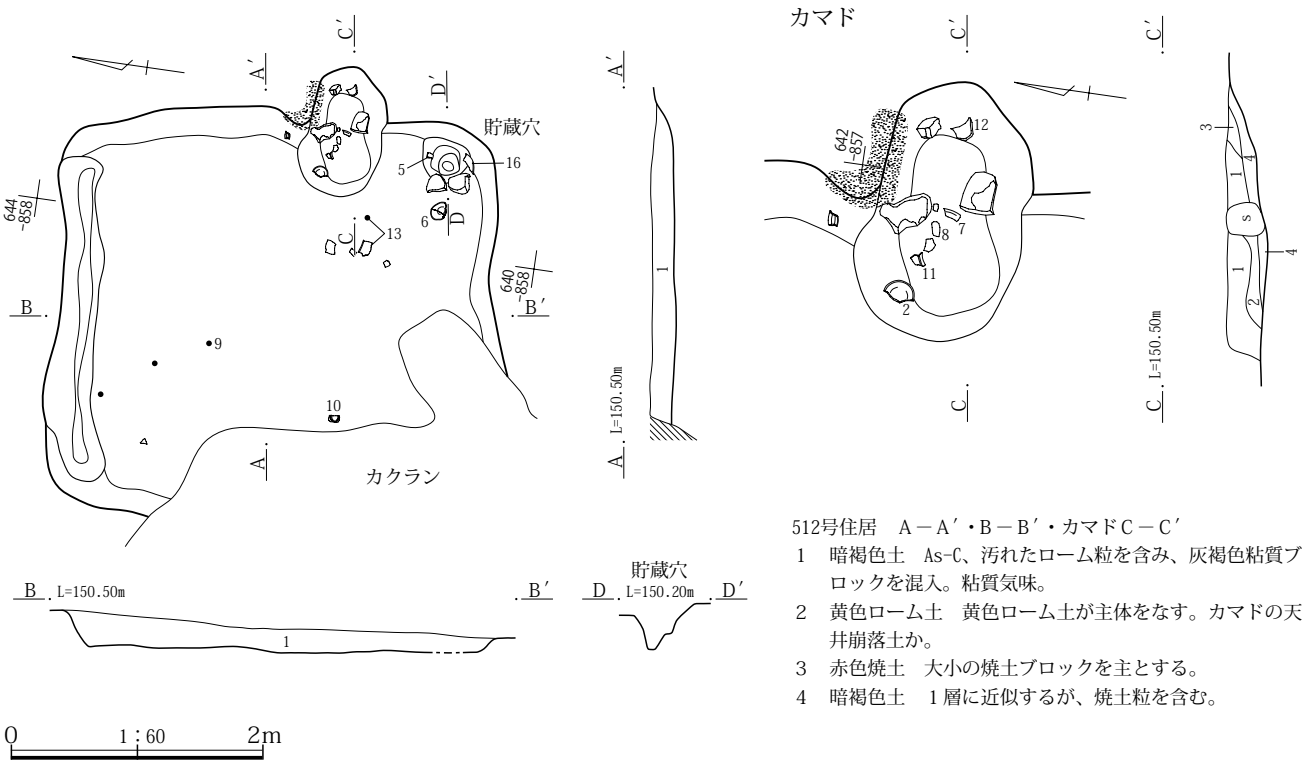
512号住居（第125～127図　PL.47・80）

調査区東部の住居群内にある。残存状態は良好でない。518号住居（３面）と重複している。

位置：640～643・-856～-860にある。

規模形状：主軸長3.22m、幅3.41mである。各辺歪んでいる。北東隅、北西隅、南東隅が丸みを帯びている。西辺から南西隅にかけて攪乱を受けている。南北にやや長い長方形を呈していると思われる。　**埋没土・壁：**暗褐色土で埋没している。As-C粒、ローム粒、灰褐色粘質土ブロックを含む粘質土である。一層で一気に埋没しており、人為的な埋め戻しであると思われる。壁高は0.11～0.31mである。　**方位：**N－85°－W　**面積：**(7.0)㎡　**床面：**傾斜はなく、緩やかな起伏を伴う。西辺から南西隅にかけて攪乱を受けて、使用面が壊されている。**掘り方：**認められない。　**壁溝：**北壁に認められる。幅30cm、深さ４cm程である。埋没土は、住居埋没土に準ずる。　**ピット（柱穴）：**認められない。　**貯蔵穴：**南東隅壁直下、カマドに近接する位置に窪みを確認する。位置と規模より貯蔵穴と考えられる。埋没土は、不明である。長径40cm、短径38cm、深さ27cmである。　**カマド：**東辺中央南寄りに位置する。現存全長103cm、現存幅67cm、焚口幅不明、燃焼部幅不明、煙道は確認できなかった。燃焼部は、住居内から壁外にかけてある。火床上からカマド焚口部にかけて土器片が確認された。袖は削平されているが、カマド燃焼部左部に粘土が確認される。両袖とも確認できないが、袖材が崩壊したものであると思われる。掘り方は、認められない。　**重複遺構：**518号住居（３面）に後出している。切り合いはなしか。

遺物：土師器４点（甕４点）、須恵器11点（杯４点、甕２点、椀５点）、灰釉陶器１点（椀１点）、鉄製品２点を図示した。住居北西部及び南東部、カマド焚口部及びカマド燃焼部を中心に遺物が確認された。土師器、甕(11)、須恵器、杯（２）はカマド床直上から、須恵器、甕(16)、椀（６・９）、灰釉陶器、椀(10)は床直上から、椀（５）は貯蔵穴床上28cmからの出土である。これらは、本住居に伴うものであると考える。須恵器、椀（７・８）はカマド



512号住居　A－A′・B－B′・カマドC－C′

1　暗褐色土　As-C、汚れたローム粒を含み、灰褐色粘質ブロックを混入。粘質気味。

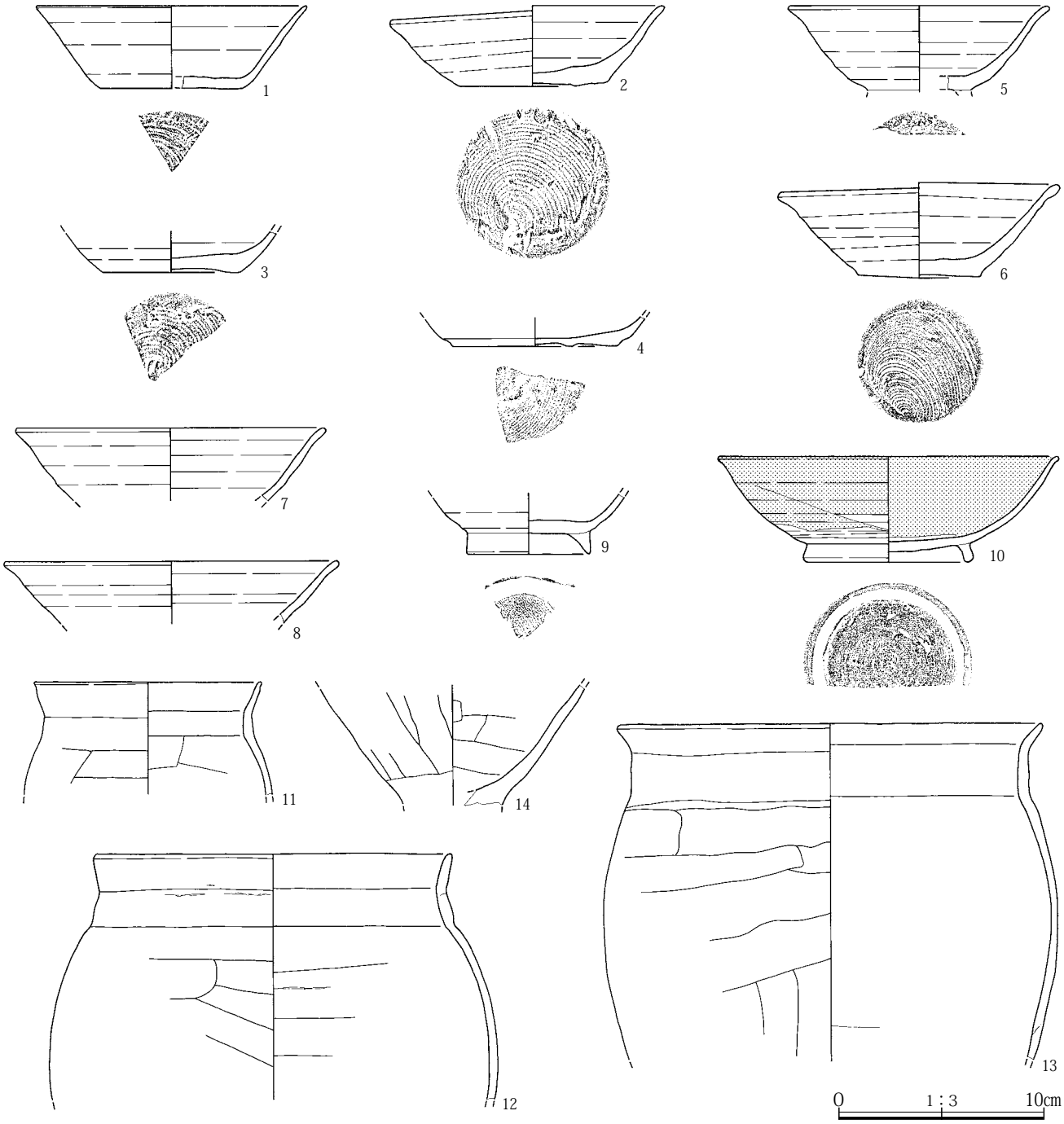
2　黄色ローム土　黄色ローム土が主体をなす。カマドの天井崩落土か。

3　赤色焼土　大小の焼土ブロックを主とする。

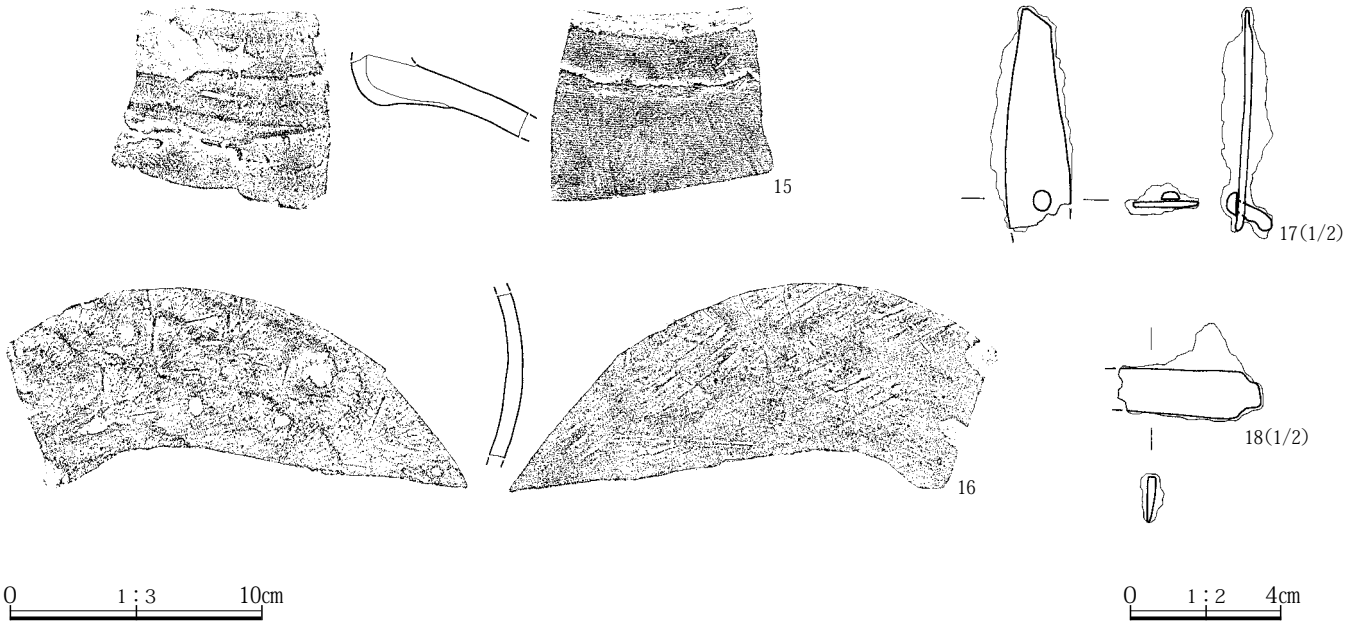
4　暗褐色土　１層に近似するが、焼土粒を含む。

第125図　鳴上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　512号住居

床上６～８㎝から、土師器、甕(12)はカマド床上７㎝から、甕(13)はカマド前床上８～12㎝からの出土であり、これらは、本住居に伴うとするのが自然である。土師器、甕(14)、須恵器、杯(１・３・４)、甕(15)、鉄製品(17)、鉄製品、刀子(18)は埋没土からの出土である。これらは、本住居に伴うものであるか明瞭でない。図示した以外に、土師器(杯類15片、甕類186片)、須恵器(杯類64片、甕類３片)、及び下層からの混入である弥生土器(弥生後期後半１片7.3ｇ)、弥生土器５片22ｇ、縄文土器(勝坂式２片12.7ｇ)、が出土している。　**所見(帰属時期)：**杯類、甕類、椀類を主体とする９世紀第４四半期から10世紀第１四半期にかけての住居であると考える。埋没土内の遺物は床直上出土遺物と時期的に差の少ないものであった。



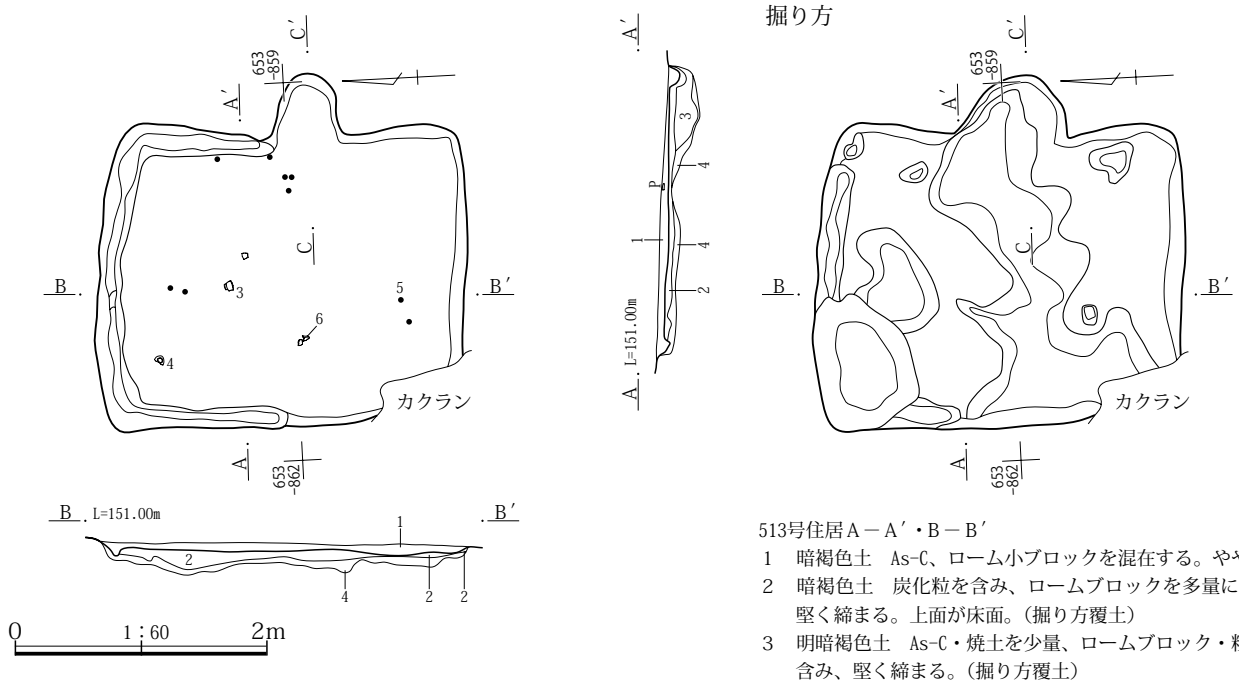
第126図　鳴上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　512号住居出土遺物(１)



第127図　鳴上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　512号住居出土遺物（２）

513号住居（第128図　PL.48・81）

調査区東部の住居群内にある。残存状態は良好でない。**位置：**651 ～ 654・-858 ～ -861にある。**規模形状：**主軸長2.34m　幅2.91mである。北辺は、外側に膨らんでいる。西辺、東辺、南辺はやや歪んでいる。南西隅が攪乱を受けている。南北に長い長方形を呈している。　**埋没土・壁：**暗褐色土で埋没している。As-C、ロームブロックを含み、粘質土である。一層で一気に埋没しており、人為的な埋め戻しであると思われる。壁高は0.03 ～ 0.08mである。　**方位：**Ｎ－93°－Ｅ　**面積：**〔5.28〕㎡　**床面：**東に傾斜している。高低差は４㎝程である。床面はほぼ平坦であるが、南部がやや下がっている。南西隅が攪乱を受けて、使用面が壊されている。**掘り方：**調査した範囲は、ほぼ全面に確認できた。深さは、６～ 24㎝程である。中央部東西帯状と北部に２つ落ち込みを確認する。埋没土は、明褐色土の上に暗褐色土が載っている。カマド焚口部に、明暗褐色土を挟む部分がある。暗褐色土は、上面の締まりが強く床面である。**壁溝：**北辺及び、東辺、西辺の北半分に確認できた。幅16 ～ 24㎝、深さ６㎝程である。埋没土は、暗褐色土であり、住居本体の埋没土に準ずる。　**ピット（柱穴）：**認められない。　**貯蔵穴：**認められない。　**カマド：**東辺中央僅か南寄りに位置する。残存全長59㎝、残存幅57㎝、焚口幅不明、燃焼部幅不明、煙道は確認できなかった。燃焼部は、住居内から壁外にかけてある。両袖とも確認できない。カマド本体はほとんど削平され、床面上に薄く黒色灰が確認される。掘り方は、火床下に10㎝前後の掘り込みが確認でき、埋没土は暗褐色土である。炭化粒及びロームブロックを含み、締まりが強い。　**重複遺構：**なし。　**遺物：**土師器２点（杯１点、甕１点）、須恵器４点（杯１点、椀３点）を図示した。住居北部、西部、南部、カマド左前部から点在するように遺物が確認された。須恵器、椀（３・４・５）は床直上からの出土であり、本住居に伴うものと考えられる。土師器、杯（１）はカマド埋没土から、甕（６）は床上６㎝からの出土であり、本住居に伴うものとするのが自然である。須恵器、杯（２）は埋没土からの出土であり、本住居に伴うか明瞭でない。図示した以外に、土師器（杯類４片、甕類44片）、須恵器（杯類７片、甕類５片）、及び下層からの混入である縄文土器（勝坂式１片7.5ｇ）、が出土している。　**所見（帰属時期）：**杯類、甕類、椀類を主体とした９世紀第４四半期の住居であると考える。埋没土内の遺物は床直上出土遺物と時期差の少ないものであった。



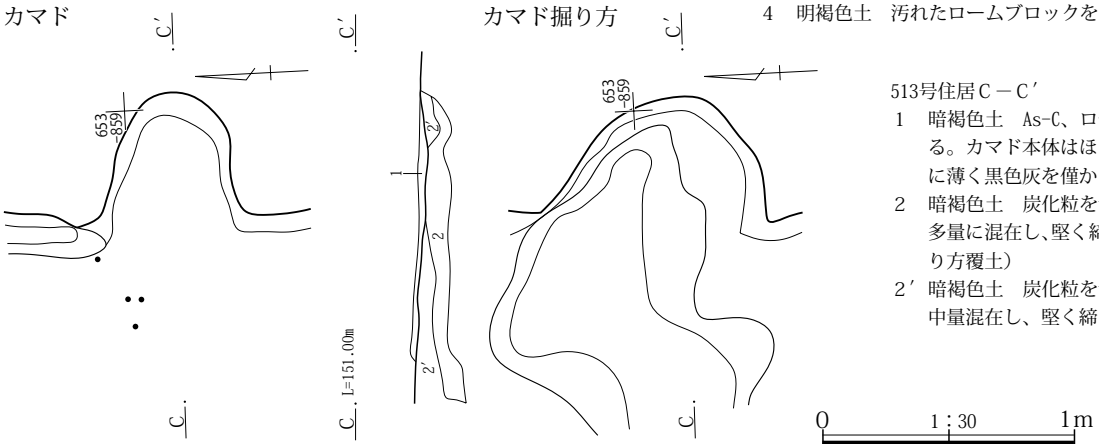
513号住居Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′

1　暗褐色土　As-C、ローム小ブロックを混在する。やや粘質。

2　暗褐色土　炭化粒を含み、ロームブロックを多量に混在し、堅く締まる。上面が床面。（掘り方覆土）

3　明暗褐色土　As-C・焼土を少量、ロームブロック・粒を多く含み、堅く締まる。（掘り方覆土）

4　明褐色土　汚れたロームブロックを主とする。（掘り方覆土）

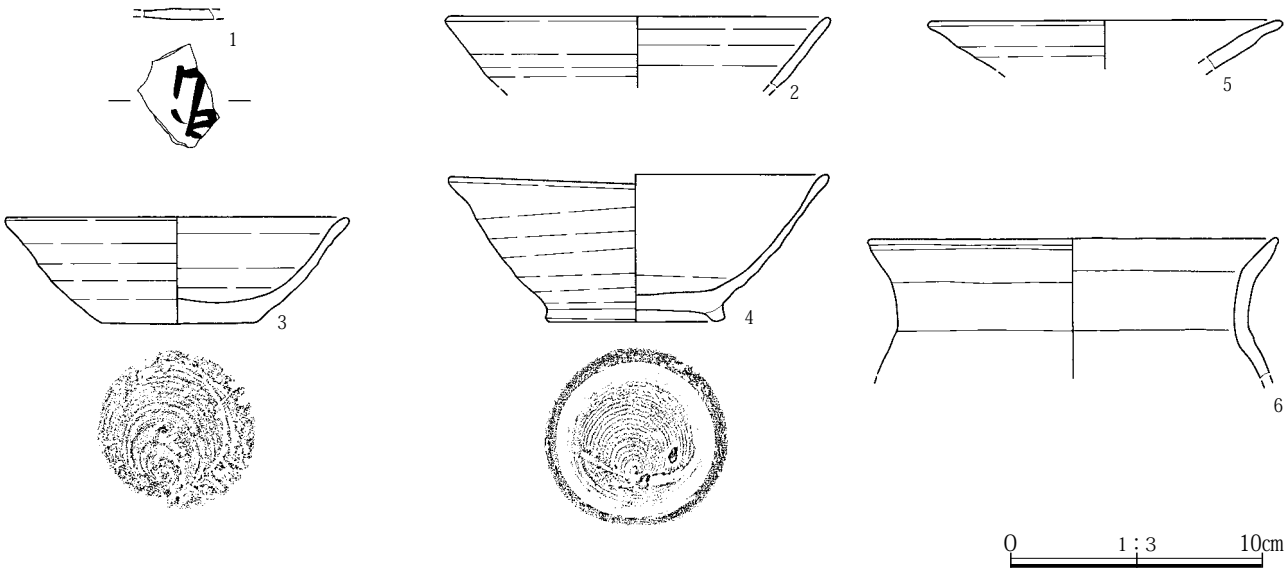


513号住居Ｃ－Ｃ′

1　暗褐色土　As-C、ローム小ブロックを混在する。カマド本体はほとんど削平され、床面上に薄く黒色灰を僅かに確認できる。

2　暗褐色土　炭化粒を含み、ロームブロックを多量に混在し、堅く締まる。上面が床面。（掘り方覆土）

2′　暗褐色土　炭化粒を含み、ロームブロックを中量混在し、堅く締まる。



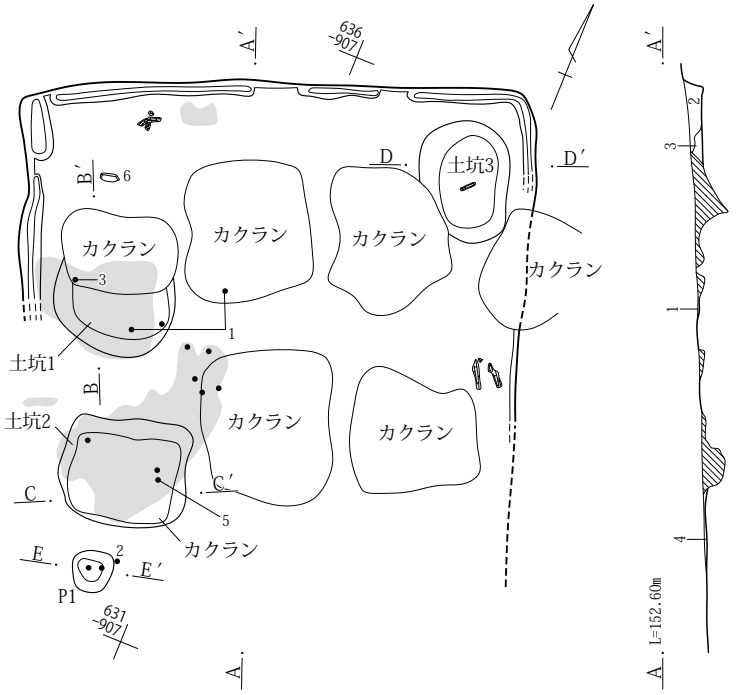
第128図　鳴上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　513号住居

520号住居(第129・130図　PL.48・49・81)

調査区北西部の住居群内にある。削平が進み攪乱も多いことから、残存状態は良好でない。

位置：631 ～ 636・-904 ～ -909にある。

規模形状：主軸長計測不能、幅4.10mである。各辺歪んで、若干外側に張り出している。整った方形を呈していると推察される。　**埋没土・壁：**粘性のあるにぶい黄褐色土及び暗褐色土で埋没している。ローム粒を含む。人為的な埋め戻しであるか明瞭でない。壁高は0.06 ～ 0.18mである。　**方位：**Ｎ－21°－Ｗ　**面積：**計測不能。　**床面：**南東に傾斜している。高低差は６㎝程である。若干の起伏を伴うがほぼ平坦であると思われる。西部の土坑上には、焼土の分布が確認できる。住居全面にわたり攪乱が広がっており、使用面を大きく壊されている。　**掘り方：**認められない。　**壁溝：**西辺の一部、北辺全体、東辺の一部に確認できる。西辺のものは、幅10 ～ 15㎝程、深さ不明である。北辺のものは、幅６～９㎝、深さ３㎝程である。東辺のものは、幅６～８㎝、深さ４㎝程である。埋没土は、ロームブロックを含む黒褐色土であり、住居埋没土に準じている。　**ピット(柱穴)：**１基を確認した。位置、規模及び深さより、Ｐ１は、規則的な主柱穴配置による柱穴であると思われる。長径33㎝、短径31㎝、深さ19㎝である。埋没土は、ローム粒を含む暗褐色土及びAs-C軽石を含む黒褐色土であり、住居埋没土に準じている。　**貯蔵穴：**認められない。　**土坑：**西壁際に２基、北東部隅に１基を確認した。土坑１の規模は、長径97㎝、短径(76)㎝、深さ24㎝である。埋没土は、暗褐色土及びにぶい黄褐色土で、ローム粒を含む。土坑２の規模は、長径101㎝、短径86㎝、深さ28㎝である。埋没土は、暗褐色土及びにぶい黄褐色土である。ローム粒を含む。土坑１・２は、共に上層に焼土の分布を伴う。土坑３の規模は、長径96㎝、短径71㎝、深さ22㎝である。埋没土は、暗褐色土で、ローム粒及び炭化物を含む。埋没土が類似しており、同時期の埋没であると思われる。　**カマド：**認められない。　**重複遺構：**なし。　**遺物：**土師器５点(杯３点、鉢１点、甕１点)、礫石器１点(磨石)を図示した。杯(１・３)は土坑１から、杯(２)は南西部から、鉢(４)、甕(５)は土坑２からの出土であった。これらの遺物は、本来カマドを伴う住居のものである。非掲載遺物として、土師器129片(甕類94片、杯類35片)、須恵器30片(甕類５片、杯類23片)が出土した。また、磨石(６)が床上３㎝から出土している。　**所見(帰属時期)：**埋没土及び出土遺物より、同調査区で確認された古墳時代の住居と同時期に相当すると推察される。５世紀後半から６世紀前半であると考える。

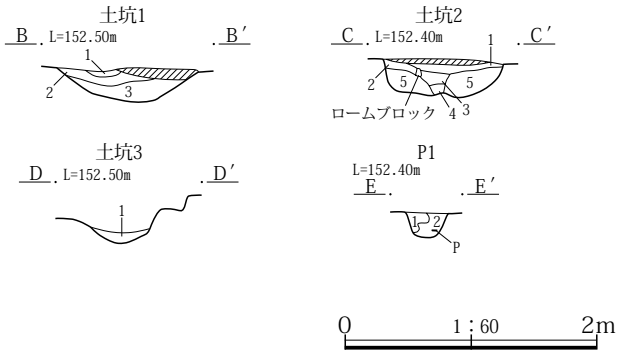


520号住居　Ａ－Ａ′

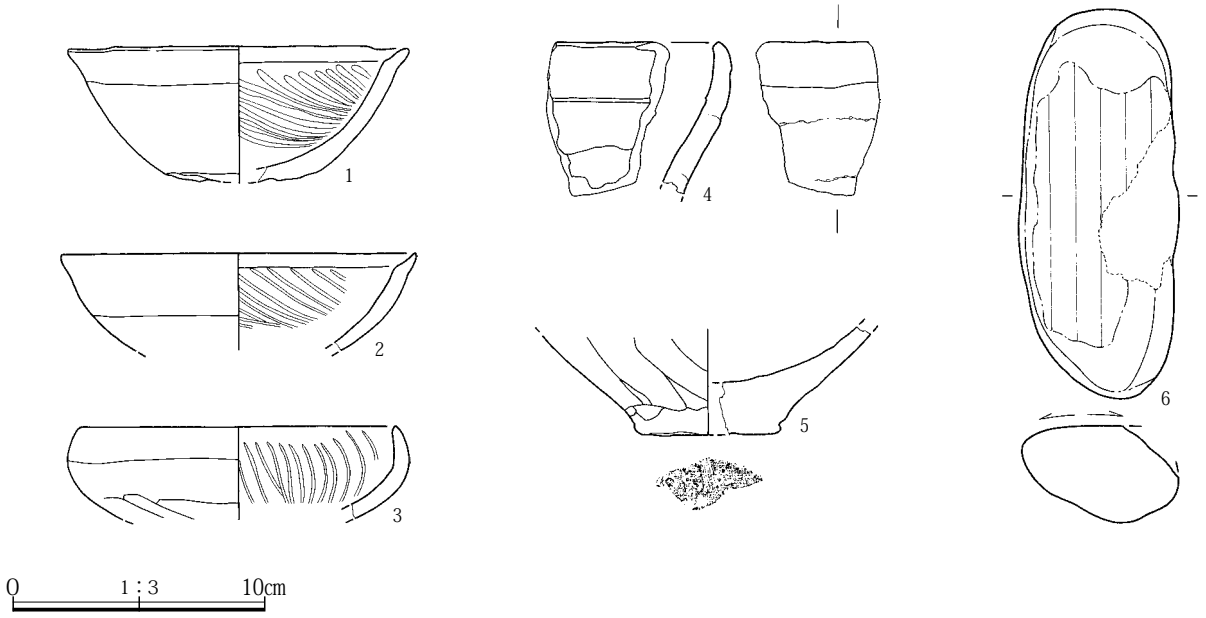
1　暗褐色土(7.5YR3/4)　ローム土粒少量含む。淡い色調。
2　暗褐色土(10YR3/4)　黄橙色ローム粒僅かに含む。淡い色調。
3　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　黄橙色ローム粒少量含む。やや粘性が強い。濃い色調。
4　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　黄橙色ローム粒僅かに含む。濃い色調。３層に類似。

0　1：60　2m

第129図　鳴上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　520号住居



520号住居　土坑１　Ｂ－Ｂ′
1　暗褐色土(10YR3/4)　黒色土粒僅かに含む。淡い色調。
2　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　黒色土粒、ローム土粒少量含む。
3　暗褐色土(10YR3/3)　黒色土粒、ローム土粒僅かに含む。
520号住居　土坑２　Ｃ－Ｃ′
1　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　ローム土粒少量含む。
2　赤褐色土(５YR4/6)　焼土少量含む。濃い色調。
3　暗褐色土(10YR3/4)　ローム土粒僅かに含む。淡い色調。
4　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　ローム土粒少量含む。やや粘性が強い。
5　暗褐色土(10YR3/3)　ローム土僅かに含む。濃い色調。
520号住居　土坑３　Ｄ－Ｄ′
1　暗褐色土(10YR3/4)　ローム土、炭化物僅かに含む。淡い色調。
520号住居　Ｐ１　Ｅ－Ｅ′
1　黒色土(10YR2/1)　As-C軽石少量含む。締まり弱い。濃い色調。
2　暗褐色土(10YR3/4)　焼土粒、ローム粒僅かに含む。淡い色調。



第130図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　520号住居断面、出土遺物

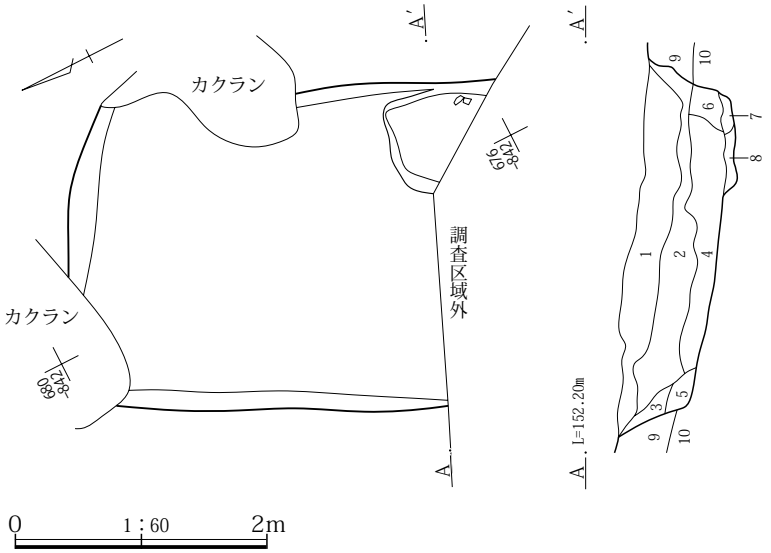
523号住居(第131図　PL.49)

調査区北東部の住居群内にある。削平が進んでおり、残存状態は良好でない。住居南部が調査区域外にある。

位置：675～679・-840～-843にある。

規模形状：長軸長(3.10)m、短軸長2.44mである。各辺やや歪んでいる。南北に長い長方形を呈していると思われる。　**埋没土・壁：**黒褐色土で埋没している。ローム粒、As-C軽石、焼土粒を含む。壁際から埋没しており、人為的な埋め戻しであると思われる。壁高は0.13～0.20mである。　**方位：**Ｎ－118°－Ｅ　**面積：**(6.37) ㎡　**床面：**東に傾斜している。高低差は大きく20㎝程である。僅かな起伏があるが、おおよそ平坦である。南東隅に土坑状の掘り込みが確認される。黒褐色土で埋没しており、焼土粒を含む。　**掘り方：**認められない。　**壁溝：**認められない。　**ピット(柱穴)：**認められない。　**貯蔵穴：**認められない。　**床下土坑：**認められない。　**カマド：**認められない。　**重複遺構：**なし。　**遺物：**認められない。

所見(帰属時期)：形状、埋没土より古墳時代の住居であると思われるが、より細かな比定は困難である。



523号住居　Ａ－Ａ′
1　黒褐色土(10YR2/3)　As-C軽石、焼土小粒微量含む。
2　黒褐色土(10YR2/2)　ソフトロームや焼土小塊、ローム小粒30％程含む。
3　黒色土(7.5YR2/1)　軽石や他の土を含まず均質。
4　黒褐色土(7.5YR2/2)　ローム小粒と焼土小粒不均質に５％程含む。
5　ローム層に焼土中粒10％程含む。
6　６層にAs-C軽石を少量含む。
7　10層とローム層の塊状混土層
8　黒褐色土(10YR2/2)　焼土小粒５％以下含む。
9　黒褐色土(10YR3/2)　均質土。本住居の地山。
10　黒褐色土(10YR3/2)　橙色軽石粒微量含む。本住居の地山。確認面。

第131図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　523号住居

525号住居(第132・133図　PL.49・50・81)

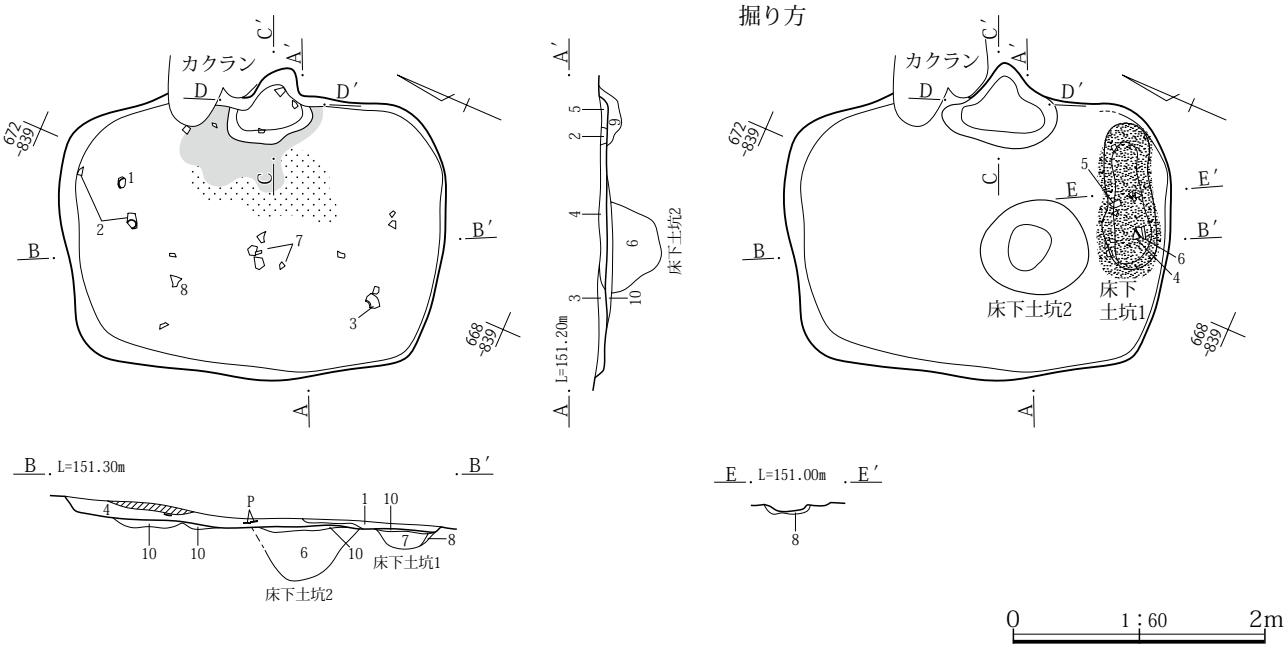
調査区北東部の住居群内にある。削平が進んでおり、残存状態は良好でない。

位置：668～671・-837～-840にある。

規模形状：主軸長2.10m、幅2.92mである。各辺外側に張り出している。南北に長い、丸みを帯びた小型の住居である。　**埋没土・壁：**As-C軽石及び焼土を含む黒褐色土で埋没している。自然堆積であるか、人為的な埋め戻しであるか明瞭でない。壁高は0.03～0.11mである。

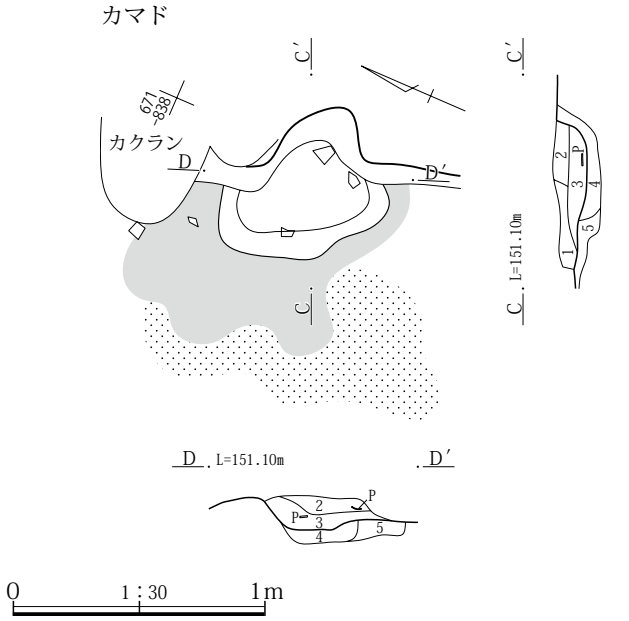
方位：Ｎ－67°－Ｅ　**面積：**5.38㎡　**床面：**南に傾斜している。高低差は10cm前後と大きい。緩やかな起伏が認められるが、ほぼ平坦である。カマドの焚口部に焼土が分布しており、周辺に硬化面を認める。　**掘り方：**ほぼ全面に確認できた。中央部及び壁際は、やや層が浅い。埋没土は、As-C軽石を含む黒褐色土である。使用されて固く締まっている。深さは３～６cm前後である。　**壁溝：**認められない。　**ピット(柱穴)：**認められない。　**貯蔵穴：**認められない。　**床下土坑：**住居中央南寄り、及び南壁直下に窪みを確認する。位置と規模より床下土坑と思われる。床下土坑１は、長径116cm、短径44cm、深さ15cmである。東西に長い土坑である。埋没土は黒褐色土であり、焼土及び炭化物を含んでいる。表層にはほぼ全面に粘土が確認できる。床下土坑２は、長径87cm、短径76cm、深さ39cmである。楕円形を呈している。埋没土は、黒褐色土であり、暗褐色土ブロックを含む人為的埋め戻しである。床下土坑１とほぼ同時期の閉設であると考える。　**カマド：**東辺中央やや南寄りに位置する。残存全長36cm、残存幅63cm、焚口幅不明、燃焼部幅26cmである。煙道は確認できなかった。燃焼部は、住居内から壁際に位置している。袖は確認されなかった。掘り方は、火床下に５cm前後認められ、焼土層で埋没している。　**重複遺構：**507・508号土坑、527号住居(３面)に後出している。527号住居との切り合いはない。　**遺物：**土師器２点(甕)、須恵器６点(椀５点、甕１点)を図示した。カマド周辺及び住居全体から散見するように遺物が出土した。

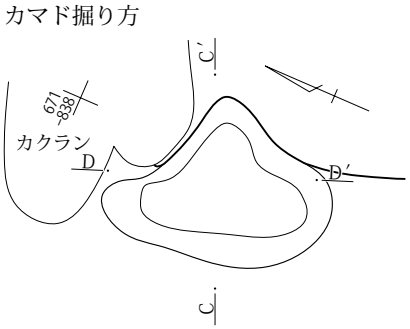
椀(３)は床直上から、椀(４)、土師器、甕(６)は床下土坑１床直上からの出土であった。これらの遺物は本住居に伴うと考えられる。また、椀(１)は床直上及び埋没土から、椀(２)は床直上及び床上11cmから、椀(５)は床下土坑１床直上及び埋没土から、土師器、甕(７)は床直上及び床上８cmから、甕(８)は床上８cmからの出土であった。これらの遺物は、本住居に伴うものと考えるのが自然である。非掲載遺物として、土師器５片(甕類１片、杯類４片)、須恵器18片(甕類２片、杯類16片)が出土している。　**所見(帰属時期)：**椀類、甕類を主体とした９世紀後半から10世紀前半の住居であると考える。埋没土内の遺物は床直上出土遺物と時期的に差の少ないものであった。



525号住居　Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′、床下土坑１　Ｅ－Ｅ′

1　黒褐色土(7.5YR2/2)　As-C軽石、焼土小粒微量含む。
2　にぶい黄橙色土(10YR7/4)　ソフトローム塊。
3　黒褐色土(7.5YR3/2)　As-C軽石含む。焼土小粒５％程含む。
4　黒褐色土(7.5YR2/2)　As-C軽石含む。
5　黒褐色土(7.5YR3/2)　As-C軽石含む。焼土小粒20％程含む。
6　黒褐色土に暗褐色土小塊30％程含む。人為堆積。(床下土坑２)
7　黒褐色土(10YR2/3)　炭化物、焼土小粒５％以下含む。人為堆積か否か土層のみでは判断不可能。(床下土坑１)
8　にぶい黄橙色土(10YR6/4)　シルトに近い細かく、粘性のない土を敷く。(床下土坑１)
9　黒褐色土に焼土小粒30％程含む。
10　１層と同じ土であるが、525号住居の床として使用されて硬化した部分。

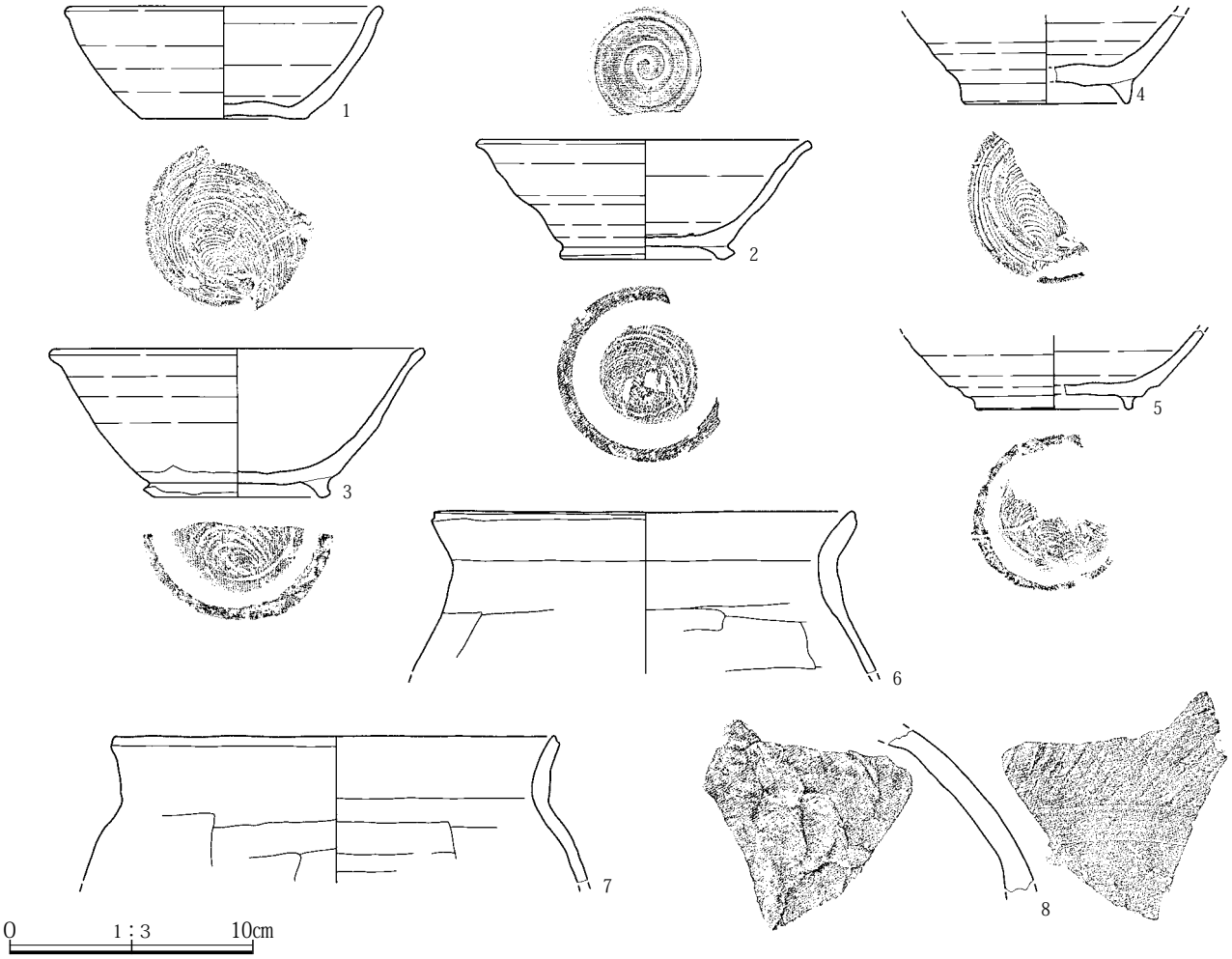




525号住居　カマド　Ｃ－Ｃ′・Ｄ－Ｄ′

1　ソフトロームを主体とし、暗褐色土と焼土中粒～大粒20％程含む。
2　黒褐色土(7.5YR2/2)　焼土小粒10％程含む。
3　黒褐色土(7.5YR2/2)　焼土小粒20％程含む。
4　焼土層
5　黒褐色土(10YR3/1)　焼土小粒５％程含む。

第132図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　525号住居



第133図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　525号住居出土遺物

526号住居（第134～136図　PL.50・81）

調査区北東部の住居群内にある。炭化物の出土が確認された。住居南が検出されなかったが、調査範囲の残存状態は良好である。

位置：661～666・-843～-850にある。

規模形状：主軸長5.08m、幅4.76mである。各辺直線的である。全体としては正方形を呈している。 **埋没土・壁：**暗褐色土で埋没している。ローム粒、焼土粒、炭化物を含む。As-C軽石を含む黒褐色土が混ざる。黄褐色土及びにぶい黄褐色土の壁際からの埋没が観察される。人為的な埋め戻しであると思われる。壁高は0.28mである。

方位：Ｎ－79°－Ｗ　**面積：**（13.83）㎡　**床面：**東に大きく傾斜している。高低差は30㎝程あり、東部が低い。若干の起伏はあるが全体的に平坦である。住居北部を中心に炭化材が確認できる。長い炭化材が、主柱穴であるＰ３を基点にして北西隅方向へ向いている。焼失の際、垂木が崩落した可能性が考えられる。炭化材の周囲に焼土塊の分布が見られる。　**掘り方：**南東部を除いて、ほぼ全面に確認できた。黒褐色土で埋没しており、ローム粒を含み、締まりがある。深さは４～６㎝程である。中央付近に径150㎝ほどの掘り込みが確認できる。深さは26㎝程である。埋没土は、黒褐色土であり、ロームブロックを含む。床下土坑の可能性もあるが、明瞭でない。

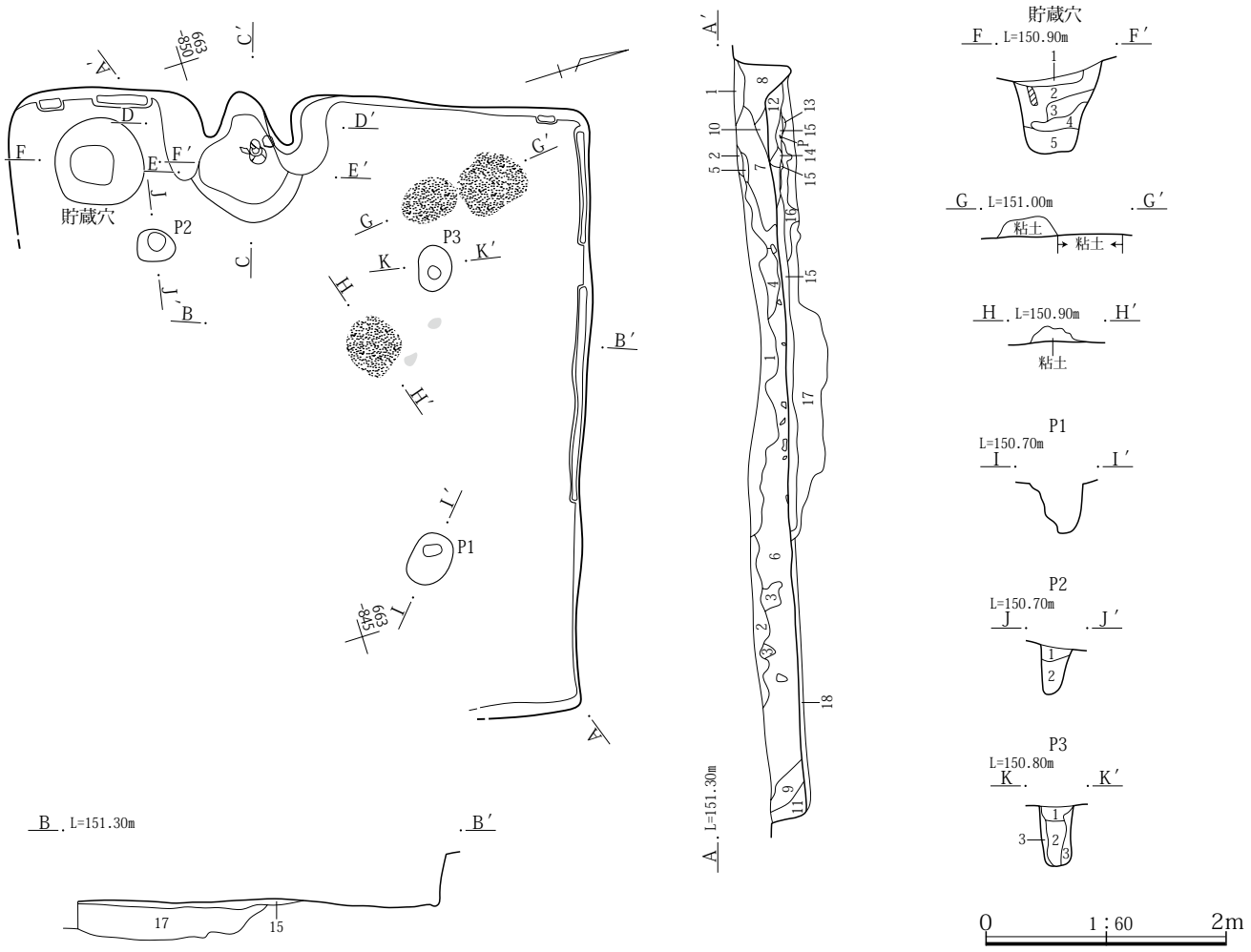
壁溝：カマド南と北辺に認められた。埋没土は、ローム粒を含むにぶい黄褐色土であり、一部の住居埋没土に準ずる。カマド南の壁溝は、幅16㎝、深さ20㎝程である。北辺の壁溝は、幅８～12㎝、深さ３㎝程である。　**ピット（柱穴）：**全部で３基が確認された。Ｐ１・２・３は、規則的な主柱穴配置による柱穴であると思われる。南東部に４基目の主柱穴が想定される。各柱穴の規模及び埋没土の傾向は次の通りである。

（長径×短径×深さ㎝）

Ｐ１：44×34×44　　Ｐ２：32×28×39
Ｐ３：38×28×51

暗褐色土及び褐色土で埋没しており、ロームブロックを含む。Ｐ３は周囲が黄橙色土で埋没しており、柱痕が観察される。埋没土は類似しており、同時期の埋没であると思われる。

貯蔵穴：南西隅壁直下で確認された。配置と規模より貯蔵穴と思われる。埋没土は、にぶい黄褐色土、極暗褐色土、黒褐色土である。ロームブロックを含む。長軸76㎝、短軸73㎝、深さ64㎝である。なお、埋没土が住居本体及びピットと類似していないため、それら以前に閉設された可能性がある。　**床下土坑：**認められない。　**カマド：**西辺中央やや南寄りに位置する。現存全長76㎝、幅136㎝、焚口幅74㎝、燃焼部幅58㎝である。煙道は確認できなかった。燃焼部は、住居内に位置しており、火床上面は焼土を多く含んでいる。袖材は黄褐色土であり、若干粘性を有する。掘り方は、火床下に12㎝前後認められた。埋没土は、黒褐色土である。ローム粒、焼土粒を含んでいる。焚口石の抜き取り穴が左右に観察される。　**重複遺構：**なし。　**遺物：**土師器２点（杯１点、高杯１点）、礫石器２点（磨石）を図示した。カマド及び住居西部を中心に遺物が出土した。杯（１）は掘り方から、高杯（２）はカマド床直上からの出土である。これらの遺物は、本住居に伴うものと考えられる。また、磨石（３）は床上11㎝から、磨石（４）は床直上から出土している。非掲載遺物として、土師器43片（甕類33片、杯類10片）が出土している。　**所見（帰属時期）：**杯類を主体とした６世紀前半の住居である。埋没土内の遺物は床直上出土遺物と時期的に差の少ないものであった。



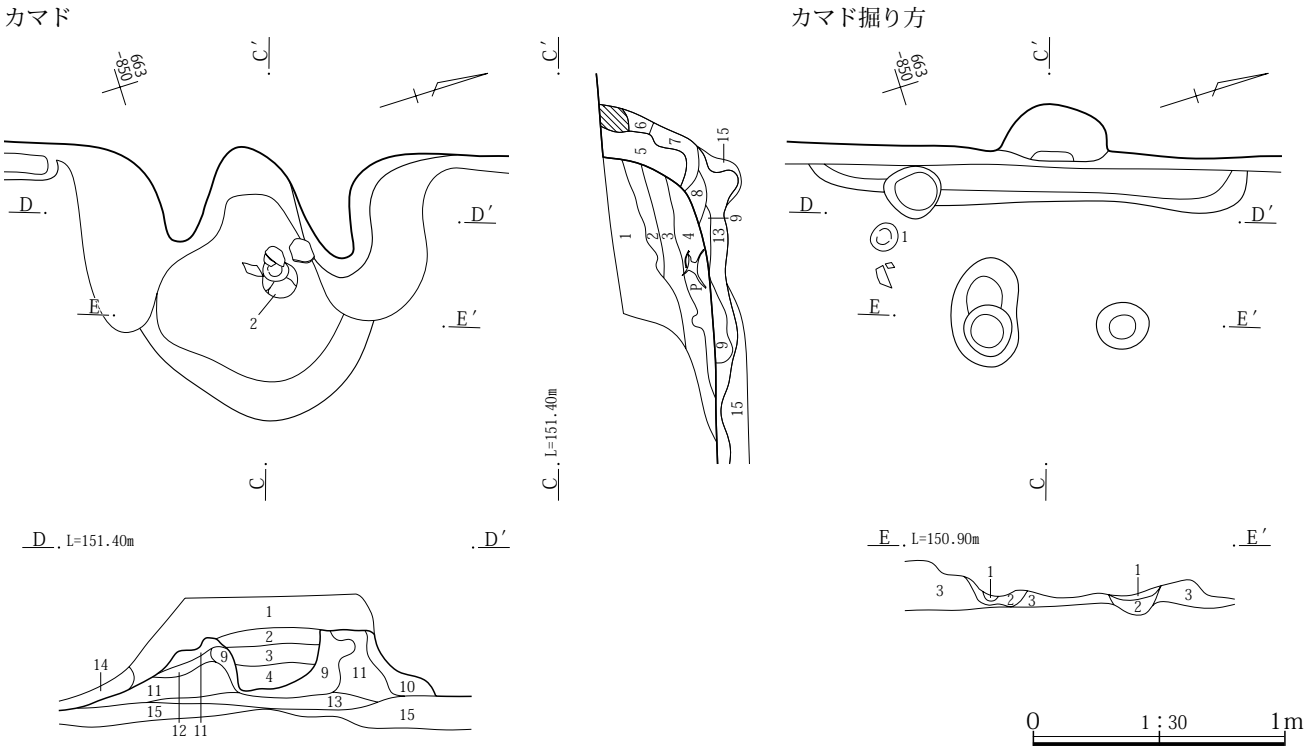
第134図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　526号住居

526号住居　Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′
1　暗褐色土(10YR3/4)　黄橙色ローム粒僅かに含む。淡い色調。
2　暗褐色土(10YR3/3)　白色粒僅かに含む(As-C軽石)。濃い色調。
3　黒褐色土(10YR3/1)　黒色土、As-C軽石多量含む。濃い色調。
4　褐色土(10YR3/2)　暗褐色土僅かに、黄橙色ローム土多量含む。濃い色調。
5　黒褐色土(10YR3/1)　黒色土、As-C軽石多量含む。濃い色調。３層に類似。
6　暗褐色土(10YR3/4)　黒色土僅かに、黄橙色ローム粒少量、焼土粒僅かに、炭化物少量含む。
7　黄橙色土(10YR7/8)　黄橙色ロームブロック･粒多量含む。淡い色調。
8　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　白色粒僅かに、黄橙色ローム粒少量含む。淡い色調。
9　黄橙色土(10YR8/6)　黄橙色ローム粒多量含む。淡い色調。
10　黒褐色土(10YR3/2)　黒色土少量含む。黄橙色ローム粒僅かに含む。淡い色調。
11　暗褐色土(10YR3/3)　黒色土僅かに、黄橙色ローム粒少量含む。濃い色調。壁の崩れか。
12　にぶい黄橙色土(10YR6/4)　カマド左側壁体上部と同じ土。
13　12層と焼土小粒の混土層
14　12層と灰・焼土小粒の混土層
15　ハードロームと黒褐色土小塊の混土層　固く締まる。貼床。
16　黒褐色土(10YR2/2)　ローム小塊10％程含む。住居掘り方。
17　黒褐色土を主体とし、ハードローム小粒～小塊40％含む。住居掘り方。
18　黒褐色土(10YR3/2)　ローム粒少量含む。

526号住居　貯蔵穴　Ｆ－Ｆ′
1　ソフトロームと黒褐色土の混土層
2　極暗褐色土(7.5YR2/3)　ソフトローム小粒～大粒10％程含む。
3　橙色土(7.5YR7/6)　極暗褐色土小粒～大粒10％程含む。
4　ソフトロームを主体とし、極暗褐色を不均質に20％程含む。
5　にぶい褐色土(7.5YR5/3)　ソフトローム大粒を５％程含む。

526号住居　Ｐ２　Ｊ－Ｊ′
1　褐色土(10YR4/4)　黄橙色ローム粒僅かに含む。
2　暗褐色土(10YR3/3)　黒色土粒少量、黄橙色ローム粒僅かに含む。

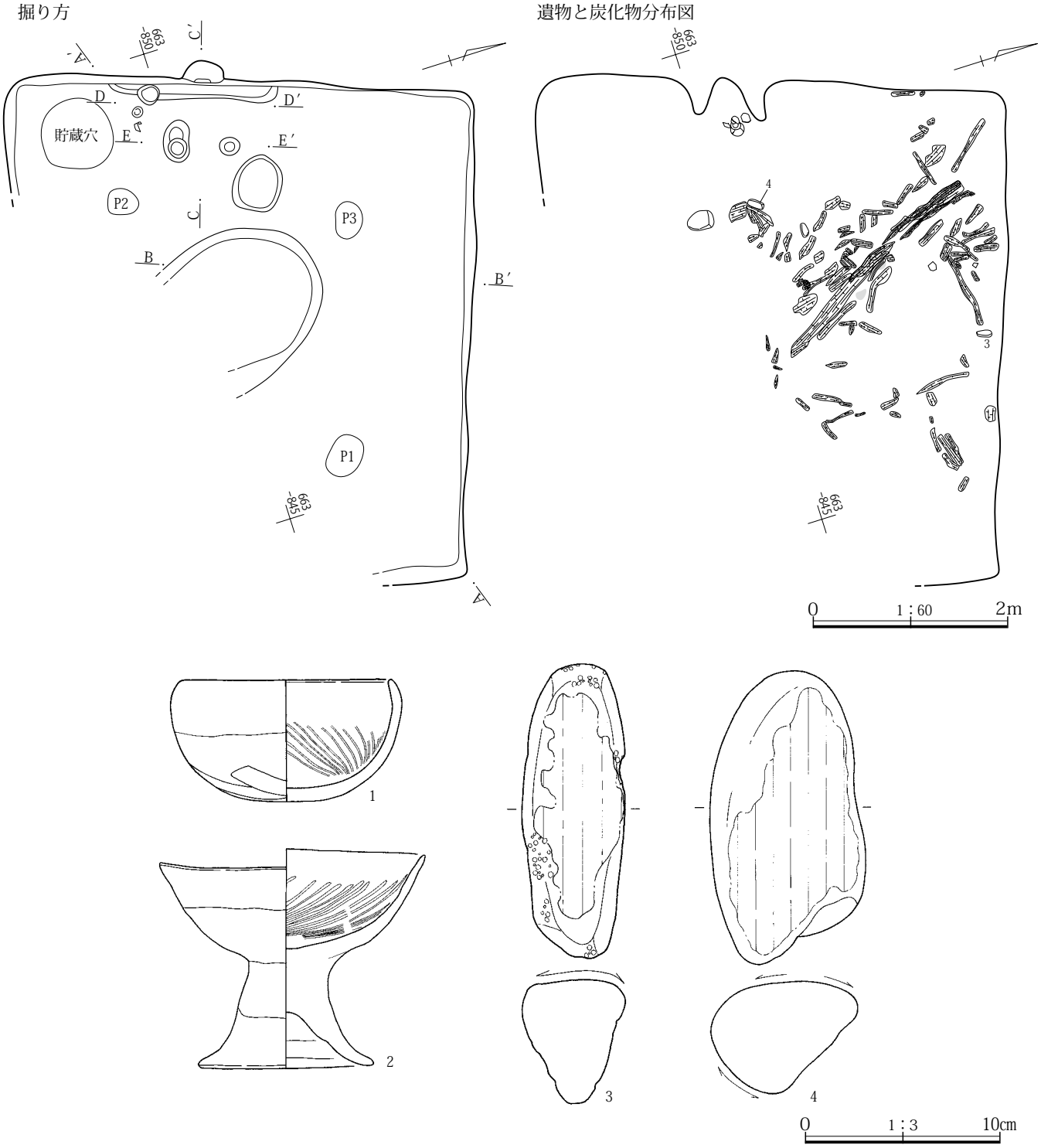
526号住居　Ｐ３　Ｋ－Ｋ′
1　褐色土(10YR4/4)　黄橙色ローム粒僅かに含む。
2　暗褐色土(10YR3/3)　黒色土粒少量、黄橙色ローム粒僅かに含む。
3　黄橙色土(10YR8/6)　黄橙色ローム粒多量含む。濃い色調。



526住居　カマド　Ｃ－Ｃ′・Ｄ－Ｄ′
1　黒褐色土(10YR3/1)　焼土小粒５％以下含む。
2　にぶい褐色土(7.5YR5/3)　焼土中粒５％程含む。
3　にぶい褐色土(7.5YR6/3)　ローム粘土化した部分不均質に30％程含む。
4　黒褐色土(10YR2/3)　黒色灰と炭化物を主体とし、焼土小粒～大粒20％程含む。
5　黒褐色土(10YR3/1)　焼土小粒～中粒５％程含む。
6　暗褐色土(7.5YR3/3)　ローム小粒５％程含む。
7　５層と焼土との不均質な混土層
8　にぶい赤褐色土(2.5YR5/4)　暗褐色土に焼土小粒20％程含む。
9　赤橙色土(10R6/8)　焼土小粒～極大粒50％程含む。
10　橙色土(7.5YR7/6)　若干粘性がある。
11　にぶい橙色土(7.5YR6/4)　若干粘性がある。
12　にぶい橙色土(5YR6/4)　焼土不均質に10％程含む。
13　黒褐色土(10YR3/1)　ローム小粒５％程含む。
14　黒褐色土(10YR3/1)　焼土小粒下部に含む。黒色土中粒５％程含む。
15　ハードロームと黒褐色土小塊の混土層(貼床)。

526号住居　カマド　Ｅ－Ｅ′
1　焼土小粒に軟らかいローム10％程含む。焚き口石の抜き取り穴。
2　軟らかいロームに黒褐色土小粒10％程含む。焚き口石の抜き取り穴。
3　ハードロームと黒褐色土小塊の混土層(貼床)。

第135図　鴫上Ｉ遺跡Ｂ区２面　526号住居カマド



第136図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　526号住居掘り方、出土遺物

（２）掘立柱建物

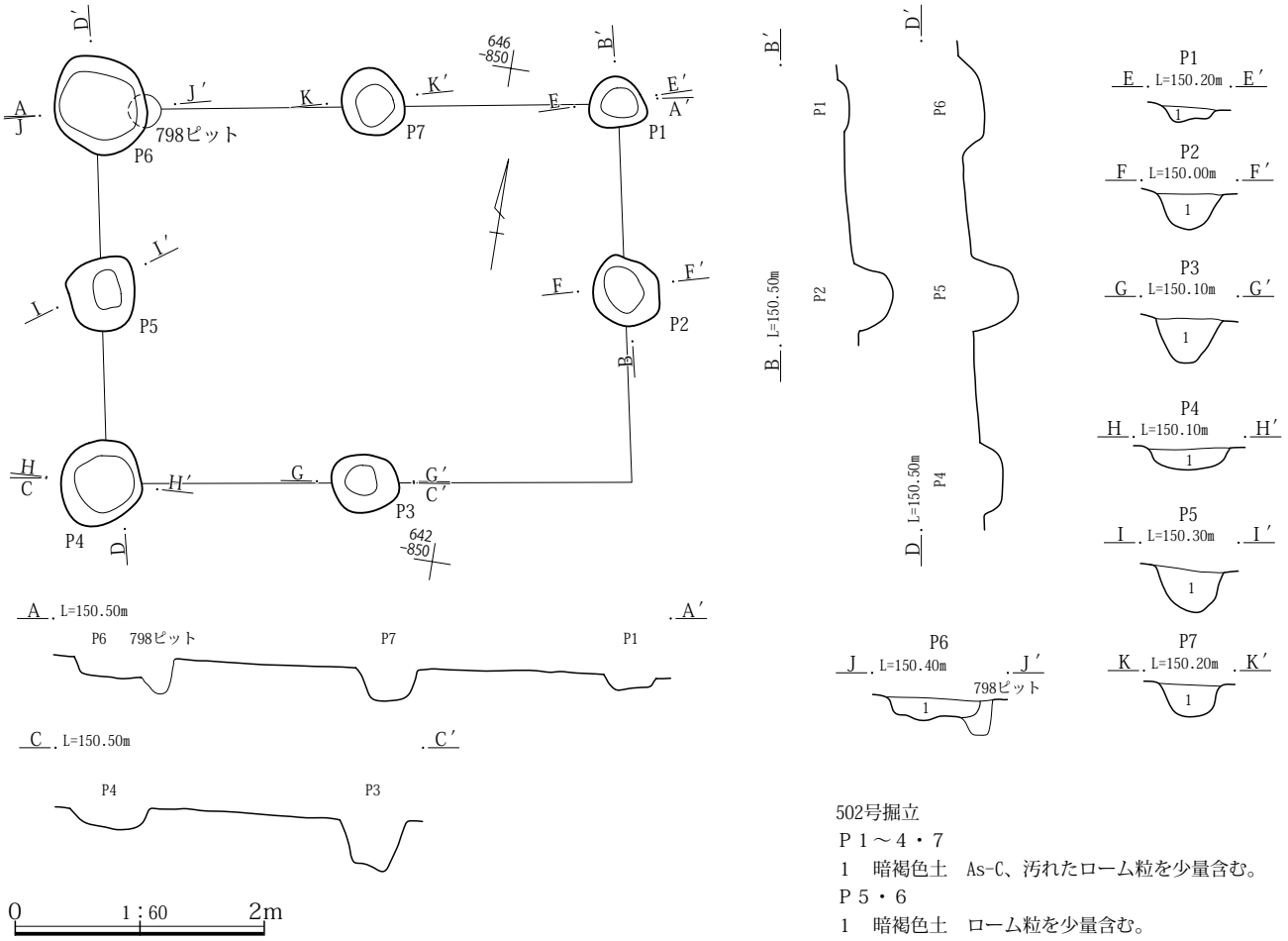
本調査区では、調査区南東部において、住居間に近接するように掘立柱建物が２棟確認された。周囲には、その他にも建物の柱穴と思われるピット群が調査された。しかしながら位置関係等から、さらなる掘立柱建物等の復元には至らなかった。

本調査区の502号掘立柱建物は、棟方向が同調査区の住居の主軸と一致しているものの、同時期における関連施設の可能性は明瞭でない。

また、本調査区の503号掘立柱建物は、総柱の建物の可能性があり、茅畑遺跡の掘立柱建物群とは性質が異なる。

502号掘立柱建物（第137図　PL.51）

位置：641 ～ 646・-848 ～ -853　**規模形態：**梁行２間・桁行３間（3.02 ～ 3.04m ×4.18 ～ 4.23m）、面積〔12.38〕㎡である。東西方向に棟方向を取る側柱建物である。柱間は桁行が2.00 ～ 2.18m、梁行が1.47 ～ 1.54mである。確認した柱穴の柱筋はおおむね通っている。**主軸方位：**Ｎ－83°－Ｅ　**柱穴：**Ｐ１～７から成る。南東隅の柱穴が、確認できなかった。その他の柱位置から規模は推定可能である。柱穴の平面形は楕円形である。長径0.48 ～ 0.79m、短径0.44 ～ 0.74m、深さ0.10 ～ 0.42mである。ややばらつきがあるものの、類似した形状を呈している。　**重複遺構：**なし。　**遺物：**なし。　**所見：**柱穴埋没土はAs-C軽石、ローム粒を含む暗褐色土であり、古代以降の掘立柱建物であると思われる。南北に位置する512・513号住居の間から東に位置している。住居と主軸はほぼ合っており、重複はしていない。同時期のものであるか明瞭でない。503号掘立柱建物と棟方向がおおよそ合っているものの、新旧関係は明瞭でない。



502号掘立
Ｐ１～４・７
１　暗褐色土　As-C、汚れたローム粒を少量含む。
Ｐ５・６
１　暗褐色土　ローム粒を少量含む。

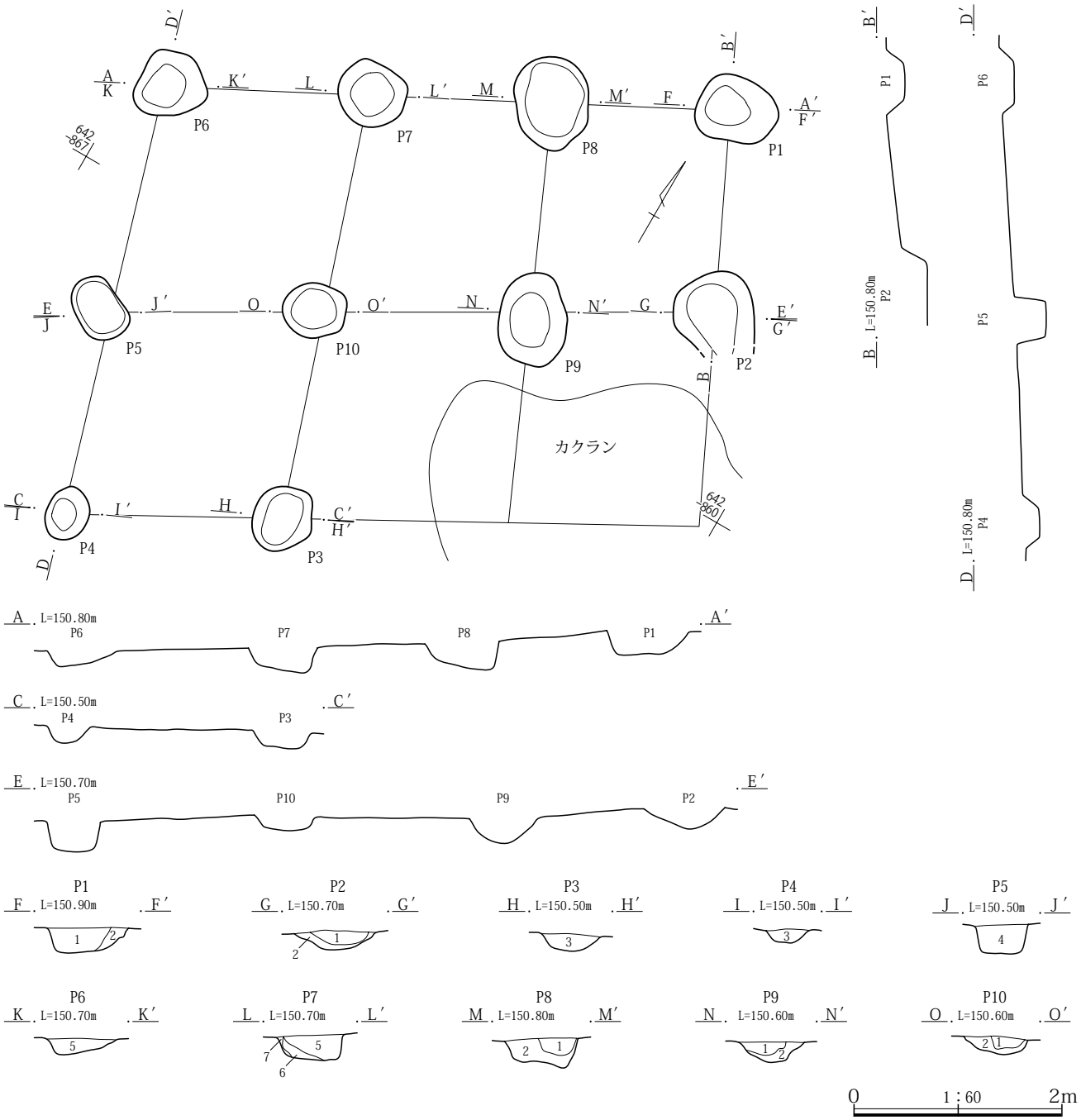
第137図　鳴上Ｉ遺跡Ｂ区２面　502号掘立柱建物

第23表　鳴上Ｉ遺跡Ｂ区２面502号掘立柱建物　計測表

建物全体の規模		２×３間・東西棟			面積	〔12.38〕㎡		
主軸方位		Ｎ－83°－Ｅ			位置	Ｘ＝641 ～ 646　Ｙ＝-848 ～ -853		
桁・梁の規模（m）		柱穴№	柱穴規模（m）			形状	次柱穴との間隔（m）	旧ピット№	備考
			長径	短径	深さ				
東辺	推定3.04	Ｐ１	0.48	0.44	0.10	楕円形	1.47	768	
		Ｐ２	0.60	0.53	0.34	楕円形	－	774	
南辺	推定4.23	Ｐ３	0.52	0.47	0.38	楕円形	2.05	773	
西辺	3.02	Ｐ４	0.74	0.67	0.19	楕円形	1.54	775	
		Ｐ５	0.59	0.52	0.42	楕円形	1.48	771	
北辺	4.18	Ｐ６	0.79	0.74	0.21	楕円形	2.18	770	798ピットと重複
		Ｐ７	0.57	0.50	0.28	楕円形	Ｐ１へ 2.00	769	

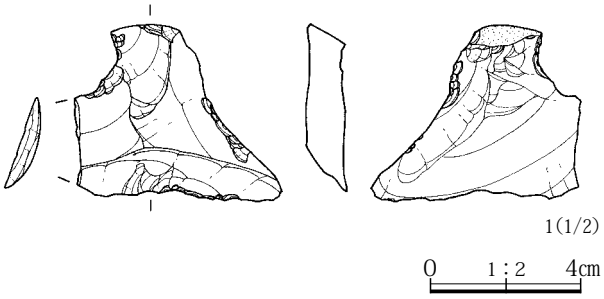
503号掘立柱建物(第138・139図　PL.51・81)

位置：638 ～ 645・-860 ～ -866　**規模形態：**梁行２間・桁行２間(4.02 ～ 4.20m×5.47 ～ 6.13m)、面積〔23.54〕㎡である。東西方向に棟方向を取る総柱建物である。柱間は梁行が1.94 ～ 2.22m、桁行が1.70 ～ 2.14mである。確認した柱穴の柱筋はおおむね通っている。**主軸方位：**Ｎ－60°－Ｅ　**柱穴：**Ｐ１～10から成る。攪乱を受けて南辺の東から２基の柱穴が確認されなかったが、その他の柱位置から規模は推定可能である。柱穴の平面形は、主に楕円形で不整形のものもある。長径0.51 ～ 0.91m、短径0.41 ～ 0.78、深さ0.15 ～ 0.54mであり、ばらつきはあるが、近い形状である。　**重複：**なし。　**遺物：**Ｐ５より出土した剥片石器１点(石匙１)を図示した。　**所見：**柱穴埋没土はAs-YP、ローム粒を含む暗褐色土及び明暗褐色土であり、古代以降の掘立柱建物であると思われる。南北に位置する512・513号住居の間から西に位置している。住居と主軸は合っていない。同時期のものであるか明瞭でない。502号掘立柱建物と棟方向がおおよそ合っているものの、新旧関係は明瞭でない。



第138図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　503号掘立柱建物

503号掘立
1　暗褐色土　As-YP・ローム粒を微量に含む。
2　明暗褐色土　ローム粒を多量に含む。
3　明暗褐色土　As-YP・ローム粒を多く含む。
4　暗褐色土　As-YP・ローム小ブロックを少量含む。締まり弱い。
5　暗褐色土　As-YP・ローム粒を多く含む。
6　明暗褐色土　ロームブロックを多く含む。
7　明暗褐色土　２層より明るく、ローム粒を多量に含む。



第139図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　503号掘立柱建物出土遺物

第24表　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面503号掘立柱建物　計測表

建物全体の規模		２×３間・東西棟				面積	〔23.54〕㎡		
主軸方位		Ｎ－60°－Ｅ				位置	Ｘ＝638～645　Ｙ＝-860～-866		
桁・梁の規模(m)		柱穴№	柱穴規模(m)			形状	次柱穴との間隔(m)	旧ピット№	備考
			長径	短径	深さ				
東辺	推定4.02	Ｐ１	0.76	0.61	0.24	楕円形	1.94	782	
		Ｐ２	(0.74)	0.78	0.25	楕円形	Ｐ９へ 1.79	783	
南辺	推定6.13	Ｐ３	0.66	0.60	0.19	楕円形	2.14、Ｐ10 へ 2.01	788	
西辺	4.20	Ｐ４	0.51	0.41	0.15	楕円形	2.00	787	
		Ｐ５	0.65	0.44	0.30	楕円形	2.22	786	剥片石器１点(石匙)
北辺	5.47	Ｐ６	0.71	0.57	0.15	不整形	1.99	779	
		Ｐ７	0.67	0.62	0.25	楕円形	1.79、Ｐ10 へ 2.14	780	
		Ｐ８	0.91	0.70	0.54	楕円形	Ｐ１へ 1.70、Ｐ９へ 2.22	781	
		Ｐ９	0.88	0.67	0.28	楕円形	2.10	784	
		Ｐ10	0.62	0.54	0.17	楕円形	Ｐ５へ2.08	785	

(３)粘土採掘坑

鴫上１遺跡Ｂ区からは、粘土採掘坑が１基確認された。上部ローム層を掘り抜き、ローム以外の土で人為的に埋め戻した痕が認められることから粘土採掘坑と判断した。

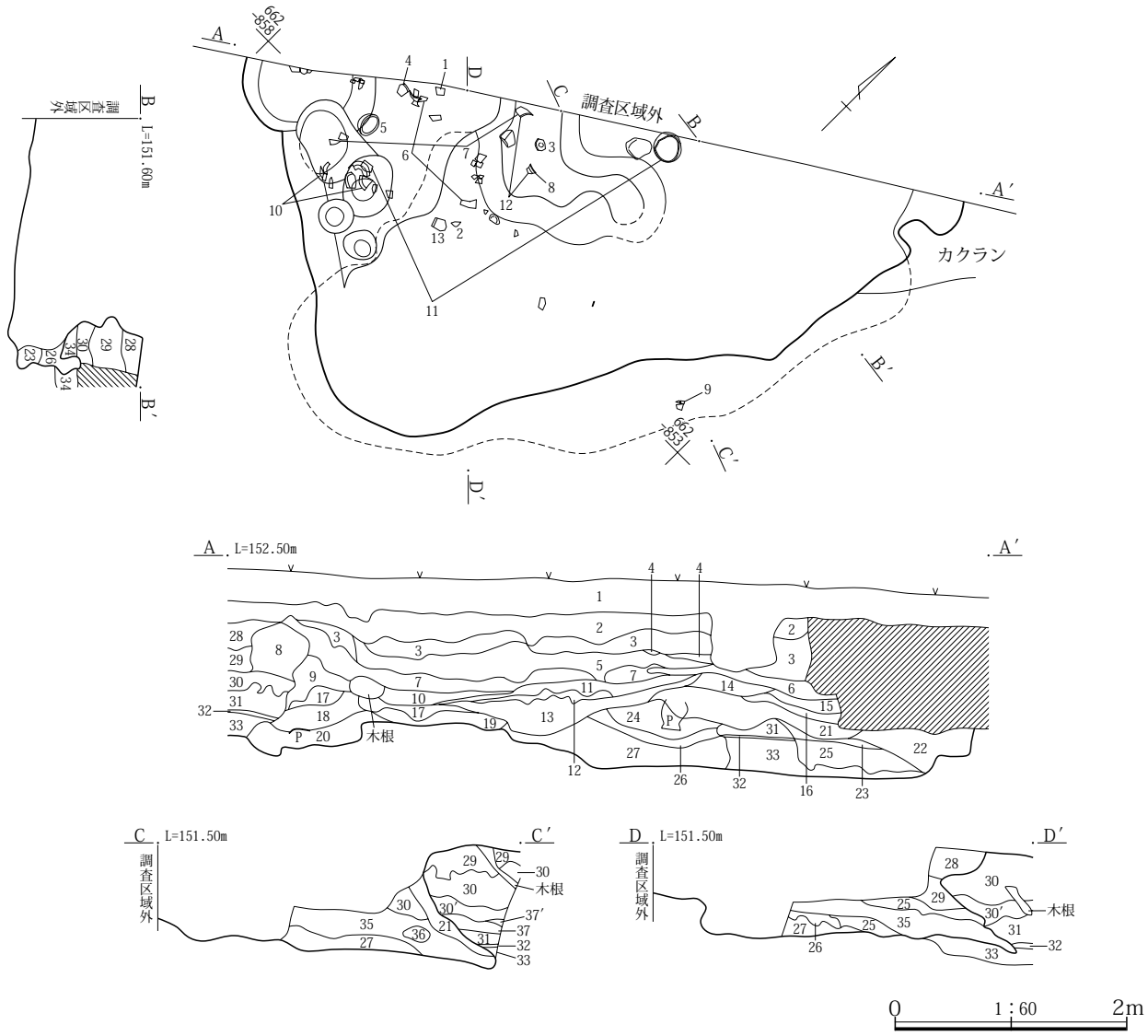
501号粘土採掘坑(第140・141図　PL.52・81・82)

調査区北部の住居群内にある。廃棄住居跡を粘土採掘に利用したと思われる。

位置：660～665・-853～-858にある。

規模形状：長軸長(5.74)m、短軸長(3.37)m、深さ0.83mである。歪んだ方形状を呈していると推察される。土層より西部の土坑状の窪みが古く、東部の広い掘り込みが新しい。採掘坑の西から掘り始めて、東及び南東へ掘り進んでいったと推察される。　**埋没土：**上層(１～５層)は自然堆積である。下層(30層以下)は自然堆積の地山である。中間を褐色土と黒褐色土が交互に埋没している。採掘した土が投げ出されたものであろう。マンガン凝縮層を挟んだローム層の粘土化した部分を採掘していたと推察される。　**面積：**(11.61)㎡。地下部分を含めると(13.72)㎡。　**重複遺構：**なし。　**遺物：**土師器13点(杯７点、高杯２点、坩１点、甕３点)を図示した。住居使用時相当面西部、粘土採掘坑使用時埋没土南西部を中心に遺物が出土した。

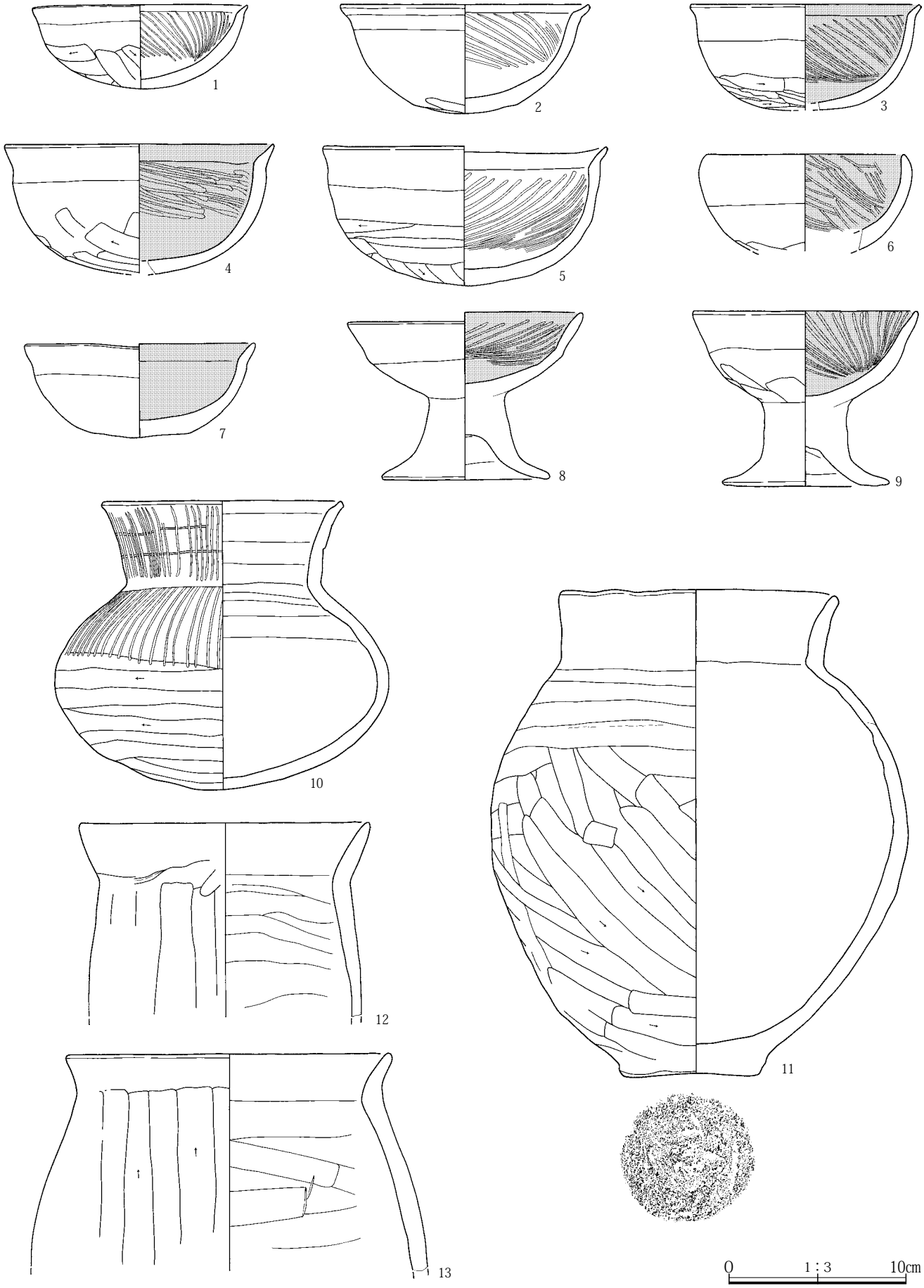
杯(１)、高杯(８)は床上14cmから、杯(７)は床直上及び粘土採掘坑埋没土から、杯(４・５)は床直上から、杯(３)は床上15cmから、甕(12)は床直上及び床上13cmからの出土であり、住居使用時相当の遺物であると思われる。杯(２・６)、高杯(９)、坩(10)、甕(11・13)は、粘土採掘坑埋没土からの出土であり、粘土採掘坑使用時に、住居に伴う遺物を投げ込んだものであると考えられる。非掲載遺物として、土師器93片(甕類50片、杯類43片)が出土している。これらの遺物は、本遺構に伴うものであると考える。　**所見(帰属時期)：**形状から廃棄した竪穴住居を利用して粘土採掘をした可能性が考えられる。南東部の壁を掘り進めた形跡が観察される。そこで採掘した土を後方に投げている。A断面にその形跡が表れている。甕類、杯類を主体とした５世紀後半から６世紀前半に使用されたものであると考えられる。埋没土内の遺物は時期差の少ないものであった。



501号粘土採掘坑　Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′・Ｃ－Ｃ′・Ｄ－Ｄ′

1　黒褐色土(7.5YR3/3)　表土。
2　黒色土(10YR2/1)　As-C軽石10％程含む。
3　黒褐色土(10YR2/2)　As-C軽石５％程含む。
4　３層とローム層の不均質な混土層　※
5　暗褐色土(10YR3/3)　As-C軽石とローム大粒を部分的に含む。
6　４層に31～33層までの小塊を不均質に５％程含む。※
7　暗褐色土(10YR3/4)　ローム小塊５％以下含む。31～33層までの土を大粒～小塊まで20％程不均質に含む。
8　28・29層に似るが、白色・黄色粒少ない。地山の可能性もある。
9　黒褐色土(10YR2/3)　29層と30層の混土層。
10　暗褐色土(10YR3/4)
11　31～33層の混土層　10層不均質に20％程含む。※
12　30層小塊と17層の不均質な混土層　※
13　黒褐色土(10YR2/3)　ローム層、30～33層小粒～極大粒全体で20％程含む。
14　暗褐色土(10YR3/3)　ローム極小粒10％程不均質に含む。
15　黒褐色土(10YR2/2)　ローム極小粒～中粒10％程含む。
16　ローム極大粒を主体とし、15層10％程含む。※
17　10層に31～33層大粒～極大粒30％程含む。※
18　黒褐色土(10YR2/3)　焼土小粒部分的に含む。
19　焼土極小粒～小粒を主体とし、31～33層大粒10％程含む。※
20　30～33層の混土層　焼土小粒部分的に含む。※
21　13層に似るが、ローム小塊状に含む。
22　ハードロームを主体とし、31～33層小塊30％程含む。※
23　黒色土(10YR2/1)　ローム極小粒20％程不均質に含む。
24　褐色土(10YR4/3)　21層10％程含む。※
25　24層と26層の混土層　※
26　褐色土(10YR4/4)　ローム極小粒10％程含む。砂壌土。※
27　31～33層小塊、ローム大粒、黒褐色土大粒の混土層　※
28　黒褐色土(10YR3/1)　２層と29層の漸移層。
29　黒褐色土(10YR3/1)　白色、黄色細粒５％以下含む。
30　As-YPを含む固いローム層であるが、やや黒味を帯びる。
30′　As-YPを含む固いローム層
31　褐色土(7.5YR4/4)　As-BPグループ下の粘土化した部分。
32　マンガン凝集層
33　にぶい褐色土(7.5YR5/4)　As-BPグループ下の粘土化した部分。
34　明褐色土(7.5YR3/4)　As-BPを含むローム層
35　13層と22層の不均質な混土層
36　ハードロームブロック　As-YPを含む。※
37　ハードローム層　As-BPグループ上部の軽石を含む。
37′　37層に準ずる。黒味を帯びる。
※印は褐色系埋没土、無印は黒褐色系埋没土である。

第140図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　501号粘土採掘坑



第141図　鳴上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　501号粘土採掘坑出土遺物

（4）土坑

鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区の土坑(第142図　PL.52・53・82)

概要：鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区では４基の土坑を調査した。調査区東部北側に位置している。形状は二つに分かれる。一方は、平面形は楕円形で、断面形はすり鉢状で上部が広く下部が狭い丸底のもの及び断面形は逆台形で平底のものであり、他方は、平面形は隅丸長方形で、断面形は逆台形で平底のものである。埋没土は、暗褐色土及び黒褐色土で、撹拌された土を含む。古代以降に属すると考えられる。周辺施設との関連については、明瞭でない。詳細については第37表に記した。

506号土坑(第142図　PL.52)

位置：659・-853

形状：円形、断面形すり鉢状、丸底。

規模：0.98m×0.98m　**深度：**0.23m

主軸方位：Ｎ－26°－Ｗ

埋没土層：暗褐色土で埋没している。ロームブロックを少量含む。　**重複：**なし。

遺物：非掲載遺物として土師器(甕類１片)、及び下層からの混入である縄文土器(勝坂式：１片18.6ｇ)が出土している。

所見：本土坑の具体的な使用目的は確認できなかった。時期を比定する明確な資料は見つからなかったが、周囲の遺構の状況、確認面、出土遺物及び形状から、１面の501号掘立柱建物及び502号柱穴列と同時期に展開された施設より古いと考えられ、おおむね古代以降の可能性を有すると思われる。

507号土坑(第142図　PL.52・82)

位置：670・-839

形状：隅丸長方形、断面形逆台形状、平底。

規模：(1.71)m×(1.20)m　**残存深度：**0.81m

主軸方位：Ｎ－25°－Ｅ

埋没土層：黒褐色土及び暗褐色土で埋没している。ロームブロックを含む。人為的な埋め戻しであると考える。

重複：土層より、525号住居に前出している。

遺物：土師器７点(杯５点、台付甕１点、甕１点)を図示した。台付甕(6)は床直上から、杯(１)は床直上及び床上10㎝から、杯(３・４・５)、甕(７)は床上７～38㎝から、杯(２)は埋没土からの出土であった。これらの遺物は本土坑に伴うものであると考えるのが自然である。非掲載遺物として、土師器39片(甕類31片、杯類８片)、須恵器２片(甕類１片、杯類１片)が出土している。

所見：本土坑の具体的な使用目的は確認できなかった。周囲の遺構の状況、確認面、出土遺物及び形状から、５世紀後半から６世紀前半の可能性を有すると思われる。

508号土坑(第142図　PL.52)

位置：670・-837

形状：楕円形、断面形逆台形状、平底。

規模：(1.20)m×(0.82)m　**深度：**0.13m

主軸方位：Ｎ－６°－Ｅ

埋没土層：暗褐色土で埋没している。焼土ブロックを含み、砂質土である。

重複:土層より、525号住居のカマド部分に前出しており、527号住居(３面)に後出している。

遺物：土師器１点(甕)を図示した。甕(８)は床上８㎝からの出土であった。本土坑に伴うものであると考えるのが自然である。非掲載遺物として、土師器20片(甕類14辺、杯類６片９が出土している。

所見：本土坑の具体的な使用目的は確認できなかった。周囲の遺構の状況、確認面、出土遺物及び形状から、９世紀後半の可能性を有すると思われる。

509号土坑(第142図　PL.53)

位置：672・-856

形状：隅丸長方形、断面逆台形状、平底。

規模：1.60m×1.18m　**深度：**0.75m

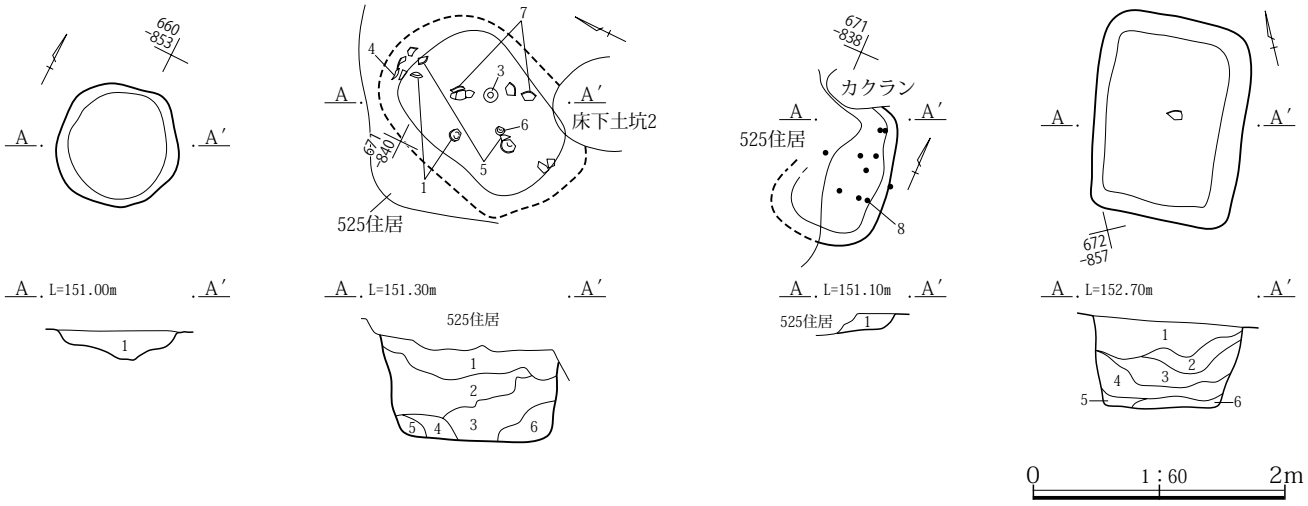
主軸方位：Ｎ－24°－Ｅ

埋没土層：黒褐色土、暗褐色土で埋没している。ロームブロック、As-C軽石を少量含む。　**重複：**なし。

遺物:土師器２点(杯１点、甑１点)を図示した。杯(９)、甑(10)ともに埋没土からの出土であった、本土坑に伴うものであると考えるのが自然である。

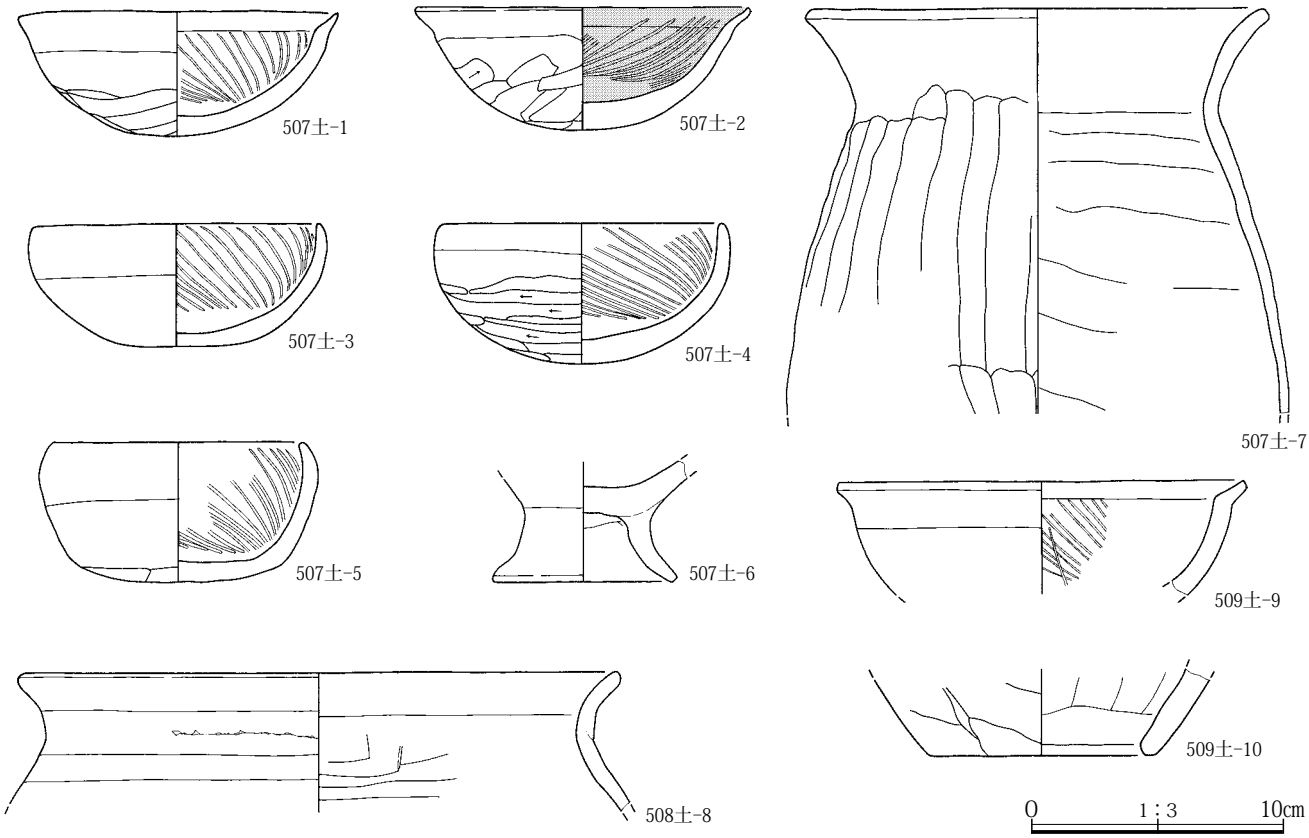
所見：本土坑の具体的な使用目的は確認できなかった。周囲の遺構の状況、確認面、出土遺物及び形状から、５世紀後半から６世紀前半の可能性を有すると思われる。形状、規模及び埋没土層が507号土坑に類似しており、時期差の少ないものであると考える。

506号土坑　507号土坑　508号土坑　509号土坑



506号土坑　Ａ－Ａ′
1　暗褐色土　汚れたロームブロックを少量含む。締まり弱い。
507号土坑　Ａ－Ａ′
1　暗褐色土(7.5YR3/3)　ローム小粒～中粒と黒色土小塊各10％程含む。
2　暗褐色土(7.5YR3/3)　ローム中粒～大粒20％程、黒色土小塊10％程含む。
3　暗褐色土(7.5YR3/3)　ローム小粒５％以下含む。
4　黒褐色土(10YR3/2)　均質土。
5　黒褐色土とローム小塊の混土層
6　黒褐色土(10YR3/2)　ローム小粒５％以下含む。

508号土坑　Ａ－Ａ′
1　暗褐色土(7.5YR3/3)　焼土小粒５％程含む。砂壌土。
509号土坑　Ａ－Ａ′
1　暗褐色土(10YR3/3)　As-C軽石含む。
2　暗褐色土(10YR3/3)　As-C軽石少量含む。１層にローム小粒～大粒不均質に20％含む。
3　黒褐色土(10YR2/3)　にぶい黄褐色小塊20％程含む。
4　黒褐色土(10YR2/2)　ローム小粒５％以下含む。
5　ロームを主体とし、４層を不均質に20％程含む。
6　４層にローム小粒～大粒30％程含む。



第142図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　506 ～ 509号土坑、土坑出土遺物

（5）ピット

鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区のピット群（第143～147図　PL.53・54・82）

概要：鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区では、住居15軒、掘立柱建物２棟が確認されており、集落が形成されていた。同じ調査面で、135基のピットが確認されている。

ピット群は南東方向に緩やかに傾斜する丘陵地の中腹に位置する。詳細を見ると、中央部に位置する住居及び掘立柱建物の周囲に散見され、東部の鴫上Ⅰ遺跡Ａ区との境付近に集中して見られる。また、その間にピットが断続的に確認される。これらのピット群は、建物の柱穴である可能性も否定できないところであるが、柱穴の規模形状、柱間、建物全体の形状など、掘立柱建物を形成する明確な資料は見つからず、復元には至らなかった。ただし、中央の掘立柱付近のピットは、建物に関連する施設の可能性がある。

また、この緩やかな傾斜地は、弥生時代から古代まで生活の痕跡を重ねてきた経緯が確認できる条件の良い地区である。中・近世以降も土地利用がされてきていると考えられるが、後世の削平が著しく進んでいるため、生活を示した遺構は確認されなかった。本調査区の特徴である、緩やかな傾斜地の形態は、遺跡一帯の傾向でもある榛名山南東丘陵地における樹枝状の自然浸食を受けない丘陵の中央部分に位置しているため、生活を展開する痕跡が残るものであると考えられる。

詳細については第40表に記載した。

位置：ピットのほとんどが調査区東部の緩やかな斜面上に集中して分布している。調査区の中央に集落が形成されているが、このピット群は、そこから東へやや離れている。

重複：691号ピットは690号ピットに、790号ピットは751号ピットに、805号ピットは806号ピットにそれぞれ後出している。

規模形態：ピットの多くが、小型で平面形が楕円形を呈する。これらのピット群の中には、建物の柱穴である可能性が高いものもあると推察されるが、復元には至らなかった。

埋没土：埋没土は一様ではないが、主に暗褐色土、黒褐色土である。灰黄褐色土、明褐色土、黄褐色土、明暗褐色土、にぶい黄褐色土で埋没している場合もある。全体的に土層は類似している。暗褐色土ブロック、ロームブロック、As-C軽石を含むことが多い。As-YP、黄褐色土ロームブロックを含む場合もある。稀に炭化粒を含む。軟質土及び締まりのある土も多数確認される。

その他：柱穴の可能性が高いという観点から特筆すべきピット54基について図示し、その原因を分類した結果を以下の通り解説する。

・柱痕が推測される形状で、柱穴であった可能性が高いものとして、710・715・734・735・739・741・743・749・767・833・840号ピットがあげられる。

・形状が整っており深さもあることが、柱穴であった可能性が高いものとして、692・697・704・708・711・725・747・766・778・791・807・815・837号ピットがあげられる。

・柱穴を新規に掘り直した様相が伺え、柱穴だった可能性が高いものとして、690・691号ピットがあげられる。

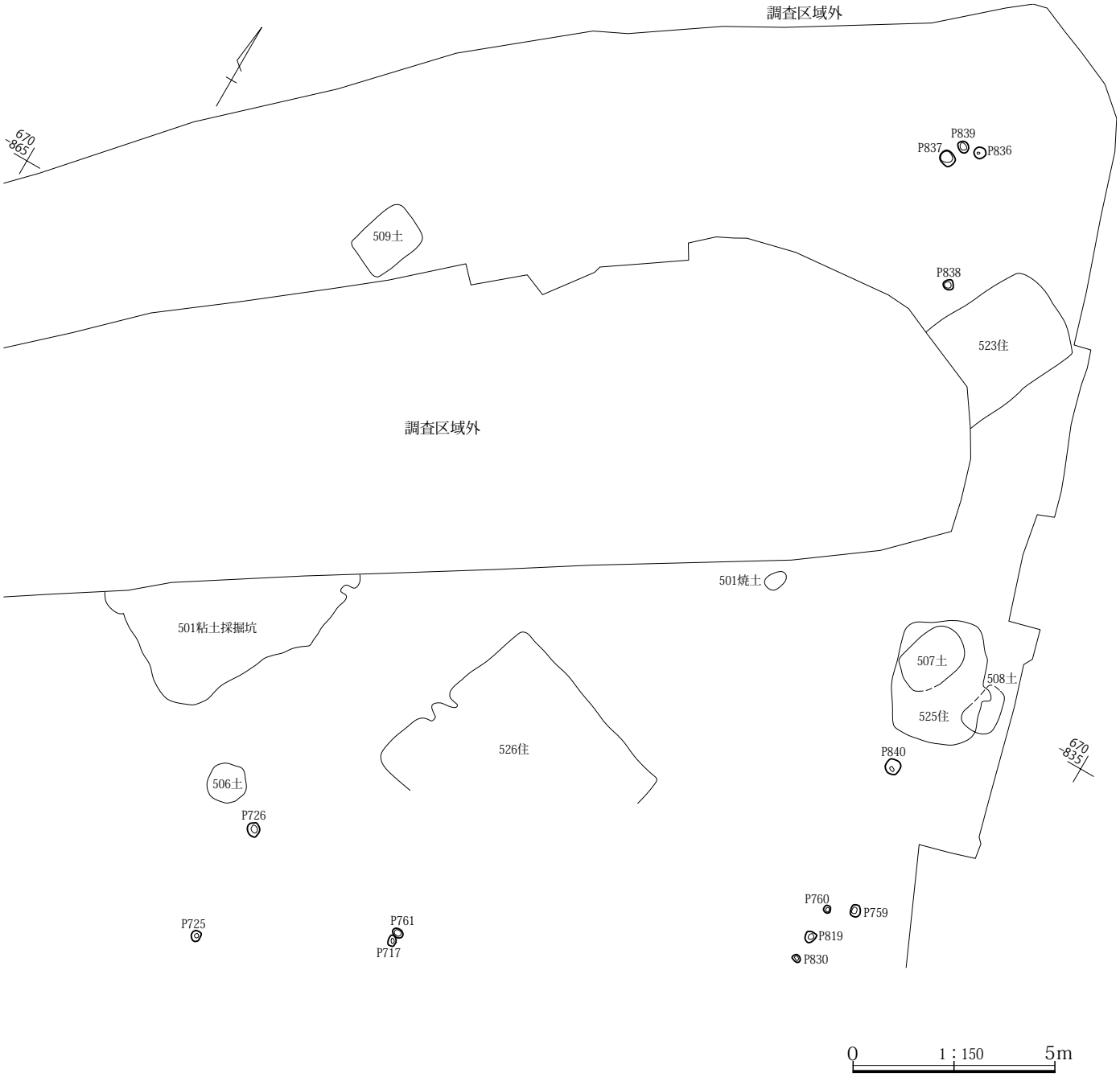
・同じ規模または同じ形状のピットが平行して並んでおり、住居に関連する造作の可能性があるものとして、751と790・801と802・836と839号ピットがあげられる。

・柱の元を固めた様相が伺え、柱穴であった可能性があるものとして、686・709・733・805・806号ピットがあげられる。

・上部が削平を受けており、底部が形良く残存していると思われ、柱穴の可能性があるものとして、685・707・726・745・753・761・765・776・797・799・800・803・804・808・812・819・838号ピットがあげられる。

遺物：692号ピットから須恵器１点（椀１）、798号ピットから須恵器１点（蓋２）、840号ピットから土師器１点（杯３）を図示した。図示した以外に、691号ピットから土師器（甕類１片）、692号ピットから須恵器（杯類１片）、732号ピットから須恵器（杯類１片）、735号ピットから須恵器（杯類１片）、759号ピットから土師器（甕類１片）、774号ピットから土師器（甕類１片）、須恵器（杯類１片）、798号ピットから土師器（甕類１片）、840号ピットから土師器２片（甕類１片、杯類１片）が出土した。また、下層からの混入である弥生土器（弥生後期後半：681号ピットが１片10.1ｇ、686号ピットが１片10.9ｇ、694号ピットが１片25.1ｇ、698号ピットが１片20.1ｇ、726号ピットが１片19.5ｇ、730号ピットが１片3.2ｇ、731号ピットが１片3.4ｇ、745号ピットが４片25.6ｇ、749号ピット

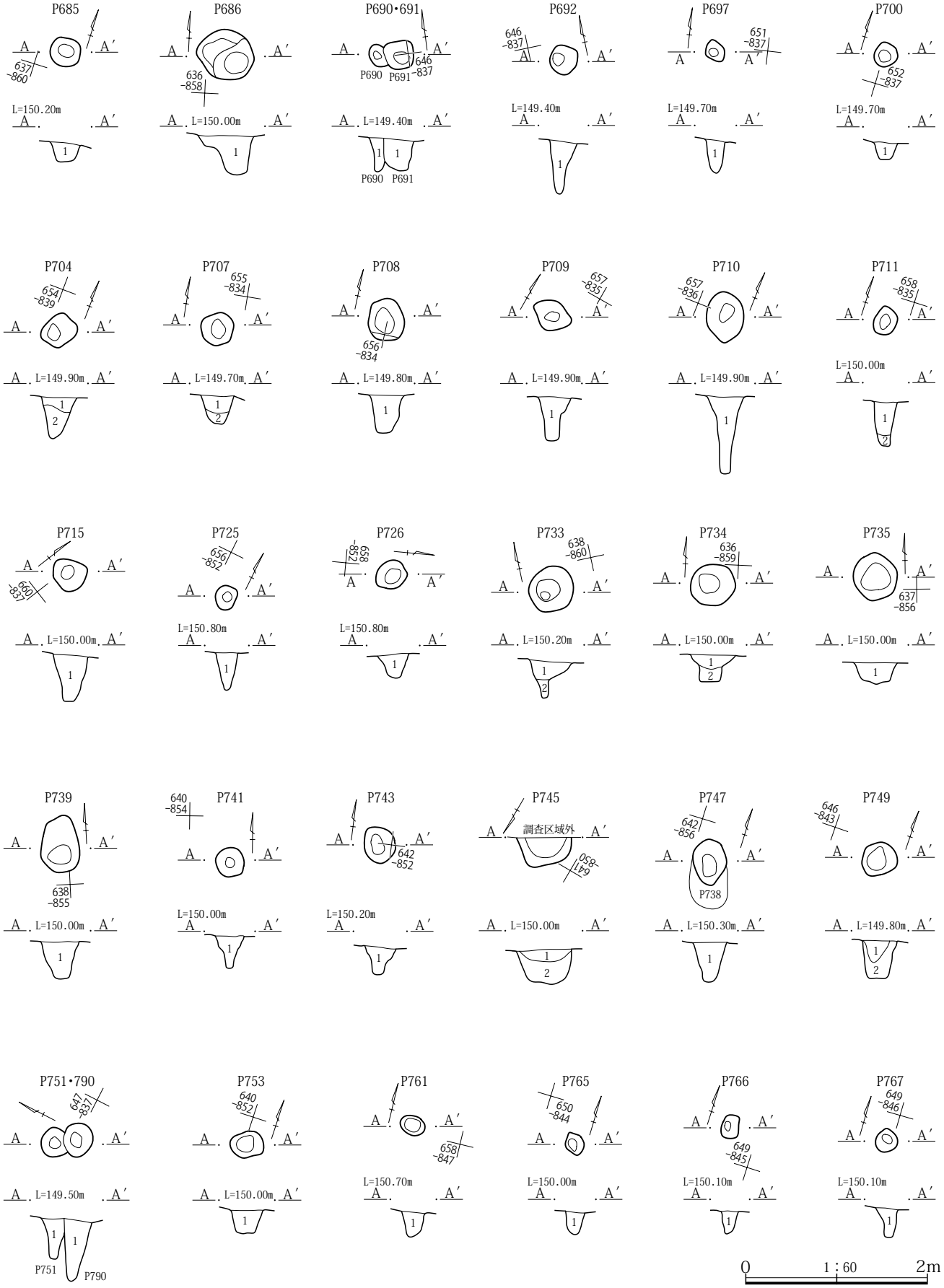
第143図　嶋上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　ピット全体図（１）



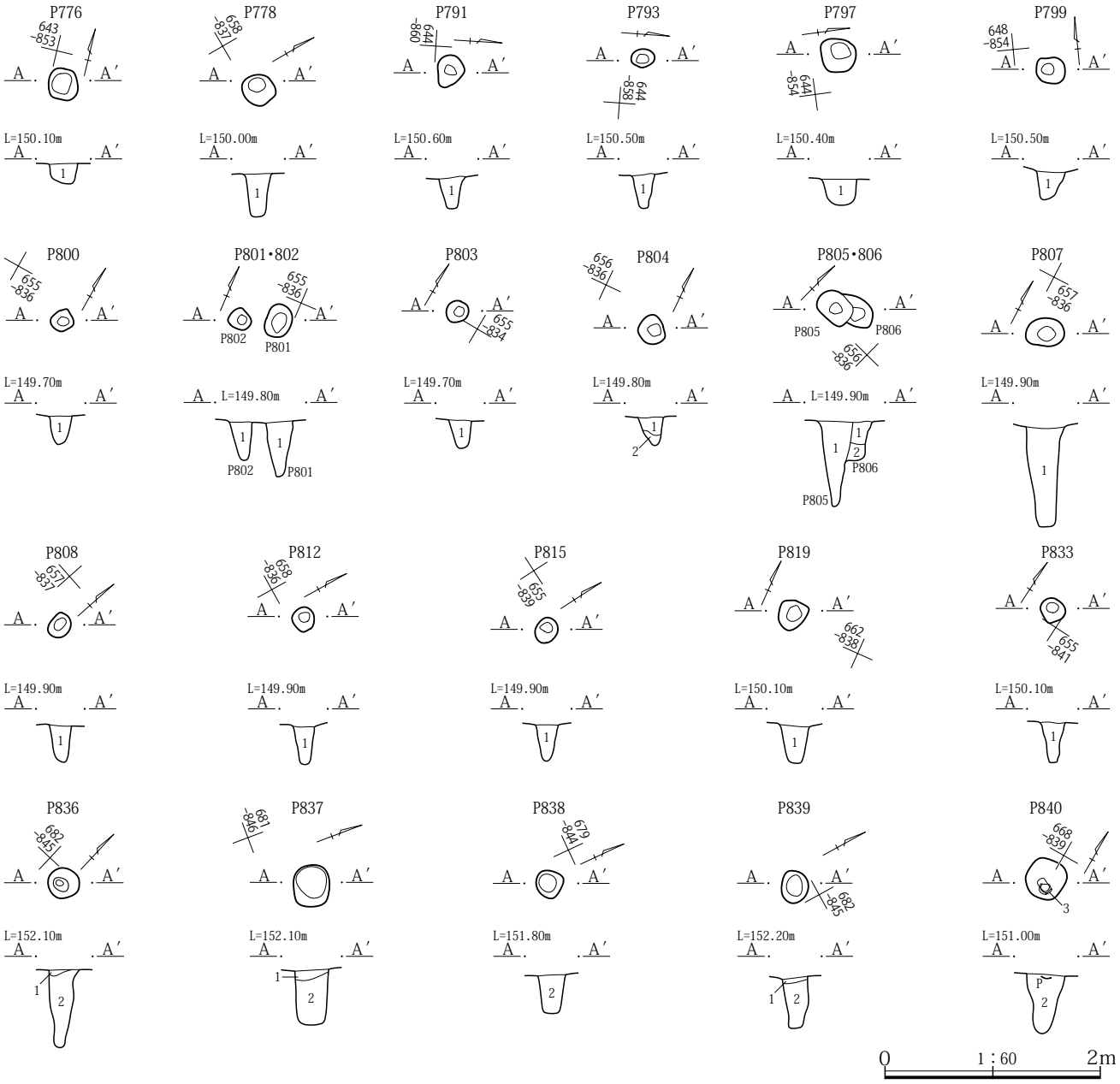
第144図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　ピット全体図（２）

が２片10.5ｇ、750号ピットが２片27.5ｇ、757号ピットが１片19.6ｇ、772号ピットが１片2.5ｇ、773号ピットが１片12.3ｇ、781号ピットが１片6.8ｇ、Ｐ813が１片5.4ｇ）、縄文土器（勝坂式：734号ピットが１片16.2ｇ）が出土した。

所見：須恵器、椀、蓋が出土しており、９世紀代の遺物であると比定される。埋没土はAs-C軽石を含むことから古代以降に属すると考えられる。



第145図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　ピット平・断面（１）



鴫上遺跡Ⅰ２面Ｂ区ピット土層注記

Ｐ685・686・801・808・833

1　黒褐色土(10YR2/2)　As-Cを10～20％含む。ややもろい。

Ｐ690・691

1　黒褐色土(10YR2/2～2/3)　As-Cを10～20％、ローム粒子を５％、地山(暗褐色土)ブロックを含む。

Ｐ692・802

1　黒褐色土(10YR2/2～2/3)　As-Cを10～20％、地山(暗褐色土)ブロックを含む。

Ｐ697

1　黒褐色土(10YR2/2)　As-Cを微量含む。ややもろい。

Ｐ700・709・710・715・725・819

1　黒褐色土(10YR2/2～2/3)　As-Cを３～７％、地山(暗褐色土)ブロックとロームブロックを含む。

Ｐ704

1　黒褐色土(10YR2/2～2/3)　As-Cを３～７％、地山(暗褐色土)ブロックとロームブロックを含む。

2　黄褐色土(10YR5/6)　ロームブロックと灰黄褐色土との混土。

Ｐ707

1　黒褐色土(10YR2/2～2/3)　As-Cを10～20％、地山(暗褐色土)ブロックを含む。

2　灰黄褐色土(10YR4/2)　ロームブロック30％含む。

Ｐ708

1　黒褐色土(10YR2/2～2/3)　As-Cを微量、地山(暗褐色土)ブロックを含む。締まり弱い。

Ｐ711

1　黒褐色土(10YR2/2～2/3)　As-Cを10～20％、地山(暗褐色土)ブロックを含む。

2　黄褐色土(2.5Y5/4)　ローム粒子30％含む。

Ｐ726

1　黒褐色土(10YR2/2～2/3)　As-Cを５～10％含む。地山(暗褐色土)ブロックを含む。

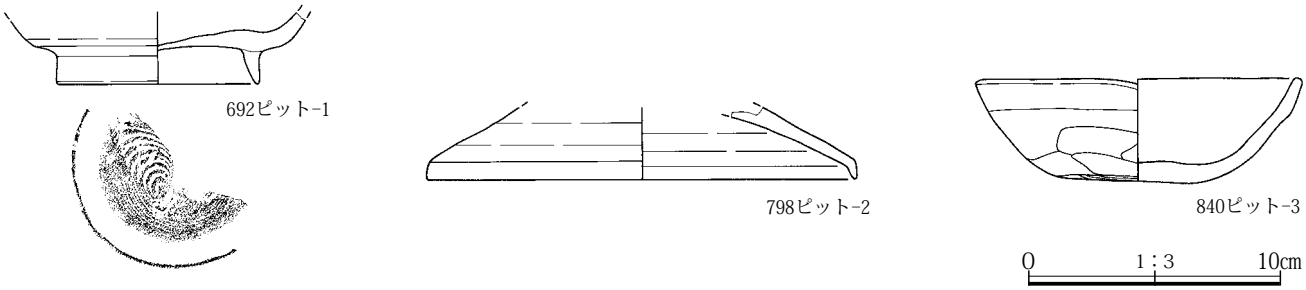
Ｐ733・734

1　黒褐色土　As-C含み、汚れたローム粒を少量含む。

2　暗褐色土　１層より明るく、As-Cを僅かに含む。

第146図　鴫上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　ピット平・断面(２)

P735・739・741・743・747
1　黒褐色土　As-C含み、汚れたローム粒を少量含む。
P745
1　暗褐色土　表土。As-Cを多く含む。上位は盛土である。
2　暗褐色土　As-Cを少量含む。
P749
1　暗褐色土　上面にAs-Cを少量含む。
2　明褐色土　ローム粒を多量含む。
P751・761・766・800・815
1　暗褐色土　ローム粒を少量含む。
P753
1　暗褐色土　炭化粒を多く含む。
P765・767
1　明暗褐色土　ローム小ブロックを少量、ローム粒を多く含む。
P776
1　暗褐色土　炭化粒を少なく、ローム粒を多く含む。
P778
1　黒褐色土　As-Cを少量含む。
P790
1　暗褐色土　ローム小ブロックを少量含む。
P791
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ロームブロックを10％含む。やや粘性あり。
P793
1　暗褐色土(10YR3/4)　炭化物、ローム粒を僅かに含む。
P797
1　暗褐色土(10YR3/3)　ローム粒を３％含む。
P799
1　暗褐色土　炭化粒、焼土粒を少量含む。
P803
1　黒褐色土(10YR3/2)　ローム粒を僅かに含む。締まりやや強く粘性あり。
P804
1　黒褐色土(10YR2/2～2/3)　As-Cを10～20％、地山(暗褐色土)ブロックを含む。
2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ローム土主体で１層が混じる。
P805・806
1　黒褐色土(10YR2/2)　As-Cを10～20％含む。ややもろい。
2　黒褐色土(10YR3/2)　ロームブロックを30％含む。
P807
1　黒褐色土(10YR2/2～2/3)　As-Cを10～20％、As-SPを含む。
P812
1　黒褐色土(10YR2/2)　As-Cを５％含む。ややもろい。
P836～840
1　暗褐色土(10YR3/4)　白色粒少量含む。淡い色調。
2　黒褐色土(10YR3/2)　黒色土少量、白色粒僅かに含む。淡い色調。



第147図　鳴上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　ピット出土遺物

（６）焼土

調査区北東部の住居群内に掘り込みを伴う焼土が確認されている。野外炉、竪穴住居、平地式建物等の施設の一部であると推察されるものの、明瞭に判断する資料に不足している。

501号焼土（第148図）

位置：671・-844

形状：楕円形、断面形逆台形状、底面不定形。

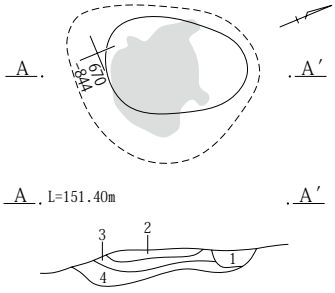
規模：0.74m×0.62m　**残存深度：**0.10m

主軸方位：Ｎ－23°－Ｅ

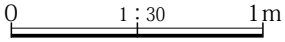
埋没土層：黒褐色土、暗褐色土、明黄褐色土で埋没している。上層はロームブロック及び焼土を含む。

重複：なし。　**遺物：**認められない。

所見：本焼土の具体的な使用目的は確認できなかった。時期を比定する明確な資料は見つからなかったが、周囲の遺構の状況、確認面、出土遺物及び形状から、おおむね古代以降の可能性を有すると思われる。



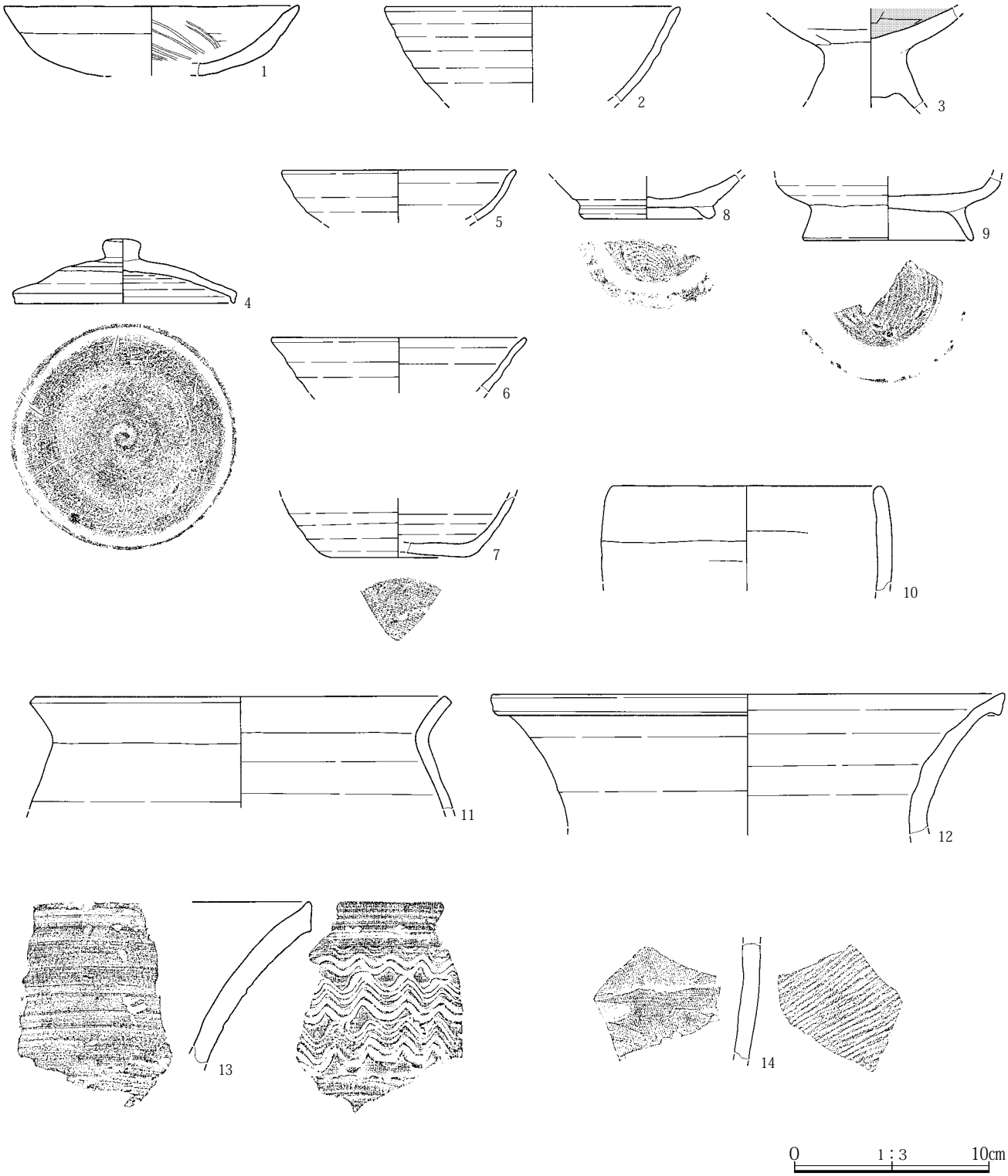
501号焼土
1　暗褐色土(10YR3/4)　焼土粒僅かに含む。淡い色調。
2　明黄褐色土(10YR7/6)　黄色土(5Y8/8)塊多量、焼土粒少量含む。
3　暗褐色土(10YR3/3)　焼土粒僅かに含む。濃い色調。
4　黒褐色土(10YR3/2)　焼土粒ほとんど含まない。淡い色調



第148図　鳴上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　501号焼土

（７）遺構外出土の遺物（第149図　PL.82）

鳴上Ⅰ遺跡Ｂ区２面の調査中に、遺構に伴わない形で遺物が出土した。ここでは出土した遺物のうち、須恵器６点（杯５・６・７、甕12・14、椀８）、表採からの出土で、土師器４点（杯１、高杯３、椀２、ロクロ甕11）、須恵器４点（甕13、鉢10、蓋４、椀９）を掲載した。図示した以外の遺物は、土師器（杯類104片、甕類180片）、須恵器（杯類67片、甕類46片）が出土している。



第149図　鳴上Ⅰ遺跡Ｂ区２面　遺構外出土遺物